

異世界にて～魔法と科学の 小競り合い～

tubukko

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

家でも学校でも普通の生活を送っていた雨宮涼。

そんな彼は訳も分からないまま異世界へ飛ばされる。

その世界には、科学と魔法が両方あった。

彼はその世界で生活していくため学校に入学し力を身に付けていく。

しかし、彼が連れていかれたのには理由があった。

学園を主としたストーリーになっていきます。

後半、学園とやることはほとんど変わりませんが軍隊生活が主になっていきます。

※この作品は「小説家になろう」にも投稿を始めました。

目次

俺は異邦人

異世界への訪問

大都市ミューズデル

異世界での新たな出会い

トリプルイー

異世界でのレッツツファイト!

ミリーナ現れる

魔科祭の決勝戦1

魔科祭の決勝戦2

強襲

小さな戦争

惨劇の会場

124 109 95 81 65 51 39 24 10 1

更なる異世界

逆転と逆転

戦争の後の休息

日常と疑惑

フィリアの休日その1

マーシヤの休日その1〜苦悩〜

199

平和な日常

秘密の女子会?

男子会から浮かび上がる疑惑

変わらない親睦会

予想外の出来事

マーシヤとリヨウ

280 265 253 241 226 213 182 166 153 139

森に潜む恐怖

異世界での合宿

アメリリア森林での合宿

怒涛の2日目

巫女との対面

再び始動する戦争

力の差

覆る絶対

必死の防衛

屍に意思はない

想定外とNG

路線変更

平和な日常

フィリアの休日その2〜恐怖と想い〜

リョウの休日その1〜恐怖と困惑〜

それぞれの思惑

481

始動した戦争

経った月日

前夜祭

それぞれの戦争

罪とは？

矛と盾

天使と悪魔

恐怖の理由

449

434

421

406

392

378

363

345

330

310

296

626

610

587

570

552

537

521

502

464

視覚と触覚

651

友達だ

668

屍使い、再臨

687

無限魔力

699

メリットとデメリット

717

イカれた力

731

真実

743

本当の帰還

764

休息と戦い

784
リアアの休日その1〜発覚と再開〜

784

活気を!

799

レッツmake!

817

チョコを! part1

833

チョコを! part2

851

人物紹介

871

概念の違い

883

デートpart1

897

デートpart2

913

デートpart3

931

力とは必然

強者の訪問

955

もう一人の英雄

化学兵器?

970

本気

1001

明確なミス

1018

桜無き終わり

新しい戦場

短い休養

災難な入隊式

挨拶

相性

ロボットと手品

罵声

圧倒的な力

敗北

創った者達

カポーン…

カポーン…男湯での騒動

1037

12131196118311671151112911111097108010631049

カポーン…女湯での茶番

体はロリ、頭脳は女性

子供は純粹

戸惑い

戦闘よりも思惑

異常者も感じる恐怖

怒涛の巫女

2人でセット

戦いこそ近道

機械人形の部屋

巫女は変わり者

人気者は辛いよ

巫女とのデートpart1

1228

140613921380136713491326

130512891274125812421228

真似事	対面	裏の一面	分断	侵入	開戦	本当の始まり	強奪	内に潜む	忍び寄る影	兆候	巫女とのデート Part 3	巫女とのデート Part 2

1601158515711558154515251512149914861473146114361421

波紋	触れるな危険！	1歩

164516291617

俺は異邦人

異世界への訪問

「…」

突然だが俺、あまみやりよう雨宮涼はで草原で倒れている。

学生服で草原に1人で倒れてるって中々シユールな画だと我ながら思う。
今でもどうしてこうなった？と何度も頭の中で考える。

遡ること2、3日前。

俺はいつも通りの時間に起きた。

今日のトップニュースは：行方不明者についてだったかな？

いつも通りの道を歩いて学校まで行った。

犬に吠えられた、珍しく。

いつも通り屋上で嫌いな授業はサボった。

だが、どういうわけかサボってるところを見つけられて反省文を宿題にされた。

どういうわけか不幸が重なった1日だったがいつも通り寄り道して帰る…はずだっ

た。

だが、今日はここでも不幸なことが起こった。

寄り道した後の帰るといふ行動が出来なかったのだ。

理由は今日の寄り道。

友達も時間が合わず、商店街を一人でぶらぶらしていると

「…見つけた」

聞こえた。

立ち止まって周りを見るがそれを言ったらしき人はいない。

昼間あんなに寝たのに疲れてるのか？と自分自身に呆れてしまった、と同時に気味が

悪かった。

考えてみればおかしいのだ。

ここは人でにぎわう商店街。

こんな人が多い場所で隣にいる友達と話している時よりはつきり聞こえた。

早く帰ろうと思えば足早になった時意識が落ちた。

気づいたら雑木林。

それから何もわからないまま人を求めて歩き続けた。

はじめはずっとイライラしてた。

本当に何なんだよ…。

早く帰るんだぞ？

いいことしようとしてるのになんだこの仕打ちは？

だがそれを考えられたのも初日のみ。

2日目には砂漠らしきところに差し掛かっていた。

人影は一向に見えず、愚痴を漏らす気力すらなかった。

一面砂だらけでそれ以外に表わす言葉がなかった。

で、3日目。

草原らしきところに差し掛かっていた。

最初は雑木林、次は砂漠、今は草原。

こんなところ、日本に存在するのか？

もしかして外国に連れてかれたりした？そんな不安を押し潰すようにして歩き続けた。

昼間、そこらへんの草を口に入れてみたりしたがとても食べられたもんじやない。

夜、3日間ほとんど飲まず食わずだったため体力に限界が来た。

腹がへるといえるのは何度も味わったことはあったが、本当の腹がへるといえるのはこれのことをいうのだろうかとうと身をもって知った。

今は寝つ転がる…いや、力が入らず倒れているが不思議と頭はスッキリしていた。

2日前の行方不明者のニユースをふと思いついた。

これでは俺も行方不明者になっているに違いない。

ニユースを見たときは他人事だと思っていたが人生は分からないもんだ。

俺、このまま飢え死にかなあ？

自分の死に方って遊び半分で想像したことはあつたけど、飢え死になんて考えもしなかつた。

あつ、なんか眠くなってきた。

このまま寝たら死ぬってやつか？

死にたくはないけど…こんな風に楽に死ぬるならそれも――。

その夜はそのまま眠りに落ちた。

「…丈夫…で…か？しっ…し…さい」

次の日この声で目を覚ました。

何か聞こえる、そして揺れてるような気がする。

天国での起こされ方ってこんな荒いのか？

「しっかりしてください!!」

次ははっきり聞こえた。

揺すつているのはこの人のようだ。

…羽も輪つかもない。

つまり、俺はまだ生きているのか。

確かに腹もへつてるし、喉もカラカラだ。

これでは天国とはとてもいえるはずがない。

「水…下さい」

「水ですね!少し待って下さい!!」

とりあえず喉の渇きをと思い水をお願いする。

その人は自分の水筒らしきものから水をコップに入れて渡してくれた。

これほど水を素晴らしいものと思ったことはなかった。

「…プハア、ありがとう。助かったよ」

言いながら恩人を見ると女の子だった。

金髪だ。

「大丈夫なんですか!?!こんなところで寝ているなんて…バルドスに襲われてませんか!?!」

結構心配性のようだ。

バルドスとやらが何かは分からないが疲れていたのととりあえず質問は保留した。周りから見て外傷が無いことが分かると女の子は安心したようで座り込んだ。

「本当に襲われてないのね。良かったあ。こんなところで寝てたのに襲われないなんて運イイわね」

すると彼女はこちらをまじまじと見はじめた。

聞きたいことが山ほどあるのでどれから切り出すか悩んでいると

「あなた、ここら辺の人：じゃないわよね？見たことのない服装だけど、っていうかどうしてこんなところで寝てたの？」

この人は学生服を知らないのか？

それになんか口調がガサツになったような気がするが今はそれどころではない。

疲れているが情報がほしい。

「えっと、まず助けてくれて本当にありがとう。質問に答える前に、ここはどこですか？」

目の前に広がるのは草原。

涼にはこの場所に心当たりなどない。

すると彼女は少し怪訝な顔をして、

「どっこって、ここに名前なんて無いわよ。強いて言うならミュージズデルにつづく道中かしら」

…は？

こいつは何を言っているんだ？ミュージズ…なんだ？

どうやら本格的に日本ではないらしい。

地球の隅々まで探せばもしかしたらある地名かもしれないが、日本にそんな地名は存在しないだろう。

これからどうしよう。

学校の成績は中の上だったが、英語なんてしゃべれる程度にも…

「ねえ、聞いている？私はあなたの質問に答えたのよ？私の質問にも答えてよ！」

「…君、日本語話せるの？」

「はあ？あなた本当に大丈夫？日本語？この世で生活してきたなら万国共通語であるミュージズ語だつてことくらいわかるでしょ。ていうかあなた今ミュージズ語使ってるじゃない」

えっ、やだ、怖い。

今、俺日本語使ってるよな？

俺は今、わけの分からん言語と日本語で話しているのか？おかしくない？

外国語ならまだ聞き分けることができないこともよくある、それは分かる。

だが、母国語と外国語の区別がつかない？

そりやないだろ。

分らないことが多すぎる。

ここ、もしかして地球じゃない？

ハハッ、まさか。

「…なんだかあなた心配だわ。とりあえず私と一緒に来ない？今私ミューズデルに向かっているの。2週間後に科学の方の受験するんだけどその前に叔父の家に泊まることになっているの。叔父は一人暮らしだから泊まる人が1人くらい増えても大丈夫だと思うんだけど」

心配性というよみは当たっていたようだ。

しかし、…ありがたい申し出だ。

分らないことだらけなこの場所について知るためにもいい機会だ。

だが…

「いいのか？こんな見ず知らずの男を家に招き入れるなんて」

「大丈夫よ。貴方弱そうなもの。やってみる？」

…否定はできない。

確かに喧嘩なんてめったにしないし体格も並々程度だ。

でも目の前にいるスタイルもいい普通の女の子に負けるとは思えない。

でも、

「やめておくよ。今はとても殴り合える状態じゃないし」

「…それもそうね。それじゃ、ついてきて。歩きながらいろいろ話しましょう。ミューズデルまでそう遠くないわ」

俺の異世界探検はこうして始まった。

大都市ミューズデル

今、雨宮涼はある人の家に居候していた。

「マーシャ、朝ごはんできてるってよ」

「…女子の部屋の中にノックなしに入ってこないでよ。ていうか、あなた朝早いわね」
寝癖がつきやすい髪質なのかぼさぼさになっていいる髪をかきながら起き上る。

「部屋には入ってないよ。ドア越しに話してるじゃないか」

「…少しは、ドア開けてるでしょ？」

「そりゃあ、そうしないと声届かないでしょ。今閉めるよ」

閉めた音がすると洗面台へ向かうため、タオルを取り出す。

「でも閉めてても話せるじゃない」

「これじゃ声が小さくて起きないでしょ。俺先に食べてるからね」

そう言うと食卓に戻った。

彼が今居候している家はマーシャ・クリーシャという女の子の叔父の家だ。

偶然マーシャに出会い居候だけでなく、三食の飯までもらっている。

「くという歴史があつて、ミューズデルは大都市になつたわけ。つて聞いている?」

「…聞いてはいたんだけどゴメン。歴史とかよりも今を教えてもらえないかな」

今彼はこの世界について知るため彼女から講義らしきものを受けている。

「歴史を知ることが今につながると思うのだけど」

「そうかもしれないけどゴメン。歴史は後にしてくれないかな」

「…まあいいわ。じゃあどこから話そうかしら。記憶喪失となるとどこから話したらいいか微妙なところね」

彼は違う世界から来た、と言つても信じてもらえないと思ひ記憶喪失ということにしてる。

しかしまあ、記憶喪失というのは結構便利なものだった。

「ミューズデルについてどれくらい知ってる?」

「…ゴメン、何にも」

「なんかさつきから謝つてばかりね。ミューズデルっていうのはさつきも言つた通り大都市よ。基本、学校に入学するならここにくるわ。おかげで土地も広いけど人口密度も一番よ。学校は2つあるわ。簡単に分けければ科学と魔法ね。どちらに入るのかは才能によるけれど比率は科学7と魔法3ぐらいになつてるわ。前にも言つたけど私はあと一週間とちよつとでその試験を受けるわ。次にt」

「ちよつとまつて魔法？そんなのあるの？」

「そりやあるわよ。まあ、才能がなきやダメだけどね。人は誰でも魔力をもってるわ。もつとも、大半の人は微弱だけどね。私も70程度しかないわ。みんなこんなもんよ。」

…魔法、まさか存在したとは。

ぜひ使いたい！

こういう場合、異世界から来た俺って結構な魔力持つてるパターンじゃね!?

「魔力はどうやって測るの？」

「町に行けば測ることはできるけど、魔法方面への今からだと入学は難しいわよ」

「え…、なんで？」

「なんでって、あなたおそらく魔法何にも使えないでしょ？」

「そりやあ、まあ」

「魔法のほうは筆記以外に簡単な魔法の実技があるのよ。仮に十分な魔力があつたとしても、使えるまでは時間がかかるし教えてくれる人もいないわ。私だつてちよつとした光を出すのが精いっぱいよ」

…こんなオチか。

そうかい。

目の前にあるのに掴めないなんてあんまりだよ。

落胆していると、

「ちよつと、科学だつてすごいものよ！ていうか科学のほうが便利なんだから！」

「科学はどんな感じなの？」

「科学はね、科学の技術を結集した銃やロボット、他にもあるわ」

「ロボットつて巨大なの？」

「一応あるけど今は等身大サイズのを体に装備するのが主流よ。機動性に優れてるし」

…いいじゃない、科学！

神様は俺をまだ見捨てていなかった！

面白そうだし入学すれば情報も得られるかもしれない。

「科学なら俺も入学できるのか？」

「勉強ができればね。科学に実技はないわ。でも、あなた記憶喪失なんでしょ。勉強で

きるの？」

「どういう問題が出るの？過去問か何かない？」

「一般人が持つてちやいけないうことになってるの。一応対策の本はあるけれど私が書き込んでるから見せたくないわ」

…、いいじゃないか少しくらい。

そう思っていると

「だから、受験願を出すついでに見てきましょう」

「…すげえ」

涼は圧巻されていた。

町がものすごい広いのだ。

そして車が浮いているのだ。

形もSF映画で見たことのあるような形だ。

だが、頭の上を飛ぶような光景が見られなかつたので訊いてみると

「あれはどんな地面でも影響を受けないようにするために作られてるだけから高くは飛べないの。まあ、地面から影響を受けないようにって言うても道路の大半は整備されてるんだけどね」

そうこうしているうちに2人は入学の願書受付をやっている市役所についた。

中に入りマーシャについていくと受付らしきところまできた。

「あの、2人科学のほうの願書を出したいんですけど」

「はい、それでは右手を出してください」

訳が分からない涼であったが、マーシャはすぐ出したので同じように出してみる。

すると受付の人は腕輪をつけてくれた。

そして「名前をお願いします」と言いながら一枚の紙を渡した。

名前を書いて返すと「ありがとうございます」と言う奥のほうへ行ってしまった。
「さっ、次は過去問見に行くわよ」

「えっ、いまのでおしまい?!」

「それ以外何するのよ。受ける人数だけわかればいいんだから」

「住所とか、電話番号とかは?」

「そういうのはいらさないの。実際住所を持たない人も入学してくるしね。モットーが
「平等に」らしいから」

…ありがたい。

住所とかこの世界で持っていないからありがたい話だが後で困ることはないのだろうか。

分からないことが多いなと思いつつももううれしいことに変わりはないので黙ってついでにいつた。

夜、俺はベットの所で疲れをいやしていた。

予定ではこの時間は、勉強漬けになっていっているのではないかと思っていたがその必要はなかった。

「…あんた本当に記憶喪失？」

そういわれた。

（過去問を解いていたとき）

「それは前も本当だって言ったじゃないか」

「だけどこれは何をやってるの？」

「何って…、筆算？」

「なんで語尾疑問形なのよ。筆算なんて聞いたことないわよ。それにこれ！—（マイナス）に点がついたこれってこれから習うやつじゃない!？」

「割り算のこと？」

「…それなのに歴史は、記号問題が2, 3問あっただけ。理科と国語もまあまあだし。どうなってるのよ」

正直かなり発展しているのに割り算どころか、計算しやすくなる方法である筆算すら習わせてないとは。

ゆとりとはまさにこのことだなと思った。

いや、ゆとりよりもひどいのでは？

もう今日は疲れたし寝てしまおうか、と考えていた彼の耳にドアをノックする音が聞こえる。

「リヨウ？入っていいかしら」

「いいよ」

マーシヤが入ってきた。

風呂をあがったばかりなのか髪は少し濡れてるしバスタオルを持っている。

黙って入ってくるとベットのの上に座った。

…、気まずい。

そう思っている

「リヨウ、あまり詮索したくはないんだけど本当のことを教えて」

「…」

「あなた…」

押し黙ってしまった。

涼は何を聞かれるのかと構えていると

「…巨乳派でしょ」

「…は？」

「私のためを思つて言つたなら大きなお世話よ。確かに巨乳ではないけれどまだ発展途上なんだから」

「いやいや、何言つてんの？マーシャどうしたの？」

「別に。ただ昼間ふと話したことが気になつただけ。あなた、どちらかといえば貧乳のほうが好きになることが多いつて言つたじゃない。絶対嘘だと思つてね」

「いや、それは本当だよ。まあ、もしかしたら顔で選んできたかもしれないけど」

「私はあなたのことはあつて間もないけど、とてもいい奴で友達だと思つてる。でも恋愛感情はいだいていなんだからそんなことで気使わなくていいのよ」

「いや、君のことがどうかじゃなくて本当にいい」

「それだけだから。話したらすつきりしたわ。やつぱり言いたいことは言うもんね」
そういうと部屋を出て行つてしまった。

残された涼は茫然とした後、

「なんだつたんだ…」

と呟いた。

マーシャは結局切り出せなかつたと落胆していた。

本当は記憶喪失なんてウソでしょ？と訊くはずだった。

今日一日一緒に行動してみても分かった。

勉強はできるし（歴史はあれだけど）魔法や科学だって知っているようだった。

受付に行った時も、住所や電話番号について訊いてきた。

何よりこの地域について全く知らないのに、家にあるオーブンだったり冷蔵庫の使い方分かってた。

クローゼットの使い方は知らなかった。

洗濯機能も付いているということに驚いていた。

なんだか抜けているところがおかしいというか、都合がよすぎる。

だから訊きたかった。

でも訊けなかった。

詮索はしないと決めたのだ。

そう決めていたのに訊いてしまいそうになった。

彼が自分から言うまで待とう。

そう決めると彼女は部屋に戻り眠りにおちた。

「さあ、忘れ物はない？」

「あるもないも俺の荷物はほとんどないだろ」

「でもしばらく戻ってこれなくなるのよ」

「やっぱりマーシヤは心配性だね」

「そうかしら」

他愛もない話をしながら支度を済ませる。

願書をだしてから3週間たった。

彼らは受験に見事に受かった。

涼にいたっては返さなくてもいい奨学金の権利まで手に入れられた。

「それにしても受かって本当によかったわ」

「でも落ちた人、1割程度なんですよ？」

「それでも落ちる人はいるのよ。1割とはいえ心配だったんだから」

「心配性」

「しつこいわよ。それにあなたは奨学金までもらえるなんて…、たいしたもんだわ」

「そうこうしているうちに時間だ。」

マーシヤの叔父であるジュゼルに送ってもらう。

見た目は白いひげをはやして少し太ってる感じだから、クワを持って働いている姿しか浮かばない。

なのにあのハイテクな車を運転するもんだから涼はなんか変な感じがした。

指定の位置につくと車を降りる。

「本当にいままでありがとうございました」

「なに、1人息子が増えたようで楽しかったよ。また来てくれ」

「休みに入るたんびに行くわよ」

「なら楽しみにまとうかの。それじゃ気を付けるんだよ」

そういうと車で走り去った。

さあ、これからここが俺の住まいになる場所であり、学び舎にもなるところだ。

と胸を躍らせ校舎がある方向を向く。

「…」

周りに学生は…、うん、沢山いる。

「どうしたの。さっさと行くわよ」

「マーシヤ、全校生徒って何人だっけ？」

「1学年5000人弱の6学年あるわ」

…、いや無理だろう。

確かにこの都市はこの世界で一番広い街だ。

だから、少しは疑ったがまあ30000人なら科学の力で何とかなるのではないか、そう思った。

だがどうだ、目の前にある建物は。

俺が行っていた300人規模の高校と大差ないではないか。

校内の人口密度なんて考えるだけでも恐ろしい。

「…ああ！地下か！地下に広がっているのか！」

「何言ってるの、私地下生活なんて絶対いやよ」

「なら君は恐ろしい人口密度の中で生活したいというのか!？」

「何言ってる…、ああ、あなたあの中で生活すると思ってるの？違うわよ。とりあえずついてきなさい」

…あの中じゃない？

ならいったいどこなのかと悩みながらついていくと建物の中は体育館のように広く、部屋のようなものが見当たらず、奥に6つ黄緑色で光っている床がある。

…まさかこれかと思いき少しテンションが上がる。

空港の金属探知機のような輪っかをくくりその床の前までくる。

「ねえ、これって」

「あら、分かる？そうよ転移装置よ。その床の上に乗ればすぐ校舎よ」

やべえ、まじですげえ。

転移だよ。ワープだよ。瞬間移動だよ。

「先いってもいい?」

「構わないわよ。そんな先いくも後いくも同じだし」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

一歩踏み出しその床に乗る。

次の瞬間には景色は変わっていた。

目の前には、デカくハイテクに見える学校が目の前にあつた。

少し前にでて見とれていると

「すごいでしょ」

「…マーシャ、君は見たことあるの?」

「いや、パンフレットでしかないわよ」

「それでよく驚かないね」

「そりゃ、これでも少しぐらい驚いてるわよ。でもまあ多少は慣れてるしね」

「そういうもんなのか?」

「そういうもんよ。さっさと寮に荷物置きに行きましよう。時間も余裕はあるけどこんなことで立ち止まって話してるとすぐに時間がなくなるわよ」

それもそうだと思いリヨウはいったんマーシャと別れ寮へ向かい荷物を置いて自分のクラスへ向かった。

異世界での新たな出会い

クラスの目の前まで来て涼は立ち止まった。

こんな感じでドキドキするのは初めてだった。

今まで、ずっと同じ地域で生活してきたのだから無理もない。

確かに幼稚園に入学するときはあったこともない人ばかりだった。

でも緊張したなんて人は少なかっただろうし、緊張していたとしても覚えていないだろう。

あとは小・中学校、高校でさえも地元に通っていたのだから知っている人ばかりだった。

少し緊張しながら扉を開く。

彼はこの時緊張しまくりで忘れていたが、沢山の地域から人が来ているのだから案外周りに知っている人がいないという同じ境遇の人は少なくなかった。

とりあえず自分の席を見つけ座る。

(そういうえばマーシャも同じクラスだったはずだけどまだ来てないのかな?)

友達ほほしいが正直自分から話に行くほど積極的ではないし、なにを話したらいいか

わからない。

そう考えていると制服ではない女の人が教室に入ってきた。

「はいはい、みんな座ってね。これからどう行動したらいいか教えるよ」

生徒が座っていくなか「美人だね」「何歳だろ」「俺はタイプじゃない」と聞こえる。

全員が座ると

「まず自己紹介するね。私はあなたたちの担任になったフレア・ランパード。これからよろしくね。」

貴方たちにも自己紹介してもらいたいけどまずは、入学式があるのでそっちへ行ってもらいます。教室を出れば目の前に転移先が書かれた札が床にはってあるからそこに体育館ってあるから席順に行つて頂戴」

そういわれるとクラスの人と言われた通りに行動を始めた。

「みんな、お疲れ様。うちの校長先生は話が長いことで有名なの。慣れてね」

…、まさかここにもそんな奴がいるとは、トリヨウは少しくつたりしながら話を聞いていた。

心躍らせていった向かった入学式はまさかの日本の入学式とほとんど変わりがな

かったのだ。

しかも彼の知っている校長先生より話が長かった。

なぜ、どこの校長先生も長い話を用意してくるんだと疑問と軽い恨みを持っていると「じゃあ、さつきも言った通り自己紹介してもらえないかしら。はじめは…そっちから」

おつ、俺からは離れているな。後の方とは有り難い。

「くです。これからよろしくお願いします」

「これからよろしくね。えつとじゃあ次は…」

リヨウの番だった。

自己紹介の内容は頭の中にある。

それはいいのだがこの先生、天然なのか？

「リヨウ・アマミヤ」

言った。

サラリと俺の名前言いやがった。

おかしいだろ。

それ本人が言うべきだろう。

「リヨウ・アマミヤです。よろしくお願ひします」

よし、おそらく問題ないだろう。

むやみにこれが好き、とか言つて怪しがられるのはごめんだ。

「ありがとう。これからよろしくね。じゃあ次は…」

「ふう〜…」

今、リヨウは寮で休んでいた。

一年生は入学式が終わると放課らしい。

自己紹介も全員終わると先生はみんなを解散させた。

そしてこうやって寮で休んでいるのだ。

「ねえ、君」

呼ばれたような気がしたのでそつちを見る。

すると身長155cmぐらいの子供らしき人がこつちを見ている。

「リヨウ・アマミヤさんだっけ？」

「君は？」

「B組のクロツエフ・アリアジト。同じクラスだよね」

確かにリヨウもB組だ。でも知らない。

「ごめん。せっかく自己紹介したのに覚えてなくて」

「いや、仕方ないよ。1クラスだけで50人もいるんだもん。まあ、5000人中僕たちの行く校舎には500人しかいないけどね。同じ部屋になったんだ。これからよろしく」

「よろしく。クロツエフ。リヨウって呼んでくれ」

「クロでいいよ。前はそう呼ばれてたから」

「分かったよ、クロ」

そう言うと、嬉しかったのかクロは満面の笑みを浮かべた。

…正直かわいい。

少し茶色がかったショートカットの髪。

顔のパーツもある程度そろっている。

…いかんいかん。

俺にそっち系の趣味はない。

「ねえ、今日の夜ご飯一緒食べに行かない？」

なっ、食事の誘い…だと！

このまま進んでしまうと…、いかん。

これは友達になるための誘いだ！

なぜやましいほうに考える！

変に葛藤しつとりヨウは

「いいよ。特にやることもないし」

またクロは喜ぶ。

「じゃあ早く行こうよ」

「えっ、まだ早いんじゃない」

「何言ってるの。もう7時過ぎるよ。あつ、もしかして8時頃に食べる人？」

「うそっ、もうそんな時間？まだ5時頃かとばかり」

「もしかして転移装置はじめてだった？」

「初めてだったけど特に困ったことはなかったぞ」

「でも転移装置について知ってるのって移動できることくらいでしょ」

「それ以外に何かあるの？」

「あれって実際早く見えるけどだいたい最初の校舎までの移動だけで20分くらい使ってるよ。体育館までの移動は往復1時間ぐらいね」

「そんなかかっているの!?!瞬間移動装置じゃないじゃん!」

「だから転移装置って言うてるじゃん。まあ瞬間移動装置存在はするけど値段が張るし

ね。それより早く夜ご飯食べに行こうよ」

便利まではまだ遠いということか…。

それよりもこの子の誘いなのだ。さっさと飯、食べに行こう。

「そうだね、早く行こうか」

「このカレー結構おいしいね。うちのと比べるとまだまだだけ」

今、リヨウはクロと食堂で飯を食べてる。

「ハンバーグもそんなもんだな。まあ、食堂でそんなすごいもの出ないでしょ」

「そういえば、リヨウってどこ住んでるの？自己紹介でも言っただけだね」

リヨウは困ることはなかった。

確かに本当の住所を言えばもしかしたらまずいかもしれないが、しっかり考えてあ
る。

「俺は、グベル高原あたりからきたんだ」

「へー、あのあたりなんだ。自然多くていいよね」

これはマーシャと一緒に考えて決めた地域だ。

記憶喪失だとあれかもしれないからこの少し技術が遅れてるあたりがいいと選んで
くれた地域だ。

だが、彼はそこに行ったことがあるわけではないのであまり深く訊かれるとまずい。

「クロはどこにすん」

「リヨウ、ここは慣れたかしら？」

女性の声がする。

「マーシャ。久しぶりだな」

「半日会わなかっただけじゃない。まあクラスでは見たけど。その子は？」

クロのほうを見る。

「あ、あのクロツエフ・アリアジートと言います！」

「同じ部屋の奴なんだ。クロって呼んでる」

「へえ、よろしくねクロ。私はマーシャ・クリーシャよ」

「よ、よろしくお願いします！」

なんか緊張してるように見える。

女子に耐性がないのだろうか？

「マーシャ、ゴメン遅くなつて…って誰？彼氏？」

「違うわよ。彼がさつき言ってたリヨウよ」

ラーメンと食パンを持ってきた女の子がリヨウのほうを向く。

なんだそのチョイスと思っていると

「あなたがリヨウ？話は聞いてるわ。私はリリア・アリア。よろしくね、巨乳派のリヨウくん♪」

「…マーシャ、いったい何を吹き込んだんだ？ひどい濡れ衣だぞ」

「本当のことを言っただけよ。男子なんてみんな胸で決めるんだから」

「男子全員を敵にまわしたな」

「リヨウ、君は巨乳派なの？」

「クロ、だまされるな。俺は顔で決めるぞ。それに今までだってどちらかといえれば貧乳のほうが多かったぞ」

なんかクロが震えてる。

違う、違うんだクロよ。

「どうでもいいけど、そこ座っていいかしら。入学生の大半が学食に来てるのよ。席が空いてなくてね」

「俺にとつてはどうでもよくない問題なんだが。まあどうぞ」

リヨウの前にマーシャが、クロの前にリリアが座る。

隣では座ってすぐリリアが自己紹介してる。

「リヨウ、うまくやってるの？」

「とりあえず。グベル高原で合ってるよね？」

「ええ、合ってるわ。じゃあ頑張ってるね」

それだけ!?!と言いたかったがクロ達が入ってきて中断するしかなくなってしまった。

「マーシヤさん達、いい人たちだったね」

「そうか? マーシヤは濡れ衣かぶせるし、たぶんあのリリアって人は誰かをいじるのが大好きそうに見えたぞ」

今2人は食事を終えて、寮に戻ってきている。

「でも面白そうじゃん。初日で3人と話せるなんて思ってたよ」

「俺もマーシヤと以外話せるとは思っていなかったよ」

「リヨウってモテるんだね」

「俺の知り合いだったのはマーシヤだけでリリアは違うぞ。それに2人とも知り合いだったとしても2人くらいじゃモテるとは言わないだろ」

「そんなことないよ。僕なんて女子と話すだけで緊張しちゃうし」

「なんで?」

「なんでって、異性だよ!?!体の構造が違うんだよ!?!」

「でもおなじ人間だよ？」

「いや、そうだけど…」

「いや、別に緊張することが悪いって言ってるわけじゃないさ。とりあえずマーシヤからでも慣れてみなよ。口調も性格も男勝りだから」

「…そうだね、せっかく友達になったんだから頑張ってみるよ。リリアさんとも話してみよう」

マーシヤは分からないけどリリアはクロをいじるのがなんとなく好きそうだから、たぶんなんとかなるなと思った。

「あつ、ねえ、リヨウは選択どっちにしたの」

「せんたく？」

「学科の選択だよ」

学科の選択。

この学校は実は一年生のうちからある程度自分の行きたい学科を決める。

簡単に言えば研究をして技術の向上を目指すか、軍事に貢献するか。

一応この世界にも国と国との争いがあるらしい。

研究がAコース、軍事がBコースだ。

「俺は、Bコースだよ。クロは？」

「僕はCコースなんだ。まだどちらにするべきか決まらなくて」

Cコース

軍事と研究の両方を手に付けるコース。

まだ夢が決まっていない人用だ。

「まだまだ人生これからなんだから選択なんてまだ大丈夫だよ」

「でもリヨウはもう選択しているじゃん。すごいね」

「でもCコースは一番多いじゃないか。俺はもしかしたら決断が早すぎたのかもな」

実は本心は早すぎたとは思っていない。

ロボットに乗ってみたいのだ。

憧れているだけだ。

「そんなことないよ。僕も早く決めてAかBに移動するつもりだよ」

この学校ではCコースの一年生は好きな時にAかBに変えられる。

2年生になるまでには必ず決めなければならない。

「自分に合うのがどちらかわかるといいな」

「ありがとう。さ、そろそろ寝よう。お風呂先に入ってもいい？」

「ああ、構わないよ」

そういうとバスルームへ入っていった。

「…」

クロがいなくなるとリヨウは情報を整理しはじめた。

まあ、たいした量はないが。

正直元の世界へ帰る方法が1ヶ月ほど経つ今も全然わかっていない。

転移装置のことを考えたが無理だろう。

(そういえば瞬間移動装置もあるといっていたな。でもここにはないとなると試すことさえ不可能だ。

まあ、楽しそうだから帰れるとわかってもすぐには帰らないけど…)

「なにそんな厳しい顔してるの?」

「うわあ!」

すぐ近くにクロがいた。

「早くない!?まだ5分くらいしかたつてないだろ!」

「僕、長湯するとすぐのぼせちゃうんだ。だから基本シャワーだけ」

…、かわいい。

シャンプーのいい香りもする。

そう思ってしまったリヨウは首を振ってから

「じゃ、じゃあ俺も入るから」

「分かった」

そういうとクロは自分のベッドへ戻っていく。

リヨウは風呂に入り、また情報を整理し始めた。

雑念を捨てるかのごとく。

彼が、風呂から上がるとクロは寝ていた。

明日から授業が始まるのだ。

俺も早く休もう。

そう思いリヨウもベッドに入り眠りにおちた。

同じころマーシャもベットに入り寝ようとしていた。

同じ部屋で今寝ているのはリアではないが、いい子でマーシャとも気が合っている。

「…」

1人、リヨウのことについて考えていた。

（おかしい。今考えてみればもつとおかしいところを見落としていた。

あいつ自分は今まで好きになった人が貧乳が多かったと言っていた。

記憶喪失なのに今まで？

前は聞き違いかと思つて気にしなかったがそうじゃない。

なんで記憶喪失のふりを？

考えるが答えが出るはずはなかった。

結局モヤモヤしたまま彼女は寝てしまった。

トリプルイー

朝8時、リヨウは今Bコースの講義室にいる。

はじめに入ったBクラスは正直たいした意味を持たない。

クラスで活動するのは学校の大きな行事の時のみだ。

一年の大半はクラスよりも、コースの人と過ごすことが多い。

「よし、じゃあ授業を始めるぞ。分からないこととか質問があったら授業終わった後にしてくれよ」

今教壇に立っているのは、ヒューズ・マクアドル。

Bコースの授業の先生だ。

実践はまた別にいるらしい。

和服を着てそうで、聡明そうには見えるがめんどくさがり屋にも見える。

リヨウは実践に出たいとは思っていたが、このような授業もあることは予想していた。

知識も大切なのだ。

先生の話に必死に耳を傾け始めた。

~~~~~

「よし、今日はこれで終わりだ。予習はいらさないから復習はやつとけよ」  
授業が終わり、リョウは疲れ切っていた。

いや、クラス50人弱はほとんどが疲弊していた。

この学校の授業は日本の大学と似ている。

Bコースの中で更に、自分の出たい授業を選びそれに参加するのだ。

(ま、まさか初日に実践が1分たりとも用意されてないとは…)

彼は、8時から4時までのうち6時間をこの講義室で過ごした。

しかもマクアドル先生からの講義でだ。

(いくら高校でも6コマすべて同じ授業なんてなかったぞ？馬鹿なのか?)

彼は、疲れを癒すため寮へ戻っていった。

寮に戻つてくると荷物を放り出しベッドに横になった。

クローはまだ帰ってきてないようだ。

Cコースは両方を掛け持ちするのだから大変なのだろう。



飯の時間になるまでしばらく寝ていよう。

6時前にはクロも戻ってくるだろう。

そう思い寝ようとするときインターホンが鳴った。

「だれだ？ クロだったら呼び出す意味ないよな」

独り言を呟くと、リヨウは腕輪をいじり始める。

さすが科学が発展しているだけあってわざわざ決まった場所に行かなくても相手の顔も見れるし、会話もできるのだ。

画面を開くとマーシャが映っていた。

後ろにもう1人知らない女子が映っている。

「マーシャ、何か用？」

「ちよつとこの子のことでね。とりあえず部屋にあげてもらえないかしら」

「分かった」

画面を閉じるとまた腕輪を操作する。

本当に便利だと思わずにはいられない。

5分後2人がきた。

こういう時、転移装置のタイムラグが未だに慣れない。

来てるほうはすぐに来たただけなので何の違和感もないかもしれないが待つてるほう  
は嫌な感じだ。

「まず紹介するわ。彼女はフィリア・リトルトリア。Bクラスで同じBコースの生徒用  
よ」

すると隣の子が小さな声で「よろしくおねがいます」といいながら頭を下げる。

「リヨウ・アマミヤです。よろしく」

その子は身長160cmより少し高いくらいだ。

特徴的なのが灰色の髪の毛。

ポニーテールだ。

「この子、すごい人見知りだね。自分から話しかけることがまずないの。だから友達作  
るのも苦手だね」

「…それで俺になにをしると？人見知りを直せと？」

「そんな難しいお願いじゃないわ。ただ何かあったらその時お願いっていうこと」

「十分難しいお願いだな」

「身の周りの世話をしてやってってわけじゃないわ。ただペアになれとか、共同作業  
じゃなきゃ難しい時とかに手を貸してやってっていうことよ」

お前は母親か、とつっこみたかったがフィリアが可哀そうなのでやめておいた。

「まあ、それくらいなら構わないが。でも、そういうのは同じ女子に相談するべきじゃないのか？」

「そうしたいのはやまやまんだけどね、私の知ってる女子はBコースにはいないのよ」

マーシヤはCコースだ。

居ないのも無理はないかもしれない。

「ね、ねえマーシヤさん。やつぱりいいですよ…。迷惑かけたくないですし…」

「何言ってるのよ。私だつてできればしたくないわよ。でも、困ることは必ずあるわ。友達としてあなたが心配なのよ」

「でも…」

どうやらフィリアはリヨウに断られたと思っっているようだ。

ここは引き受けておくべきだろう。

「そういうことなら構わないよ。よろしくね、リトルトリアさん」

えーつと…、と戸惑っている。

まだ少し困っているようだ。

「ほら、引き受けてくれたんだから。それでいいじゃない」

マーシャも背中を押す。

「…じゃあよろしくおねがいます」

ようやくきめたようだ。

「じゃあ私たちは帰るわ」

「もう帰るのか？」

「用は済んだしね。それに結構時間も食ってしまったし」

そう言われて時計を見てみると5時を過ぎていた。

時間の流れ方は分からないもんだなあ。

「ホントだ」

「じゃあ明日からおねがいね」

そう言うのと帰ってしまった。

フィリア・リトルトリア。

この人は基本積極的だったからあそこまで人見知りな人を見るのは久しぶりだった。  
た。

ここも日本と大差ないんだなと思いつながらクロが帰ってくるまで寝てることにした。

~~~~~

その日は朝6時ころ起きた。

あまりね過ぎると逆に眠くなるというが12時間も眠るとむしろ目が覚める。

…ん？ 12時間寝た？

「あ、おはよう。リヨウ」

リヨウは今日早く起きる必要はないがクロはどうやら授業が早いようだ。

「クロよ。今俺は朝の6時だと思ってるのだが間違いだよな」

「いや、あつてるよ。昨日起こそうとしたんだけどリヨウ全然起きなくて」

そんなにぐっすり寝ていたのか。マーシヤに知られたら間違いなく馬鹿にされるな。

「ねえ、早く起きたんだったら一緒に朝ごはん食べに行こうよ」

断る理由なんてない。

「いいよ。5分くらい待ってくれ」

「分かった」

そう言うのと嬉しそうに笑顔を見せた。

リヨウに兄弟はいないがこんな弟や妹だったらほしいなと思った。

~~~~~

「よし、授業始めるぞ」

今リヨウは訓練場に来ている。

遂に彼の待つていた実践の授業だ。

ちなみに今授業をしているのはヒューズ・マクアドル先生だ。

本場の先生は出張中らしい。

「じゃあまずこのボールを配るぞ」

手のひらサイズの球体が配られる。

「大体渡ったな。説明するぞ。まずこの球体の名前はドールだ。名前の由来は知られていないけどな」

…、ドール。

確か英語だったかな。

意味は人形だっけか。

この世界には英語は存在しない。

基本はミューズ語で一部の地域でのみ変わった言語を使っている。

(やっぱりおかしい。たまたま使われることはあるかもしれない。でも今聞いたドール

以外にも英語があった。確かマーシヤが使える光を出す魔法、名前を「ライト」と言っていた。ネーミングセンスはどうかと思うが、他にも火はファイヤ、水はウォーターと言っていた。なんでこんなにあってるんだ？)

しかし、考えても答えが出てくるわけがなかった。

先生の話は続く。

「そしてこのドールの中にはトリプルーイーっていう装備スーツが入ってる。これも由来は不明だ。これ作った奴は何やってたんだろうな。そしてこのスーツの一番の特徴は進化するということだ」

「進化？」

「そう、進化だ。どういう仕組みか知らんがこいつはどんどん形状を変えていくんだ。7段階、今は確認されている。そして人によって進化する方向も変わってくる。最初はみんな同じだが3段階目にはダブることのほうが珍しくなってくる。つまり自分専用の機体が入ることだ」

「進化させる方法は？」

生徒がたずねる。

「不明だ。正直トリプルーイーについて分かっていることはとても少ないんだ。まっ、そんなのは機体を使いこなすことにだけ集中すればいいお前らには無関係だがな」

さつきから言ってるトリプリー、おそらく3Eって書くんだろうなって思いながらリヨウは聞いていた。

「さ、こんな説明よりもお前らはさつきと機体を動かしたいだろ」

おつ、分かっているじゃないかこの先生。

「よし、とりあえず広がれそしたらそれから説明だ」

「いいぞ。これで全員だな」

リヨウは今機体に乗っている。…いや装備している。

両足、両腕、胸に機体が装備されている。

正直、装備はドールを腕輪に読み込ませればいいので大して難しいことはない。

「じゃあ、後は自由にしてくれ」

どうやら自由時間のようだ。

好きなように動こうとしていたら

「ちよつとまってくださいい！」

と声が聞こえる。

先生に向かっていく男子生徒が見えた。



「なんだ」

「あなた先生なんですよ？ だったらもつとうまくバランスとる方法とか教えてくださいよ」

「いや、でも俺臨時教師だし」

「でも代わりを務められるということはいろいろ知ってるんでしょ？」

「そりゃあ、まあ」

「なら教えてくださいよ」

「…悪いな。前にも言ったが質問は授業が終わった後にしてくれ」

「どうやら先生の方が部が悪いようだ。」

「これは、質問ではありません。抗議です」

「それもだ。それに今は飛行訓練で、戦闘をするわけじゃない。バランス感覚はそういった自身がかむのが一番だと思っている。だから何も言わない」

「そう言う生徒が何か言ってるのも無視して訓練場を後にした。」

「ぶつぶつ何か言っていたその生徒も黙って自主訓練を始めた。」

~~~~~

放課後、リヨウはいまだにテンションが上がっていた。
機体に乗れたのだ。

この喜びをクロに、と思っていると

「ちよつといいかな」

と呼び止められた。

振り返るとマクアドル先生がいた。

「リヨウ・アマミヤ君だったかな」

「はい、そうですが。…何かありましたか」

「いや、同類を久しぶりに見つけたもんだからね。声かけたくなったのさ」

「同類…ですか？」

「君、地球人だろ？」

異世界でのレッツファイト!

「まあ、とりあえず座りなよ」

今彼はヒューズ・マクアドルの部屋に居る。

お茶を準備しながら話しかけてくる。

「しかしまあ、地球人と再会できるなんて何年ぶりかなあ。今地球のほうはどうなってるの?」

「どうなってるのって…、質問がおおぎっぱすぎますよ」

「私はね、ここにきて大体30年くらいになるんだけどね。なかなかいい場所だよ」

…こいつの話し方全然読めない。

地球の現状を訊いてきたと思ったら、自分の話?

「あの、質問いいですか?」

「特に転移装置!あれは大した発見だ。まだお目にかかったことはないけど瞬間移動装置もあると聞いたじゃないか。死ぬ前には見てみたいもんだねえ」

「…」

「で、なんだい?」

「1テンポ遅っ！それで教師よく勤まるな!？」

「いいツツコミだねえ。これは久しぶりにボケがしたかったからやっただけだよ。で、質問を受け付けようじゃないか」

大丈夫かこいつ？

でも、訊きたいことはある。

「…ここはどこなんですか？」

「不明だ」

「なぜ科学が発展してるんですか？」

「不明だ」

「帰る方法は？」

「不明だ」

「全部不明じゃん！30年もいたら、しかも教師だったら分かるでしょ！」

さらにこの軽く受け流す感じがイラっとくる。

「君の質問が悪いんじゃないかな。君、地球ってどこにあるか分かるかい？」

「…分かりません」

「どうして地球の科学はあれぐらい発達したんだ？」

「分かりません」

「どうやってここへ来たんだい？」

「分かりません」

「そういうことだよ。まあ、確かに分かっていることは少ないけどねえ」

「…30年間地球に帰ってないんですか？」

30年…。

少なくとも自分はここに居続けたくはない。

決して嫌な世界ではないが、一番居心地がいいのは住み慣れた自分の世界だ。

帰りたい気持ちのほうが強い。

「そうだね。ミリーナにここに飛ばされてからずっとここで生活してるよ」

「ミリーナ？」

「見えないのかい？不思議な子だよ。僕が見た感じは5、6歳の女の子だったよ。突然

現れて私をここに飛ばした。いったい何者なんだらうねえ」

「そいつが俺を飛ばしたのか？」

「たぶんね。ミリーナなら、後々事情は聞けると思うよ」

「そいつはどこに？」

「帰る手段を聞き出す気かい？」

「もちろんです」

「たぶん無理だと思うよ。私たちがみたいな境遇の人は他にもいたんだけどねえ、誰も帰れなかった。どこにいるかもわからない」

はた迷惑なやつがいるということか。

しかも元の世界に帰してくれないというかなり夕子の悪い。

「なんなんですか、そいつは？」

「さあ、私知ってるのはそれくらいなんだ」

「それくらいって、外見しか知らないんですか！」

「そうだよ。まあ、もしかしたら他の奴は知ってるかもしれないけどねえ……」

なら他の奴はどこに？、そう聞こうとするとチャイムが鳴った。

「おっと、これ以上君を無断でここに置いておくといろいろ面倒そうだ」

「俺にはまだ聞きたいことが……」

「それはまた今度にしよう。何より時間はたっぷりある。気長にいきましょうじゃないか」

そう言うトリヨウの床が光り始める。

気づけば自分の部屋だった。

リヨウはそれからしばらくの間、マクアドルに会おうとした。しかし、何かと理由をつけられそれはかなわなかった。気づけば1ヶ月経っていた。

「やるな、リヨウ！」

「お前もな、レックス！」

今彼らは、実践の訓練中だ。

ドールを装備して戦っている。

未だに進化したドールを持つ1年生はいない。

Bコースの生徒は80人に増えた。

ドールは進化しない限り、体に装備されるパーツしかない。

さらに1年生なので戦い方も正直イマイチだ。

なので戦っていると言ったが実際は殴り合いも同然である。

「いい加減壊れろよ！」

「お前こそ！」

ドールを機能停止に追い込む方法は2つある。

一つは手や足などのパーツにダメージを与えること。

手足4つが動かなくなればただの浮いてる物体、或いは落ちてしまい戦えなくなるからだ。

もう一つは「核」を壊すこと。

核は人間でいうところの心臓と脳を表す。

ドールは一段階目以外核の場所がかわってくる。

つまり一段階目は核の場所は一緒ということだ。

ならばなぜ今リヨウたちは、がむしやらに殴り合っているのか。

それは核が機体の背中にあるからだ。

特殊な攻撃方法を持たないこの機体ではまず届かない位置なのだ。

「どりゃああああ！」

「ぐう……！」

リヨウの機体が落ちていく。

「ぎゃ——————！」

地面に落ちた。

どうやらレッツクスの勝ちのようだ。

「いつつ…」

「だ、大丈夫ですか？」

フィリアだ。

1ヶ月も経つと普通に話せるようになってくる。

「大丈夫よ。男子はみんな丈夫にできてるから」

マーシャだ。最近Bコースに移行してきた。

「エスバリアがあるから大丈夫だよ、フィリア。男子だからってわけじゃないぞ」

エスバリアとはドールを装備している間、常に発動しているバリアだ。

これがなければ殴り合いなんかすれば、最悪どちらかが肉塊になりかねない。

「俺の勝ちだな。魔科祭（マツカ）の主将は俺だからな」

「分かってるよ。あと一歩だったのになあ」

マツカ

それは魔法と科学、両方の学校が合同で行う学園祭みたいなものだ。

それぞれクラスから5人ずつ選出し、勝負する。

それぞれの勝ち残った1チームが魔法 v s 科学の形で戦えるのだ。

ちなみにここ8年間は1年生の場合、魔法側がずっと勝っている。サブでももちろん出店なども出てくるが、一般人はこない。

「まあいいじゃない。マツカに出られるんだから」

「それはそうだけど、やっぱり勝ちたいじゃないか」

「男子ってそういうところあるわよね。やっぱり分らないわ」

さつきから男子、男子と。

マージヤは男子に恨みでもあるのか。

っていうか負けず嫌いは女子にもいるだろ。

「にしても驚いたわ。まさかフィリアがマツカに参加できるなんて」

「こう見えても結構戦略家なんですよ」

実はフィリアも5人のうちの1人選ばれていた。

彼女に男子を勝るほどの力はない。

ドールを装備しているので力は飛躍的に向上しているがそれは皆同じである。

だから彼女は考えることで勝つことを目指した。

そして結果がぎりぎりの5位だ。

女子で入っているのはフィリアただ一人なのですごい話である。

「ねえフィリア。せっかくだからリヨウと戦ってみてよ」

「ええー！」

「今回の順位はかちぬきせんだったからリヨウと戦ってないでしょ？折角だから戦つてよ」

「折角って何だ」

「そうだよ。やる必要なんてないよ。私これでも怖いと思ってるんだよ」

「いいじゃない。そうねえ…、じゃあ学食のメニュー何か一つ奢ってあげるわよ」

「…」

(迷ってる)

「勝てばマツカの出店でもなにか一つ奢ってあげるわ」

「リヨウさん、準備はいいですか」

「簡単だな！でも俺はやらねえよ。メリット何にもないし」

「メリット？」

「利点っていう意味だよ」

「秘密ばらすわよ」

「よし、フィリア。5分後に始めるぞ」

〈5分後〉

「勝利条件はいつもどおり。相手を機能停止まで追い込んだほうが勝ちよ。あとルールを公式ルールに近づけるため、自分の装備以外の武器の使用は最大3つにするわ」

「分かってるよ」

「なら始めましょう。じゃあ位置について…ファイト！」

また英語だと思いがらリヨウは距離を取り始める。

フィリアも同じ行動に出た。

「攻めてこないですか？」

「戦術家相手に策なしでは飛び込めないよ」

しかしどちらかが仕掛けなければ始まらない。

リヨウはマシンガンを取り出す。

人を殺すためのマシンガンでは傷一つつけられないがこれはドール用だ。

撃ち始めるがもちろんこの程度ではとても当たらない。

「女子相手にそれはないですよ」

余裕なようだ。

撃ちながら距離を近づけるため接近する。

フィリアはまだ逃げ続ける。

(何を考えてるかは知らないが一気にけりをつける！)

いまフィリアはリョウに背中を向けて逃がっている。

背中には表面に出ているわけではないが核がある。

リョウは加速する準備をする。

二つ目の武器だ。

使いどころが難しく時間も5秒と短い。

それ故あまり人気がない。

それでも加速し追いついた後マシンガンを直に叩き込めば勝ちだ。

5秒もあれば余裕で追いつく、間違いない。

リョウは加速し一気に近づいた。

フィリアはまだ気づいていない。

マシンガンを背中に押し付ける。

「悪いなフィリアー！」

そう言いながら撃ち始める。

直撃した。

しかし当たったのは初撃のみだった。

なんと一発あたってたんフィリアの機体は弾の進む方向へ加速していったのだ。

一瞬、弾よりも早くなった後フィリアは弾の軌道から外れ二撃目を許さない。

「そういう戦略ですか。やはりダンパーつけておいて正解でした」

「ダンパー!? あんな使いにくいものを!？」

「リヨウさんだつてアクセルつけてたじゃないですか」

形勢逆転だった。

リヨウは武器残りマシンガン少しと使っていないのが一つに対し、フィリアは使っていない武器二つだ。

1年生の戦いでは持ち込む武器が基本勝敗をわけるので。

どうするか考えているとフィリアが攻めてきた。

正直分からない武器が二つもあるフィリアに接近されるのは危険かと思つたがあえて攻め込む。

リヨウは力勝負に出た。

近づいてきたフィリアに右ストレートを入れようとする。

フィリアはかわし、回し蹴りをしてきた。

かわせないと判断し、左手でガードする。

既に地面まで降りていて後がなかった。

右ストレートを外した右手で左手でガードしている足を掴む。

そのまま背負い投げを地面に向かってする。

その後足を掴みつつマシンガンを使う予定だった。

しかし背負い投げをしたのに目の前にフィリアが倒れてこない。

しかし足を握っている感触はある。

そして妙に軽いことに気づく。

(マジかよ!?)

何が起きたのか理解し手に握られている足を投げようとしたが遅かった。

フィリアのドールの足のパーツが爆発する。

「くそっ!」

フィリアは自分のドールのパーツを取り外して攻撃してきた。

足に爆弾でも仕込んでいたのだろう。

(人は見かけによらないとはまさにこのことだな)

今のリヨウはドールの両腕を失っている。

エスバリアにより、手は無傷だ。

しかしこれでは相手の機体を手で攻撃できない。

「リヨウさん!もう無理だと思えます。私の勝ちじゃダメですか!」

フィリアが砂煙で見えないリヨウに問いかける。

普通ならここであきらめるがリヨウは負けず嫌いだった。

ましてや女子にはなおのこと負けたくない。

今フィリアの声が聞こえた方向は何となく見当がついた。

マシンガンも少し残っている。

まだ使っていない武器も一つ。

リヨウは頭をフルに回転させ始める。

そこで一つ作戦を思いついた。

しかし

(これは可能なのか？ 確かマーシヤは出来ていた。でも俺は出来るのか？)

悩んだが

(いや、これしか方法はない。フィリアを出し抜くためにはフィリアが思いもしないようなことをしなければいけない。なら選択肢はこれしかない！)

リヨウは賭けに出た。

ミリーナ現れる

リヨウは砂煙の中、準備していた。

この状況からフィリアに勝つために。

(よし、準備はできた。あとは俺の才能次第だな)

一瞬で勝負を決めなければ勝ち目はない。

フィリアは降参の返事が来ないので待っていた。

(腕は飛ばした。最低でも一本。うまくいってれば二本とも木端微塵になっているはず。それでもあきらめないなんて、リヨウさんはすごいですね)

砂煙が晴れたら叩く。

そう決めて待っているとリヨウが砂煙の中から一直線に向かって来た。

さつきしゃべったのだからか、と少し悔やむがたいした問題ではない。

腕を失ったドールなんて敵ではないのだ。

しかし、リヨウは足ではなく手をこちらへ向けている。

(なんで手を？マシンガン？でも照準が定まらないはず。あるいは最後の武器に何か

?)

回避行動がすぐとれるよう半歩下がりながら手で殴る。

ところがリヨウはガードすることなく接近してきた。

予想は出来ていたので足からの攻撃を遮るため足を蹴り飛ばす。

しかしリヨウはこれも無視した。

(！:なんで!?確かにこの程度では壊れないけど)

するとリヨウは手をファイリアの前に掲げた。

「フラッシュユー！」

目の前が光に包まれた。

「うそ?!リヨウがフラッシュユ使えるの!?!」

マーシャは驚いていた。

魔力があることはともかく、フラッシュユを知っていたことに驚いた。

ライトこそ見せたことはあるがフラッシュユは話したことはない。

それに練習だって必要だ。

名前を聞いたくらいでできるわけではない。

(リヨウ、あなたはいつたい…?)

「嘘でしょ!?!」

フィリアは動揺していた。

視界が奪われたも驚きだが魔法を使ってきたことに驚いた。

(フラツシユ。確かライト系のランク2に位置する魔法。ランク1ならまだしも2を使ってくるなんて!)

急いで音のみで状況を確認する。

が、そんなの訓練したわけでもない人にできるわけがない。

止まって音に集中しようとしたのが仇となった。

背中で音がする。

しかしそれはロボットが動くような音ではなく、ピツピツという電子音だった。

背中に何が仕掛けられたか理解する。

そしてそれは仕掛けられたが最後、回避できないものだということ。

(シークラップ。使用するのに3秒という時間を必要とする爆弾。でも着けられたが最後絶対にはずれない。なんでそんな人気のないものを持つてるんですか！)

心の中でそう叫ぶと同時に背中の爆弾が爆発する。

「きゃあー！」

核までは壊れなかったものの丸見えになってしまった。

マシンガン一発でも当たれば試合終了だ。

(視界がもとに戻らない！でもマシンガンは使えないはず)

かろうじて見えるが視界はぼやけている。

背中のように向き直すと向かってくる影があつた。

「早とちりしすぎですよ、リョウさん！」

フィリアは最後の武器を取り出す。

相手の動きを一時的に封じるイーストツパーだ。

ネットランチャーのような感じである。

範囲も広く、当たるだろうし、腕を失ったりリョウが抜け出すのは困難だ。

イーストツパーは当たった。影が落ちていく。

(あとは視界がもとに戻るまで待てば私の勝ち)

勝利を確信した。

しかし、背中を押された感じがあった。

後ろを見ると影がある。

「えっ?」

「照準が定まらなくても、対象に押し付ければ当たる」

何が起こったかフィリアには理解できなかった。

次の瞬間、銃声がしてフィリアは落ちていった。

「いやー、楽しませてもらったわ。ありがとうフィリア」

「俺には何もなしか」

「そりゃあ、あんな無慈悲に攻撃しちやね」

「ああしないと負けてたんだよ、でもフィリア大丈夫?」

フィリアは少し離れたところでドールの調整をしている。

「あつ、はい、私は。リョウさんこそドールの状態はどうですか?」

「俺のは、2日休ませれば元に戻るよ」

「まあ、体のパーツ3つも壊しちゃそうなるわよ」

リヨウは両腕と左足のパーツを切り離していた。

リヨウは視界が回復していないフィリアに左足を切り離すという方法で騙したのだ。フィリアは引つ掛かり後ろに気が回っていなかったのだ。

結果勝つことができたがパーツを壊してしまった。

一度切り離れたパーツは、ドールを休ませるだつたり修理しないとただの部品になつてしまう。

しかし木端微塵になった両腕は一から作らないといけないので時間がかかるのだ。

「でもフィリア、あなたも核を壊されたんでしょ?」

「少し穴が開いただけだから足と合わせて18時間だそうです」

核は人間の心臓や脳と同じくらい重要なので修理には時間がかかる。

「しかし、さつきのはお前らしくない戦い方だつたな、リヨウ」

「相手が戦略家なんだ。こつちも考えなくちゃ勝ち目はないだろう」

今話しかけてきたのはレックス・ビルジエンタ。

このクラスの魔科祭の主将、つまりこのクラス一強いドール使いだ。

「俺だつたら変わらないけどな」

「じゃあ負けることになるよ」

「相性の問題だつてあるさ。それにどんな小細工も力でねじ伏せれる自信もあるしな」
何を言つても意味ないようだ。

チャイムの音が聞こえた。

「楽しませてもらったわ、ファイリア、リヨウ。下校時刻だしもう寮に戻りましょう」

「そうだな。疲れたしさつきと帰るか」

「それじゃ、また明日ね」

「きよ、今日はありがとうございました」

女子が帰るとレックスと2人になる。

帰る準備を済ませ転移装置へ向かう。

「なありヨウ」

「なんだ？」

「お前どつちがタイプだ？」

「はあ？何言つてんだお前？」

馬鹿みたいな会話をしながら歩く。

地球にいた時のように。

「早く行こうよりヨウ！」

魔科祭当日。クロはハイテンションだった。

始めてピクニックに行く小学生のように。

「そんな急がなくてもいいだろ。今日俺が出るのは午後からだぞ？」

「午後からはリヨウの試合を見るんだから。午前中に出店回らないと」

「クロは出店回つてもいいんだよ？」

「でも友達が出てるんだよ？ 応援するべきでしょ！」

なんていい子なんだ。

この年になっても純粹な人、日本じゃ見たことないよ。

「そうか、ありがとな、クロ」

「どういたしまして」

満面の笑みを見せる。

考えてみればクロは暗い顔を見せたことがなかった。


~~~~~

「〜で、最後は俺だ。何か質問はあるか？」

誰も何も言わない。

今リヨウは試合会場にある控室にいる。

一回戦目が始まるうとしていた。

相手はF組だった。

それを聞いたとき、なんで英語を知らないのに、しかもSバリアをエスバリアって書くのにクラスやコースでは英語が使われるのだろう？と疑問に思ったリヨウだった。

準備しながらふとそれ思い出したのでフィリアに訊いたところ

「リヨウ君は余裕があるね、私はそれどころじゃないよ。緊張しまくりで…」

答えはかえってこなかった。

「そろそろ行くぞ」

どうでもいい疑問を考えながら試合会場に向かった。

実際、一回戦目は余裕で勝ってしまった。

本来ならば明日やるはずだった二回戦目も今日やってしまった。

それほどに時間が余ってしまったのだ。

明日は完璧に空いてしまった。

クロにそれを話すと、とても喜んでくれた。

「明日は一緒にずっと回ろうね」

と言っていた。

本当にこんな兄弟がほしいなと思った。

しかし、今日は他の友達と回る予定があるようだ。

出店の所は1年生から6年生まで全員集まるので人の数がすごいことになっている。

知り合いはおそらくそこにいるだろうと思いきや暇だと考えていると

「リヨウ君は出店に行かないのかい？」

声をかけられた。

マクアドル先生だ。

「このタイミングでできますか」

「今までは面倒くさかったんでね。それに今ならお酒もあるし」

袋を見せてきた。

「それよりどうだい？一杯付き合ってくれないかい？」

「質問に答えてくれるなら」

「交渉成立だ。いい場所を案内するよ」

~~~~~

リヨウは学校の屋上に案内された。

教師でなければ入れない場所なので人はいなかった。

教師でもあまり来たくないのだろうか。

「いい場所だろ？ 静かで。花火もどこに打ちあがっても見えるし」

「ここでは祭りのときに使う花火の位置が毎回変わるらしい。

「他に人はいないんですか？」

「残念ながらね。ここがいいところと知っている教師達は今日はお仕事なんだ」

「一杯付き合うといいましたけどまだ未成年ですよ」

「ちゃんとお茶もあるよ。これでも教育者なんだからお酒は勧めないさ」

「そう言うとお茶をコップに注いで渡してきた。

受け取ると今度はお酒を注いで飲み始めた。

「やっぱいいねえ。あとは花火が早く上がってくれればいいんだけどねえ……」

「質問いいですか？」

「構わないよ」

「他にいる地球人について教えてください」

「他に……ねえ。……まずこの学校にはいないよ」

「それはなんとなく分かってました」

「生きているのはおそらく2人だ。どこにいるかは分からないけどねえ」

「連絡できないんですか？」

「連絡先を交換するほど仲良くなれたわけじゃないしねえ。それに…」

マクアドルが言葉に詰まっている。

言いにくいことでもあるのかと思っていると

「殺されかけたもんね」

突然女の子の声が聞こえた。

振り返ってみると5、6歳前後の女の子がいた。

「そいでしょ？」と言いながらニッコリした。

なんでこんな女の子が？と思っていると

「ミリーナ…」

マクアドルが呟く。

「ミリーナ!? 君が?」

「そうだよ。よろしくね、雨宮涼さん♪」

髪はストレートの金髪。

膝のあたりまで長い髪をしていた。

水色のワンピースを着ている。

でも顔は整っているがアジア系なので少し違和感がある。

「単刀直入に訊くよ。君が俺をどこへ?」

「そうだよ」

あつさり答えた。

「なんで俺をここへ？」

「一言いえば直観かな」

「直観？」

「あなたならこの世界を救ってくれると思ったの」

「世界？」

「ごめんなさい、世界じゃスケールが大きすぎるね。正確にはこの国をなの」

「…どういう意味？」

「これから10年以内に戦争が始まるの」

残念そうに、寂しそうな顔をして言った。

「はっ？」

「他の国が攻めてくるの。このままじゃこの国はなくなってしまうの」

「いやいやいやい…」

「私にはね、未来を予測する力があるの。天気予報と似たようなもんなの」

「話についていけないんだけど」

「それで涼を連れてきたの」

「いや、答えになつてねえよ！なんで俺なんだよ!？」

「あなたならこの国を救える可能性があるからなの。そう直感が教えてくれたの」

「直観じゃん！その予報とやらじゃないの!？」

「予報はあくまで予報。外れることもあるの。それに私の予報はこの世界の人間しか対象にできないの」

「…俺を連れてきた理由はもういい。さつさと帰らせてくれ」

「嫌だ」

そっぽを向いてしまった。

「あなたはこの戦争に勝つために必要な人材なの。返すわけにはいかない」

「直観で連れてきて必要な人材!?!笑わせるなよ!」

感情が表についつい出てしまう。

するとミリーナが今にも泣きそうな顔になった。

少し言い過ぎたようだ。

マクアドルの後ろに隠れてしまった。

「まあまあ涼君、見ての通りこの子は子供だ。うまく伝えられないことがあるのも大目に見てやりなよ」

「あなたは！あなたはここに突然飛ばされてなんとも思わないんですか!?!」

「はじめはね、私も嫌だったよ。でも時間がたつにつれてこの世界に慣れた」
「それでいいんですか」

「便利だしね。悪いところじゃないし今は文句ないよ」

リヨウにはマクアドルの言っている意味が理解できなかった。

「あの…、」

ミリーナが遠慮がちに出てきていった。

「私、もう帰らないといけないの」

「は？」

「話はまた今度にしてくれる？」

「ふざけるな」

「ゴメンなさい。もう限界なの」

リヨウが話しているのも気にせず、そう言うとな彼女は消えてしまった。

一瞬の出来事で何が起きたかわからなかったが少しするとマクアドルが

「…、お目にかかっちゃったねえ、瞬間移動」

そう呟いた。

分らないことが増えた涼は茫然としていた。

いつの間にか上がり始めていた花火の音だけが屋上に広がっていた。

魔科祭の決勝戦 1

「元氣ないんじゃない、リヨウ？」

「そんなことないよ。早くお好み焼き食べに行こうぜ」

「うん！」

今リヨウはクロと一緒に出店を回っている。

クロの質問に返事はするし、楽しんでもいるが昨日のことが頭から離れない。

|||||

くミリーナがいなくなった後く

「おつ、花火が上がってるじゃあないか。桜もいいがここには桜が存在しないからねえ
…」

「マクアドル先生」

「なんだい？」

「ミリーナが言っていた戦争、何か思い当たることはありませんか？」

「…少しね」

マクアドルは花火のほうを向いた。

しかしその目はもつと遠いところを見ているように見えた。

「さつき言っていた2人が関係あるんですか？」

「涼君は気づくのが早いね」

「殺されかけたって…」

「昔の話だよ。私自身は何とも思っていない。…その二人はね、今ミューズデル帝国にいるんだ」

「帝国？」

「この国じゃないよ。流石に外の現状まではマーシャ君から教わっていないかい？」

「この国だけでもかなり大変だったので」

「…ミューズデル帝国っていうのはね、私たちが本当の後継者だって言い張った人たちから作られた国なんだ。

700年前までもともとミューズデルは一つだったんだ。

いい統率者がまとめていたんだろうねえ、内戦なんてまずなかった。

でもどんなに有能な人にも寿命はある。

その人は死んでしまった」

「その後兄弟でその座を奪い合ったと？」

「みんなそう考えるんだけどね、違うんだよ。その王には後継ぎがいなかったんだ。

つまり部下で争いあったんだね。2つの派閥に分かれたといわれている。

そして勝ったほうがここに残り、負けたほうはこの大陸から去った。

しかし大陸を去ったほうはあきらめきれなかったんだらうね。

新しく作った国の名前にミューズデルって入れたんだ。

そうしてできたのがミューズデル帝国だよ」

「…ずいぶん執念深い奴だったんですね」

「かなり陰険だったっていわれているよ」

「でもその話とさつき言った2人にいったいどんな関係が？」

「その時追い出されたのが2人のうちの1人なんだ」

|||||

（つたく、いったいどういう意味なんだ？700年前？なら普通死んでるだろ。それなのに今他に生きているうちの1人がその時から生きていた？どうなってるんだよ…）

昨日のことを思い出しながら出店を見て回る。

昨日は話をそこで中断されてしまった。

そこまで話したとたん「なんか疲れたなあ…、今日はもうここまでにするか」と言つて帰つてしまったのだ。

リヨウも食い下がつたが聞く耳持たずだった。

結局また疑問が増えてしまったのだった。

「やっぱりなんか悩んでない?」

「えつ、そんなことないよ」

クロに感づかれてしまった。

「本当?」

「本当だよ。何でもないから」

「…そう? 悩みがあるなら相談してね。友達なんだから」

「ありがとう、クロ」

ちようど話を終えると目の前で人々がざわついているのに気づいた。

「なんかあつたのかな?」

と思ひながら進んでいると目の前を一つの集団(5人)が歩いていく。

みんな道を空けるようにして、珍しいものでも見るような目で見ている。

「クロ、あれって何かわかる?」

「リョウウ知らないの？あれは今年の魔法側の代表だよ。リョウウたちが明日勝てば戦う相手だよ」

「あれが…」

全員制服を着ていてなんだかキチツとしている。

女子率の方が高いようだ。

どんな力があるかは、全然想像もつかないが戦ってみたいと思った。

(戦うためには勝つしかない。明日頑張ろう)

そう改めて心に誓った。

「さあ、盛り上がっています！決勝戦、1―1と一進一退の状況です！どうなっていくのでしょうか!？」

控室からも聞こえる司会者の声がフィリアを緊張させていた。

3番手はフィリアになっている。

「フィリア、そんな緊張しなくても大丈夫だよ。いつも通り戦えれば余裕の敵なんだか

ら」

「そういいますけど、やっぱり心配です…」

「それに負けてもレックスと俺がいるから。ねっ」

「が、頑張つてはみます…」

突然控室にブザー音が鳴り響く。

フィリアの出番の合図だ。

「い、行つてきます…」

緊張しながら戦場に向かった。

道のりはそう遠くない。

転移装置なんてないが歩けば1分足らず。

すぐに会場に着き、歓声が聞こえる。

「準備はいいですか？」

フィリアの試合が始まろうとしていた。

（私は負けるわけにはいかない。あとの二人には背負わしたりしません）

「それでは構えて…ファイト！」

フィリアは開始と同時に攻め込んだ。

ドールでの戦いははじめ距離を空けるのがセオリーになっている。

相手はセオリー通りに動くと思っていたらしく一瞬、動揺して動きが鈍る。

それを見逃すフィリアではなく一つ目の武器であるショットガンを取り出す。

右腕に損傷を与えるつもりで撃った。

ドールといっても機械なので下手に当たればそのパーツが機能しなくなることもある。

それを狙い右腕を撃った。

見事に命中し相手は鈍い声で悲鳴を上げた後、すぐに臨戦態勢に戻る。

(右腕は動いている…。やっぱりそううまくいきませんか)

分かり切っていたことなのでフィリアもすぐに構えた。

相手は力勝負をするつもりらしく損傷した右腕に一回り大きな右腕を装備した。

(せっかく少し壊したのに…。でもあれで多少はスピードが落ちる)

すると相手はなんと両足にも一回り大きな装備を付ける。

足につける装備は基本すべての機能向上につながる。

(足にも2つ…。あれじゃ私より早いですね…)

フィリアは戦略家だ。

たいていのことは戦略で力の関係を逆転させるが大きな力であればあるほどそれは難しくなる。

(正直分が悪いですね…)

相手が向かってきた。

男子が相手というだけでも力勝負は辛いものがあるのに、強化されては正面突破では勝ち目がない。

とりあえずもう一度ショットガンを撃つてみる。

ショットガンの本質は範囲の広さにある。

普通の弾はただ一直線にいくだけだが、ショットガンは弾が一直線にいくだけではなく周りにも攻撃できるのだ。まあ、周りのほうが勿論威力は落ちるが。

直進した弾は避けられた。

だが周りのは避けきれない。

腕で顔をガードする。

いくらエスバリアがあるからといっても顔に当たれば痛いのだ。

しかし強化した腕を使ったので少しヒビが入るだけ。

(これじゃあ何発ぶち込んだらいいかわからない…！)

ショットガンをしまい、相手の攻撃を避ける準備をする。

まず左手が来た。

この後にもっと強い攻撃が来るのは予想できたので次に意識を集中させる。

予想通り右ストレートが来たので後ろに下がり距離を取る。

(やっぱりこれを持ってきてきて正解でした)

距離を取りながら電磁砲を取り出す。

電磁砲は名前の通りエネルギーを溜めてそれを打ち出す銃である。

形はスナイパーのように長く、銃より機械的に見える。

この武器のメリットは弾に制限がないことである。

最大まで溜めれば威力はショットガンなんか比ではない。

しかしデメリットもある。

エネルギーを溜めなければ撃つことができないのだ。

溜めるのだからある程度時間がかかる。

(早くたまってくださいよ……)

念じながらチャージを始める。

相手も気づきすぐに距離を詰めてきた。

まだ撃つわけにはいかないのでフィリアは離れ始める。

しかし強化した相手ではすぐに追いつかれてしまう。

足を掴み足のパーツを潰しにかかる。

いつもなら足を切り離すが、今そうすればさらにスピードが落ちて危ない。

ショットガンを取り出し、相手に向かってがむしやらに撃ち始める。

しかし相手は我慢強いらしくなかなか放さない。

まずい、と思ったフィリアは完全には溜まりきっていない電磁砲を使用する。

(30%弱…、相手を引き離すには十分ですね)

相手に向かって構え、撃った。

「…ぐー」

胸のパーツに当たった。

結構痛かったらしく後ろに下がる。

よく見れば胸のパーツに大きなヒビが入っている。

(30%であればなら100%あれば間違いなく気絶まで追い込めますね。でもただ

チャージするだけでは時間がかかりすぎますし)

考えながらチャージを始める。

相手も戻ってくる。

するとフィリアは思いついたことがあるらしく、背中をいじくり始める。

構わず相手はフィリアに近づき蹴ってきた。

フィリアはまだ思いついたことをしているらしく、防御に移れない。

回避しようとしたが間に合わず左足に直撃する。

しかめた顔をしながらも逃げる。

相手がそれを追いかけてよとする。

フィリアはショットガンを取り出し近づけさせまいと撃ちまくる。

「あれは勝てないな。リヨウ、絶対勝てよ」

レックスとリヨウは圧倒的に不利なフィリアの状況を見ていた。

「まだわからないよ、フィリアは戦略家なんだから」

「でもあいつらしくなくショットガンをがむしやりに撃ってるじゃねえか。電磁砲がたまのを待つてるのが見え見えだぜ」

「…でも信じるよ」

「でも、あれを最大まで溜めるには10分かかる。あの力の差じゃその前に負けるぜ」

「大丈夫だよ。たぶん…」

(よし、これでいける！)

フィリアは勝機を見出していた。

足のパーツを2つ失った状態で勝機を見出していた。

相手は相手でフィリアを虫の息だと思っている。

攻撃が単調になっていた。

フィリアはそれを待っていた。

相手がまたただのパンチをしてくる。

するとフィリアは踏み込み手をかざした。

(リョウに感謝しなくちゃね)

「フラッシュ！」

一瞬光が放たれる。

リョウが放ったのよりは小さかったが十分だった。

相手は驚き、目が見えなくなったので腕を振り回し始めた。

フィリアは少し離れゆっくりeストツパーを取り出し構える。

そして混乱している相手に向かってeストツパーを撃った。

何が起きたかわからなく、錯乱している人に網がかぶさる。

なおのこと暴れ網は絡まる。

フィリアは獲物のハンティングをするかのように楽しそうに電磁砲をかまえた。

「私の勝ちです」

~~~~~

「いや、フィリア、君はやっぱりすごいよ！」

「そ、そんなことないですよ。リョウさんのおかげで勝てたようなもんです」

今フィリアは救護室にいる。

「しかし電磁砲のエネルギーを溜めるためにsバリアのエネルギーを使うなんて正気じゃないよ」

「でも勝つことができました」

「でもSバリアが足りなくて体中が傷だらけだ」

Sバリアのエネルギーを電磁砲のエネルギーに変換させたのだ。

しかし10↓10に変換できるわけではなく、10↓3くらいにしかならないのでSバリアのエネルギーを使い果たしたのだ。

おかげで100%の余波でボロボロになってしまった。

「説教したいところだけど、次俺の番だから行ってくるよ」

「せっかく勝ったんだから勝ってくださいよ」

「負けても勝ったっていうよ」

「ここからテレビで見えます」

「…なら負けられないな」

リヨウは席を立ちあがり戦場へ向かった。

## 魔科祭の決勝戦2

「みなさん！第四回戦目が始まろうとしています！現状は2—1でB組が有利な状況です！このまま決着してしまうのか!？」

今リヨウは決戦の場で相手と向かい合い、審判の合図を待っている。

周りの観客は盛り上がりを見せていた。

「リヨウって言ったか?」

すると相手が話しかけてきた。

「そうだけど」

「…さっきの試合、お前のチームは魔法を使ったな」

「それがなんだ?」

「今は科学同士の試合だ。なんで魔法なんて使った?」

「ルール上何の問題もない。勝つために使っただけだが?」

「…恥はないのか?」

「はあ?」

「私たちは科学側の生徒として代表を目指している。それなのに魔法の力を使って恥ず

かしくはないのかと訊いている」

この学校には日常的に顔を合わせることはないので忘れられがちだが科学と魔法が存在する。

設備にさほど差はないが、授業内容はもちろん全然違う。

そしてこの2つの勢力はどことなく仲が悪いのだ。

理由は科学側にあるとリヨウは考えている。

(ここにもいるのか……。大方、才能がないから入れなかつた類なんだろうなあ)

魔術は才能がなければ学ぶことはできない。

それ故魔法ができるのほうの有能と思われる。

大半の人は魔法に入りたがり才能がないと言われ、科学に移動する。

そういう人が魔法ができる人を妬んでいるのだ。

「魔法を妬んだって何も変わらない。あんた可哀そうだな」

「なっ……!」

凶星だつたらしく顔が怒りに満ちていく。

「違うのか?」

「違う! 科学は人を豊かにする! だが魔法は人に良くない力を与える! それだけだ!」

(どこの世界に行っても意味分からねえやつはいるんだな……)



「それでは始めたいと思います!!所定の位置についてください!」

「潰してやる…」

そう言いながら相手は移動する。

「それでは始めます。…ファイト!」

試合が始まった。

---

「マーシャさん、試合始まりましたよ」

「えっ、ちよつと待つてよ。ファイリア、止めといて!」

「録画じゃないんだから無理ですよ…」

今ファイリアとマーシャは救護室で試合をテレビで観戦している。

「リヨウさん、勝てますかね?」

「あんたがボロボロになってまで勝利をもぎ取ったんだもの。勝つに決まってるわ」

「そうだといいんですけど…」

「あんたと同じチームなんだから信頼してやんなさいよ」

「…そうですね。信じて待ちます」

そう言うときフィリアはニヤニヤしながらマーシヤを見る。

「なに、ニヤニヤしてんのよ」

「いや、やけにリヨウさんのこと信頼してるなあ、と思ひまして」

「何が言いたいのよ」

「単刀直入に言えばリヨウさんのこと好きですよね？」

「ないわね」

「…、いじりようのないほど即答ですね。本当ですか？」

「今は信頼できる友達、親友っていう立ち位置にいるわ」

「今は？」

「そうね。もしかしたら好きになることもなきにしもあらずだから」

リヨウの試合中にも関わらず女子たちの恋バナは花を咲かせる。

---

「さっさと壊れろよー！」

「そつちこそー！」

リヨウは今試合中だ。

今回の戦いは殴り合いになっている。

どちらとも距離を置くことなく、近接攻撃を繰り返している。

どちらとも2つの武器は手の強化に回し残り1つを隠している状態だ。

「ふんー！」

「ぐっー！」

リヨウの頭に強化されたパンチが直撃してしまった。

リヨウは脳震盪に陥る。

ここがチャンスと言わんばかりに相手は殴り始める。

リヨウは防御もまともに行えず、Sバリアのエネルギーがどんどん減っていく。

この勝負では、Sバリアのエネルギーが空になっても負けである。

Sバリアが張られていない状態でドールを着た相手から攻撃を受ければ簡単に肉塊になるからである。

リヨウは少し治ってきた頭で考え、後退した。

上も下も分からなかったがとりあえず地面へ突っ込むという最悪の事態は防げた。

ようやく感覚がもとに戻ってくる。

「そんなに殴られて…、せつかく強化した腕もボロボロだぜ？あきらめたらどうだ」

「あいにく、負けず嫌いなんですね」

そうは言うが確かに腕はぼろぼろだ。

まだ機能はしているものあとのくらい持つか分かったもんじやない。

（魔法使うべきか。でもそれ使わなくても勝てるんだぜって言いたかったんだけどなあ）

しかし、フィリアも自分の体をボロボロにしてまで勝ったので負けるわけにはいかない。

勝つために魔法を使うことにした。

改めて接近する。

「フラツシュなら俺には効かねえぞ！」

「そんな分かりきったことしねえよ」

「ならお前の負けだな！」

そう、フラツシュは使わない。

手を前に掲げると唱えた。

「ファイヤー！」

炎の弾が相手に向かって放たれる。

これは予想していなかったのか、反応が遅れ直線に向かってきてるのに後ろに下がる。

そして直撃した。

顔には当たらなかったものの強化した腕を2つとも犠牲にした。

「てめえ……！」

「フラツシユは、使つてないぜ。で、どうする？ただのドールじゃあ、俺の強化した腕があるドールには勝てないぜ？」

「俺が負けるわけねえだろ。相手が魔法を使う弱虫野郎ならなおさらだ！」

すると相手は突然加速してリヨウに近づいた。

突然のことで反応できない。

一般人なら。

しかし、リヨウはそれを見抜いていた。

接近を簡単に見破られ手札がなくなった相手は啞然とする。

「お前は俺と同じ近接攻撃派だ。そしてここまで勝ち残るほど強い。強い奴つてのは大抵変わったものを持つてるもんだ、と俺は思っている」

「だからって、あんなにもいともたやすく……」

「あんたと俺の一番の違いは、強い力を前にして使ったか使わなかったか。ただそれだけだ」

リヨウが構える。

相手も構えるがどこか抜けていた。

リヨウが一瞬で相手に近づいた。

相手はなにもすることができなかった。

「よくやった！さすがだな」

「脳震盪からの大逆転、すごかったですね」

「負けるわけにはいかなかったからね」

リヨウは今救護室にいる。

リヨウが勝つことができたのでB組が科学側の代表に選抜された。

本当は近くの出店でクラス全員で祝う予定だったが、フィリアを抜いて祝うわけにはいかない。ということで救護室で祝うことになったのだ。

「でもお前が負けても俺がいたんだぜ？」

「それは頭にあつたけど、フィリアがボロボロになってまで勝つたんだぜ？ここで負けたらなんかいやじゃん」

「代表になれればいいじゃない。やっぱり男子は分からないわ」

「マーシャ、前も言ったがそれは男子だけじゃないぞ。負けず嫌いな女子だっているだろ。フィリアみたいなの」

「わ、私は負けず嫌いなんかじゃありませんよ」

おずおずとはあるがフィリアが反論する。

「いや、後があるのにあそこまでやるのは負けず嫌いしかないよ」

「いや、…気分ですよ」

「どんな気分よ…」

「でも一日空いていてほんとよかったな」

「そうね、じやなきやフィリアは試合参加難しかったもんね」

「ドールが壊れようと、体がボロボロになってようと参加しますよ」

「やっぱり負けず嫌いね」

「だな」

自分のいた世界とは違うのにそれと同じくらい楽しかった。

~~~~~

夜九時、お祝いも終わり帰る途中だ。

気分よく帰つてる最中

「こんばんは」

声をかけられた。

ミリーナがいた。

「飛ばされてからしばらくは全然現れなかったのに、ここにきてラツシユか？」

「こつちもいろいろあるの。それにしても怒らないんだね？」

「少し頭冷やしたからな。それに……」

「この世界のこと少し気に入つた？」

ニツコリしながらリヨウの心を読んでいた。

「おまえ、子供だよな？」

「ミリーナは永遠に子供だよ♪」

「…永遠の〇歳はイタイと、とられることがあるぞ?」

「…夢がないなあ」

「で、何の用だ?」

「そつちは私に質問あるんじゃないの?」

「答えてくれるのか?」

「時間内なら、ある程度は」

…この子の言う時間とはいったい何なんだろうと思いつながら

「戦争についてできる限り」

「…前にも言った通り10年以内に戦争は起こるの。詳しく言うならもうすでに始まっているの」

「どういう意味だ?」

「所々で小さい戦争は起きてるの。簡単に片づけられてしまうから公表されないの」

「小さい戦争?」

「例えば…、最近ミューズデルで銀行のコンピュータがハッキングされたの」

「それ戦争って言わないんじゃない?」

「ハッキングされたのは夜、ドアが開けられても警報が鳴らなかったの。でもその時盗まれたのは現金じゃなかったの」

「銀行に入ったのに金を持ってかなかったのか？それ以上に価値があるものか？」
銀行に入ったのに金は盗らない。

リヨウにはなぜかまいちわからない。

「うん。情報なの」

「情報？」

「それも国家機密レベルなの。幸いこの国を出る前に捕まって情報流出は止められたの。こんなことが今月だけで17件起きてるの」

「…盗んでくるのはミューズデル帝国の連中ってわけか」

「うん。…今回はたまたま誰もいなかったから何にもなかったけど実際死人も出てるの。規模が小さいから死人が少なくなくて済むけど戦争になれば恐ろしい数になるのは間違いないの」

「だが、俺にはその戦争を食い止めるすべはないぞ」
そう。

正影はここに連れてこられたものの、ただの一般人。

何かしら特別な能力があるわけじゃない。

「戦争は決定事項なの。止めることはできないの。それでも死人を減らし、戦争をいい方向に進める方法はあるの」

「それが俺だと？お前の直観が言ってる？」

「…正直無理なお願いだとは分かってるの。でもあなたを帰すことはできないの。私はこの国を守りたいの。そのためなら私は何でもするの」

「お前の故郷なのか？」

「私の故郷はこの世界すべてなの」

「ならなんでこの国にこだわる？この国も人もどうなろうとお前には関係ないだろう」

「…詳しい理由は今は話せないの。ごめんなさい」

「そうか。ならいい」

「なんか今日はあまり怖くないの。なにかあったの？」

「…」

「話したくないなら必要ないの。それに私もそろそろ限界なの」

「そうか。また教えてくれ。できれば時間があるときに。こんな時間が毎回少ないと、いつすべて話し終わるかわからないからな」

「…ありがとう」

「俺としては帰してくれれば万事解決なんだがな」

「ごめんなさい。もう限界なの。そろそろ私の活動可能時間が0になってしまうの」

活動可能時間？

「気をつけてな」

「瞬間移動で帰るの。私が危ない目に合うことはないの。それじゃ、私がまた現れるまであなたも気をつけてね」

そう言うと、ミリーナは一瞬で消えてしまった。

リヨウは何事もなかったかのように帰り始める。

しかし、頭の中では考えていた。

(…まさか俺がこの世界を好きになっただけでいるとはな。

はじめは帰ることばかり考えていたが、ここにきてたつた二ヶ月でその意思が薄れ始めてる。

いいことなのか、悪いことなのか)

どちらにしてもリヨウは今を守ると決めた。

(戦争は嫌だ。死にたくはない。それに俺の力でできることなんてたいしてない。でもこれから伸びていく可能性はある。だけど、戦争かあ)

自分が何を考えても意味はないと思い、リヨウは考えるのをやめ明日に備えるため足早に帰った。

強襲

小さな戦争

「…準備はどうなってる?」

「順調です。成功する確率は100%です」

「今回の作戦は上層部に私の力を示すチャンスだ。上層部から見れば小さい作戦で内容も簡単だ。だが内容以上の成果をあげれば」

「はい、マスターの権力が100%上がります」

「期待しているぞ」

「はい」

そう言うと、男が下がっていく。

男が部屋を出ると入れ違いに違う男が入ってきた。

「ビムに任せて大丈夫なのですか?」

「成功すれば私の権力が強くなる。上層部が提示してきた課題はお前に任せるから問題はない」

「ですが、あいつが捕まってしまった場合は…」

「あいつが捕まることはない。失敗した場合はあいつに地獄行きの手紙をくれてやることになるがな」

「…分かりました」

「今回の任務はお前には簡単すぎるかもしれないがよろしく頼む」

「承知しております」

「レックス、調子はどうだ？」

「絶好調だぜ！」

「なら心配ないな」

今リョウたちは見慣れた控室にいる。

「一番手だけど頑張れよ」

「俺が一番手なんて意味分かんねえけどな」

「仕方ないですよ…。この試合だけくじ引きで順番を決めるんですから」

「なんでこの試合だけ？」

「今までこんなことはなかったそうです。ある意味2チームとも好きに順番が決められたらくじ引きと大差ありませんし…」

「まあ、どうせ俺は自分を3番手にする予定だったから必ず出てたしな。それが少し早まっただけだからどうでもいいけどな」

「なにはともあれ、主将なんだから絶対勝てよ」

「主将じゃなくても勝つぜ」

話していると放送の音が鳴る。

「[[?]]」

『試合に出場する選手の方々に連絡いたします。時間の関係で二番手の試合開始時間が一番手の開始時間と同じになりました。選手の方々は準備してください。繰り返しします。…』

「[[…]]」

こちらの2番手はフィリアだった。

フィリアが顔面蒼白になっている。

「…フィリア、大丈夫か？」

「だ、大丈夫に決まってるじゃないですか！試合が早く終わって、む、むしろ緊張しなくてすみますよ！」

明らかに声が震えていた。

「フィリア、とりあえず深呼吸だ。はい吸って…、はいて。また吸って…
とりあえず落ち着かせようとフィリアに深呼吸させろ。」

さつきよりは、マシになった…ように見える。

「にしても今回はいつもと違うところが沢山だな。なんかあつたのか？」

「そうだね。なんかおかしいような気がする」

「考えすぎだとは思いますが…、なんででしょうね？」

リヨウの頭に「戦争」の二文字が浮かんだ。

(…規模は小さいけど抗争は起きてるとミリーナは言っていた。この学校でも起こるのか?)

でもこの学校はミューズデルから繋がっている転移装置でしか来れないはず。

それとも歩きで学校まできて侵入したというのか?)

ブザーが鳴った。

試合開始の合図だ。

「じゃ、行ってくるぜ」

「が、がんばってきますー！」

「二人とも、気をつけて」

いつもなら頑張つてと言うところだが言えなかった。

どうしても規模の小さい戦争の可能性がぬぐえないからだ。

(考えすぎだ。きつと学校に事情があるのだろう。なんかサプライズのために時間を早めてるに違いない)

そう自分に言い聞かせた。

「…いったいどういうことだよ」

レックスとフィリアは哑然としていた。

理由は対戦方法が聞いていた話と違っていたからだ。

「タッグバトルってどういう意味よ!？」

「そんな話、初めて聞いたんですケド」

魔法側の代表が審判に文句を言っている。

姉妹なのか顔がよく似ている。

色白な肌をしていて長い黒髪をしている。

しかし、目の周りに目を大きく見せるため黒を塗っており、顔に3，4つピアスが入っている。

審判も少し怖がっているようだ。

「どうしてタッグバトルに…、しかも直前に変わってしまったんでしょう？」

「俺が知るかよ。さつさとあっちも審判こっちに貸してくれないもんかね」

1，2回戦目に出場する選手たちは会場に来るなり突然試合方式が変わったことを伝えられたのだ。

観客は今までシングルしかやってこなかったから見てみたいと言わんばかりに、かなり盛り上がっている。

選手としてはせっかく作戦を立ててきたのに台無しである。

レックスはどうでもいいかもしれないが、フィリアにとってはかなり問題である。

「文句を言っても方式は変わらないと思います。作戦を立てましょう」

「今から大した時間がないのに立てられるのか？」

「私は策士です。不測の事態に備えて基盤はあるんです」

作戦をレックスに伝え始める。

5分後、ようやく魔法側の代表達が文句を言うのをやめたらしく試合が始まろうとし

ていた。

「アンタたち、降参する気ない？」

「はあ？」

「私たちチヨー強いから、アンタたちなんてユウなワケ。しかもアタシ主将だよ!? 勝てるのは分かっているケド、試合メンドーなの。だから降参どうって聞いているの」

「…話になりませんね」

「アンタ、誰に向かって口きいてるか分かってるノ？」

「そうだな。話にならねえ。大体、主将ならこつちだつて俺がいるぜ」

「アンタなんか私の足元にも及ばナイし。やっぱり馬鹿わあ、一回味わなきやわかんないノネ」

「その台詞、そっくりそのままお返ししますよ」

「それでは試合を始めますので言い争いはそこまでにしてください。あとは力で語ってください」

「そうするぜ」「そうします」「そうする」

みんなまいったく同じタイミングでしゃべった。

「それでは構えてください」

全員が相手を睨む。

観客も黙り静寂に包まれる。

「…フアイト！」

その合図を同時に観客が盛り上がり選手は試合を始めた。

「おい、まだなのか？」

「すみません。あと5分ほどで始められるかと」

ある部屋の二室で、やり取りが行われている。

「なら5分後、100%できるようにしろ」

「しかし、5分で試合は終わると思いませんが…」

「俺は早く戦いたいんだよ。だから準備出来次第、作戦開始だ」

「し、しかしそれではマスターの意思とは違う方向に…」

「構わない。マスターは作戦が成功すればそれでいいのだ。早くすれば迷惑がかかると
いうわけでもない。いい知らせが早くなるだけだ」

「で、ですが失敗する可能性が大きくなるかと」

「…おまえ、そんなこと言える立場か？」

「はっ…」

「嫌なら作戦に参加しなくてもいいぜ。だが、お前の命はない」

「…」

「心配するな。俺がたかが1年どもに負けると思ってるのか？ 教員どもはうまく幽閉した。まあ、危険だったのはマクアドルだけだがな。後は、数で倒せたはずだ。ともかくこれで俺の作戦が成功する確率は100%になったわけだ。分かったか？」

「…はい。了解しました」

「なら作戦開始を急げ」

部下らしき男が去ると男は煙草を取り出し喫い始める。

今試合しているテレビを見ながら男は微笑を浮かべた。

「フィリア、どうだ!？」

「完璧に不利です!あの人たち口だけじゃありません!」

「そんなのは分かりきってる!何かいい案は浮かんだのかって訊いてるんだ!」

「正直難しいです!」

後ろから姉妹が追いかけてくる。

「さっきまでのデカい口はどこいったのカナー?」

「やっぱりチョー余裕ジャン!」

そういうと彼女たちの周りに火の玉が出現する。

そしてレックス達に向かって放たれる。

「さっきからこの繰り返しである。」

レックス達も相手が魔法を使ってくるのは分かっていたので飛び道具は持っている。

だが魔法側にだつてSバリアではないがバリアは張られている。

ただ当たつてスナイパーやマグナムなどよほど威力が高くなければ一発では戦闘不能にはならない。

しかし悠長に構えて撃つてる暇などありはしない。

それに弾には限りがある。

確かに魔法にも限りはある。

魔力が枯渇してしまえば魔法を唱えることができなただの一般人になってしまうが、一年生のうちは枯渇するほどの魔法は使えない。

圧倒的に不利なのだ。

「あつちは今までの私たちの戦い方見てますかね!?」

「あいつらが!?! 見てるわけねえだろ!」

「それなら私はあれ使います! 銃を構えてください! 相手が一人になれば勝ち目はあります!」

「だけどあの弾幕に近づくのはキケンだ」

「行きます!」

フィリアはレックスの意見を聞かずに相手に突っ込む。

「すごいよ姉貴!。 あつちから飛び込んできたんですケド!」

「飛んで火にいる夏の虫ネ!」

フィリアはシールドを展開する。

持ってきた武器の一つだ。

ある程度の攻撃は遮断できるが、あれだけの弾幕だと長くは持たない。

残りの距離が20メートルほど残っているのにシールドは破れる。

しかしフィリアは進み続ける。

弾幕を避けることができず、ドールに当たる。

「ちよ、ちよつと！それ以上にクんな！」

相手が焦っている。

(もしかして近接攻撃魔法を持っていない?)

うまくいけば2人とも倒せるかもしれない、と考えながら突っ込む。

相手も後ろに下がり始めた。

大したスピードではないので追いつくことはできるがSバリアが持つか微妙である。

フィリアはすぐに2つ目の武器を使うことを決断する。

フィリアは加速し一瞬で姉妹に追いついた。

相手は驚くが体がついていかないようだ。

余談だが始めは人気のなかったアクセルだが最近ハリヨウの真似をしようとして使

う人が増えた。

「フラッシュ！」

相手の真ん前で使うことができた。

突然の光に相手は2人とも目を覆う。

「ま、魔法!？」

「目、目がああああああ！」

目が潰された2人はがむしやらに撃ち始める。

目が潰されても弾幕がすごいことになりはしないので近くにいるフィリアは防ぎようがない。

しかし、フィリアは防ぐつもりはなかった。

マシンガンをはたき中、構える。

(こんなことならショットガンにするべきでしたね)

レックスもスナイパーを構えていつでも撃てる準備は出来ているようだ。

引き金を引こうとした瞬間、思いがけないことが起こった。

「な、メンなああああああああああー!」

ビリビリ何かが響いてくる。

まずいような気がして引き金を引いた。

しかし

「え?」

レックスのスナイパーの弾はおろか、フィリアのマシンガンの弾さえも一発もどちらにも、とどかなかつた。

的は捉えていた、しかし当たらなかつたのだ。

唾然としていると体が熱くなりつつなっていることに気づき急いで下がる。

「てめえら、アタシたちの目え潰してただで済むと思つてんじやないでしょねえ…」
「二度とそのポンコツに乗れない体にしてやんよ！」

姉妹は再び弾幕を張り始める。

しかし、数も威力もさっきの比ではなかった。

(さっきのは本気じゃなかったっていうんですか!?)

「アタシらU・クリティウスにケンカ売ったこと、後悔させてやんよ！」

「業火の炎に焼かれながら地獄で泣きわめきやがれ！」

「あいつら！」

「ネーム持ちですか!？」

フィリア達の周りに一年生では考えられないような炎が現れる。

「フィリア！」

「…手詰まりです」

次の瞬間フィリアたちは炎に包まれ地面に落ちていった。

試合結果は目に見えていたが、

「てめえら！その程度で終わりとか思うなよ！」

「地獄で泣きわめけつて言つただらうが！」

再び追撃をするため、炎を出現させる。

しかし、その炎はフィリアたちに投げられることはなかった。

フィリアたちに投げようとした瞬間、彼女たちのいる場所と会場のあらゆるところが爆発したからだ。

クリティウス達は落ちていき、代わりに見知らぬ男が立っていた。

惨劇の会場

朦朧とする意識の中フィリアとレックスは周りを確認している。

何となく悲鳴が聞こえやばい状況なのは分かるが体がいうことを聞かない。

「爆発……？ いったい何が……」

そこまで考えたところでフィリアの意識はきれてしまった。

「作戦大成功だな。いい状況だ」

試合会場にただ一人浮かんでいる男、ビムは笑みを浮かべていた。

今会場はパニックに陥っている。

爆発と同時に謎の集団も侵入し、虐殺を始めている。

本来ならばAコース以外の人にはドールが渡されていて、大半の人が戦えるがそこま
で頭が回らず8割がたがドールも装備せず、逃げ惑っている。

「ただ見ているのも暇だな……。俺もやってくるか」

ビムは観客のほうに向かって歩き始めた。

リヨウは今会場に向かって走っている。

「何なんだよ！さっきまでただ試合をしていただけだぞ!?ファイリアたちを助けてくれたのは感謝するが何なんだ！」

控室でテレビで試合を観戦していたリヨウだが、突然画面が悲惨なものに変わり会場に向かったのだ。

会場についたリヨウの目に入ったのは血だった。

会場が血で埋め尽くされている。

大半の人は逃げたようだがいまだに走って逃げている人もいる。

（クロは？リリアは？マーシャは？）

会場を見渡すが見つかるはずもなく。

目の前にボロボロのレックス達を見つけた。

「レックス！ファイリア！」

駆け寄るが、フィリアには意識がなかった。

「リヨウか…。ワリイな、負けちまって…」

「今はそんなのどうでもいい！何があつた!？」

「全然わからねえ。突然爆発して…」

状況が全然確認できていないようで困惑した顔をしている。

「ともかくここから逃げろ！立てるか!？」

「なんとかな…。フィリアも運ぶぜ」

「無茶いうな！さっきの炎は相当なものだった。お前はもうボロボロだろ。俺が運ぶ

！」

フィリアをおんぶしようとしていると

「リヨウ！後ろだ！」

後ろに敵と思われる真黒な仮面をかぶったドールを装備した奴が突っ込んできた。

「くそっ！」

急いでフィリアをおろし、相手にカウンターを加える。

そのまま伸びて相手は動かなくなった。が

「これはやべえんじゃねえか？」

こちらに気づいた敵が次々と向かってくるのが分かる。

これではフィリアを運べない。

「レックス！お前だけでも逃げろ！俺が退路を開く！」

「馬鹿言うな。お前がやられちまうし、フィリアも危険だ！俺も残る！」

「お前はボロボロだろ。いいから逃げろ！」

「ゴメンだね！」

話しているうちに相手がすぐそこまで来てしまった。

見たところ全部一段階目のドールだが数が多く、会場全体だけでも30機ほどいる。

とても勝ち目がある試合には見えない。

「くそっ！」

一気に5機が迫ってくる。

「(まだ死ぬわけには……！)」

負けを覚悟で突っ込もうとしたとき目の前を炎が走った。

「なっ!!(この炎は!)」

クリティウス姉妹のほうを見ると2人とも立ち上がっていた。

しかし、1人増えている。

「マジウザいんですケド！」

「あともうちよつとだったのに空気読めないワケ？」

「やりすぎだよ…。もう少し抑えなよ」

「アタシたちに指図する気？」

「弱いくせに！」

「命の恩人にどんな口きいてるんだい？」

しゃべりながらリヨウのほうに歩いてきた。

「大丈夫でしたか？」

「俺は大丈夫だ。ただフィリアがまだ意識を取り戻さない」

「雑魚はこつちで対処します。姉妹は魔力ほとんど残ってませんが彼にも手伝ってもらえば何とかなるでしょ」

「レックスに？無茶だ！ドールは強化すれば機能するが、体がボロボロだ」

「僕の名前はケイト・N・フェニーチェっています。僕の得意とする魔法は回復魔法です」

白い髪の毛に結構強いパーマが入っている。170cm前後の男子だ。

「回復？なら先にフィリアを」

「すみません。回復させることができても意識を戻らせることはできないんです。いつもならフィリアさんを優先させるんですけど今は戦力がほしいんです」

「でも…」

「命に別条はないよう見えますから大丈夫です。僕がレックスさんを治療次第、医務室へ運びます」

「…」

「お願いします。早くしないと観客がどんどん死んでしまう」

「リヨウ、俺からも頼む」

「レックス…」

「今戦えるのは俺たちだけだ。これ以上無駄な犠牲はもう見たくない」

リヨウは決めた。

「分かった。行ってくる」

「回復したら、俺もすぐそっちに行く」

リヨウは敵に突っ込んでいった。

「では治療を始めます。痛いことはないので気にせず楽な姿勢になってください」

「ちよつと、アタシたちはいつまでここにいればいいワケ？」

「私たちも戦いたいですケド」

「治療が終わるまで待っててくれ。この二人を守ってくれ」

「アタシたちに盾の役をしろと？」

「矛の役のほうがいいんですケド」

「頼みますよ。あとでシユーと食事させてやるから」

「…ならいいケド」

「絶対だヨ？」

「男に二言はない。じゃあ頼むよ」

姉妹は少しだけ離れて近づいてくる敵の迎撃を始めた。

「次！」

リヨウは今観客が逃げるのを手伝っている。

敵は確かに多いがこれは戦争なので武器に制限はない。

沢山ある武器を使って敵を倒していく。

これならいけるのでは？と思っているリヨウの耳に

「お前、一段階目のくせにやるな」

と聞こえた。

声のきた方向を見ると、ドールを装備していない人が立っていた。体全体を黒いマントで覆っていて頭にもフードがかぶせてある。

顔にも真黒な仮面がついていてすべて黒に包まれている。

相手は目の前にリヨウがいるにもかかわらずリヨウから目を離し、クリティウスたちを見る。

「しかし、あんな回復を使える奴がいたとはな。一年にいたとしても代表には選抜されないだろうと思えば作戦を立てたんだがな…。まあ作戦に支障はない。成功確率は100%だ」

「…」

「ネーム持ちも三人もいた。まったく今年の一年は有望だったのに、潰すのが残念だ」

「…何が言いたい?」

「あー?つまりなあ…」

男が視界から消えた。

「死んでくれって意味だ」

後ろから無慈悲な声が聞こえる。

リヨウの反応が一瞬遅れ背中に激痛が走る。

急いでそこを離れ状況を確認する。

相手は刀を持っていた。

あの刃が背中に刺さったのだと理解する。

「科学や魔法があるこのご時世に日本刀かよ……」

相手の目に驚きの色が現れる。

「日本刀を知ってるのか!?博識だなあ。俺も貰った時初めて名前聞いたんだぜ?この刀の意味って何か知ってるか?」

「日本ってところで作られたってことぐらいは」

「へえ!そうなのか。日本ってどこなんだ?」

「この星じゃない」

「はあ!夢のある話だな。じゃあこの刀はこの星にはない素材でできてるのか!」

「可能性はあるかもな」

「笑わせんなよ!今までこの星を出た人間はいないんだぜ?この星以外のものなんてあるわきゃねえだろ!」

再びビムがリヨウに迫る。

ドールを装備していないところを見ると魔法を使っているのは何となく分かる。

しかし分かったからと言ってリヨウにはそれを止めるすべはない。

何より問題なのはあの刀がSバリアをいともたやすく壊したことだ。

壊れた部分はずでに治っているが意味がない。

「あの刀、何か細工をしてあるのか？」

きりかかってきたので腕で（ドールの装備してある）ガードしてみる。

刃は通らずはじき返される。

「（あの刀はSバリアには有効だがドールには何の意味もないのか。それなら…）」

「ドール相手にこの刃が役に立たないからっていい気になってんじやねえぞ！」

相手が周りに球体を出現させた。

球体に向かってきたのでドールでガードする。

すると球体は爆発した。

「なっ！」

その球体がいくつもあるからたまったものではなかった。

シールドを展開して逃げ出す。

「そんな薄っぺらい盾一つでこの攻撃を防ぎきれれると思ってるのか!？」

簡単に盾は壊れ再びリョウに接近するピム。

切りつけられるのはゴメンなのでピムのほうを向いて構える。

「勇ましいねえ。だが俺のほうが上だ！」

刀で切りつけてくると思い構えていたリョウに対し、ピムは首を絞めるという手を

取った。

予想外の展開に反応でできず、首を掴まれながら持ち上げられる。

「リョウウ！」

レックスは遠くでリョウウが首を掴まれているのを確認していた。

しかし相手の数が多く応援にいけない。

「おい、クリティウス姉妹！さっきの威力がある炎を何で使わねえ!？」

「魔力がもうないからだし！さっきアンタたちに使ったので結構きてたからネ」

「使えたらとづくに使ってルし！」

レックスは強い。

B組の中では一番強い。

おそらくビム以外の今ここにいる敵なら倒せるだろう。

だがそれは1対1の話である。

1対3ぐらいまででもやることはできるし、クリティウス姉妹もいて強いのは間違いない。だがそれは同じ数ならの話である。

今は3対30弱である。

しかも姉妹は魔力があまり残っておらず難しい状況だ。

「(あのままじゃリヨウが……!)」

その時レックスの目にリヨウとビムに近づいてく影が見えた。

「ぐっ……!」

「まあ、一年にしちやよくやったよ。だが、俺が勝つ確率は100%だ」
朦朧としていく意識の中、リヨウはもがいていた。

だが相手のほうが確かに格上だった。

「(くそっ、まだ死ぬわけには……!)」

その時リヨウはビムの後ろに影が見えた。

次の瞬間、ビムの手がリヨウから離れ距離があく。

「ゲホッ、ゴホッ、んく、ハアハア、ハア…」

「リヨウ大丈夫!？」

「ハア、…マーシャ」

リヨウの目の前にマーシャがいた。

「どうして…ここに？」

「私も試合見に来ていたの。突然爆発して一回避難したんだけどリリアとはぐれちゃつて。探しに来たらあんたが危なさそうだったから助けたわけ」

「助けてくれてありがとう。でもここは危険だ。早く逃げてくれ」

「何言ってるのよ。あいつがたぶん親玉でしょ？私も手伝うわ。これでも喧嘩は強いほうなのよ」

「そういう問題じゃ…イタ！」

「ちよつとあんた血出てるじゃない！まさかSバリアのエネルギーが？」

「あいつの持つてる刀だ。Sバリアを無効化してくる」

「あんたは休んでなさい。私がやるわ」

「無茶だ！5人に選ばれた俺でもこのありさまだぞ!?お前じゃ…」

「私が5人に選ばれなかったのは、予選に参加できなかったからよ。あんたは私の戦つてるところ見たことないでしょ」

「それでも……!」

「あーもう! いいから黙ってみてなさい! 私が今は戦うの! あなたは私が危なくなつたら助けにくる、それでいいわね」

そう言うとうマーシヤはリヨウの意見を聞かずビムのもとへ向かった。

ビムはすでに立ち上がりマーシヤを待っていた。

「おしゃべりはもういいのか?」

「あなたは脳震盪は大丈夫なの?」

「魔法側にだってSバリアのようなものはある。大した問題じゃあない」

「なら、いつでもあんたを潰していいってわけね」

「その台詞そっくりそのままお返しするぜ」

余裕なのか仮面の上からでも笑っているのが分かる。

「…一応訊くわ。なんでこんなことを?」

「お前に言う必要はない。俺はおしゃべりは好きだが口は堅いほうなんだ。まあ強いて言うなら……」

「強いて言うなら?」

「楽しいからだな」

「…」

「見ろよ。今この光景！そこらじゅう血だらけだ。こんなに素晴らしいことあるか!? こんな高揚は初めてなんだ。血の匂いが！色が！味が！感触が！すべてが俺を高揚させる！たまらねえよ」

「分かったことはあんたが異常だってことね。倒した後にいい病院教えてあげるわ」
「俺が？お前に負ける？100%ありえねえな！倒されるのはおまえだよ！」

二人が戦闘を始めた。

更なる異世界

リヨウはマーシヤが戦っているのをただ眺めていることしかできなかつた。

いつもなら加勢するのだが思ったより傷が深いらしく痛みが増してきた。

さつきまでは夢中で戦ってたから気づかなかつたようだ。

戦い始めればおそらく痛みも忘れられるかもしれないが、今はとても戦える状況じゃない。

回復魔法は使えないのかと思いきやそれらしい英語を言ったがうまくいかなかつた。

やはり魔法はぶつつけ本番でうまくいくものではないようだ。

「(マーシヤ……)」

ただ祈ることしかできなかつた。

今マーシャはビムと戦っている。

戦況はビムに傾いていた。

「さつきまでの威勢はどうしたあ!?!まだあの餓鬼のほうが強かったんじゃないやねえか?」

「…私はまだ本気を出してないわ!」

「殺さないためにか?ならさつきと本気ださねえとすぐに誰とも分からない肉塊になっ

ちまうぜ!」

「言ってくれるじゃない!」

マーシャのバトルスタイルは他の人と少し違い足を主体としている。

さつきリヨウを助けた時も足でビムの頭をけ飛ばしたのだ。

足は手と違い強化してもスピードが下がったりなどデメリットはない。

なので、足を使うドールのほうが基本的に強いと言われている。

しかし、ビムは最初こそダメージを受けてしまったがそれ以降は攻撃を一切許さない。

「(こいつ、魔法使うくせにどんだけ身体能力高いのよ!?!面倒ね)」

「そろそろいくぜ!」

するとビムの周りに球体が出現する。

リヨウにした攻撃と同じだがマーシャはそれを見ていない。

「できれば当たりたくないわね……」

球体が迫ってきたので回避行動に移った。

ただ回避してるのも嫌だと思い、マシンガンを撃ち始める。

ビムは目の前に壁を作り出しそれを防ぐ。

「さつきから遠距離攻撃ばかりね！」

「魔法は近接攻撃のほうが少ないんだぜ」

「でもあなた、刀持ってるじゃない！」

「わざわざ動かなくても勝てる相手に対して動く必要ないだろう？」

「いちいいイラツとする口ね！」

「ほめ言葉だな。ほら、次だ！」

ビムの周りに輪っかのようなものができ、そこから銃の弾並の速さがある矢のようなものが次々に発射される。

これでは防戦一方だと思い、ビムに突っ込む。

矢が当たるがSバリアがあり、ドールも致命傷を受けるほどの威力はない。

一気に距離を縮める。

「あれれ、そんなにこの矢は威力ないのか」

「おかげで近づけることができたわ！これなら」

「俺が近接攻撃をできないと思ってるのか？」

突然ビムの口調のトーンが変わりマーシヤの動きが鈍る。

次の瞬間マーシヤの目の前からビムが消え、背中から刺され、その刀は胸を貫いていた。

「あうぐ、あああああ…」

「へえ、思ったより叫ばないな。いい悲鳴が聞けると思ったんだが。すでに経験ずみだったか？」

「…ええ、これでも体を貫かれるのは2回目なの」

「そりゃ経験豊富でいいな。俺はないからたぶん叫ぶぜ。まあ、俺に攻撃が通ることなんて100%ありえないがな」

マーシヤはやばいと思っていた。

痛みのみあまり手に力が入らなかった。

「さて、この状況に陥れば誰でもわかると思うが…お前はもう勝てない。今なら謝れば逃げる時間はくれてやるぜ？」

「ふざけたこと言ってるじゃないわよ…」

「降参しないのか？なら屈辱的な死に方してもらおうぜ？」

「私とその屈辱的な死に方を受け入れると思うの？」

「今俺がお前を刺したところは急所は外してある。そう簡単には死なないが力は入らないだろ?」

「…ふざけたまねしてくれるじゃない」

「選択肢は2つだ。1つは俺がさつき戦った餓鬼を殺すまで逃げる。もう1つは裸にひん剥いて全国にテレビ放映をして俺の部下たちに好きにやらせた後、殺す。どちらにしても死ぬけどな」

「どっちも選ぶわけじゃないじゃない。アタシはあんたに勝つてこの惨劇を終わらせる」

「減らず口を…。お前が選ばないなら俺は2つ目にしたいからそうするぜ?」

「なめたこと言ってるんじゃないわよ!」

マーシヤは手足に力が入らないので代わりに手榴弾を使う。

爆発が起き、マーシヤのドールの手のパーツが壊れる。

「(いくらあいつでもこの近距離で手榴弾を食らえば…!)」

「ゲホツ、ゴホツ!…つたく、手間かけさせんじゃねえよ」

「なっ…」

マーシヤの予想に反してビムは無傷だった。

「な…、なんで」

「お前魔法のことも俺のことも全然知らないだろ?俺は爆発魔法が得意なんだよ。そし

てたまに出る例外を除いて自分の得意な魔法は打ち消すのも得意なんだよ」

「そんな…」

「いいねえ、その絶望した顔。じゃあ、次は悲鳴を聞かせてくれよ。会場の真ん中でさ」

マーシャが抵抗しているのが見える。

嫌がって必死でビムから離れようとしているのが見える。

しかし、リヨウは限界だった。

いろいろ試したが傷は癒えず、痛みは増し、血がどんどん流れていった。

「助けなきや…、俺が」

そう思うのに体はいうことをきかなかった。

意識が遠のいていった。

「…ウ。お…」

声が聞こえる。

するとリヨウの意識が突然クリアになった。

「リヨウ！起きろ！」

耳元で大きな声が聞こえる。

目を開けると目の前に人が…いなかった。

ただ靄のようなものがかかっている。

「やつと起きましたね…。のんびり屋さんだから」

声は男か女かもわからないような電子音で、その靄は人のような形をしていた。

「…なんなんだ？」

「もはや誰だ？でもなく、なんなんだ？ですか」

「だって俺には靄しか…」

「そうですね。確かに私の姿はあなたにはただの靄にしか見えなと思います。だってまだ1段階目ですもの」

「アンタはだれだ？ここはどこだ？」

「ここに名前はありません。そして私にも名前はまだありません」

そこまで話し、リヨウはマーシャのことを思い出す。

「そうだ！あんた、早くここから俺を連れ出してくれ！マーシャが…！」

「行っても無駄。貴方じゃ勝てない」

似ているようだが、違う声にする。

「そんなの分からないだろ！俺はあいつを助けなくちゃいけない！」

「なんで？」

「あいつは俺が負けたから戦った。それで負けたんだ！だから…」

「だから戦うの？負けるとわかってるのに戦うの？」

「そんなの分からないって言ってるだろ！」

「たった数分、しかも寝っ転がってただけで強くなれるわけないでしょ!？」

最初の声に戻る。

「……」

「私たちはあなたに死んでほしくないの」

「それでも、俺は…」

「分かってるわ。貴方と過ごしてきた時間は短い。でも貴方は分かりやすい性格してたもんね」

「(過)ごしてきた時間?」

「どんな敵が相手でも手を抜かない。いいように見えるけどフィリアちゃんるときはさすがにひどいと思ったわよ」

「…なんで知っている?」

「言ったはずよ。私たちは貴方と時間こそ短いけど過ごしてきた。朝も夜も一緒だった」

相手の姿が靄であるためどんな顔をしているのか、何を考えているのかわからない。

「俺はあんたらを知らない」

「そんなことないわ。だって私たちは貴方によって創られたんだから」

「…?」

「鈍いわね…。少しなら構わないけど鈍感な男子は嫌われるわよ?」

「意味が分からない! あんたたちが自分について教える気がないならそれで構わない!

「だけど今はマーシヤが大変なんだ!」

相手の声が変わる。

「さつきも言った。戻っても、あなたは死ぬだけ」

「だが俺が何もしなくても俺は殺される!」

「…」

「それなら俺はマーシヤを助けるためにこの命を使う!」

「なぜ、そこまでこだわるの?」

「俺は、もともとこの世界の住人じゃない。違う世界から来たんだ」

「嘘」

「本当だ。来てすぐはここがどこかわからず、ただただ彷徨っていた。そして体力に限界がきたとき、あいつは俺の前に現れた」

今でも鮮明に思い出せる。

あの時は確か死にかけてぐったりしていたはずなのに、きれいに覚えている。

きれいに思い出せる。

「言葉は荒いし、男子があーだこーだって言うし、頑固だ。でも俺はあいつに助けられた。あいつがいなきや今の俺はいない」

「でも…」

「彼女にこの世界のいろいろなことも教わった。感謝してもしきれないんだ。だから助ける。それに…」

「それに…?」

「俺はまだあいつに何もしてやれてない。恩を作つてばっかりだ。だから俺はその恩を返す」

「…何を言つても無駄なようね」

「私はだから言つたじゃない。絶対助けたいって言うつて」

嬉しそうな声だった。

「だから、帰らせてくれないか」

「今すぐ帰しましょう。貴方の居場所のへ。でも私たちも貴方を死なせたくない」

「だから、力を貸す」

「あなたに合った力をね♪」

「どういう意味だ？」

「貴方はまだ力を出し切れていない。まあ、出せるわけないけれど。だからその少しを解放してあげるって言ってるの」

リヨウには何を言っているのかさっぱりだった。

「彼女の力はまだ無理だけど。恥ずかしがりやさんだよね」

「そんなのじゃない」

「…何を言っている?」

「ここを出ればすぐに分かるわ」

電子音のような声がかすれ始める。

リヨウの意識がぼやけ始めているのだ。

「焦らなくていいわ。元の場所へ戻るだけだから。私も力を貸すけど最後は貴方がんばらなくちゃいけない。だから頑張つて。…死なないでね」

「お前は…いったい?」

そこでリヨウの意識が途絶えた。

「いや！離しなさいよ！」

「口がうるさいな…。手足に力入らないくせに」

「ビムさん！何とかありませんか!?!」

「おまえらなあ、いくら俺が万能だからって何でもかんでも注文すんじゃねえよ」

「俺はこつちのほうが好きだけどな！」

レックスの倒れているところから少し離れたところでマーシャがひどい目に遭っていた。

数分前、クリティウス姉妹とレックスが敵と戦つてるときビムはマーシャを連れてやってきた。

三人全員で襲い掛かったが、歯が立たなかつた。

格の違いもあったが三人とも疲れ切っていたのだ。

レックスは、刀がSバリアを貫くことを知らず見事に食らってしまった、クリティウス

姉妹は魔力の残量がほぼゼロだった。

「その前にお前ら、俺今からテレビ中継しなくちやなんねいからしばらく待つてろよ？」
「校内放送ですか？」

「いや、全国だ」

「俺たち一気に有名人じゃないすか！」

「そうだ。その折角の晴れ舞台に途中からなんて残念極まりないだろう？」
「分かりましたよ。待つてますから急いでくださいよ？」

レックスに声は聞こえていた。

でも体がピクリとも動かない。

「(動けよ！なんで動かねえんだよ！くそ……)」

周りには助けけてくれそうな人はいなかった。

「おし、準備出来たぞおめえら！」

「遅いっすよ、ビムさん！」

「いや、カメラ自体はすぐ見つかったんだが回線を繋げるのに苦労してな」
「ていうか、ビムさんはいいんですか？」

「俺は好きな女にしか興味ねえよ。誰でもいいわけじゃねえんだから」

「男前っすね、ビムさん」

「まあな、じゃカウントするから始める準備しろよ」

「いつでもいいですよ！」

「いくぜ、3、2、い」

1とカウントしようとしたときビムは思いつきり吹っ飛ばされ、部下も何か変な形の物体によつて一緒に吹っ飛ばされる。

マーシヤは何が起きたか分からなかった。

「大丈夫だったか？」

リヨウがマーシヤを抱えていた。

逆転と逆転

マーシヤは啞然としていた。

さつきまで敵に衣服を取られそうになっていたのに、敵がいなくなり氣づけばリヨウに抱えられていた。

「マーシヤ大丈夫?」

話しかけられてようやく我を取り戻す。

「リヨウ?」

自分の目をマーシヤは疑っていた。

「あんだ、刀に刺されてたじゃない!何やってんの!早く逃げなさい!」

「:助けたのにそう言うこと言うか。マーシヤだつて刺されてるじゃないか」

「私のは致命傷じゃないわ!まだ戦える!早くあなたは逃げて!」

「大丈夫だから。こいつも一緒に戦ってくれるし」

「こいつつて:」

言われて初めてマーシヤは氣づいた。

リヨウのドールの姿が変わっていたのだ。

色はただの白ではなくつやがあり、シルバーに近い。

足や手のパーツに然程の変化はないが、背中に4つひし形の物体が羽のように浮いている。

「あなた、まさか」

「これが俺の二段階目だ」

マーシヤは驚いた。

1年生のうちに二段階目に到達するドールは数少ない。

10年に一度出るか出ないかと言われているほどのだ。

それなのに今日の前に10年に一度の逸材がいる。

「…なら早くしなさい」

「何を?」

「あいつと戦うのことをよ!ドールは進化した瞬間、大体5〜10分程度、進化した段階+2段階くらいの力が出せるの!」

「なんでそんなにすごい!?」

「教鞭をふるっている暇はないわ。ともかく今のあなたならあいつに勝てるわ。私の仇も取って来なさい!」

「分かったよ。マーシヤはレックス達を頼む。すぐに倒して戻ってくる!」

リヨウがビムのもとに向かおうとしたとき

「リヨウ！」

マーシャが叫んだので振り返る。

「…死なないでね」

リヨウはにこつと笑い再び向かって行った。

衝撃があつた頭の部分をビムが撫でている。

リヨウがビムの元へたどり着く。

「おしゃべりは終わったのか？」

「マーシャとの会話でも似たようなこと言ったんじゃないのか？」

「よく分かるなあ。進化と同時に相手の心を読む能力でも身についたか？」

「悪いけど話している余裕はないんだ」

「知ってるぜ。ドールの力が一時的に著しく高くなるもんなあ。でも俺が」

リヨウはビムが台詞を言い終わる前に一気にビムに迫る。

ビムはそのスピードについていけず、反射的に盾を創りだす。

ところがその盾はいともたやすくリヨウのただのパンチに壊され、ビムの腹にリヨウの手が入る。

「い…はあ…！」

そのままビムは突き飛ばされ壁にぶつかる。

ビムはあまりのことに頭がついていけず、とりあえず防御をするということしかできなかつた。

そんなビムに休む暇を与えることなく、リヨウはすぐに二撃目を入れようとする。ところがビムは二撃目を食らわせないため周りに球体を出現させる。

リヨウは回避するがビムは壁の真前で使ったので出現したいくつかの球体が壁に当たり爆発する。

砂煙でビムが見えなくなるが砂煙の中から球体が襲ってきたのでリヨウはビムが生きていることがすぐに分かつた。

球体を回避しているとビムがリヨウから離れるように砂煙から出てきた。

「(時間を稼ぐつもりか。でも)」

リヨウは逃げているビムにすぐに追いつく。

「てめえ……！」

「時間稼ぎなんてさせるかよ！ さっきまでの威勢はどうした!?!」

「なめてんじゃねえぞ！」

すると後ろから銃声が聞こえた。

振り返るとさつきマーシャに乱暴していたらしき敵がマシンガンだのスナイパーだ

のを撃ってきている。

「なめるな」と言うがやはり時間稼ぎがしたいらしくその隙をついてビムはまた離れる。後で人質を取られるのも嫌だったが何より

「あんなひどいことしておいて今更生きて帰れると思つてねえよな」

距離は10m以上離れているのに、しかも呟いただけなのに敵ははつきりと聞き取ることができた。

危険な匂いがしたが敵は逃げることはできなかつた。

リヨウはすぐに近づき一人にパンチを入れる。

ただのパンチのはずだが一段階目と二段階目以上では力に圧倒的な差がある。

手で止めたつもりが手のパーツはすぐに壊れパンチは顔に当たり吹っ飛んで伸びてしまった。

逃げたい気持ちはあるがそんなことは許されないので残る4人は一斉に襲い掛かる。

どんなに強くなつてるといえどもSバリアが強化されたわけではないのでドールのパーツがないところを殴れば、バリアが壊れ何とかなると考えたのだ。

しかし、その考えは甘いとすぐに思い知らされた。

襲い掛かろうとした途端、リヨウの背中にあるひし形の物体が背中を離れ4つともバラバラに散つたのだ。

離れた4つの物体は少し離れると4人の背中に向かって襲い掛かる。

敵はリヨウにしか集中しておらず離れた物体など気にしていなかった。

無防備な背中にひし形の物体は突き刺さり、核が壊れ敵はリヨウに触る前に地面に転がる物体になった。

その敵にまだ足りていない恨みを晴らしたいと思ったが時間もあるのでビムに標的を絞る。

移動しながらリヨウは

「部下を捨て駒にするなんて、くそ野郎だな」

「俺が勝つために戦ったんだ。捨て駒とはひどい言い方だな」

「倒したら病院で洗いざらいしゃべってもらうぞ！」

「あの女と同じこと言いやがって。俺は負けねえよ！負けるのはてめえだ！」

ビムの周りに電気が走る。

しかし、黄色や青ではなく黒に近い紫色をしていた。

リヨウに向かって放たれるが避けられないスピードではない。

しかし、そこにビムはさっきの球体を加えてきた。

「これなら避けらんねえだろ！」

回避しながら進んでいたがさすがに避けきれないと思い、いったん下がる。

しかしその程度では避けきれず球体に当たり、爆発を食らってしまった。そこにさらにビムは追撃を加える。

「どうしたよ、王子様!? さっきまでの主人公気質はどこいったんですかあ!？」
勝ちを確実にするためビムはありったけの魔力をつぎ込む。

しかし、攻撃している中不安が頭をよぎっていた。

当たってる感触はあるがどんなに当たってもリヨウが落ちないのだ。

空中で戦っている以上、ドールが機能停止すれば落ちるのは必然だ。

これだけ攻撃を加えれば確実に壊れるはず、なのに落ちてこない。

攻撃をやめ、勝ちを確認するため風を使い砂煙を飛ばそうとする。

するとビムが魔法を使う前に風が起き、砂煙が晴れる。

リヨウはそこにいた。

無傷で。

リヨウの前にはひし形の4つの物体が盾のごとく浮かんでいた。

「さっきので精いっぱいか? 今まで避けて損したぜ」

「な……なんで! あれだけ攻撃を受けて……!」

「確かにあんたは最強だ。一段階目を相手にすればな」

「……なんだと?」

「お前は現にこうして俺に手も足も出なくなっている。確かに一年生相手なら、今の一年生なら一段階目しか存在しなかったからおそらく最強だった」

「根拠は？」

「先生たちをどこかに閉じ込めただろ？これだけ騒ぎが起きているのに先生が一人も来ない。今回の魔科祭は一般人を受け付けないから外から警備員を連れてくることはない。先生たちが代わりに警備員をしているはずなんだ」

「よく知ってるじゃねえか」

「ここの生徒なんだ。当然だろ？今すぐ降参すればここで終了させてやる」

「笑わせんな！俺の勝ちが揺るぐことはねえ！負けるのはてめ」

「分からない奴だな」

リヨウがビムの目の前に移動する。

顔に向かって下から思いつき蹴りを入れる。

蹴飛ばしたあと、すぐにビムの頭を掴み地面に向かって叩きつけようと急降下する。

「これじゃあ、てめえが悪役だぜ？」

「言ってる、ゲス野郎」

リヨウは頭を地面に叩きつける。

そのまま右手でパンチをしようとする。

しかし、そのパンチが通ることはなかった。

突然リヨウは、さつきまで圧倒していたはずのビムに吹っ飛ばされたのだ。

リヨウは何が起きたか分からなかった。

「ようやくか…。覚醒が終わるのは」

「なに…?」

「聞いているだろう? お前はドールが進化したおかげでその段階以上の力を出すことができていた。さつきまでではな」

「そんな…」

「そろそろ10分経つころだ。覚醒の制限時間の限界だからなあ」

「でも、それでも俺は二段階目だ。お前を倒すことは」

「できない」

ビムは悩むことなく即答した。

するとすぐにリヨウに向かって飛び込んできた。

リヨウはひし形の物体を使いカウンターをしようとする。

しかし、ビムの魔法にはじかれ啞然とした。

ビムはその隙を突き首を掴む。

「形勢逆転だなあ…。しかし、今日は同じことを繰り返すことが多いなあ。どうだ？降参するか？そうすれば楽に死なせてやる」

「だれが…！」

「先に言っておくが俺は二段階目のドールには負けねえぞ？10年に一度といえど一年でもドールが二段階目に到達することがあると聞いている。だから、二段階目に勝てる俺がこの作戦に選ばれた」

「…」

「分かるか？お前はおしまいなんだよ！テレビ中継できないのが残念でならねえぜ」

「クソツタレが」

「言ってる。地獄でな」

首の骨を折ろうと手に力を入れた瞬間、ビムは横に殴り飛ばされた。

代わりにそこにいたのはマクアドルだった。

「間に合ったみたいだねえ。大丈夫かい？」

「マクアドル先生。遅いですよ」

「申し訳ない。結界の中に幽閉されてただけどね、結界を壊すのに時間がかかってしまったね」

「それでも警備員かよ」

「本職は教師だ。けっこうやばいかと思って急いで来てみたんだけど、君は余裕みたいだね」

「…でも、死人が出ました」

「それは君のせいじゃない。私たちが罠にはまり動けなくなってしまったのが原因だ。自分を責めるんじゃない」

「でも…」

話していると爆発が起き、ビムが起き上る。

「私はいっつを倒してくる。君は休んでなさい」

「俺も戦う！」

「君がいたら、足手まといだ。覚醒が終わった君じゃ勝てない」

「囿ぐらいには！」

「私は教師だ。生徒を危険にさらすわけにはいかないよ。それに私なら余裕で勝てるしな」

「そんな根拠どこにも…」

「今に分かる」

そう言うのとマクアドルはビムの元に向かった。

「いてて…。つたく、俺は今日何回頭を殴られれば気が済むんだ？」

「マーシャ君のときは蹴りが入ったんじやなかったのかい？」

「…てめえ、マクアドルか!? いったいどうやって…!」

「あの結界の解き方かい? あんな簡単な結界の解き方なんて教えるだけ面倒なんだけどねえ」

「なにを、言ってる? あの結界が、簡単?」

「余裕過ぎて逆に罨かと思つたよ。さつきも言つたけどマーシャ君のときにはすでに見てたんだ。結界を破壊してね」

「…」

「リヨウ君たちには悪かつたけどね、あれが進化の近道だと思つてね。いい機会を作つてくれた君には感謝してるよ? でもやりすぎだ」

「だったら何だつてんだ?」

「おとなしく捕まつてくれないか?」

「ふざけんな。俺がお前なんか」

「私のドールは五段階目だ」

唐突にマクアドルは言った。

「君の戦いは見せてもらった。覚醒したりヨウ君にやられっぱなしだったじゃないか？ 私の力はそれ以上なのだが…、それでもやるかい？」

「俺が勝つ確率は100%だ」

「100%なんてありはしない。0%はあるけどね。今君が私に勝てる確率は」

そこまで言うのとマクアドルは一瞬でビムの後ろに回り込み

「ゼロだ」

頭を地面に叩きつける。

一瞬の出来事だったので、飛び散っている地面の石と音が合っていないかった。ビムはそのまま伸びてしまい気絶した。

戦争は終わった。

戦争の後の休息

今リヨウは医務室にいる。

いつもは静かな医務室も今はとても忙しそうに稼働している。

リヨウの傷は深かったので今腹を包帯で巻かれ、ベッドに横になつてゐる状態だ。

処置も終わったので重症とはいえ正直暇だった。

痛みどめも飲んでしまえばほとんど痛みは感じなかった。

「…暇だ」

周りがあわただしい中呟いた。

「それなら手伝えばいいのに」

返事が聞こえた。

少し顔が赤いマーシャがいた。

「マーシャ！動き回って大丈夫なのか？」

「私のは致命傷じゃなかったの。だからちよつと処置をすればあとは安静にしてなさいになるのよ」

「よかった…」

「なによ？ そんなに心配してくれてたの？」

「あたりまえだろ」

「恥ずかしくなるくらい即答ね。私はあなたのほうが…心配、だったのに」

「マーシャ？」

マーシャが顔を俯きながら震えていた。

「あんたが、私を助けてくれた時、本当にうれしかった。でも、それ以上に、生きていくれたことが、嬉し、かった」

マーシャが泣いていた。

いつも強気なマーシャしか見てこなかったからリヨウは顔には出さないが驚いていた。

「死んじやうかと、思ったんだから」

「…心配かけてごめん」

「ホントにそうよ。これからは…無茶しないで。あなたが負けず嫌い、正義感が強いっていうことは分かっている。それがあなたのいいところだということも。でも、私は、あなたに死んでほしくない」

「…」

「約束して。もうあんなことはしないで。…お願い」

「…分かった」

「絶対よ？」

「約束だ」

そういうとマーシヤはまた泣き出した。

安心して出てきた涙だったんろうけど、男と女一人ずつしかいないスペースで泣き出されると入ってきた人から見れば「リヨウがマーシヤを泣かせた」ということになりかねない。

リヨウは上半身を起こし、マーシヤを抱き寄せた。

マーシヤは一瞬ドキツとして止まるが再び泣き始めた。

「ずいぶんな背伸びじゃない？まだあんた子供でしょ」

「17歳なんだぞ？子供じゃないよ」

「大人でもないわ」

「そうかもな」

話しているとカシヤツ、という音がした。

そこを見るとリリアがカメラを構えていた。

「生き死にをかけた戦いの後の愛し合う者…、今回の記事の一面はこれね」

「おい、やめろ。マジで」

「記者は真実を追い求めるもんじゃないの？」

「少しのねつ造なら問題なし♪」

リリアに冷たい視線がおくられる。

「そ…、そんなに嫌？ならいいわよ。代わりに謎の男とリヨウの戦闘を一面に飾るから」
「文字だけだと読む気失せるな」

「写真はたくさんあるわよ」

リリアがリヨウとビムが戦っている時の写真をたくさん見せてきた。

「どうやって撮った？」

「そこにいたのよ」

「あの惨状に？」

「さすがにあの血だらけの会場を載せる気はないわ。報道規制もされるだろうし」

「報道規制って…」

「じゃ、そういうことだから。私は記事を書いてくるわ」

「頼むからねつ造はやめてくれよ？」

「楽しみにしててね♪」

そう言うと言った。

「私もそろそろ戻るわ」

「安静に、だもんな」

「実は抜け出してここまで来たの。見つかると面倒だしね」

マーシヤも出ていった。

リヨウは急に眠くなり、眠りに落ちた。

次にリヨウが起きると夜の9時過ぎだった。

夜なのに眠くならずどうしようか悩んでいると

「リヨウ君は…起きてるみたいだね」

「マクアドル先生…」

「君に伝えたいことがあつてきたんだ。いい話と悪い話、どっちから聞きたい？」

「とりあえず吉報から」

「君のドールが進化した。実に8年ぶりに1年生のうちに二段階目の人が現れたことになる」

「そんなすごいんですか？」

「進化できた1年生は逸材と思われるからね。大したもんだよ」

「悪いほうは？」

「捕まえた敵が一人残らず死んだ」

思いもしなかった答えにリヨウの思考が止まる。

「…死んだ？」

確認の意味も込めて復唱する。

「そう、死んだんだ。生きた状態で捕縛できたのは実に27人。あのビムとかいう男も含めてね」

「それだけの人数が、どうして…」

「原因は不明だが捕縛して連れていこうとしたとき、突然頭が破裂した」

死因が頭が爆発なんて言われても納得いかない。

リヨウにとつて人の死なんて想像できるものではない。

それなのに、頭が爆発なんて理解するのは不可能だ。

「それって…」

「最初は私もビムとかいう男が何らかの目的があつてやったことだとおもったんだけどね、一番最初に爆発したのが彼だったんだ」

「それが？」

「魔法っていうのは罫のように仕掛けることも出来て便利なんだけどね、仕掛けた本人が死ぬとその人が掛けた魔法は例外なく消滅するんだ」

「2人でかけたりは？」

「鋭いね。確かにそう言う魔法もある。だけど今回使われた魔法は頭を吹っ飛ばす程度の小規模魔法だ。その程度の魔法ではむしろ2人以上でやるほうが難しい」

頭を吹っ飛ばすって結構大きなものに感じられるんだが…。

「それじゃあ他の誰かが？」

「おそらくね…。まあ30人弱の弱い奴らだったと言えどおそらく集めるのは大変だったはずだ。おそらく…」

「ミューズデル帝国」

「うん。ミリーナの言っていたことと一致してしまった。嫌な話だけどね」

「ミリーナは何か言っていましたか？」

「音信不通だ。せめてねぎらいくらいにはきてほしいんだけどねえ…」

リヨウは黙り考え込んだ。

折角あつた手がかりが奪われ結局何も分からないままだ。

捕縛した敵が全員爆発した理由だって魔法なんて全く習ってないから分かるわけもない。
ここに來てから分らないことが増えるばかりだとため息をつく。

「じゃ、私は戻るよ」

「もうですか？」

「いろいろ処理しなくちゃいけないことがあるしね」

「はあ」

すると一つの疑問がリヨウの頭に浮かんだ。

「あの、あいつらどうやって入ってきたんですか？」

「…あまり口外するなって言われてるんだけどねえ。外との転移装置が起動していたんだ」

「一般人は招かないの？」

「学校に内通者がいるのではと思われてるよ」

「犯人にめぼしは？」

「残念ながら不明だ。じゃ、そういうことだから」

マクアドルが出ていくと入れ違いにクロが入ってきた。

今は9時過ぎなのだが…。

「リヨウ？ お見舞いに来たよ？」

「なんで疑問形なんだ？」

リヨウのスペース（カーテンで区切られてる感じをイメージしてください）を出た後、マクアドルは屋上に来ていた。

「嘘の情報なんて、ばれたらリヨウが怒るの」

「…いたのかい？ならでできる限り情報を教えてほしいんだけどねえ」

マクアドルの知らぬ間にミリーナが後ろに立っていた。

「私知ってることなんてほとんどないの。あいつらが襲撃の準備をしていたことは知っていたけれど」

「なら教えてくれればいいのに」

「私の存在はごく一部を除いて秘密なの」

ミリーナがマクアドルの隣に歩いてきた。

夜風が吹き、ミリーナの長い髪がたなびく。

「私が一人の時間なんていくらでもあつたじゃないか」

「でもあなたは肯定していたの」

「…」

「ビムと戦つてるとき、感謝していたの」

「そこも見ていたのか…」

「学校の中なら大体は把握できるの」

「空気中にナノデバイスでも漂っているのかい？」

「私は自分の目で見たの。そんなものはないの」

煙草を取り出し、マクアドルは吸い始めた。

「子供がいるのによくないの」

「私は君を子供と思つてはいない」

「こんな外見してるのに？」

「話を戻そう。今回の戦争は君の目から見てどんな規模だった？」

ミリーナが少し言いにくそうにする。

マクアドルはそれを見ただけでなんとなく、答えが分かった。

「…小規模なの」

「やはりか…。大規模つてどれくらいのことを言うんだい？」

「大規模だったのはまだ1つなの。グール森林が燃えて1つ残らず木が焼け死んだつてやつだけなの」

「グール森林つてどれくらい広かつたんだい？」

「千畳くらいなの」

「なんでその規模を畳で表すんだい？」

「私にはそう言う表し方しか内蔵されてないの。ちなみに死人は30、身元不明な焼死体が64、行方不明者は597なの」

「森林火災なのに行方不明者がそんなにいるのかい？」

「憶測でものを話すのは好きじゃないから私は何も言わないの」

「それを聞いたらまだましだっ——」

「そろそろ時間なの」

「…急だねえ」

「そっちの方がミステリアス感があっていいの」

「君はどんなキャラになりたいんだ…」

「その話もまた今度なの。それじゃ」

そう言うときミリーナは消えてしまった。

マクアドルは一人屋上で煙草を捨てフェンスによりかかった。

「彼になら、止められるのか？」

誰もいない屋上でただ一人呟いた。

「リヨウさん！また残してるじゃないですか！ちゃんと食べないと治りませんよ？」
「そんなことないよ。もう傷は癒えてるし。もう退院したいくらいなんだけど」
「婦長さんがダメと言ったんだから駄目ですよ」

戦争から2日後の医務室である

「つていうかなんでフィリアは看護師やってんの？」

「人手不足だからです。傷は寝て起きたら癒えてました」

「あのパーマは見てないのか？」

「？だれですか、それ」

どうやら彼のことは見ていないようだ。

「魔法側の代表選手の1人だったんだけどね、気絶したフィリアだったりレックスを治療してくれたんだ」

「名前はなんていうんですか？」

「…忘れた」

「恩知らずですね」

「俺は別に助けられてない」

「覚えてはおきます。でもパーマなんてたくさんいるので会ったら私にも教えてください」

「そうするよ。会えるか分からないけど」

「私は会えると思うわよ」

マーシャが入ってきていた。

「どうしてそう思う？」

「1ヶ月後に今度は魔法と科学の交流会があるからよ」

「そういえばそんなものもありましたね」

「交流会？」

「殴り合いとかはないけどね。社交パーティーみたいなもんよ」

「ダンスしたり、食事したりするっていうこと？」

「そういうことね」

「なんでそんな面倒なことを…」

日本にだって一応あるところではある。

だが、それだって大学の国際交流を除けばあまり聞かない。

「5割の人はそう言うわね。まあ、理由はせっかく同じ学校の生徒なのに寮や校舎が違

うから会わないっておかしくない？って思ったからだそうよ」

「確かに、私はちよつと苦手ですね」

「でも強制参加よ？」

「ま、5割も同じ考えの人がいればそんなに心寂しい思いしないでろ」

「でもその考えの人が当日には2割にまで減るそうよ」

「な、…なんで」

フィリアが体を震わせ、手を口に当てている。

昔の少女漫画の驚いた顔のような感じだ。

「そんな驚嘆した顔するんじゃないわよ、フィリア…。理由は簡単よ。楽しいからだそ

うよ」

「俺はそうならない」

「そういつてる時点であなたは間違いなく心変わりするわね」

「リヨウさん、裏切らないで下さいよ？」

「最後まで生き残るぞ、フィリア！」

「なに変な同盟組んでるのよ…」

フィリアとリヨウが拳をぶつけ合う。

マーシヤの声は2人に届いておらずよくわからない同盟が結成されていた。

「…ビムは死んだか？」

「はい。部下も一緒に」

ミューズデルのどこかで2人は話していた。

「分かってはいたが、やはり無益な殺生は私には合わないな」

「マスターの手を汚してはいけません。マスターが悩むようなことではないのです」

「しかし、命令を出したのは私だ」

「それはそうですが…」

男が言葉に詰まっていると、扉が開いて女が入ってきた。

「何か用か？」

「あの、作戦 α 終了しました」

「早いな。作戦 β をしているグリーンジョに合流して手伝ってやれ」

「了解しました」

女が出ていく。

「……とりあえずビムのことは忘れよう。過去のことでも何を言っても変わることはない」

「はい。では私も」

「業務に戻ってくれ」

一礼をすると男は出ていった。

1人になった男は椅子に座ると引き出しから写真を取り出す。

リヨウが写っていた。

「少年、10年に1度の逸材、魔法の才能も一応有」

誰かに話すわけでもなく、ただ呟く。

「あの方が言っていた人に人相が似ているな。もしこいつがそうなら……」

男は不敵な笑みを浮かべた。

日常と疑惑

フィリアの休日その1

土曜日、朝8時起床。

いや、今日もいい天気……じゃないですね。

あいにくのくもりです。

今日はマーシャさんと、リリアさんと、私とで買い物に行くんです。

基本的に生徒は校内にある便利屋（コンビニ）で買い物済ませなくちゃならないんですけど、そこには本やお菓子とかはあっても、それ以外の娯楽商品は売ってないんです。だから外に今日は買い物に行くんです。

外出許可をもらうための手続きも踏みましたしばっちりなんです。

でも一つ問題がありまして……、私内気な性格だった（少し解消されました）もんですから友達と外に行くなんてことは、まずなくて。

私服をほとんど持っていません。

普通に下着に、ズボンに、上の服しかなくて。

重ね着する服とか小物（アクセサリ）とか持ってないんですよ。

「せっかく外に行くんだから私服ね！」って言われて何も考えず了解したのが失敗でした。

しかも一緒に新聞部のリリアさんが来るじゃないですか。

ダサイ服を記事に載せられて校内の笑いものなんてゴメンです。

「何、そんな焦った顔してるの？」

今話しかけてきたのは今、部屋が同じのピス・ロジックさんです。

「このしゃべり方、いつ聞いても特徴的ですよね…。」

「実は、今日買い物に行くんですけど…。」

「オシャレができなくて、困ってる」と

「はい。オシャレが…、なんでわかったんですか!？」

「ちよ、ちよっとした変わり者だと思ったら心理学の知識持つてるんですか!？」

「あなた、分かりやすいもの。すぐ、分かるわよ」

「…助けてもらえませんか？」

「小物なら、いくつかあるけど」

「服は？」

「あなたと、私じゃ、身長が全然違うのよ」

「…そうですね」

「それに、小物も正直、フィリアに合うかは、分からない」
「そう言いながらピスは小物（アクセサリ）を取り出してきました。
で、出てきたのが

「ドクロに、刀、爆弾……。私には合いそうにありませんね」

「なら、覚悟を決める、しかないわね？」

「うう……」

~~~~~

「フィリア、遅いわね」

「まだ5分経ってないわよ？」

「あの子はいつも5分前行動をとる人のはずなんだけど」

「そういうこともある…、あれフィリアじゃない？」

結局、悩んだにも関わらず持ち合わせの服にしてしまいました。

「すいません。遅れてしまいました」

「いいわよ、これくらい。早く外に出ましょ」

「久しぶりの校外だもんね。楽しみだわ」



…二人ともなんかおしやれに見えます。

なんでそんな服、二人とも持つてるんですか。

恥ずかしい思いはしたくないです。

「久しぶりに来たわね、ここ」

「私とマーシャで、入学する前まではよく来てたわね」

「ここは、何が売ってるんですか？」

今三人は大きな店（ショッピングモール）の前に来ている。

「この中にたくさんお店があるのよ」

「見せたほうが早いわよ。フィリア、ついてきなさい」

「は、はい」

連れられて中に入るといっぱいお店がありました。

私はこんなところ来たことないので感激です。

つて、見とれていると二人からはぐれてしまいそうです。

この歳で迷子の放送に名前を呼ばれるのはごめんなのでちゃんと後を追わないと。

ついていくとなんかきらびやかな所に着きました。

「ここは何でしょう？」

「ここは？」

「服を売つてるところよ」

「ここはね、最初に来るって決めてたの」

「どうしてですか？」

「あなたをおしゃれにするためよ」

「…へ？」

「あなたがおしゃれをほとんど知らないのは知ってたの」

「だから、私たちが可愛く見繕ってあげようと思ってね」

「本当ですか？」

「任せなさい。どんな男子でも一目惚れするような可愛いフィリアに変えてあげるわ」

「…嬉しいです。」

やはり友達はいい存在です。

「さっ、選ぶわよ。早く来なさい」

「はいっ！」

「フィリア、次これ着てみて！」

「私をゴスロリにする気ですか？」

「これは？」

「なんで白い服の真ん中に台所って書いてあるんですか!？」

もう、遊ばないでください…。

さつきまで「フィリア、顔の評価はおそらく高いから…」とか言いながら真剣に考えてくれてたのにいつたいたい何ですか？

「フィリアこれは？」

「もうキグルミじゃないですか!」

「あまいわねフィリア。この道を通り越えてこそ初めてオシヤレに近づくのよ。言ってしまうと通過儀礼みたいなもんよ」

「絶対使い方が違ってますよ、それ!？」

「じゃあいつそのことステップアップして水着着る？」

「…もういいです。自分で探します!」

そう言うときフィリアはその店を後にした。

「あつ、フィリア!」

「やりすぎたかなあ。まあ自分で見て回るのもありかもね」

「でもあの子、ここ来るの初めてじゃなかったっけ？」

「……」

二人ともひどいです。

私が確かにオシヤレに疎いことは自覚していますがあれが間違いだってことぐらい分かります。

こうなったら私が自分で見繕うしかないですね。

さあ、違う服屋を……、ってここどこですか？

「……」

……やばい。右も左もわかりません。

でも、ここで止まってる係員さんに連れてかれないうし……とりあえず動きましょう。

「フィリアいた？」

「いないわ。さつきまでならともかく、これだけ時間たてば探す範囲も相当なものよ」

「弱ったわね。そろそろお昼時なのに」

「腕輪の番号聞いてないの？」

生徒が支給された腕輪は万能でゲーム機能こそついてないが、メールやインターネット検索もできるし周りを気にしなければ電話もできるのだ。

「電通（メールのこと）の番号は聞いたんだけど、電話のほうは…」

「電話じゃないと気づかないことありそうだしなあ…。まあ、私たち16歳だし大丈夫だと思うけど…」

話していると2人のお腹が同時に鳴った。

「…」

ちようど近くにカフェが見える。

「…あの喫茶店にフィリアいないかしら？」

「探してみる価値はあるわね」

2人はカフェの中に入っていった。

「お腹、すきましたね」

なんかいろいろなところ歩いていたら結構奥の方に来てしまったような気がします。

お金もありますし昼ご飯、買えないことないんですが。

…できる限り人と話したくないんです。

少しは人見知りも解消されたと思っただけなんですが、全然ですね。自分から話しかけようとするのがダメになります。

自動販売機とかありませんかね。

「お客様」

…話したくないと思っただけからこれですよ。

「…なんですか」

「私はその牛牛亭（ぎゅうぎゅうてい）で働いているものです。お昼はお済ですか？」

「まだですけど…」

「でしたら！手軽に食べられる肉まんなんていかがですか？」

…肉まんですか。

名前の割に軽いもの進めてくるんですね。

お腹もすいてますしそれくらいでしたら。

「…お店はどこですか？」

「あちらになります。並んでいるお客様もいらつしやいますので並んでお待ちください」

「悪くないですね」

今フィリアは肉まんを買い、席を見つけ座って食べている。

学食の方にも肉まんはありますけど、冷凍だから正直微妙なんですよね。

このまま、グルメ旅っていうのも…。

はっ、いけないいけない。

私はおしやれになって2人を見返すんです！

これを食べ終わったら急いで行かないと…。

でも、服屋はいつたいたいどこにあるんでしょう？

「あの…」

ん？今声をかけられたような。

目の前には白い髪にパーマがかかった男子。

「な、何でしょうか？」

「フィリア・リトルトリアさんですか？」

「はい、そうですけど」

な、なんで本名を？

まさか変質者!?

「リヨウさんのお友達の？」

「リヨウの知り合いですか？」

「そんなもんです」

「違いましたね。」

「いや、まだ完璧には信じるわけにはいきませんが。」

「何か用でしょうか？」

「いや、なんか困り果てたような顔をしてたもんだから」

「そんな顔してました!?!私?」

「あまり知らない人とは話したくはないのですが、この人なら店の案内してもらえないですかね。」

「実は、友達と服を買いに来たんですけど。初めてだったもんで道に迷ってしまったんです」

「奇遇ですね!僕も友達と来たのですがはぐれてしまいました」

「類は友を呼ぶってこういうことなんですかね。」

「もしよければ、一緒にしばらく行動しません?服屋の場所も教えますよ?」

「...それなら。」

「わ、私からもお願いします」

「じゃあ、善は急げですよ。こっちです」



「見つからないわね」

「そうね。今はこの店の大きさが恨めしいわ」

マーシャたちは今買い物しながらフィリアを探している。

しかしこの店（ショッピングモール）はとてつもなく広いのだ。

たった2人で何の手がかりもない1人を探すのはまず不可能と言ってもいいくらいだ。

「電通もたぶん見てないわね」

「折角カメラ持ってきたのに」

「今の会話からカメラが出てくるところはなかったわよ」

変な会話と買い物しながら2人はフィリアを探し続ける。

「どれがいいんですかね？」

「俺に女子の服について訊かれても…」

今フィリアたちは案内された服屋に来ている。

「わからないなら、店員に訊いたらどうです？」

「私、人見知りなもので…」

案内してもらったのに、オシヤレなんて考えたことないからよくわからないです。私だけのおしやれをしたいんですけど、素人はまず流行からですかねえ。

でもそれだとイマイチ納得がいかないんですけどよ。

「フィリアさん」

「何ですか？」

「フィリアさん、オシヤレしたいんですけどよ？」

「そうですけど」

「どんなおしやれがしたいんですか？」

「…どんなおしやれ？」

「清楚にしたいとか、活発な感じ出したいとか、あるじゃないですか」

…考えたこともありませんでした。

確かにそう言うのは決めるべきですかね。

「私って、どつちな感じします？」

「会ってまだ1時間経ってないのに僕に訊きますか」

「雰囲気がかまわないです」

「…活発じゃないですか」

「人見知りですよ？」

「雰囲気だけで見たらですよ。それに服だけで気分だけでも変わるかもしれませんよ」

…活発かあ。

じゃあそれで探しましょう！

いいのありますかね。

「今何時？」

「6時ね」

「あれから見つからなかったわね。電通も…あら？」

「返信来てた？」

「6時半に出口で待ってます。ですって」

「なら出口まで行きましょう。でも分かるのかしら、出口の場所？」

「今日はありがとうございます」

「この人は変質者じゃありませんでした。」

よくよく考えたら学校指定の腕輪してるし同じ学校の生徒なんですよね。

「いや、僕も楽しかったですし」

「お店の案内だけじゃなく出口まで案内してもらったんです。いつかお礼させてください。それに友達と来ていたんじゃない」

「友達って言いましたけど、軽いパシリみたいなもんなんです。一緒に来たのが女子2人と男子1人だったんですけど女子が2人ともその男子にべた惚れでね」

「それはいろいろ災難ですね…」

「慣れっこですから。ん？」

腕輪が鳴ってますね。

「ちよつといいですか？」

「どうぞ」

離れて話し始めましたね。

しかし、この服大丈夫ですかね…。

買うのに悩んで結局水色のワンピースを買ってしまいました。

麦わら帽子も買おうとしたら「それは夏じゃないですか」とツツコまれたので遠慮しました。

活発を想像して買いましたが彼には「活発と言うより清楚では？」と言われてしま

いました。

まあ、そこはこだわるつもりはないですからいいですけど。

シンプルすぎましたね…。

中に着る服（シャツ）とかも買いましたけど表に出ないから意味ないですし。

あつ、電話終わったようですね。

「ゴメン、もう戻らなくちゃ」

「分かりました。私はここ集合場所にしましたから大丈夫です」

「それじゃあ、また」

走って行ってしまいましたね。

あつ。

そういえば、彼に名前訊くの忘れてました。

腕輪してましたし、同じ学校の生徒だから大丈夫だとは思いますが。

もしかして先輩という可能性も!?

なんか心配になってきました…。

「フィリア」

あつ、マーシャさんにリリアさん。

私の服、どんな感想くれますかね？

「さつきはゴメン。言い過ぎ……た？」  
「フィリア……あなた……！」

## マーシャの休日その1～苦悩～

はあ、…暇ね。

フィリアの休日読んだ人は分かると思うんだけど部屋替えしたのよ。

なんでも、今フィリアと部屋が同じ人が「自分とこの人合わない」とか言つて、同じ部屋の人と喧嘩したらしくて。

それで、その人なぜかフィリアを指定したのよね。

何の接点もなかったからフィリアも驚いていたけど、替えられちゃったのよ。

で、私の部屋にはその喧嘩した人が来るかと思つたらその人「一回家に帰る！」とか言つて帰つちやつたのよ。

つまり、私の部屋は今一人なの。

つたく、あいつ本当に何なのよ？

人の部屋に上がり込んでくると思つたら「帰る」だ？

自分勝手もほどほどにしないさいよ。

で、最初は一人も悪くないって思つたけど、つまらないわね。

何かおもしろいことは…

〈ピンポーン〉↑インターホンの音

誰かしら？

「マーシャ？いる？」

リリアじゃない。

ちようど暇だったし、悪くないわね。

「どうかしたの？」

「いた！とりあえずあげてもらえない？」

「いいわよ」

〈5分後〉

「お邪魔します」

「で、なんなの？そんな大きな荷物？」

「よくぞ聞いてくれました！の前に、この前のフィリア覚えてる？」

「ずいぶんときれいになったわよね」

「そ。んでフィリアは服一つでもものすごい変わったじゃない？で、私たちも何かいい方向に変われないかなあと思ってね」

「嫌な予感がするんだけど」

「で、さっき何かないかと思って部屋を探したら…あつたのよ！」



「何が?」

「これよ!」

取り出してきたのは髪を染める道具一式だった。

色とりどりそろってる。

「…私は嫌よ」

「なんでよ?きれいになりたいと思わないの?それにこの髪染める道具は髪を傷めないわよ?」

「…失敗した場合どのくらいで落ちるの?」

「この道具を使えば5分かからないわ!」

「…」

「迷ってるならすぐやる!私もやるから!じゃあまずは黄土色」

「なんでそんな暗い色なのよ!大体私は金髪よ?黄土色だってほとんど黄色じゃない!?!」

「私は明るい茶色なのよ。黄土色、試してみたかったけど。じゃあピンクは?」

「それなら、まあ」

「じゃ、決まりね。じゃあ、まず私から」

〜10分後〜

…遅いわね。

これには、「7分でできる!」ってでかでかを書いてあるけど。やり方が分からないのかしら。

〈ガチャ〉↑扉が開く音

あつ、きたわね。

「どうだった…って、やってないじゃない!」

「いや、その、予想以上に似合わなくて」

相当へこんでるわね。

「じゃ、私もやってくるわ」

「似合うといいわね」

ふう、リリアがあればほどへこむなんてどうなったのかしら。

まあ、私もやってみれば分かる話ね。

えつと、まずはこれを…。

〜10分後〜

「マーシヤ、どうなった?」

「もうちよつと待って!」

やばい。これは超やばい!

まさかこれほどにまで似合わないとは！

リリアがへこむ理由がわかるわ。

早く落とさないと！

～3分後～

「はあ～…」

「ちよつと、なんで見せる前に落としてるのよ！」

「あんたも見せなかつたでしょ。それにカメラで撮られると思ったからよ」

「そりゃ、そうでしょ。じゃあ、次これね」

「アンタも懲りないわね…」

～2時間後～

部屋中に沈んだオーラが立ち込めている。

「まさか6種類試してもここまでとは…」

「まったくね…。やっぱり変わりたいなら服にするべきじゃないかしら？」

「いや、私はあきらめないわ！それにまだ数十種類残ってるのよ」

…だめね。

このままじゃ時間をかけて全部試すことになってしまっわ。

ちようどお昼時だし少し頭を冷やしてもらわないと。

「リリア、お腹も減ったし少し休憩にしない？何事にも休息は重要よ？」  
「…それもそうね。じゃあ、食堂に行きましょう」

これで少しは頭冷やしてくれるといいんだけど…。

～12:30～

「私は、味噌ラーメンで。リリアは？」

「私はサンドイッチ定食にするわ」

それぞれ会計を済ませ席を探す。

「どこにしようか…、あれリヨウたちじゃない？」

「クロもいる？あの子いじりがあって楽しいんだけど」

「いるわよ。自分の目で見なさいよ」

「私が目悪いの知ってるでしょ？」

「なんで治療だったりメガネをかけたらしらないのよ？」

「素のほうが可愛いかと」

「メガネっ子にも需要はあるわよ」

話しながらリヨウたちに近づく。

「リヨウ、ここ座っていいかしら？」

「どうぞ。なんか久しぶりな気がするな」

「医務室以来だもの。大体1週間くらいかしら？」

「恋人が一週間も会わないで辛いわね…」

「恋人!？」

「違うぞ、クロ。誤解だ」

「で、恋人のリョウとその友達のクロ君に質問なんだけど」

「何度でもいうぞ？違うからな？」

「今私たち髪をいじってるんだけど」

「髪を？」

「ええ、でね、さつき6種類ぐらいやってみたんだけどどれもしっくりこなくて」

「何か似合うような色ないかなっていうわけ」

「似合う色…ねえ。」

「ん…」

2人とも悩んでるわね。

まあ、私たちでもわからないことを訊くの事態が間違ってるような気がするけど。

「俺は赤だと思おうな」

「赤ねえ…。なきにしもあらずね」

「僕は緑色が見てみたいなあ」

「緑ね……って見てみたいだけかよ」

「いや、意外とありかもしんねえぞ？」

「意外とつて。まあ、一応候補にはあげておくわ。全部やってみるけど」

「ならなんで訊いたんだよ」

「通過儀礼？」

「使い方間違ってるよ、それ」

「ていうかなんで髪なんだ？服とかアクセサリとかあるじゃねえか」

「アクセサリ？なにそれ？」

「あ、いやなんでもない」

「……」

また、よくわからない単語言った。

そういえば最近は忘れてたわね。

リヨウが一体何者なのかって。

正直今となってはどうでもいいよう何もするけど考えれば知ってみたいような気がするのよね。

一時期は違う世界から来たのでは？なんていうわけの分からないことも考えたけど

結局考えるだけにとどまったもんね。

「マーシャ、何ぼーつとしてるの?」

「えっ? ああ、いや何でもないのよ」

「さっさと戻って髪いじるわよ」

「本当にまだやるのね…」

「いい色が見つかるか、全部試すまであきらめないわ!」

「そこまでやる気になれる理由が分からないわ」

「まあ、がんばれよ」

「完璧に他人事ね」

「実際、他人事だしな」

はあ、これなら1人で過ごす方がマシかもしれないわね。

く1:30く

「よし、じゃあこれから始めましょ」

まず取り出したのは緑色だ。

「リヨウが真剣に考えた色は使わないのね」

「そういうのは最後のお楽しみにするのよ」

「緑なんてネタにしかならないと思うんだけど」

「何事も実践しなきゃわからないわよ。じゃ、最初はマーシヤね」

「私から？」

「朝は私からしたでしょ？だから次はマーシヤから」

「…分かったわよ」

～2：30～

「あと何種類ある？」

「…38種類」

「朝数十種類って言ってなかった？」

「ちゃんと数えてなかったのよ」

「もう今日はよくない？」

「あともう少し、もう少しだけ…」

「…」

～3：30～

「リリア…」

「…あともう少し」

「…」



「4:30」

「マーシャ見て！」

何よ？ようやくいい色でも…って

「リ、リリア、あんた大丈夫？」

リリアの髪は虹色になっていた。

おそらくパーティ用の道具を使ったのだろう。

「私、超きれいいじゃない？」

「リ、リリア？」

やばい、目が光を失ってるわ。

「リリア、とりあえず、色、落とそう？」

「みんなに見せてくる！」

ちよ、それはまずいわよ！

あつ、転移装置のほうに行こうとしてる！

「やめなさい、リリア！正気に戻って！」

「どけええええええええええ！」

ええええ!!

あんたそんなこと言う人だった!?

こうなったら気絶させても止めて見せるわ！

それが友達である私に唯一できることよ！

腹に一発入れておしまい。

「はああああ！」

マーシヤのパンチがさく裂！…しなかった。

なんとリリアはそれを避け攻撃したマーシヤの腕を掴み背負い投げをしたのだ。

「ええええええ！！ごっくっ！」

マーシヤを投げ飛ばしたリリアはそのまま転移装置へ向かい、外へ出てしまった。

「リリア…」

まさか私が負けるなんて。

火事場の馬鹿力ってやつかしら。

まあ気の毒だけどこれで私も髪を染めなくて済むわね。

とりあえず片づけを…ってこれを私一人で片づけるの？

足の踏み場もほとんどない部屋を見てマーシヤは愕然とした。

く6:30く

「や、やっと終わった」

まさか片づけだけに2時間もかかるなんて。

今日は踏んだり蹴ったりね。

晩飯ぬいて寝てしまおうかしら…。

…そういうえぱりヨウが言っていた赤、まだ使ってなかったわね。  
時間あるしやってみようかしら。

～10分後～

「…」

…。

…。

…結構いけてる？

思ったよりいけてる。

ていうかい。

あいつ、人を見る目あるわね。

なんか使い方違うような気がするけど気にしない。

折角だし、しばらくこれでいってみようかしら。

で、でもそれだと私がリヨウの言うことを素直に聞いたみたいでなんかねえ…。

恋人っていう噂も立ちかねないし。

で、でもそれはそれで……って何言ってるのよ私!!  
べ、別にあいつのことなんて……。

……最近おかしいわね。

あの騒動があつたあたりからだわ。

やっぱりあいつのことかっことかいいと思つたのかしら。

まあ、男らしかつたのは間違いないけど……。

……。

とりあえず髪の毛どうか見てもらつてこようかしら。

食堂にいるといいんだけど。

マーシャは食堂に向かつた。

彼女自身は気づいていなかったがその時の顔は見た人によると、とても嬉しそうだったという。

## 平和な日常

「はい、みんな。久しぶりなのは分かるけど席に座ってね」

今リョウたちはBクラスに集合している。

魔科祭以来の集合である。

今は、クラスの担任であるフレア・ランパードの話聞くため席に座ろうとしている。

「今日集まってもらったのは、配布資料があるからなの」

資料が配られていく。

紙にはポップな感じで〈魔法と科学の親睦会♪〉と書かれていた。

「（：学校の行事なのに親睦会？）」

少なくともリョウはそう思った。

クラス全員に資料が配られたことを確認するとフレアは話し始める。

「知って人もいるかもしれないけど、2週間後くらいに親睦会があります。同じ学年の人しか来ないからそこは安心してね。詳細は資料を読んでほしいんだけど今回の目玉行事は「ダンス」よ」

先生の口が楽しいものを見つけた時のように吊り上がり、目がいたずらっ子の目に変

わる。

リヨウはこの時、なんで踊りじやなくてダンス?と思っていたがもう突っ込むのもばからしくなってきたので、できる限り考えないようにした。

「めんどくせ〜」「楽しそ〜」「いい服あるかな」などの声が聞こえてきた。

「しかも!この行事には賞品があります!」

生徒の声が「おお〜!」で重なる。

「ただ、資料にも書いてあるんだけど賞品がほしければ正式に参加しないといけないの。参加方法は2人組をつくること。参加用紙は資料の下についているから組んだ人と一緒に腕輪に読み込ませてね」

「賞品はなんなんですか〜?」

「それは教えられないの。でも去年は5万銀(銀II円)と、校内の売店で一年間商品がすべて20%割引になる切符だったわよ」

「お、おお〜?」

5万はすごいが後ろがいいのか悪いのかわからず、微妙な反応になってしまった。

「ともかく!正式な参加者が多ければ多いほど盛り上がるからぜひ参加してね。じゃ、今日はこれで解散」

「参加する？」

「俺はしねえな、たぶん」

「私は出たいですね…。今月やばいんですよ」

「そりゃ、あんな面白い物すればそうなるわよ」

リヨウは今、Bクラスでマーシャとフィリアとで「親睦会」について話している。

「フィリア！同盟を裏切る気か!？」

「それとこれとは話は別です！マーシャさん、組んでくれませんか？」

「フィリア。ペアは男女じゃなきゃいけないのよ？」

「そうなんですか。じゃありヨウさん」

「それも駄目ね」

「できれば俺は出たくはないが、なんでだ？」

「ここ、読みなさい」

マーシャが指をさした場所には

参加条件 その①男女の組であること（1人対1人である）

その②学年が同じであること

その③今回の親睦会は普段顔を会わせることがない魔法と科学の生徒の

仲を進展させるためのものであるので、魔法側の生徒は科学側と、科学側の生徒は魔法側と組むこと

「……」

「わかった？」

「……これはないです」

「これじゃ、参加する人が極端に減っちゃうんじゃないか？」

「そうね、だから一年生の頃は幼馴染とかが組んで出るくらいしかないと数は少ないらしいわよ。まあ、どうしても出たいなら今日から食堂に毎日通えば？」

「なんでだ？」

「今日から食堂が科学と魔法の、共同になるのよ。2週間の間だけね」

「そんなことできるのか？」

「食堂につづく転移装置の行き先を変えればいいだけじゃない」

「……科学つてすげえ」

「マーシャさんは出るんですか？」

「私は誘われたらどうか分からないけど自分からは出ないわ」

「フィリアはどうするんだ？」

「私も今回はちよつと遠慮します。知らない人とダンスはちよつと」



「だよな。じゃあ今回の親睦会は食事を楽しむのが一番になりそうだな」

「まあ、いいじゃないですか。タダ飯ですよ」

「なんか悲しい親睦会ね……」

「もはや親睦会でもないような気がするけどな」

そんなことを言いながら時計を見ると6時だった。

「ここから食堂に向かえば少し早いがちょうどいい時間だ。」

「じゃ、俺クロとや——」

「リヨウ君、フィリアちゃん、レックス君、リン君、ベル君。いる〜？」

突然、フレア先生が息を切らせながらクラスに入ってきた。

クラスには呼ばれた5人のうち2人しかいなかった。

「私とリヨウさんしかいません」

「私の失態ね。あとで電通送らないと」

「で、なんですか？」

「はい、これ」

「?」

プリントが一枚ずつ2人に渡される。

そこには〈魅せろ！選ばれし者〉と書いてあった。

今リヨウはマーシヤとフィリアに加えクロと一緒に食堂に向かっている。

しかし、リヨウとフィリアの雰囲気はどう見ても重いように見えた。

「なにかあったの？」

「どうも2人ともダンスを強制的に踊らなくちゃいけなくなったらしいのよ」

すると覇気のない声でフィリアが

「2人ともじゃないです。でも5人の中から1人はでなきゃならないそうです」

「あの3人に任せられるとおもうか？」

「間違いなく嫌がりますね。そうなった場合、じゃんけんですかね」

「勝てる気がしねえよ」

「というわけらしいわ」

「じゃんけんできるなら別にいいんじゃないの？」

「この2人、じゃんけん弱いだよ」

「じゃんけんに弱いも強いもないような…」

「この2人は特別な。最大24連敗よ」

「ある意味強運だね」

クロが感心する。

まあ、確かに確率で言えば恐ろしいことになるからそれもそうだろう。

「あんたはダンスでるの？」

「出るよ」

「でるの!?!」

「幼馴染がいるんだ。でも今回は一年生でも出る人、多いみたいだよ」

「そうなのか？」

「それなら少しは緊張が緩みますね」

少し2人がホッとしたところで食堂についた。

見た目は変わってないが、確かに制服が少し違う生徒が見えた。

「…なんか緊張しますね」

「そんなんじや、代表に選ばれたときあんた倒れるわよ?」

注文する場所やメニューは特に変わってなかったのでもいつも通り注文を済ませる。

「あの、リョウさん」

「なに?」

「以前私を介抱したって言ってた人、いますか?」

「え〜つとね…」

あたりを見渡してみる。

白い髪なんて普通なら目立って仕方ないが、ここでは髪が思ったよりカラフルなので目立つようなことはないようだ。

しかし、パーマがかかっている人は地球よりも少ないので結構強かったはずだからすぐ見つかるかなと思いつながら探す。

すると、友達らしき人と食べているのを見つけた。

あっちも気づいたらしく軽く会釈してきた。

リヨウは3人を連れてそっちへ向かう。

「お久しぶりです。リヨウさん」

「久しぶり。この前は助かった」

「戦闘要員になれなかったんですよ？俺は何もしてませんよ」

「そんなことないよ。本当に助かったんだ。フィリアがお礼を言いたいらしいんだけど」

と言いつつながらフィリアのほうを見ると口を開けて静止している。

「フィリア？」

呼ばれると我を思い出したように「はっ!？」と言う。

「リョウウさん、本当にこの人ですか？」

「そうだけど？」

「…」

買ってきた日替わり定食をテーブルに置くと

「そ、その節はお世話になりました！」

と、人見知りのフィリアらしくないハッキリとした口調でお礼を言う。

頭もしつかり下げられており、謝りに来た会社員のようだ。

「お久しぶりです。フィリアさん」

「知り合いなのか？」

「休日にしあつたことがあるんですよ」

「その時もお世話になりました！」

「フィリア、どうしたのよ？」

マーシヤが尋ねるとマーシヤに以前のことを説明する。

「へー、そんなことがねえ」

「本当にありがとうございます！」

「やめてくださいよ、僕だって楽しめましたから」

「おかげで俺はあいつらの餌食になったけどな」

友達らしき人が入ってきた。

「あんたがリヨウ・アマミヤかい？俺はシユールス・D・ジルリアだ」

「よろしく」

握手をしようと右手をだすと、少しジルリアは驚いた顔をしてから応えた。

「ネーム持ちである俺に握手を求めるなんて、お前肝座ってるな」

ネームってなんだと訊きたかったが、常識だとなんか嫌だったのでそこはスルーする。

「ケイトが世話になったみたいだな」

「初の人もいるので改めて自己紹介します。ケイト・N・フェニーチェって言います。よろしく」

「クロツエフ・アリアジートって言います。クロって呼んでください」

「マーシヤ・クリーシヤよ」

「2人ともよろしくお願いします。さつ、自己紹介も済みましたしみんなで食べましょ。席空いてますからどうぞ」

リヨウたちは席に座る。

「あゝ」

座るとすぐにマーシヤが遠慮がちに尋ねる。

「2人は今回の親睦会でダンスってする？」

「僕は不参加ですよ」

「俺は参加するぜ」

それを聞いてリヨウがフィリアに小声で話しかける。

「フィリア、ケイトと組んで出たらどうだ？」

「何言ってるんですか！あれだけお世話になったのに頼まれてもしない限り嫌ですよ！」

本音は目立ちたくないからである。

「でも、今年は参加者が多いですよね。7割くらいだったかな」

「「えっ？」」

「そんなにいるんですか？多いっては聞いてたけど」

「なんでも賞品がすごいつて噂があるからだそうですね。俺じゃ、いくらそれでも知らない人とは組みたくないですけどね」

「お前もつと積極的になれよ。彼女そのままじゃ出来ないぜ？」

「大きなお世話だよ」

…まさか傍観者の方が少なくなるとは。

が、少し驚きながらも大してリヨウは気にしてなかった。

ケイトの言う通り知らない人と組む方が彼にとつてはありえなかつたのだ。ところがフィリアの方をむくとなんか悩んでいる顔をしている。

「フィリア？」

話しかけると突然吹っ切れたかのように顔を上げる。

「：リヨウさん」

「なに？」

「ごめんなさい」

そう言うとりヨウの返答を待たずフィリアは

「あの、ケイトさん！」

「ん？何ですか？」

「私と組んでくれませんか？」

ケイトは驚いたが、二回ほど瞬きをすると

「僕なんかでよければいいですよ」

するとフィリアは小さく、注意してみなければ分からないほどちいさくガッツポーズをとった。

いきなりのことですべていけないうちにやけながらマーシャが

「まさかあの子の方が先に組む人見つけるなんてね」



「えっ?えっ?」

「リヨウ、同盟はたった今消えてなくなつたわよ」  
リヨウの時間が止まる。

∴。

∴。

「う」

「どうしたのリヨウ?震えてるよ?」

クロに話しかけられてからたつぷり10秒後

「裏切り者おお!」

叫びが食堂の一部に響き渡つた。

フィリアの顔はなぜか達成感に満ち溢れていた。

## 秘密の女子会？

「…暇ね」

「なら勉強したらどうです？」

「あんた暇なら勉強するの？」

「私はしません」

「なら勧めないでよ」

朝8時、水曜日、マーシャとフィリアは部屋でくつろいでいた。

フィリアの部屋替えは少し前に終了した。

家に帰っていた生徒がようやく帰ってきて仲直りしたそうだ。

そして今は、平日にもかかわらず部屋でゆっくりしている。

理由は今日が休みだからだ。

親睦会を2週間前に控え、月曜日からその日まで休みになったのだ。

休みになった理由は、それぞれでダンスの打ち合わせや練習、或は会場の準備など

様々だ。

とはいっても練習している人は少なく、ぼーっとしている人がほとんどだ。

フィリアも練習は明日からで今日までは暇である。

「なにかおもしろいことないかしら」

「一日中ぼーつとするのも悪くないですよ」

「あんたは何してるのよ？」

「ダンスできる衣装探しです」

「あんたかなりやる気ね…」

「最近おしゃれに目覚めましてね」

そう言いながらオシヤレ系の雑誌を手に取り見せた。

表紙には「素人にも分かる！オシヤレの極意」と書いてあった。

「…もつと週刊とか月刊とかで出してるやつ買うべきじゃない？」

「そんなのあるんですか？」

「そっちの方が知られてるわよ。そんな本の方が逆に珍しいわね」

「いいんですよ。今は。それにダンスの衣装はインターネットで見てますから大丈夫です」

そう言いながら候補に挙げたらしき衣装を見せてくるが…

「…こんなの買えるの？」

「何がですか？」

「家でこんなのお買おうとしたら、パパの雷が間違ひなく落ちるわよ」

「うちは、せつかくの晴れ舞台なんだから奮発するわって、言ってくれました」

「あんたんちもしかしてお金持ち？」

「そうでもないですよ。母が寛大なだけです」

話していると2人に同時に電通がきた。

開いてみるとリリアからの電通だった。

「今日の14時から私の部屋集合！男子禁制、秘密の女子会やりま〜す♪」

「…来る人たちは誰なんでしょう？」

「私たちを呼ぶんだからそんな知らない人は呼ばないと思うけど」

「でもリリアさんの人脈、なかなかですよ」

「それも含めてよ。ま、暇だったしちようどいいわね」

「私は時間が惜しいんですけど…」

「さっ、行くわよ」

「早すぎません!?!まだ8時半ですよ!?!」

「善は急げよ!」

「そ、そんなあ〜…」

フィリアは無理くりマーシヤに連れていかれ行つた。

「お菓子準備よし！飲み物よし！来ている人の人数よし！」

「よくないわよ！何この来ている人の人数!?!」

「だってあなたたちしか誘ってないもの」

「3人じゃ女子会って難しいんじゃない？」

「じゃ、男子呼ぶ？」

「もはや女子会じゃないじゃない！文面に書いてあった男子禁制はどこにいったの!?!」

フィリアたちは今フィリアの部屋に居る。

9時ごろには到着したのだがフィリアが「準備終わるまで待ってて」なんて言うから5時間フィリアの部屋でくつろいでいたのだが今になってようやく他に誰も来ないということに気づいたのだ。

「分かったわ。本当のことを言うわ。あなたたちを今日呼んだのはある作戦に協力してほしいからよ」

「ある作戦？」

フィリアの目が真剣になり、マーシャとフィリアも自然と唾をのんだ。

「その作戦は…?」

「…ある写真を新聞部から奪い取ってくるって言う作戦よ」

「なんであんたはその写真を奪い取らなきゃいけないの？」

「それは…私が見れないからよ」

「？」

「その写真はある先輩がとつたものなんだけどね、…なんかすごいらしいのよ」

「どういう風に？」

「それを確かめたくて奪いに行くのよ！」

「内容も分からないものに対して危険な賭けに出るのはちよつと…」

「ねえ…」

するとリリアは何枚かの写真を持ってきた。

「なによそれ。ここでも出されると嫌な予感しかしないんだけど」

無言で一枚の写真を置く。

そこには泣きながらリヨウに抱き付くマーシャが写っていた。

フィリアが顔を少し赤らめて口に手を当てる。

「うわあ…。マーシャさんとリヨウさんって」

「違うわよ、フィリア！これは誤解よ！」

「断ればこれが出回るわ」

「あ、あなた、それでも友達なの!？」

「今は私も瀬戸際に立たされてるの!悪いけど四の五の言ってる場合じゃないわ!」  
「でもこれ見て納得しました」

まったく意味が分からないことをいうフィリアに

「何が分かったのよ?」

「髪の毛の色を変えた理由です。はじめは似合ってはいましたが、なんでかなあ、つて思ってたんです。こういう背景があつたんですね」

「べ、別にあいつのいうこと聞いてこうなつたわけじゃないのよ!私がいいと思ったから染めたままにしてるのよ?」

「はいはい、そうですね」

「軽く流してるんじゃないわよ!」

2人で少し盛り上がっているため、リリアが少し震えていることに2人は気づかなかつた。

今度はマーシャやられっぱなしではいけないと少しジャブを繰り出す。

「あんただってケイトとかいう奴といい感じになつてるらしいじゃない!」

「あの人は私を助けてくれただけでそんなじゃありません!」

「でも服だつて一緒に選んだんでしょ?まさに恋人じゃない!」

「こ……！恋人だなんて、あの人が困るはずですよ！絶対にあの人の前でそんないじり方しないでくださいよ！」

「おまけにダンスだつて一緒に踊るじゃない。絶対できてるって思われるわよ」

「そんなことないですよ！でも迷惑かけないようにしないと……。つて、話はそれましたけど私は関係ないですから失礼しますよ？」

するとリリアはさらに一枚写真を置く。

そこにはダサイ時代のフィリアが写っていた。

以前のフィリアならどうでもいい話だがオシャレに目覚めつつある彼女にとっては黒歴史だ。

「いやああああああ！」

「断ればこれが出回るわ」

「これくらい、別にいいじゃない」

「嫌です！これ、かなりダサイんです！」

フィリアは周りが思っている以上にダサイと思っっているようだ。

リリアは追い打ちをかけるように360度すべてから撮った写真を置いた。

「……」

「フィリアが完全に停止したわ……」



「答えは出た様ね」

そう言うとりリアは自信満々な顔で立ち上がり

「それじゃ、今から『秘密?そんなもの新聞部の前では無力よ!』作戦を開始するわ!」  
「作戦名、長!っていうか3人中2人が新聞部じゃないんだけど…」

「ここが、新聞部の拠点よ!」

「広いですね…」

今、三人は新聞部の活動場所である部屋に来ている。

新聞部の活動はその名の通り新聞を発行して校内の生徒や先生に配る。

また、こここの新聞部は校内で広告としての役割も果たしており、宣伝をしたい!と言う人はここに広告の依頼をするのだ。

この時代、紙媒体なんて古いという考えが強く根付いているが「紙にだっていいところはある!」と言う人が主に入部している。

機材は現代のものを使っているためカラフルな新聞がこの学校では主流になってい

る。

「簡単に入っちゃったけどいいの？」

「ほかの部員は今はずんだンスの練習中か、部屋で寝ているわ。今日から3日間、新聞部は休みのなの」

「それでも来る人っているんじゃない？」

「可能性はあるけど、まあ何とかなるわ」

部屋の真ん中を堂々と進んでいく。

ある部屋の前に来るとリリアは腕輪をかざしロックを解除する。

「ここは？」

「部長の部屋よ」

「それってまずいんじゃない？」

「だからお忍びできてるのよ」

「お忍びとは思えないほど堂々と歩いてきたけどね」

部屋に入るとリリアは立ち止まり2人のほうを見る。

部屋は床が畳でできているこの世界では珍しい構造をしていた。

本棚が並んでおり、資料や写真が無造作に置かれているように見える（それでも整理しているらしい）

「この中のどこかに！私の探し物があるわ！作戦開始よ！」

「何を探せばいいんですか？」

「この情報チップと同じタイプの奴よ」

手に2cmほどのメモリーカードを持ち出す。

「こんな小さいものを？」

「この部屋だつて6畳くらいしかないわ」

「ずいぶん面倒な話ね…」

「嘆いてたつてチップは出てこないわよ？き、探した探した！」

リリアは張り切りながら、マーシャとフィリアはため息をつきながら探し始める。

「またあつたわよ…」

「それ貸して」

「これでもう8個目ですよ？まだ見つからないんですか？」

「一枚のチップに膨大な情報が入つてて全部確認するのに時間がかかるのよ」

「それだけあればどれかに入つてるんじゃない？」

「探す手を休めない！」

探し始めてから2時間マーシャとフィリアは部屋からチップを、フィリアは内容の確認をしている。

「新聞部の部長の部屋と言うだけあつていろいろなもの置いてあり探すのは骨が折れる。」

マーシャに至つては「最近こんなことばかりね…」と幾度となく呟いている。

始めはいけないことをしている十宝探して少しはテンションも上がつていたのだが終わりの見えないミツシヨンは誰でもやりたくないものである。

「もう疲れました。少し休憩させてください」

「そんなんじや親睦会のダンス踊りきれないわよ?」

「絶対こんなに精神的に体力削つたりしませんよ」

「見つからないならいつそのことドールですべて壊す?」

「それも考えたけどあとが面倒だからいや」

「なんでそんなに冷静にツツコんでるんですか!? マーシャさんも絶対だめですよ!」

そんなマーシャが軽く壊れ始めるとき、フィリアは気づいたことがあつた。

フィリアの表情だ。

楽しみに探し物を探しているというよりは、見られてはまずいものを急いで探しているように見えるのだ。

口では冷静にふるまっているが確実に焦っている。

「なんかあやしいですねえ…」

すると、部屋の外で足音がした。

「!!」

確実に近づいている。

「ちよ、誰か来るわよ!?!隠れないと!」

「隠れるってどこへですか!?!」

「2人とも落ち着きなさい。ここは部長室よ。部長の許可もなしにここに入ってくる部員はいないはずよ。それに入ってきたとしても…」

「私たちと似たような目的で来た確率が高い。ですか?」

「そう。利害が一致していればむしろ人手が増えるのと一緒よ。いいことじゃない」

「もし部長だったら?」

「…地獄よ」

足音は近づいてくる。

「ね、ねえ…」

「大丈夫だから、静かにしなさい」

足音は部長の部屋の前まで来た。

「「……」」

足音はそこで止まった。

← 小声

「足音、部屋の前で止まりましたね？」

「やっぱりその部長なんじゃ」

「いやきつと私と同じく思ってる人が同じようにここまで来たのよ。で、今部屋に誰もいないか様子をうかがってるのよ」

「た、確かにつじつまはあいますね」

「でも、長くない？」

「きつと用心深いなのよ。もしかしたら私たちの声が聞こえたもんだから悩んでるのかも」

「どうします？」

「仲間は多いほうがいいわ。迎えに行ってくるわ」

「だ、大丈夫!?!」

「チップは持ったまんまだから、もしもの時は走って逃げるわよ」

「了解です」

「分かったわ」

マーシャとフィリアはそれぞれドアの真横につき、部屋に入る人からの死角に入る。

フィリアはドアの前につき、2人の顔を見る。

2人ともうなずき準備万端だ。

フィリアは深呼吸をして…、ドアを開けた。

「こんにちは、ぎゃー!」

ドアを開けてすぐ、フィリアの頭がドールを装備した手によつて持ち上げられる。

フィリアとマーシャはあまりの出来事に動くことができなかつた。

1人の女の人がフィリアを持ち上げながら入ってくる。

背が高く180cmほどで、青い髪のショートカットだ。

クールな顔つきをしていて、女子にもモテそうだ。

「おい…。誰が勝手に俺の部屋に入っているって言うんだ?」

「ぶ…、部長」

フィリアが愛想笑いをしながらおびえていた。

「俺の部屋に勝手に入ったって意味、分かっているよな?」

声のトーンは怖いのが、口が笑っているように見えた。

マーシャたちの方をむかずに2人に

「そこの2人!」

「は、はい！」

リリアの頭は依然持ちあげられたままである。

「今日の仮入部はここまでだ。これからはお楽しみみの時間になるんだが…それも見ていくか？」

「し、失礼しました！」

「ちよ、あんたた——」

「よし、なら帰れ。道は分かるな？」

「は、はい！」

そう言うと、マーシヤたちは全速力でその部屋を後にする。

後ろから「いやあああああああ…」という悲鳴がしたが後ろを振り向くことはなかった。

翌日、フィリアはダンスの練習に向かったがマーシヤは暇だったのでリリアに会いに行った。

リリアはベットの上で真っ白になっており、ルームメイトの呼びかけにもまったく答えないという。

何があつたか訊いても、リリアは一言も話さずそれが3日間続いた。



## 男子会から浮かび上がる疑惑

「リヨウ、はいこれ」

「これは何だ？クロ」

夜9時、リヨウは部屋に居る。

親睦会のおかげで休みがもらえたのだがダンスの予定もないので正直暇である。

そんなリヨウにクロが1枚の紙を渡した。

紙には「男子会への招待状」と書いてあった。

「明日ね、みんなで男子会でもやろうかなあって思ってたね」

「へ、へえ…」

正直リヨウは嫌だった。

地球にも女子会はあったが男子会なんて聞いたことがない。

いや、もしかしたらあるかもしれないがあまりメジャーではないのだ。

少なくともリヨウは聞いたことがなかった。

「(男子会かあ。そんなむさくるしそうなものが存在するなんて…。できれば参加したくないけどクロの誘いだしなあ)」

クロのほうを見ると、いい返事が帰ってくるのを確信しているがのごとく嬉しそうな顔をしている。

この顔を見ると断ることはできない。

「わかった。明日も暇だし参加するよ」

「本当!? ありがとう! あと、レックス、ケイト、シユールレスも呼びたいんだけど」

「いいんじゃないかな」

「だよね! 電通しておくよ」

喜びながら電通をうち始める。

男子会の前に合コンを味わってみたかったなとリヨウは少し落胆していた。

しかし、テンションがかなりハイになっているクロは気づくことはなかった。

朝10時、リヨウの部屋にはクロが呼んだメンバーのうちシユールレス以外が集まった。

「せっかく誘ってもらったのにゴメンね。シユールの奴、ダンスの練習に夢中でね」

「いやいや、事情があるなら仕方ないよ」

「で、今日のこの集まりは何だ?」

「男子会だよ？」

「それは分かっている。いったい何をするのかと訊いてるんだ」

「それはこれから」

「「決まってるのかよ！」」

話はそこから始まり話は思ったより盛り上がった。

主にバトルのことだったが、気づけば一時を過ぎていた。

「お腹もすいたしご飯食べに行かない？」

「そうですね。賛成です」

「ワリイ、俺2時から約束があるんだ」

「ダンス練習？」

「ああ。1分でも遅れれば八つ裂きにされちまうしな」

「そんなに気が強い奴と組んだのか？」

「いつもはおとなしいらしいんだが起こると怖いそうだ」

「へえ」

「ということ、じゃ」

レックスは先に部屋を出ていった。

「みんなダンス練習大変だね」

「お前はいいのか？」

「これでも小さい頃ダンス習ってたんだよ」

「へえ。うらやましいですね。僕は正直初心者も同然で」

その時リヨウは、ダンスのことについて話したクロの顔が一瞬、笑ってはいたが少しゆがんだように見えた。

しかし、今は普通に笑っている。

「（…気のせいかな？）」

「さ、ご飯食べに行こう！リヨウも立って」

「あ、ああ」

3人は食堂へ向かった。

「僕カレーライスで」

「から揚げ定食を」

「激辛麻婆豆腐をください」

3人は学食で飯の注文をしている。

「ケイト君、それ食べられるの?」

「もともと、麻婆豆腐大好きなんですよ。ここの辛さは癖になるものがあってね」  
ケイトの手に赤く染まった麻婆豆腐が置かれる。

この麻婆豆腐はこの学食では有名なものの一つで主に罰ゲームに使われる。  
それほどまでに辛いのだ。

「俺から見たら罰ゲームだな」

「僕から見ればご褒美なんですよ」

座る席を決め、飯を食べ始める。

クロトリヨウをはじめケイトがどういう風に麻婆豆腐を食べるのか気になって見ていたが、本当においしそうに食べるのを見ると「マジか」と思ったが何の行動も起こさず普通に食べ始めた。

余談だが本当においしそうに食べるもんだから食べたことない人が、「食べてみたいなあ」と思い食べてひどい目に遭ったという被害者が沢山いることを彼は知らない。

「ねえ、ケイトってネーム持ちなんだよね?」

「はい。Nですね」

「得意魔法は何なの?」

「回復魔法です。戦闘じゃ役に立ちませんけど」

「そんなことないぞ。その魔法のおかげで俺は助かったようなもんなんだからな」  
「俺は君を回復させた覚えはありませんけど」

「レックスやあの姉妹を回復してくれたおかげで敵が減った。本当に助かったよ」  
するとクロクが目を輝かせながら

「それってあの魔科祭での事件のこと？」

「そうです」

「2人の活躍聞かせてよ！」

「僕は戦ってませんよ。リョウさんに訊くのが一番です。二段階目にもなっていました」  
それを聞くのは？」

「それも風の噂で聞いたよ！本当なの!?!それってつまり10年に一度の逸材っていうことじゃん！」

「そんなすごいものじゃないよ。逸材って言ったって別に……」

話していると遠くにマクアドル先生を見つけた。

こつちが気づいたのが分かるかと手を振ってきた。

「(タイミングがいいんだか悪いんだか)」

「ゴメン2人とも！急用思い出したんだ」

「えー、続きは？」

「また今度だ。それに聞きたきや部屋でいつでも聞けるだろ？どうしても聞きたかったらケイトの知ってる範囲で聞けば？」

「僕の知ってる範囲なんてたかが知れてますよ？」

「うゝ…。まあ急用じゃ仕方ないか。後で埋め合わせしてよ？」

「もちろんだ。じゃ、また」

そう言うとその席を立ちお皿を片づけるとマクアドルの方へ向かった。

「悪いねえ、せつかく友達と楽しくしていた時間に」

「いえ。で、用は何ですか？」

「本題の前に訊きたいことがあるんじゃないのかい？」

「どうしてそう思うんです？」

「絶対に君が意味の知らないであろう単語がでていたからね」

「…」

「別に必要ないならいいんだけどね？本題入っていいかな？」

「…いつ、思ったより察がいいんだな。」

「…ネームってなんですか？」

「やっぱり質問あつたんじやないか」

うまくいったと言わんばかりの顔をつくる。

「ネームっていうのは言いかえれば才能だ」

「才能……ですか」

「この世にはねそこに生まれれば間違いなく魔法の才能が備わる家系があるんだよ。さらにその家系は何かの魔法に特化しているっていう特典付きでね」

「そんなことあるんですか？」

「君だつて見てきただろう？ レックス君たちが戦つたクリティウス姉妹を覚えてるかい？ あの子たちは確かじだつたかな。炎の魔法が得意だつたんだろうねえ。すごいものを見せてもらったよ」

「努力であそこまでいくのは？」

「不可能だ。仮に生まれてすぐに特訓を始めたとしてもあそこまでいくことは出来ない」

「絶対なんですか？」

「絶対だ。何度も実験されたが結果はすべて失敗だつた。人間の寿命を人間のままで永遠にするのと同じくらい無理なことと言う結論に至つたそうだよ」

残念だよな、と言いながらさつき食堂で買ったらしきパンを取り出し食べ始める。



飲み物はお酒らしく匂いが漂う。

「それはいったい何人存在するんですか？」

「不明だよ。例えばUだったら親のどちらかがそうであるのは間違いない。でも、その後生まれてくる子供に受け継がれるかは分からないんだ。クリティウス家は運よく2人ともに受け継がれたみたいだけどね」

「なるほど…。じゃあ絶えてしまった家系も？」

「私が知ってる限りではB, E, Vの3つがこの国からはいなくなってるね」

「この国から？」

「もしかしたら帝国にはいるかもしれないということだよ」

最近、ビムと戦った後からリヨウは戦争のことを少し真剣に考え始めていた。

別に地球に帰るのをあきらめたわけではない。

ただ、今のリヨウにはこの世界も大切な世界の1つなのだ。

正義感の強い（地球では学校の授業はさぼったりしてたが）人柄なのでなおさらだ。

「さて、ネームのことについて知れたことだし本題についてはなそうか」

「それは？」

「君にある人の監視をしてほしいんだよ、君にね」

「監視…、ですか」

もちろん驚いた。

リヨウの経歴にスパイ活動なんてなければ殺し屋だったことさえありはしない。

普通の学生を過ごしてきたのだ。

そんな彼に監視なんて人違いもいいところだ。

「あの、そういうのはちよつと」

「いや、別に君が知らない人を見はれって意味じゃないんだ。生活している範囲で変わったことがあつたら教えてほしいっていう話だ」

「ホントにそれだけでいいんですか？」

「うん。それだけでいいよ」

「それだつたらかまいませんけど…、なんで俺なんです？」

もつともな質問だった。

監視をするなら、小さな出来事に気づくならプロがやったほうがいいのは明白だ。

「監視してほしい対象がね」

「相手は誰なんですか？」

マクアドルは食べていたパンを置き、言いくいのかリヨウから目をそらした。

たつぷり5秒、間が空いた後マクアドルは言った。

「クロツエフ・アリアジートだ」

リヨウは今部屋に居る。

1人でだ。

夜の7時を過ぎたにもかかわらずクロは帰ってこない。

ケイトと話が盛り上がっているのか、ダンスの練習があるのか分からないがリヨウにとつて帰ってきていないのは好都合だった。

今、クロを見るとひどい目でしか見れないような気がするからだ。

名前を言われた後リヨウはなんでかを問いただした。

あんないい奴をなぜ監視しなきゃいけないのかと。

するとマクアドルはさっきとは打って変わってなんのためらいもなく「彼が魔科祭の時、ビムたちを手引きした可能性がでてきたからだよ」と言った。

その後にも理由を言っていたが、正直覚えていない。

反論はしなかった。

普通なら反論するリヨウだったが、どこかでそう言われて納得している自分がいたからだ。

クロには、表には出さないようにしている感情が少し溢れて見えるということがあるのだ。

いつも笑顔しか見せない彼がそういう顔をする、余計暗く見えるのだ。

もちろんそれだけでは疑う理由になるには不十分だというのは分かっている。

でも、疑っていた。

理由はまだリヨウがクロを信用しきれていないからだろう。

クロは笑顔を絶やさない人だ。

つまり、笑顔以外見せることはないということだ。

考えてみればリヨウはクロの寝顔以外で無表情でさえほとんど見たことがない。

常に作り笑顔をしているのかと思えてきた。

「(疑いたくはないけどそれじゃあ、自分がすつきりしない)」

リヨウは決めた。

「(監視しよう。別にマクアドル先生に従ってるわけじゃない。監視して無実が分かれば俺がすつきりする。それだけだ)」

それを決めると早めに寝ようとベットに入った。

寝る前に、ドールが進化する前に見た世界について訊くのを忘れていたのを思い出し

クロのことは考えずドールのことを考えながら寝た。

## 変わらない親睦会

時間と言うのはどんなに悩んでいても、どんなに楽しくても、同じペースで過ぎていく。

遅く感じたり早く感じたりするがペースは変わらない。

リヨウはこの親睦会当日までクロの行動をいつも以上に気にして見てきた。

悪いことをしている気分だったので時間の流れが遅く感じられた。

この一週間の監視の成果はほとんどゼロだった。

怪しい行動が見られなかったということは嬉しいことだったが、無実も証明できなかった。

マクアドルには「親睦会の時も目を光らせおいてくれ」とくぎを刺された。

リヨウは素直に親睦会を楽しめる気がしなかった。

「リヨウ、ネクタイはこんな感じかな？」

「いいんじゃないか？きまつてるぞ、クロ」

クロがそうかなあ、と嬉しそうな顔をする。

今2人は部屋を出る直前で服装の最終チェックをしている。

特にクロは人前でダンスをするのだから変な服装は出来ない。

かなり厳しく見ているようだ。

「他に変なところない？」

「大丈夫だよ。かれこれそうやって10分も確認してるぞ？いい加減行こうぜ？」

「んん、そうだね。あつちに行つてペアの人にも見てもらうよ」

「まだ確認するのかよ……」

転移装置に乗り、行き先を会場に設定する。

今の2人の服装はほとんどタキシードみたいなものだった。

男性の正装といえはこの世界でもこれのようだ。

もちろん親睦会での服装は自由なので制服でも私服でも問題ないし、鎧を着てきたつてなんの注意もされないことはない。

しかし、この世界の人は地球の日本人と似たような性格をしている人が多いらしく、個を出すよりも協調する傾向がある。

なので大抵の人はタキシードに近い服を着てくるのだ。

会場につくとすでに人があふれかえり賑わっていた。

映画で見た豪華な社交会を彷彿させる光景だ。

クロを気にしながらもテンションを上げているとクロがペアの相手を見つけたらしく手を振っている。

人が多くて誰がペアなのかリヨウには分からなかった。

「じゃ、僕は組んでる人と待ち合わせあるから」

「おう、ダンス頑張れよ」

そう言うときクロは人ごみの中に消えていった。

監視するとはいってもそこまでついていくようなことはしたくない。

1人になったリヨウは控室にいたのであろう友達を冷やかしに行くことにした。

これもまた転移装置を使えばすぐなので転移装置まで戻る。

男子の控室にはすぐについた。

そこでは晴れ舞台で目立とうと、カツコつけようとタキシード以外の服を着ている人もたくさんいた（さすがに鎧はなかったが）。

そんな中、レックスは奇抜とまではいえないが結構派手な服を着ていた。

「そんな派手だと目立ってしょうがないぞ？」

「リヨウか。こんなのおとなしいほうだ。お前みたい服はむしろ地味でダンスには向かねえよ」

「おまえ優勝する気なのか？」

「当たり前だろ。やるからには勝つ！」

話していると放送が鳴る。

『連絡します。10時からAブロックの予選を。Bブロック以降は20分おきに行います。Aブロックの参加選手は会場の受け付けまでお願いします。受け付けは開始5分前までにすましてください。繰り返します…』

今の時間は9：40だ。

「お前、何ブロック？」

「俺はCだ。まだ時間あるな」

「クロは何ブロックか分かるか？」

「そこに張り出されてるから見てみればどうだ？」

少し離れたところに電子掲示板があった。

誰が何ブロックにいるのかこれで確認できるようだ。

クロはEブロックでかなり時間があつた。

Aブロックに誰がいるのかと見てみるとフィリアとケイトがいた。

「Aに誰かいたか？」

「フィリアがいたよ。何かと緊張する場面によくいるよな、あいつ」



「からかいにいかないのか？ たぶんケイトもいないし会場にいるぞ？」

「あいつはからかうと倒れかねないような気がするから遠慮するよ。 たぶん今もかなり緊張してるぜ？」

「…そうだな。 始まつたら俺も見に行くか」

「ロボットみたいな動きでもするのかな？」

「それはそれで面白そうだけどな」

場所がかわつてここは女子の控室。

放送が入る前からフィリアは緊張しまくりだった。

10時からAブロックのダンスが始まるのは事前に配られた資料を見ていたので知っていた。

だが、自分が何ブロックなのかは当日まで分からなかった。

CかDあたりがいいなあなんて思っていたのだが蓋を開けてみればAではないか。

「よかったじゃない。 一番最初にできれば待つ緊張を味わなくてすむわよ」

「そうよ。それに最初なら採点の基準も多少甘いわよ」

「…写真はなしでお願いします」

「それは無理ね。新聞部としてやらなければならぬの」

「ここは嘘でもとらないというのが友達じゃない？」

「いや、私は嘘をつくわけにはいかないの」

「なんでよ？」

「新聞部は常に真実を追いかけなければならぬからよ！」

「いつだか多少の偽造はありって言うていたのを聞いた覚えがあるのだけれどね」

そうやって冗談交じりで話していると呼び出しの放送が鳴った。

フィリアが一瞬固まる。

「ほら、呼び出しあったんだから胸をはって行きなさい。固まってんじやないわよ？」

「そんなんだと折角組んでくれたケイトに恥かかせることになるよ？」

「それは絶対やってはいけないことですね…。はあ、なんで踊ろうと思ってしまったんでしょか」

「リヨウを裏切つてまで踊ることにしたのに何言つてんのよ」

「あの時は最良の選択だと思ったんですけどよく考えれば出ない人は2割く3割。つまり、1000人ぐらいはただ見ているだけ。それだけいけば十分じゃないですか！」

「今更嘆いても意味ないわよ?」

「棄権するということでも…」

「間違いなくケイトに迷惑かけるわね」

「うっ!」

「あきらめなさい。ただ踊ればそれで終わりなんだからうまい人だっているんだからここで落ちてしまえばそれで終了よ。それでいいじゃない」

「うう…」

「さっ、早く行きなさい。放送もなったんだからきつとケイトも待つてるわ。待たせることもあまりよくないんじゃない?」

「…分かりました。行つてきます」

そう言うときフィリアは控室を後にした。

フィリアの背中からは、恥ずかしいという感情と同時に少し嬉しそうな感じも感じ取れたような気がした。

「なんか片思いの女の子を見ているようだわ」

「そう? そうだったらオモシロいんだけど」

「迷惑をかけない!! 好感度を上げたいって意味よ」

「あつてるような、間違つてるような…」

するとマーシヤの目にある一人の人がうつつた。

その人は6歳くらいの子で金髪の長い髪の毛をしている。身長だけ見ればとても同じ学年には見えない。

世の中にはいろいろな人がいるんだなあと思っていると、マーシヤが見ているのに気づいたらしく近寄ってきた。

「こんにちは」

「こんにちは。あなたは？」

「私はミリーナって言うの」

口調もまるで年下の子供で、なんだか調子が狂う。

「私はマーシヤ、こっちはリアアよ」

「よろしくなの。ところでマクアドルがどこにいるか知ってる？」

「マクアドル先生のこと？あの人はずん本会場にいると思うけど」

「本会場なの？分かったの。ありがとうなの」

そう言うミリーナはマーシヤから離れていった。

「なんか子供みたいだね」

「そうね。でもマクアドル先生、本会場にいるかしら」

「どっちでもいいんじゃない？あの子転移装置がある方とは違う方に行っちゃったし」

「えっ?…確かに」

今回の親睦会は魔法側と科学側の交流を深めるためのものであり、一般客は招待して  
いない。

だから、マーシヤたちは普通に接して場所を教えた。

しかし、さつき会った女の子は教えた場所とは違う方向に行った。

さらに、よく考えてみればここは女子の控室だ。

先生と言えど男性が立ち入る場合はよほどの理由が必要になる。

そんな場所で女の子はマクアドルを探していた。

「もしかしてあの子、本当にこの学校の生徒じゃない?」

「ありえないと思うけど…、どうかしらね。それより私たちも会場に行きましょう。

フィリアのダンスが始まっちゃうわ」

「…そうね。気にしても仕方ないし」

「フィリア、遅いな」

「そんなことないですよ。俺が早く来すぎただけです」

リヨウは今本会場でケイトと話している。

知り合いが躍るといふのだから見ない理由なんてない。

それで会場に戻ってきたところケイトに会ったのだ。

レックスは「タキシードは地味だ」的なことを言っていたがケイトはタキシードを着ている。

ケイト曰く「課題の曲に合わせたらこれしか見つからなかった」ということだそうだ。「でも締切まであと5分だけ？さすがに…」

「すいませーん！」

リヨウが話しているとフィリアが小走りで来た。

おとなしめのドレスを着ている。

2人とも普通で地味と言われれば否定できないが、模範ともいえるペアだ。

「すいません。遅れました」

「大丈夫ですよ。まだ受け付け締め切りまで5分もあります」

「5分しかないだろ？さっさと行って来い。俺は楽しく観させてもらうよ」

「あまり期待はしないでくださいよ？じゃ、また」

ケイトたちが見えなくなるとリヨウは場所探しを始めた。

この本会場は5000人収容できるようになっている。

しかし、ここは体育館ではない。

本場にパーティをするために作られている施設だ。

親睦会も想定されている施設なので実は2階建てなのだ。

さすがに3階では1階でやることが見えにくいということ取り消しになった。

1階で観たほうが分かりやすい人が多い。

リヨウは2階で観ることに決め、場所を確保した。

ちようどいい場所を決めた時にアナウンスが鳴った。

『只今より、Aブロックの予選を始めます。この予選を突破できるのは3組のみとなっております。優勝目指して頑張ってください。それでは始めます』

アナウンスが終わるとさつきまで賑やかだった会場が静寂に包まれる。

そして音楽が流れ始めた。

曲名はリヨウは知らなかったが流れるような曲でやさしい感じがした。

社交パーティにぴったりのかなと思った。

30組が同時にダンスをするのだからフィリアたちを見つけるのは大変かと思つたが案外簡単に見つかった。

理由は地味だった…もとい模範になるような服装をしていたからだ。

他のペアは派手とまではいれないが多少はきらびやかにしていた。

あともう一つ、2人の髪の色だ。

金髪や茶髪はこの世界で普通の髪色として知られている。

白や灰色は地球と比べればはるかに多いほうだがこちらの方では少ないほうらしい。

そんな2人がペアとなれば必然的に多少は目立つのだ。

髪の色は紫外線が云々かんぬんとか聞いていたリヨウだったのでなぜこんなにカラフルになるのか、黒髪が少ないのかそこは疑問点だった。

で、2人のダンスだが：よくできているとリヨウは思った。

まったくダンスなんてやったことない、と2人とも言っていたがセンスがあるのか素人に見えなかった。

激しいダンスをしているわけではないが気品のあるダンスをしていた。

フィリアに緊張の色がまだ見えるがそれを感じさせないダンスだ。

「(いいセンスしてるな…。あのままいけば決勝戦いけるんじゃない?)」

そんなことを思いながらフィリアたちを眺めていると服の裾を掴まれる感じがした。

後ろを振り向くと、泣きそうな顔をしたミリーナが立っていた。



## 予想外の出来事

「ほら、水だ」

「ワインがよかったの」

「面白い冗談だな。せっかく助けてやったのに」

リヨウは今、さつきまでいた2階から移動しダンスが見えない1階の隅っこでミリーナと話している。

さつき会ったミリーナは泣きそうな顔をしながら「マクアドルはどこ…」と言い座り込んだ。

5、6歳の外見と言うだけでかなり目立つのに座り込まれたらなおのことだ。

ここで泣かれたらたまらんと急いでミリーナを抱え目立たないところに移動したのだ。

「おいしいもの」

「永遠の子供が聞いてあきれるな」

「子供だってワインは飲んでいいの。体に悪いとか気にしてられないの」

「早死にするな、お前」

「これでも700年以上生きてるの」

「さりげなく爆弾発言したな!？」

水を飲み終わるとおかわりと言う代わりにコップを差し出してきた。

リヨウは無視して話を進める。

「訊きたいことはあるけど、なんでマクアドル先生に用があるんだ？」

「あの人はよく情報交換してるの。何かわかったことはないかなあと思ってたなの」

再びおかわりと言う代わりにコップを出してきた。

それでもリヨウは無視して話をする。

「俺はそんなの知らないぞ。蚊帳の外か？」

「…レディにその対応はよくないの。それに蚊帳の外というわけでもないの」

「なら分かっていることすべて教えろよ。あるいは…」

「元の世界に帰せ?なの」

笑顔を見せるフィリア。

しかしその顔には明らかに悪戯心が隠れていた。

「それは…」

「違うはずなの。あなたはこの世界を気に入っているの」

「…否定はしない」

「なんで素直に好きと言えないの？」

リヨウは黙った。

確かにこの世界がリヨウは好きだった。

でも口に出したことはない。

別に何でもないことに見えるのだが、リヨウにとっては重要なことに感じられた。

言ってしまったが最後、地球のことを忘れてしまった。重要な気はしていた。

「まあ、そんなことは正直どうでもいいの。重要なのはあなたがこの世界を救えるか否かなの」

「そんな力、俺のあるようには感じられないけどな」

「私は感じたの。それにあなたはまだ力を出し切れていないの」

「よく言い切れるな」

「少し前にあなたのドールと話したことがあるの。彼女たちがそう言っていたから間違いないの」

「へえ、そうか。…は？」

ミリーナの聞き捨てることができな言葉にリヨウが停止する。

「何を驚いているの？あなたも話したことあるでしょ？」

「お前、今話したって…」

「そんなの朝飯前なの。あなたもいずれできるようになるの。自分のドールだけだけ」

瞬間移動をしたり、相手のドールと話したり。

普通ではありえないことを難なくやり遂げる。

ミリーナは。

「姿は…見えたのか？」

ビムとの戦いの後、リヨウは自分なりにあの時は聞こえた声について考察していた。

だから何となくあれはドールなのではと思っていた。

だからそこ、ドールにも意識があることについては今は驚かない。

「残念ながら霧だけだったの。もう一人に至っては声だけなの」

「俺もそうだった」

「進化すればいずれは見えるようになるの。それまで頑張るの」

だが

「なんで俺のドールがお前と話せたんだ？」

「ドールの中に入りこんだから？」

「どうやってそうやったか訊いている」

「そんなの私とあなたのドールの意識を繋げばすぐなの。他の人にはできないと思うけ

ど私にとつては朝飯前なの」

「…お前、いったい何者なんだ？」

「ミリーナは、ミリーナなの」

「訊き方を変える。どうやって700年も生きながらえた？ どうしてお前は普通の人にはできないことを難なくできる？」

ミリーナの顔が曇った。

あまり触れられたくない話題だったようだがリヨウは気にしない。

周りは盛り上がる中、リヨウたちの近くのみ重い空気が流れる。

しばらく黙った後、ミリーナは言った。

「…私が、機械人形だから…なの」

「つまりロボットっていうことか？」

「うん」

ミリーナは小さくうなずいた。

リヨウはこの答えに対してもあまり驚くことはなかった。

何となく予測できたからだ。

この世界は地球よりも科学が発展している。

科学がいつからあったのかは曖昧だがおそらく700年前からあったと仮定すれば

納得はいく。

だがその後ミリーナは予想してないことを言った。

「でも、これでも昔は人間だったの」

「えっ?」

「お父さんとお母さんがいて、楽しくみんなで遊んだの。とても楽しかった」

「どうして…?」

「悪いけど過去のことは今は話すつもりはないの。気分が向いたらもしかしたら話すかもしれないけど」

「嫌なことだったか。ゴメン」

ミリーナは気にしないで、と言う代わりに首をふった。

暗い顔をしているのはわかった。

しばらく沈黙した後、ミリーナが口をひらいた。

「じゃ、もう帰るの」

コップを差し出してきた。

リヨウはそれを受け取る。

「マクアドル先生には会わなくていいのか?」

「まあ、急用じゃなかったし。日を改めて会いに来るの」

「伝言があれば伝えるぞ?」

「伝言じゃ伝えきれないこともあるの」

「そうか」

「…まだ戦争は先のことなの。力をつける時間はたっぷりあるの。焦らず頑張るといいの」

「なんで俺なんだか」

「何度も言うけどそれは私の直観なの。ともかく期待しているの」

「そう言う」とミリーナは消えた。

時計の針は11時を過ぎていた。

リヨウが控室にみんなの様子を見に戻ろうと転移装置に向かってっていると、レックスやマーシャなどの知っている顔が会場にいるのに気付いた。

そこにいくとまず目に入ったのは真っ白になったフィリアだった。

「リヨウ! 顔が見当たらなかったけどおれのダンス見てたか?」

「ああ。悪くはなかったんじゃないのか」

レックスが聞いてきたが、観ていないがいろいろ言われると嫌なので観ていたことにする。

「なんで決勝戦にいけねえんだ、俺？」

「あんたの所にはうまい人集まってるもの。しょうがないわよ」

「なあ、フィリアはどうしてこうなってるんだ？」

一番不思議に思っていたことを訊いてみる。

「そりゃ、決勝戦に行くことになったからよ」

「あれは凄かったな。地味なダンスしていると思ったら」

「言わないでください！」

真っ白だったフィリアが顔を真っ赤にして復活した。

事情を聴きたいがこれでは間違いなくフィリアに止められてしまう。

後で聞こうかとリョウが思っている

「あつ、ちょうど映ってるわよ」

マーシャが指をさす方向を見るとスクリーンにアップでフィリアとケイトが躍っているところが映っていた。

おそらく決勝に進出したペアを厳選して映しているのだろう。

見た感じは普通に言いダンスだなという感想しかなかった。



一応、フィリアたちのダンスは練習時に一通り観ていた。すべてを通して見た感じは普通だった。

ところが残り30秒後ぐらいのところで変化が起きた。

フィリアが緊張のあまり足を滑らせたのか後ろに倒れそうになったのだ。

ケイトはすぐにフィリアを支え倒れるのは回避したが、素人がきまっていたダンスから脱線してしまうなんてことになれば立て直すのは困難だ。

フィリアはやばいことをやってしまったと思っっているのか固まっている。

ところがケイトは5秒ほどその体制で考えた後、自分一人でできる限りで行動を始めた。

ひざまずいて手にキスだったり、お姫様抱っこだったりを始めたのだ。

ダンスに合っていたかどうかと言われれば微妙だが、完全にずれているわけでもなかった。

最後までそんな感じでいき、ケイトが後ろから軽く抱きつく感じで終わった。

映像が終わった後の審査員の評価で、「フィリアさんが倒れたのは分かったがそこからこんなうまくつなげられるとは思わなかった」と高評価していた。

再びフィリアを見ると真っ白になっていた。

「うん。これは、まあ……」

「なかなか大胆よね」

「ケイトは？」

「ダンスが終わった後、冷静に考えたらかなり恥ずかしかったらしくてさつきまでそこ  
で壁に頭を打ちつけてたわ」

指をさした方向を見ると、少し壁がへこんでおり血がついていた。

2人ともこんなんで決勝戦に参加できるのか心配である。

「ただけ頭打ちつけてんだよ…」

「まあ、傷はあいつの得意な回復魔法で何とかなるだろ。決勝戦の心配はフィリアだな」

「この子、いつになったら動き始めるのかしら」

「決勝戦は明日だし大丈夫だと思っただけだな」

「まさにダークホースだな」

「ダークホース？」

「あ、いや、なんでもない」

「？」

英語がなくても使われてるものもあるが、使われてないものもありこういう時不便だ。

時計は11時10分をさしていた。

「そう言えばリヨウ。そろそろクロのダンスが始まるんじゃないか？」

「そうみたいだな。ダンスも習ってみたいだし、どれくらいうまいかも見てみたい  
な」

「リリアも注目していたわよ。どんなものかしら。フィリアも行きましょう」

「…」

「まだ固まつてるな…」

「かまわないわ。引きずってでも観に行かせるわ」

「それは、痛いです…」

「なら歩きなさい。せつかくダンスが評価されて決勝戦いけるんだから胸はりなさい  
よ」

「ううう…。できることなら過去に戻ってやり直したいです」

「科学がどんなに発展してもそれは無理って授業で習ったじゃない。あきらめなさい」

「無理なのか？」

特に考えたことはなかったが、タイムスリップできないのか？と思いつながら訊いてみ  
る。

「あんたも？授業で習ったじゃない。それだけの技術がないし、それ以上に何が起こる  
か分からないから絶対だめっていうことになってるって」

「このご時世でも科学は万能じゃないのか」

「十分万能よ。ただ過去や未来にいけるのは神様だけで十分って話」

「このご時世で神様を信じるのか？」

「信じてるわけじゃないけど、神頼みくらいはするしね。お守りだって持ってるし」

「非科学的だな…」

「科学側にいるとはいえ、勉強嫌いのあなたに非科学的と言われてもね…」

「なっ、俺だって勉強くらい」

「…ドールを展開したときに装備するスーツの名前は？」

「えっ、そんなの習ったっけ？」

「ほら。みんな言いやすいからってドールって言うてるけど、ドールはあくまで球体の名前。ドールを展開したときに装備するスーツの名前はトリプリーよ」

「常識ですな」

「レックス、さすがにこれは…」

「…」

レックスは答えを聞いてもまったく思い出せなかった。

「…Lからの報告はどうなっている？」

「今日は親睦会とか言う行事があるそうで連絡は取れないそうです」

「ここは、ミューズデルのどこかだ。」

「そういう行事ならばむしろ連絡が取りやすいのではないか？」

「魔科祭の件のせいで、警備が強化されています」

「…あいつはいい置き土産を残していったな」

少しめんどくさそうな顔をしている。

「まったくです。特に急ぐようなことはありませんが」

すると立って話していた秘書らしき男の携帯が鳴った。

許可をとろうとすると、座っている男は構わないと言う代わりに身振りで合図した。

電話をとり話をする。

話が終わり電話を切ると立っている男が

「たった今、Lから報告がありました」

「朗報か？」

立っている男は首を横に振る。

「いえ、報告の内容は自分がビムを手引きしたと思われる可能性があるということ

です」

「…、なんでそうなった？」

「そこまでは分からないそうです」

「いい線はいつているが、手引きしたのは…」

「Oです。Lではありません」

「まさか、うまくやった偽装工作がこういう風になってくるとは」

座っている男は難しい顔をした。

考えている難題が山積みなのだろう。

「それはこつちで対処しておこう。お前は作戦「ダグラガンド」を進めておいてくれ」

「はい、分かりました。…」

「何か、言いたげだな」

「…いえ、何もありません」

「そうか。なら仕事に戻れ」

立っていた男は部屋を出ていった。

座っていた男は黙って椅子に座っている。

実はこの男にはさつき出ていった男が言いたいことが分かっていた。

（おそらく、今学校を攻撃すれば確実に落とせるから攻撃したいとでも言いたかったの

だろう。確かにそれもありだが…)

男は目の前に自分が集めた情報を映し出す。

リヨウについての情報だった。

集めた情報と言ったが、たいした量はなかった。

調べても学校入学前の情報が一切でてこなかったのだ。

かなり深く調べたつもりだったが本当に何も出てこないのだ。

誰かが意図的に消したのかと思ったが消された形跡すらなかった。

もつというなら戸籍すら見当たらなかった。

(この少年…、いったい?)

## マーシヤとリヨウ

親睦会2日目の朝8時ごろ。

リヨウは部屋で一人。パジャマからタキシードに着替えている。

クロは昨日のダンス会でどうどの一位で予選を通過していた。

今朝は決勝戦に出る人は早くにミーティングがあるらしく7時ごろに出ていった。  
まった。

決勝戦は10時からあるのにそんなに早いもんかな？と疑問に思ったが特に何も言  
わなかった。

監視のことも頭にあつたが考えたくなかったのだ。

いや、クロのことはいったん忘れて楽しもうと思ひ疑いを無理やり振り払った。

時間は飛んで10時前。

リヨウたち観客の立場にいる生徒は（ダンスに興味のある）会場で場所取りをしてい  
た。



昨日と違って今日はあまり生徒は来ていなかった（それでもかなり混雑しているが）。理由は自分の友達が出てないから、自分が出ていないから興味が無いなど様々だった。

それでも4時から始まる夜行会（やこうかい）でパーティがあるので大抵の人はその時間には戻ってくるのだが。

「決勝戦、誰が勝つと思う？」

「昨日のを見る限りじゃクロの組が圧倒的ね」

「あれは大したもんだぜ。ここでやるべきダンスじゃねえな」

「私としては負けてくれた方が記事になって面白いんだけど…」

「あの組は少しの失敗ぐらい、簡単に修正するわ。そういうことはないと思うわ」

「そうよね…」

カメラを持ちながら少し肩を落とすリリア。

リョウたちは新聞部であるリリアの権限を使…、もとい場所取りを済ませて立ち話をしている。

「フィリアはあの後どうなったんだ？」

「真っ白になることはなくなっただわ。ケイトを目の前になると顔を真っ赤にするけど」

「あいつは、フィリアに頭下げてたな」

「あいつは別に悪くないのにね。まあ、恥ずかしい気持ちは分からなくもないけど」

「あの子たち、決勝戦いけると思っていなかったらしくてダンスーっしか考えてなかったらしいわよ」

「今日のダンスはどうするんだ？」

「そこが見どころなのよ！」

カメラを持つてない手でこぶしをつくる。

よほどおいしい記事になると思っているのだろう。

だが、よく一緒にいたマーシヤにはそれだけではないように見えた。

「リリア。あんたなんか…焦ってない？」

「!!」

リリアの体がビクツとする。

「な、なんのことかしら？」

「何も無いのなら別にいいんだけど、焦ってるように見えるのよ」

「そ、そんなことないわよ…」

「そう？なら別にいいんだけど」

マーシヤに話しかけられた後のリリアはリョウたちから見ても分かるほど何かにお

びえてるように見えた。

理由を知りたいような気もしたが、その前に決勝戦開始の合図が鳴る。

音と同時に決勝戦に出場する選手たちが入場してきた。

クロやフィリアの姿もあった。

クロはいつも通り笑顔で入場してきた。

フィリアは緊張しているのか、少し動きがぎこちなかった。

ケイトも昨日よりは少しぎこちなく見えた。

だが、昨日の出来事はなかったかのように顔が極端に赤くなってるなどはなかった。

「あれなら大丈夫そうね」

「残念ね。失敗があったほうが記事になるのに」

「お前、いつかバチがあたるぞ？」

「私は今その瀬戸際に立っているのよ……」

「どういう意味よ？」

「話したくないわ」

「リリア、ならあの組はどうだ？」

レックスが指をさした先にはシユールスがいた。

その組は一言でいえば……派手だった。

奇抜を通り越した派手だ。

タキシードが大半を占めるこの会場でどこかのアイドルのような恰好をしているのだ。

目立って仕方がない。

「あれは…自信の塊か？」

「そんなにダンスうまかった？」

「いえ、全体では13位だったわよ」

「あの自信を少しでいいからフィリアに分けてあげたいわね」

その後出てきた出場者に目立った人はいなかった。

少しきらびやかにしている人もいたがシューレスのペアと比べればどうということはないのだ。

それぞれのペアの紹介が始まる。

「…紹介とかいらねえから、さっさと踊ってくれねえかね」

「仕方ないわよ。でも長いのは否定しないわ」

「そうよ。通過儀礼みたいなもんよ」

「よくその言葉使うみたいだけど、使い方あってるのか？」

「そんなのいいのよ。通じれば」

「新聞部が聞いてあきれるわね…」

話している間に紹介が終わる。

それと同時に音楽開始のブザーが鳴る。

大半の人が「いきなり!？」と思っただろう。

ダンスする側も聞いていないのかあたふたしながら準備するペアが見られた。

会場が少し暗くなり、音楽が流れ始めた。

「くでした。そして1位はアリアジートとフリミレスのペアです！おめでとうございませう!!」

午後6時。

優勝のペアの名前が発表された。

実を言うと9割がたの人がクロのペアが優勝するということを確信していた。

すべてを通して見てもそうだったが、開始1分ほどで大抵の人がクロの勝ちを確信したのだ。

途中でこれればまだ他の組にも可能性は、と考える人はほとんどいなかった。

誰もクロのペアがこけるような姿を想像できなかったからだ。

リヨウは「天と地の格差違ってこういうことをいうんだな」と呟き、それがのちにリリアの書いた1年生に配られる新聞に載せられた。

今は、まさに社交パーティーのようになっている。

ある人はグラス片手に他の人と話し、ある人は流れている音楽に合わせて踊っている。そんな楽しい空間の中、リヨウは気がほとんどない2階でマクアドルと話している。

「クロに怪しいところはありませんでした」

「…そうかい」

高そうなワインを、持参したのかテーブルに置きグラスにそれを注ぐ。

「…監視はまだしなければいけませんか？」

「そうだね。まだ必要だ」

言いながらワインの香りを楽しんでいるのかグラスを少し揺らす。

「なぜ、こんなに重要な話の時にそんなこととしていられるのですか」

「私から見れば大した話題ではないからだ。私から頼んではいるがね」

「自分の生徒が疑われているのに重要ではない？」

「もともと疑い始めたのは私だ。学校は今ほとんど疑っていないんだ」

ワインを飲み始める。

「学校が疑っていないなら、なぜあなたは疑っているんですか」

「…できれば伝えたくないんだ。ある意味最悪かもしれないね、君にとっては」

「…あなたもミリーナも俺に対して期待しているといっておきながら重要な何かを隠す。それはいったいどういうことですか」

ワインを飲み終わったのかまた注ぎ始める。

「君は、誰か一人にでも自分のことについて話したことはあるかい？」

「話を逸らさないでください」

「答えるんだ」

マクアドルの目が鋭くなる。

何かしらの恐怖を感じた。

「…いや、信じるとは思いませんので」

「マーシャ君にもかい？」

「話していません」

マクアドルはため息をつく。

「君は恩知らずだね」

「マクアドル先生は教えたことはあるんですか？」

「この世界で私を拾ってくれた親に対してはね」

「信じてくれました？」

「…ああ。その人たちは信じてくれたよ。証拠も何もなかったのにね」

「そうですか」

リヨウにとつてこの会話は正直どうでもよかった。

この世界に来てから別に過去のことを話さなくなつたつてやつてこれた。

いつかもしかしたら話すかもしれないが今は関係ない。

「話を戻したいのですが」

「もし、君が私たちからすべてを聞きたいというのなら」

マクアドルはワインボトルを持ちその場を離れ始める。

そして転移装置の目の前まで来たところで止まり

「君自身のことを誰かに受け入れさせるんだ」

そう言ううと転移装置に乗りどこかへ行つてしまった。

リヨウは1人になると壁に体を押し付ける。

そして考えた。

おそらく、あの2人は自分に本当のことを話すつもりはないのだろうと。

話す気があるのならばもともと話してるし、こんな無理難題を押し付けたりはしない



からだ。

さっきの話で言っていた、マクアドルのこの世界での両親もマクアドルが言ったことは信じなかったのだろう。

さっきの会話のトーンから何となくそれは分かった。

この世界で宇宙と言う存在を知っている人はほとんどいない。

以前、これだけ科学が発展しているのになんでとマーシャに訊いたら

「そりゃ、空の向うに何を使ってもいけないからよ。確かロケット？とか言う乗り物で幾度となく試しているみたいだけどいつまで行っても青い景色が続くらしいわ。そして最後は燃料が尽きて落下してくるそうよ」

と言われた。

そんな世界に住んでいる人たちに「違う世界から来ました」と言っても信じないのは無理もない話だ。

自分で動くしかないのか？そんなことを考えていると

「リョウ？」

声をかけられた。

マーシャがいた。

少し暗いのでよくわからなかったが顔が赤く見えた。

「マーシヤ。…何か用か？」

「何か用かって、みんなの所いなくていいの？」

「それを伝えに？違うことがあるんじゃないのか？」

「…」

顔を俯かせるマーシヤ。

「なんだよ」

「…あの、その、もし暇なら…」

小さな声で何かを言う。

リヨウにはそれが聞こえなかった。

「何？お前らしくないぞ？」

「あの、暇なら、私と、ダ、ダダンスを…」

と言ったところでマーシヤは顔を上げる。

そこで初めて気づいた。

リヨウの顔が笑っていなかった。

いや、笑っていないではなく表情が無で固まっているのだ。

何かに悩んでいるのは明らかだった。

悩み事がとても大きな何かだということまで分かった。

日常で「明日のテストやべえ」とかいうようなレベルじゃないということが分かった。

「リョウ？何かあった？」

「…何もないよ」

「もしかして、あなたの過去のこと？」

リョウは少し反応した。

「記憶が戻ったの？」

「…」

マーシャには記憶喪失と伝えている。

彼女がそう思うのも当然だ。

「嫌な過去でもあったの？」

「…そうじゃない」

マーシャは黙る。

リョウにはそれが慰めの言葉を考えているように見えた。

1分ほど間があった。

「話してくれない？」

1分も考えたのにそれかよとリョウは思った。

話せば少しは楽になるとか思っているのだろう。

今のリヨウには悪い方向にしか考えが働かなかつた。

「…1人にしてくれ」

— 面白い考えだと思った。

1人で考えて、整理する。

そして考えをまとめ、いつも通りに戻る。

「それは出来ないわ」

マーシヤはリヨウを強い意志があるような目で見ていた。

「マーシヤ、1人で考えても答えは出るから」

「嘘」

「…」

「私が何も知らないと思っているの？確かにほとんど知らないけど。それでもまず、あなたが記憶喪失じゃないことぐらいは分かってたわ」

「…」

「あなたが事情があつて過去を隠しているのは分かっていたの。…私は訊かないでおこうと思つていた。あなたが話してくれるまで」

「…」

「だから、…これからも訊くつもりはないわ」

「えっ?」

「無理には訊かないといってるのよ」

「:じゃあ、なんで1人にさせてくれない?」

「決まってるじゃない」

マーシャはリョウに背を向ける。

「聞きたいからよ」

「今、俺が言う気になるまで待つって言ったじゃないか」

「それに、あなたが悩んでる。一緒にいるだけでもなにか力になれるんじゃないかと思っただしね」

マーシャはすごい。

おそらくそれはリョウにとってのみだがすごい人だ。

道端で倒れていたリョウを救い、この世界について教えてくれた。

それだけでも十分リョウから見ればものすごい感謝に値する。

それなのに今度は重いと分かっている悩み事を聞こうとしている。

一緒に考えてくれるといっている。

「1ついいか?」

「何?」

「記憶喪失以外にも少しだが分かっている感じなこと言つてたな？」

「仮定の話よ。あなたはもしかしたら違う世界みたいなどころから来たんじゃないかって」

リヨウは嬉しかった。

この星以外の概念が存在しないというのに違う世界から来た、ということ仮定として立てていたからだ。

それでもリヨウはなぜか今はまだ話すべきではないと思つた。

「…いつものマーシヤからは想像できないような非科学的な発言だな」

「私だつてそう思うわ。でもこれが一番合点がいくのよ」

「俺を笑わせるために対してはいい冗談だと思つたけどな」

「私は本気よ？確かに辛気臭いのはあまり好きじゃないけど。でもあの仮定はほんとよ？」

リヨウに表情が戻つていた。

さつきまであつた不安は消えていた。

信じてくれるであろう人がいるだけで気が楽になつた。

「分かつたよ。いずれすべて話すよ」

「約束よ？」

「もちろんだ。さっ、戻ろう」

歩こうとしてリョウは思い出す。

「そういえばマーシャ、みんなが待つてるって言つてた他に何か言つてなかつた？」

「えっ？あ、ああ。いや、あれは別に……」

「そう？じゃあ、俺から一つ」

「な、なによ？」

「……ありがとう」

マーシャが顔を赤くする。

「……。別に私は何もしてないわよ。変な奴。先いくわよ」

そのまま転移装置に乗って行ってしまった。

少しの間、そこに立ち尽くしていた。

もう一度だけリョウは「ありがとう」と言うと、マーシャを追った。

# 森に潜む恐怖

## 異世界での合宿

突然だがこの世界に四季はない。

確かに気温の変動はあり、春夏秋冬と言う言葉は存在する。

だが気温の変動は大きくても10℃が限界である。

それだけ変われば暑くもなるし寒くもなるのでは？と思うかもしれないがミューズデルは科学が発展した都市である。

そのため、都市内では肌寒くなることもないし暑くなることもない。

なので大体の人が春夏秋冬と言う言葉を知らないのだ。

だから都市内では生活したことのない人たちによつて四季がないとされる。

しかしそれはミューズデル内に限る話である。

つまりミューズデルを出ると気温の変化を感じることができるということである。



親睦会から月日がたち12月の後半に入っていた。

さつきも書いた通り気温は変化するがたいしたものではないし、そもそも科学の力によつて学校で気温の変化はほとんど感じられなかった。

親睦会から結構経つたが特に変化はなかった。

ドールが2段階目に進化したのは未だにリヨウのみだし、クロも目立った行動はとっていない。

マクアドルとも大した会話はしていないし、ミリーナとも音信不通になってしまった。

それでも平和な日常が続いたのは本当にうれしかった。

そんな日常にヒビが入り始める。

「合宿〜?」

「そうよ。合宿」

「せっかく長い休みがきたと思つたらこれかよ」

リヨウたちは今Bクラスにいる。

今日は定休前の前日である。

定休前と言うのは簡単に言えば冬休みだ。

この学校に夏休みはなく、冬休みと春休みのみだ。

それぞれ大体1ヶ月ぐらいつつある。

「いいじゃない。たつた一週間よ？」

「一週間で勉強に使わなくちゃいけないならそこを休暇とは言わないでほしいな」

「勉強は、ほとんどないんじゃないかな」

クロが会話に参加してきた。

「どういうことだ？」

「合宿とはいっても勉強合宿なんて言っていないでしょ？それに行く場所はアメリリア森林だよ」

「アメリミ…なんだ？」

「アメリリア森林よ。ここからちよつと遠いけど自然があふれてるわ」

自然があふれている…。

久しぶりに聞いたような気がする。

ここに来てから自然と言えるものを見たのは最初の雑木林と草原だけだった。

ミューズデルに来てからは観葉植物くらいは見てきたが本当に草木が生い茂るという光景は見たことがなかった。

「自然か…。いいな」

「でしょ？僕も自然なんて久しぶりで」

「でもあそこ猛獣もそうだけど胡散臭い奴いるじゃない」

「猛獣？胡散臭い奴？」

「猛獣はバルドスのことだね」

「バルドス？」

どっかで聞いた覚えがある…。

「簡単に言えば猪に牙をつけた感じの動物だよ」

「どっかで聞いたことあるような気がする…。で、胡散臭い奴ってのは？」

「そこ、寺があるのよ」

「寺？」

「そ。で、そこで働いている女の人がいるのよ。職業はなんていったかしら」

「巫女か？」

「そう！それ。よく知ってるわね。何でも神様を信じてるやつらしいじゃない？この（こ）

時世にちよつとねえ…」

「でも、お前たとえはお守りとか持つてるじゃん」

「それはそれ、これはこれよ。関係ないわ」

「でもすごいんでしょ、実力は。なんでも神様を呼び出せるとか」

「クロ、あんなのは神様じゃないわ。あれは怪物よ」

「見たことあるの?」

「二度だけね。今回行くところは違う寺の巫女だったけど現れた神様とやらはまさに化け物だったわ」

「どんな感じだったの?」

するとマーシヤは紙を取り出し絵をかき始めた。

マーシヤの画力はなかなかのものである。

そこにかかれていたのは体が亀で尻尾が蛇の生物だった。

「こんな感じよ」

「うそ。マーシヤ、これはないんじゃない?」

「でも鮮明に覚えているのよ。名前も言ってたわね。なんて言ったかしら」

気づくと2人の視線がリヨウにいつている。

巫女を知っているのだからこの「何か」についても知ってると思っただろう。

「…玄武」

「そう!言ってたわ!あんたすごいわね」

「これは神様なの?」

「いや、俺も知ってるのは名前だけでね」

さすがに知っていることをすべて話すとク口からも怪しまれかねないのでそこは控

えた。

「そっか。まあ、そんなもんだよね。で、今回行くところにいる巫女さんはなんていう神様を持つてるの?」

「これを神様って言うのかはちよつと微妙よね…。名前は知らないけど龍と似てると聞いたわ」

「何に一番近いの?」

「それがこの世界にいる龍とはどれも似つかないそうよ」

へえ、青龍みたいな感じのドラゴンはいないのか。

…ん?

「えっ? 龍が存在する?」

「何言ってるの、リヨウ。動物園とか行ったことない? 土砂龍とか水龍とか。学校に飼っている生物の持ち込みは1, 2年生は禁止だから誰も持ってないけど、実家にはいるって言う人もいるよ」

「そういえば、あんたはたぶん見たことないわよね。今回行く森林にはいたかしら?」  
「ううん…、いないこともないけど見つけられたら運がいいよね」

「へえ、見てみたいな。ところでさっき言ってた1, 2年生は持ち込み禁止っていうことは3年生以降はいいのか?」

「うん。魔法側では使い魔を使役し始める時期だしね」

「私たちにはそんな力はないから、代わりみたいなもんよ。ほしい人はね」

…使い魔的なやつか…。

なんかいい流れだな。

わくわくしてきたぞ。

今回の合宿でそんな感じの奴を捕まえられれば…！

「あつ、でも絶対に自分で飼うとか言つて捕まえたりしないでよ？」

「…なんでだよ」

「飼えないからよ。お祭りで金魚すくいあるでしょ。でもあれをやる人は金魚を飼える人のみ。飼えないのに生き物を引き取っちゃだめよ」

リヨウはがつくりした。

折角テンション上がってきたのにこれだ。

前にもあつたような気がする。

「まあ、3年生なつたらそれ専用の行事があるからそれまで待ちなよ」

「…そんなのあるのか？」

「一回だけね。科学側の生徒が自分の使い魔を探しに行く行事があるんだよ」

「使い魔っておかしくね？」

「僕に言われても…。そう言われてるのは事実だし」

「ともかく、使い魔がほしいならあと2年待ちなさいってことよ」

2年…。

道のりは険しく長いのか…。

「で、話戻るんだけど。巫女が操る龍。リヨウは知らない？」

「青龍だろ」

「名前は聞いてないから私は知らないけど、何でも頭が龍なのに胴体が蛇だそうよ」

「えっ、そんなんで頭支えられるの？」

「分からないけど。しかも空を飛ぶんですって！」

「飛ぶって…。羽でも生えてるの!？」

「可能性はあるわね。いや、でも神様なら飛ぶことくらい何もなくてもできるのかしら」

リヨウはこの会話を笑いをこらえながら聞いていた。

確かにリヨウのイメージの中でも青龍は頭は龍で体は蛇のようになってる。

でもあくまでそれは形のみだ。

そのまま想像すればひどいものになってしまう。

さらに羽なんて加えるとは…。

それを真剣に話しているもんだからタチが悪い。

「ちよつとリヨウ。何してるのよ。これ見て」  
「？」

そこにはかなりリアルに描かれた頭が龍で体が蛇な青龍が書かれていた。  
更に天使の羽のようなものまで描かれている。

「こらえきれず大爆笑してしまった。」

「ちよ、そんなにおかしい!？」

「こんなに議論したのにまさか笑われるとは…」

「リヨウ！笑ってるっていうことは本当の青龍の姿知ってるんでしょ？教えなさい！」

「分かった！分かったから少し待って！は、腹が…」

「そんなにおかしかったかしら？」

平和だなあ、とリヨウは思っていた。

こんな風が毎日過ぎればいいのに。

そしてミリーナの言っていた戦争は実は誤りだったということになればいいのにと  
思った。

しかし、ミリーナの言っていた戦争は少しずつ、動き始めていた。



## 合宿当日

リヨウは指定されたところに向かっていた。

この合宿では1〜5年生までが参加している。

初めて1年生が上級生と対面するときである（部活で会っている人も数多くいる）。  
班分けはフレア先生が

「今回はランダムなの。1班一年生は10人。私たちが決めるから楽しみにしててね」と言っていた。

これも交流のためとかいうのだろう。

この学校はやたらいろいろな人との交流をさせようとしている。

慣れたといえばそうだが、せっかくできた友達と一緒にいたいという気もしていた。しかし、リヨウにはそれ以上に疑問に思っていることがあった。

それは、アメリリア森林の広さだ。

1学年大体50000人いる。

単純計算で25000人が森林に泊まることになる。

そんなスペースあるのか？と思ったが全然答えは分からなかった。

そんなことを考えていると人ごみが見えてきた。  
指定場所についたようだ。

(知り合いいないかな…)

そんなことを思いながら探していると

「リヨウ！ 同じ班みたいね」

リリアに声をかけられた。

「お前もここが集合地点なのか？」

「そうよ」

「他に誰かいるか？」

「知り合いは私たちぐらいよ」

知り合いが1人とは少し寂しいがないよりはましである。

「今日からよろしくね、リヨウ♪」

「楽しそうな顔しながらカメラをかまえないでくれ。嫌な予感しかしない」

「見た感じこの班には私しか新聞部はいないのよ。それなら私が頑張るしか——」

「リリア？」

突然知らない声が出た。

リリアが固まり顔から汗が噴き出し始める。

後ろには青い髪をしたショートカットの女性が立っていた。

美しいとも見えるし、カッコよくも見える。

「ぶ、…部長」

「なんだ。お前もこの班か」

「は、はい。そうです」

いつも活発なリリアが固まっているのを見るのは珍しかった。

それだけ権力があるのだろうか。

「その男は誰だ？お前の彼氏か？」

「彼氏だなんて滅相もございません！この人はリヨウ・アマミヤ。例の一年生で2段階

目のドールに達した奴です」

「…」

黙りながらリヨウの方をむいた。

さつきリリアも部長と言っていたし、おそらく先輩だと思ったりリヨウは礼儀正しくすることにした。

「リヨウ・アマミヤです」

と言いながら一礼をする。

すると部長は

「別に訊いていない。それに今リリアからも聞いた」

…。

さすがにこの答え方は予想外だった。

てつきりあつちも自己紹介してくるのかと思っていた。

こんな返事されたことないもんだから返答ができない。

「まあいい。俺はクレア・ランパードだ。3年で新聞部の部長をやっている」  
「よ、よろしくお願いします」

リヨウが返事を返す頃にはクレアの顔はリリアの方をむいていた。

「リリア」

「は、はい!」

「期待しているぞ」

不敵な笑みを浮かべながら言った。

リリアは「はい!」と返事していたが手が震えているのが分かった。

その返事を聞くとクレアはどこかへ行ってしまった。

リリアが未だに震えている。

「だ、大丈夫か?」

「え、ええ…」

「全然大丈夫には見えないな。あの人、そんなに怖いのか？」

「怖いというより、危ないのよ……」

「危ない？」

「これ以上言うといろいろまずいから言わないでおくわ」

「聞きたくなるじゃないか」

「あなたが聞けば変態扱いされるわよ？」

「いったい何が!？」

変な疑問が浮かび上がる中、合宿は始まった。

## アメリリア森林での合宿

リョウたちが合宿先へ向かっている中、あるところで少し動きがあった。  
「始められるか…?」

「おそらく時間前には準備できるかと」

男たちが話している。

「マスターは時間に敏感だ。1分の遅れも許されないぞ?」

「分かっている。俺はこれでもしっかりしている方だ」

「よく言うぜ。お前は戦い始めると人が変わるじゃねえか」

「Tのせいだ。私は悪くない」

「自分の家系を悪く言うもんじゃないぜ?」

「悪くは言っていない。だがいいとも思っていない」

「そうか? まあどっちでもいいんだけどな。しっかり頼むぞ策士さんよ」

「私は策士と言うほどいい戦略は立てられない。策士とは違う」

「そんな難しいことはどうでもいいんだよ。俺が楽しめるように戦略立ててくれよ?」

「…最善を尽くそう」

「や、やつと着いたあ」

「もうへばつてるのか？早すぎだろ」

「あんたが体力ありすぎなのよ…。他の奴も見てみなさいよ」

周りを見るとほとんどが地面に座り込んでいる。

立っている人もかなり息が荒い。

唯一の救いが冬ということもあり、少しは涼しいことだろうか。

ここは集合場所から大体5キロくらい歩いたところだ。

そして目的地点でもある。

つまり今リヨウたちはアメリリア森林にいる。

普通ならば自然があふれているうえに、程よい疲れもあつてすがすがしい気分だ。

だがそれはリヨウだけに限る話で、同じ班の生徒は汗がすごかった。

おそらくこの世界に生きる人は転移装置とかに頼りすぎているため5キロ歩くことなんてないのだろう。

リヨウの体力も衰えてはいるがそこまでひどくはなかった。

「ドールとか使つて戦えば体力つかない？」

「あんた、ドール同士の戦いの所要平均時間どのくらいか知ってる？」

「5分くらいか？」

「30秒よ」

「短っ！」

「普通勝負なんてそんなもんよ。ドールが進化すれば遠距離攻撃とかできて長引いてくるけどその場合はただ撃つだけだからなおのこと体を使わないわ」

「な、なるほど」

「何よりドールは人体に対する負担を最小限にする工夫がされてるのよ。まあ、毎日3時間ぐらい戦っていればそれくらいは体力つくかもね」

「つまり体力作りのために俺たちは5キロも歩かせられたのか」

「そうね。一日歩いただけで体力がつくとは思わないけ…、うぶー！」

突然リリアが口を押える。

「大丈夫か？」

「やばいかも…。ちよつと離れた所いってくるわ。たぶん吐く」

「オブラートに包んで言ってくれ」

「…？ともかく失礼」

そう言ううち茂みをかき分けながら行ってしまった。



周りを見ると見えるところで吐いている人もいた。

「(ここままで体力がなくなつてよく人の形を保つてられるよな。確か、科学が進むと人の形が変わるつて本で見たことがあるような気がするな)」

「おい」

声をかけられた。

クレア先輩だ。

「先輩。何か用ですか？」

「体力が残つてるのならさっさと働け。テントを設置する。飯をつくる。風呂場をつくる。他にもやることはたくさんあるぞ」

「でも、みんなまだ休んでますし…」

「お前はそれほど疲れているように見えないが」

「…あの、まさか俺は動けるから一人でも働けど？」

「察しがいいな。分かったならさっさと働け」

いやいやいやいや。

1人で10人×5の数のテントと飯だのを作れど？

「いや、まだそんな急がなくてももうちよつと待つてからでも」

「働け」

「は、はい…」

妙な威圧感に押されてはいとしか言えなかった。

リリアから危険と言われたばかりだしどういいう風に危険かは分からないがあまり突っかかるのはよくないと思った。

返事を聞くとクレアは戻っていった。

周りを見るが長距離のマラソンを最初から最後まで全力疾走したような状態だ。

周りの人に期待は出来ない。

「やるしかないか…」

いつまでかかるか分からない作業をリヨウは始めた。

「ようやく、終わった…」

テントの設置、風呂場や作りをが夜8時頃ようやく終わった。

ここについたのは11時頃である。

最初の1時間、リヨウは本当に一人で作業していた。

他の人たちもリヨウが作業を始めて30分後ぐらいには体力が戻っていた。

だが、他の人たちは手伝うことができなかった。

理由はテントの設置の仕方や風呂場の作り方などを知らないからだ。

2年生以降は一度はやったことがあるのだが1年もやらなければ忘れてしまうのは当然だ。

リヨウは地球にいたころ、夏休みなどはよく山へ行ったり、海へ行ったりしていた。だから、風呂の作り方はともかくテントの設置の仕方は分かっていた。

みんなはそれを不思議そうに眺めながら1時間ぐらいした後、見よう見まねで始めたのだ。

そこからはリヨウも「楽になるな」と思ったのだが、監督みたいなことをやらされ引つ張りだこだった。

3時間後ドールもうまく使ったおかげかテントが完成し、風呂場作りに移行した。

リヨウは風呂場作りなどしたことはなかった。

しかし、リヨウはすっかりみんなから信頼されていた。

風呂場作りなど知らないのにまたしても監督役をやらされてしまった。

はじめリヨウは「ドラム缶みたいな感じでいいかな」と思い、そんな感じのイメージを提供した。

するとみんなからのダメ出しがものすごかった。

なので石で周りを囲んだ感じのデカイ風呂を提案した。するとみんなの反応はよかった。

だが、ここでリヨウはすでにミスを犯していた。

石でつくると言うことは石と石の隙間に穴を開けないということ。

そんな作り方など全く知らなかった。

それで試行錯誤を繰り返し5時間後ようやく完成したのだ。

ドールや魔法がなければおそらく1週間やそこらでは完成しなかっただろう。

普通、この合宿でテントや風呂場が完成するのは2日目の夜らしい。

1日目でできたもんだからみんな大喜びである。

「5キロ歩いただけでへばってたやつらがどうしてこんなに動けるんだ？」

ぐったりしながら呟くと

「そりゃ、見返りが見えているからね」

いい汗をかいたリリアが腰に手を当ててスポーツ飲料水を飲んでいる。

「リリア、お前ももつと早くから手伝ってくれよ。テント一つ俺一人でやったぞ？」

「設置の仕方知らなかったんだもん。そんな中手伝っても意味ないでしょ？」

「力仕事ならいくらでもあつたぞ？」

「女子に力仕事は押し付けるもんじゃないわよ」

「ドールをつけねばいい話だ」

「まあまあ。そんな過ぎたことはいいじゃない。今日の主役はおとなしく休んでて」

「腹へったんだがな」

「それは俺たちの仕事だ」

クレア先輩だ。

「そうよ。私たち女子がすごい料理作ってあげる！」

「できるだけ早くしてほしいな」

「カレーだからすぐよ」

「定番だな」

「リリア、しゃべってる暇があるならお前も作れ。50人分は数が多い」

「分かりました、部長。じゃ、リヨウ。またあとでね」

リリアは走って料理している方へ行ってしまった。

「リヨウ」

「はい」

「今日はよくやった。ゆっくり休んで明後日に備えてくれ」

「明日じゃないんですか？」

「明日はテントの設置になっている。今日は普通は虫が多い中寝なきやいけなかった。」

俺もそれは嫌だからな。感謝している」

「こ、光栄です」

「それじゃ、俺も料理を手伝わなければいけないから戻る」

「お疲れ様です！」

クレアもリリアが行った方向に行った。

リヨウはクレアのことをどこか軍隊の司令官的な立場が合いそうだなあと思った。カレーと言っても50人分となればおそろく時間がかかるだろう。

疲れているが近くにあるとわかっていた川に向かった。

川についたリヨウの目に一番最初に入ったのは釣りをしている2人の人だった。

反対側の岸に座って釣りをしている。

魔法側の生徒なのか光が宙に浮いているのが分かる。

「…あの、だれですかい？」

1人がリヨウに気づいた。

勘が鋭いようだ。

リヨウも薄暗くはあるがライトを唱える。

近づいてみると1人はケイトだった。

「あれ、リヨウじゃないですか」

「知り合いか？」

「前言った科学側の逸材だよ」

もう1人がリヨウをじーつと見る。

髪は普通に短く、黒だった。

一見特徴がないように見えたが目がキツネ目だった。

「君がリヨウクンか。初めまして、俺はマリク・ジンジャーグリース言います。仲良くしてや」

しゃべり方にも結構特徴があった。

ここにきて初めてかわった発音を聞いたような気がする。

地球にいたところは関西の言葉だったり東北の言葉だったり、自分とは違う発音で話す人はいた。

ただどこここにはそういうことはなくみんな標準語だったのだ。

一瞬地球を思い出してしまった。

「よろしく。で、2人は今何を？」

「見てわからんか？釣りや、釣り」

「今は、テント設置班と調理担当班に分かれていてね」

「今日は魚、料理することになったねん」

「リヨウは何しに？釣り？」

「いや俺は休みにね」

「サボりか？後で叱られるで？」

「テントの設置とかは全部終わったんだ」

「そうですね。なら楽ですね」

「……で一拍空く。」

「「終わったあ!？」」

「ああ。苦労したけどな。できればもう2度とやりたくないぜ」

かなり驚いているのか2人とも口をパクパクさせている。

そんなにすごいことか？と思っっていると

「リヨウ？晩飯できたわよ？」

リリアの声がした。

わざわざここまで探しに来てくれたのなら待たせるわけにはいかない。

「分かった！今行く！じゃ、2人とも。また」



リヨウは自分のキャンプ地点に戻っていった。

「…ケイト」

「なんですか？」

「あいつ、ホンマに逸材やな」

「絶対とらえるところ間違ってますよ？」

「…」

「どうしたの、リヨウ？お腹すいてるでしょ？」

「いや、すいてるけども」

「なら食べなさいよ。女子の愛情がこもった料理。名づけて「愛のカレー」よ」

「まんまだな。だけどこれは…」

キャンプ所に戻ってきたリヨウを待っていたのは謎のカレーだった。

「(落ち着け俺。まず聞こう。何か意図があるのかもしれないし)」

「リリア。このカレー茶色じゃないんだけど…」

「そ、そりや、みんなの知ってる隠し味入れたもの！少し位変化はあるわ」

「へ…へえ」

「（ああ、そういうパターンか。冗談だろ？リアルにそれがあるのか？誰でもそんなことしたらやばいっていうこと分かるだろ。これ絶対やばいよ。食べたらいいしかった！みたいにはならねえよ。明日が台無しになりそうな気がするよ）」

どこかに捨ててこようかとも考えたが食べるまでリリアは動きそうにない。

「どうした、リヨウ。食べないのか？」

カレーの入った皿を持ったクレアがリヨウのもとに来た。

「クレア先輩。これ食べたんですか」

「俺はカレーは自分の家系が作ったものしか食べない」

クレアの片手にあるカレーからいいにおいがする。

見てみるとそれはリヨウのイメージしていたカレーだった。

「…クレア先輩、それは？」

「俺は自分で作った」

「クレア先輩はカレーにこだわりがあるらしいのよ」

「…」

「やらんぞ」

「心を読まれた!?!」

「女の子が作った料理を無碍にする男は最低だ」

「うっ!?!」

「がんばれ」

静かに笑いながらクレアはそこを後にした。

リヨウは周りを見た。

周りで悲鳴を上げたり気絶したりしている人はいない。

むしろおいしそうに食べている人が多く、活気がある。

リヨウは覚悟を決めた。

スプーンにカレーをとる。

心なしか手が震えているような気がした。

5秒にらめっこした後、口にいれた。

「…」

「ど、どとうっ?」

「…」

「リヨウ?」

「いい」

「えっ?」

「…普通においしいよ」

「本当?」

「ああ。うまいじゃん」

確かにおいしかった。

見た目はあれだがおいしいというありえないパターンだった。

「みんなおいしいって言ってたけどやっぱ主役がおいしいって言わないとね」

「俺の味覚はそんな変じゃないよ。みんなと大差はないんだからみんながうまいって言えばうまいって言うさ」

「なら、いいんだけど。じゃ、私はまだやることあるから戻るわ。あとこれ」

「なんだこれ?」

1枚の紙を渡してきた。

9と書いてある。

「テントの番号よ。そこにリヨウのスペースがあるわ」

「分かった。ありがと。風呂に入ったらすぐ寝たいんだけどいいの?」

「テントも出来てるしやることないからいいわよ。おそらくみんな今日は早いだろうしね」

「いい湯だった…」

風呂をあがったリヨウはテントに向かった。

ちなみに風呂は混浴ではない。

男子には「混浴にしろ！」という意見もあつたが一蹴された。

ただすぐ隣にあるので音が聞こえた。

リヨウが入った時には聞こえなかったが、風呂に入った何人かの男子が聞き耳を立てて挙句の果てに覗こうとして女子にほこほこにされたらしい。

馬鹿だよなあ、とか思いながらテントに戻る。

9番のテントはさつき着替えを取りに行くためよつた。

テントの大きさは普通だったのだが中のスペースが10倍ほどのスペースがあつた。建っているときは普通のテントだったのに科学はすごいなと感嘆する。

機械的ではないが扉もあり一部屋4人ほど泊まれるらしくすでに1人上級生がいた。

男の人で名前はマグタラン・アッグシーバと言つた。

陽気な人で楽しそうだった。

上級生には知り合いはクレアしかいなかったリヨウにとっていい機会だった。

怖いイメージが一気に払拭されたからだ。

部屋に戻るとマグタランは寝ていた。

そして2人知った顔がいた。

「あら、リヨウ。お帰り」

リリアがいた。

「…部屋間違えたか？」

「いや、合ってるわよ。女子がいるからって違うわけないでしょ」

「まじで!?普通女子と男子同じ部屋にする!?!」

「何か問題でも?」

「笑顔で言うなよ!俺はともかく間違いを犯す人出かねないだろ!」

「性交のこと?」

「さらつと言ったな!せつかくうまく言い換えたのに!」

「別にいいわよ。私、リヨウになら…」

「やめろ。まじで」

「つれないわね。もう少しのつてもいいじゃない。まあ、他がどうかは知らないけど」

「ここは大丈夫よ」

「俺がいるからな」

クレア先輩が初めて話した。

「そうだな。クレア先輩の前でそういうことしたら殺されそうな気がするな」

「賢明な判断だ。そんな聡明なお前なら私が言いたいことが分かるだろ」

「?おとなしく寝ろということですか?」

「この部屋を出て行けということだ」

へ? ナンデスト?

「そ、それはなぜ?」

「ついでにマグタラン先輩も頼む。礼は明日しよう」

「答えになってませんよ!?!なんでですかと訊いているんですよ!」

「それは俺が——」

「先輩!やめてください!リヨウたちが出ていくな!私も出ていきますよ!?!」

リリアがかなり焦っている。

よほど嫌なことでもあるのだろうか。

「リリア。俺に口答えするのか?」

「い、いえ。ですがそんなことがばれれば先輩は後輩と先輩を部屋から追い出したとい

うことで罰を課せられますよ?」

これはクレアにも応えたようだ。

少し考えてから悔しがった顔をしながら

「…仕方ない。なら俺はもう寝よう」

「おやすみなさいです!先輩!」

リリアの顔が安堵で満ち溢れていた。

よくわからないが危機を回避したようだ。

クレアはベットに入るとすぐに寝息を立てながら寝てしまった。

「ふう…」

「男子がいなくなれば女子で水いらすなのになんで止めたんだ?」

「こつちにもいろいろあるのよ。それよりリヨウ。クレア先輩にこれから何か言われ

てもこの部屋を出て寝るなんてことはしないでね?」

「なんでだ」

「お願い」

何かを訴えてるよな目をしていた。

「…分かりました」

「ありがと。よろしくね。じゃ、おやすみ」



リリアもベットにつき寝てしまった。

リヨウも疲れていたのですぐベットにつき眠ってしまった。

余談だが次の日リヨウが起きたらリリアのベットにクレアもいてリリアの顔が少し赤かったそうだ。

リヨウはリリアの発言と組み合わせた結果、答えにたどり着いたがマグタランは「仲睦ましいな」と的外れなことを言っていた。

## 怒涛の2日目

## 合宿2日目

リヨウは今マグタランと森林を歩き回っている。

2日目はテント等の設置にあてられるはずだったが、1日で終わってしまい今日一日は暇なのだ。

リリアについてきてもらえば気をつかわなくて楽だが、マグタランの方がここについて知っていたし、なにより朝起きると隣にクレアがいたもんだから悲鳴を上げることもなく失神してしまった。

クレアは「俺が介抱しておく」とか言つて部屋に残つたがリリアが可哀想でならない。おそらく部屋に戻つた瞬間、怒鳴られるのは間違いないだろう。

「で、リヨウ。君はいつたい何が見たいんだい？」

「あの、ドラゴ……じゃなくて龍を見てみたいんです」

リヨウの隣を歩いているのはマグタラン・アツグシーバという男である。体が大きく身長も高い。

しかし、デブとかさう言うわけではなく人気がある先輩のようだ。

実際リョウも話していても楽しかったし、人がいいのはすぐに分かった。

「龍かあ…。なかなか難しいことを言うね」

「やっぱり大変ですか？」

「もともとこの森林は俺たちみたいに人がよく来るからね。龍も住みつきにくいんだ」  
「人懐っこくはないのですか？」

「そういうのもいるけど数は少ないね」

「そうですか」

この合宿に5回参加している先輩が言っていることだ。

おそらく間違っていないのだろう。

使い魔にできるかとはともかく会っては見たかった。

「まあ、龍にだって個性はあるし。運がよければあっちから寄ってくるさ」

「個性…ですか？」

「人にも分かるくらい個性があるんだよ。仲良くなれば話すこともできるかもな」

「へえ…」

「じゃ、他になんか見たいものはあるかい？」

リョウにとってドラゴンを見るのは第一希望だった。

第二希望は

「バルドスを見てみたいんですが……」

「お前はつくづく面倒な注文ばかりするな」

笑いながら答えた。

見るだけなのに何が面倒なのかと疑問に思った。

「バルドスを見たいとなると……、そんなに遠くはないな。いいだろ。見に行くか」

「ありがとうございます！」

マグタランに先導されリヨウは歩き始めた。

「そのころのマーシヤの班」

「マーシヤ！そっちしつかり持つてよ！」

「持つてるわよ！でもこれ以上力を入れるとちぎれちやいそうなの」

「なんでこんな脆いものを建てなきゃいけないのかしら」

「無駄口叩かないでね。早く作る。やることは他にもあるのよ」

マーシヤの班はテント作りの真つ最中だ。

ついでに風呂もまだ半分も出来ていない。

これが普通なのだ。

「そういえば今回は一日でテントも風呂場も完成させた班があるらしいよ」  
「嘘?! そんなことできるの?」

「本当らしいわよ。違う班の人がこっちに來たんだって」

マーシャはその話を聞きながらすごいなあと思う。

今回参加した生徒の中にたまたま野宿が大好きな奴でもいたのかしらと思いつつながら作業を進める。

5分後、3時間という膨大な時間をかけて一つのテントができた。

マーシャがぐったりしているとすぐに仕事がきた。

「マーシャさんでいいの?」

「3年生のイツシュ・ラブ先輩ですよね?」

「私のこと知ってるの? ありがとう」

「先輩の名前を知っているのは当然ですよ。で、仕事は何ですか?」

「えーつとね、バルドスを捕まえてきてほしいの」

「えっ?」

「私も行くんだけど、この班Bコースの人少なくてね。上級生は経験者としてテント作りの監督をしなきゃいけないのよ」

バルドス。

格好は猪に牙をつけたような感じだ。

見た目通りで突進して攻撃してくる。

一見、ドールを装備したり魔法を唱えたりすれば余裕に見えるが実はこいつ皮膚が固い。

大人のバルドスならドールを装備していても下手に当たれば気絶するほどの威力を持つている。

そして一番厄介なのが1対1なら負けることはないがこれは群れで行動する習性がある。

油断すれば一般人なら死にかねないのだ。

「2人だけで大丈夫でしょうか？」

「大丈夫よ。私これでもドール3段階目よ？バルドスが何体いたって敵じゃないわ」

「なら私必要ないんじゃない？」

「私、…方向音痴なの」

「へ？」

「誰かについていかなないと道迷っちゃうの！前もそうだったから。1時に出ていって帰ってきたのが夜の11時ってことはよくあることよ」

「な、なかなかですね…」

「だから、ね?」

マーシヤは考えた。

ここに残るといえばおそらくテント作りにまた付き合わされるだろう。でも道案内だけなら疲れることはほとんどない。

しかも「バルドスを探すのに苦労した」と言えば時間も稼げる。

「分かりました。先輩の頼みを断るわけにはいきませんし」

「ありがとう!じゃ、行きましょ」

2人はバルドスを探しに行つた。

「リヨウ、あれ見えるか?」

「ぼつちりです。先輩」

リヨウとマグタランは今茂みに隠れながらバルドスを見ている。

大人のバルドスらしく結構大きい。

「あれがバルドスですか?」

「ああ。もう一つ言うなら高級食材でもあるぞ」

「あれがですか？」

「焼肉に最適だな。いつもは群れで行動するはずなんだが」

「一匹ですね」

「近くにいるのかもな。群れに見つかると面倒だぞ？」

「そうですか…」

しばらくリヨウはバルドスを眺めていた。

正直言うならとても強そうには見えないのだ。

何体相手にしても余裕に見えて仕方がない。

「先輩。やっぱりあれよわ」

話ながら横を見るとマグタランがいなかった。

「先輩？」

周りを探そうと後ろを見た時、後ろから押された。

そこには悪戯を楽しむ子供の顔をしたマグタランがいた。

後ろに押されて茂みからリヨウが飛び出しバルドスの目にリヨウが入る。

バルドスはすぐ臨戦態勢に入った。

リヨウは押されて茂みから出されたときマグタランの口が「ガンバ」と言っているのが確かに分かった。



「え、ええええ!」

すぐにドールを展開したが間に合わなかった。

Sバリアが体中についてからすぐにバルドスの突進がリヨウの腹に当たる。

「ぐふっ!」

肺の中から空気がすべて押し出され目の前が少しぼやける。

Sバリアがなければ間違はなく死んでいた。

とりあえず空中に移動する。

バルドスは地上で生活する動物なので空中に攻撃する手段は持たない。

そう思って油断したのが間違いだった。

バルドスはまた走り出し、なんと木をほぼ垂直で上った。

木から離れた時も恐ろしい脚力でリヨウがいる地上から?メートルくらいの所に

突っ込んできたのだ。

「なっ!」

ヒニユス(ひし形の4つの物体の名前)を使いバルドスの攻撃を防ぐ。

名前はミリーナに教えてもらった。

靄たちと話していたときにいつてたそうだ。

バルドスは攻撃に失敗し地上に降りる。

すると今度はリヨウがいる方向とは反対に走り始めた。

「へ？なんで？」

「逃げちゃうぞ？追わなくていいのか？」

「…マグタラン先輩。ひどいですよ」

「悪い悪い。後で何かいいことしてやるよ。それよりいいのか？」

「何か裏があるのかも」

「バルドスは攻撃馬鹿だ。だが頭がよくてな。勝てないとわかると逃げるんだ」

「ええっ!?そんなのありですか!」

「ありだから逃げてるんだよ。ほら早く追った追った」

急いでバルドスを追い始める。

バルドスの最高時速は50キロほど。

ドールのスピードではとてもではないが追いつくことは出来ない。

アクセルがあればすぐなのだが持ち合わせていない。

しかし、それはドールのみを使った場合の話。

「トランプR!」

リヨウはすぐにバルドスの直進方向に魔法で罠を設置する。

罠を踏んだ瞬間に荊のつるが体に巻き付く魔法だ。

バルドスがそれを踏み見事に動きが止まる。

暴れてはいるが荊が外れそうには見えない。

「おお、やったのか」

後からマグタランがやってきた。

「おかげさまでですよ」

「悪かったなあ、どうしても抑えられなくてな。ついついやってしまった」

「ついついじゃないですよ。あれ結構痛かったんですよ」

「俺もそれは分かる。あれくらって一度心肺停止になったからな」

「なんで危険ってわかってるのにそんなことするんですか!？」

「だからつい悪戯心がな。ともかくバルドス捕まえられたからいいじゃないか」

「そうですね」

「で、そいつ殺さないのか? 生きたまま持っていくと大変だぞ?」

「そうですね。じゃあやつちやいます」

リヨウはヒニユスをバルドスの頭に当てた。

しかしそれ以上のことができなかつた。

「あ、あれ?」

硬すぎてヒニユスが刺さらないのだ。



ぼとぼ帰って行った。

戻ったのは3時ごろ。

折角の高級食材を逃がしたりリヨウたちはぐったりしていたのだが、部屋に戻ったりリヨウを待っていたのはリリアの跳び膝蹴りだった。

「なんで私とクレア先輩だけを部屋に残したの！」と説教されリヨウは2時間正座をさせられた。

災難な一日だった。

「これだけいれば十分か？」

「問題ないだろ。あとは剛石龍（ごせきりゅう）だな」

「問題ねえよ。俺がすぐにとらえてやるよ」

彼らがいる場所はアメミリア森林である。

しかし、彼らはその地下にいたので生徒に感知されていない。

「しかし、Oの報告はまだか？」

「そろそろ来る頃だと思っぜ。生徒の目を盗まなきゃいけないしな」

「それもそうか。む？」

男たちが話している中に背の低い人が走ってきた。

「遅れました」

「かまわない。報告しろ」

「剛石龍は巣穴で寝ています。変化はありません」

「生徒の様子は？」

「例年通りです。特に怪しい動きを見せている生徒はいないそうです」

うなずきながらOの報告を聞くT。

「特に異変はないんだろ？なら順調だな」

「そのようだな。確かに何か妨害のようなことも見受けられんし大丈夫だろう」

「なら俺は剛石龍を捕まえに行ってくる」

「頼んだ」

1人はそこを後にした。

「O。あとないか？」

「あの、これマスターに頼まれていたものなんです」

書類のようなものを出してきた。

「これは？」

「ある一人の生徒の個人情報です。足がつかないよう紙に。直筆ではありませんが」

Tはそんなこと何も聞いていなかった。

「そうか。では、マスターへ渡しておこう」

「よろしく願います」

それだけ言うとOは一礼してきた道に戻っていった。

Tは渡された書類を確認する。

書類には紙が一枚入っているだけだった。

紙には一人の生徒の写真と名前が書いてあった。

リヨウの名前だった。

（確かこいつは今年の一年生でただ一人二段階目になった奴。でもそれだけ。逸材と言うには程遠いはず）

学校では逸材と言われるリヨウもTから見ればただの一般人だった。

（なぜこんな男に興味を?）

紙に書いてあることは少なく、調べたというには余りにひどかった。

しかし、Oがマスターの命令を適当にこなすはずがないのをTは分かっていた。

そして興味がわいてきた。

ついさつきまで興味がなかったのにこの詳細不明な男に興味があったのだ。

「期待しているぞ…」

Tは眩き業務に戻っていった。



## 巫女との対面

合宿3日目

リヨウたちは朝6時に起床して飯を食べている。

今日は特別起きるのが早い。

理由は今日リヨウたちの班は巫女のいる寺に参拝に行くからだ。

もともと恐ろしい数の生徒が来ているので早くから行かないと間に合わないのだ。

しかし、寺を見たいという生徒の数は実際少ない。

理由はほとんどの人が神様を信じていないのと、巫女を気味悪がっているからだ。

神様を信じているだけならまだ普通に接するのだがこの世界の巫女は他では類を見

ない召喚士だ。

召喚する神もこの世界の人から見れば怪物にしか見えならしく、特に科学側の人は

巫女を人とも思わないことさえある。

偏見が強いのだ。

「なんであんなものまた見なきゃいけないのかしら？」

「気味悪いよね〜」

「せっかく巫女自体は可愛いものにな」

リヨウの先輩たちが少し離れたところで話しているのを飯を食べながらリヨウは聞いていた。

「リリア」

「なに？」

「巫女さんって、どうしてあんなに嫌われてるんだ？」

「一般的には神様を信じてるからとか、化け物を召喚するからとか言われてるけどね」

「お前は違うのか？」

「私は嫉妬だと思うわ」

「嫉妬……」

「魔法側にいけなかった科学側の人と同じよ。自分がないものを持つているからじゃないかな  
いかしら」

「この人は嫉妬深いんだな」

「まあ、これは私の意見であって本当かどうかは分からないけど」

「へえ。先輩はこの巫女さん見たことありますか？」

突然話を振られたマグタランは「ちよつと待って」と言う代わりに手で合図し、飯を口に押し込む。

食べ終わると

「一度来たことあるからねえ。見たことはあるよ」

「どんな人です？」

「一言でいえば美人だよ。特徴的なのは長髪の黒い髪。めった見ないほどきれいだよ」

「神様は見ました？」

「あいにく。それは絵でしか見ていないんだ」

「やっぱり人前でホイホイと神様を出したりはしないのね…。でも何か問題を起こせば」

「何か企んでると思ったらすぐにクレア先輩にいつけるぞ？」

「それは勘弁！」

きれいな土下座態勢に入るリリア。

一瞬で変わったもんだからリヨウは止めることさえできなかった。

人前でこんなことすれば「男子が女子を土下座させてる」とひどいようにしか見えな  
い。

「ちよ、リリア。やめろよ。他の人見てるから！」

「まじでクレア先輩には。まじでクレア先輩には。まじで…」

リリアの耳に話が入っていない。

「ちよ、マグタラン先輩も手伝ってください…」

後ろを見るとそこにあるのはマグタラン先輩が食べた後とみられる茶碗と箸のみだった。

いち早く状況を判断し逃げたようだ。

(あの野郎…)

先輩に対して失礼かもしれないがそう思ってしまう。

リリアは未だに土下座したままだ。

周りもだんだんざわつき始める。

「リリア？分かったから。クレア先輩には言わないから！」

「マジでお願いします。マジで…」

「だから、分かったっていつてるじゃん！マジでこっちからもお願いだから早く」

「おい」

静かな声で、しかし怒気が確かに含まれた声がりヨウに投げかけられる。

すぐ横にクレアが立っていた。

「せ、先輩…！」

「お前、リリアに土下座をさせるとはどういうことだ？」

「いや、これには事情が！」

「今朝は早くて俺もいらついているんだ…。そんな中俺のリリアに手を出すとはいい度胸だな…」

「いや、手は出してないですよ!？」

「黙れ。問答無用!」

クレアの回し蹴りがリヨウに炸裂した。

それはある人から見れば正義の鉄拳に見えた。

しかしある人から見れば理不尽な攻撃にしか見えなかった。

「…そろそろね」

ここはリヨウたちが来る予定になっている寺だ。

1人の巫女がぼーっとしながら寺の縁側に座っている。

「ミイヤ？そろそろ生徒が来る時間ですよ?」

「分かってるわ」

「あまり気乗りしてないようね」

「そりやそうよ。なんで私があんな無粋な生徒の相手をしなきゃならないのよ」

「口が過ぎるわよ」

「本当のことを言っただけよ。言いたいことは言わないと体に良くないし」

「はあ。生徒たちの前でそんな態度とらないでくださいよ?」

「それくらい私も分かっているわよ。でも…憂鬱だわ」

「何事もよく考えましょ?ね?」

「…そうね。誰か変わった人が来ることを祈りましょ」

「…長い。長いわ」

「この石段。どれくらいあるんだよ」

「428段あるそうだ」

「なんでそんなにあるんだ…」

「5キロと比べればいい方だ。黙って歩け」

リヨウたちは今、石段を登って寺に向かっている。

もうすぐ着くだろうと思いなから歩き続けている。

これもリヨウにとっては長いだけで苦ではないのだが他の生徒にとっては大変なよ

うだ。

「リリア。あともう少しだからさ」

「それ3回目よ？」

「今回は本当だよ。ほら」

リヨウが指をさした方向には鳥居見えた。

間違いなく石段の終わりを示すものである。

するとさつきまでうだく…としていた生徒たちはテンションが上がり歩行速度が上がる。

鳥居を過ぎるとそこには大きな庭と寺があった。

「へー、広いなあ」

「本当ね。森林だから地価が安かったんじゃない？」

「それもあるけど庭が広い本当の理由は神様にあるらしいよ」

「こんなに必要なんですか？」

「詳しくは知らないけど、召喚するためのスペースだったかな？」

「そんなに必要なんですか」

とても広い庭を進んでいく。

普通に豪邸と言ってもいいくらいの広さがある。

しかし、地球とは違い少し奥にある寺以外そこには建っていないなかった。

おみくじだったり場所によってはお土産屋さんだつてあつてもいいはずなのにそこにはなかった。

客寄せについては本当に考えていないのだろう。

寺の前まで来ると5年生の先輩が前に出る。

「よし。じゃあここからは自由行動だ。庭の散策をするもよし。寺の中を見るもよし。時間が来るまで各自楽しんでくれ。ただし、犯罪に当たるようなことはしないでくれよ?じゃ、自由時間だ」

それを聞くとみんなそれぞれ行動を始めた。

「リヨウ。あなたは どうする?」

「俺は寺の中を見てみるよ。少し興味あるし」

「じゃあ私も行こうかしら。お寺の中でいい記事が見つかるといいんだけど」

「しっかり撮つてこいよ?俺は用事があるから別行動だ」

「了解しました、先輩!」

「期待しているぞ」

リリアの顔が笑いながら少しひきつる。

この言葉にはおそらく深い意味があるのだろう。



リヨウは考えないことにした。

「じゃ、行こう。リリア」

「ええ。ここで引き下がったらおしまいだわ…」

寺の前まで来ると久しぶりに見る木でできた建物を見て懐かしく感じた。

この世界に来てからは扉と言う概念はほとんどなく転移装置を使えば目的地だった。

しかし、この寺にはそんなものはない。

横にスライドするドアに手をかけ開く。

この感覚は本当になつかしいものだった。

リリアは物珍しそうに見ている。

「扉なんて久しぶりに見たわ。しかもこれ横に動かすのね」

「リリアの家は扉がないのか？」

「いや、あるわよ。ただかれこれ10ヶ月ぐらい帰ってないし。それに横に動かすものじゃないし」

しゃべりながらカメラで扉を撮っている。

「リリア。いくらなんでもこれくらいじゃ記事にはならないんじゃ」

「一応のためよ。何かに使えるとも限らないし」

しゃべりながら奥へ進む。

寺の中は日本でも見るようなものとあまり変わりはなかった。

地獄絵のようなものが飾ってあったり、住職らしき人がいたりだった。

しかし、肝心の巫女が見当たらなかった。

「いないわね、巫女」

「だな。やっぱり忙しいのかな」

「神様を呼び出せる選ばれし者だものね」

「選ばれし者……か」

そう言われると親近感を覚える。

リヨウはミリーナに選ばれた。

ここの巫女もおそらく何かに選ばれた。

スケールは天と地のさがあるような気がするが気にしない。

「ねえ、リヨウ。あれって何？」

「あれ？」

リリアが指をさした方向には地獄絵があった。

「何って、地獄絵だよ」

「地獄絵？」

「こうして生きてるうちに悪いことをしたらあんなところに死んだあと連れていかれる

ぞってやつだよ」

「胡散臭いわね。死んだ後に世界があるの?」

「それは死んでみないと分からねえよ。でも、あれを見てこんなところにはいかないためにもいいことをしようって思わないか?」

「信じてないしそんな気は起きないわね」

「そうかよ…」

この世界の人にこういうたぐいの絵は意味がないようだ。

すべて確証がない限り信じない。

そういう人がとても多い世界だ。

「ねえ、じゃああの蛇みたいなのはなに?」

つづいてリリアが指をさした方向にあったのは青龍が書いてある絵だった。

「あれが青龍だよ」

「ここの巫女が使役しているっていう?」

「そうらしいね。8体いる神の一つだよ」

「8体? 4体じゃなくて?」

「詳しく言うとは8体いるんだ。東西南北の他に」

「ちよつと、あなた!」

リリアと話していると声をかけられた。

後ろを振り向くとそこには：巫女がいた。

「巫女、ですか？」

「そうよ。私はここの巫女をやっているミイヤ・ケリニアス。それよりあなた！」

「俺か？」

「そうよ。ちよつと来なさい！」

「は？なんで：つてちよつと！」

寺で働いている人らしき人に腕を掴まれる。

「何すんだよ！」

「あまり時間はかけないし、痛い目にもあわせるつもりはないわ。お願いだから黙って連れてかれて頂戴」

落ち着いた目を巫女はしていた。

なんの理由もなくただ捕まえたわけではないようだ。

「分かった」

「リヨウ！」

「リリア。心配するな。時間も取らせるつもりはないみたいだしすぐ戻る」

「聞き分けがいいわね。じゃあ来なさい」

「あんた！」

リリアが巫女に声をかける。

「何よ？」

「リヨウがいいというから何も言わないけど、リヨウに何かあつたら許さないわよ」  
「…覚えておくわ」

それを言うとリヨウは巫女に連れてかれた。

リヨウは客間らしきところに連れていかれた。

牢屋みたいなどころでないところから、そこまで疑われているわけではないようだ。

しかし、巫女のボディガードらしき人が2人ほど近くで待機している。

「単刀直入に訊くわ」

巫女がすぐに話を切り出した。

「なんで神が8体存在することを知ってるの？」

「は？」

「このことは私たち巫女の中でもかなり上位の機密事項よ。なぜそれをあなたが知っているの？」

「なんでと言われましても…」

リヨウにとってこの状況はかなりまずかった。

リヨウがこのことを知っていたのは地球にいたところにいろいろあつて知つたのだ。

そのことを巫女に話しても信じてくれるはずはない。

むしろ馬鹿にされてると思ひ何かされるかもしれない。

神を召喚できる巫女に勝てるとはとても思えない。

「つていうかあなた、何かが違うわね…」

「？」

「たぶんこれは「気」ね」

「気、ですか？」

「この感じ、前もあつたわ。でも5年くらい前の話だし…。誰から感じたのかしら。サ

リス」

「はい」

するとサリスというボディガードらしき女は大きな本を取り出し、ページをめくる。

「このあたりかと」

「ここらへんね…。えーつと、あつた！名前はマクアドル。この人は知ってる？」

「俺の教師だ」

「接点はそれだけ？」

「…ああ」

「隠し事は得しないわよ？」

「…」

「知ってること言うまで帰さないわ」

「時間はとらないんじゃないのか？」

「事情が事情よ。申し訳ないけどあなたが努力した分だけ早く帰れるわ」

リヨウは迷った。

話すべきか否か。

信じてくれるかどうかはともかく言えば帰れるかもしれない。

でも最悪逆鱗に触れかねない。

考えているリヨウにめんどくさくなっただのか巫女は

「別にね、「気」はどうでもいいのよ。問題はなぜ隠された4体の神をあなたが知っていたのかだから。そこだけでも教えてもらえない？」

「…時間がほしい」

「状況分かっている？あなた下手すれば死」

「お前こそ分かっているのか？人前で早々と俺を連れ去らったんだぞ？」

「…」

「俺が帰らなければ大ごとになるぞ？それこそお前らを毛嫌いする奴らはこれを口実に攻撃しかねない。いくら青龍がいるとはいえ数にはかなわないだろ？」

巫女は考え始めた。

サリスという隣の奴も何かしら助言している。

答えが出たのかリヨウの方をむく。

「分かったわ。今晚あなたの野宿しているところに伺うわ。それでどう？」

「明日じゃダメか？」

「あまり時間はあげたくないの。逃げるかもしれないし」

「…分かった。今晚の0時でいいか？」

「いいわ。じゃ、帰ってもらいませよ。サリス、ノリス。彼を連れの所まで案内してあげて」

「はい」「了解しました」

それだけ言うのと2人はすぐに立ち上がり、半ば強引にリヨウを部屋から連れ出しその部屋を後にした。



「準備はいいか？」

「いつでも構わない」

「Oの魔法は稼働しているんだよな？」

「確認済みだ」

夜中の10:30、彼らは作戦の最終準備に取り掛かっている。

順調なようだ。

「バルドスはどうなった？」

「問題ない。あれくらい何体いようと死体なら問題ない」

「やっぱりお前は怖いな」

「そうか？」

口では隣の男と話しながらも頭はリョウと戦ってみたいということではいっばいである。

今回の作戦、はじめは何も楽しみがなかった。

そこに現れた楽しみ。

嬉しくないはずがない。

「じゃ、俺は所定位置につくぜ」

「わかった。作戦開始の0時まではそので隠れていてくれ」

「分かってる。間違っても見つかるなんてことはねえよ」

「ならいいが……。分かってるな？今回の作戦は」

「巫女さん殺害が目標、だろ」

「分かってているのなら構わない。邪魔なら他も攻撃してかまわないができる限り静かに  
行うんだ」

「寝泊まりしているところをバルドスで奇襲する時点で静かに行うのは無理だと思うが  
な」

「仕方ないだろ。あそこにいる生徒たちは作戦の邪魔だ。やるしかない」

「分かってるよ。じゃ、俺はいくぜ」

男は所定位置に向かった。

残ったTもやることが残っているので少し急ぐ。

完璧にこなさなければ戦いに参加は出来ない。

「やらなければならぬことをやらない奴に自由はない」というのが彼の持論だ。

戦いが始まる1時間と30分前の話だった。

## 再び始動する戦争

夜の11時。

リヨウは寺に来ていた。

待つていればキャンプに来てくれるはずなのに寺までやってきていた。

1時間ほど早く。

サリスとノリスが寺の前に立っていた。

少し驚いた顔を見せたがすぐに一人が寺の中へ入る。

リヨウは30分もの間、寺の前で待たされた。

巫女は準備にそれだけ時間がかかるのだろうか？

寺へ入る許可がおりると、サリスたちに昼頃連れていかれた部屋に通される。

巫女が昼と同じところに座っていた。

「私がそちらへ伺うはずだったのだけど？」

「みんな寝てたからな。それに一回寝ると俺も0時に起きれるか分からないし」

「まあ、わざわざ動かなくていいからいいのだけれど」

目の前にお茶が出される。

さつきとは違い少しは歓迎されているようだ。

「じゃ、さっそくだけど本題に入るわ」

「ああ」

「なぜ8神を知ってたの？」

「…初めに言っておく。信じられないかもしれない」

「神を信じてるのよ？多少のことじゃ驚かないわ」

「そうか」

覚悟は決めていた。

話すしか道はないということも分かっていた。

いずれ他の人にも話さなければならぬことだ。

だからすべて話した。

地球のことや、マクアドルの関係。

巫女は黙ってそれを聞いていた。

すべてを話し終わっても巫女は少しの間黙っていた。

「にわかには信じ難い話ね」

「それはそうだ。俺も信じてもらえとは思ってない」

「でも矛盾する点も特には見当たらない…」

「一応、すべて真実だからな」

「ん〜…」

また考え込んでしまった。

無理もない。

むしろ考えてくれていてるだけありがたいほうだ。

頭ごなしに否定されても仕方ない。

「…証拠」

「は？」

「証拠は何かないのって聞いているの。地球とかいう世界の物体とかないのかって」

「…」

地球にあったもの。

リヨウが今持っているものでそれに相当するもの。

「…今はない」

「今は？」

「一応マーシャっていう友達の家の一軒だけある」

「そう。証明するものはなし…ね」

また、考え込む。

しかし今回はそんなに長くなかった。

「はあ、どうしてこんな問題が起きるのよ。生徒どもが来るっただけでかなり面倒なのに」

「8体の神を知っていることの何が問題なんだ？」

「あなたの言っていることが本当なら確かに理由は知らなそうね。でも教えることは出来ないわ」

「なんで？」

「このことを知ってしまうとあなたは本格的に死に近づくからよ」

「そうか、ならやめておくよ」

死ぬのはごめんだ。

これ以上のことを聞いて死んでしまうのなら聞かないにこしたことはない。

「なら俺はそろそろ帰っていいか？」

「何言ってるのよ。全然問題解決してないじゃない」

「でも俺は知ってることはすべて話した。俺が協力できることは何も無い。後はお前らの仕事だろ？」

「だけど」

巫女が何か言いかけた瞬間、地響きと同時に爆音が響いた。

「なっ!?!」

「ちよつと、いったい何よ!?!サリス、ノリス!」

「はい」

命令が下ったサリスとノリスはすぐに外に状況を確認しに行く。

「俺も」

「だめよ」

「なんで!」

「今あなたを私は疑っている。自分のことを知られたからこの寺を攻撃したのではないかと。今のあなたは人質よ」

「俺は生徒だぞ!?!そんなことできると思うのかよ!?!」

「それが分からないのがこの世界よ」

「でも!」

「いいから座ってなさい!でないと私が」

再び爆音が起きる。

さつきよりも確かに近づいていた。

リヨウは迷わない。

すぐにドールを展開する。

「ちよ、あなた！待ちなさい」

そこまでしか聞き取れなかった。

リヨウはすぐに外に出る。

寺はほとんど被害を受けていなかった。

しかし、寺を出た瞬間目に入ったのは、死体だった。

あるものは爆発に巻き込まれ、あるものは噛み千切られて死んでいる。

中には生きてはいるが助かる見込みがないほどボロボロになっている人もいた。

「おおっ？なんだおまえ」

声が聞こえたのでそちらを向く。

目の前には体全体を黒で覆った男が立っていた。

どこかで見えた格好である。

「誰だ？おまえ」

「こつちが最初に質問したじゃねえか。ったく、しつげがなってねえな」



「質問に答えろ」

「分かったよ。俺はサッド・マグ。ほら、お前も名乗れよ」

「リヨウ・アマミヤ」

「そうか。一つ質問だ。ドールを装備しているようだがなんで生徒がここにいる？」

「答えるつもりはない。これはお前がやったのか？」

「質問に答えねえくせに質問はするのか。ちなみにこれをやったのは俺じゃない」

「じゃあ、誰が…」

「こいつだよ」

サッドが後ろを指すと上から何かが降ってきた。

大きな地響きとともに。

砂煙が上がる。

「……」

「お前運いいな。ここの奴じゃないんだろ？じゃあどけ。今回の作戦は関係ねえ奴はできる限り殺すなっていうことになってるんだ。どけば何もする気はねえ」

「俺は、関係ない？」

「こいつと戦っても勝てねえだろ？だからさっさとどけ。俺が用があるのはお前だ」

リヨウの後ろを指さしている。

振り向くと巫女がいた。

「何の用かしら？あなたみたいな無粋な知り合いはいないのだけど」

「俺も初めてだよ。お前に会うのは」

「ふうん……。で、こんなことをしていったい何の用？」

「命をもらいに来た」

「寝言は寝てからいなさい」

「いいや。本気だぜ？準備も出来ている」

後ろの砂煙が晴れて降ってきた物体の姿があらわになる。

そこにいたのは龍だった。

見た目はティラノザウルスと酷似している。

「剛石龍……。いや、その模造品ですか」

「へえ、よくわかったな。本物を捕まえてきてもよかつただけどよ、こつちんほうが楽

だからやめた」

「なめられたものね。私が巫女と知っているでしょ？」

「神を呼び出せるからか？今のお前の神とやらはこいつで十分だと思ったんでね」

「ならそれが誤りだということを証明しなくちゃね」

「なんだ。出し惜しみはなしか？」

「これでもかなり頭にきてるの。リヨウ、下がってて」

リヨウの目の前に巫女が立つ。

リヨウは「一緒に戦う」と言いたかったがやられたのは巫女の仲間だ。危なくなったら助けに出ることにした。

「ありがとう」

何も反論せずに下がったリヨウにそれだけ言うと深呼吸をした。

そして地面に魔力を送り込む。

ただの地面に魔力を送り込んででもそこに魔力がしみこむだけである。水をイメージしてもらえればそれが一番近い。

しかし、この寺の庭には魔力が通るための道があった。

水路ができているようなものだ。

流れ出た魔力は庭全体に及び、やがて一つの魔法陣を作り出した。

その上に乗っていたサツドはそこから離れる。

「青龍！」

掛け声と同時に魔法陣が輝き始める。

そして

魔法陣から頭から順に現れる。

轟音と暴風が起きリヨウは目をつむる。

次に目を開けた時には魔法陣はなく、空中に、まさに神のように降臨していた。

「す、すげえ…」

思わず呟いた。

これほどにまで見とれるとは思ってもいなかった。

全身は青で統一されておりにまさに、この寺で見た絵の通りだった。

「へえ、少しはやるようだな」

巫女に近づきながらサツドはじやべる。

「私も青龍もまだ何もやってないわよ？」

「お世辞だよ」

「それはあなたが言う台詞じゃないわよ」

「どうも隠し事は苦手だな」

「そう。で、覚悟はいいかしら？」

「覚悟？何のだ？」

巫女の声のトーンが下がる。

「生きて帰れると思うなよ」

それを言うと巫女は手をサツドに向ける。

青龍はサツドに向かつて突っ込む。

しかし、剛石龍は邪魔をする。

「やはり、龍は龍と。人間は人間とやりあわないとな」

「あなた、剛石龍なしで私に勝てると思ってるの？」

「だから俺一人しかないんだけどな」

「後悔するわよ？」

「おまえがな」

2人が魔法を唱え始めた。

「んん…、眠い」

リリアはリヨウが寺に向かつてから1時間たった11時過ぎに目を覚ました。理由はクレアがリリアのベットに侵入してきたからだ。

1日目のことがあつてからクレアの侵入には敏感になつている。

そうやつて起きたとき、リヨウがベッドにいないのに気付き外に出てきたのだ。テントの周りを探してみたがリヨウは見当たらない。

(いったいどこへ…。昼の巫女との騒動が関係あるのかしら)

昼は戻つてきたときは「もう終わつたから」といつて何も話してくれなかつた。だからリリアもそれを信じたがやっぱり何かあつたのだろう。

そう思い寺へ行こうとしたその時、何かの足音を感じた。

気のせいかと思つたが確かに聞こえてくる。

音はだんだん大きくなり、群れでこつち向かつてきてるのが分かつた。

非常時に備え、リリアはドールを展開する。

「いったい、なんなの?」

すると足音が聞こえてくる方向から1人、人が現れた。

リリアを見て少し驚いている。

「…驚いた。まさかこの足音で起きるやつがいたとは」

「あなた、何者?」

「すまない。応えたいのはやまやまだが守秘義務でね。それに……」  
足音がすぐそこまで来た。

とてもうるさく普通の声ではかき消されてしまいそうなのは、リアにその男の声はつきり聞こえた。

「死にゆくものに答えても意味はない」

その台詞と同時に足音の正体が姿を現す。

バルドスの群れだった。

「なっ!？」

反射的に地面を離れ宙に浮かぶ。

距離はあったのでかわすことは出来たがテントが危ないことに気づく。

いくら科学の力が加わったテントと言ってもバルドスの突進を、しかも何度も受けければ壊れるのは間違いない。

転移装置の役目をしている扉が壊れれば中にいる人にどんな影響があるか分からない。

「くそー!」

一番近くにあったテントだけでもと思いアクセルを使いバルドスより早くテントの前につく。

そして、目くらまし。

「フラッシュュー！」

目の前が光る。

今ではよほど魔法を毛嫌いしていない限りはフラッシュューはメジャーになりつつある。もちろんフラッシュューを使えるぐらい魔力があればの話だが。

これで、リリアはバルドスが止まると思つた。

少しでも止まってくれば何か打開策が練れるかもしれない。

しかし、ここで予想外の事態が起きた。

バルドスが止まらないのだ。

混乱している様子もない。

多少距離はあつたがいくらなんでもおかしすぎる。

しかし、リリアに考えている暇はない。

急いで目の前にシールドを展開する。

一瞬、バルドスの群れはそこで止まつた。

しかし、それは本当に一瞬だった。

すぐにシールドが壊れバルドスの群れが突つ込んでくる。



——  
リリアに逃げる時間は残されていなかった。

## 力の差

「リリアがバルドスに追い込まれてる間」

「起きてるやつがいたとは驚きだなあ」

「いや、おそらくたまたまだろう。それより早く寺へ行つて巫女を殺してこい」

「分かってるよ。行くぞ剛石龍」

バルドスがテントに向かつて突進している中、サッドは隣を抜けて寺へ向かう。

「さて、リヨウ・アマミヤ。生きているといいのだが」

彼の楽しみは今回の作戦ではこれしかない。

寝込みを攻撃するという奇襲をかけてリヨウを殺してしまつては意味がないと思つたが作戦は変更できない。

Tは容赦なく、テントに向かつてバルドスを突つ込ませた。

「ほら、どうしたよ？ 巫女の実力はそんなもんかあ？」

「まだ本気を出した覚えはないわ」

2人は戦っている。

寺で。

そしてそのすぐ近くで青龍と剛石龍が戦っている。

龍たちはご主人を傷つけないためか、できる限り噛みつくや、ひっかくなどで戦っている。

リヨウはただそれを眺めていた。

別に戦力になれないほど、周りの戦いがものすごいわけではない。

巫女たちがリヨウより実力が上なのは確かだが。

ただ、巫女であるミイヤがやるべきだと思いきや、手を出さないだけだ。

「そうかよ。ならこれでどうだあ！」

サツドの目の前に魔法陣ができる。

そこから数えきれないほどの火の玉が飛び出す。

「その程度、かわせないと思うの？」

ミイヤは普通に動きながらかわす。

「そりや、この程度で当たるとは思つてないさ。だがこれならどうだ！」  
魔法陣が5つに分裂する。

そのすべてから同じように火の玉が出てくる。  
数が多すぎる。

「面倒ね…。必火断界！」

しゃべりながらお札のようなものを目の前にかざす。

すると札から輪っかが出てくる。

その輪っかはミイヤに向かう火の玉をすべて消し飛ばした。

「変わった魔法だな。それも巫女特有の奴か？」

「半分はあつてるけど、半分は間違つてるわ。確かに私にしか使えない術もあるけど今のはここに働いている大抵の人が使えるわ」

「俺も使えるのか？」

「無粋な輩に使えるほど甘い術じゃないわ」

「そうかよ」

言いながらサッドは魔法陣に触れる。

オレンジ色だった魔法陣が水色に変わる。

すると水の塊が魔法陣から襲い掛かる。

ミイヤはすぐに新しい札を取り出しさつき同じように扱う。  
すると水の塊も同じように打ち消された。

「不便な魔法陣だな」

「何がよ？」

「いちいち替えないといけないのか。可哀そうになあ」

「おしゃべりな男は嫌いよ」

「俺の知り合いはじゃべるのが大好きな奴多いぜ？」

「なら一生あなたたちとは分かり合えなわね。水破！」

サツドの周りに水の弾が現れすぐに破裂する。

サツドはしゃべるのに夢中だったので反応が遅れた。

ぐしよぐしよに濡れる。

「禁電！」

ミイヤの手から電撃が放たれる。

サツドは水を浴びたこともあり避けきれず直撃する。

「束集禁牢！」

ミイヤは攻撃の手を休めることなくサツドの周りに黒い輪つかを出現させ縛った。

「いてて、おしゃべり中だぜ？」

「知ったことじゃないわ。にしてもまだ余裕そうね」

「ああ。朗報が入ったからな」

「お聞かせ願えるかしら？」

「そつちでの勝負が終わりそうなんだよ」

サツドの台詞と同時に2人の間に青龍が投げ出される。

起き上がるがボロボロなのは明白だ。

「なっ!？」

「自慢の神様がこれじゃあ話にならねえな」

一方剛石龍はほとんど無傷だ。

擦り傷こそ多々あるが致命傷になりそうにはない。

「青龍！あなたの實力はこんなもんじゃないはずよ！私は構わないから本気を出しなさい」

「いー」

「意味のないことを」

青龍が口にエネルギーを溜める。

寺の屋根ははがれはじめ、死体の一部がいろいろな所で消えていく。

暴風が起き寺の周りの木々は激しく揺れる。

「剛石龍。打ち消せ」

すると剛石龍もエネルギーを溜め始める。

しかし、青龍は剛石龍が溜め始めてからすぐブレスを放った。

「せいつ!？」

「わざわざ待つ義理はないわ」

剛石龍もブレスを放つ。

しかし、青龍はただでさえ神と呼ばれているくらいだ。

それに比べて剛石龍は気性が荒く、この世界の龍の強さのランキングでも上位に入る  
とはいえ、言ってしまうばただの動物だ。

どちらが勝つのかは一目瞭然だった。

——一目瞭然なはずだった。

「なっ!？」

「嘘でしょ…!？」

しかし、2つのブレスは目の前でぶつかると音も立てずに消えていった。

青龍は疲れ切ったのか地面に降りてくる。

「だからやめておけと言ったのに」

「な、なんで」

「お前が未熟だからだよ」

分かりきっているかのようにサツドは言い放つ。

「あなたに何が」

「分かるんだよ。お前の親の青龍を見たことがあるからな」

「私の…親の？」

「ああ。青龍はその所持者によって力が変わる。その時の青龍は今とは比べ物にならないほど強かった。おそらくこの剛石龍じゃ勝てねえだろうよ」

「なんであなたが見たことあるのよー」

「見る機会なんていくらでもあるんだよ。情報だって俺たちの組織の力があればすぐだ」

ミイヤの顔がだんだん絶望に変わっていく。

一番の勢力であった青龍がやられたのだから無理ものない。

「おいおい。もう降参か？せつかく盛り上がってきたのによ？まあ、楽になるから」

サツドが一瞬でミイヤの目の前に近づく。

腹に膝蹴りが入る。

「いいか♪」



ミイヤは吹っ飛ばされ痛みあまり立ち上がれない。

「術だけ極めようとするからそうなるんだよ！体が脆いところちも調節大変なんだぜ？」

近づきながら話す。

ミイヤは痛み耐えながら札を取り出そうとする。

「面倒かけさせんなよ」

術を唱える前にけりが入る。

いくつもの札が宙を舞う。

「使わせると思っか？」

飛び散った札の一枚をサツドは手に取る。

痛み耐えているミイヤに向かって言う。

「お前、確かこの札に魔力を送って使ってたよな？」

するとサツドの持っていた札が光り始める。

「無駄な俺でもできるのか。これはいいや」

札から出る何かが出る直前、リョウが2人の間に割って入る。

「…何のつもりだ？」

「これ以上はやめろ。まだやるといふなら俺が相手をする」

「そこに倒れてる巫女より弱いお前に何ができる？」

「やって見なきゃわかんねえだろ」

「傍観する気はないんだな？」

「当たり前……だ！」

先手必勝と言わんばかりにリヨウがサッドに突つ込む。

ヒニユスを使い4か所から同時に襲い掛かる。

「ライトシールド」

サッドが唱えるとヒニユスの行く先に四角い4つの壁が現れる。

簡単に止められた。

「雑魚は雑魚らしく黙ってろよ」

「まだ負けたわけじゃねえだろ」

「いや、負けだ」

「何言って」

「面倒なのは嫌いなんだよ」

それをサッドが言った途端、リヨウは後ろに吹き飛ばされた。

「なっ!?!」

あまりのことに反応できずただ飛ばされた。

「お前は巫女にも勝てなければ、おそらくそこで肉塊になつているごみどもにも勝てない。見たところ二段階目か？そんなんで勝てるわけねえだろ！」

サツドは周りで電気を走らせリヨウウに向けて放つ。

今のリヨウウに防ぐ手立てはない。

リヨウウは目の前にある札を握り魔力を込める。

運よくそれは自分の周りを結界で覆う札だった。

電撃が結界によつてはじかれる。

「ちつ！科学側のくせに魔力があるのか。だが、無意味だ」

すると、サツドの周りに球体が出現する。

リヨウウには魔法の正体がすぐに分かった。

ビムが使つてた魔法とまったく同じものだったからだ。

「お前…、ビムとかいう男の仲間か!？」

「ああつ？なんでお前が…、ああなるほど。お前が例の一年の逸材つてやつか？なら俺は運がいいな。どんなに駆除が面倒な害虫でも卵のうちならある程度楽だからな。悪いけど死んでもらうぜ」

サツドは球体をリヨウウ向かつて放つた。

リヨウウの魔力は測っていないからどのくらいあるかは不明だ。

そして、一切の授業を受けていないので荒い。

魔力が3あれば事足りるものを5出さないとうまくいかない。

力任せに魔法を唱えているのだ。

今まではよかったかもしれないが札を使ってみてすぐわかった。

これは繊細な作業を必要としている。

魔力が多すぎれば札耐え切れず回路がショートするし少なすぎれば機能しない。

しかし、今くる魔法はそんな繊細な作業をしていると耐えることは出来ない。

「くそー」

すぐにそこらへんに落ちている札に手をかざす。

おそらく同じ類の魔法の札が近くに落ちているとふんだのだ。

結界の外で爆発が起きる中、めいっばい魔力を放出した。

しかし、そこにあつた札はバラバラなものだった。

結界内で爆発が起こる。

「いっほー」

吹き飛ばされ結界から放り出されてしまう。

体が痛い。

「はははっ！何自滅してんだよ!?馬鹿かお前?」

声は聞こえているがそつちには耳を貸さない。

何か次の手段を考えないと…。

這いずり回りながら次の手段を練ろうとする。

「はあ。まだお前やる気かよ？もういいよ。お前つまんねえし。巫女の方もただけだな。剛石龍！」

リヨウに剛石龍が迫る。

「安心しろよ。しつかりかんで食べさせてやるからよ。巫女は俺がやるけどな」

サッドが巫女のほうに向かって歩く。

残り10メートルあるかないかだ。

このままでは二人ともやられてしまう。

急いで何かしなければならぬ。

リヨウは手当りしだい札を使った。

爆発系。強化系。防御系。

しかし、どれも剛石龍にもサッドにも届かなかつた。

（また…俺は…くそ、クソクソクソクソクソクソ！なんでもいいから！誰でもいいから！あいつを、ミイヤを助けてくれ！）

リヨウはがむしやらに魔力を使う。

札を使う。

そして

奇跡は起こった。

リヨウが手に取った札の一つにある特殊なものがあった。

それには魔法陣が書かれていた。

触っただけで分かった。

この札は普通の札よりも多くの魔力を消費すると。

とてつもないものだ。

どんな効果があるかは分からない。

もし、大量の魔力を使う上に繊細なものなら自爆したとき命はないかもしれない。  
でも迷わなかった。

理由は単純。

あいつ（サツド）が許せないから。

リヨウはありったけの魔力を送る。

地面に大きな魔法陣が描かれ始める。

それはミイヤが青龍を呼び出したときと同じものだった。地面の魔法陣が寺全体に広がり、暴風が吹き荒れ始める。

## 覆る絶対

ミイヤは朦朧とする意識の中、目を覚ましていた。

さつきまで気絶していたのになぜか？

それは周りから神を召喚するときの力を感じたからだ。

「(いったい誰が…?)」

しかしその魔法の構成は自分のに一番似ていた。

ありえないと思いつながら力の感じる方向を見る。

そこには確かに青龍を召喚するときと同じ構成をした魔法陣が出来上がっていた。

「ちよ、冗談だろ!?!」

サツドは巫女を殺そうとしてその手を止めた。

後ろからありえないはずの力を感じたからだ。

しかし、サツドが振り向くとすぐに足元に魔法陣が広がってくる。



急いで魔法陣から抜け出した。

するとすぐに魔法陣から長い物体が現れた。

正体はすぐに分かった。

だけど頭はありえないと、否定している。

4神を召喚できるのは巫女だけだ。

それは絶対だ。

今まで同じように札を手に入れた輩が魔力を込めて魔法陣を展開したことはあった。

しかし、魔法陣は出てくるものの、それだけだった。

神は現れなかった。

一度も成功した例はない。

その結果が今、ここで覆されていた。

リヨウは無我夢中で札に魔力を込めていた。

青龍が現れた後も、見とれながらこめていた。

巫女が召喚したものと形は全く一緒だった。

ただ、一つだけ違うところがありそれは色だった。

リヨウの青龍は緑色をしていた。

それ以外は全く一緒だった。

「…はっ、はははははははははは！」

サツドが大きく笑いようやくリヨウは我に返って魔力の放出をやめる。

「ずいぶんとたいそうなものを作ったなあ。まったく、神の模造品をつくなんて罪深い奴だ」

「模造品？」

「当たり前だろ！その神とやらは巫女にしか召喚は出来ない。決定事項だ！そして巫女の家系には女しか生まれない！お前に巫女の血が入ってるはずがねえんだよ！そして模造品以外ありえねえだろ！」

リヨウは自分の出した青龍を見る。

自分でもこれが本物なのか似せて作られただけの偽物なのかは分からない。

「その雑魚の模造品だ！この剛石龍に勝てるわけえんだよ！」

その言葉を合図に剛石龍がリヨウの青龍に襲い掛かる。

しかし、剛石龍はすぐに止まってしまった。

いや、少し揺れているところから動こうとはしている。

しかし動くことができないようだ。

「何してやがる、剛石龍！きつさつと、墮とせ！」

サツドの顔に焦りが見え始める。

ありえないはずのことが次から次へと起こっているからだ。

剛石龍は動けないのならと、ブレスををはく。

青龍も同じくブレスををはいたが、レベルが違った。

剛石龍のはいたブレスはただの一秒も耐えることができぬまま青龍のブレスによってかき消される。

「な…、模造品がなんで」

「模造品じゃないからよ」

いつの間にか移動していたミイヤがしゃべる。

「模造品じゃない？ありえるはずねえだろ！」

「ええ。初めは私もあなたと同じ意見だった。でも、今ので分かったわ。あれは本物よ」

「んなことがあつてたまるかよ！4神つてのはお前ら巫女しか召喚出来ないんだろ!？」

「そのはずだったのだけど…、今は好都合ね」

ミイヤの青龍が起き上りサツドを狙う。

剛石龍は助けに向かうが

「青龍!!」

リヨウの青龍に行く手を阻まれる。

そして青龍の眼光が紫色に輝いた瞬間、：破裂した。

「なっ!?!」

あまりのことにサッドは頭が追いつかない。(リヨウ自身もここまですごいは思っていないかった)

青龍の攻撃をかわすが、ミイヤの攻撃が待っていた。

「雷記電礼!」

ミイヤから放たれた電撃がサッドにむかうが、青龍がやつとでかわすことができない。

「グ。。。う。。。ああああああ!」

言葉にならない雄叫びを上げながら水の弾をあらゆるところに打ちつける。

数が多く、そこらじゅうが水浸しになり始める。

感電すると思いミイヤは電撃をやめる。

「はあはあ、えほっ!」

「攻撃を受けてる間でも考えることができるのね。やるじゃない」

「てめえ。。。!」

「悪いけど、降参したら命は助けてあげるなんて言わないわよ。私はあなたを殺すわ」

「俺をここまで追い込んだんだ。正当防衛にあたると思ってるのか？」

「犯罪者になるかもって話？証言してくれる人はみんな私の仲間よ。もしもの時は口裏合わせるわ」

「それでも巫女かよ」

「最後の言葉はそれでいいかしら？」

ミイヤが歩いてサツドに迫る。

さつきとは立場が逆転している。

しかし、サツドはさつきのミイヤと違い意識がはつきりしていた。

「このままおとなしく俺がやられると思ってるのか？」

「そのつもりだけど」

「なめやがって……。O！こい！」

するとさつき破裂した剛石龍の破片が一転に集まり始める。

それは人の形を模り、やがて一人の少年になった。

「伏兵がいたってわけね……」

少年は体の調子確かめるように手を広げたり閉じたりする。

確認が終わるとリョウウの方をむいた。

「…初めまして。Oです」

「目の前に私がいたのにリヨウの方をむくって大した度胸じゃない」

「もちろん君にも挨拶するつもりだったけどリヨウの方が重要なんでね」

「言ってくれるじゃない」

「悪く聞こえたのなら謝ります」

「おい」

「サツド、なんですか？僕は今回戦線には剛石龍でのみ、参加するはずだったので？」

「状況が変わった。青龍が2体だ」

「はい。見ればわかります」

「一時撤退だ。俺を連れて退いてくれ」

「それは無理です」

サツドの顔がしかめっ面になる。

「ああ？」

「今回、君の命令は巫女の殺害とその身柄の確保。しかし、確保どころか殺害すらできていない。よって撤退は認められません」

「想定外のことが起こったんだぞ?!次やればいいだろ!？」

「次はありません。作戦を遂行できないというのなら…死んでください」

「てめえ……！」

少年はミイヤのほうを見る。

「邪魔をしましたね。ところであなたはこいつを殺す気だと聞いたのですが？」

「ええ。殺すわ」

「なら構いません。どうぞ好きにやってください」

「自分の仲間なのに冷たいのね？」

「命がけの方が彼も本気を出します。そうすればもしかしたら、勝てるかもしれませんし」

「あつそ。まああんたがそいつの仲間ってなるとあんたも殺したい気はするけど邪魔しないならいいわ。さっさと消えて」

「分かりました。ではこれで」

少年の体が崩れ始める。

「…グリーンジョ・V・ラナターシャ」

少年の体の崩壊が止まる。

今話したのはサツドだ。

「俺を連れて撤退しろ」

「…そこまで命が惜しいですか」

「いいから俺を連れて撤退しろ！俺を置いていくのなら死ぬまでラブトリアのこ  
と話すぜ」

「それでも組織の人間ですか？」

「知るかよ。今は俺は生き残るのに必死だ。いいからさっさと俺を連れて退け！上官命  
令だー」

「…分かりました」

崩れかけた体を動かし、サッドに近づく。

「させると思うの？」

「申し訳ありません巫女さん。しかし上官命令ですので」

「そういうことだ。ここは退かせてもらう。改めて殺しにきてやるよ。〇、体を作り直  
せ。その時間は俺が稼ぐ」

「いえ、その必要はありません」

「何言つてやがる。今お前の体、顔の3割、左腕、左の脇腹が崩れ落ちてるんだぞ？逃げ  
切れるわけねえだろ」

「だから、必要ないんです」

サッドの動きが止まる。

何かがおかしいことに気づく。



〇はただニッコリしている。

「お前、何を考えてる?」

「何も。ただ撤退しようとしているだけです」

「体を修復しているようには見えないが」

「する必要がないもん。火力は少し落ちるけど」

「火力? どういうことだ?」

すると〇の体が膨れ上がり始める。

体にヒビが入りそこから光が漏れる。

「てめえ……!」

「裏切り者には制裁を」

「連れて帰れば何も言わねえんだぞ!? 命令が聞けないのか!」

「これは上官命令です。我がマスターからの」

「ま、マスターからの……」

「それでは」

〇は爆発した。

それはミイヤのいるところまで軽く爆発は及んだ。

札を落としてしまっているミイヤに防ぐすべはなかった。

爆発が終わり周りが静かになる。

ミイヤは目を開けた。

「なんで…私」

目の前にリヨウとその青龍がいた。

リヨウの青龍が爆発を完全にカットしたのだ。

それほどまでに強いということになる。

ミイヤの青龍ではとても無理な話だ。

「あんた…」

呼びかけようとしたときリヨウの青龍が消えた。

するとリヨウも倒れた。

「ちよつとー」

急いでリヨウに駆け寄る。

「大丈夫!? しっかりしなさいよ!」

「大丈夫だよ。ただ魔力を使いきっちゃったから…」

「待つてなさい！サリス！ノリス！」

するとミイヤの周りに薄く体が透き通った2人が突然現れた。

「水を持ってきて頂戴。それとあれば治療用の札も」

「分かりました」

するとまた消えた。

「あの人たちは…?」

「私の使い魔よ。私が生きている限りあの子たちは死なない」

「薄くなつてたぞ?」

「一度やられたからね。無理もないわ」

「便利だな」

「あの子たちは物じゃないわ。そんなこと言わないで」

「…すまない、そんなつもりじゃなかったのだがな」

「ならいいのだけれど。…つてそれより!どうやったのあれ!？」

「…あれ?」

「あなた、青龍出したじゃない!なんで出てきたのよ!？」

「なんでと言われましても…。無我夢中で魔力を込めたらなんか出てきたんだよ」

「それだけ!?何かあるでしょ?」

「…いや、本当になにも…」

「はあく…、あなたはまさに問題製造機ね」

「そりゃ、どうも」

「でも…、助かったわ。あ、ありがとう」

少し、顔を赤らめながら言った。

「なんだかそれがおかしかった。」

「ちよ、何笑ってるのよ!」

「いや、そんなつもりはないんだけど…。なんだかな」

「何よそれ」

「ミイヤ様、水と治療用の札、お持ちいたしました」

2人の目の前に水と札が置かれる。

「ほら、それだけ元気なら水は自分で飲めるでしょ?」

「ああ。悪いな」

「ミイヤ様、治療は私たちが」

「私は大丈夫よ。蹴られただけだから、今はほとんど痛くないし」

「ではリョウ様の方を」

「それは私がやるわ」

「しかし、ミイヤ様はたった今戦闘に…」

「分かってる。でも私は彼に助けられた。せめて治療くらいはしてあげたいの」

「…分かりました」

それだけ言うとサリスたちはまた消えた。

「さっ、楽にして。痛いことはしないから」

「そうか。ならお願いしようかな」

ごろんと地面に寝っ転がる。

しかしリヨウは気づかなかった。

夜だったから。

そして自分の周りに焦げ臭いにおいがあふれていたから。

自分のキャンプ場から煙が立ち上っているのに気付くことができなかった。

## 必死の防衛

(やられる！)

リリアは目をつぶった。

しかし、目をつぶっただけのはずなのにバルドスは突撃してこなかった。

恐る恐る、目を開ける。

そこには、クレアがいた。

「ぶ、部長……！」

「無事なようだな。何よりだ」

よく見ると周りのテントも一切攻撃を受けていない。

それぞれのテントに5年生がついていた。(クレアは3年生である)

少しずつ押されている人もいるが確かにテントを守っていた。

「なんで……。さつきまで寝てたんじゃ」

「詳しいことは知らん。だが、俺は俺の嫁が危ないと悟ったから助けに来た」

「嫁じゃないです」

「つれないな。だが、それもいい」

周りが危ないというのにこの人は何を言ってるんだと頭を抱える。

「それよりさつきとテントの中の連中を起こしてこい」

「えっ、…あ、はい！」

リリアがテントに入っていく。

クレアはそれを見届けるとバルドスのほうを見る。

今、起きている5年生とクレアは疑問を抱いていた。

バルドスは頭のいい生き物だ。

決して理性があるわけではないが、群れで行動するし、負けると分かればすぐに逃げ出す。

そして、自分の縄張りに侵入されたり攻撃されたりしない限りは襲ってくることはない。

そんな生物がただ突進をして、止められたにもかかわらず逃げるところか助走をつけて改めて突進することすらしないのだ。

ただただ、数で押し通そうとしている。

「音がやんだもんだから来てみたら何ですか、これは？」

バルドスの隙間から一人の男が現れる。

体全体を黒で覆っている。

「貴方たちは？」

「それはこつちの台詞だよ。何者だ？」

「ジーク・T・エリオスという者です」

「ネーム持ち……。これはお前の仕業か？」

「そうですね。私が操ってますが？」

「なんでこんなことを？」

「……これはさつき会った女の子にも言ったのですが」

「やれやれと言わんばかりにため息をつきながら首を振る。

「死にゆくものに答えても意味はない」

バルドスたちが一斉に退きはじめる。

いや、助走をつけようと一斉に後ろに下がったのだ。

「リリア！まだか!？」

「みんな目を覚ましました！いつでも戦えます」

リリアも含め1〜4年生全員が目覚ましていた。

「よし！なら3年生以下は全員他のキャンピングに現状を伝えにいけ。4年生以上はここに残りこいつらを追っ払うぞ！指揮は俺、マグタラン・アツグシーバがとる。異論は聞かん！」



一見強引に見えたがみんなが納得していた。

魔法側の生徒も反論する生徒はいなかった。

それだけ信頼されているのである。

全員、黙ってうなずくと行動を開始した。

リリアも同じく混じってそのキャンプ場を後にする。

ジークは黙ってそれを見ていた。

「追いかけないのかい?」

「私の作戦はある作戦を感じつかれないようにすることです。ならばあいつらが他のキャンプにこの現状を伝えに行こうと関係のない話」

「ある作戦?」

「教える意味はない」

突然森林の奥の方に光の柱が立つ。

寺の方だとすぐに分かった。

「…バレバレじゃないかい?」

「あの馬鹿…。青龍を召喚される前にとどめをさせとあれほど言ったのに。まあ、作戦が遂行できればいいでしょう」

「あれが本命だろ? ばれたならお前は出る意味ないんじゃないのかい?」

「一理ありますが、もう一つやりたいことがあるのですよ」

「もう一つ？」

「リヨウ・アマミヤ」

「…」

「そいつを出せ。さつき下級生どもが出てきたとき、彼は見当たりませんでした」

「知らないねえ。あいつがどこにいるかなんて」

「隠すといいことありませんよ？」

構えていたバルドスがいつでも突進ができるような体勢になる。

「悪いけど最近の上級生は下級生思いなんだよ」

「交渉決裂ですか。残念です」

ジークが「やれ」と小さな声で呟き、何十ものバルドスが突進を始める。

マグタランたちも迎撃体勢に入る。

まず、はじめに魔法側の生徒がバルドスとの間にシールドをはる。

そしてそのシールドのすぐ目の前で科学側の生徒がかまえる。

別に準備していたわけではないから大した作戦など瞬時に立てることは出来ない。

だが4，5年生から見れば十分だった。

突進してきたバルドスがシールドに当たり止まる。

ヒビこそはいるが壊れはしない。

そして構えていた科学側の生徒たちは各々の武器を取り出す。

それは槍であったり、刀であったり、爪だつたりと様々だ。

それを無理くりシールドを壊そうとしているバルドスの頭に突き刺す。

これをすればバルドスは死ぬ。

これで数をかなり減らせると思つたのだ。

頭に武器を突き刺す。

しかし、ここで予想外のこと起きた。

頭に確かに武器を刺したはずなのにバルドスが止まらないのだ。

「な、なんで！」

「ちよつと！どういふことよ！」

「この！くそ！」

生徒に焦りが見え始める。

「マグタラン！」

「なんだ！」

「結界が、盾がそろそろやばい！」

シールドのあらゆるところに穴が開き始める。

限界が近いらしい。

「みんな飛べ！地面は危ない！」

マグタランはすぐに作戦を変更する。

全員が空中に避難する。

「マグ！爆発魔法使っていいか!？」

「もちろんだ！リユック！」

リユックと言う男は魔法の塊を作り始める。

この世界で長い言霊を必要とする魔法はほとんどない。

すべて魔力がモノを言う。

「エクスプロージョン！」

唱えると同時に塊はいくつもの数に分裂し、バルドスに向かう。

そして直撃する。

ここでもバルドスが回避行動をとるようなことはなかった。

爆発が起き砂煙が起きて視界が悪くなる。

「ウインドー！」

すぐに視界をひらかせる。

目に入ったのは頭が吹っ飛んだり、足をやられたりしたバルドスだった。

シールドが破れる寸前だったようだ。

「少しはやるみたいですね」

奥でジークがしゃべる。

「まったく、バルドスの足をやるなんて…。走れないじゃないですか」

「殺した方は気にしないのかい?」

「殺した?何をですか?」

「何?」

するとありえない光景が広がった。

爆発を受けて止まっていたはずのバルドスの群れが動き始めたのだ。

全部が。

頭をやられている者も、足をやられたはずの者も、胴体が真っ二つになっていた者も。

「な、なにが!」

「マグタラン! 限界が限界だ!」

そして、限界は壊れる。

全員浮いてはいるがバルドスにとって10mは大した高さではない。

すぐに乱戦が始まった。

「マグタラン!」

「分かってる！全員自由に戦闘開始！命の危険を感じたらすぐに撤退しろ！リュック、クレア、道を開けてくれ！」

マグタランの指示を聞きすぐに行動に移る。

劣勢だった。

どういわけか不死身のバルドスを相手にしているので無理もない。

マグタランはクレアとリュックによってあけられた道に従ってジークの元へ行く。

「…私を倒せばこいつらを止められると思ったわけですか」

「違うのか？お前はネーム持ち。おそらく「死霊使い」だろ」

「よく分かりましたね。Tの意味を知っていたんですか？」

「いや、さっきのバルドスを見てなんとなくだ」

「成程。まあ分かる人にはわかりますよね。で、なにか対策は練れましたか？」

「…お前、さっきと違ってよくしゃべるようになったな。それが素か？」

「ん？…、おつとまさかこうも早く素が出てしまうとは」

「素なのかよ…」

「でもあなたもさっきと違って口調がどがつてるじゃないですか」

「ああ。どうも憧れの人の真似をするのは難しくてな」

「いいじゃないですか、私はあつちはなんか嫌な感じがしたんですよ」

「そうか？なら残念だ」

「で、話は戻りますけど準備はいいですか？」

「待つてくれと頼んだ覚えはないぜ？」

「そうですか。なら、楽しませてくださいよ！」

ジークが手に紫色の電流でできた刀のようなものを出現させる。

それを持ちながらマグタランに近づく。

マグタランは槍で応戦する。

「槍か…。悪くないですね」

「そりや、どうも。お前のは趣味が悪いな」

「ほめ言葉ですね」

ジークは魔法側の人だ。

彼がたった一つの武器を出してそれで終わりなんてことはありえない。

刀で戦っているジークはもう片方の指を銃の形にかまえる。

その指先から火の玉が銃弾並みの速さでマグタランに向かう。

「ちっ！」

近い距離ではかわすのが困難なので離れ、銃を取り出す。

「準備がいいんですね」

「これくらい当然さ」

遠距離戦になるがこの場合、魔法側の方がバリエーションは豊富である。

ハンドガンで応戦するマグタランに対してジークは風や岩を使いありとあらゆる魔法を使う。

「ウインドストック！」

「ロックアーシュー！」

「ウオータバースト！」

あらゆる猛攻にマグタランは反撃ができない。

（厄介だよなあ、魔法。俺にも才能があればなあ。いや、嘆いても仕方がないか）

「ほら、どうしました？防戦一方ですよ？」

「うるせえ。今考え中だ」

「なら、後ろも気にして考えてくださいよ？」

その時、後ろにバルドスがいるのに気付く。

避けることはかなわず地面に叩きとされる。

「ぐっ！」

叩き落とされた先にはバルドスが待っていた。

確実に当たると思い防御態勢に入るマグタラン。



しかし、地面で待っていたバルドスは一切動かなかった。

マグタランはただ地面に叩きつけられた。

なんで攻撃をしなかった？とジークのほうを見る。

そこではクレアがジークと戦っていた。

「クレア！」

「へえ、あなたはクレアと言うのですか」

「黙れ、ゲス野郎」

「恨みを買った覚えはないのですが……」

「俺の嫁に何しようとした？」

「……嫁？あなた女ですよね？」

「性別は関係ない。あいつは俺の嫁だ」

「……まさかここにも理解に苦しむ類の人種がいるとは」

「お前はここで死ぬ。理解しなくてもかまわない」

「なら私も頑張りますよ。死なないために」

電撃の刃によってクレアが薙ぎ払われる。

「ぐっ！」

「この程度ですか。大口叩くにはまだ3年ほど早いのでは？」

「なんだと…」

ジークの周りに燃えるような色をした矢が出現する。

「ほら、このメルトアロー。避けてみてくださいよ！」

恐ろしい数の矢が襲い掛かる。

当たらないように避ける。

だが

「これは…！」

当たっていないのにドールが少しずつ溶けているのだ。

「どうだ？なかなか面白いだろ」

「ふざけた技出しやがって！」

「至って真剣なんですけどね…。そのまま裸になるまで撃ち続けてあげますよ」

クレアはかなりイラツと来るが怒りだけでこの状況は打開できない。

(このままじゃ…！)

そんなときマグタランが矢の雨の中に乱入してきた。

「なっ！マグタラン先輩！ダメです！」

しかし、マグタランが歩いているところより後ろには矢が一切来なくなっていた。

マグタランがしていたことはただ一つ。

自分の槍を矢の来る方向で円をかくようにまわすこと。

それをするだけでやが一切来なくなっていた。

槍に矢が当たりそこで消えているのだ。

溶けることなく。

「なっ……！」

「クレア」

「はい！」

「お前はあいつに勝てない」

「……」

「それでもやるのか？」

「……はい」

「なんで戦う？」

「俺の嫁が殺されかけたからです」

「……そうか。（ええ〜）」

「理由はそれ以外ありません」

「ま、まあ分かった。俺も一人であいつを相手するのは嫌だったんだ。手を貸してもら

うぞっ？」

「もちろんです」

2対1とはいえ拮抗した戦いが始まろうとしていた。

## 屍に意思はない

マグタランが戦っているすぐ近くで数多くの生徒が不死身のバルドスを相手にしていた。

相手は頭を吹き飛ばしても構わず突進してくるし、胴体を真つ二つにしてもバラバラに突撃してくる。

目くらましをしても意味がないし、幻覚を見せたって変わりはない。

劣勢が覆っていることはなかった。

「なんで死なないんだよ!」

「しゃべってる暇あったらいつたいでも多く足止めしろ!」

「足止めなんて意味ないじゃない!」

「マグタランを信じろ!」

不死身の敵を相手にしていたせいでリュックを除くすべての生徒がパニックに陥っていた。

しかし、リュックは不死身と言う点とは違うところに注目していた。

(…おかしい)

客観的に見れば大抵の人が気づく疑問だ。

だが、今の生徒たちは客観的ではないしパニックに陥っている。

冷静に判断できているリュックの方がすごいのだ。

しかし、リュックは疑問に気づいただけでそれを解決する手段は持っていない。

ただ、戦うしかなかった。

「ほら、これならどうですか？」

鉄の銚がクレアとマグタランに襲い掛かる。

クレアはすぐにマグタランの後ろに避難する。

マグタランは目の前で、また槍を回す。

鉄の銚は跡形もなく消えていく。

「ふん！」

すぐにジークは鉄球を回り込むような形で攻撃させる。

クレアはその攻撃を抑える。

本来ならば腕が2本しかないドールではとても攻撃を受け止めることは出来ない。

だが、クレアのドールの特徴は腕の数だ。

彼女のドールは普通の腕＋4本の腕が体の周りに浮いているのだ。

足も合わせれば普通の人の倍は手数があるのだ。

それを使い鉄球を止める。

「いい連携じゃないですか。それにその槍、めんどくさい効果がついてるみたいですね」

「分かるか？ 槍自体に名前はないそうだが、この槍に触れた魔法はすべてただの魔力に還元される」

「はあ、まさかそんな面倒な奴がこのキャンプにいたなんて…」

「嫌だったか？」

「いえ、最高の気分ですよ！」

指を鳴らすジーク。

するとどこからともなく何かの羽音が聞こえる。

森のあちらこちらから黒い小さな何かが集まってくる。

それは夜の森では暗く見づらかった。

そんなとき後ろで大きな輝きが起こる。

寺の方だった。

「なっ!？」

「何だあれは?」

「青…龍?」

確かに青龍が現れたのが分かった。

しかし、おかしい話だ。

少し前にも青龍は召喚された。

なのに再び召喚された。

巫女と言えども2体召喚できるなど聞いたことない。

気になるところだったが今の敵はジークである。

「マグタラン先輩!」

クレアに呼ばれてジークの方に向き直る。

そこには先ほどの羽音の正体である「虫」が飛んでいた。

虫と書いたのはあらゆる種類の虫がいて一口には表せないからである。

「気持ち悪…」

「へえ、貴方にもちゃんと女性らしいところがあるんですね」

「いや、俺もキモいと思うぞ」

「そうですか?こんなに愛らしいのに…」



「死霊使いつてやつは趣味が悪い奴ばつかなのか？」

「君には言われたくないですね、そんな槍を持った奴に…は！」

虫が一齐に2人に襲い掛かる。

逃げるしかなかった。

数が多くとも2人では捌ける数ではない。

ただでさえ攻めることが難しかったのに防戦一方になってしまった。

「先輩！」

「なんだ？」

「その槍であいつら止めらんないですか!？」

「無理だ。さっきこの槍でバルドスを刺したときバルドスは死ななかった!いや、止まらなかったのほうが適切か？」

「そういうのはいいですから」

「そうか?じゃあ、止まらなかった。おそらく当たったのが一部だけだったんだろ」

「でもそれ関係ないじゃないですか。バルドスの場合は体中にばらばらに存在したあいつの魔力の一部に当たってそれしか消えなかったって言いたいんですよね？」

「おお。まさにそうだな」

「で、虫はどうなんですか？」

「体が小さいから当たっただけでおそらく無力化できるだろうけど、数が多い」「つまり無理ということですか？」

「そうだな。だからこれで応戦する！」

ハンドガンを取り出す。

数が多いので撃てば当たる。

減ってるのか、あるいは塵となっても動いているのかは暗くて分からない。

「先輩！ハンドガン一つじゃきりないですよ？」

「じゃあどうしろって言うんだ？」

「まずあの数相手にハンドガンはないです」

そう言いながらマシンガンとショットガンを取り出す。

手の数が6本ということもありものすごい銃声が聞こえてくる。

ハンドガンしか持ち合わせていないマグタランはもはや無意味だ。

暗闇で見にくくはあるがなんとなく減りつつあるのが分かった。

「思ったよりやりますね…。あなたたちのこと見誤ったたかもしれません」

「そうか。でも今更だな」

「勘違いしないで下さいよ？思ったよりはやるだけであってまだまだです」

「なに？」

逃げている方向に新たな虫の集団が出現する。

挟み撃ちにされた。

「くそー！」

撃ち続けるがこのままでは間に合わない。

「安心してください。すぐに殺すなんてことはしません。皮膚の下をはいずりまわせて、できる限り内臓を取り出し、四肢をばらばらにしてから殺してあげますよ」

「てめえ……！」

死という恐怖を知らない虫たちは銃なんかには目もくれず攻めてくる。

クレアは近い虫から順に撃ち殺すがマグタランは何もしようとしない。

諦めているのかあるいは…

「マグタラン先輩！まずいですよ!?!」

「いや、余裕だ。一番恐れていた事態にならなかった」

「それは？」

「とてつもなく速い虫が俺たちに奇襲をかけてくるということだよ。ところでクレア」

「なんですか？」

「虫はこれで全部だと思おうか？」

「俺たちの周り一面虫ですよ!?!ほかにいたとしてもあとはいずれも少ないはずですよ!」

「そうか。なら俺も動こう」

マグタランが重い腰を上げる。

そして大きく息を吸い込み言った。

「リユーツク！」

「はいよ♪」

するとどこからともなくリユーツクが2人の近くに現れる。

「後は任せた」

「了解」

リユーツクは指を鳴らす。

それ同時に虫たちのいたところが爆発した。

クレアには何をしたかわからなかった。

魔法だつて準備というものは必要である。

確かに使いこなせるようになれば唱えなくても魔法をつかえるようにはなる。

しかし、彼は何も唱えなかっただけではなく下準備も見えなかった。

周りに群がる虫をすべて消し飛ばすほどの魔法だ。

「おう、ご苦労さん」

「まったくだぜ。後でいいもん奢ってもらうぞ？」

「それくらいはしてやるよ」

少し離れたところでジークも驚いていた。

「なっ…」

「ところでよお、ネーム持ちつてのはこの程度なのか？話になんねえな」

「貴様…、いったいどうやって」

「それはさっきの爆発か？それとも突然現れたほうか？どちらにしても答える気はないぜ」

「…」

「さて…、お前の弱点、いや欠点も見つけたことだしさつきと終わらせるよ？」

「欠点…だと？」

「うん。君、操ってる屍の行動を細かくできないんでしょ？」

「…」

「どういう意味ですか？」

「疑問があった。バルドスの時もそうだったが虫の時で確信できた。せつかくあんなにたくさんのお虫を連れてくるのになぜ一塊にしているのか？俺たちを殺すならバラバラに操ればいい。なのにそれをしない。理由は簡単」

ジークが少し苦い顔をした。

「できないからだ」

「そこまで聞いてクレアは納得する。」

「つまりジークは一体ずつに違う動作をさせることができないのだ。」

「1、2体くらいならできるかもしれないが虫もバルドスも数が多かった。」

「だから単純な行動しかできないのだ。」

「バルドスも飛んで攻撃するとき、狙いは定めずがむしやらに全員が攻撃していた。だからバルドス同士もぶつかっていたしな。納得だぜ」

「…なぜだ」

「あ?」

「なぜここまで一つのキャンプに強者がそろっているのですか?」

「ああ、ばれた?」

「今気づきました。バルドスのほうを見ましたが生徒の死体が一つもない。いくら4年生以上とはいえおかしい」

「それは…内緒だ」

「そうですか。ですがまだ私は——」

「そこまでしないでください、T」

突然聞き覚えのない声がある。

そこには一人の少年がいた。

「O…」

なぜ今来る？といわんばかりの顔をしながらOを見るジーク。

「作戦は失敗です。撤退命令が出ています」

「サツドはどうしました？」

「制裁を加えました」

「そうですか」

少し残念そうな顔をする。

しかし、それはサツドが死んだことによつてきた感情ではなかった。

「今、ネーム持ちであるあなたを失うわけにはいきません。マスターからの命令です」

「…わかりました」

「あなたが正気を保っている時で助かりました。それでは…」

「待てよ」

クレアたちが静止に入る。

「そんなことさせると思ukai？」

「俺の嫁に手を出しておいて帰らせると思ukai？」

「嫁？」

「リュック、少年、気にするな。それより確かに帰らせると思うか？」  
「申し訳ありませんが帰らせていただきます」

クレアたちはすぐにOたちに攻撃しに向かう。

しかし、Oの体が崩れ始める。

そこで崩れた時に出てきたのは…虫だった。

そこで一瞬3人の動きが止まる。

その一瞬で虫はジークを包む。

リュックが爆発魔法でそこを爆発させる。

しかし、そこには何の影も形も残ってなかった。

「逃がしたか…」

「まあ、とりあえず撤退まで追い込めたし誰も死んでない。こっちの勝ちでしょ」  
バルドスたちのほうを見るとすべてのバルドスが停止していた。

すべてが死んでいる。

「まったく…、結局あいつはなんだったんだろな？」

「違う作戦を感じつかれない様子する作戦を遂行してたらしいよ」

「そうかよ…。ともかく疲れたな。テントは守つてあるし、もう寝ていいか？」

周りが騒がしくなり始める。



ようやく応援がきたようだ。

「いや、悪いけど来てくれた人たちの対処を手伝ってもらおうよ」

「はあ…。マジ勘弁してほしいぜ」

「まあそう言うな。ところでクレア、リヨウがどこに行ったか知らないかい？」

「たぶんリリアが探しに行ってます。それで十分でしょう」

「リリアが探し出せるのかい？」

「俺の嫁が探しに行った。それだけの事実があれば見つからずともかまわないはず  
す」

「あ、ああ。そうか…。まあ、理由はともかく任せておくか」

「マグタランせんぱーい！お偉いさんから電話でーす！」

「…長い夜になりそうだねえ」

今の時刻は3時だった。

約4時間の死闘は幕を閉じた。

## 想定外とNG

合宿4日目…、は無かった。

生徒が襲われ、寺がほぼ全壊したのだ。

無理もない話だ。

今リヨウたちは学校にいる。

明日から休みに変更になったのだが、その前に生徒全員に、特にリヨウたちの班を心に事情聴取を受けている。

リヨウは事情聴取を終え、部屋で休んでいる。

別に帰る家など無いので寮で休みを過ごすつもりだ。

「…」

「お疲れみたいだね、リヨウ」

「そりゃな、昨日から全然寝てないんだぜ？なんで俺の周りにはこう問題が起こるんだ？」

「前回の魔科祭の時は自分から突っ込んでいったよな気がするけど」

「そこは突っ込むな」

「今回も死闘でも繰り広げた？」

「いや、俺自身はほとんど。魔力は使い果たしたけどな」  
「ふうん」

青龍を召喚できたのは誰にも話していない。

後でマクアドルには言っておこうと思うが、他に話すと面倒なのでミイヤと口裏を合わせている。

(そういえばミイヤはあの後どうしたんだろ?)

ほぼ全壊してしまった寺を思い出し少し気にする。

しかし、突然睡魔に襲われる。

まるでそのことは考えるなと頭が訴えてるようだった。

「クロ、悪いけど俺寝るから6時になっても起きなかつたら起こしてくれるか?」

「わかった。ゆっくり休んでね」

「ああ。じゃ、おやすみ」

「おやすみ」

布団の中に潜ると同時にリョウは眠りに落ちた。

「…ヨウ。お…て」

声がする。

さつきまで思いつきり眠かったはずなのに少しも眠くない。

目がすぐに開いた。

「あつ。起きた」

そこには水でできた人型の物体がいた。

「お前は？」

「…私を忘れちゃうなんて。間違い訂正しなくていいかしら」

「？」

疑問を持ちながら周りを見る。

見覚えがある場所だった。

ビムと戦い、死にかけて時に来た場所だ。

つまり

「俺のドールか」

「やつと思いき出した。女の子を忘れるなんて、一番やつちやいけないことよ？」

「だって…お前、前と形も声も違うじゃん」

水で人の形ができてると書いたが、実際は頭だつて髪は見えないし、しゃべり方が

子供のようではないのに胸も平べったい。

声は以前の電子音とは違い、普通の女性の声になってる。

「あなたが2段階目になったんだもの。私も少しは人に近づくわ」

「へえ、じゃあいつか姿がちゃんと見える日が来るのか？」

「それは、あなた次第」

声が再び電子音に変わる。

「どういう意味だ？」

「あなたに才能があれば見えるようになる」

「才能？」

「先生から聞いたはず。7段階目にたどり着くのはごく少数」

「言ってたな」

「7段階目まででならないと私は見えない」

「この水は？」

「水!？」

「おそらく4段階目ぐらいには見えるようになる。気が短いから」

「それ関係ないでしょ! っていうか今回連れてきた理由からそれてるよ!」

「今回連れてきた理由？」

一瞬取り乱した水が落ち着きを取り戻す。

「そ。今回あなたをここに連れてきたのには理由があるの。とても重要な」

「それは？」

水が黙る。

姿の見えないもう一人のほうも何も言わない。

空気が重いような気がした。

「おい。なんだよ。溜められるとよけい心配になるじゃねえか」

「いや、命にかかわることじゃないし危険はないんだけど」

「なら言えよ」

「…分かったわ。あのね2段階目になったとき出てきた4つのひし形の物体の名前覚え

てっ？」

「ヒニユスのだろ」

「あのね、実はそれ名前が違うの」

「仮の名前ってやつか」

どんなものにも名前はある。

本当の名前があるのに偽りの名前を使う。

(名前が重要ということは本当の名前を知られば…)

リヨウがガッツポーズをとる。

(さらに強くなる！)

大抵はこのパターンが多い。

「で、名前は？」

「…ヒュニス」

「なるほど！ヒュニスか！…ヒュニス？」

あれ？

名前がほとんど変わってない？

そんなことある？

なんだか嫌な予感がするぞ？

「…もしかしてそれって」

「ミリーナが間違えて教えたの」

はい、来ましたー！

期待したらこれ！

この世界に来てからよく味わうようになりましたー！

そしてこの地味な間違いは逆に恥ずかしい。

「恥ずかしい気持ちは分かるけど、ちゃんと覚えてね？」

「…他には？」

「ない」

「マジで!?!それだけ!?!」

「ええ。間違えて何度も自分の一部の名前を呼ばれるのが嫌だったから今言った」

「それくらいで呼ぶなよ!今俺寝てたんだぞ!?!」

「リヨウ。ある人があなたを間違えてリユウとずっと呼んでたらどう思う?」

「直させる」

「それができなかつたら?」

「…意地でも」

「私たちも意地でも直したいの!唯一名前がついている部分を間違った名前前で呼ばれる

なんて絶対嫌なの!」

「私は気にしてない」

「あなたの体ではないものね!」

だんだん話がそれ始めたようなのでリヨウが切り出す。

「おい」

「なによ?」

「ならもう帰らせてくれないか?眠くないけど寝たいんだ」



「大丈夫。今現実のあなたは寝てるわ。襲われても起きないわよ」

「なおのことよくねえな。ともかくここの世界にいれば確かに眠くないけど疲れてはい  
るんだよ」

「そうねえ…。確かに用事も済んだし、いいかしら」

「じゃ、頼む」

「分かったわ。じゃあ戻すわね」

視界が揺らぎ始める。

そんな時、水が聞き捨てならないことを言った。

「あつ、言い忘れてた。な…でも、…ヤが…る…いわ…」

最後のほうは聞き取れず、そのままリヨウの意識は落ちた。

「…ヨウ。お…て」

体が揺れている。

さらになんだか騒がしい。

「ねえ、まだ起きないの？」

「うん…。かなり疲れてるのかな？」

「まったく。クロ、どきなさい。私が起こすわ」

次の瞬間顔に冷たい何かがかかる。

「冷た!?!」

「ほら起きた」

リヨウが目を覚ます。

肩から上がびしょ濡れである。

「マーシヤか、どうすんだよ！濡れたじゃねえか」

「リリア」

「はいよ」

リリアが乾燥機（ドライヤー）を持ってきた。

スイッチが入り、リヨウに暖かい風が送られる。

「そんなんじやどれだけ待っても…ってあれ?」

さつきまで濡れていたはずの部分がすでに乾いていた。

「え、ええ!?!嘘?!」

「嘘じゃないわよ。低温蒸発水だもの」

「なにそれ？」

「この水の蒸発する温度がものすごく低いよ。だから乾燥機だけで乾くわけ  
「すげー…」

「それより早く支度しなさいよ」

「なんで？」

「飯食べに行くからよ。いろいろ聞きたいこともあるし」

あまり訊いてはほしくないのだが腹は減っている。

仕方ない。

「分かったよ。着替えてから行くから先行ってて」

「はいリヨウ君！その前にあなたにお願いがあります！」

「？なんだ、リリア」

「着替えてるところ、写真に撮っていい？」

「変態」

一蹴した。

「ああ。先に言うけど私がほしいわけじゃないのよ？」

「じゃあなんでだよ？」

「あなた、自覚ないかもしれないけど結構人気あるのよ？噂ではファン部活（クラブ）も  
あるかもっていわれてるくらい」

「そうなのか？」

「そうよ！そこで私は閃いたの！あなたの着替えなんてとればうまくいけば破格の値段で売れるのではないかと！」

「新聞部は関係なしか？」

「めっちゃいいもの撮れたら載せるわ！で、どう？」

「嫌に決まってるだろ」

「えく……。売り上げの2割はあなたにあげるわよ？」

「それでもだよ！ほら、さっさと出ていけ。交渉不成立だ！」

「うく……。じゃあもう一つ」

「なんだ？」

「これもかなり需要があると思うの。おそらくリヨウの着替えより！」

「それは？」

「裸でクロとリヨ——」

次の瞬間リリアが転移装置の方に思いつき突き飛ばされて部屋からいなくなった。

マーシャが思いつき蹴ったのだ。

「ごめんなさい。さすがにクロには聞かせたくなくて」

「気にするな。お前がやらなければ俺がやってた」

「2人とも、リリアはさっき何が言いたかったの？」

「クロ、あなたが知るべきではないことよ」

それだけ言うのとマーシヤは部屋を出て行った。

「ん〜…。ダメかしら？ やっぱり」

「何度も言うが駄目だ。俺の写真集なんて出ようものなら俺は不登校になるぞ？」

「寮で生活するのに不登校って…」

着替えを済ましたリヨウは食堂に行きマーシヤたちと食べている。

食堂で、レックスやフィリアとも合流した。

「なんでそんなに写真集出したいんですか？」

「儲かるにおいがするからよ」

「今までそんなこと言ったこと一回も無かったのに…、どうしたんですか」

「いろいろよ！」

いろいろよ！と叫んでいたリリアの声は震えていた。

何か知られたくないことがあるのだろう。

おそらくあの人が嘯んでるんだろいなあと思いつながらリヨウはそれを流す。

「なあ、話変わるんだけどよ、リヨウの班は襲撃にあつたんだろ？」

「そうだけど？」

「実際どうだったよ？強かったか？」

「襲撃を仕掛けてくるだけじゃあつたよ。俺だけじゃ死んでたな」

「そうそう。なんでもあんたの班の4，5年は精鋭がそろつてたんでしょ？」

「らしいね。俺自身もあの後知つたよ」

「いいよなあ。俺もその班にいたかつたぜ」

「でもその班にいても1年生は全員撤退だったわよ」

「それは…嫌だな」

「それよりも、青龍が2体同時に召喚されてたつて話本当ですか？」

リヨウが一瞬びくつとする。

「このことはミイヤと内緒と決めている。」

「それがなあ、俺も見てたわけじゃないからよく分からねえんだよ」

「そうなんですか。でも2体も召喚されてたなんて嘘っぽいですよね」

「私のところからじゃちよつと遠いのよね…。近かつた人は…」

「ケイトになら近くで会つたぞ？」

「それなら後で電通でも使って訊いてみるかな」

「そうしなさい。ところでリヨウ、さっきの話に戻るんだけど…」

クロとリリア以外『戻らない』

「うう…」

とうとう黙ってしまった。

ここまできると同情したくなる。

だからといって写真を撮らせさせてあげるわけではないが。

「さて、じゃあ私は食べ終わったしもう部屋に戻るわ」

「じゃあ、私も」

「そうか。まあ、明日から楽しんでくれよ。俺は寮にいるけど」

「明日から楽しむ？何言ってるの？」

「へ？」

あ、やばい。

なんか嫌な予感がする。

この先の言葉を聞いてはいけないと頭が言ってる。

「リヨウさん、聞いてないんですか？」

「休みは半分になったわよ。月・水・金は午前中のみだけど授業あることになったし誰も

家には帰れないわよ。警戒するためですって」

この瞬間、リヨウは真つ白になり停止した。

この瞬間を逃すわけにはいかないといわんばかりにリヨウに襲い掛かったリリアを止めるということで少し騒動があつたのは別の話である。



## 路線変更

金曜日、リヨウはいま教室にいる。

招集があつたのだ。

午前中の授業も終わり何も残っていないはずなのに何故か？

しかも集まりがあつたのはリヨウのいるクラスだけである。

理由を知るやつは一人もいなかった。

「一体何だろうな？」

「誰も聞かされてないんですって」

「誰か問題でも起こしたんじゃないかな？」

「でもそんなの聞いた覚えはないぜ？」

リヨウ、クロ、マーシャが話している。

先生が来るまで待つていなければならぬのだが：

扉が開く。

「はい！みんな、遅れてごめんね」

フレアが少し急いだ様子で入ってくる。

こんな風に明るいい人からあんなクールなクレアが生まれるというのは何とも不思議な話である。

最近リヨウは2人のどちらかを見るたびに「父親はどんな人なんだろう？」と疑問を持つようになった。

「今日ね集まってもらったのは、なんと！このクラスに転校生が来たからでーす！」

おおっ！とクラスが少し盛り上がる。

こんな変な時期に転校生が来るとは珍しい。

「男ですか？女ですか？」

「女の子よ。しかも、結構美人よ？」

さらに男子のテンションが上がる。

まあ、自分のクラスに美人が来て嫌な男子などいないだろう。

「スリーサイズはなんですか？」

このときリヨウは久しぶりに、えっ？それ思いつきり英語じゃん！と疑問を持った。

「そういうのは本人に聞いてね。まあ、本人の目の前で聞けるかは君の度胸次第だね」

うっ、と訊いた男子が少したじろぐ。

まあ、会って早々そんなことを聞ける奴なんてまず見ないが。

「じゃあ、呼ぶわね」

腕輪をいじくり始める。

するとすぐに扉が開いた。

転校生が入ってくる。

確かに美人だ。

整った顔立ちに、スタイルもいい感じだ。

何より特徴的なのが長髪のきれいな黒…髪？

「(あれ、この人見たことある…)」

「それじゃ、自己紹介してね」

「はい。ミイヤ・ケリニアスって言います。これからよろしくお願いします」

…ああ、間違いない。

あの時の巫女だ。

しかし巫女に対して偏見が強いはずなのに誰も何も言わない。

むしろ「かわいいね」「人形みたい」「付き合ってみてえ」などと全員が好評価だ。

「えーつと、ミイヤさん？はこんな中途半端な時期だけど親の都合で引越しになった

の。この学校の編入試験も文句なしの点数をたたき出してるからみんなも頑張ってるね」

えっ？なんで先生が転校生の名前疑問形で言うんだよ？とクラスが思った。

「じゃあ、これだけだからもう終わりにするけどミイヤさん。最後に一言」

「えっ?…あの、ここに来てまだ日が浅いので分からないことがたくさんあると思います。ご迷惑をかけることもあると思いますけどよろしくお願いします」

パチパチと拍手の中クラスの集まりは終了した。

「くということがありました」

「そんなことがねえ…。もうちよつと警戒するべきだったかな? いや、結果オーライかな」

クラスの集まりが終わった後、すぐにリヨウはマクアドルに呼び出されマクアドルの自室に来ていた。

「俺の班に精鋭が集まったのはあなたが?」

「うん。気が抜けないからって私が細工したんだ。やつておいて正解だったねえ」

「警戒してたならもつと人員を割いてほしかったですよ」

しかし、そのお願いに対しては全然興味を持っていないのか無視された。

「それにしても青龍が召喚できるなんて…、やっぱり君は選ばれただけあるねえ」

「…（流しやがった）。ただ魔力を思いっきり注ぎ込んだだけなのに、なぜなんでしょう？」

「ん…。魔法側の授業でやることなんだけどね、魔法を唱えるにあたって大切なことが2つあるんだよ」

「それは？」

「1つは魔力の操作。調節できればどんなに強力な魔法でも小さいところで使えるし、弱い魔法でも強くなったりするからね。それに一定の魔力でないと起動しない魔法もあるから」

「もう一つは？」

「想像力…かな」

「想像力？」

「うん。詳しく言うとは違うんだけど今はこれでいい。分かりやすく言うならば…リョウ君、君はフラッシュを唱えた時、頭の中はどうなっていた？」

「…できる限り強い輝きをイメージしてました」

「そう。それが頭にあったはずだ。では、リョウ君。君はどうしてそれがイメージでき

たんだい？」

「どうして……？……」

どうしてそれがイメージできるのといわれてもいまいち言い表せない。

「まあ、答えには詰まるよね。たぶん君がイメージできた理由、それは見たことがあったからだと思うんだ」

「見たことがあった？」

「ものをイメージする時さ、一度それを見たことあるほうが鮮明に思い出せるだろ？」

「まあ、確かに」

「基本的な魔法、火をおこす魔法、水をだす魔法、電気を出す魔法。基本的に魔法の道に進んだ者の中でこれらを使えない人はいない。これらはどこでも見る機会があるからだ。でもね、例えば回復魔法。これを使えない人は案外多いんだよ」

「回復させるイメージが湧かないからですか？」

「たぶんね。確かに、今の科学ですらなくなつた腕を生やすのは時間がかかる。それを短時間でやるというイメージが持てないのだからうねえ」

「頭の中でそのイメージを否定するとできないと？」

「そこまでは言つてないよ。まあ君の考えも否定はしないけどね。さて、君が青龍が召喚できたという問題に戻るけど今の話の内容からだいたい分かるかな？」

「俺が青龍を知っていると」

うん、という代わりに領きお茶を飲む。

「この世界では4神について一般人が知っているのは形のみだ。それ以外に知っていることはない」

「形だけじゃだめだということですか？」

「そうだねえ…。この人たちには何かが足りてないということだけは確かだけどねえ」

「でも俺もゲームとかで見たことあるだけですよ？」

「その時何か説明が書いてなかったかい？」

「ゲーム上での強さとかそいつについてくらいだけです。リアルとは全く関係ない」

「でも何かしらの基盤がそれでできた…。もしかすると巫女の青龍とは違う力を持っているのかもしれないねえ」

違う力…。

ミイヤのよりも強力だったのに力が違う。

もう二度と使う機会はないかもしれないがそれでは制御の仕方が学べないなあと思っただ。

「さて、話すことはほとんど話したかな。今日はこれくらいでいいだろう」

「分かりました。それでは俺も部屋に戻りますよ」

「転移装置、君の部屋に繋いだから乗ったらすぐだよ」

部屋を出て行こうとして一つ思い出したことがあった。

「あの」

「次話すときはミリーナも呼んでおくよ」

「えっ」

「君は巫女に自分のことを話した。そして巫女は信じた。君は私が提示した課題をクリアしたんだ。なら私も約束を守らなければならない。知っていることはできる限り話そう」

「ありがとうございます」

「約束だからね。ほら、さっさと帰りな」

「失礼しました」

リヨウは部屋を出て行った。



突然だがもし、自分の部屋に戻ったら嫌なことが待っていると分かっている場合、あなたは どうするだろうか。

少なくとも作者なら、できる限り外で時間をつぶし、嫌なことがなくなるギリギリに部屋に戻る。

リヨウは部屋に戻ったこのとき、はじめて転移装置を呪った。

リヨウが部屋に戻ると少し騒がしいような気がした。

少なくともクロロしかないということが無いのは確かだ。

「(マーシヤとか来ているのか?)」

奥に進むとそこにいたのは

「だから、あんたは……ってリヨウ。おかえり〜」

「ん? やつと帰ってきたのね。遅いわよ、あなた」

「お前らは俺とクロの部屋で何やってるんだ」

リリアとミイヤだった。

クロが何故かいない。

「クロなら女子会するから出て行って行って言って追い返したわよ」

「自分の部屋でやれよ! なんて男子の部屋で女子会!?!」

「そういえば簡単に出て行ってくれるかと思って」

…なんだろう。

なんだか最近疲れが取れないような気がする。

いや、とれてもとれても際限なく増え続けているのだ。

「はあ…。で何の用だよ？ さつきと用件すましてくれ帰ってくれ。クロに申し訳ない」

「そうそう！ その用件なんだけど…、あんたこいつと付き合ってるの？」

「…はあ？」

突然意味わからないことを言い出した。

俺が、ミイヤと付き合ってる？

「こいつがねあんたたちの集まりが終わった後突然私のところ来て言ったのよ。『私の

夫はどこ？』って」

「…聞き間違いじゃないのか、なあミイヤ？」

「まったわよ、あなた」

そういえばさつききの「あなた」のイントネーションも妻が夫に言った感じだった。

無視して話したがまさかこんなことになってるとは。

「…あまり聞きたくないけどなぜだ？」

「決まってるじゃない。あなたは青龍を召喚できた。これ以上どんな理由が必要なのよ

「? 今回の学校潜入も8割がた、これが理由よ!」

「残り2割は?」

「寺の立て直しに時間がかかるから修行もかねて」

「メインそつちだろ!頼むから俺にこれ以上問題を突き付けなくてくれ!」

「『一年生の逸材、巫女の夫に!』この記事さえあればクレア先輩のツケも…!」

「やめろ」「それはだめよ」

「リヨウはともかくミイヤまで…。既成事実があればいろいろと楽よ?」

「そうしたいのはやまやまなんだけど、私が巫女っていうのはできる限り伏せたいのよ。偏見の目があるし」

「結構まともな理由ね…。じゃあ『一年生の逸材、転校生と一夜を過ごす』はどう?」

「それなら」

「やめろ、まじで」

「そんなに恥ずかしがらなくても。妻と夫がともに一夜を過ごすことは変じゃないわよ?」

「俺はお前と付き合ってると思われるのが嫌なんだよ」

「そんなに突き放すなんて…。もしかしてSなの?じゃあ、私はMになればいいのかしら?」

「頼むから帰ってくれ…」

頭が痛い。

どうしてこんなことになるんだ？

俺は問題解決に貢献したんだぞ？

なんで…、どうして。

「見たところ付き合っていないようね…。面白くないわ」

「とりあえず付き合っていないところだけでも分かってくれて助かる」

「そういうえばミイヤ、あんたなんで科学側なのよ。魔法の方が肌に合ってるんじゃないの？」

「夫に少しでも近づくためよ！」

「…なんかあんた会った時と変わったわね。どれが本当のあなた？」

「今は好きな人に近づいているからこんな感じ。いつもはあなたと会ったときね」

「自己紹介の時、かなり丁寧だったぞ？」

「私を知らない人、つまりあなたたち以外の前ではそれで行く予定ですわ」

「今の、なんか少しおかしかったような」

「まだ慣れてないからそこは気にしないで。さて、じゃありョウ寝ましようか」

「そうだな寝るか。だからさっさと出ていけ」

「2人が一夜を過ごすと言うのなら記者として目は離せないわ!」

「寝ないから!ほら、もう7時だ!クロがかわいそうだからさっさと帰ってくれ!」

「:ゴクツ(唾をのむ音)」

「リリア、お前が思ってるようなことにはならないからさっさと帰れ」

「何を思ったのリリア?」

「リヨウとクロが一夜を過ごすといいおいしいことよ」

「何言ってるの?クロってさっき追い出した子でしょ?あの子男じゃない。何も起きないわよ」

リヨウとリリアがえっ?つとした感じでミイヤを見る。

顔からして本心で言ったらしい。

「なによ、2人して?」

「いや、思ったよりお前純粹なんだな」

「?」

「いや、理解しなくていい。それより帰ってくれ」

「私はいいい記事が撮れるまででこでも——」

「最近俺、クレア先輩と電通の番号交換したんだ♪」

「帰るわよ、ミイヤ。クロに失礼よ」

「ちよ、何言つてるのよ!? 私はリヨウと一緒に寝るのよ!」

「妻なら夫のことも考えなさい。困った顔してるじゃない」

「それはきつと嬉しさのあまりちよつと間違つた方向に顔がいつて——」

「いいから言うこときけええええ!」

「ゴフツ!?!」

リリアのいいパンチが腹に入り、ミイヤが気絶する。

一応この世界に4人しかいない巫女の1人。

そんなことしていいのだろうか?

「じゃあ、失礼しました!」

「おう。じゃあな」

リリアたちが部屋を出ていく。

リヨウはすぐに電通で「部屋に戻っていいよ」と送りベットに横になる。

本当に疲れた。

まさかミイヤがあんな形でリヨウの目の前に姿を現すとは思つてもみなかつた。

間違いないく、面倒な方向に路線が変更している。

「どうか、これ以上問題が起きませんように……」

神に祈るしかなかつた。

神を最も信仰している巫女があんな状態にもかかわらず、  
そして、神様はおそらくリヨウの願いは聞き入れなかった。

## 平和な日常

## フィリアの休日その2　恐怖と想い

服よし！

顔よし！

カバンよし！

あつ、みなさんこんにちは。

最近おしやれを研究しているフィリアです。

今日はですね、学校の中ですけどみんな（いつものグループ）と集まりがあるので  
す。

何をやるのかは聞いてないので分かりません。

「ちよつとフィリア、何やってるの？」

「これを読んでくれている方々に事情の説明を」

「…何言ってるの？」

理解されませんでした。

まあ、仕方ないといえば仕方ないのですが。



「それより、マーシャさんは準備できました？そろそろ時間ですよ」

「ちよつと待つてね。髪型がいまいち決まらないのよ」

マーシャさんは最近髪の色を変えたついでに髪型も変えてみようと思ったそうです。別に今まで通りのショートカットで似合ってると思うですけどねえ。

つていうかショートカットの人が髪型を変えてみたいならまず髪を伸ばすべきなのは？

「ん〜…。ツインテールもいまいちね」

「マーシャさん、ショートカットだったのにどうやって髪型変えてみてるんですか？」

「インターネットで映像を出してからうまく合わせてるのよ。自分に合わせようとするとかなり時間かかるんだけど髪をいじらなくていいからいいのよね…」

そういうえばそんな感じのサイトがあるのを聞いたことあります。

私は開いたことないですね。

今度私も髪型変えてみよかな？

「とりあえず行きましようよ。もう遅れてしまいますよ？」

「そうね。こういう時は瞬間移動装置がほしいと思うわね」

転移装置の行き先を体育館に設定する。

2人はそれに乗って部屋を出ていく。

すぐに体育館についた。

まあ、すぐにとはいっても実際は10分ほど時間を要しているのだが。

「そういえばマーシャさんは今日何やるのか聞いてます？」

「いえ、私も聞いてないわ。主催はリリアらしいからあまりいい予感はないけど」

「最近リリアさん暴走気味ですもんね。原因はおそらく…」

「あの青い髪の部長さんよね」

「今回も記事目当てですかね？」

「たぶんね。まあ、嫌な予感がしたらすぐに降りるからいいけど」

「私もそうしようかな…。あつ着いたみたいですよ」

みなさん（リヨウやクロ等） 居ますしあそこが集まる予定の所ですよね。

って、ん？

なんかリヨウさんの近くに見知らぬ人が居ますね…。

しかも結構距離が近い。

「頼むから離れ、ってマーシャ、フィリア！」

気づいてくれました。

ならとりあえずその人から離れてください。

私に分かるほどマーシャさん、ものすごい雰囲気を出してますから！

顔は見えないけど勘の鋭い人ならどんな強者でも逃げ出しそうな顔しているような気がします。

鬼が逃げるかどうかは分かりませんが。

「…リヨウ。その人は？」

「えっ？お前なら知ってるだろ？転校生だよ。フィリアは初めてだよな？」

「はじめまして、フィリアさん。マーシヤさんも顔を合わせた程度でしたよね？私はミヤ・ケリニアスって言います。よろしくお願いします」

わざわざ頭まで下げてくれました。

こんな礼儀正しい人が居たんですねえ…。

「ご丁寧ありがとうございます。フィリア・リトルトリアといっています」

「…マーシヤ・クリーシヤよ」

「よろしくお願いします」

「ねえ、いきなりで悪いんだけどあんた、なんでリヨウにくつついてるの？」

あ、それすぐに訊きますか。

気にはなっていましたけど訊きづらいからやめておいたのに。

「なんでって…、ラブラブだからですよ？」

「「ラブラブう!?!」」

「ち、違う！誤解だ！」

「またまたあ！この人恥ずかしがり屋なんだから」

「ちよ、どういふことよ？」

「まさか付き合っている人がいたなんて……」

「リヨウ、付き合ってたの!？」

「違うから……！誤解だから、誰か助けて——！」

リヨウはこの後、レックスが来るまで永遠と誤解をとけずに半泣き状態だったという。

「さて、みんな集まったわね。これから楽しいことを始めたいのだけど……、リヨウ、どうかした？」

力を使い果たしたかのような状態のリヨウに少し事情を聞こうとする。

「気にしないでやってくれ。すぐに元気になる」

「そう？ならいいのだけれど。じゃあ、改めて只今より『肝試し』をやりたいと思いまーす！」

リリア以外『肝試しい?』

「肝試しって、あの肝試しか？」

「それ以外ないと思うんだけど？ちゃんとこわーい仕掛けは準備してあるわよ！」

「普通肝試しって夏やるもんじゃね？」

「何言ってるのよりヨウ。寒い中、まああまり寒くないけど、そんなときに肝を試すのが普通でしょ」

「そうだよ、リヨウ。何言ってるの？」

夏に肝試しって、リヨウさんは何言ってるんでしょうか？

リヨウさんの住んでいた地方ではそういう風習だったのでしょうか？

「きつと疲れがまだ残ってるのね。まあいいわ。夏にやろうが冬にやろうが私のやることは変わらないし。それじゃあさつそく、これ引いて頂戴」

「おみくじ？」

「そりゃ、肝試しに一人で行くのはあまりに酷よ。だから面白イベントがあるように男女の組みになってもらいます♪」

…、間違いなく記事目当てですね。

なんかもう最近こういうこと多くないですか？

でも私こういうの苦手なんですよねえ…。

「あの…、リリアさん」

「ん？何？」

「私こういうのは苦手なのでちよつと…」

なんか断つたら鞆をあさり始めました。

い、いやな予感しかしないんですけど。

「はい、フィリア」

「これは？つて、いやああああ！」

そこにいる全員がビクつとするがフィリアには関係ない。

なななな、なんでこれがまだ存在するんですか!?

「言いたいことは分かるわよね？」

く、黒い！

リリアさんがものすごく黒いです。

この黒歴史はもう存在しないはずなのになぜ…!

「さて、後のみんなは参加でいいかしら？」

み、みなさんたじろいでます…!

恐るべし、新聞部！

「よし、じゃあみんなこれ引いて頂戴！」

全員がくじを引く。(男女分かれて)

ペア

赤ミイヤ、リヨウ

青レックス、リリア

黄フィリア、ケイト

緑クロ、マーシャ

∴。

なんだか運でできたような組み合わせには見えないんですけど∴。

っていうかなんでケイトさんいるんですか。

別にいてもダメじゃないですけど。

むしろ――

「科学の力を結集させて4つ通路を作ったわ。途中で繋がってるから会ったら組み合わせを交代してね」

まあ、交代があるのなら。

じゃあ、ちやつちやと終わらせてしまいましよう。

この人に迷惑をかけるわけにはいきませんからね。

∴にしても、リヨウさんやけに暗いですね。

「なんかリヨウ、暗くない?」

「私もそんな気がします。肝試しに嫌な思い出でもあるのでしようか？」  
「トラウマなら仕方ないよね。気の毒に……」

「はいはい！みんな位置についた？ついた人から先に入ってね。私はみんなが入ったの確認してから行くわ」

「ちよつとりリア、あんたがこれ作ったならあんた怖くないんじゃない？」

「いえ、実はこれある人につけてもらったから内容は私も知らないのよ」

「そうなの？ならいいわ。さつ、行くわよクロ」

「僕、まだ心の準備が……」

「幽霊なんて存在しないものに怖がってどうするのよ。男でしょ。行くわよ」

クロに有無を言わずにマーシャたちは転移装置に乗る。

「さつ、私たちも行きますよ？」

「リリアめ、後で許さん……！」

それだけを言い残すとリヨウたちも転移装置に乗る。

「フィリア、俺たちも行こう」

「ですね。ここにも始まらないですし、行きましょう」

転移装置に乗り場所を移動する。

私が驚いては迷惑をかけるのは必至。



そんなことないようにできる限り驚かないで行きましょう。

どんとこいです！

そんなこと考えながら転移装置に乗るフィリア。

しかし、転移先にはのっぺらぼうが待っていた。

さすがにここまで早く来るとは思っていなかったのもちろん絶叫した。

「いやあああああああああああ！」

「ふい、フィリア！落ち着いて！」

の、のっぺらぼうが！

目の前にのっぺらぼうが！

顔との距離10cmのところのにのっぺらぼうが！

まじで死ぬかと思いました。

「あああ…。す、すみません。大丈夫…です」

「落ち着くまで少し休もう？大丈夫じゃないように見えるよ？」

「そうですか？じゃあお言葉に甘えて」

分かった、と言いながらニコツとした後ケイトはのっぺらぼうの人形をいじり始める。

はあ、ケイトさん本当にやさしいですよね。

なんていうか、血の気が多いこの学校の中でも珍しくふんわりしている人ですよね。紳士的という言葉はまさにあの人のためにあるような…、つて何言ってるんですか私

！  
何考えてるんですか！

別にそんな気はありませんよ、断じて！

休んでいると変なこと考えてしまいそうです。

さっさと行きましょう。

「ケイトさん、そろそろ移動しましょう」

「えっ、もういいの？少し顔赤いように見えるけど」

「…：気のせいです。行きますよ」

「そうかなあ…。まあ、君がいいというならかまわないけどさ」

そんなに顔赤くなってるんですか私!?

これじゃあ先が思いやられます。

間違いなくリリアさんが仕組んだ感じですよね。

さっさと歩いて他の人と変えてもらいましょう。

嫌ってわけじゃないですけど…。

なんか、ですね…。

「フィリア？考え事していると驚けなくて楽しくないよ？」

「えっ、ああはい。そうですね。でも驚きたくはないんですけど。にしてもケイトさんはさつきよく驚きませんでしたね」

「そうだね。俺はこういうのでは驚かないんだ」

「慣れっこってやつですか？」

「いや、俺のはちよつと特殊だね…」

少し、ケイトの顔が暗くなる。

もしかして、私触れちゃいけないところ触れました!?

こんなところで嫌われるのは嫌です。

「あ、すみません。何か嫌なことでも…」

「いや、フィリアが悪いわけじゃないんだ。だから気にしなくていいよ。それより楽しもうよ」

「…はい！」

そうですね。

ケイトさんの言う通りです。

今を楽しむのが一番。

今はこの状況を楽しみましょう。

できる限りケイトさんに迷惑をかけないように…。

「…長いですね」

「…長いよね」

おかしいです。

さつきから驚きながらも20分ほど歩いているのに全然合流する地点が見えません。つていうか、このお化け屋敷どんだけデカいんですか？

リリアさん、誰かに作ってもらったらしいけどこんなのそこらへんの一般人じゃとても作れませんよ。

「合流地点まであとどれくらいだと思います？」

「たぶん存在しませんよ。そんなもの」

「だよね…。故障か何かかなあ？」

…。

違和感がありました。

ケイトさんと今日初めて会った時から。

そして今その原因が分かりました。

「ケイトさん、口調変わりました？」

「えっ？ああ、ごめん。嫌だったかな？」

「いえ、そういうわけじゃないんですけど突然どうしたのかと思ひまして」

「僕はね、初めてあつた人に対しては敬語を使うんだ。けどね親しくなつたと僕自身が思つたら敬語をやめるんだけど…嫌じゃないんだね？」

「いえ、理由があつたなら別にいいんです。それにそれが親しくなつたと思つてくれたからならなおさらです」

「そうか。それはよかつた」

「あと、質問がもう一つ。ケイトさん自分のことを指すとき、俺と僕を使いますよね？なぜ統一しないんですか？」

「それに関しては…特に理由はないかなあ。自然と身に沁みついてしまつたんだよ。今となつてはどうでもいいことかなと思つて直す気はゼロ。だめかな」

「いいんじゃないですか。ケイトさんの大切な特徴の一つですし」

「それ以外に何かあるの？」

「パーマ、白い髪、むつつり」

「ちよつと！むつつりつてどういうこと!？」

「親睦会の時に大胆なことしたなあと思ひまして」

「あれは不可抗力だよ。気を悪くしたのなら今更でも謝るけど…」

「いえ、今ではいい思ひ出です」

そう、いい思ひ出。

たぶん、私はこの人のことが好きなのだろう。

どこに惹かれたのかは分からない。

彼のことだつて知らないことの方が多い。

でも人を好きになるときつてそんなものなのだろう。

ただ、この人と一緒にいると楽しい、嬉しい。

ついさつきまで、そんなことはないかと否定していた自分がバカみたいです。

好きと言う感情に素直になつて何がおかしいのだろう。

何が恥ずかしいのだろう。

さすがにミイヤ程まであらわにするとちよつとアレかもしれないが。

「あつ、ファイリア。あそこ出口じゃない？」

ちよつと先に転移装置が見える。

「たぶんそうですね。にしても最後の方、気味が悪いだけで何も出ませんでしたね」

「分らないよ？まだ転移装置の前あたりで何かあるのかも」

「やめてくださいよ。私、今回のこれで寿命が3年くらい短くなったような気がします」

「はははっ、あまり長生きし過ぎても苦勞するだけだからいいんじゃない？」

「私は少しでも長生きしたいんです！」

普通人つて長生きしたいと思う生物じゃないですか。

科学が発展したこの世界でなら不便なく生活できるかもしれないのに。

やはりケイトさんは変わり者なんですかねえ。

「ほら、着いたよ。結局何もなかったね」

「そうですね。…なんか警戒して損しました。ともかくさっさとここでもしましょう。気味が悪いですし」

「そうだね」

「みなさん、もうとつくに終了して待つてるんですかね？」

「なら急いで出ないとね。ほら早く行こう」

「はい！」

…なんだか不思議な時間を過ごした気がします。

昔は人見知り但现在以上にひどかったから、ほとんど家族以外とはかわりを持ちませ

んでした。

この学校に入ったってそれは変わらないだろう。

そう思ってたのにマーシャさんと同じ部屋。

初めは無理矢理にリョウさんに挨拶に行かされ「お前は私の親か!？」とイラツとしました。

ですけどそれから2人にはよくされました。

人見知りで口数の少ない私と友達のように接してくれて私に本当の友達をくれた。

それからさらに友達が増えて、今では好きな人も出来た。

あの2人には感謝してもしきれませんね…。

肝試しのおかげでこんなことに気づかされるなんて、笑い話もいいところです。

これからも皆さんと楽しくやっていきたいと思えます。

フィリアは今までにないくらいすがすがしい気分で体育館に戻った。

しかし、そんないい気分で体育館に戻ったフィリアに待っていたのはのっぺらぼうで、再び悲鳴を上げたというのは別の話。



## リョウの休日その1～恐怖と困惑～

「んゝ…、眠い」

「そんなこと言わないで、早く行こうよ」

「でもなあ、リアアの提案となると嫌な予感しかしないんだけど」

読んでくれてる方々、こんにちは。

リョウです。

やっとこの機会が来たぜ。

主人公なのに俺がメインの話が一話も無かったのおかしかったろ。

ようやくこの時がきたんだよ。

ただどどういうわけか、その記念すべき第一回目でまさかのリアアの呼び出しだ。

俺、この世界来てからほんとついてねえよな…。

「まあまあ、そんなこと気にしないで。なら早く行って下見してこようよ?」

「お前は どうしてそんなに早く行ききたがるんだ?」

「早く行っても駄目なことはないでしょ。遅れるとダメだけど」

「それはまあ、そうなんだけど…」

「じゃあ行くようよ。何事も早いに越したことはないんだから！早起きは三文の得って言うでしょ？」

「それは使い方間違つて……つて、押すな！」

「さあ行くよ！楽しみだなあ」

無理矢理クロに押されながらリヨウは部屋を出て、体育館へ向かう。

待ち合わせ時間より20分も早く着いてしまった。

「何にもないね？」

「いくらリアでも体育館自体に細工はできないだろ。でもこれじゃあ、下見はできねえな」

つたく、折角早く来たのにこれじゃ意味ないじゃねえか。

これで連れてきたのがマーシャとかだったら少し嫌味が言えるんだけどなあ。

でも今はクロ。

こいつにはなんかこう……そういう風なことは言いつらい。

「ねえ、リヨウ。誰か来たみたいだよ？」

なに？

こんなに早いのに来る奴がまだいたのか。

リリアは一体だれを呼んだんだ？

「クロくくん、あなたく♪」

…。

今聞いちゃいけない声を聞いたような気がする。

いや、あいつは居るはずないだろ。

だって、転校生だぜ？

どう考えてもここに来るのは場違いもいいところだろ。

「ちよつと、何恥ずかしがってるのよ？ああ、人前だから？」

「ええくつと、ミイヤさんだよね？」

「名前覚えてくれてるの？ありがとう。ミイヤ・ケリニアスっています」

「僕はクロツエフ・アリアジートっていうんだ」

き、来てやがる…！

「な、なんで居るんだよ!？」

「今回はちゃんとお誘いがあったので。リリアからちゃんとね」

「あの野郎…!」

「それよりあなた、折角早く来たんだから…ね？」

「そのいつもやってるあれやろう、の目はやめてくれ。俺はお前とそんな関係になったことはない」

「じゃあとりあえず倉庫にでも…」

「聞けよ」

だめだ。

こいつはなんでこうも面倒くさいんだ。

初めて会った時も結構強気だったけどあの時の方がマシだよ。

…ああ、あのころが懐かしい。

「リヨウ？なんか遠い目してるけど大丈夫？」

「ああ、大丈夫じゃないかもしれない」

「なら、私が看病しますよ！保健室へ行きましょう」

「普通の男子ならこの場面、うれしいんだろうけどお前が相手だと恐怖しかない…」

腕をつかんで引つ張ろうとするミイヤ。

普通の女子に引つ張られたのなら、しかもミイヤのようなきれいな人ならうれしいんだけどなあ。

なんでこうなっちゃったんだろう。

もしかして俺が悪いのか!?

いや、断じてそんなはずは!

「さっ、行きましよう! 体調が悪い人を放つとけないわ」

「いや、やっぱ大丈夫だから」

「何言ってるの! 何かがあつてからじゃ遅いのよ?」

「マジで大丈夫だから! 頼むから離れ、ってマーシャ、ファイリア!」

た、助かった。

頼むからこいつを俺から引きはがしてくれ!

「:リヨウ。その人は?」

「えっ? お前なら知ってるだろ? 転校生だよ。ファイリアは初めてだよな?」

「はじめまして、ファイリアさん。マーシャさんも顔を合わせた程度でしたよね? 私は

ミイヤ・ケリニアスって言います。よろしくお願いします」

こいつ、本当に丁寧な言葉使つてやがる…。

ついでにせめて人前でだけでも俺にべつたりになるのやめてくれないかな。

「ご丁寧ありがとうございます。ファイリア・リトルトリアといえます」

ファイリア、気づくんだ!

こいつ、猫かぶってるぞ!?

「…マーシャ・クリーシャよ」

「よろしく願います」

「ねえ、いきなりで悪いんだけどあんた、なんでリヨウにくつついてるの？」  
なっ!?

そこを突つ込むとは…。

いや、でも核心をついてくれただけ良しとするべきか？

とりあえず誤解を…。

「なんでつて…、ラブラブだからですよ？」

「ラブラブう!？」

しまった!

先手を打たれた!?

「ち、違う! 誤解だ!」

「またまたあ、この人恥ずかしがり屋なんだから」

「ちよ、どういうことよ?」

「まさか付き合っている人がいたなんて…」

「リヨウ、付き合ってたの!？」

「違うから…! 誤解だから、誰か助けて—!」

結局レックスが来るまでひどい目に遭いました…。

「さて、みんな集まったわね。これから楽しいことを始めたいのだけど…、リョウ、どうかした？」

力を使い果たしたかのような状態のリョウに少し事情を聞こうとする。

「気にしないでやってくれ。すぐに元気になる」

「そう？ならいいのだけれど。じゃあ、改めて只今より『肝試し』をやりたいと思いまーすー！」

リリア以外『肝試し？！』

「肝試しって、あの肝試しか？」

「それ以外ないと思うんだけど？ちゃんとこわーい仕掛けは準備してあるわよ！」

「普通肝試しって夏やるもんじゃね？」

「何言ってるのよりョウ。寒い中、まああまり寒くないけど、そんなときに肝を試すのが普通でしょ」

「そうだよ、リヨウ。何言ってるの?」

えっ?

なに?

肝試しって普通夏やるもんじゃないの?

わざわざ冬!?

ここって変わったところあるよなあ…。

「きつと疲れがまだ残ってるのね。まあいいわ。夏にやろうが冬にやろうが私のやることは変わらないし。それじゃあさっそく、これ引いて頂戴」

「おみくじ?」

「そりゃ、肝試しに一人で行くのはあまりに酷よ。だから面白いイベントがあるように男女の組みになってもらいます♪」

言っちゃったよ。

面白いイベント狙ってるって言っちゃったよ。

わざわざ参加する奴いるのか?

「あの…、リリアさん」

「ん?何?」

「私こういうのは苦手なのでちょっと…」



ほら見たことか。

主張が一番小さいフィリアが最初に嫌がったぞ？

誰も参加しないだろ。

なんか2人でやり取りしてるな。

「やああああ！」

うおおおっ!?

どうしたんだ、フィリア!?

それにはいったい何が写っているんだ!?

「さて、後のみんなは参加でいいかしら？」

な、なんか黒いオーラが見える！

頭が逆らうなって言ってる！

ここは従うしかないか。

「よし、じゃあみんなこれ引いて頂戴！」

全員がくじを引く。(男女分かれて)

ペア

赤ミイヤ、リヨウ

青レックス、リリア

黄フィリア、ケイト  
緑クロ、マーシャ

…。

悪意しか感じないぞ。

なんだこの組み合わせは？

リヨウはリリアが通路について説明しているとき、真っ白になっており一切話が頭に  
入っていないかった。

「さっ、私たちも行きましょう？」

「リリアめ、後で許さん…！」

ミイヤに話しかけられ、ようやく我を取り戻し転移装置に乗った。

転移先は本当によくできたお化け屋敷だった。

見た感じ場所は…

「病院か？」

「そうみたいね」

口調が元に戻っている。

「口調が元に戻ったな」

「そりゃあ、あなたしかいないもの。でもあなたを想う気持ちは変わらないわよ？」

「それは残念だな。少しは大人しくなってほしいのにな」

「むしろ気分あげあげよ！2人つきりですもの」

「やっぱりそうなるか…。」

「とりあえずさっさとここを出よう。」

「こいつと2人つきりだとマジでやばい。」

「あつ、待ってよ！なんで黙っていくのよ？」

「お化け屋敷だぞ？黙って進んだほうが面白みあるだろ」

「そうだけどあなたの隣にいないとキヤツつてな感じで抱き付けられないじゃない」

「それ、普通俺に言うか？」

「いいのいいの。さっ、行きましょ！」

歩いて2人は進み始めた。

「きやああああああ！」

「…」

進み始めてから5分、ずっとこれだ。

ミイヤは仕掛けが動くたんびに驚き、リヨウは全然動じない。

仕掛けは別に怖くないというわけではない。

実際、かなりリアルにできてるし結構施設の中も凄いいこだわっている。

しかし、タイミングが微妙だった。

8割がたがいつ出てくるのか何となくリヨウには分かってしまった。

顔だけ見ても十分怖いのだが、タイミングと合わさって初めて悲鳴が出るのがお化け屋敷だ。

「う、怖い……」

さつきからミイヤもリヨウの腕を掴み離れようとしなない。

顔からして、よこしまな思いはなく心の底から怖がっているようだ。

「巫女つてのは悪霊退散！みたいなことやるんじゃないのか？」

「今のご時世にそんな依頼こないわよ！幽霊なんていないんだから！……ん？」

少し広くなった空間が目に入る。

マーシャとクロがいた。

クロはそりゃあもう超震えているのが少し遠くから見ても分かる。

「あら、リヨウ。なんか満喫してるみたいね」

「今は言つてやるな。こいつ、マジで怖がつてるみたいだから」

半泣き状態のミイヤを見て納得するマーシヤ。

「じゃ、次私リヨウと行くから」

「えっ？何それ？」

「あんた聞いてないの？ここは組み合わせを入れ替える空間よ。リリアが言つてたじゃない」

「そうだったか？」

真つ白になっていたリヨウにリリアの声は届いていなかったので初耳だ。

「まあ、交換つてなら仕方ないな。じゃあミイヤ。ここでお別れだ」

「えっ？嘘でしょ？」

「そういうルールだからな」

それに危険も回避できるし。

「ちよつと、待つて！」

「いや、待てと言われましても…」

「ごめん。僕からお願います」

少し気力を取り戻したクロが懇願するような目をする。

「どうした。おまえまで」

「見たところ、ミイヤさんも怖がりみたいだけど?」

「そうだな。すげえ絶叫してたぞ?」

「ダメだよ!僕と2人になつたらここから進めないよ!」

「目をつぶつて5分くらい歩けばいいじゃん」

「そんなこと言わないで!後でなんでも一つお願い聞くから、助けて!」

小動物のような目で見つめてくる。

なんかそこまでされると断つた場合、俺が悪役みたいじゃないか。

...

「...マーシヤ、ミイヤと行つてくれるか?」

「えっ?なんでよ?」

「組み合わせは交換しておきたいと思うんだけどあの2人がなんだか可哀そうに見えてきたんだ」

「それは...、まあそうなんだけど。せつかくの機会なのに...」

「せつかくの機会?」

「なっ、何でもないわよ!分かつたわ、あなたはクロと行きなさい。私はミイヤと行くわ」

「よし、決定だ。クロ、行くぞ」

「た、助かったあ〜」

何か言うと思ったミイヤは何も口にしなかった。

不思議に思ったリヨウに気づいて言った。

「安心して、私はリヨウ一筋だから」

「そこは心配してない」

「私、マーシャさんと少し話したいことがあるんです」

「あんな怖がつてたのに話せるのか？」

「…最大限努力してみます」

リヨウとマーシャはそれぞれのペアを連れてその部屋を後にした。

「きやああああああ！」

「…」

ペアを変えてから歩き出して5分ほど経った。

リヨウは疑問を抱いていた。

なんで、さつきと同じ状況になるんだ？

ペアを変えた。

しかも男に。

なのに。

なぜ悲鳴も腕をつかまれているというこの状況もミイヤの時と全く一緒なんだ？

「リヨウ、絶対離れないでね？」

「お、おう……」

なんかミイヤといた時より緊張する。

落ち着くんだ、俺。

今一緒にいるのは男、そう男。

変なことをすれば一生後悔することになるぞ？

人生が終わる。

地球に帰る前に変態というレッテル貼られて人生終わりなんて絶対ごめんだ。

無心になろうと必死なりヨウとは裏腹に、クロは驚くたんびにリヨウに抱き着く。

「ひいひい……ろくろ首！」

「……」

これもあまり怖くない。

っていうか、今どきお化け屋敷でろくろ首が出るのか？



それより早くゴールに着いてくれ…。

マジで何かに目覚めそうで怖い。

ところがろくろ首を最後に突然びっくり要素がなくなる。

逆に怖い。

なにかデカいの仕掛けてるんじゃないだろうな？

「なんか…、何もでなくなつたね？」

「そうだな。なんでだろうな」

「…」

「…」

なんだこの空気。

抱き着かれるのも嫌だがこの空気もちよつと…。

「ねえ、リョウ？」

「ん、なんだ？」

話題があるのか、ありがたい。

「リョウって、小さいころとかどんな人だったの？」

「小さいころ？なんでそんな話を？」

「こうやって一年間、一緒の部屋で過ごしてきたけど過去のこと知らないなあと思って

ね。嫌なら無理には言わないけど」

…。

過去のこと。

普通ならおそらく話した。

けど、親睦会より少し前から監視を頼まれていた。

そんなことを思い出してしまった。

もしかして俺を探っているのではないか？

けど…、信じたい。

クロを。

もちろん地球のことについて話すことはできないができる限り話してやりたい…。

「そうだな…。いいよ、何でも聞いてよ」

「本当!?!じゃあ…」

「…へえ、リヨウはいろんな経験をしてきたんだね」

「そうだな。もしかするとそうなるのかもかもしれないな」

「本当にすごいよ。話してたら出口まで来ちゃったし」

「えっ？出口」

あつ、本当だ。

出口だ。

結局なんにも出なかった。

最後の方かなり手抜きだな。

まあ、助かったけど。

「早く行こう。出口見たら今お化け屋敷にいるの思い出しちゃった。周りを見れば気味悪いし」

「そうだな。だけどいい経験させてもらったよ」

「何かあったっけ？」

「クロの驚く顔が見れたからな」

「趣味悪いよ、リョウ」

「笑顔しか見てこなかったからな。でも分かったよ。やっぱりクロは笑顔が似合うな」

「うん！お母さんにも言われたことあるよ」

「クロの母さんにか？どんな人なんだ？」

するとクロの顔が一瞬曇る。

言っちゃいけないことを口を滑らせて言ってしまったらしい。

「いや、普通のお母さんだよ」

「そうか」

それ以上は聞かない。

隠し事があるのはお互い様だ。

そこに入られるのがどれほど嫌なのかはよく知っている。

「さ、体育館に戻るぞ。準備はいいか？」

「いつでもいいよ」

転移装置に乗り体育館に戻った。

戻った体育館にはフィリアとケイト以外のペアが居た。

フィリアの転移装置の前にだけのつぺらぼうの立体映像が映し出されている。

まあ、面白そうだしいいか。

しかし、気になるのがリリアとレックスだ。

なんかぐったりしてる。

あれでは記事どころではないだろう。

理由を聞こうとリリアの所に行こうとしたとき、悲鳴が聞こえた。

「きやあああああー！」

帰ってきたフィリアの悲鳴だ。

全員がビクツとする。

しかし、そのおいしいであろう場面ですらリリアは元気が無かった。

そのあと、すぐ解散になり理由が聞けなかったのだが後日、リリアの部屋に聞きに行ったところ同じ部屋の人に「その日から一枚の写真を持ったまま元気がないんですよ」と言われ話すことすらできなかつたそうだ。

ただリリアが「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」と呟いているのを聞いたりヨウだった。

## それぞれのお惑

合宿が終わってから約1ヶ月が経っている。

つまり冬休みが終了して少し経ったている。

合宿での襲撃はいろいろな生徒たちに恐怖を与えたがそれも忘れられ始めたころだ。平穏な日常が戻っていた。

「——というわけだが…、リヨウ。どうしてだか分かるか？」

軽く眠りかけていたリヨウに問いが投げかけられる。

「えっ…、あ、はい！その…」

「分からないのかい？」

どうせ寝てたんだから分からないだろ？とマクアドルの顔が言っている。

悔しいが確かに分からない。

回答に困っていたリヨウにラッキーなことが起こる。

チャイムが鳴ったのだ。

「あれ、チャイム鳴っちゃったか。ならいいや。じゃあこの時間はここまで。リヨウは後で私の所まで来るように」

それを言うマクアドルは教室を出ていった。

「ハア……」

「寝てるからそうなるのよ？」

「マーシヤは答え知ってたのか？」

「授業をきいてればすぐに分かるわよ」

「なら教えてくれればいいのに」

「……一年生の逸材なんだから少しは頑張りなさいよ」

「それは周りから見た感じであって、俺はそう思っていないよ」

今リヨウが言ったことは事実だ。

リヨウ自身は、自分が逸材だなんて微塵も思っていない。

昔は、そんな感じで目立つことができれば気持ちいいものだと思っていたが何事も経験して初めてそのことが分かるのだ。

こんな風に目立つのは自分の肌に関わらなかった。

半分くらいの生徒は普通に接してくるのだが嫉妬している生徒、先生なのに敬語を使ってくる先生、しまいにはごく少数だが崇拜してくる人までいたのだ。

今はできる限り普通に過ごすことで、そういうのを抑えようとしている。

「リヨウ、一緒に帰りましょう」

ミイヤである。

いまだにリヨウの恋人になろうと頑張っている状態だ。

以前とは違い、「あなた」と呼ぶ頻度が減ったし、多少は度の過ぎた言動もなくなつたがべつたりなのに変わりはない。

なぜ変わったのかはリヨウには分からないのだが。

「悪いな、ミイヤ。さっきの話聞いてたろ。マクアドル先生の所いかないと」

「そうですか。残念ですね。なら夜ご飯の時呼んでください」

「何言ってるのよ。あなた今日、茶道部があるんじゃないの？」

「…ああつ!?忘れてた!急がないと!ありがと、マーシヤ」

少し焦つて感じて教室を出ていった。

マーシヤとは肝試しをした日から仲がいい。

何を話したのか知らないが仲がいいことはいいことだ。

「じゃあ、俺も行くよ」

「そうね。先生を待たせるわけにはいかないでしょうし」

「ああ。じゃ、またあとで」

教室を出て転移装置に向かった。



「マクアドル先生、きましたよ?」

「ああ、リヨウ君。お茶出てるからそこに座ってくれ」

コタツのようなテーブルがあり、そこにお茶があつたので座る。  
足をテーブルの下に入れてみると暖かかった。

「先生、なんかこれ暖かいんですけど」

「そりや、コタツだからね。電気もついてるし」

「別に寒くないのになんで?」

「そりや、冬と言えばコタツとみかんだからね」

「そろそろ2月入りますよ?」

「まだ問題ないさ。私はもともと東北出身だからね。今の時期はまだ冬真っ盛りさ」  
「成程。で、なんで俺を呼んだんで、うお!?!」

コタツの中で足を動かすと何かムニツとしたものに当たった。

「なななんだ!?!」

「寝ている子供を蹴って起こすのはよくないと思うの」

「…お前いたのかよ」

「ミリーナはどこにでも現れるの。だからある意味どこにでもいるの」

「そうかよ。しかし、ミリーナが絡んでるとなると面倒事か？」

「そうなるのかな。まあ、ただの現状確認みたいなものだから気にしないでよ」

「はあ…」

真剣な話をするというのにミリーナはみかんを食べ始める。

しかしそれ以上に気になることが一つ。

「お前、ロボットなのに普通の飯食べるのか？」

「消化器官も排泄器官もあるの。内蔵は9割がたあなたたちと変わらないの」

「よくできてるんだなあ」

「それより本題へ入りたいの」

「ああ。そうだな、初めていいぞ」

ミリーナは皮をむきながら本題に入る。

「まず、リヨウの言っていた、ラブトリアについてなの」

「何かわかったのか？」

「ごめんなさい。影すら掴むことができなかったの」

「そうか…」

「まあ、そんなうまくいくもんじゃないさ。で、人の方はどうなんだい？」

「なんて言ったつけ？グリー・V・タグラン？」

「前言ったのもあれだったけど、今のはもつと離れてるの…。たぶんリヨウが聞いたのはグリージョ・V・ラナターシャなの」

「言われてみれば…」

「で、その人はどんな人なんだい？」

「帝国出身の一般人なの。表向きは」

「表向き？」

「本当の顔は一言でいえば暗殺者なの。しかも国家嚴重未知検察官という肩書き付きなの」

「国家…！」

マクアドルが珍しく驚いた顔をする。

ミリーナの顔も少し深刻そうに見えた。

「なんですか、その国家なんとかって？」

「国家嚴重未知検察官。存在はするけど認知されていない組織なんだよ」

「認知されてない？」

「ようは国家の秘密組織さ」

「へえ…。で、その組織をきいてなんでそんなに焦ったんですか？」

「理由は簡単なの。かなり厄介だからなの」

「厄介？」

「その組織についている人はもちろん強いんだけどね、それよりも面倒なのがそいつらに支給される数々の技術なんだ。まあ、実態は謎なんだけどね」

「技術…ですか」

「この世界の進んでいる技術を見てきただろう？ 転移装置、地面の影響を受けない車、ドール。…この世界の技術はすごいんだ。けどそれは帝国も同じ」

「相手も独自の技術を持っていると？」

「理解が早いね。そういうことだよ。基盤は同じ。時間も同じ。でも進んだ方向は違う。相手は私たちが持つていないような技術を持っているかもしれないんだ。しかもむやみに出さないように機密組織のみに使わせていてね」

「国敵を構成しているのは7人と言われているの。全員がネーム持ち。出てくるのは全面戦争になった時だと思っっていたんだけど…」

「早いよね…。めんどなことになりそうだなあ」

みかんを食べながら話すミリーナ。

正直、言っていることとイマイチ状況が合わない。

「私はこいつについてももう少し情報を集めておくの」

「頼むよ。じゃあ、一番の謎について話そうか」

「一番の謎？」

「なぜ巫女を襲撃したのか。そしてなんでわざわざ生徒がいるときだったのか」

「言われてみれば確かにおかしい。」

今回の襲撃はサッド対ミイヤの一騎打ちならサッドが勝っていた。

それなのに生徒がいるときに襲撃したのがために負けてしまった。

生徒がいるときに襲撃してもメリットはイマイチ考え付かないのだ。

「確かにそうですね。なんで生徒がいるときに…」

「時期を狙っていた、というのが私が唯一考えられる理由だよね」

「私もそれは思ったの。でも、あの時期だから何かがあるというのは見つけられなかったの」

「ん〜…、つまりできたのは疑問だけなんですか？」

「そうだね。巫女の殺害についてもイマイチわからない。生かしたままで身柄の確保ならまだ分かるんだけど、殺害する意味が分からない…」

「それに関しては面白い情報があったの」

「それは？」

すべてみかんを食べ終わるとミリーナは皮も口に入れた。

苦い顔をしながら話を続ける。

「ある文献に書いてあったの。コロナって知ってる?」

「何だそれは?」

「形状は不明なの。だけどコロナは地球上のラテン語にあったの。意味は王冠」

「王冠…」

「その文献にはその生成方法も書いてあったの。材料のみだけ」

「まさかそこに巫女と関係ある何かが?」

「そうなの。材料はたくさんあるけどその中に巫女の霊力とあったの」

「霊力? 魔力じゃないのか?」

みかんの皮を食べ終わるとまたもう一つ新しいミカンを取り出す。

「霊力っていうのはこのみかんと同じなの。皮が魔力で実が霊力だと思ってくれればいいの」

ミリーナが皮をむき実を皮の上に置く。

「もともと魔力っていうのは霊力が変換されたものなの。そして魔力に限りはあるけど霊力には死なない限り、限りはないの」

「霊力に限りがないなら魔力にも限りはないんじゃないのか?」

「変換するときには時間がかかるの。だから魔力は尽きるし、でも時間がたてば回復するの」

「成程。でもおかしくないか？死んだら霊力は生成されなくなるんだろ？そしたら殺さない方がいいんじゃないのか？」

「リヨウは皮をむかないでみかんの実のみ食べることは出来るの？」

新しいミカンを取り出す。

「確かにあるといえはあるの。何か道具を使い無理くり霊力を絞り出す」

爪楊枝を取り出し、みかんに穴をあける。

「でも、こんなことをしても取り出せる霊力は少量」

爪楊枝を抜くと確かに先つちよには少しいているが汁は漏れてこない。

「なら穴を大きくすればいいんじゃないのか？でもそれは被験者に対してものすごい負担になるの」

ストローくらの穴をあけ、ストローを差し込む。

「ちなみにみかんじゃ無理だけどこのストローを抜けばすぐに魔力の層が霊力を囲むの」と言いながら。

「爪楊枝ではとても時間がかかる。ならストローを使えばいい。でもストローを使えば体が耐えられず、おそらく死ぬ。なら殺せばいい。そういうことだと思おうの」

そういうながら剥いていないみかんをコップの上で握りつぶす。

「殺してから一定時間がたてば霊力はたんまり残っているけど、魔力は消滅するの。これだけ簡単な方法があるならこれを使わない手立てはないの」

手を拭き、むいたみかんを食べ始める。

「そんなひどい方法じゃなくなつて……。例えば霊力を本人に頼んでもらうとか!」

「霊力は人のみの力では外に出せないの。そして、魔力を霊力に戻すことも出来ないの」  
「だからって殺すのか?」

「私がやつてるわけじゃないの。でもあちらの気持ち分からないわけでもないの」  
「なんでだ?」

「私はこの世界を守りたいの。もし、ある一人の人を殺せばこの世界を守れる、そうなたら私は間違いなくそいつを探して殺すの」

「お前っ!」

「貴方は正義感が強い。でも私にそんなものはない。この世界を守るためなら犠牲はいとわないの」

「殺したそいつはお前の守りたい世界の住人じゃないのかよ?」

「ええ。そうなの。だから私はできる限り人は殺さないの。関係ない人は巻き込まないの」



なにかミリーナに決意のようなものが見えた。

それは何年も前からあるもので、ミリーナの基盤であるような気がした。

「君たち。そういう話も大切だけど…」

「そうだったの。話を戻すの。さっき言ったコロナは正直できてしまうと私たちが勝てる確率が限りなくゼロに近くなるの」

「いったいどんなことが起こるんだ？」

「コロナ。それを身につけた人は魔力を魔力に変換するスピードが異常に早くなるの」

「…それだけか？」

「リヨウ。簡単に言えばコロナを装備した人は魔力に限りがなくなるの。そんなチート

野郎に勝てると思うの？」

「どんな敵に出も隙はある」

「これはゲームじゃないの。相手が戦争が始まってすぐ最強のシールドを常に張り、敵に会ったら常に必殺技が使える。そんな敵に勝てると思うの？」

「それは…無理だな」

「でも必ずこれを狙っていると決まったわけじゃないの。あくまで推測。これからも調べしていくの」

「でも巫女の確保は失敗したんだろ？他の巫女だって今回の件で警戒するだろうしコロ

ナはもう作れないだろ」

「私たちの技術力と同じならばね」

考えたくもない事実を突きつける。

「それってどういう…?」

「さつきも言っただろう。私たちとあちらでは持つている技術が違う。こつちが劣っているものもあれば、あつちが劣っているものもある。もし仮に、あちらが魔力を靈力に変換する方法を見つけていたら?」

「…」

「他の材料は手間こそかかるけど手に入れられないことはないの。もしそんな技術があればおしまいなの」

「なにか手立てはないんですか?」

「あちらの情報が全くない。尻尾を出すまで私たちは力を蓄えているしかないねえ」  
「ずっと守ってばかりだ…」

「時期が来るまで待つしかないさ。後手に回ってばかりなのは嫌な話だけどね」  
空気が重くなる。

さつきからネガティブ発言しかないのだから無理もない。

「さて、じゃあ私はもう帰るの」

「みかんはまだあるよ？」

「食べたいのはやまやまだけどやることは山積みなの。なんとしても次は先手を打ってみせるの」

「俺も力を貸すぜ」

「ありがとう。でもあなたは現場で働くタイプなの。時期が来たら知らせるから力をつけていてほしいの」

「そうか。分かった」

「それじゃ。あとマクアドル。あなたもリヨウを見習って力をつけておくといいの」

それだけ言うとミリーナは消えた。

ミリーナが消えた後、マクアドルは「私のドールは5段階目で限界なのに。しかも今年47歳だぞ」とため息をついていた。

「…」

5人が長いテーブルについている。

1人はOと呼ばれていた少年だ。

誰もしゃべらない。

1人の男がテーブルを指で叩いているが不思議と音がしない。

そんな無音な世界に扉の開く音が響く。

「お待たせしました」

ジーク・T・エリオスだ。

それだけ言うのと空いている席につく。

「マスターは？」

「少し遅れるそうです。今後の方針につ——」

「おい」

屈強そうな男が話を遮る。

「何ですか？」

「てめえ、今回の作戦失敗したようだな？」

「そうなりますね」

「なんで制裁が一切ないんだ？」

Tの目が鋭くなる。

「どういうことですか？」

「サツドは失敗して制裁を加えられた。なのにお前は何もなしだ」

「そりゃ、おめえ、ヒヒッ、Tがマスターのお気に入りだからに決まってるじゃん、ヒヒッ  
！」

別の男が話に入る。

「秘書もかねてるしな、ヒヒッ！仕方ないさ」

「R、口を慎め。お前は俺より格下だ」

「おお、怖い。ヒッ！なら黙りましょうかね、ヒヒッ！」

「今はそんなのどうでもいい。俺は直談判に行くぞ？」

「なぜ君がそこまで私を嫌いなのかは知らないが勝手にすればいい。君の寿命が減るだけだ」

「なんだと!？」

「やめろ、A。Tの言う通りだよ」

ただ一人の女が口を開く。

「L！お前はこれでいいのか!？」

「マスターが決めたことだ。私たちが口をはさむ余地はない」

「しかし……！」

Aが何か言おうとすると扉が開く。

マスターと呼ばれる男が入ってきた。

「すまない。遅れた」

「私たちもさつき集まったところですよ」

「そうか、なら今後の方針についてはなそう。T」

「はい。今回のアメミリア森林での作戦は失敗。巫女の殺害も出来ませんでした」

「痕跡は？」

「森林の下に作っていた基地は跡形もなく壊しました。問題ないかと」

「そうか、なら」

「おそれながらマスター」

「……なんだ？」

「なぜ、Tは一切制裁を受けていないのですか？作戦を失敗しました。死とまではいかずとも何かしらあるべきではないかと」

「Tの今回の作戦内容は本作戦を気づかれないように一番近くのキャンプを奇襲するのとだ。よって彼は作戦を失敗してはいない」

「しかし、巫女の殺害はおろか身柄の確保すらできませんでした。なにかしらあるべ」

「作戦は失敗していなかった」

マスターの声に明らかに怒気が含まれる。

Aは身の危険を感じた。

声のみで殺されるのではないかとありえないことを考えてしまうほどだった。

「まだ、何かあるか？」

「…いえ」

「なら、話を進めよう」

「巫女の霊力確保に失敗してしまったので、作戦αを実行します」

Rのかおが歪む。

「つまり…、待つのか？」

「はい。巫女の魔力は手に入れました。まずは魔力を増やします。その後これに霊力に変換します」

「かかる時間は？」

「最低でも3年」

Rがうなり声をあげ髪の毛をかきむしる。

「かまわん。もともと国はそれを提示していた。早とちりし過ぎたのかもしれないな」

「申し訳ありません。お力になれず…」

「かまわないといっているだろう。3年後、結果を出せばいいだけの話だ」  
そして、マスターは立ち上がり言った。

「お前たちはそれまで力を蓄えていてくれ。私たちの作戦は成功すればミューズデルをかなり弱体化することができる。私たちは失敗できないのだ。後戻りはできない。自分の家族、恋人、友達のためにも頑張ってくれ」

『はい、我がマスターー！』



## 始動した戦争

### 経った月日

「…」

「リヨウ。調子はどうだ？」

「レックス。いつも通りだよ」

今は戦闘の授業中だ。

出番が終わり、休んでいるところへレックスはやってきた。

「いつも通りとなると…」

「相変わらずダメだつてことだ」

顔では笑っているが悔しいという気持ちがある。

今リヨウたちは4年生になっていた。

今、レックスのドールは4段階目。

しかし、リヨウのドールは3段階目だった。

リヨウのドールは1年生の時こそすぐに2段階目に移行できたものの、2年生の時は進化しなかった。

3年生になり3段階目になったものの、周りと同じになってしまい「逸材」と言われることはなくなりました。

そして4年生、魔科祭も親睦会も終わり、次の行事に向けて力を蓄えていた。

4年生からは「ミュレス」という祭りが新たに加わる。

この祭りは学校ではなくミュージズデルで行われる。

魔科祭のように戦いもある。

一般人がドールの戦いを見ることができる唯一の祭りだ。

Bコースの人にとっては一般人の人々に自分を売り込むチャンスなのだ。

とびぬけた才能が見られればいろいろなところから「卒業したらうちで働かないか

？」と声がかかることもある。

しかし、リヨウにとってはあまり意味のない話である。

彼は今ドールも4年生なのに4段階目になっていない、悪く言えば落ちこぼれだ。

ドールとの戦いでは1段階違うだけで大きくパワーバランスが崩れる。

なので、今回の魔科祭もリヨウは選ばれることはなかった。

「まあ、そういう時期もあるさ。お前は逸材と呼ばれるほどすごかったんだぜ？そんな奴がこのまま終わるはずねえよ」

「だといいいんだがな」

「つたく、暗くなりやがって。お前、ミュレスは出ないのか？」

「お前、俺の性格忘れたのか？何事も挑戦だよ」

「それはよかった。お前は俺が倒さなくちやな」

「3段階目に負けた4段階目っていう肩書をくれてやるよ」

「楽しみにしてるぜ」

ちようどチャイムが鳴る。

リヨウは腰を上げその場を後にする。

悔しい気持ちはやはり残っていた。

部屋に戻ったリヨウを待っていたのはクロ……。ではなく一人の女の子だった。

外見は10歳くらい、顔は髪をうまくまとめて出しているが髪は耳が隠れるあたりまであり、特徴的なのは猫だか狐だか分からない獣耳だ。

「おかえりなさいであります、リヨウ殿」

「ただいま、サク」

彼女はリヨウの使い魔だ。

本当は「隠密竜」《ノティス》と呼ばれる竜で年もまだ2歳だ。

3年生の使い魔を探しに行く授業で出会ったのだ。

しかも探し始めてすぐに。

|||||

「3年生で使い魔を探しに行つたとき」

「よし、絶対強そうな使い魔にするぞ！」

「あちら側にも選ぶ権利はあるわ」

「どういう意味だよ？」

「そのまんまよ」

「リヨウ。私があなただの使い魔になつてあげても……」

「使い魔が使い魔を使役してらつてどういふ状況だよ？」

リヨウの気合が入つた言葉にマーシャの言葉とツツコみを入れたくなるミイヤの台詞が応える。

くだらない会話をしながら歩くいつものメンバー（科学側のみ）。

「僕はかわいいのがいいな」

「クロ、あなたがそういう生物を使い魔にしたら鬼に金棒よ」

「どういう意味？」

「いや、何でもない」

「確かに強いのがいいですよ。でもかわいいのも捨てがたい…」

「じゃあ犬にすれば？」

「それじゃただのペットじゃないですか!? 会話もできませんよ?」

「犬は頭がいいからあつちには分かってくれるんじゃない?」

「それはそれで考えておきます。今は使い魔です」

全員「(考えておくんだ…)」

辺りは雑木林ともいえる草が生い茂った土地。

視界はあまり良好ではなく、遠くまで見ようとすると木に遮られる。

そんな風に歩いている一団に何かがあるものすごいスピードで近づく。

しかし、誰も気づかない。

リヨウ以外は。

「…なんか心配しない?」

「そりゃ、そこら中に生き物居るしね」

「いや、そうじゃなくて…、なんかこう…」

うまく言い表せない。

ミイヤもそう言われて何かに気づく。

「言われてみれば私も。これは…、早い何か？」

言い表せなければどうするか。

実物を捕まえればいい。

立ち止まる。

「なにやってんだ、お前？」

「ちよつと黙ってて…」

全員止まり、風の音だけがする。

何やってんだこいつ？と思っていると、何かにつかみかかるかのように前に飛んだ。

突然変な行動をするもんだから全員が驚く。

「ちよつと、何やって…」

「こいつだな。正体は」

リヨウの手には驚いた顔をした、まだ小さな竜がいた。

サクとの出会いだった。



「なんだか元気がないように見えます」

「そうか？ そんなつもりはないんだけどな」

「肩をもみましようか？」

「大丈夫だよ。そんなかしこまらなくてもいいって言ってるのに」

「いえ、リヨウ殿はノテイスである私をすぐに見つけ捕まえました。そんな主に敬語でないだなんて滅相もないです」

彼女は出会ったときからこうなっていた。

捕まえるとすぐ少し頭をすり寄せた後、人の姿になり有無を言わずリヨウの使い魔になった。

リヨウとしても嫌ではなかったし問題はなかった。

ノテイス  
隠密竜とはとても珍しい竜だ。

龍全体から見ると上の中あたりに位置しており、その中でもこの竜は名前の通り隠密性に優れている。

気づかれずに近づき、相手を仕留めるのだの、気絶させるなどが得意だ。

そんな強い竜を使い魔にできて嫌な人などいない。

「私にできることがあれば遠慮なくお申し付けください！ 力になりますよ！」

「ありがとう。でも今は本当にいいよ」

「…左様ですか」

まだあつて一年しか経ってないがサクにも何となく分かっていた。

リヨウは焦っている。

リヨウの使い魔になることで戦争が近いうちに起きることを知った（半信半疑だが）。

リヨウは正義感が強い男だ。

彼が力を欲している理由は戦争にある。

おそらく多くの人を守りたいと思っているのだろう。

そんな人が魔科祭にも出られなくなるほど弱くなっている。

焦らないはずもない。

「…」

さつきからベツトに座ると黙ったままだ。

サクは自分の体を竜の姿に戻す。

竜の姿でのサクは膝の上に乗れるほど軽いし、ちょうど収まるくらいの大きさになる。

「えっ、サク？」

黙ったままリヨウの膝に乗る。

慰めることができるとは思わない。



それでもこれくらいはしてあげたかった。

いや、これしかできなかつたの方が正しい。

「…ありがとう」

本当にそう思ったのかは分からない。

でもサクは嬉しかった。

力になれたような気がした。

2人はそのまましばらく寝てしまった。

音がする。

パーティでもやってるかのよう騒がしい。

座りながら寝ていたので眠りは浅く、すぐに目が覚めた。

「のってるか？野郎どもー！」

「いえーい！」

「お前らはいったい何をしている？」

「リヨウが起きたー」

「起きたー」

なぜか使い魔が何人かいる。

「僕は止めたんですけど…」

「だろうな。スノーは本当にフィリアに似てる性格してるな」

「スノーだけ逃げよーとしてる」

「ズルいー」

「ランとリンは相変わらず仲いいな」

スノーはフィリアの使い魔だ。

小逆竜しよげきりゆうといって特徴的なのは手のひらより少し大きいくらいの大きさだ。

大人になっても大きさはほとんど変わらない。

強さは中の下あたりなのだが「かわいい！」と言って、そいつに決めた。

ランはリリアの、リンはマーシャの使い魔だ。

実は今こそその人の形をしているがこの2人は蛇だ。

見つけた時、「蛇かあ」とないかなと思っていたリヨウをよそにマーシャはすぐに捕ま

えに行つた。

リリアは「2匹一緒にいたのに離れ離れにするのはかわいそうと」言い、もう一匹を

引き取つた。

そしてリヨウは他の人の使い魔を見るたんびに思う。

類は友を呼ぶって本当なんだなあ、と。

スノーはフィリアと性格が似てるし、ランとリンは主人たちと同じく仲がいい。

リンが初めに話し、ランがそれを復唱している。

「っていうか、お前から使い魔だろ？ご主人守らなくていいのか？」

「使い魔にだって休暇はあるのー」

「あるのー」

「そしたらお前からほとんど休暇じゃねえか」

「でも今日はリヨウさんと呼ぶために来たんです」

「何だ俺に用か？」

「8時に食堂に来てほしいとのことですよ」

「ことですよ」

「ことですよー」

「何かやるのか？」

「はい。ミュレスがあるということとその前夜祭を4年生全体でするそうです」

「前夜祭ってその日の前日にやるもんじゃ？っていうかずいぶん多いな。5000人も食堂に入るのか？」

「問題ないそうです」

即答だった。

すごいと思わずにはいられない。

「分かった。8時だな。じゃあ準備するか。サク、いい加減起きろ」

「クルル…。ハニユ」

「嬉しそうですね。時間ありますしまだいいんじやありませんか」

「…それもそうだな。こいつ、起きているとき気が張ったまんまだしもう少し寝かせるか」

「リヨウ、ロリコン」

「ロリコン」

「この状況のどこがロリコンになるんだ？っていうか頼むからそれやめてくれ」

リヨウは使い魔を探しに行ったときすぐに見つけてきたうえ、人の状態のサクを連れていたもんだから「小さい女の子だからすぐに決めたんだ」とロリコンのレットルを張られてしまった。

そこにいた人は冗談で言っていたのだが広まると「マジでロリコン」と思う人もいて困っている。

「それよりお前らは行かなくていいのか？」

「僕たちはリヨウさんと呼ぶついでに一緒に戻ってくるといったのでいいんですよ」

「：サクって本当にすっかりした使い魔だな」

「それだと私たちがすっかりしていなみたいなの」

「なのー」

「そう言ってるんだよ」

「まあ、この寮は安全ですし。どうしても気が緩んでしまうんですよ」

「確かに安全だけだよ…」

「…いつらは知らない。」

「近いうちに戦争が始まるかもしれないということ。」

「ねえリヨウ、お風呂かりていー？」

「借りていー？」

「ああ。風呂くらいだったらかまわないけどお前ら人の状態で入るのか？」

「そうだけど何ー？」

「もしかして私たちの裸体を見たいのー？」

「興味ねえよ。ただ蛇の状態で入れれば早く体が洗えるんじゃないかと思ってな」

「基本的に人の方が便利なのー」

「だから人のまま入るのー」

「そうか。ならいいんだ」

「じゃ借りるのー」

「のー」

2人が風呂場に入る。

扉を閉めたと思っただけで開けて

「のぞかないでねー?」

「ロリコーン!」

またすぐに閉めた。

「…」

「安心してください。少なくとも僕は分かっていますから」

「ああ。それは分かっているんだが…」

「きつとサクもフォローしてくれるはずです」

「サクにまで言われたら俺は立ち直れないよ。っていうか、そろそろ起きてもらわないとな。サク、起きろ」

サ「ん…、グルル」

竜の状態ではテレパシーのような形でしか話すことは出来ない。

サクは起きると人の形に戻った。

「おはようございます、リヨウ殿。もしかしてご迷惑をかけたのでは…」

「そんなことないよ。サクだって俺を気遣ってくれたんだろ？本当にありがとう」  
「そう言ってもらえたらうれしいです」

明るい顔をする。

口では堅いことを言っているが実際は普通の女の子と大差ないのだ。

「そうだ、サク。俺8時から食堂で集まりがあるんだけどお前はどうする？」

「ご一緒してもよろしいのですか？」

「ダメな理由がないよ。それにお前もクウに会いたいだろ？」

「クウも来るのですか？」

「たぶんね。で、どうだ？行くか？」

「行きます！」

クウというのはケイトが使役している使い魔だ。

簡単に言えば土の妖精らしく、常に人の形をしている。

状況に合わせて顔を変えるし、必要とあれば性別も変える（本当の性別は不明）。

「じゃあ、君も準備したら？」

「私が準備して何かあるのか？」

「今、ランとリンがお風呂入ってるからそれくらいは？」

「別に、今日の朝入ったし汗かくことなんてしてないから大丈夫」

「君は本当にノティスなんだな」

「貴方は竜であることをもつと誇りに思いなさい」

サクとスノーがしゃべっている光景を少し眺める。

階級があるはずはないのだがやはりどちらかというところサクの方が少し上らしく、ス

ノーは多少へりくだっている。

眺めているとランとリンが風呂場から出てきた。

「お待たせー」

「お待たせー」

「おう。出たか。じゃあ行くか」

立ち上がり転移装置に行こうとするがランとリンはなんか警戒している。

「何やってるんだお前ら？」

「襲われたら怖いなーと思って」

「警戒してるのー」

「お前からマジで俺のことロリコンだと思ってたのか…？」

いくらサクでないとはいえ、身近な人の使い魔にガチだと思われていたのが分かると

なんだかへこむリョウだった。



## 前夜祭

「ずいぶん騒がしいな」

「そりゃ、5000人ほど集まりますからね」

「おいしそーな匂い！」

「おいしそー！」

リョウたちは食堂についた。

リンとランは子供のように喜んでいる（実際生まれてまだ3年目ほどののだが）。

「リョウ殿。クウはどこにいますか？」

「待ち合わせしてたわけじゃないし分からないよ。とりあえずこいつらのご主人様探す

ついでに探すか」

「了解しました」

「申し訳ないです。でも放っておいても見つけれれると思いますよ？」

「お前、5000人＋3000の使い魔の中簡単に探し出せると思うか？」

「い…一時間くらいあれば」

「腕輪を使ったらどうですか？リョウ殿」

「電話はうるさくて無理だ。電通ぐらいなら何とかなるけど。つていうかお前ら、ご主人様の魔力的なもの感じ取れないのか？」

「ちよつと人が多すぎー」

「混ざり合ってるから無理ー」

「僕はもともとこういうのは苦手で……」

「こういう時にご主人様が危ない目に遭ったらどうするんだ、とため息をつく。

「あなたたち、もう少し使い魔だつていう自覚持ったらどう？」

「失礼な。僕だつて主が危険な目に遭ったら身を投げてでも守る所存だ」

「私は悩むかもー」

「私もー」

「……何となくわかつていたがこれを見ているとマーシャとリリアは守られてるといふより守ってるのでは？と改めて思う。

「リヨウー！」

呼ぶ声をした。

人が多くて誰の声だか分からない。

周りを見渡すとリリアがいた。

「リリアー」

「ラン。よかった。迷子にならなかった？」

「大丈夫！」

「そう。ならよかったわ」

ランの頭を撫でるリリア。

やはり子供を迎えに来た保護者にしか見えない。

「みんなも来て頂戴。マーシヤやフィリアもいるわ」

「わざわざありがとうございます」

「ありがとう」

はぐれないようにスノーがリンの手を握りながら歩いていく。

「お前、どうして俺たちの場所が分かったんだ？」

「たまたまよ。何か面白いことやってないかなーと思って歩いていたらあなたたちを見つけたの」

「」

「こんなめちやくちや広い場所を歩いてたまたま？」

「本当よ。私にもようやく運が回ってきたってことかしらね♪」

本当に周りにはどんちゃん騒ぎをしている。

まあパーティをやっているのだから当然なのだが。

8000人（使い魔を含める）規模でやるパーティなんて初めてなので、開いた口が

塞がらないとはまさにこのことだ。

「でき、そこでもうおかしくなっちゃって！」

「かなり馬鹿じゃん、そいつ！」

「いや、もうそこを通り越して天才というべきだよ」

「盛り上がってるじゃない」

「あら、リリア。もう取材は終わりでもいいの？つてリン！」

リンがマーシヤに抱き付く。

「お帰り。何かリヨウに変なことされなかった？」

「お風呂に入れさせられたー」

「えっ、マジで？」

「その言い方じゃ、俺が無理やり入れたみたいじゃないか！お前らが入りたいていから貸したんだろ」

「もしかしたら隠しカメラがあつたのかもー」

「かもー」

「俺はリリアじゃないんだからそんなことしねえよ」

「ちよつと、私だつてそこまで非人道的なことしないわよ！撮るときは堂々と撮るわ」

「そこだけは褒めてやるよ」

パーティーといってもどうやらいつものグループでまとまっているようだ。それぞれテーブルについて仲のいい人たちと楽しんでいるようだ。

「あの僕の主はどこに？」

「フィリアなら飲み物取りに行ったわよ。そろそろ戻ってくると思うけど」

「じゃあ俺ちよつと見てくるよ。ケイトも探さないとだし」

「ケイトに何か用あるの？」

「サクがせつかく出てきたんだ。クウに会わせてやりたいと思ってな」

サクがペコツと一礼する。

「そ。分かったわ。ちなみにフィリアは3番テーブルの方に行ったから」

「よし、じゃあ行くかサク」

「了解しました」

口では普通に答えているが会うのが楽しみらしく、顔が喜んでいる。

スノーもついてきた。

しかし、生徒5000人を余裕で収容できる会場となると違うテーブルに行くだけでも少ししかかる。

5分ほど歩きようやくテーブルについた、のだが騒がしい。

周りはもともと騒がしいのだがここは何か違う。

「なんでしようか……？」

騒ぎの中心を見てみると……、フィリアがいた。

なんかガラの悪そうな男3人に絡まれてる。

「なんでですか!?!」

「うるせえよ。科学側の生徒はさつきと6, 7番のテーブルに言っただけで飲み物もらって来いって言うてんだ」

「別にそんな決まりないじゃないですか」

「格下には発言権なんてないんですよ」

「格下?」

「ドールを使わなきゃまともに戦えない非力野郎だろ?」

……4年生になつてもこういう思想を持っているやつはいる。

1年生の時と比べるとそういう考えを持つ人は減るが、こういう考えを持つ人が一人でもいる限り科学と魔法が本当に手を取り合うということは出来ない。

「才能のないゴミはゴミらしく地面でも這いつくばってろ」

「ゴミって……!」

さすがにこれを見過ぐすことは出来ない。

「サク、スノー、行くぞ……ってスノー?」

「リヨウ殿。あいつも使い魔ですよ?」

既にフィリアと男たちの間に割って入っていた。

「スノー!」

「なんだ、お前?」

「この方の使い魔です」

いつもとは違って確実に怒っている。

「でたよ! 科学側の使い魔。でもあれはペットと何ら変わらないですよ?」

「そうそう。俺たちと違ってわざわざ探しに行くもんな。買うこともできるし!」

「…」

「なんだ? 返す言葉もないのか?」

「見たところ、あなたたちは使い魔がいないようですね?」

「それがなんだよ?」

「魔法側では主が強ければ強いほどすごい使い魔を使役できると聞いています」

「何だと?」

「はつきり申し上げます。ただの雑魚のくせに外見だけ強そうに見せてんじゃねえよ?」

「ミが!」

さつきまで静かにしゃべっていたもんだから驚きである。

男たちは少しひるむがすぐに反論する。

「んだと、てめえ！舐めてんのか!？」

「雑魚はどつちだよ！」

「土下座して謝らねえとぶつ殺す——」

「何やってるんだお前ら？」

静かだが、確かに大物の感じがする声が聞こえた。

そこで騒いでいた人たちは声の聞こえた方向を見て黙っている。

「おい、何やってたんだって訊いてるんだよ」

「ジ、ジルリアさん」

そこにいたのはシユールス、ケイト、クリティウス姉妹の4人だ。

この学年のネーム持ち総集合である。

「こいつらが聞き分けが悪いもんで……」

「……理不尽な要求とかしてるんじゃないやねえだろうな、この前夜祭で？」

「そんなこと、ないです……」

「そうか。ならさっさとこの問題を解決しろ。俺は飲み物を取りに来たんだ」

「な、ならどうぞ。先ほどこちらの問題も解決したので……。お前ら、行くぞ！」

男たちはその場を後にする。



科学側には見られない光景だ。

ネーム持ちというだけあって同じ学年でも先輩のように扱われているのだろう。

「つたく…。フィリアだったな？悪かったな、こっちの奴が難癖つけて」

「いえ、助けていただいてありがとうございます」

「そーそー。シューに助けてもらえるとかチョーうんいいジャン？」

「つていうか、あんたもしかして1年の時の対戦相手ジャネ？」

「お久しぶりです。そういえばあの時、自己紹介しませんでしたね。フィリア・リトルトリアです」

「アタシはウリス・U・クリティウス。姉だよ」

「アタシはマート・U・クリティウス。妹だし」

以前と比べると少しは短気が解消されたようだ。

「そいつは誰なんだ？お前の男か？」

「いえ、私の使い魔です。スノー、あなたも自己紹介を…つてスノー？」

さつきから立ったまんま止まっている。

フィリアが心配して揺らすと「ボンッ！」と軽く爆発するとフィリアの手に乗つかつてしまった。

「スノー!!」

「少しは度胸がある小逆竜だな。そいつが出てこなきや俺は助けなかったよ。いい使い魔を持ったな」

「シユー、僕はここから別行動にするよ」

「ああ、分かった。頑張れよ？」

なにかいじるような感じでシユーレスは言った。

それが何なのかはその2人にしか分からなかったが。

「おまえもな、シユー」

少し困ったような顔をするシユーレス。

苦笑いも含まれていたが。

それだけ聞くとシユーレスはクリティウス姉妹とその場を後にした。

「久しぶり、フィリア」

「お久しぶりです。ケイトさん」

「全然変わってないみたいだね」

「それは褒め言葉ですか？」

「そのつもりだよ、なあクウ」

「主、私はやることのできたので失礼します」

「えっ？ なにかあったっけ……」

クウが歩いていったほうを見るとリヨウとサクがいた。

サクとクウは仲がいい。

リンとランのようにはしゃぐわけではないが楽しいのは一目瞭然だ。

「リヨウさん。見てたんですか？」

「助けに出ようと思ったんだけど、スノーがいつもと違う顔してたからな。なんか出るタイミングを逃してしまった」

フィ「いつもは気が弱いんですけど、やっぱり頼りになります」

頑張ったスノーを褒めるように頭を撫でる。

嬉しそうだった。

「それよりフィリア、みんなが待ってたぞ？」

「そうでした！急いで飲み物持っていけないと」

「手伝うよ。俺もそこまで行くし」

「そうだな。スノー片手に持っていけないだろ」

「すいません。私がついていくつもりだったのに、結局私問題を起こしただけで」

「あれは誰が見てもあつちが悪いさ。こつちからも強く言っておくよ」

「お前、そんなに力あるのか？」

「これでもクリティウス姉妹を下したんだよ？」

「マジか!？」

「結局、シューレスには勝てなかったけどね」

以前は格下とクリティウス姉妹に舐められていたのに今では少しだがそれも改善された。

それでも完璧に改善されないのはケイトの性格に問題があるんだろう。

飲み物を持ってマーシャたちの所に戻る。

「あら、フィリア。遅かったじゃない」

「すみません。いろいろありまして…」

みんなにリヨウたちが配る。

「面白い話ならぜひ聞きたいんだけど」

「面白いというよりすごい話です」

フィリアが説明する。

「へえ、そんなことが」

「やるときはやるんだね、スノーは」

「いいわねえ。リンはそういう風になってくれるのかしら…」

無邪気にランと楽しそうにしているリンを見る。

見た感じではとても守ってくれそうには見えない。

「でも後悔はないだろ？」

「ええ。あの子を使い魔にして正解だったわ」

「ならそれでいいじゃねえか。リンもお前に不満はないだろうしな。でもレックス。お前は本当にいなくてもいいのか、使い魔？」

「結局最後に自分の身を守るのは自分だ。いても悪くはないが探すほどでもないさ」

「僕はほしいけど、狙うものが高いんだよなあ……」

「狙い続けられればいつかは手に入るわよ。頑張りなさい」

「そうだね。あきらめずに頑張るよ」

レックスとクロは使い魔を使役していない。

レックスは別に興味がなく、クロは一生のパートナーを大事に決めたいらしい。

「よし、じゃあ今日は盛り上がるわよー！」

「おお。なんか景気がいいな？」

「よっしやー！」

「いえーい！」

突如いなくなった人の声があった。

いなかったとは言ったがリヨウウから見ればかなり印象が強い人。

「うおっ、ミイヤ。いつから？」

「たった今よ。茶道部は大変ね。ようやく仕事が終わって急いでここに来たわけです」  
「招待はしたけど場所は教えられなかったはずよ?」

「リヨウの魔力を探し出しました♪」

もし本当なら使い魔よりすごいことになる。

「この人ごみの中を、使い魔である私ですら出来なかったことを、やり遂げたのか!」

「一緒にいた時間と関係が違います。私はあなたよりリヨウに近い『将来の嫁』なんだから」

「くっ!さすがは嫁か!?!しかし私だつて負けるわけには…!」

「サク、別に熱くならなくていいから。まあ力をつけるにこしたことはないけど。今は  
楽しい」

「…はい。リヨウ殿がそうおっしゃるなら」

「じゃあ、みんないいかしら?それじゃ、かんぱーい!」

楽しい前夜祭は深夜2時まで続いた。

「…マスター、準備が整いました」

「そうか。実行する日はミュレスと同日だ」

「分かっています」

「失敗は…許されん」

「了解しました」

## それぞれの戦争

「…」

「クロ、お前…」

「ゴメンね。でもこれしか方法がないんだ」

ミュレスの当日。

開会式は前日に行った。

なので朝起きた後、やることは今日の試合に備えることだった。

準備ができて部屋を出ようとしたとき、すべては始まった。

「ミュレス前日」

学生寮、特に4〜6年生のうち4年生の寮は本当に静まり返っていた。

所々で話し声は聞こえる。

しかし、4年生にとっては初めての学校外での戦闘経験を味わうことになるのだ。

それに自分を少しでも出すため、Bコース8割がたが参加することになっている。

そしてこれは使い魔にも言えることである。



彼らは就職とかそういうことは一切関係ないのだが、一応使い魔限定の大会もある。人の姿でも元の姿でもいいので戦うのだ。

実はこの大会も結構人気がある。

使い魔は案外、人の姿になると可愛いものが多いので、「可愛いのに戦っているという光景がいい」という人が多いのだ。

前例では、あまりに人気があつてアイドル的存在まで祭り上げられた使い魔もいる。

「リヨウ。緊張してるみたいだね?」

「当たり前だろ。3段階目でどこまでいけるかは分からないけどな」

「リヨウなら準決勝くらいまでいけるよ。段階の壁なんてぶち壊しちゃえ!」

2人は自分の部屋で明日に備えている。

クロはAコースに入ったので、明日の試合には出ないようだが。

リヨウは3段階目が4段階目に勝てるよう、作戦を練っている。

以前はまず無理といったが不可能ではない。

戦略次第では1、2段階ぐらいの差なら埋められるのだ(かなり難しいのだが)。

実際、フィリアはそうやって勝ち上がっている。

リヨウと同じ3段階目なのだが、数々の4段階目を下しているのだ。

初めから策士としてやってきたことだけはあつた。

「まかせろよ。とびつきりの作戦建てて、いいところまで行ってやるよ」

「勝ち上がれば3段階目ならきつと注目されるよ！サクも頑張つてね」

「無論です。ノテイスとして、そしてリヨウ殿の強さを見せつけるためにも負けるわけにはいきません」

「サクが勝つてもリヨウが強いことにはならないと思うけど……」

「少なくとも私がすぐ負ければリヨウ殿は弱く見られます。なら勝つしかないのです  
！」

「頑張れよ、サク」

「もちろんです！」

平和な日常だった。

ミュレスがあるとはいえ、別に明日で人生のすべてが決まるわけじゃない。

明日、死闘を繰り広げるわけじゃない。

そのはずだった。

災害とは忘れたころにやってくるのである。

リヨウだつてミュレス当日にことが動くななんて思つてもみなかった。

「安心して。殺さないから。みんな特別待遇で迎えてくれるって言ってたよ」

「みんな……？」

頭を何か鈍器のようなもので殴られたらしく意識がはつきりしない。

「うん。僕たちラプトリアが全員」

「クロが……ラプトリアの1人？」

クロの顔はいつも通り笑顔だったが、どこか寂しそうな申し訳なさそうな顔をしていた。

「じゃ、僕時間だから」

「じ……かん？」

「今からミューズデルを攻撃する」

「な……！」

「リヨウは寝て待つて。すぐ、終わるから」

クロの体が崩れ始める。

「お前……！」

「じゃ、またあとで」

リヨウはそこで意識を失った。

——科学の会場4——

リヨウがクロに襲われた時間と同時刻。

試合が始まる直前だった。

記念すべき第一回戦目はレックスが登場している。

科学側では4年生の間ではかなりの有望株だ。

対戦する相手とレックスが所定の位置についたとき事態が動いた。

遠くで爆発が起きたのだ。

全員がそちらを見る。

「えっ？何」「爆発っぽいよ」「あそこは6年生の会場だよな？」「事故？」  
観客がざわめき始める。

「キヤアアアアアアアア！」

悲鳴が聞こえた。

そこには以前見た覚えがある格好をした謎の人物がいる。

体は正体を隠すためか全て黒でおおわれている。

そいつの手には人の頭が握られていた。

隣の観客の体のみが席に座っている。

こうなれば観客は大パニックだ。

我先にと人がどんどん逃げだす。

警備員のいうことなど少しも耳には入っていない。

そんな中、男は首を放り投げるとレックスの方に向かってきた。

「…」

黙ったままそいつから目を離さない。

「…度胸だけはあるようだな」

「お前、何者だ？」

「ラブトリア兼、国家嚴重未知検察官であるグリージョ・V・ラナターシャ」

「ラブトリア？」

「知らないのも無理はない。むしろ知っていればこちらの失態になる」

レックスは緊張していた。

知らない人を前にしたからではない。

このグリージョから何も感じ取れないからだ。

明確な何かを感じ取れるわけではないが、確実な違和感があった。

「俺に何の用だ？」

「別にやらなくてもいいのだが、こちらの方が早く済ませそうだからな」

「何？」

「お前ら全員を相手にしてもかまわないがお前を倒せば他の奴は「俺じゃ勝てない」と思  
い戦意喪失するのではと考えた」

「上等だ。やってみろよ！」

―魔法の会場周辺―

「クソツタレ！」

ケイトは今数人と一緒に敵兵の撃退に当たっている。

柄にも合わず機体ない言葉を使いながら。

爆発が起きたかと思つたら一般人に紛れていたらしく、問答無用で周りの人を殺し始めた敵がいた。

もちろんケイトたちも例外ではなく狙われてしまった。

「なんなんだよ、こいつら」

「知らないよ！・とりあえずやらないとやられる！」

「ちようどいいじゃん！・大会前の準備運動だ！」

周りにいた友人が死んでいないだけまだましなのかもしれない。

いつの間にか周りは黒で体を覆った奴か、黒いドールらしきものを装備している敵兵しかいなくなっていた。

ドールらしきと書いた理由は一段階目でもないのに、全員が同じ形のドールを装備しているからだ。

「死にたくないなあ……」

「よく言うよ。ネーム持ちのお前が死ぬなら俺たちも即死じゃねえか」

「全く、俺たちの学年は本当に不幸だな！」

3人対数多くの敵の勝負が始まった。

—魔法の会場4—

「…」

「…」

さっきまで戦っていた魔法の生徒の亡骸の隣にシューレスは立っている。

相手の顔が笑っている。

「てめえ、何なんだ？」

「ヒヒッ！答える意味があるのか？でもまあ、今は気分がいい。ヒッ。ラブトリアの一人、アルゴラ・R」

「そこまで言うなら最後まで言えよ」

「悪いな、ヒヒッ！そこから先は忘れた」

「俺はシューレス・D・ジルリア。ネーム持ち同士仲良くやろうぜ？」



「私とやりあう気ですか？ヒッツ！小童の分際で」

「これでも4年の中では最強だぜ？」

「そうか。なら少しは相手になってやろう。ヒツ！しかし、申し訳ないが私の魔法のせいで盛り上がりたらないかもしれないがな」

「いいぜ。こいよ、ネーム持ち！」

— ミュンヘン市内の銀行前 —

「ちよつと、マジやばくない？」

「チヨーやばいよ、姉貴！」

自分たちの順番までかなり時間があるということと市内を徘徊していたときに爆発が起き敵に囲まれた。

おそらく目標は銀行なのだろうがたまたまこの姉妹は銀行の前にいたのだ。

「どつするっ」

「決まってるじゃない！」

明らかな敵意を見せてくる敵兵を見ながら言った。

「皆殺し♪」

「いえーい！正当防衛だヨネ？」

「モチー！」

「ここでは戦争というよりクリティウス姉妹による虐殺……もとい正当防衛が始まった。

あちらこちらで煙が上がり始める。

マクアドルはその光景をただ眺めていた。

「先手を打たれてしまったねえ……」

「もしかしてこれが起こることを知っていたんですか？」

「いつか起きるっていうことはね。今日とは思わなかったけど」

視線をそらし、机のほうを見る。

そこには今日突然起こったミューズデルを離れたところでの帝国の侵攻についての状況が映し出されている。

「おそろくこの2つの侵攻は偶然じゃないですよ」

「だろうね。いつもならあと10分もすれば軍隊が支援に来るはずなんだが…、おそろく無理だろうね」

映し出されている映像には苦戦を強いられている軍隊の姿が見えた。

相手の大半が魔法を使ってくるので接近が難しいのだ。

「仮にすぐこちらに向かったとしても瞬間移動装置がなければ最低1時間はかかる。こちらは私たちで対処するしかないみたいでねえ…」

「言っておくが俺は嫁を守ることに専念するぞ?」

「今じゃ、リリア君以外卒業しちゃって残ってる君の嫁は一人だよ?クレア君」

「俺があんたの下についたのも嫁を守るためだ。あんたを守るつもりは毛頭ない」

「わかっただけ、いざ言われると傷つくね…。しかし、なんで君はそこまでリリア君にこだわるんだい?」

「あいつは未だに俺に惚れていない。だから惚れさせてみせる」

「…今の台詞、君が男だったら素直に応援したしかっこよかつたんだけど」  
「それまでは、俺はあいつの近くにいた」

「君は男を好きになることはないのかい？」

「俺より強く、クールな奴なら受け身になってやるつもりだ」

「君よりクールな人はなかなかないな」

「とりあえず俺は行く。あんたもさっさと動きな」

クレアはドールを展開すると窓を開けて出ていった。

残ったマクアドルはなんだか申し訳なかった。

リリアに対して。

「…すまない」

罪悪感から出た一言だった。

— 学生寮（女子） —

「何が起こってるの!?! 転移装置は動かないし!」

「分かっていたら、こうやって走り回りません!」

「とりあえず、外に出るわよ!」

ミューズデルで爆発があった時刻と同時刻、学生寮（女子）でも爆発があった。

今でもどこかで爆発している音が聞こえる。

「とりあえずドールは展開しておくわよ」

「でもここじゃ狭いわ!」

「あんたのは、でしょ? フィリアあんたのは特に身軽なんだから、もしものために備えな

さい!」

「分かりました!」

ドールを2人は展開する。

リリアはマーシャがお姫様抱っこする形で運ぶことになった。

もともと、外ではお祭りのようなものがあつたので寮に残っている生徒は少なかった。

「ランたち、大丈夫かしら?」

「大丈夫よ。私たちが選んだ使い魔よ? そう簡単に死にはしないわよ」

「そうですよ。私たちが信じないで誰が信じるんですか?」

使い魔は今皆、会場の方に集められている。

こうなると折角の使い魔も意味がない。

「しかし、主を守るために使い魔は存在するんだからやっぱこういう、使い魔限定の戦いはよくないと思うわ」

「それは賛成ね。しかもほぼ強制だったし」

「使い魔は見せ物じゃないのになんででしょうね」

「あとで運営に言っておく必要があるわね。外に出るわ！」

目の前に扉が見える。

この扉を使うのは久しぶりだ。

しかし開けようとした瞬間、扉が碎ける。

破片がこちらに飛んできたので手でガードする。

「いったい何ですか…?」

「敵の登場ってわけね」

そこには彼女たちが知る人が立っていた。

全身黒で覆っているが特徴的なアクセサリがフィリアに一瞬で誰かを気付かせた。

「ピスさん…。何ですかその恰好」

「…どうして、分かったの? 参考に、聞かせて」

(ピスが分からない人は「フィリアの休日その1」を見てください)

「そのアクセサリですよ」

フィリアが指をさした先にドクロのアクセサリがあった。

「こんなの、数は少ない、けど売ってる」

「そのドクロ、なかなかいいところに傷をつけてますね」

よく見ると目の所に傷がついている。

ちゃんと見なければ分からないような傷だ。

「以前お気に入りだと言って見せてくれました。もう3年ほど前の話ですけど」

「…失態だ」

「まったく、だからあなたは詰めが甘いって言われるのよ」

「あなたも正体晒したらどう？ 大方予想はつくけど」

「そうね。あなたと話すのは初めてかもしれない。でも会ったことはあるわ」

仮面を外し正体を見せる。

「やっぱり…。あなた以前その子と喧嘩して部屋替えて私のところに来た人ね」

「ご名答。私はカーリヤ・エリスエル。以後お見知りおきを」

「正体ばれたぞ？ いいのか？」

「こいつらを殺せば問題ないわ」

「以後お見知りおきをつて言ったのに殺す気満々ね？」

「いや、死後の世界があることも信じてるから……言ったんだよ！」

カーリヤが魔法を唱え、マーシヤたちの上に球をぶつける。

天井が崩れ始める。

急いでその場を離れ、扉の外へ出る。

広い空間が広がっている。

校庭をイメージしてもらえればそれでいい。

その奥に起動している転移装置はあった。

「悪いけどそこをどいてもらおうわ」

「どくと思う？まあ、どいたところで転移装置は起動してないけど」

カーリヤたちはドールを展開する。

Aコースにどちらも行っていたので、ドールは2段階目とレベルは低い。

だが、見たところ魔法が彼女らの本職のようだ。

「やるしかないわね」

「ですね。私はピスさんを抑えます」

「分かったわ。私はカーリヤを。つていうかりリア、あんたはいつまで黙ってるの？」

抱きかかえているリリアを見ると気絶していた。



頭にたんこぶができています。

「…」

「たぶん、扉の破片が飛んできたときにドール展開してなかったもんだから直撃しましたね」

「折角数の上では有利だったのに…。仕方ないわね。私たちだけでやるわよ」

リリアを地面に寝かせ、マーシヤたちも構える。

「安心して。気絶しているその子はあなたたちを葬った後に殺すから」

「ありがとう。ならあの子の心配はいらないわね」

「ピスさん。考え直す気はありませんか？」

「ない。私は、私が信じる、道を行く。ただ、それだけ」

それぞれが一言言い終わると、戦いは始まった。

## 罪とは？

レックスがグリージョと戦っている。

それを少し離れたところから、Tは見ていた。

加勢をしようかと思ったのだが、Vが戦っているのなら問題ないと思った。

「…Rの様子を見に行くか」

誰にも届かないような小さな声で呟いた後そこを後にした。

— 科学の会場 4 —

「くそ、なんなんだ！」

レックスはVと戦っている。

今、戦況はVに傾いていた。

レックスは相手の位置すらほとんど確認できていない。

理由は簡単。

相手が見えないからだ。

「てめえ、姿を現しやがれ！」

「申し訳ないが私の本職は暗殺だ。こちらの方がやりやすい。光学迷彩とは実に便利だ」

これはどうやら相手の能力ではなく、着ている服が光学迷彩だからのようだ。

この技術はまだミューズデルには存在しない。

つまり対処法をレックスは一切知らないのだ。

「(どうする？ 相手が見えないんじゃないや打つ手がない。それにあいつ、魔法を得意とするはずなのにハンティングナイフ使ってやがる)」

魔法を使ってくれば、何かしら法則性を見つけることができれば多少は絞り込めるかもしれない。

だが相手はハンティングナイフしか使ってこないのだ。

Sバリアによって体への傷は防いでいるがそれもこのまま打開策が見つからなければ時間の問題だ。

「考え事とは余裕だな」

レックスに再び刃が当たる。

Sバリアの残りのエネルギーが減る。

その間にもVは攻撃の手をやめない。

「減る速さが尋常じゃねえ……！」

レックスがハンティングナイフと思っている理由はその攻撃力だ。

あの丈夫な切れ味が多くのエネルギーを消費させていると考えたのだ。

「くそ野郎め……」

レックスのドールは完璧なほどに接近戦用のドールと化していた。

遠距離用の武器など装備されていない。

がむしやらに周りを攻撃する、が相手は暗殺を本職とするネーム持ち。

そんな攻撃あたるはずはない。

「手間をかけさせるな」

レックスの周りに火の玉が出現する。

「なっ!?!」

すべてが同時にレックスに襲い掛かる。

防ぐ手立ては……ない。

会場の4分の1が炎に包まれ崩れ落ちていく。

「…弱いことは罪ではない。この世には仕方のないこともある。努力という程度のことでは超えられない壁だ。私はお前を罵ったりはしない。むしろ感謝しよう。これから仕事を簡単にさせてくれたことを」

グリーンジョが光学迷彩を解除しその場を去ろうとする。

しかし、ここで本職の勘が働く。

まだあいつは死んではないと。

「…」

炎を見つめる。

そこには動く人影があった。

「何か…御託を並べてた、なあ？すまねえが、もう一度…いつてもらえるか？」

「弱いことは罪ではない。そして強いことも罪ではない。私が罪だと思うのは——」

「」

グリーンジョがレックスの視界から消えた。

光学迷彩が発動したわけではない。

ダメージを負ったレックスには負えないようなスピードでグリーンジョが移動したのだ。

「しぶとく生き残ることだ」

レックスの背中に回りナイフを首に向かって振り下ろす。

レックスはギリギリのところまで避けるが完全には回避できなかった。

背中に痛みが走る。

「ぐあああ……！」

「Sバリアは消えたようだな。安心しろ。お前の罪は私が洗い流そう」

体が痛む中、相手を見るレックス。

そして驚いた。

「だ、ダガーナイフ……？」

「さすが戦闘訓練を積んでいるだけあるな。そう、ダガーナイフだ」

「そんな……。さつきまでの攻撃と今のはいったい？」

「こいつを使った」

持っているダガーナイフを指す。

ありえなかった。

ダガーナイフは基本的には小さく、相手に致命傷を与えられるほど攻撃力は高くない

(首や頭など急所を狙えば話は別)。

「不可能だ……。俺に急所はあっても、Sバリアにはない！それなのにあのエネルギーの

滅り方は、尋常じゃなかった」

「…私たちがお前たちを相手にすると分かっていたのに何もしらないと思うのか？このナイフはSバリアのエネルギーを分散させる。残念ながら小さくしたら打ち消すということはできなくなってしまうがな」

レックスの理解は早かった。

以前レックスはビムと戦った時Sバリアが作動していたにもかかわらず、日本刀によつて刺されたからだ。

その日本刀は研究機関に持つていかれたが、構造が分かっただけで対策は練れていなかった。

「でも…おかしい」

「お前の背中を切ったことか？」

「ダガーナイフじゃ、ここまで深く切ることは…できない！」

「職業柄あまり教えたくはないのだが、いいだろう。冥土の土産に教えてやる。私の持つている「V」の能力だ。私の魔力を込めたものは殺傷能力が上がる」

「殺傷能力？」

「そうだ。だがこいつは使いづらくてね。生物に対してしか効果が発揮できない。攻撃力を上げるわけじゃないということだ」

「悪趣味な能力だな……！」

「私が望んで手に入れた能力ではない。ネーム持ちなど皆そのようなものだ」

「そうかよ。…じゃ、続きと行くか」

「お前は本当に罪深いな。だが、今のお前に勝機などありはしない。たまには暗殺ではなく虐殺というものでも楽しませてもらおう」

「それは見過ごせないね」

声が出た。

2人の声ではない、第三者の声だ。

「私の生徒だ。殺されそうになったら出ようと思ったけど、虐殺をすると宣言されてだまっではいられないねえ」

「…誰だ？」

「ヒューズ・マクアドルだ。一応教師をやっているよ」

「先生……」

「マクアドル……。ビムを倒したやつか？」

「あの爆弾魔かい？ちよつときついお仕置きはしてあげたよ。結局死んでしまったがね」

「やはりそうか……。となるとお前のドールは5段階目だな？」



「それが何だい？」

まじまじとマクアドルを見る。

見た感じ、1段階目のドールと比べても大差は見られない。

右腕を除いて。

右腕の下にのみ、大砲のようなものがつけられているのだ。

一点特化しているのならあの砲らしきものはかなりの威力があることになる。

「…面倒だ」

「ん？」

「さっきまではこいつを倒せばあとは楽だった。なのにお前が来たせいでこいつは意味を持たなくなった。つくづく罪深い連中だ」

「罪深い？」

「私がこの世で罪だと思うことはただ一つ。しぶとく生き残ることだ。弱いことは罪ではない。だが、弱いくせに、役に立たなくせにただただ生きている連中。そういうやつに限ってしぶとく生き残ろうとする」

「…罪なのは殺すという事実だと思うんだけどなあ」

「死ぬ時が来たのになぜ死なない？なぜ逃げて生き残ろうとする？生きている有能な者の時間を無駄に消費するだけだ」

「つまり無能な人間は死ぬと？」

「無能と弱いは違う。それに無能でも有能なものの下で働ければ、そして時が来たら迷わず死ぬるのなら、そいつに罪はない」

マクアドルは少し考え込んだ。

相手の考えがあつていいのかどうか吟味したのだ。

そして答えは出た。

「…悪いが私には賛同できないよ」

「なぜ？」

「君はつまりこう言いたいんだろう？ 負けたら、相手との力の差が歴然だったら、抵抗せず迷わず死ぬと。それは未来をつぶすのと同じだ。人は変わる。そしてこの世は大器晩成人人ほど伸びがすごい。君の言う罪深い人はまだ抵抗して勝とうとしている。つまり力を伸ばそうとしている」

「それを時間の無駄という」

「違う。この世界でやることに無駄な時間など存在しない。そして強くなりたいと思えば、努力を続けることができれば、その人は強くなる。結果はどうなるかは分からない。結局かなわないかもしれない。それでもその人がやってきたことは何かに繋がる。それは本人だけではなくほかの人に対してということもあり得る」

「…」

「私がむしろ嫌悪するのは簡単に諦めてしまう人だ。普通の一般人は努力をして初めて掴めるものがほとんどだ。それを「才能がない」だの「俺には向いてない」だのの理由でやめていく。君の言う罪のない人はそういう人のことだ。甘ったれるんじゃない」

「私が掴めないものなど無い」

「それは君が一般的に言う天才だからだろう。別に波乱万丈の人生を送れとは言わない。だが、人は生きていく限り諦めるべきではない。私はそう思うよ」

レックスはぼかんとした顔でそれを聞いた。

「…マクアドル先生が、いいこと言ってる」

「レックス君、後で君の評定下げとくよ？」

「そ、それは勘弁を…！」

「…くだらん」

Vはさっきの言葉に対してなんとも思っただけではないようだ。

「そんな御託を並べて私の心を動かせると思っただけか？」

「別に君の心を動かそうとは思ってなかったよ。ただ、君の意見に反論しただけだよ」

「私の思うことは変わらない。しぶとく生き残るものは死ぬべき。そして今から私はお前を殺す。貴様の負けだと分かった瞬間からお前も罪深い者たちの一員だ」

「まあ、そんなことしなくても私は一度殺されかけてるからね。君から見れば罪深い人かもしれないよ?」

「そうか。なら…私はその罪をあら流す聖人となろう」  
体を再び消す。

「光学迷彩…。やっぱり見間違いないやなかったか。君はグリーンジョ・V・ラナターシャ君だね?」

「…私を知っていたのか?」

「ラプトリアの一人。そして国家嚴重未知検察官だよね」

「…今貴様が有能だと分かっててももう遅い。しかし、失態だな。いったどうやって知った?」

「情報源を教えると思うかい?」

「それもそうだな。愚問だった。忘れてくれ。死後の世界があるのならば特にな」

先手必勝と言わんばかりにマクアドルに攻撃を始める。

連続攻撃が当たりSバリアのエネルギーが一気に減る。

「へえ、本当に減るんだねえ…。でもSバリアを通り抜ける類の武器もあつたはずだけ?」

「私はダガーナイフが手に合うのでな。この大きさでは無理なのだよ」

そう言っている間にも攻撃を続ける。

姿が見えない以上、相手は手出しできないはずなので複雑な動きなどいらぬ。単純に早い動きのみをして、できるだけ早くエネルギーを減らす。

マクアドルは抵抗するそぶりを見せない。

「先生！」

「君はそこにいるんだ。私なら心配ない」

マクアドルは飛んだ。

しかし、その程度で避けられるほどグリーンジョの攻撃は甘くない。

「どうした？もうそろそろエネルギーが切れるころではないのか？」

「そうだねえ。もうほとんど残ってないよ。でも——」

エネルギーが切れる最後の一撃をグリーンジョが加えたとき、言った。

「対策も練り終わった」

バリアが消え、マクアドルへの攻撃が可能となる。

そのまま腕を切り落とそうとしてまっすぐ突っ込むつもりで攻撃したのにその一言を聞いて一瞬迷ってしまった。

マクアドルはその一瞬を見逃さなかった。

見えていないはずなのに、グリーンジョの腕をつかむ。

「なっ!？」

あまりの出来事に何が起きているか理解できなかった。

彼の本職は暗殺。

そんな人は無駄な音を立てない。

つまり音で判別したわけではない。

しかし、臭いがか着いているわけでもない。

「悪いけど…、もううよ右腕」

それと言うとマクアドルは思いつきり手に力を込める。

メキツ、バリリリ!と骨の割れる音がして腕から骨が飛び出たり血が流れ始めたりする。

「あああああああ!」

痛いので逃げようとするがドールを装備した人間と、普通の人間の力の差は歴然。離れることができない。

魔法を使つて腕を体から切り離す。

「ああああああ…。ハア、ハア…」

「さすが裏の世界の一人、すぐさま最良の判断をしたね」

「ぐ…。な、…なぜ?」

「君の場所を当てられた理由かい？これ見えるかな？」

背中を指すマクアドル。

そこにはさつきまではなかった蜘蛛の足のようなものが生えていた。

ただ、長くはないので気づかなかった。

「何だ…。それは？」

「相手の位置を探し当てる検索機…みたいなものかな？」

「なに…？」

「君は私のドールを見てこう思ったんじゃないのか？この大砲的なもので攻撃してくるんじゃないかと」

「違うのか？」

「以前なら合っていた。だが今は違う」

「…どういう、意味だ？」

「この大砲は今ではただのおもちやだ。鈍器としては役にたつかもしれないけどね」

腕に着いていた大砲がマクアドルの手を離れ、落ちていく。

「私は教師だからね。君が分かるまで教えてあげよう。私のドールの能力について。あの大砲は一つ前の戦いで使ったものだ」

「…？」

「ヒントをあげよう。あの大砲を使った時の相手は、動きが鈍く、耐久力がある相手だったよ。私の生徒なんだけどね」

「……。まさか!」

「分かったかい? 答え合わせだ。私のドールの能力は情報を集めてそれに対応した何かを作るといふものだ」

「そんな…ドールにそんな、ことが」

「ドールには意思がある。この子は私の目から得た情報をもとにそれに合ったものを作り上げる。もっとも、集団戦には向かないし、一度装備を解くと作った物はただの飾りになってしまふけどね」

「…」

「さらに作るのには時間がかかる。君との勝負だつてSバリアがなければおそらく無理な勝負だったね。強いんだか弱いんだかよく分からないドールだよ」

グリージョはまだ痛みを悶えている。

あまりの痛さに体を宙に浮かせていられないようだった。

「天才だったのが災いしたね」

「何…?」

「どうせ今まで大きな攻撃を体に受けたことがなかったんだらう? そのせいで君は痛み



に対して耐性がない。レックス君を見てみなよ」

レックスはすでに立ち上がっていた。

多少痛むようでおぼつかなくも見えるが、立ち上がり臨戦態勢に入っている。

「君も一般人ならばおそろくまだ戦えたんだろうけどもう無理だろ？ 天才だからこそ手に入れられないものもあるんだよ」

「まだ、…戦え…る」

「今君は君が言うところの罪深い人に当たっていると思うんだけど、どうだい？」

「…」

「まあ、安心してよ。私は君を殺す気はない。しっかり情報を聞き出すつもりさ。だから黙って座っててもらえるかな？」

マクアドルが高度を下げてグリージョを確保しようとする。

「…るな」

「ん？」

しかし、おとなしく捕まる気はないようだ。

「ふざけるなああああ！」

「！」

グリージョの体が光り始める。

マクアドルにはそれが何を意味するのかすぐにわかった。

グリージョヨから離れ、レックスを掴み逃げる。

「先生！あいつは…!?!」

「すまないが交渉に命を懸けるつもりはない！あいつは自分の信念を貫き通すつもりだ  
！」

「どういう…?!」

「あいつは自爆するつもり——」

マクアドルがレックスに教えた直後、会場が爆発に包まれた。

## 矛と盾

「やつと起きた!」

見覚えのある景色が広がっていた。

目の前には水でできた人型の物体がいた。

「…おまえたち」

「悪いけど愚痴を聞いている暇はないわ。急いで起きて、みんなのもとに向かって」  
「でないと後悔する」

早く起きてほしいのならこの世界に連れてくる意味が分からない。

「なら早く起こせよ!」

「もちろんすぐ起こすわ。それとあなたにはいいものをあげる♪」

水でできているのにテヘツと舌を出したのが分かる。

「いいもの?」

「一気に5段階目上がる権利よ」

「…本当か?」

「ええ。でも条件があるの」

「それは？」

「…クロを連れて帰ってきて」

「…えっ？」

意外な条件だった。

「意外って顔してるわね」

「それはそうだろ。なんでお前らがクロのことを？」

「私たちはあなたと常に一緒なのよ？ 私たちはあなたの顔が曇ることを良しとしないわ」

「…」

「あなたはクロを疑いながらも、信用できずにいながらも、友達だと、親友だと思っていた。そんな人がいなくなった後、この戦いに勝ったってあなたの笑顔は戻ってこない」

「私たちは、そんなのは嫌」

「だから…お願い」

彼女（？）たちはリヨウが思っている以上にリヨウのことを思っていた。

「…ありがとう」

「これは取引。ありがとうなんて言われる筋合いはないわ。それより急ぎましょう。あとはお願いなね？」

「任せてくれ」

その強い意志がこもった声を聞き、ドールはリヨウをもとの世界へ返した。

「取引ね…」

「なによ？何か言いたいことでもあるの？」

「いえ、なにも」

「ちよつと、なによそれ！ここに出てきなさい！」

「今に出てこれる。リヨウが私たちを進化させれば。そして…、死ななければ」

—学生寮（女子）—

「くっ！」

「どうしたのよ!?!あたしを抑えるんじゃないの?」

「マーシャさん！」

「あなたの、相手は、私」

戦況は五分五分だ。

カーリヤとマーシヤではマーシヤがおかれているが、ピスとフィリアではフィリアが優勢だ。

「ただ足が進化しただけであたしに勝てるわけないでしょー！」

マーシヤのドールは3段階目だ。

マーシヤのバトルスタイルに合わせて足が特化されており、いろいろな機能が備わっている。

例えば

「アクセルー！」

ドールの足にアクセルがついた。

支給されるアクセルよりも長い時間使える上に、時間を過ぎてもSバリアのエネルギーを使えば延長ができる。

速さで近づき蹴りを加える。

止められるがマーシヤの攻撃はもともと数勝負である。

軽量化され、破壊力が上がった足で何度も攻撃をする。

「この程度で…あたしを殺せると思ってるのかあ!？」

しかし、カーリヤには通用しない。

カーリヤは正直面倒な相手だった。

「なんであたしがAコースに進んだと思ってるの？ピスは別だけど、戦う力があるからよ。あたしはネーム持ちじゃない。でも得意魔法はある。それは防御型肉体強化魔法よ！あんたのちまちました攻撃なんて通用しないの——」

セリフの途中でフィリアが攻撃を加える。

傷は少しも付いていない。

「——よ。セリフの途中で攻撃はひどいんじゃない？ていうかピスはどうしたのよ？」

「少し強くやってしまいました。命に別状はありません」

地面でのびていた。

「あのバカ……。だからBコースに行っておけと言ったのに」

「ピスさんは戦闘経験少ないんですか？」

「もともと戦うことが嫌いらしいのよ。それで今まで避けてきた結果がこれよ」

「いいことじゃない。戦いを望まないなんて。それに女の子らしいわよ」

「あたしたちは将棋で言うところの『歩』なの。表のままのね。表のままの歩は簡単に捨てられてしまうの。そんなのあたしは嫌だ。歩はほかの駒に変われなくても『と金』にはなれる。『金』と同等になれる」

「あなたがそういうなら私たちはあなたを倒して将棋のようにこちらの仲間に戻しま

す

「あたしは帝国側について、ようやくここまで来た。あと一步、あと一步であたしは『と金』になれるの。ここで引くわけにはいかないわ！」

炎の矢を出現させ、フィリアたちに向かって降り注がせる。

当たつてもエネルギーがある限り体に対して傷はできないが痛みはある。

そしてその矢の数が多かった。

「ホラホラホラア！このまま押し切るわよ！」

「なめてんじや…ないわよ！」

「マーシャさん！」

できる限り避けて確実な勝機を狙うフィリアに対して、マーシャは出たとこ勝負をする。

攻撃を受けながらも突っ込んだ。

そして自慢の足で攻撃する…が、

「何よ！何度やつても無駄よ！」

「それを決めるのはあなたじゃないわ！」

攻撃対象が再びマーシャのみに絞り込まれる。

この間フィリアは考える。



「(どうする？私とマーシャさんではマーシャさんの方が一撃の攻撃力は上。そのマーシャさんが少しも相手に攻撃を通せない。それじゃ私がどんなにやってもほとんど無意味。私にできることは……)」

考える。

そして結論は出た。

行動に移る。

リリアの元まで行くと、気絶しているのを確認しひよいと持ち運ぶ。

得意の速さでその場を離れた。

「ホラホラア。どうしたのよ？あたし、さつきから防御魔法以外使ってないわよ？」

「舌噛むわよ？」

「それもちゃんと守られてるからご安心を。それよりあなたって可哀想ねえ」

「何がよ？」

「フィリアちゃん、あの子あなたを置いて撤退したみたいじゃない。気絶していたお友

達も連れてね。意味わかる？」

「置いてけぼり食ったわねって言うの？」

「そんな甘ったるいもんじゃないわよ！あなたは捨てられたの。なんでだか分かる？あなたが『歩』だからよ！ただの雑魚捨てて行くなんて簡単だものね」

確かにフィリアは居なくなっていた、リリアと一緒に。  
でもどこに隠れたのかはわからない。

寮に戻ったのか、転移装置で逃げたのか、あるいはそれ以外か。

「もう終わりにしましょう。私はあなたに勝って『と金』になる！」

「さつきから将棋ネタばっかり使って……。いまいち理解できてないのよ。でも一つ言えば、私は負けないわ！」

「その状態でいつまで大口がたたけるのかしら」

マーシャは逃げていた。

もし、フィリアたちが逃げた方向が分かれば。

だが、今は分からない。

だから、そこで踏ん張るしかなかった。

だが、無理だ。

敵は絶対に破れない盾を持っている。

マーシャ一人では、無理な話だった。

「おい」

しかし、それは一人の場合だ。

第三者が来れば、人にもよるが状況は大きく好転する。

その人は6つある腕すべてに敵を抱え現れた。

その鋭い目つきと合わせれば見る人が見れば「死神」といつても間違いいではないのかもしれない。

「…誰よ、あんた」

「年上には敬意を払え。俺を知らないのか?」

「同学年以外知るわけないでしょ。何年生よ?」

「一年前卒業した、クレア・ランパードだ」

「…聞き覚えがないわね。対して強くないととっていいのかしら?」

「…お前と話すより赤毛と話したほうが早そうだな。おい、その赤毛!」

「は、はい! (赤毛?)」

「リリアはどこだ?」

「気絶していたので…安全な所に」

「気絶?なぜだ?」

「簡単に要約するとあいつが原因です」

カーリヤの方を指す。

それを聞くとクレアは手に持っていた敵をすべて離す。

殺気が半端じゃなかった。

「貴様…」

「な…なによ」

「人体の腱を切り、目玉をつぶし、四肢をはぎ、体の皮膚をできる限り薄くはいで、内臓を——」

「クレア先輩、もういいです！」

「——ともかく俺は貴様を許さない。永遠に残るトラウマを作ってやる」

「あなたが何をする気かは分からないけど、あたしに傷一つ付けられないのは確かだわ」  
クレアはカーリヤに向かっていく。

— 学生寮（女子寮内部） —

フィリアはリリアを抱えてここまで来た。

フィリアが思いついた秘策にはどうしてもフィリアが必要なのだ。

マーシヤには申し訳ないが今は耐えてもらおうしかない。

「フィリア！起きてください！」

揺らす。

だがか起きない。

フィリアは手段は選ばないといわんばかりにドールを解除し、往復ビンタを始めた。

フィリアの頬が腫れていくが起きない。

いい夢を見ているのかむしろ笑っているようにも見える。

「なんで夢を見るほど浅い眠りなのに起きないんですか!?早く起きてください！」

起こそうとして再び平手打ちの構えをした時、フィリアの目が開眼した。

覚めたというより開眼したのだ。

寝起きには見えないような程大きく目を開けている。

「フィリアさん！やつと起きましたね？」

「一体何が…？ここがどこだか分からないし、頬は痛いし、それに…」

「どうしたんですか？」

「…なんか寒気がしたわ」

「風邪ですか？」

「いえ、これは…危機感？」

本能とは恐ろしいものである。

「もしかしてマーシャさんの身になにか!？」

「マーシャがどうかしたの？」

「一人で戦ってるんです！ただ相手があまりにかたくて…。リリアさん、でもあなたの

ドールなら！」

「分かったわ。急ぎましょう。フィリア、連れて行ってちょうだい」

マーシャと同じくお姫様抱っここの形で持ち上げる。

「…さつきは気づきませんでしたけど、思ったより重いですね」

「あなたが男子だったら顔面に一発いいパンチが入ってたわよ」

「以後気を付けます…」

急いでマーシャのもとに向かう。

そう離れてはいないのですぐに着く。

しかし、リリアはそこに着くまで気づくことはなかった。

寒気が走った原因を。

—学生寮（女子）の庭—

「うおおおおおおお！」

クレアの容赦ない攻撃がカーリヤにぶつけられる。

ドールだけで見れば2段階目対5段階目なので勝つことは困難を極める。

しかし、カーリヤの顔は焦ることはなかった。

「どうしたの、そんなもの？先輩♪」

「赤毛エー！」

「はい！（赤毛？）」

カーリヤの体には傷一つついていなかった。

5段階目のクレアのドールでさえ、攻撃が通らないのだ。

マーシヤも応戦するが避けなくてもいい攻撃をする相手に対して気を張る必要なんてない。

「あんたは後よ、マーシヤ。まずは先輩さんを殺すわ」  
シヨツトガンを取り出す。

魔法を得意にしてるといつてもドールを展開しているので持つていてもおかしくはない。

クレアの頭を狙う。

「チー！」

急いで離れる。

そのまま回避行動に移る。

「今度は逃げ？悪いけどあたしは考えて魔法を使ってるの。この肉体強化魔法が切れるころにはもうすべて終わってるわ。ラブトリアを押し返したいなら時間はかけてられないわよ？」

「ラブトリア？…マクアドルが言ってたな。だが悪いが俺がここに来た目的は違う」

「ミューズデルを守りに来たんじゃないの？」

「俺はリリアを守りに来た。ミューズデルも残ってはほしいがなくなるならそれでもかまわない」

宙に浮いている腕のみをカーリヤに向かわせる。

それのみで攻撃をしたり拘束したりしようとするが遠隔操作はかなり難しい。



「あっそ。つまりあんたはレズビアンってやつなんだ？」

「男でも条件を満たせば好きになるがな」

「あたし、そういう人キモイと思うの。女子が女子を、男子が男子を好きになる。ないわ  
」

「前も言われたな。だが俺はお前に分かってもらおうなんて思っていない」

近づいて来た腕をショットガンで撃ち落とす。

一発に二発では落ちないがどんどんボロボロになっていく。

手詰まりなのはすでに自覚していた。

その場には見当たらないリリア。

いつそのこと後退して体制を立て直そうかと考え始めた時、クレアが何かを感じた。  
後ろからだ。

なにか、いいものが迫ってくる。

クレアはニヤツと笑う。

作戦が決まった。

「1, 2, 3, 4! 四肢!」

クレアが叫ぶと腕の動きが突然俊敏になる。

カーリヤにあるのはものすごい防御力のみ。

スピードや動体視力はあまりない。  
すぐに体を大の字で拘束する。

「先輩馬鹿ですかあ？あなたの攻撃はあたしには届かない。それなのにあたしを拘束してどうするんですかあ？もしかして、あたしに欲情でもしました？」

クレアはそれを鼻で笑う。

「お前みたいなのに欲情するほど俺は軽くない。まだあつちの赤毛を選ぶ」

「じゃあなんであたしを拘束するんですか？もしかして転移装置を使って逃げる時間確保？無駄ですよ。今あの転移装置はこっちから出るときに限り、作動しませんから」

「そんなことはしない。ただ、おまえを倒す秘策ができたからな」

「もしかしてやわらかい目玉でも狙うんですか？無理無理！今のあたしは目玉を狙っても、電磁砲で200%の力がないと貫くことはできません。今のあなたたちにその力はない！」

しかし、クレアの顔はいまだに笑ったままで「馬鹿だな」とも聞こえてくるような気がする。

その余裕が怒りを煽る。

「ざつきから笑って、何がおかしいのよ？」

「笑っているのか、俺？確かにうれしくはあるがな」

「どういう意味？」

「半年ほど一方通行だったんだ。好きな奴に会えたら嬉しいだろう——」

カーリヤにも分かるようにクレアが少し横に移動した。

「——リリア」

「任せてください、部長！」

リリアがドールを展開して構えていた。

ほかのドールとは違いとても大きい。

等身大サイズだった一段階目とは全然違い、ドールはリリアの体の3、4倍ほどまで大きくなっている。

また、肩には盾ともとらえられるような大きな長方形がついており耐久性に優れているように見える。

リリアは地面に座っていて片膝を立ててもう片方の足は内側に寝かせていた。

立てている足には大砲ともとらえられるような大きな銃が構えられていた。

「!？」

「あなたがどんなに優れているかはわからないけど、私だって攻撃力のみには優れているの！負けないわ！」

「やれ！リリア！」

銃口から大きな弾が飛び出し、カーリヤに命中する。

カーリヤを拘束しているクレアの腕もただでは済まない。

しかし、…カーリヤはまだ全然動けた。

「はっ！確かに攻撃力はすごいみたいだけどあたしの盾は破れなかったようね！見なさい、あたしはちよつとしたやけどだけよ？」

「なら…」

リリアは再び銃を構える。

「更に威力が高い弾を使うだけよ！」

「…えっ？」

意味が分からないカーリヤだったがすぐに理解できた。

再び銃口から弾飛び出てカーリヤに当たり爆発する。

「まだまだ、リリア！俺の腕が吹き飛ぶまで撃ち続ける！俺が支える！」

「はい！けど、部長。私の胸を揉みながら支えるのはやめてください」  
揉んでくるくせに、支えてはいる。

器用な人である。

それから撃ち続け、9発目にしてカーリヤはついに力尽きた。

クレアの腕も壊れぐったりしたカーリヤが落ちた。

「やったの？」

「やったわ。私たちの勝利よ！」

「じゃあ、早くランたちのところに行かないと……」

立ち上がろうとするリリアをマーシヤが制止する。

「駄目よ！あなた、今弾を撃ちすぎよ？」

「殺さないために加減したのよ。まだいけるわ」

「でもあなたはもう戦えない。ドールが良くてもあなたの体は悲鳴を上げてるはずよ？」

「赤毛の言う通りだ。それに使い魔なら心配ない。あいつらの中には非戦闘員は居ないからな。それに今年はリヨウの使い魔もいる」

たしかにノテイスがいるのは心強い。

あれだけの使い魔はなかなか存在しないし、居たとしても軍人がほとんどだ。

完璧には納得していないようだが、リリアは頷く。

「じゃ、私は行くわ」

「でもあなただって…」

「まだ雑魚を相手するくらいのはあるわ。雑魚がどれくらい力を持っているかは知らないけど」

「でも…」

「それに、居ても立ってもいられない人もいるみたいだしね」

フィリアはカーリヤの服の中を探っている。

転移装置を起動させたいようだ。

「なにそんなに焦ってるのかしら？スノーのこと？」

「スノーは大丈夫って言いきってるわ。冷たいととらえるか信頼しているととらえるかは任せるけど好きな人の所に行きたいんじゃないの？」

「ああ。なるほどね」

「みなさん！転移装置起動できました！行きましよう！」

叫びながら3人の方を見て、マーシャとリリアがニヤついているのに気づく。

「…なんですか、2人とも」

「いや、恋する乙女はすごいなあと思ってね」

「成功したら教えなさいよ。記事にするから！」

フィリアは顔を真っ赤にして震え始める。

「な！ななな、何言ってるんですか!?!別にケイトさんはそんなんじゃないよ！」

「誰もケイトとは言っていないわよ？」

「あ…」

「いいじゃない。別に悪いことじゃないんだから。それにバレバレよ？」

「えええ!?!2人とも気づいてたんですか？」

「2年の秋あたりから、こりや間違いないと思ってたわ」

「ううう…」

「いいからさつきと行きなさい。何言っても私たちは分かっているから」

「それもそうね。じゃ、行くわよフィリア。愛しのケイトの所へ」

「ケイトさんの前では絶対言わないで下さいよ!?!」

「じゃ、ほかの人には言うわ」

「それもやめてください！」

2人は転移装置に乗り目的地へ向かった。

「行っただな…」

「行っちゃいました…ね？」

ここでリリアはやってはいけない間違いに気づいた。

おそらくいま女子寮で意識があるのは2人、クレアとリリアのみ。

「さて、リリア。今の戦いをねぎらってやろう。寝つ転がれ。あおむけで」

「マッサージするならうつ伏せだと思えますが…」

「胸から順にほぐしてやる」

「要りません！疲れただけですから！」

「そうか。ならいい」

クレアが簡単に引き下がる。

しかし、その顔はまだ笑っていた。

「なら、マッサージの後にしようと思ったんだが…。弁償について話そうか」

「べ、弁償?!」

「俺の4本の腕、見事に粉々にしたな?」

クレアの腕の破片がそこらじゅうに散らかっている。

形こそ残っているものもあるが修理で治せるレベルではない。

「い、いや。あれは不可抗力で…!っていか部長も」

「安心しろ。お前が求めてこない限り、貞操は守ってやる」

「いや、そういう問題じゃ…!いや、いやあああああああああ!」



リリアの戦いが再び始まった。

## 天使と悪魔

—魔法の会場4—

シユールレスとアルゴラは戦っている。

ただ、ここの戦いは少し他とは異質になっていた。

何が異質なのか？

この戦いにはあるものがところどころ欠けていたのだ。

「オラァー！」

鎖状の紐を作り出し、アルゴラを拘束しようとする。

アルゴラは水の盾を作り出し、鎖を受け止める。

水の盾は鎖を受け止めると、水の玉となりシユールレスに向かう。

それをての一振りですべて吹き飛ばす。

するとアルゴラの姿が消えている。

全体を見渡す…がない。

「ちっ…どこいった…？」

探していると背中が熱くなるのに気づく。

急いでその場を離れる。

その直後、さつきまでいたところには炎の渦が出現する。

「あぶねえ…な!？」

シューレスが水の中に包み込まれる。

このままでは溺れてしまうがシューレスはいたって冷静だった。

すぐに氷魔法を唱え、水を凍らせ内側から碎き脱出する。

アルゴラが脱出したシューレスを待っていた。

「思ったよりやるな、ヒヒっ!もう死んでいてもおかしくはないのに」

「俺はお前に負けないのに死んでるわけないだろ?」

「ところで、私のネームであるR、どういう意味か分かったかい?」

「おおかた、な」

「ヒッ!なら教えてもらおうか?」

耳を指で指しながら答える。

「音を消すことができる、だろ?」

「ヒヒヒッ!いいよいいよ!正解だねえ。ヒッ!」

「これくらい誰でもわかるだろ。音が聞こえなくなればすぐだ」

「私がこの能力を使えば、相手はたいていすぐ死ぬのでね。ヒヒっ!訳も分からず」

「同情するぜ。今までの奴らに」

「あいつらの何が起きたか分からないという困惑した表情、見るだけで気分がよくなつたもんだよ」

「残念ながら俺はそんな顔はしねえよ」

「させてみせるよ、ヒヒっ！そいつが死に際に見せた顔と同じ顔になア！」

アルゴラの体に電流が走るが、音はない。

そいつとは、この会場にただ一人転がっている生徒の死体だった。

「…。あいつを今そっちに送る。だから待つてろ」

死んでいる人のことはよく知らない。

同じ学年の人ということだけだ。

それでも、彼は怒りに満ちていた。

彼ができる唯一のこと。

それは仇討ち。

死体を見てそれをささやき、シユールスも本気を出す。

少しだけ。

「ヒヤハアアアアア！」

電流があらゆるところから迫ってくる。

シューレスは水の塊を出現させ、その電流の動きを止める。

電気を通ししやすい水（純粋な水は通しません）は電流の向きを無理矢理変更する。電流をたつぷり吸った水の塊をアルゴラに投げつける。

「ヒヒッ！ なかなかおもしろい大道芸だねえ！」

アルゴラが自分の目の前に一つの火の玉を出現させる。

火の玉が爆発した。

水の玉がすべて蒸発していく。

爆発が終わわり、アルゴラがいたところを見るとすでにいない。

姿も見当たらないのはどんな小細工を施しているのか…。

攻撃の音が聞こえないというのはとても大変なことだ。

魔法には一人一個ずつしか唱えられないなんていう決まりはない。

馬鹿正直に音が聞こえたところの攻撃のみに対処しては不意打ちを食らうのがオチだ。

「早く困惑した顔を見せてくれ。ヒヒッ！」

どこからか分からない声でしゃべる。

周りに空気のできた刃のようなものが出現する。

丁寧の色付けされていた。

その刃がシューレスを襲う。

「この程度で焦るほど俺は安くない」

背中から翼のようなものが生えてくる。

天使に生えていそうな形をしているが色は白ではなく汚れた灰色。

自分の体をそれで包みすべての刃を防ぐ。

「まさか…その年で天使の装備術式にも目を通したのか!？」

天使の装備術式。

文字通り、天国に存在するといわれる天使の力を借りる術式。

肉体強化魔法のパワーアップバージョンといっても間違いではない。

が、この魔法の場合、人によって効力が変わる。

理由は不明となっているが、ある人が使えば使えなかった魔法ができるようになった

り、またある人は肉体が強化されたり、またある人はその間だけ不死身になったり。

高低差はあるが成功すれば必ず術者に恩恵をもたらす魔法だ。

天使の装備魔法とも呼ばれるこれは誰でもできる代物ではない。

だが、できない人が多いというわけでもない。

今では、天使という明確な存在から力をもらっているのだから4神のように召喚できるのでは?と考えられているがうまくいっていない。

「ほとんどの魔法には目は通してるぜ？こう見えても努力家なんだな」  
「ヒッ！ヒッ！これは素晴らしいな。ヒッ！」

「素晴らしい？ネーム持ちならだれでもできるだろ。お前らの年なら」

「どうやら私は天使に認められなかったらしくてね？ヒッ！できなかつたんだよ」  
「確かに無理そうだな。自業自得だ」

「だが、悪魔の方は成功している。生け贄に死体が必要なんだけどね」  
シューレスが顔をしかめる。

理由は、それが禁術の一種だからだ。

禁術とは文字通り使つてはいけない魔法。

理由は様々だが、すべてに言えることは危険極まりないということ。  
その中の一つである悪魔の装備術式。

これも天使とほとんど効果は一緒なのだが違うところが3つある。  
一つは恩恵のケタが天使よりもすごいということ。

これにも高低差はあるが、確認された例では触れただけで人を殺せるという並外れた力を手にした人もいるという。

そしてもう一つは生け贄。

悪魔は生け贄を要求する。

軽いものでは髪の毛を一本というものもあるが、ひどいものは死体を要求し、更にその死体に条件を付けたりする。

そして最後に、何が起きるか分からないということ。

死体という代償を払ったのに術者におおきな負担をかけることがある。

あまりにも危ないと、特例を除いて行使することは一切許されなくなってしまった。

ミューズデルでは（それと同盟国）。

帝国の方ではどうか分からないがおそらく容認されているのだろう。

「外道め……」

「よく言われるがね。ヒヒッ！私の国では使えるものは何でも使うっていう方針なんだよ」

「それを外道っていうんだよ。何事にも限度つてもものがある」

「なぜおまえがその限度を決める？」

突然の問いに意味が理解できなかった。

アルゴラがシューレスの視界に入る。

「……どういう意味だ？」

「そのまんまだ。お前は私のことを外道といった。そして限度があると。つまり私がその限度とやらを越している。そういうことだろ？」



「違うのか?」

「ああ。間違いなくおかしいな」

アルゴラの体は全身黒でおおわれていたが細いということは分かった。

魔法側の人では別に珍しいことではない。

だが、今はその体と服、そして口調によってかなり不気味に感じられた。

「このミューズデルで育った奴らはみんなこうだ。『人は殺してはならない』『人を傷付けてはならない』『人を陥れてはならない』。これを当たり前と思っている」

「何か間違いでもあるか?」

「ああ。間違いだらけだ。この決まりは人の進化を阻害している」

「こういう話はあまり好きじゃないんだけどな」

「ヒツ! まあ、聞けよ。まず一つ訊こう。なんでお前は『人を殺してはならない』ということに賛同している?」

「…」

黙ってしまった。

当たり前すぎた質問に答える方法が見つからないからだ。

「当然のことだろ。そう思ったか?」

「…当たり前前だ。俺だって戦いは好きだ。だが人を殺すということとはできる限り避けた

い。お前は殺すがな」

「私は例外、か。まあそこは後にしよう。なぜ人を殺してはいけないということが当たり前なのだ？」

「…」

「殺すと二度とその人に会えないから、悲しいねえ。殺すと憎しみが生まれるから、くもない。ほかにも理由はあるだろうが私はこれらの答えは本当の答えを隠しているだけにしか見えない」

「本当の答え？」

「自分が死にたくない、だよ」

確信をついた答えだった。

「人はどんな御託を並べても最終的には自分がかわいい」

「自分よりも大切なものがあるっていうやつもいるぜ？恋人とか」

「あれはきれいごとだ。漫画には、妄想の世界にはいるだろね、子供が大切だ、家族が大切だ、恋人が大切だっていう奴らは。だがそれらは非現実的な話だ。いくらでも作れる」

「人を殺す、殺さないだのの話からそれてるような気がするぜ？」

「おっと、私としたことが。ヒッ！まあ、つまりそういうことだ」

「わけわかんねえよ…」

「すまないね。どうも人に説明をするのが苦手なんでね。一番最初の話題は何だったかな？」

「外道かどうかだろ」

「結論のみ言うよ。人を殺すことは別に悪いことじゃない。犠牲はつきものは外道じゃないんだよ。ツヒヒヒ！」

禍々しいオーラがアルゴラを包み始める。

それと同時に転がっていた生徒の死体も同じようなオーラに包まれる。

包み込むというよりは巻き付くかのように、しみ込んでいくかのように。

一体化してゆく。

目に見えて分かるように体から黒い何かがあふれ出ている。

生徒は服と腕輪を残して消えていなくなっていた。

「…こんなのがあるから魔法が科学に難癖つけられるんだよな…」

「ヒッ！ヒヒッ！気分がいい…。コロ…せる」

首がかくかくと動いている。

なんだか気味が悪い。

「そんなに気持ち悪くなるもんなのか、その魔法は？」

「気持ち悪い？ヒッ！こんなな気分がいいのだ、そんなのどうでもいいなあ!!」  
黒い龍のようなものがシューレスに襲い掛かる。

全部で3体。

意思があるのか分からないが追尾性を備えていた。

「本当に悪魔のような攻撃だなあ？」

「これを発動している時しか使えないのでね。ヒッ！ヒッ！」

「なら俺は天使らしい攻撃をしないと！」

光の棒を作り出す。

刀や槍のような形はしておらず本当に棒だ。

3体をすべてそれで捌く。

相手は確かに強いがただの理性のない怪物に過ぎない。

棒が一本あれば事足りる。

「なんで、ヒッ！死な、ナイの？」

「これで俺を殺せると思っていたなら大したもんだよ、お前は」

アルゴラの様子がおかしくなっている。

シューレスはこれに気づいていた。

強力な術なのだ。

もともと何かを犠牲に使役する術。

体が耐え切れなければ表に被害が出てくる。

中身がどうなっているのかはあまり想像したくない。

「やはり…子、ドモ…だな。ヒッ！」

「なに？」

「この、力をアマ、ク、見るナあ！」

突如後ろで大きな音がする。

後ろに4体目がいた。

気づくはあまりに遅く、避けるにもあまりに時間が足りなかった。

わざと気づかせたのだろう。

「(音を…消して!)」

嘯みついてきたので棒で抑え込む。

しかし、3体はこの機会を見逃さない。

同時に襲い掛かってくる。

4体が集まった瞬間、そこに火柱が立ちすべてを焼き払った。

「ヒヒッ！見レ、た！困惑した、カ…お見レタ！」

火柱が収まりそこに熱気のみが残る。

何も残っていない。

「ぐう……。ああ……。急……。がねば」

術を解除しもとに戻る。

ダメージが大きいらしく汗の量がものすごい。

しばらくの間宙で休む。

「ヒッ……ヒヒッ！ヒヒヒヒヒッ！さすがはネーム持ちだ、だが——」

仮面を外しそのげっそりとした顔があらわになる。

「お前みたいな餓鬼に俺が負けるわけな……い？」

突然下腹部に痛みが走る。

刺されていた。

ナイフで刺されているらしく銀色の刃が見える。

ところがそれを確認した直後、刃が消えていった。

何が起きたか分からず、ただ痛みに耐える。

「い、いつたい、何が……!？」

後ろを振り向くと一人の女が立っていた。

年は20代後半ぐらいで女なのに男用の執事服を着ている。

「て……んめえ！」

音を消すこともせず、ただ火の玉をそいつにあてる。

しかし、当たる前に火は消えてしまった。

少しづつ弱くなり、女の目の前で消えた。

「なっ!？」

「…」

女は興味をなくしたのか視線をアルゴラからそらし誰もいない場所に問いかける。

「…いつまで死んだふりをしているのですか？」

「…は？」

「私はまどろっこしいのが嫌いです。それは貴方様もご存知でしょう？」

「…俺の作戦の邪魔するなよ、メリー」

シューレスが女の見ている先に姿を現した。

無傷だ。

「なっ…、そんな?!」

「おっ、いい顔してるじゃねえか。それこそまさに困惑した顔だな。メリー」

「…五分だけです」

メリーの体が消えて鏡が置かれる。

「見えるか？自分の困惑した顔」

「あ…。ああ…」

「先に言っておくがタネは教えないぜ。俺は秘密が多い人間なんだよ。でも一つだけ、さっきのは俺のネームの能力だ」

「…」

さっきまでの異様な感じは一切なくなっていた。

何も感じられない。

「さて、俺は今からお前を殺す。が、一つ訊きたい。なんでお前らは俺の学年を狙った？」

「…」

「6年生は最初の爆発である程度仕留めたんだろ？なら次に狙うべきは5年生だ。なのにおそらくそちらに強い人員はほとんど回していないだろ？1年の時の事件を考えれば恐らくそうだろうと思う。現に近くの5年の会場からは対して強い力を感じない。なぜだ？」

「…」

Rは黙ったままだ。

この状態の敵は逆に怖い。

何をしでかすか分かったものではない。



「…」

「我が主、時間です」

「分かった。後で捕まえた捕虜にでも訊くとするか」

シューレスは迷わず大きな、高温の火の玉を作り出す。

もともと魔法は適当に作った物でも人を殺すことはできる。

それを更に強くし死を確実にする。

「地獄で泣きわめけ」

火の玉を投げつけた。

しかし、それは当たることがなかった。

あたる前に火の玉が消える。

そして次の瞬間、Rが千切りされ命を絶った。

## 恐怖の理由

「…よし、治った!」

「じゃ、もういつちよやりますか!」

その人は再び敵の中に戻っていく。

今ケイトたちはある建物の中を拠点にして戦っている。

移動しながら、生存者を救いながら、仲間を増やしながらかこまで来た。

こういう時にケイトの能力は役に立つ。

「ケイト! 次きたで?」

「またあ? 休みたいなあ…」

ケイトはネーム持ちだ。

それも治癒魔法を得意とするネームだ。

彼は戦闘には加わらず、生存者の、戦って大きなダメージを負った人の治癒をしている。

クリティウス姉妹を下したのは事実なのだが、もしものことを考えて戦線からは下げたのだ。

「マリク、君も回復魔法手伝ってよ」

「無理言うな。俺には無理やて」

「それなら俺を戦線に参加させてよ。あれくらい、本気をだせば1分で終わるよ」

「お前の本気がどのくらいか分からん以上、それも無理」

クリティウス姉妹を下したといったが実はそれをリアルタイムで見っていた人は審判とネーム持ちのみだ。

他の人は話しか聞いておらず、どんな力を駆使してクリティウス姉妹を倒したのかわからない。

ネーム持ちはみんな話したがらないし、審判だった人は「あまり聞かないほうが…」と  
いって話してはくれなかった。

だから彼ら以外は誰も知らないのだ。

どうやってケイトは勝ったのか。

「それは…ちよつとね」

「ええやないか。教えてくれたって」

「いや、かなり趣味が悪いことしてるからね…」

「あいつらを口説いたりしたのか？」

「それは逆にやばい」

こんな会話を交えながら負傷者を治癒する。  
それほど余裕があるのだ。

永遠に回復できて、勝てると分かっていたら勢いもつく。

士気も上がっておりいけるだろう誰もが思っていた。

ところが突然異様なことが起きる。

突然何かが割れる音がした。

耳がぶんざくような高い音。

それは

「ええっ!?!なに?」

「ガラスが、割れた?」

建物のガラスが突然すべて割れる。

しかし別に爆発が起きたわけでもないし、攻撃を受けた形跡もない。

壊れた窓ガラスから外の景色がよく見えた。

一人、雰囲気が違う人がいる。

見た目は同じく体を黒で覆っているが、確かに何かが違う。

「なんだ、あいつ」

「いやな感じしかせえへんな」

雰囲気が違う人がしゃべる。

「ここに、ネーム持ちはいるか？」

ケイトを探しているのか、または誰でもいいのか分からない。

「いった——」

突然マリクがケイトの口をふさぐ。

「やめろ。出方を見るで」

相手は幸い気づいていない。

外での戦いは一時中断されていた。

「…いないのか？」

問いかけてくる。

大半の人がケイトがネーム持ちだと分かってはいるが、下手にしゃべろうとはしない。  
と、一人の戦闘中だった生徒が動いた。

殴ろうと近づくと。

よける時間などないように見えた。

そして敵はよけることはできなかつた。

いや、よけなかった。

そして拳をそいつにあてた瞬間、ありえないことが起きた。ドールの腕が壊れたのだ。

「なっ!？」

相手が何かしたようには見えない。

すると相手は近づいてきた腕にデコピンをした。

何も魔法がかかっていないただのデコピン。

しかし、それを受けた生徒の右腕は見事に吹っ飛んだ。

地面に腕が転がる。

「うわああああああ!」

そこにいた誰もが何が起きたか分からなかった。

「な、なにしたんや…」

誰もが思う疑問だ。

何が起きたか分からない。

「もう一度問う。ここにネーム持ちはいるのか？」

考えている暇はなかった。

ここでケイトが名乗り出なければおそらく全員殺される。

「貴方の名前を聞かせてくれたらいいですよ」

「ケイト！」

ケイトの方を見る黒ずくめ。

「…ケイト・N・フェニーチェ。ようやく名乗り出たわね」

「知っていたのならそういう意地悪やめてくれよ。それより貴方の名前は何ですか？」

「顔を見ればわかるわ」

仮面を取り顔を見せる。

「…お前は」

「一応名乗りましょう。ラブ・フリミレスです。まあ仮の名ですが」

フリミレス。

少なくとも4年生で知らない人はいない。

親睦会で毎年クロと組み優勝している。

「仮の名？」

「ええ。本当の名前はラブ・L・フリミレス」

「ネーム…持ち!?!」

驚きを隠せない。

一つの学年に4人ネーム持ちがいるだけでもすごいことなのだ。

誰も5人目なんて考えもしなかった。

「5人目がいたのかと驚いてますね？」

「当たり前だろ」

「実を言うともう一人いますよ。ネーム持ち」

「まだ、敵が俺たちの学年に!？」

「ええ。名前はクロツエフ・アリアジート」

また身近にいた。

ケイトはこいつは嘘を言っているのでは?と思ってしまう。

「ちなみに彼はOです」

「いまいち信用ならないんだけど…」

「別に構わないわ。どうせあなたはここで——」

ケイトがいち早く気づき、マリクを奥のほうへ投げ飛ばす。

「——死ぬんだから!」

ケイトに向かって謎の光る球体が向かってくる。

並のスピードではあったが避けるのが少し遅かった。

左半身に直撃する。

が、しかし



「なんとも…ない?」

何も起きない。

爆発するわけでもなく、色がつくわけでもなく、本当に何も起きない。

「…。マリク! とりあえず民間人を奥のほうへ。うまくやれたら安全な所へ逃がして!」

「お前は?!」

「こいつとやりあう。まだ戦っている人もいるのに見殺しにはできない」

「でもお前は回復専門やないか!」

「大丈夫! 本気を出すから」

本気を出すから。

そこだけ静かに言った。

マリクにはそれがどういう意味か分からない。

ただ聞こえずらくなっただけだ。

だが、今は信じるしかなかった。

「…。分かった! 絶対死ぬなよ!」

それだけ言うとは戦闘員をまとめながら移動を始めた。

「ありがとう」

「終わりました？お別れの挨拶」

ラブの方を向く。

「なんでそんなことしなくちゃいけないの？」

「貴方が二度と口をきけなくなるからよ。まあ、あの人もあの世に逝けば話は別だけど」

ラブ・フリミレス。

ケイトが知っている彼女はおとなしく、とくに目立ったことはしない女子だ。

よくいる茶髪に長い髪の毛。

人気があるわけでもなく、しかし煙たがられているわけでもない普通な人だ。

「一応聞くけどなんでこんなことを？」

「こんなこと？」

「なんでミューズデルを襲っているのかっていうことです」

「簡単よ。私が帝国出身でその兵士で上官が襲えと言ったから」

単純な理由だった。

「…そこまで単純だと何も言えないなあ」

「私を論すつもりなの？こんなことはよくないって」

「そのつもりでした」

「無意味」

「それは今わかりましたよ。だから力でねじ伏せます」

「普段の貴方からはめったに聞けない言葉ね」

「これでも物分かりはいいほうなんですよ。例えば話し合いなんて意味はないと思ってるし」

「理由を聞こうかしら」

「話し合いって言うのはそれぞれが自分の思惑を言う場です。同じならばすぐ進むけど、少しでも違えば止まる。そして意見が違うって言うのはそれぞれの利益の在り方が違うことを意味する」

「フムフム」

「あとはどちらが妥協するのが焦点になる。でもだれでも儲かりたいでしょ？」

「だから力でねじ伏せるのがいいと？」

「そういうこと」

フリミレスが笑った。

大笑いした。

「そんなにおかしいですか？」

「いや、間違っではないと思う。だがそれは悪役の意見ね」

「否定はできませんね」

「簡単に認めた。貴方って本当に変わってるわね」

「そう？」

「紳士と言うべきか、変人と言うべきか……」

「紳士に一票」

「まあどうでもいいのだけど。どうせ殺すし！」

フリミレスがケイトに接近する。

ケイトはもともと回復を得意とする。

それにあまり戦闘は好まない。

だからどちらかというと衛生兵に近いのだ。

そんな奴が戦闘を専門とする兵士と戦ったらどうなるか、結果は明白。

フリミレスはケイトの懐に入りパンチを入れてきた。

さつき謎の攻撃を受けた左のほうに。

なんとなく予想はできたので右手の方で攻撃をカバーする。

「ぐっ……」

激痛が走るが慣れっこだ。

ケイトは炎の盾を作り出す。

それをフリミレスに振り下ろす。

もちろん簡単に避けられた。

10mほど離れると鉄の槍を作り出しケイトに投げる。

一本ではなく無数にあった。

盾を大きくしすべてそれで防ぐ。

「何よその盾、やけに便利ね」

「衛生兵ですから。盾は得意にしておかないと」

「ならこれは？」

水の槍を作り出し、投げつける。

これには対応を変え、水の盾に変更する。

盾に当たると盾と同化し攻撃は止まる。

水ならば。

そこに氷の槍が含まれていた。

それは止められない。

気づいた時には左腕に当たっていた。

そして左腕が吹っ飛び、左の脇腹が少しえぐれる。

「あああああああ！ぐ…」

「どう？私の能力」

「これは…いつたい？」

「教えてあげるわ。わたしの能力は自分の魔力を当てた対象を脆弱にすること」

「脆弱…」

「そう。だから窓ガラスは脆弱になり空気の振動で壊れ、さっきの生徒の腕はデコピンで吹っ飛び、貴方の脇腹は槍が通り抜ける風圧でえぐれた。だけど…」

「なん…ですか？」

「貴方にはあまり意味ないのかもね。回復できるんでしょ？」

ケイトはえぐれたわき腹と腕の当たりに手をかざす。

すると腕は再生し、わき腹が治った。

「さすがは回復を得意とするネーム持ちね。でも守ってばかりじゃ意味ないわよ？」  
「やってみなきゃ分からないですよ」

フィリアは急いでいた。

マーシャとは途中で別れた。

彼女は使い魔が集まっている所へ行くと言った。

先ほどマリクが率いる集団に会い、護衛をして安全な場所に連れて行ったあと、ケイトの居場所を聞いた。

ケイトはネーム持ちだ。

それは知っている。

だが、胸騒ぎがした。

付き合っているわけでもない。

ケイトが誰を好きなのか知っているわけでもない。  
でも心配だった。

初めてできた好きな人だから。

そこに行っただってむしろ邪魔になるかもしれない。

それでも会いたかった。

「ケイトさん……。死なないで」

彼女はただ急いだ。

「…貴方、本当にあのクリティウス姉妹を倒したの？」

「嘘はついてないよ」

「となると買収でもしたのかしら？とても勝てたようには思えないのだけど」

ケイトとフリミレス。

圧倒的にケイトは押されていた。

とても勝てるようには見えない。

でもケイトは逃げなかった。

「…ここまで差があるなら普通は逃げたいんだけど」

「なら、逃げればいいじゃない。追いかけるけど」

「仲間が戦ってるんだ。ここで引くわけにはいかないですよ」

治癒魔法を行いながらしゃべる。

「英雄にでもなったつもり？」

「そんなんじゃないですよ。仲間はずれになるのが怖いたただの臆病者です」

本心だ。



自分が英雄になんてなれるわけない。

「それにこんな呪われた力……。こんなものを持った人は英雄になんてなれませんよ」

「呪われた力？」

「ネームのことです。周りは選ばれた者に与えられる力なんて言ってもてはやしてまっすけど、僕にはとてもそういう風には思えない」

「悲観的な意見ね」

「もともとひねくれ者なんです。唯一の救いは特化していたのが回復呪文だったことですかね」

「嫌なら……さっさと死になさい！」

ものすごい風が、ケイトを襲う。

本来ならば、ただ風が来るだけで何も起きない。

だがケイトの体は避けきれなかったフリミレスの魔法にあたり脆弱になっている。

ちぎれた腕を再生した場合、その腕の脆弱さはなくなっているがフリミレスは常に攻撃をしてくる。

さらにその魔法に脆弱にする魔法を乗つけるもんだからちよつとした火の粉が当たっただけでその部分が脆弱になってしまっす。

体のあらゆる部分がえぐれていく。

この瞬間を狙い、フリミレスは突進する。

回復できるとはいえ、痛みに悶えているケイトは盾を作れる集中力は残っていない。あつという間に目の前に来た。

「ぐ……」

「ごめんなさいね。私今まで戦ってきた相手はすぐに死んじやったからこんな風に悶えている間に接近するなんていうことしてこなかったの。だからこれを考えるのに少し時間がかかってしまった」

「謝るくらいなら……その手を、どけて、ください」

手はケイトの心臓の上に置いてある。

「……正直、私は貴方を尊敬するわ。こんなに何度も痛い思いをしたのに、退くことはなかった」

そこらじゅうにケイトの肉片が散らばっている。

何度も回復しては攻撃を受けてを繰り返したのだ。

「それ以上に……恐怖しなかったことに敬意を示すわ」

ケイトがその言葉に反応する。

「恐……怖？」

「貴方、私にかなわないうってというのは気づいていたはずよ。かなわない相手と戦って

待っているものは何か？それくらい貴方も知ってるでしょ？」

ケイトは黙って聞いている。

『死』よ。私が戦ってきた相手は8割がたがすぐ死んだからそんな顔すらできなかつた。でも集団で来ると少しは時間がかかるの。最後のほうになるとみんな必死な顔で懇願してきたわ。『殺さないで』って。なのに貴方は懇願しないどころか、そんな顔すら見せなかった。大したもんよ」

「買い、被りすぎ、ですよ。俺だって、死にたく、は、ない」

「今もそう。口では言ってるけど顔はそう言っていない。不思議な奴だったわよ、貴方は」

ケイトの体に穴が開いた。

心臓のあたりに直径10cmほどの穴。

ケイトの意識がとぶ。

フリミレスはただ少し胸を押しただけだった。

それだけでケイトの体を貫くには十分だった。

ケイトが力なく地面に落ちて行った。

心臓をえぐられた生物の生死なんて確認する必要はない。

ネーム持ちの戦いを片手間で見ていた生徒と兵士たちに変化が始まる。

自分のリーダーを失った生徒は逃げはじめ、敵は士気をあげた。

生徒たちが逃げ始めると残っている者がどんどん殺されていく。

逃げようとした者も背中を見せるため殺されていく。

戦争は一気に虐殺へと変わった。

「……」までね」

ここはあいつらに任せ、移動しよう。

そういえばRの魔力が消えてたな、とふと思う。

そう思い移動を始めたそのとき、予想外のことが起こる。

それは、爆発。

自分の手下の所。

そして――

——フリミレスの右腕に。

「……………え？」

小規模な爆発。

自分の体全体を吹き飛ばすには脆弱すぎるが、腕一本ならば問題ないほどの威力。目の前で自分の腕が血と一緒に踊っていた。

最初に起きたのは疑問。

そのあとに激痛がやってくる。

「うわあああああああー！」

あまりの痛さに地面に落ちる。

痛かった。

「(痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイ!?)」

それ以外考えられない。

彼女は帝国でも訓練はしていた。

体を切られ、あばら骨を折られ、足がおかしな方向へ曲がったことだっただけであった。

だが、その痛みの比ではない。

「ごめんね、やけどもあつて痛いよね」

声が聞こえた。

ありえない人の声だ。

殺したはずの。

恐る恐る、声のした方を見る。

「…なんで!?!」

ケイトが立っている。

血まみれではあるが、胸の穴はふさがって、首の骨も治っている。

首の調子を確かめているのかグルグルと首を回している。

「…だから本気は出したくなかったんだよ」

「な…:に?」

「僕が本気を出すっていうのはこういうこと。僕のネームは回復に特化している。だから生き返った」

「もはや回復の領域ではないじゃない…!」

「…少し昔話をしましょうか」

「あゝ。」

「貴方が思い出させたんですよ。本当に短いですから。僕には想ってる人がいます。3年程前かなあ? その頃はそんな特別には思っていなかったんですけどね、肝試しをやったんです。その時その人と組んでいったんですけどね、彼女はものすごい怖がりらしく

て悲鳴をあげまくったんですよ。そりゃ、もうたくさん」

「…」

「その時僕は全然驚かなかったんですよ。だから訊かれたんです。『どうして驚かないのか』って。あの子には教えたくないのだから答えませんでしたが、理由は簡単。僕は不死身だからです」

「なっ…!? そんなバカな!」

「いや、実は死ぬこともできません。ですがおそらく誰もそれはできないので俺は不死身なんです。貴方はさっき言いましたね、『恐怖をしなかったことに敬意を示す』と。恐怖しないのは当然なんです。僕は死なないから」

フリミレスは訳が分からなかった。

自分より強いネーム持ちはたくさんいる。

だが、絶対に死なないネーム?

「嘘だ!」

「いいえ、少なくとも今は不死身です。それに本当の不死身であるネームだって——」

「黙れ! 私がお前を殺してやるよ」

左手をかざし何か唱えようとするが

「分からない人ですね」

左腕が爆発した。

今度は理解が早かった。

「あああああああああああ！」

「僕はクリティウス姉妹に勝ってるんです。ならどうやって勝ったのか。答えはこれです」

そこらへんに落ちている肉塊を持ち上げる。

「僕は攻撃魔法が苦手です。すべて、ですから苦手でも大きな威力が出せる呪文を頑張った。それは——」

肉塊を宙に投げる。

するとそれが爆発した。

「——自爆魔法です」

フリミレスは黙ったままで、ケイトからは聞いているのかわからない。

「クリティウス姉妹にはこれを駆使して勝ちました。なぞは解けましたか？近づいて僕の体をえぐった時点で勝ち負けは決まってたんですよ」

体の調子が戻ったのか腕を回して頷く。

敵の腕を2本腕いだ以上、さほど注意する必要はない。

余裕から堂々と近づいていく。



「諦めてください、今ならまだ……?」

フリミレスは気絶していた。

あまりの痛みに耐えきれなかったのだろう。

ケイトの緊張の糸が一気に切れその場に崩れる。

フリミレスが死なないうよう、腕は生やさないが出血を止める。

「はあああああ〜」

自分の戦いは終わった。

思いつきり息を吹き出し、寝っ転がる。

「(この場面にあの子が来てくれたら最高なんだけどねえ……)」

そんなことを思っていると声がした。

フィリアだ。

ケイトは呆然とする。

「ケイトさん!大丈夫ですか!」

願いがかなってしまった。

「きゃあ!血だらけじゃないですか!だ、だ大丈夫なんですか!?!」

ケイトはこの時は神の存在を信じた。

フィリアが焦っている。

医療キッドなんて持っていないから、何もできないのだ。  
必要ないのだが。

焦っているのが面白いのと、来てくれたことへの嬉しさが重なる。

「ふっ、あはははははははははは！」

「えっ!?!なんで笑うんですか!?!」

「なんでだろうね。あはははははははははは！」

「ちよつと！ちゃんと説明してください！」

敵がいなくなり静かになった戦場に、ケイトの笑い声とフィリアの楽しそうな声のみが響いていた。

## 視覚と触覚

「…また一人、死んだ」

マスターと呼ばれる男はミューズデルのどこかにある基地でただ一人呟いた。

周りには部下もいるが戦力としては微妙なところだ。

「やはり、コロナを完成させるまで待たせるべきだったか」

目の前には一つの塊がある。

大きさは普通のリングほど、色は黒。

マスターはそれを手に取ると、自分の胸にあてる。

するとその塊はマスターの体に染み込んでいった。

「…」

痛みは感じない。

だが、快感があるわけでもない。

本当に何も感じなかった。

「…行くぞ」

「「はっー」」

部下に呼びかけ、その基地を後にした。

—魔法の会場4—

目の前で、アルゴラという男が粉々になる。

シューレスがやったわけではない。

だがメリーがやったわけでもない。

後ろに2人の男が立っていた。

「…何者だ、てめえら?」

礼儀正しく頭を下げながら一人があいさつをする。

「初めまして、ジーク・T・エリオスというものです」

「…」

もう一人は黙ったまんまだ。

一言でいえば屈強そうな男。

「俺はシューレス・D・ジルリア。こっちは使い魔のメリー」

「初めまして」

はた目から見ればただの社交辞令をしているようにしか見えない。

だが、殺気が漂っていた。

「単刀直入に訊く。あの肉塊を殺つたのはお前らか？」

「私ではなく、この人です。名前はロベル——」

「Aだ。本名なんて聞くだけ無意味だ」

「だそうです」

「そうか……。なら俺はお前を殺さないとな」

「なぜだ？ 殺人犯にならなくてよかったと喜ぶかと思っていたのだが」

「俺の獲物に手を出した。だからだ」

「なるほど」

手の骨を鳴らし、前へ出る。

「T。お前は邪魔だ、失せろ」

「私が最初に来たのにひどいですねえ」

「居たかつたらかまわないが、俺はお前が嫌いだ。隙あらば殺すぞ？」

「……分かりました。では、私は他をあたりましょう。ここでは私の能力も使えませんし」

それを言うとTはどこかへ行ってしまった。

「いいのか？せっかく2対2だったのに」

「さつきまで戦っていた奴が何を言っている？万全でもないネームなど俺の足元にも及ばない」

「魔力の保有量には自信があるんだぜ？」

「そんな資料は来ていない。魔力が多いのはケイトという男のみ。お前はシューレスと言ったな」

「あいつは例外だよ。まさに『魔力タンク』だぜ、あいつは」

「魔力は減ってる。そして子供。ネームといえども、使い魔いるといえどもただの雑魚だ」

「20過ぎてる俺を子供というのか…」

「学校の生徒でいる限りは…な」

突然シューレスたちの周りに竜巻があらわれる。

予備動作が見当たらず、完璧に出遅れてしまった。

目を細めながら感嘆する。

「…すげえな。突然こんなものが出せるのか？」

「俺は風魔法を得意とするネームだ。これくらいは造作もない」

「でもな、こっちにも風魔法を得意とする奴は要るんだぜ？なあ、メリー」

「ええ。そうです」

竜巻の間に不自然な穴が開く。

「なんで全部消さねえんだよ？」

「申し訳ありませんが無理です。あの方は風を得意とするネーム。私ごとき風の妖精程度ではこれが限界です」

「精霊と人だと精霊の方がすごいんじゃないのか？」

「私は妖精です。精霊ならばいけるかもしれませんが、そもそも精霊なんているんですか？」

「その分野はお前のほうが得意だろ…。お前が知らないようなこと俺は知らねえよ。

まあ、『私は精霊です！』っていうくそ強い使い魔だっているし、いるんじゃないか？」

一歩間違えれば死んでしまうこの状況でどうでもいいことを話している。

それほど余裕があるのだ。

「余裕だな…。俺ももう少し本気を出そう」

穴がふさがり始める。

「メリー！」

「…面倒ですね」

ふさがり始めた穴を人が動け動ける程度でぎりぎり止めた。

シューレスが穴から出ていく。

「よいしょー!」

穴が閉じる。

「女を一人置いていくとは…。最低だな」

「あいつはこの程度じゃ死なねえよ。それに——」

シューレスの横の空間が歪み始める。

「いつでも出てこれたみたいだしな」

メリーの姿が現れる。

「…どうやった?」

「私は風の妖精。体を空気にすればあれくらいいくらでも抜け出せます」

「面倒な妖精だな。だが——」

メリーの体に異変が起こる。

体が分解していく。

「これは…!?!」

「言っただろう。俺は風魔法が得意なネームだ。お前は風の妖精。体が空気を凝縮してできているのなら、凝縮できないように操作すればいいだけだ」

簡単に言っているが大気中に無数に漂う空気を掌握するなどネーム以外にはできな



い。

「…申し訳ありません、我が主。私はここまでのようです」

「死ぬわけじゃないんだろ？なら別にいい。2対1じゃ卑怯だしな。お前は見てろ」

「そうさせていただきます。では…」

それを最後にメリーは完全に消えた。

死んだわけではないのだが…。

「さて、面倒な妖精もいなくなつたことだし、仕切り直しと行くか」

「そうだな。あいつがいなければ俺も本気が出せる」

「なら見せてみる、お前の本気とやらを」

シューレスの上に巨大な岩が出現する。

もちろんこれは本物ではなく空気を凝縮させたものだ。

天使の力を使い、光の太刀を作り出す。

試しに切りかかる、がちよつとしたヒビしか入らない。

「(硬いな)」

回避行動に移る。

しかし、回避しようとした先に暴風が吹き荒れる。

だが、迷っている暇はない。

暴風の中に突つ込む。

「たかが風使いの分際で！」

暴風の中にいるためどこを進んでいるのか、今上を向いているのか、下を向いているのか分からない。

だが、そんなシューレスに一つ感じ取れるものがあつた。

「……熱気？」

気づいた直後、周りの景色が赤く変わり始める。

これには焦つた。

「ヤバ!? だけど……」

太刀を消して、水魔法を唱える。

体を水で包む。

方向はさつき火がきた方向で分かつた。

火は下から上に伸びていく。

ならさつき見た光景から考えれば大体は分かつた。

一気に突つ込み外へ脱出する。

出ると次は刃物の応酬が待っていた。

暴風を出た直後から槍、モリ、ナイフなどが襲い掛かる。

「(メンドいな)」

硬いのは分かっているので盾を保険にしてAを探す。  
姿が見当たらない。

「(空気を使って光学迷彩的なことしてるのか？風魔法も侮れないな)」  
そんな中でも刃物は的確にシューレスを狙ってくる。

ただ、移動しているとその刃の動きが鈍るときと俊敏になるときがあった。

「(あいつに近づいたり離れたりしているのか？刃が襲ってくる以上近くにいるのは間違いないが……)」

見えない相手の居場所を特定するのはとても難しいことだ。

刃の動きを見ればある程度は分かるが正確な位置までは分からない。

油断していないのかしやべることすら一切しない。

「つたく、さつっきのアルゴラといい、お前らは正面から戦おうとはしないのか！」  
返事はない。

「(挑発にも乗らない……。仕方ない、やるか)」

攻撃がこれ以上めんどくさくなる前に行動に出る。

羽で体を包む。

そのまま魔力をためる。

Aにも何かするのは分かったらしく、攻撃が強くなる。しかし、対処するには遅かった。

羽はボロボロになっていくがシューレスがやりたいことをするまで、もてば十分だった。

シューレスの羽が輝き始め、次の瞬間突風が起きた。

それ同時に刃がすべて消え、暴風も跡形もなく消える。

そして、Aが姿を現した。

シューレスが予想した範囲以内にいる。

「なっ!?!」

予想外の出来事に一瞬Aの反応が遅れる。

シューレスは一気に突っ込み鉄の槍で…刺した。

「ぐ……!」

心臓や脳に刺したわけではないので死にはしない。

だが十分だ。

「どうする? まだやるってならこの槍の形状を刀に変えて真っ二つにするぜ?」

「すぐには、殺さないのだな?」

「気分が変わったんだよ。お前は別に何もしてないしな。あいつを殺されたことはイラ

つくが話してほしいことのほうが沢山だ」

「俺は口を割らないぞ?」

「だろうな。だが割らせるのは俺の役目じゃない。違うやつの仕事なんて知ったことか」

「そうか、だがやはり詰めが甘い!」

Aがシューレスの頭をつかむ。

「…お前、馬鹿なのか?」

槍の形状が刀に変わる。

「死ぬぞ?」

「残念ながらそれはない。お前の刃が通ることがありえないからな」

「…残念だよ」

シューレスが刀に力を入れ振り下ろそうとした…が、

「…!」

「どうした? やらないのか?」

刃が通らない。

「!?!」

「お前は俺の時間を与えすぎた。これだけ時間があれば体全体に空気のできた盾を張る

など造作もないこと」

「……………」

「やっぱりだ」

Aが単純に力を入れる。

そして頭を握りつぶした。

人間の頭を握りつぶすなどただ力を入れるだけでは無理だろう。

はじけた頭の中からドロドロとした中身が飛び散る。

頭をつぶされて生きている人間はいない。

しかし、Aはすっかり忘れていた。

彼女の存在を、そしてシューレスがネーム持ちであることを。

再びAに激痛が走る。

にぎり潰してから3秒経っていない。

心臓のすぐ隣を刺されていた。

「なっ…!?!」

後ろを向くとメリーが立っていた。

「先ほど我が主が使った魔法強制解除によって貴方の私に対する魔法は解けました。主はその時に魔力をほとんど使い果たしたので私が代わりに殺るということになっ

たわけです」

「だが…貴様の主は、死んだ！」

「いつまで握っているんですか、その空気を」

「？」

持っているシューレスの亡骸を見る。

しかし、そこには亡骸はなくあるのは目に見えない空気の塊だった。

「いつたい、何を…？」

「主、こいつは説明を望んでいるようです」

「んん…まあ、いいや。してやるよ」

シューレスが何も無いところから現れる。

「まず、俺のネームの能力は分かったか？」

「…」

「俺のネームの能力は『幻覚』だ」

「幻…覚？」

「アルゴラには驚かされたよ。あいつは『音』だったな？俺は『視覚』だ」

「まさか…ここにもいたのか」

「あとは簡単。魔法を解除した後幻覚を見せ、メリーの魔法は解けてるから作った幻覚

に体温や触感を取り入れ、お前と戦わせる。油断したお前はこんな状況になる！」

「だが、私の体に、張った盾は？」

「私は風の妖精。先ほど貴方が作った竜巻に穴をあけました。こんな薄い盾なんてどうということはありません」

完璧な連携。

この2人が会ったのはたった1年前だということにとってもそうには見えなかった。

「さて…、お前、さっき俺を殺したな？」

「ま、待ってくれ。情報は渡すから」

「それも作戦ですか？」

「可能性はあるな」

「どうか…殺すことだけは！妻や子供を置いて逝くわけにはいかないんだ！」

Aが焦り始める。

手がないのか必死で懇願している。

「…そんなこと言うならなんで俺たちは簡単に殺そうとする？俺にだって家族はいる」

「それは…」

返す言葉がなく、ただ黙ることしかできなかつた。

「ま、いいや。メリー、あとはよろしく。俺、魔力ほとんど使って疲れたから」



「分かりました」

「頼むから殺さ——」

刀を横に振り心臓を真つ二つにする。

メリーは死んだAを落とすことはせず持ち上げる。

力なくぶら下がる人間を持ち上げるのはそれなりの力があるだろう。

「死体を集める趣味でもできたか？」

「ケイト様の仕事を減らしただけです」

「仕事？」

「主はこいつを後でケイト様に頼んで生き返らせるつもりですよね？」

「…よくわかつてるじゃねえか」

「嫌がりますよ？ケイト様は死人を治療するのは自分の意思に反するって」

「でも、結局はやってくれるさ。重要参考人だしな」

シューレスは地面を見る。

肉塊になったアルゴラと、生徒の腕輪や服があった。

「あれは…、さすがに無理でしょうね」

「あそこまでバラバラだと確かに無理だろうな」

「生徒のほうは…、おそらく治せたでしょうね」

「いや、生徒は何かあっても治療しなかっただろうよ」

「なぜ？」

「何人死んだと思ってるんだ？」

戦争はミューズデルで起きた。

人が何人死んだかなんて今は分かったもんじゃない。

「一人生き返らせれば他が来る。だからしないでだろうよ」

「…敵は生き返らせるのに、仲間を殺したまま…。ひどい話ですね」

「そう言うな。あいつだってつらいんだ」

シューレスとケイトは仲がいい。

出会いは7歳。

それからよく遊んだ。

今では親友。

そんな彼だからこそ分かることだ。

「しかしまあ、ケイトの仕事は減らすのに俺の仕事は減らさないんだなあ？」

「何が言いたいんですか？」

「ケイトなら無理だぞ？あいつ好きな奴いるし」

「妖精が人を好きになると思えますか？」

「実例はあるって聞いたぜ？」

「私がケイト様に優しくする理由は、可哀想だからです」

「可哀想？」

「主もたまにいじりますが特にクリティウス姉妹。弱いくせによくいじれますよね」  
妖精に同情されていた。

しかも自分の使い魔でもないのに。

「ケイトは人がいいからなあ」

「ですから私は親のような目線で見たいと思っています」

「なら、好きな奴はいないのか？お前」

「…いないことはありません」

「誰だ？」

「言いませんよ、バカバカしい」

## 友達だ

「リヨウ殿！」

クロの所に向かっていている最中、サクに呼び止められる。

「サク！無事だったか！」

「私はリヨウ殿の使い魔です。あれくらいどうってことはありません！」

本当に頼もしい使い魔を持ったと思う。

が、今はそれどころではない。

「サク、悪いが急いでいる。移動するぞ？」

「分かりました」

リヨウが進む方向に少し後ろからサクがついていく。

「リヨウ殿！いったいどこへ？」

「クロの所だ」

「クロに何かあったのですか!？」

「…敵に寝返った」

「…そうですか」

「あまり驚かないんだな」

「マクアドルから話は聞いていました。ですから多少は頭が追いついています」

「俺は、いまだに信じられない」

「リヨウ殿…」

暗い顔をするリヨウ。

今まで仲が良かった奴が敵なんていまだに信じられないに決まってる。

「戦うんですか？クロと」

「もちろんだ。俺は、あいつの本音が知りたい」

「本音…ですか？」

「あいつは今まで笑顔しか見せてこなかった。だがそれは嘘で塗り固めた笑顔だ。つまり俺は本当のあいつを見たことがない」

「…」

「俺はあいつにどんな事情があるか知らない。でも俺はあいつの本当の笑顔が見たい」

「…それは、ミリーナが言っていた戦争には関係していませんよ？」

予想外の言葉に返事が少し遅くなる。

その間に一つの建物の前に降り立つ。

「意地悪言うなよ、サク」

「すみません」

中に入り様子を確かめる。

「…でもまあ、なんだかんだ言っても一番の理由は友達だから、だな」

「リヨウ殿らしい意見です。でもクロはどう思ってるんでしようか？」

「俺と同じだと思うが一応聞いてみるか？…どうなんだ、クロ！」

奥のほうからクロがやってくる。

「…どうして？」

「ここが分かった理由か？そりゃ、4年間もお前と同じ部屋だったからな。お前の魔力は覚えたよ。誰よりもな」

「そうじゃないよ。どうしてあそこを抜け出したの？」

「4年間も一緒にいたんだぞ？理由ぐらいクロなら分かるはずだ」

「…そうだね」

「で、お前は俺のことどう思ってるんだ？」

俯き、申し訳なさそうな顔をする。

「楽しかったよ、リヨウとの学校生活は。でも、リヨウとは友達にはなれない」

「友達って、そういうもんじゃないと思うんだけどなあ…。そんななれる、なれないはな

いと思うけど…」

「リヨウはここに何しに来たの？」

「決まってるだろ。クロ、帰るぞ」

驚きを顔にあらわにする。

「…僕は、リヨウの敵だよ？」

「また味方になってくれればいい話だろ」

「発想がすごいね」

「それにまだ俺とサク以外はお前が敵だとは気づいてない。普通にいけるさ」

「…僕は本当にいい友達を持ってたんだね」

「持ってたんじゃない。持ってるんだよ」

「…ありがとう。でもね、どうにもならないこともあるんだよ」

地響きと同時に後ろから大きな人影が現れる。

「…やるしかないのか？」

「僕としてはここで引いてほしい。それに僕を倒したってこの侵攻は止まらないんだよ

？」

「俺は今ここにお前を取り戻すために来てるんだ。戦争は仲間に任せた」

「…分かった。そこまで言うなら——」

後ろの物体の正体があらわになる。

大きなゴーレムだった。

「——僕は全力でリヨウを倒す！」

「オ…オオオオオオオオオオオオオオ！」

ゴーレムが雄たけびをあげリヨウたちに突っ込む。

「サク！お前はゴーレムに集中しろ！ク口は俺が隙を見つけたら戦う！」

「はい！ではリヨウ殿、この『ごーれむ』という石の人形の弱点を教えてください！」

「そんなの知るわけないだろ!？」

「名前だけ知ってるんですか？」

ゴーレムの攻撃によりサクとリヨウは離れ離れになる。

「(…もしかして、この世界にはゴーレムって言う概念はないのか?)」

「へえ、ゴーレムを知ってるんだ？みんな石人形って言ったのに、リヨウは物知りだね」

「この世界にゴーレムって言葉マジでないのか？」

「この世界？」

言っただけいけないことを言ってしまったと思い、すぐに戦いに集中する。

ゴーレム



地球ではギリシャ神話にそれらしきものが登場しており、ある話ではアダムが世界で初めてのゴーレムだったのでは？という説もある。

今、リヨウの目の前に現れているのはリヨウが思い描いていた通りのゴーレム。

高さは10mほど。

全身が岩や、金属でできておりとても大きい。

リヨウは様子見として、手榴弾を投げてみる。

銃では崩すことができないのは分かっているので使わない。

爆発が起き、ゴーレムの右腕が少しえぐれる。

「(…あの調子だとあと2回ぐらい投げれば右腕は壊せるか？一応まだ5つあるし両腕ぐらいなら！)」

当たり前だがゴーレムに痛みはない。

攻撃対象をリヨウに定め、右手でいいストレートをしてくる。

握りこぶしだけでも2mはある。

リヨウはそれをかわし腕に沿って移動する。

先ほど手榴弾を当てた場所に来ると、再び手榴弾を出し、そこに押し込むようにして設置する。

ゴーレムが無造作に腕を動かしリヨウにあてようとする、がそこで爆発。

見事に腕が落ちる。

「リヨウ殿！」

「ああ。これならいけ——」

しかし、取れた右腕は地面に落ちて3秒と経たないうちに小さな小石に分解されながらゴーレムにくつつく。

「デスヨネー」

建物の一部も無理矢理はがされゴーレムの一部となる。

「リヨウ。諦めて退いてくれる気にはなった？」

「なに言ってるんだよ。これからだろ？」

「あらかじめ言っておくよ？これが僕のネームの能力。命がない物の一部を自由に使うて新しい何かを作る」

「ずいぶん強い能力だな。なんで魔法側に入んなかった？」

「ネーム持ちだとばれると何かと注目されるからね。あえて科学側に入って、しかもAコースにすればなおのこと目立たない」

「なるほどな……。となると以前戦った剛石竜もお前が？」

「いろいろかき集めてね。中身もまねることができればそいつ特有の技も使えるようになるんだ」

ゴーレムの左腕から一つの大きな岩が取り外される。

それがリヨウとサクに襲い掛かる。

予想外の行動だったが距離がある。

避けるには十分だった。

「これはゴーレムの形をした、ただの泥人形。僕が操ってるからゴーレムの概念があるなら捨てたほうがいいよ？」

岩が単体で降りかかってくるがゴーレムも攻撃はやめない。

だが、攻撃は当たることはなかった。

もし、クロも何かしら魔法を唱えてくれば当たったかもしれない。

だが目の前にいるのは直線的な攻撃しかしてこないただのデカ物。

いくら、3段階目のドールのままのリヨウとはいえ、避けるのはさほど難しいことではなかった。

けれども、ゴーレムはあまりにでかくクロの所にいくことすらできなかった。

避けられるとはいえ、ずっと守りではいつかは負けてしまう。

リヨ（こういう訓練も積んでおくべきだったなあ…。いや、俺の学年に不死身の壁になれる奴なんて使い魔を含めてもないよな…）

ケイトがいたのだからリヨウが知る由もなかった。

「これならどうか…?」

3段階目になって得られた攻撃方法、レーザー的なものをヒュニスの先から放つ。

これはヒュニスが自由自在に動かせるリヨウにとってはうれしいものだった。

うまくやれば弱点を狙い撃ちできるし、死角もなくなったからだ。

しかし、これは燃費が悪かった。

もともと内蔵されている燃料を使えば10秒、Sバリアのエネルギーを使っても30秒が限界だ。

レーザーがゴーレムに当たる。

が、これもあまり効果はなかった。

削ったそばから回復していくのでどんな攻撃も本当は意味がないのだが。

サクも攻撃するが、まだ子供。

大きさを越えて竜になったって、小学1、2年生の子供ほどしかない。

いくらノティスと言えども無理があった。

ゴーレムにダメージを与えることに執着した場合は。

「サク、作戦変更だ。ゴーレムの態勢を崩すことのみに集中しろ!」

「了解しました!」

ノティスがもともと特化しているのは隠密性と速さだ。

ここでは隠密性は役に立たないが速さは大いに役に立つ。  
その速さは尋常ではない。

人の子供ほどの大きさがあるのに、人の目には見えないような速さも出せるのだ（直線の場合）。

サクはワイヤーを使いゴーレムの足のバランスをおかしくさせる。

ゴーレムはあまりの速さに対応できずバランスを崩し倒れた。

リヨウが命令を出してから6秒しかたっていなかった。

「サク、そいつを押さえてろ！」

「ええええ!?リヨウ殿、それは困難を極めるかと！」

「できる限りでいい。俺がクロを倒せばそいつは消える！それまで耐えろ！」

「や、やってみま……うわ！」

サクに分裂していた岩が襲い掛かる。

ワイヤーを持ちながら岩をかわす。

リヨウはクロの前まで来た。

「……やっぱりサクはすごい使い魔だね」

「お前だつてうまくいけばあいつ以上の奴を使い魔にできるぞ?」

「この戦いが終わった後にでも探してみるよ」

「一緒にな」

「…今からでも遅くないよ。さつきも言った通りラブトリアはリヨウを歓迎するんだよ？ 僕の仲間になってくれれば」

「今ミューズデルを攻撃しているのはラブトリアだろ？」

「…」

「なら無理だ。俺は誰も失いたくない。リリア、ケイト、レックス、マーシャ…それにお前も」

「世の中そんなうまくいかないよ。リヨウは夢の国の住人なの？」

「…あながち否定できないかもしれないな」

この星ではどういいうわけか宇宙に出ることができない。

出身が地球であるリヨウはこの星の人から見れば夢の国の住人と言っても過言ではないかもしれない。

「？」

「いや、この話はまた今度で。それよりクロ、なんで本気を出さない？」

「こんな巨大な人形を作ったのになんで本気じゃないと思うの？」

「当たり前だ。ただデカいだけ。あんな攻撃あたるわけないだろ」

「…でも、リヨウだって本気出してないでしょ？」

「お前が出してないのに出すわけないだろ」

「だって…」

サクとゴーレムが後ろで争っている中、静かに時間が進む。

「なんでそこまで帝国側に肩入れをする？お前は昔のことを話しながらなかった。少し話した時も決まって暗い顔をした。つまりあまりいいとは思っていないんだろ？」

「…」

「悩み事があるなら一緒に悩んでやる。問題があるなら一緒に解決してやる。どんなことでも力になってやる。だから、な？」

「…んだよ」

「え？」

「無理なんだよ！」

突然クロが泣き出した。

それと同時に後ろからゴーレムの一部が飛んでくる。

まったく気が回っておらず、見事に食らってしまった。

背中の方の骨が何本か折れる音がする。

そのまま壁に叩きつけられた。

「僕だって悩んだよ！初めて君と会ったときは一人と仲良くしておけばそれでいいかな

と、思つて話しかけた！でも、もしたらどういふわけか、君は逸材だつた。そして人望もあつた！必然的によく話す人たちが増えてしまつた！」

サクが押さえていたゴーレム本体が起き上がり、リヨウに向かつてパンチを入れようとする。

リヨウはそれに反応し、急いでかわす。

「いづれこうなることは分かつていた。だから話す程度でよかつたんだ！それなのに、リヨウに対してはどういふわけか、自分から話にいつてしまつた！リリアさんや、マージャさんなんかは、僕によくしてくれた！」

サクも応戦しようとするが、ゴーレムの硬さに手も足も出ない。

「昨日の夜だつて、悩んだんだよ！命令で一部の人間を除いて、ミューズデルの人間は皆殺しつていふ命令が出てる！逆らうことはできない！だから悩んだ！それでかけあつて、なんとかリヨウだけは逸材といふこともあつて、殺さなくてもいいつていふ許可が下りた！でも他の人は……無理だつた！」

痛みに耐えながら回避のみをするリヨウ。

「もう友達として接することはできないと思つて！でもリヨウには生きていてほしいんだよ！だから、だから、だから……」

言いながら、クロは崩れ落ちる。



「…」

黙ってクロの話聞いていたりヨウ。

結論は出た。

「誰だ？」

「え？」

「誰がお前をそこまで追い詰めたんだ？と訊いている」

「まさか…マスターとやりあうつもりなの？」

「そいつがお前をそこまで追い詰めたのならな」

「無理だよ！マスターはコロナを完成させた！たてつけばリヨウが死んじゃう！」

コロナ。

ミリーナの考えは当たっていたのかと心の中で舌をうつ。

だが結論は変わらない。

「安心しろよ。死にそうな場面に出くわすのは慣れっこだからさ」

「そういう問題じゃない！それにリヨウはコロナがどんなものか知らないでしょ!？」

「知ってるよ。無限の魔力が得られるんだろ？」

「知ってるならなんで？勝てないのは分かるでしょ！」

「いいや、わかんないね」

ぼかんとした顔をして固まるクロ。

「この世に絶対なんてないんだから勝てる可能性はある。それに――」

クロの前に来て頭をなでながら言った。

「クロを苦しめたやつだ。一発殴らなきゃ気が済まないしな」

しばらくの間時間が止まったかのように呆けた顔をするクロ。

泣いていた顔に少しだけ笑顔が入る。

「今の台詞となでる行動、僕が女子だったらすぐ惚れてたよ」

「なら、お前が女子じゃなくて残念だったな」

「…何を言っても無駄みたいだね」

「当たり前だ。絶対助けてやるから安心しろ」

「…うん」

ここでクロは笑顔を見せた。

嘘偽りのない本当の笑顔だった。

「よし、じゃあさっさとその親玉を倒しに…いてて」

「ご、ごめん。痛いよね？さっき結構ひどい音してたし…」

「気にすんな。これくらいはどうってことねえよ」

「待ってて、大して得意ではないけどちよつとした回復魔法なら使えるから」

「なら、少しでもお願いしようかな。サクも——」

「なにやってるんですか？」

突然響く知らない声。

クロは聞き覚えがある声。

「…ジークさん」

「何やってるんですか、O。そいつが先ほどあなたを襲ったのは見ていました。マスタ―は反抗しなかったときのみ仲間を迎え入れるといいましたが？」

「誰だ、お前？」

「初めまして、ジーク・T・エリオスといいます。貴方のことは資料で拝見しましたよ、リヨウ・アマミヤさん」

「俺の資料？変態か、お前」

「失敬ですね。資料を作ったのはOですよ？それに大した情報も載ってませんでしたし」

「そうなのか、クロ？」

「…はい、すみません」

Tはサクとリヨウたちの間に降り立った。

しかし、警戒するそぶりも見せず普通に話を続ける。

「ところでアマミヤはどこかお偉いさんの子供かい？」

「なんでだ？」

「Oが作った資料、雑といってもいいほど情報がありませんでした。マスターに提出するものだったのに、あれはひどかった。だから私も調べたんですよ。でもどういうわけか全く出てこなかった」

「…」

「かなり深くまで探しましたが消した形跡すら見当たりませんでした。ありえない話ですが事実です」

「それでどこかのお偉いさんの子供なら、残さなくてもいいことがあるんじゃないか。そう考えたわけだな」

「そうそう。で、どうか？当たってる？」

「残念ながら外れだな。そんないい血筋の人じゃねえよ、俺は」

「そうですかあ…。あと考えられるのは、この星出身じゃないっていうぶっ飛んだ考えなんですよ」

「いい線いつてるな。まあ、教える気はないけどな」

「なかなか夢のあるヒントですね。まあいいです。殺してしまえば一緒ですし」

建物の壁に爆発が起きる。

外から敵兵が流れ込んでくる。

一気に囲まれてしまった。

「まだこんなになっていたのか!？」

「悪いですけど〇、貴方は反逆罪で私が肅清します。もちろん母親の命もないと思ってください」

「……」

「させると思うか？」

「どこにいるかも知らないくせに……。それに貴方はまず自分の心配をするべきです」

確かに周りには100を超えてる数の敵。

いくらリヨウやサク、本気を出せるク口といえども分が悪い。

そんな時、そこに近づいてくる影があった。

サクが一早く気づく。

「リヨウ殿！何か近づいてきます！これは……」

Tが立っていた場所に突っ込んできた。

Tはひらりとかわし距離をとる。

「私に気づくなんて、さすが将来の召使いね」

「ミイヤ！」

「将来のリヨウの嫁なのよ？後で私の呼び方の指導もしなくちゃね…」

「どちらさんですか？あなたは？」

「この魔力、かすかだけど覚えがあるわ」

「何？」

「忘れたとは言わせないわよ…。あなた私の寺を襲撃した一味よね？」

「寺？…ああ、貴方巫女ですか！」

「クロのことは今までの生活からなにか無理強いされたっていうのは分かってたわ。だからなにも言わなかった。おそろくあなたはあの時のリーダーね？」

「そうですが、何か？」

「やっと、見つけたわ…。サリス、ノリス、命令よ！奴を殺すわ」

「サリス、ノリス」「承りました」

## 屍使い、再臨

ミイヤとTがにらみ合っている。

ミイヤからは殺気がものすごい漂っていた。

「ミイヤ……」

「ごめんなさい、リヨウ。でもこいつは私が殺るって決めてるの。あなたは安全な場所に避難して」

「馬鹿言うな！俺だって戦えるんだぞ？指くわえて眺めてるなんて御免だ」

突如、爆音と同時に離れたところに火柱が立つ。

「なっ、なんだ？」

「…マスター自身が侵攻を始めたんですよ。意味分かりますよね？」

マスターがという人物が戦線に出てきた意味。

リヨウにはすぐにわかった。

「完成したっていうのか！」

「ええ。それ以外は考えられません。もともと人を殺すことに抵抗がある人ですからすぐに終わらせるため、自身が出てきたのでしよう」

「人を殺すことに抵抗があるのならどうして皆殺しなんだ？」

「それは帝国からの命令ですから。時々怖いことも言いますが根は優しいです」  
リヨウが火柱が立ったほうを見る。

あそこには今回の戦争の親玉、そしてクロを泣かせた張本人がいる。

「…ミイヤ。ここは任せる」

「後でキスして頂戴ね？」

「お前、さつきまでどっかいけとか言ってたよな？」

「ん…、じゃあデートで我慢する」

「ハードル上がってないか？」

「一緒に買い物に付き合ってくればそれでいいわよ」

「…それだけだな？」

「それだけよ」

「分かった。そういうことにしておこう。サク、行くぞ」

「はい、リヨウ殿」

「あ、ちよつと待ってて」

ミイヤが一枚の札を取り出す。

それをリヨウの背中につけた。



「これは？」

「回復用の札よ。さっきクロが回復している姿が見えてたから一応ね」

「ありがとう。じゃ、行ってくる」

リヨウとサクがその場を去る。

敵は全然動かなかった。

「あなたはいいの、クロ？」

「僕は自分の敵に決着をつけなきゃいけないからね」

「お偉いさんはリヨウが行ったほうじゃないの？」

「実は僕のお母さんを人質に取ったのはこの人なんだ」

「成程。で、私は知り合いたちの仇をとるため、あいつを殺すつもりなんだけどいいかしら？」

「かまわないよ。僕もそのつもりだ」

Tが地面を離れ浮かび上がる。

「準備はいいですか？」

「一応訊くけどなんでリヨウを見逃したの？」

「私もさすがに4人を相手にすると骨が折れるんですよ。マスターは今是最強だしいいかなと思います。まあ、部下は沢山いますよ」

周りにいる敵は少しも動かずただ立っている。

「……やっぱり僕は嫌だな」

「？」

「全部死体でしょ、この人たち」

「死体？」

「私は『屍使い』という者です。私は屍を好きなように扱うことができる」

「趣味悪いわね」

「いいですよ死体は。文句を言いませんし、命令に忠実。そして何より——」  
指を鳴らした。

「——死を恐れない」

それと同時に屍の群れがミイヤたちに襲い掛かる。

「あなたが数で勝負するのなら、私は力で勝負するのみ！」

地面に札を張りつける。

するとそこから魔方阵が出現する。

「青龍！」

それは大して大きい魔方阵ではなかった。

だが、確実に以前より強い青龍が現れる。

「みかけだおしじやつまらないですよ」

「私だって特訓したのよ。おかげで場所をとらずに強い青龍を召喚できるようになったわ」

「本当に強くなったのですか？」

「今に分かるわよ！」

ミイヤが青龍を、クロはゴーレムを使い敵の殲滅を始める。

「サリス、ノリス！、あのクズを狙って頂戴、殺して構わないわ！」

サリス、ノリス『承りました』

サリス、ノリスがTの目の前までくる。

「たかが使い魔の分際で…。私に勝てると思ってるのか？」

「命令ですので」

「お前らのことは調べてあるよ。代々、青龍を使う巫女の使い魔としてやってきたらしいよ。だ。ご苦労なこった」

「私たちはただの一度もあの人と一緒にいたことを嫌だと思っただけではありません」

「羨ましい話だなあ。こんなに忠実な道具があるのか。私も欲しいものだ」

話が終わる前にサリスが動く。

サリス、ノリス

彼女たちは何かの妖精というわけではなく、分類するなら『不明』に属する。彼女たちの武器は素手である。

どこで習ったのか、あるいは独学なのかは不明だがその実力はなかなかである。

しかし、それ以上の彼女たちの特徴は死なないということ。

戦闘不能になると消えてしまうが一定時間たてば復活する。

彼女たちが言うには、青龍の巫女が途絶えたとき自分たちも死ぬと言っていたが巫女の血は途絶えたことがないので確かめようはない。

一瞬でTの懐にもぐりこみ手刀ともいうべき殺傷能力を持った手で攻撃を繰り出す。

「おっとー！」

少し後ろに下がりそれを避けるT。

だが、ノリスが待っていた。

ずっと一緒にいたせいなのか阿吽の呼吸以上のチームワークの良さがある。

膝蹴りを繰り出す。

そこまでは考えていなかったのか魔法を唱えることもできず、腕で受ける。

さらに、後ろからサリスが掴みかかる。

「なかなかだが…まだだー！」

Tは雑魚を4体、サリスたちに向かわせる。

サリスとノリスはアイコンタクトのみで役割を決める。

ノリスが雑魚4体の相手に向かう。

「目線だけで意思疎通ですか。流石ですね」

「悪いですがあなたと話している暇はございません。ミイヤ様からの命令にそれは含まれてませんので」

「でも話すなどとも言われてないでしょう？ いいじゃないですか」

「クズと話している時間はございませんので」

サリスが再びTに襲いかかる。

---

サリスとノリスがTと戦っている間、ミイヤとクロも戦っていた。

しかし

「…減らないわねえ」

あまりの数に減っている気がしなかった。

「相手は屍なんだから仕方ないよ。恐怖しない兵隊なんだから」

「ゾンビと似たようなもんね。…サンダーー！」

電気魔法を唱えてみるが、ダメージが見えない。

表面はある程度焦げるが動きは少しも鈍らない。

「そんなので倒せると思ったの？ っていうか、なんでお札使わないの？」

「せっかく学校で習ったんだから実戦で使ってみたかったのよ。でも駄目ね。弱いわ、魔法って」

「普通の相手ならあれだけ使えば十分だよ。でも今の相手は屍。動きを止める方法は」

「ゴレムが敵に向かって倒れ掛かる。

起き上がるとそこらじゅうが血の海になっていた。

「——肉塊にすること」

「頭を切り落とすんじゃないの？」

「その場合、頭のみが機能を停止するけど体は動くよ。大きさにもよるけど…人なら5等分ぐらいにすれば完全に止まるかな」

「ゾンビよりタチ悪いじゃない！ それに…」

「ゴレムや青龍が殺った死体を見る。

そこには体は黒く覆われていない、一般市民も含まれていた。

「気が引けるわ」

「でも構ってる暇ないよ」

「分かってるわ。だからこうやって…、業火爆滅！」

札を投げると敵の集団に当たると。

当たった瞬間に敵の方向にもものすごい炎が襲いかかる。

「殺してるのよ」

「すでに死んでるんだから殺してるは言い過ぎだよ。助けてあげてるでもいいと思う」

「そう言ってもらえると気が少しは楽になるわ」

「でも、このままじゃまずいよね」

のんきに話してはいるが実際はゴーレムと青龍ですら捌ききれない数だ。

唯一の救いは相手が全員魔法は使わず肉弾戦のみにこだわっているということだ。

魔法を使われようものならすでに命はない。

Tもいまだにその制御はできていないようだ。

「やっぱりこの状況を打開するにはTを何とかするしかないと思う」

「同感ね。でも私たちがTのほうに向かえばこいつらも来るわよ？」

「動きを止めることさえできれば…、どうにかなると思うんだけど」

「できないこともないわよ？」

「本当？」

「敵味方問わず半径5キロ凍り付くけど」

「却下！」

突如、再び遠くで火柱が立つ。

「リヨウが戦ってるのかな？」

「そうね。私の将来の夫が逃げるわけじゃないもの」

「なら、僕たちも休むわけにはいかないよね」

クロがゴーレムの肩に乗っかる。

「…それもそうね。妻が駄目だと夫もダメみたいに思われるわ」

ミイヤも服の中から札をたくさん取り出す。

「よく考えたらあなたが戦うところ見たことなかったわね」

「僕だつてネーム持ちなんだから結構やれるよ？ミイヤは3年ぐらい魔法ばかり使っ

てたけど大丈夫？」

「3年で衰えてしまう私なら巫女なんてやってないわ。むしろ本気が出せると思うと楽

しみで仕方がないわよ」

「…やっぱりミイヤって巫女向いてないよね」

「クロ、巻き込まない保証はできないから当たったらごめんね」

「少しは気をつけてよ!？」



サリスが片膝をつき、肩で息をしている（宙に浮かんでいるが）。

Tは手をポケットに入れ立ちあがった火柱を見ている。

「…やりすぎですね」

「…何がです？」

「いや、あなたに言ったんじゃないんですけどね。マスターやりすぎだなと思ひまして」

「余裕だな？」

「当たり前でしょう。あなたは傷だらけでぐったりしている。あつちで戦ってる双子も4体相手に苦戦している。たいして私は無傷。なんで余裕じゃないことがあるんですか？」

反論できなかつた。

確かに本気を出しても手も足も出ないのだ。

今のサリスには打つ手なしだった。

「どうせあなたは殺しても死にませんし。無駄な労力は使いたくないんですよ。ですか

「私はこうして観察者としてあつちを見てるんです」

「観察者？」

「おっと、口が滑つてしまいました。教えませんよこれ以上は」

「…別に必要なごさいません。あなたは私が殺します」

「まさにゾンビだな。ぜひともこちらの駒になつてほしいですねえ」

「私たちを道具としてみている時点であなたの下に付く気はありません」

再びサリスが立ちあがる。

「まだやる気ですか？」

「意識がある限り何度でも立ちあがります」

「…あなたが私に本気を出させてくれるほど強ければ私も盛り上がるんですけどねえ」

圧倒的な力の差がある中、サリスは立ち上がる。

## 無限魔力

「…これはすごいな」

マスターという男がミューズデルの町に出てきた。

目の前にはさつきまで生きていたはずの生徒や警備員、一般市民の死体がある。

先ほどマスターに攻撃をしてきたので自分ができる最大の風魔法を使ったら簡単に吹き飛んだ。

本来ならそんな威力のあるものを使ってしまえば魔力の残量はほとんどなく、疲れているはずなのだがまったく倦怠感がない。

「マスター、報告です。Oが裏切りました。あとTが交戦状態に入ったそうです」

「まあ、クロはラブトリアにいるのは嫌がっていたからな…。いつかはそうなると思つてたよ」

「いかがでしたでしょうか?」

「今は保留で。見つけ次第殺すけど探す必要はな…。ん?」

建物のほうに敵か味方が区別ができないほど焼かれた死体の山が見えた。

興味を持ち歩いていく。

2人の女がいた。

「姉貴、また誰か来たよ？」

「ええ、チヨメメンドーなんですケド」

寝つ転がっていた二人が起き上がる。

「君たちは…U・クリティウス姉妹だな？」

「知ってるの？なら退いてほしいんだケド？」

「その死体見たでシヨ？今は疲れてるの」

「ネーム持ち…、少しは楽しませてもらえるのかな？」

「あんたバカア？私たちのこと知ってるのに」

「もしかして幹部か何か？」

「今回の侵攻のリーダーだよ」

クリティウス姉妹の目が輝く。

「マジで？」

「マジだ」

「なら少しは楽しませてよネ」

「こつちの台詞だ——」

マスターが言い終える前に炎を投げつける。

しかしマスターは避けることもせず、ただそこに立つ。

風を起こし瞬時にその炎を消す。

「言い終える前に攻撃はよくないな」

「少しはやるみたいじゃん？」

「本気出すよ！」

2人は指の先から火の銃弾を無茶苦茶に撃ち始める。

他の一般市民なんて気にしていないようだ（目の見える範囲にはいないが）。

マスターは部下の近くにより結界を張る。

緑色の結界がクリティウス姉妹の攻撃をすべて押さえる。

「申し訳ありません」

「気にするな。しかし、こうも早くネーム持ちに、しかも好戦的なのに出会うとは」

「私たちはこれからどうすれば？」

「この結界をお前の半径3mで張る。私があいつを倒すまで見ていろ」

「分かりました」

マスターがクリティウス姉妹の攻撃を同じように自分にも結界を張り防ぎながら進

む。

「少しはやるみたいね…、あんた名前は？」

「本名はレイ・エジリスだ」

「ネームを言い忘れてるよ」

「私はネーム持ちじゃないんだよ」

クリティウスたちの顔が驚きを現す。

無理もない。

自分たちの攻撃がネーム持ちでもない雑魚に止められたのだから。

「そ、そんなわけないジャン！あたしたちの攻撃がそこらへんの奴に止められるわけ……」

「ならその身で確かめてみる」

エジリスは右手に炎でできた槍を作り出す。

「あたしたちに炎魔法で勝負なんていい度胸ジャン！」

「……究極魔槍」

クリティウス姉妹はその言葉を聞き逃さなかった。

真偽は定かではないが聞き捨てならないのも事実。

急いで防御態勢に入る。

エジリスは特に工夫することなく普通にクリティウス姉妹に向かって投げた。

グングニルがクリティウス姉妹に当たり火柱が立ち上がる。

火に包まれた一帯は跡形も残さず消えた。

炭や灰すら残らず、本当に消えた。

それほどまでに強い魔法を使っても、少しも疲れるそぶりを見せないエジリス。

「コロナとは素晴らしい産物だな…。これなら…」

その先の言葉を言おうとして気づく。

火柱の中にまだ生きている存在がいると。

火柱が消えクリティウス姉妹が現れる。

「…流石、炎魔法を得意とするだけはあるな」

「あたり、まあでしょ。これくらい…」

「姉貴、あいつ、全然疲れてないよ？」

ほとんど無傷ではあるものの魔力をかなり使ったらしく、息を切らしている。

「ケイト以上の、魔力タンクってやつ？」

「あれ以上がいるとか…ウケるんですけど」

「ある道具をつけているからね。魔力はたつぷりある。しかし、いくら炎で作ったグン

グニルとはいえ止められるとは」

究極<sup>グン</sup>魔槍<sup>グニル</sup>

文字通り究極といってもいいほどの威力を誇る魔法。

火、水、雷、土、風、白、黒とすべての魔法に存在する。

すべての魔法の中で一番強いというわけではないが自爆にも引けを取らないほどの威力を持つ。

もちろん魔力をものすごい使用するのでどんなに魔力があっても1日2回が限界と  
言われている。

「炎魔法を使わせたら最強なUのネームを持つてるんだよ？当然よ」

「でも次は止められないだろ？」

「使わせる前に、殺してやるし！」

残り少ないはずの魔力を使いマートはエジリスに向かっていく。

「マート！無駄に魔力を使うな！」

「姉貴、余裕なくなつて口調が変わつてるヨ？」

手に炎を持ちエジリスに殴りにかかる。

エジリスは簡単に避ける。

「お姉さんは冷静だね？以前は2人とも早とちりする性格だったと聞いていたんだが」

「姉貴はもともとあんな感じだよ！あたしは姉貴の作戦に従つて行動するのが普通だし

！」

「裏ではそんなことがなあ」



「避けんな！」

いつもは接近戦なんてしないからマートは武術の類は素人も同然だ。

「まったく…、君いつもは接近戦なんてしないでしょ？」

「それがなに!？」

「魔力が残り少ないと訴えてるのと一緒だ。お姉さんの作戦の幅を狭めてるぞ？」

「あたしがあんたを倒せば姉貴は作戦をかんがえなくてすむし！」

「そうか」

エジリスがマートの拳を手で受け止める。

炎がついているにもかかわらず素手で。

「!？」

「私のほうが生きてる月が長い。君たち子供が知らない魔法だつて豊富にあるんだよ」

「くそつたれがああああ！」

「近くで騒ぐな。五月蠅い」

拳を止めていないもう片方の腕を縦に動かす。

すると動かししたところから風の刃ができ、マートの腕を切り落とす。

「ああああああああ！」

「…静かにするつもりが余計五月蠅くなってしまったな」

「マート！」

「たまらずエジリスから離れるマートにウリスが駆け寄る。

「ああああああ……。姉貴、腕……。あた、しの、腕……」

「心配するな！ケイトなら治せる綺麗に治せる！」

「ウウ……。そう、だね……」

ウリスは迷っていた。

ここで退くか、あるいはまだ戦うか。

力の差が圧倒的すぎるのだ。

クリティウス姉妹は今までほとんど負けたことがなかった。

負けたとしてもこんななボコボコにされたことはないから、最後まで戦った。

しかし、今は勝てる望みがない。

自分たちが得意とする炎魔法の土俵でさえ負けているのだ。

そんな中勝てると思えないのは当たり前。

だから退きたかった。

「ぐ……」

しかし、今は妹が腕を切り落とされるといいう大ダメージをおった。

万全の状態でも逃げ切れるか分からないのに妹がこの状態では2人で一緒に逃げる

のは困難を極める。

この状況で妹を生きて帰らせる方法は…。

「…」

ウリスはマートから手を放しエジリスのほうを向く。

「姉…貴？」

「マート、あたしがあいつとやりあうからその間に逃げな」

「なつ、何言ってるんだよ!?!」

「これしかない。今は傷を負っているあんたを逃がすのが先決だ」

「馬鹿言うなよ、姉貴!そんなこと言ってるあたしが…!」

叫んだせいで出血がひどくなる。

「そんな体じゃ戦えないよ。ここにいてもあいつがあんたを狙えば反撃はできない。そ

れがわかっててここに残るつもりか？」

「…でも!」

「いいから行け!姉のお願いがきけないの!?!」

マートはそこで少しの間震えていた。

だが

「死んじや嫌だよ?」

「姉貴を信じなさい」

答えを聞くとマートは退いていく。

ある程度離れたのをウリスは確認するとエジリスのほうに向きなおす。

「お礼を言っておくわ」

「別に。後でどうせ殺すからそんなのは必要ないな」

「いいえ、あなたがあの子を追いかけることはないわ」

「理由を聞こうか？」

「あなたはここで死ぬからよ…私とね！」

ウリスが先に動き、さっきのマートと同じように手に炎をつける。

そして拳をエジリスに向ける。

「君だつて接近戦は苦手だろ？」

「私はマートみたい頭に血は登ってないわ！」

エジリスはさっきと同じように手で受け止める。

簡単に受け止めることができた。

しかし、ここで受け止めた手から爆発がおこる。

「！」

予想していなかった攻撃に後ろに下がる。

手を少しやけどしてしまった。

それに対してウリスは腕が黒焦げになっており、おそらくもう使い物にならない。それでも痛みには耐え、魔法を唱える。

エジリスに炎の玉が襲いかかる、があまりに弱かった。

やけどした手で受け止め大きなその玉を握りつぶす。

「まさかこれでおしまいではあるまいな？」

「当たり前じゃない！」

マートは逃げていた。

確かにあそこにおいても自分は足手まとい以外の何でもない。

これが最良の選択だと言い聞かせた。

「（これでいい。あたしははやくケイトを見つけて治療してもらいあそこに戻る。姉貴だつて「信じなさい」つて言つて…）」

ここでマートはいったん止まる。

姉貴は言つた、「信じなさい」と。

「死なないで」という言葉に対して。

「死ぬわけないでしょ」ではなく「信じなさい」と言った。  
「……」

嫌な予感がする。

姉貴を信じていないわけじゃない。

だけど、それならもつと心配しなくてもいいような言い方がある。

「姉貴……！」

マートは来た道に戻り始めた。

「ほら、どうした？ 私はさっきの爆発によるやけどしか攻撃を受けてないぞ？」

「そう思っているのならおめでたいわね」

「苦し紛れの言い訳はよせ。可哀想に見える」

「言ってくれるじゃない！」

ウリスが炎の鎖を作り出し、それをエジリスに向かって投げる。

エジリスは腕でガードし、鎖が腕に当たると削れる音がする。

「残り少ない魔法をもつと有効に使えないのか？」

「あなたはもつと頭を使えないのかしら？」

「何?」

「分らないのなら見せてあげる。ほら」

ウリスが指を鳴らす。

するとエジリスの周りに等間隔で火の玉が出現し繋がっていく。

「なんだ、これは!?!」

エジリスは動こうとするが動けない。

「束縛魔法か?」

「そうよ。しかもUをもつ者にしか教えられない特別な魔法よ。簡単には抜け出せないわ」

エジリスも少ししいじってみたが何もできないことが分かったようだ。

「∴:そのようだな。だがこれからどうするんだ? 君の魔力はもうすつからかん。どうやって勝つつもりだ? それとも逃げるのか?」

「言ったはずよ。あなたはここで死ぬのよ、私と」

「どうやって私を殺す? 魔力はもう残ってないだろ?」

「そうね。確かに魔力はほとんど残ってない。でも——」

胸に手を当てる。

光る球状の何かが出てくる。

「…それは？」

「靈力」

「何？」

「いや。正確には違うんだけど、私も、詳しくは知らない」

突然ウリスが苦しそうに顔をゆがめる。

「ネーム持ちには、決まって、その家系にしか、使えない魔法が、ある。認知無キ魔法ァンノウ魔法つていうやつだ。大半は、途絶えてしまった、けどな」

「聞いたことないぞ!？」

「ネーム持ち、なめんじゃねえぞ」

ウリスが球体をエジリスの方へ向かわせる。

「まっ…」

「消えろ」

その言葉と同時に再び火柱が立つ。

グングニルよりも威力のある火柱だ。

爆風に吹き飛ばされ、ウリスも壁に叩きつけられる。

爆風が収まっても火柱は立ち続ける。

「…」



もうろうとする意識の中、壁から抜け出し、火柱の前に立つ。

中指を立てて言った。

「昨日来やがれ……」

それを言うのと地面に降りる。

ウリスはまだ生きている。

霊力を使うとき、迷いが出て少しだけ残ってしまったのだ。

人間だれも死にたくはないのである。

「マート……、今——」

歩いてマートの向かった方向へ進もうとした時、聞いてはいけない声が聞こえた。

「賢明な判断だ」

頭の中では逃げろと命令が出ているが体は動かない。

刹那、右腕と右足の感覚がなくなる。

切り落とされたのが分かったが、叫ぶ力すら残っていなかった。

「痛い……なあ」

「いや、痛い思いをするだけだから賢明とはいえないのか？ まあ、いい。とりあえず、今のは効いたぞ」

両腕がところどころ焦げている。

「正直ここまですごいものがあるとは思っていなかった。だが、君はやってはいけなことをやってしまったな。霊力を使ってしまった。殺した後はネーム持ちの霊力ならいろいろ使いようがあったのに、もったいないことをした」

エジリスが無数の鉄槍を作り出す。

「さて、死ぬ覚悟はできて…」

「姉貴！」

逃げたはずのマートがウリスの目の前に姿を現す。

しかし、ウリスにもう意識はなかった。

「戻ってきたか…。お姉さんの決死の覚悟を無駄にするとは」

「てめえ、よくも！」

「悪いが君に用はない。君の霊力に用はあるが。対面するには君を殺すしかない。お姉

さんと一緒に死ぬ覚悟はできたか？」

「ふざけんな！あたしたちは絶対死ぬもんか！」

「ならこの危機的状況を切り抜けてみる。できるわけな——」

突如、横から熱気を感じる。

確認すると同時に電磁砲がエジリスにあたる。

「なっ!？」

あまりの威力にその場に持ちこたえることができず、遠くに飛ばされる。

マートが何が起きたかわからず唾然としてると2人がやってくる。

「仕留めたか？」

「いえ、受け止めてました。飛ばされただけです」

リヨウとサクが前で止まる。

ウリスの姿を見て、時間がないのもありすぐに判断する。

「サク、この人を背負って衛生班のところへ。俺はあいつと戦う」

「分かりました。ご武運を」

リヨウはすぐにエジリスが飛ばされた方へ向かう。

「あなたは…動けそうですね。この人にもあまり時間はありません。急いで戻ります」

「あんた、あいつの使い魔だろ!? ならあたしたちのことは知ってるだろ! あたしたちで

このざまだ。あいつが勝てるわけ…」

「今のリヨウ殿なら行けるはずです。理論上なら7段階目の力かそれ以上、出せるはず

ですから」

「…それってどういう」

「説明は後です。この人の脈が弱くなりつつあります。急いで診てもらわないと」

「…分かった。今はあいつに任せる。あたしも後から追うからあんたは最高速度で姉貴

を運んで」

「分かりました」

サクとマートはすぐに移動を始めた。

## メリットとデメリット

「…きたか」

先ほどまで火柱が立っていたところから少し離れたところにエジリスは立っている。そこにリヨウがやってきた。

「無傷かよ」

「ここまで来て第一声がそれか？それに腕にやけどしてるぞ」

「さっきの電磁砲の話だよ。120%だったんだぜ、威力」

先ほど使った電磁砲を取り出すリヨウ。

すでにボロボロになっており使い物にはなりそうにない。

「物をもっと大切に使い。それ一つ作るのにいくらかかると思ってるんだい？」

「…100万弱？」

「300万だ。修理でも50万は固いぞ？」

「まさか敵にそんなことを教わることになるとは…」

「私も教鞭を振るうとは思ってなかったよ」

エジリスがリヨウをまじまじと見る。

詳しく言うとりヨウのドールを見る。

「分かるか？ 実は4段階目なんだよ、これ」

「こんなときに進化するとは…、ビムの時もそうだったな。しかし、いいのか？」

「何がだ？」

「せつかくそれ以上の力が出せるはずなのにそんな余裕こいてていいのか？」

「効果は切れてるよ。電磁砲撃した時にはすでに」

「それは残念だったな。つまり君は4段階目で私に勝とうとしているのか。コロナを装備した私に」

完璧になめているらしく無限に溢れる魔力があるのに保険をかけようともしない。

「コロナ…ね。もつと楽なものだとよかったんだけど」

「知っているのか？」

「ある不思議な幼女から聞いたんだよ。魔力が無限大になるんだっけか？」

「物知りの幼女だな」

「…なあ、あんたがマスターとか言われてる奴でいいのか？」

「そうだな。それがどうかしたのか」

エジリスが返事をするはずにとすぐにリヨウが臨戦態勢に入る。

「…もしかして地雷だったかな？」

「お前がクロを苦しめたんだな？」

「連れてきたのは私ではないんだが……」

「だが命令を出していたのはお前だな」

「そうなるな」

「十分だ、お前を殺す理由としては」

ヒュニスをエジリスの周りに配置する。

4つだったのが6つに増えていた。

「クロの友達か。いい友人を持ったものだな」

「クロの目の前で土下座をするというのなら命は助けてやる」

「なぜ私が謝るのだ？」

「あそこまで苦しませておいて、ずいぶんな言い草だな」

「あいつは帝国の国民だ。なら帝国に尽くすのは当然。私は彼に対してそこまでひどい仕打ちをしてきた覚えはない」

「謝るつもりがないなら……消えろ！」

ヒュニスがエジリスに襲いかかる。

エジリスはさつきも使った緑色の結界を自分の周りに張る。

ヒュニスの攻撃を一切許さない。

「これがあれば君は私に手出しはできない。クリティウス姉妹のときは油断したが今は油断なしだ」

「なめるなよ！」

直接リヨウ自身も攻撃を加える。

が、ヒビ一つ入らない。

「くそー！」

「こちらからも行くぞ」

エジリスが手をかざすと2つ円状の刃が出現しリヨウを襲う。

「(ここ)で5段階目の進化をするか?でも確実にとどめをさせられるという保証がない)」

リヨウが5段階目になるということは一時的に7段階目あたりの力を使えるということ。

もしそれであの結界を破ることができなかった場合、リヨウに勝ち目はない。

「考え事か?余裕だな」

エジリスが手を動かすと刃が戻ってきた。

「手動で動かせるのか!?!」

「いいや、追跡型に変えた。手動ではない」



ヒュニスを使いガードする。

これくらいなら捌くことはできる。

「2つでは足りないか……。なら——」

さらに多くの刃が出現する。

「——8あればどうだ？」

「チート野郎め！」

無敵のシールドを永遠に張れるのに追跡型の刃がリヨウに向かう。

ヒュニスをエジリスに向かわせる暇はなかった。

ヒュニスは6つ。

8つある刃はすべてを押さえることはできない。

「くそー！」

避けきれず、とうとうドールの手で刃を抑える。

「これだけやっても疲れない。やはり素晴らしいなコロナとは。この力があれば帝国も

手中に収められるか」

「な……に？」

「そのまんまの意味だ。国とは一番強い者が治めるのが当然。この国を乗っ取った後には主君も倒さねばなるまいな」

エジリスはクーデターを起こすつもりだった。

この無限の力を手に入れることで間違はなくつけあがっている。

「おっと、油断するつもりはないのにどうしても手を抜いてしまうな。やはり性格の問題か」

「これが、全力じゃないのか!？」

「君だつて見ただろう。あの火柱を。一つ目は私が放つた魔法だ」

「なに?」

「分からないか?ならその体で受けてみる。究極魔槍《グングニル》  
手に火でできた槍が現れる。

「(もしあいつの言うことが本当なら…)」

リヨウが考えてる暇はない。

だが、ここで進化すればおそらく勝ち目はない。

「消え——」

「待つてほしいの」

女の子の声のエジリスの台詞を遮る。

場違いな声と姿に何が起きたのか少し困惑したようだ。

「……この国の奴は後から出てくるのが好きだな」

「あなたが首謀者なの?」

「相手を知りたいのなら自己紹介から始めろ」

「ミリーナっていうの」

それを聞いてエジリスの目が見開く。

「なに?」

「耳が悪いの? 私はミリーナなの」

「…本当なのか?」

「私を知っているの?」

「サカジマ博士」

ミリーナもその言葉に反応する。

リヨウには誰なのかさっぱりわからない。

「…パパを知っているのね」

「パパ!?!」

「本物ならば、意地でも捕まえる必要があるな」

「捕まえられると思うの?」

エジリスがリヨウにあてていた刃をミリーナに向ける。

「ミリーナ!」

ミリーナは手で受け止める。

ドールがついているわけでもないのに血は出ない。

そして真つ二つになることもない。

本当に受け止めた。

「…こんな玩具で私を押しえられると思ってるの?」

「成程。機械人形という話は本当だったのか」

「リヨウ、あなたもなんでこんな玩具に苦戦してるの?」

「リヨウ?」

エジリスが聞き覚えがある名前に記憶をたどる。

そして思い出した。

「ああ!君がリヨウ・アマミヤか!」

「それがどうした?」

「いや、一度話があったんだよ。手、抜いておいて正解だった」

「話?」

「主君から聞いたんだけどね、君『地球人』なんだって?」

耳を疑った。

「こいつ今なんて言った?」

「何?」

「だから、君がこの星の人間じゃないのかどうかって話」

「…なんで」

「その様子からすると、本当みたいだな。帝国の王である主君が興味を示すのも納得いくな」

「なんでお前が地球を知っている!」

「いや、私は地球とかいうところについては何も知らないよ?ただ主君がね、自分がその出身だとか言うもんだから存在を知ってただけだ。そして主君が「リヨウという同類がいる」っていうから私も興味を持ってたんだ」

リヨウにはエジリスが何を言ってるのか分からなかった。

この話が本当なら帝国のリーダーは地球人?

でも、そんなことがあるのか?

地球人はここに來たって何も変わらない。

魔力が特別多いというわけではないし、ドールの力に恵まれているというわけでもない。

仮に強かったとしてもそれだけで王座にたどり着くなんて無理だ。

地球から來たということは、何歳からここに來たかは知らないが少なくともこの生

まれではない。

出生届や育ちに不備があるということになる。

王座につく人間がそんなことでいいわけがない。

「…信じてないな？」

「当たり前だ。王っていうことは国の頂点にいる奴のこと。そんな奴が地球人だなんてありえない」

「私もそう思うんだが私が生まれたころからすでに彼は王だったからな」

「名前はアキト・カザキなの」

「…情報通だな」

「知り合いなの。昔はいい友人だったの」

「昔…ね。つと、話が長引いてしまったな。お前が地球人ということは分かった。聞きたいことはほかにもあったがこれだけわかればよし、だ」

再びグングニルを構える。

「そうそう。貴方に忠告しに来たんだった」

「？」

ミリーナが本当の目的を思い出し、エジリスを指さす。

「コロナを使ってるの？」

「ああ、そうだが。それがどうした？」

「作成中におかしいとは思わなかったの？」

エジリスが思い当たることがあるのかミリーナの話に耳を傾ける。

「そんなに強いものがある。それなのに誰も作らない」

「それは巫女の霊力という手に入れるには大変なものがあるからだろ」

「それ以前にその作り方があるということ、昔にも作られたことがあるということなの。それなのにそれらしい話は全く聞いたことがない」

「…」

「あなたはその理由を見つけてから作るか考えるべきだったの。そうすれば——」

リーナがリングほどの大きさの黒い球体を取り出した。

「——あなたは無様な姿で死ぬことはなかったかもしれない」

取り出された球体は磁石に吸い寄せられるように、しかしものすごいスピードでエジリスに向かった。

エジリスは結界があるからそこで止まる。

そう思っていたのにその物体は結界を通り抜けた。

そして、エジリスの体に吸い込まれた。

エ「なっ!？」

しかし、何も起きなかった。  
体に入っても、何も起きなかった。

「…いったい何をした？」

「コロナっていうのはね、作られた当初はまさに最強の装備と言っても過言ではなかったの。でもそれは長く続かなかった」

「何？」

「コロナを装備した人が独裁政治を始めたの。でも民衆はそれをよしとしなかったの。彼らは練った、対策を。そして完成させたの」

「完成、させた？」

「コロナを粉碎する道具を」

エジリスからものすごい魔力が溢れだす。

「うおっ!!」

「これは!?!」

「コロナっていうのはね、霊力を魔力に変換する速さを極端に上げるもの。そして今あなたにあげたのはインサニア。これを装備した人は魔力の貯蔵量上がるの」

「何がしたいんだ？君がやったことは私の強化じゃないか、それでは」

「それは表の顔なの。でもそれには裏の顔があるの」



「どういう意味だ？」

「表は魔力の貯蔵量を上げる。でも裏は——」

突如、張っていた結界にひびが入る。

「あふれる魔力のせいで決壊の固定ができなくなる。つまり防御魔法を一切使えなくなる、最悪の装備品」

エジリスの結界が壊れる。

「なに!?!」

「民衆がコロナを装備した相手に対して手を焼いた理由は最強の盾が常にそいつを守っていたからなの。古人は言った、『攻撃は最大の防御』と。でもそれは違うの。結局その人は数で押しした民衆に負け、命を絶った。…リヨウ!」

「お、おう?」

「後は任せるの。相手は防御魔法が使えない攻撃馬鹿。あなたなら、倒せるはずなの」

「馬鹿な! 嘘だ!」

結界を作ろうとするが、何も起きない。

「お前は戦わないのか?」

「私はただ硬いだけの機械人形なの。強い魔法を使われればひとたまりもないの。私だって命は惜しい」

「そうか。礼は言っておく」

「最後の大仕事は任せたの。礼を言うのは私なの。私の世界を、ミューズデルを守ってほしいの」

「…分かった」

それを聞くとミリーナはいなくなった。

「くそ！クソクソクソ！」

「何焦ってんだよ？」

エジリスが怒りに満ちた顔でリヨウを睨む。

「貴様ら……！」

「防御は使えなくても攻撃は使えるんだろ？ならいいじゃねえか。それともあれかか？盾がないと怖くて戦えないの？」

「…おもしろい」

エジリスが両方の手にグングニルを作り出す。  
リヨウにも勝機が見え始めた戦いが始まった。

## イカれた力

「消しとべええー！」

エジリスが究極魔槍《グングニル》をリヨウに投げつける。

リヨウは迷わず、ドールを進化させた。

本来は自分が好きな時に進化できるわけではない。

だから進化する方法なんて知らないはずだった。

でも、その時のリヨウにはできた。

リヨ「よつと！」

グングニルを軽々と避ける。

エ「なっ!?!それは…!」

エジリスもすぐに変化に気づいた。

ドールの色は今までシルバーに近い色しかなかったのに、水色が模様のように入っている。

なにより変化があつたのは武器だ。

ヒュニス自体は何も変わらない。

だが新しく、手には三又の矛が握られていた。  
2 mほどある長い矛。

リヨウは新しく出てきた武器を興味深そうに眺める。

リヨ「矛かあ…。俺使ったことないんだけど、大丈夫かなあ」  
握った感じは悪くない。

自分に合わせて作られたという感じがある。

ふり回ってみても初めてではないかのような手さばきができた。

エ「…馬鹿な」

リヨ「お前、さつきからそればっかだな。頭が固すぎるんだよ」

エ「聞いたことないぞ！こんな短時間で2段階も進化するなんて！」

リヨ「俺だって知らねえよ。まあ、知っててもお前に教える義理はないけどな」

新しく出てきた武器をある程度振り回すと、矛をかまえる。

リヨ「悪いが、時間がない。さつきと終わらせるぜ！」

リヨウがエジリスの目の前まで瞬時に移動する。

エジリスはこのスピードについていけなかった。

矛を下から上に流すようにして振り上げる。

エジリスが気づいた時には体が切り裂かれていた。

エ「は？」

腕や足がちぎれたわけではないが深い傷がエジリスに残る。

エ「あ、あ、あ……。アアアアア！」

痛みを悶えてもおおかしくないのにエジリスはただ怒りに身を任せ攻撃をする。地面から腕が伸びる。

ゴーレムの腕のみをイメージすればそれがいい。

エ「アアアアアアアア！」

体からすさまじい電撃がリヨウに向かって伸びる。

しかし、魔法はそれだけにとどまらず、周りに暴風が吹き荒れる。

リヨ「流星、無限魔力を手に入れただけはあるな」

しかし、リヨウは焦らない。

すべてをかわしてエジリスに再び接近する。

エ「墮ちろおおお！」

グングニルを作り出しリヨウに向かって投げつける。

リヨウはもちろんかわすが当たらずともそこで爆発させることは可能である。

水でできたグングニルは吹き荒れる暴風の中で水柱を作り出し、より暴風は激しくなる。

ドールが進化したからといって、リヨウの動体視力はよくならない。

もちろんよくなるドールもあるがたいていのドールではそんなことはない。

ではなぜすべてかわせるのか。

リヨウが速くなったからである。

暴風の中は速さを使って安全なところを通り、電撃はギリギリで気づくがスピードで避ける。

7段階目の力とはそれだけ規格外なのだ。

エ「チイッ！」

だが、エジリスは体から電撃を出している。

これは直接的に防御魔法には当たらないのでつかえている。

エ（防御魔法は使えないと言ったが攻撃魔法も使いようだ！これなら近づけまい！）

こう思っただけだが油断はしていなかった。

それなのにリヨウの一撃をうけることになる。

リヨウは一定の範囲に入ると近づくことはせず、矛を投げてきた。

一定の範囲と言っても軽く10mは離れている。

その距離から投げたにもかかわらずエジリスに当たるまで矛のスピードは落ちるこ  
とがなかった。

エ「があ……！」

腹に矛が刺さり、反射的に矛をつかむエジリス。

それを見たリヨウは矛を再び引き寄せる。

鎖がついていてリヨウはそれを引っ張った。

エ「な!？」

普通ならば気づいていただろう。

だが、防御魔法を封じられ体に深い傷を負い、逆上していたエジリスは気づけなかった。

エジリス引き寄せられる途中で手を放したがバランスを崩した。

そのチャンス逃さず、矛で頭をたたく。

エ「ぐっ!？」

普通矛はそんな使い方はしないだろう。

だが、リヨウはその矛が手になじんではいえ素人だった。

体の傷に加え、頭に走る激痛に耐えられず地面に落下する。

誰の目から見ても勝敗は明白だった。

エ「……!ガハッ、ああ、ああ」

リヨ「どうした? そんなもんか?」

ドールが進化してからまだ3分弱。

話す余裕はたっぷりあったし、ここでドールの覚醒が終わっても5段階目の力が出せる。

それだけあればここまで手負いの相手を倒すには十分だった。

「……」

「おとなしく捕まるっていうなら、クロに謝るっていうなら命は助けてやる。この場面ではな」

「私が……負け、る。わけな、いだろう！」

「コロナをつけていても今のお前じゃ無理だ。おそらく意識を保ってるのがやっと。そんな状態じゃ、俺を相手になんてできない」

この世界には魔法を封じ込める手錠がある。

コロナをつけて魔力が無限と言っても魔法が使えなきや意味はない。

「究、極魔槍《グングニル》」

再び作り出す、がすぐに消えてしまった。

「……」

この世界の魔法はイメージが大切なことの一つだ（厳密には違うらしいが）。体に深い傷を負い、意識がはつきりしない人には魔法は使えない。



「諦めろ。この戦争は俺たちの勝ちだ」

「まだ…だ。 まだ…！」

エジリスはまだあきらめられないらしく、魔力を込めようとする。

だが、結果は同じ。

リヨウはもうエジリスを敵と認識していなかった。

戦争は終わったと、思っていた。

だから、出遅れた。

突如、体が重くなり体が地面にうつぶせになる。

リヨ「なっ!？」

エジリスではない。

伏兵がいた。

その兵士はリヨウを地面に張り付けながら空中から現れた。

太刀を持ってリヨウに近づいてくる。

リヨ「くそ！」

何ともある岩の下にいるかのように動けなかった（圧迫される痛みはない）。  
伏兵がリヨウの背中に降りる。

リヨ「お前…は!?!」

「さくらばだ」

太刀を振り下ろす。

刹那、伏兵が一早く反応しエジリスのほうに移動する。

いや、避ける。

リヨウの背中の上をドールが通った。

「チツッ！反応が早いわね」

「マーシヤー！」

まさに危機一髪だった。

伏兵「…」

エ「…撤退だ」

エジリスが震えながら出したくもない命令を出す。

エ「私、を、連れて、撤退しろ…」

「それは認められませんよ、マスター」

マーシヤには聞き覚えのない、だがリヨウには聞き覚えのある声がある。

エ「…T!」

T「ご苦労様でした、マスター」

リヨ「お前! ミイヤ達と戦ってたはずじゃ…!」

T「そうだったんですけど時間が来たので逃げ出しました」

リヨ「時間?」

T「国境付近で陽動作戦を行っていたこちらの部隊が全滅しました。あと5分ほどで軍隊がこちらに来るでしょう」

エ「何!」

T「私も命は惜しいので失礼します。ですがその前に——」

伏兵が太刀をエジリスに向ける。

T「裏切り者に制裁を、と思ひまして」

エ「裏切者?」

T「反逆罪ですよ。知らないとは言わせません、そこの方々も聞いていたはずですし」

エ「お前、ごときが、私に制裁だと?」

T「口を慎めよ、ゴミが」

エジリスに蹴りを入れる。

エ「き、貴様!」

T「せっかくくだから言います。私と先ほどまで一緒にいた部下たちは『観察者』です」  
E「なに：!？」

T「本来ならコロナを装備したあなたは連れて帰り再び戦ってもらおうと思つてたのですが、危険分子を持つて帰るわけにもいきませんし、そのままにしておいても無駄に情報を持つてゐる人ですし」

E「た、頼む！二度とこんなことは、考えないから！だから」

T「時間です」

伏兵が首を切り落とした。

さらに体を切り刻み続ける。

T「：そんなものでしょう。それだけすればNとかいうネーム持ちでも無理なはずですよ」

太刀を一振りし血を払いのける。

T「あなたたちも殺しておきたかったですね、無理ですね」  
空に人が何人か突如現れる。

軍隊がこちらに戻つてきたのだ。

T「それでは失礼します」

伏兵とTを魔方阵が囲む。

リヨ「待て！」

T「またの機会を、楽しみにしてます」

それを言うのと消えてしまった。

気づくと体にかかっていた重圧が消えている。

「…くそ！」

「なにが、くそつ！よ。あの状態じゃあなた死んでたわよ」

「だけど…！」

「とりあえず、大したけがはしてないようね。…良かった」

マーシヤがリヨウに抱き着く。

「マ、マーシヤ？」

「もう二度と無茶しないでって言ったのに…。またアンタは」

「別に無茶じゃなかったよ。確かに最後は油断したけど」

「敵のリーダーと戦ってたでしょ！十分無茶よ！信じてはいたけど…、心配も少しはしたんだから」

「…ごめん」

「ようやく出たわね、その一言。戦わなくてもいい戦いに自分から出てって、正義感が強いのはいいけど少しは抑えなさい」

「以後気を付けるよ」

「…嘘ね」

「ばれた？」

ミューズデルに起こった戦争は大きな傷跡を残したが終わりを迎えた。

## 眞実

「そつちの患者は？」

「ランク2です」

「先生！こちらはランク5です！」

「2の患者は後でも大丈夫だ！5と8の人をこちらへ回せ！」

「先生！ランク10です！」

「ランク9と10は全員N先生のもとへ！急ぐんだ！」

唯一攻撃を受けていない男子寮（4と6年生用）はけが人でごった返していた。あちらこちらでうめき声や泣き叫ぶ声が聞こえる。

リョ「…」

マ「…」

何もできない。

今回の戦争は恐ろしい数の人が死んだ。

一年生のころ、ビムが攻めてきた時も死んだ人はいた。

だが、今回とは規模がまるで違った。

もちろん問題は人の死んだ数ではない。

だが、それでも目の前にする人の数が違った。

リヨ「くそ！」

マ「：リヨウ、あなたはこの戦いを終わらせることに貢献したのよ？あなたが苦しむことなんて」

無力だった。

2人は人の治療なんてできない。

回復魔法は使えない。

戦いを終わらせることはできた。

でも、犠牲が多すぎた。

「リヨウじゃねえか！」

声をかけられた。

リヨ「レックス！無事だったのか」

レ「なんとかな。だけど、このぎまだ」

松葉杖をついている。

体中に包帯が巻いてあり、ところどころやけどをしている。

リヨ「ケイトに治してもらわないのか？」



レ「あいつはこの院長の息子なんだそうだ。今は他の重症患者優先だ」

リヨ「そうか…」

「姉貴は?! 姉貴は助かるんだよな?!」

ひととき大きな声が聞こえた。

マート・U・クリティウスだ。

「それはまだ…」

「なにやっつてんだよ! さっさとケイトの所に連れていけ! あいつなら…」

「体の傷は治しました。その点では無事ですが…」

「なんで絶対助かるってならないんだよ!」

「靈力の消費が激しい。今は靈力はすでに戻りましたが、いきなり9割ほどの靈力を使いました。体がついていけてないんです。ここから先は彼女自身の精神力にかかっています」

「そんな…」

リヨ「…」

マ「リヨウ…」

レ「…リヨウ、こんな時ですまんがマクアドル先生が探していた。今はお前の部屋を病室代わりにしている」

リヨ「分かった。行ってくる」

マーシャとレックスに別れを告げ、マクアドルのもとへ向かった。

「先生……」

「ああ、リヨウ君。お疲れ様」

マクアドルがいた。

服こそボロボロではあるが体は無傷だった。

「さつきまで院長さんに治療してもらってたんだ。あの人はすごいね。おかげでびんびんしてるよ」

「そうですか……」

「ずいぶん暗い顔してるね？」

「なんで先生はそんないつも通りでいられるんですか？」

「……私がいつも通りに見えるかい？」

それを言われてマクアドルを見る。

確かに、どこかいつもと違ってるような気がした。

怒り、なのだろうがこんなマクアドルを見たのは初めてだから正直どんな感情なのかは分からない。

「すいません。俺だけこんな…」

「分かってくれればいいんだ。いくら私と言えどもここまでされていつまでも黙ってるつもりはないからね」

「それってどういう…?」

「帝国に復讐をするっていう意味なの」

ミリーナが現れる。

ミ「まずリヨウ、この世界を守ってくれてありがとうなの」

リヨ「これでお前の世界を守れたというのか?」

ミ「私が予測した最悪の状況だけは避けられた。十分守ってくれたと言えるの」  
マ「そうだよ、リヨウ君。おそらく君がいなければ皆殺しは避けられなかった」

リヨ「そう言ってもらえると少しは気が楽になるよ」

ミ「…リヨウ」

ずんずんとミリーナが近づく。

リヨウの前まで来ると手で「顔を下ろせ」と合図をした。

リヨ「いったいなん、つてイタタタタ！」

ミリーナがほつぺを思いつきり引つ張る。

リヨ「イタタタタ！痛いって！」

ミ「お願いだからそんな悲しい顔ばかりしないで」

その言葉にリヨウはハツとする。

ミ「あなたは今ではいろいろな人の中心となる人物なの。そんな人がいつまでも悲しそうな顔をしていたらみんな悲しむ」

リヨ「……」

ミ「この状況で笑つてとは言わないの。でも、そんな顔しないで。私も悲しくなるの」

リヨ「……すまない」

ミ「分かってくればいいの」

リヨウを放し、笑顔を見せる。

リヨ「ただ、この場面で笑顔を見せるのもどうかと思うけどな」

ミ「いや、こういう時こそ笑顔になるべきだと思つたの」

リヨ「……間違つてるとは言い切れないけど。そういえば先生、なんで俺を呼んだんですか？」

マ「ああ、それは君の無事を確認したかったからだよ」

リヨ「それだけ……ですか？」

マ「私だつてこんなことがあつた後すぐに状況確認をするほど鬼畜でもないし、そんなに強くないよ」

リヨ「なら自分からきてくれれば——」

『失礼しまーす』

転移装置のほうから複数の声がする。

リヨ「マーシャ、レックス、フィリアに……つてみんなしてどうしたんだよ？」

マ「ク口は来てないわよ？」

リヨ「えっ？」

マク「安心しなよ、彼はラブトリアの本拠地を教えるために捜索隊と一緒に移動しただけだからさ。誰かを探しに行くみたいだったけど」

おそらく母親を探しにいったのだろう。

しかし、ラブトリアの基地の案内を任せられたということは本性が知られてしまったということである。

リヨ「先生……」

マク「安心しなつていっただろう。彼は結局こちら側に寝返つたし人質だつて取られ

てた。情状酌量の余地は十分にあるさ」

リヨ「よかった…」

マク「それよりみんなで押しかけてきて、いったい何の用だい？」

ミ「私も気になるの」

レックスが得体の知れないようなものを見る眼をする。

レ「…なんだこいつ？」

ミ「子供に対して酷い言い草なの」

リヨ「黙れよ、おばさん。レックス、こいつはこう見えてもマクアドル先生より遙かに年上だぞ？」

ミ「永遠の子供になんていうこと言うの、リヨウ」

リヨ「事実だろ」

ファイ「ちよつと、みなさん。今回ここに来たのはそういう目的じゃないでしょう？」

マ「そうよ、そんなおばさんの相手は後にして。今はリヨウに用があるんだから」

ミ「…（涙目）」

リヨ「俺に？なんだよ？」

みんなが黙り目線で「お前が言えよ」と譲り合いをしている。

ミイヤがしびれを切らした。

ミ「あんたがここの星の人じゃないってことがばれたのよ」

リヨ「…まじで!？」

ミ「それならこの変な空気も納得いくでしょ？」

マ「…あなたが敵と話しているのを聞いたの。そこであなたは地球?とかいうところから来たって」

マクアドルに助けを求める。

マク「リヨウ君。もういいじゃないか、別に話したって」

リヨ「ですが…」

マク「もともと話すつもりだったんだろ、いつかは。そのいつかが今だよ」

ミ「私もいいと思うの。別に支障は出ないの」

マク「それに…みんな聞きたがってるよ?」

全員リヨウが話すのを待っていた(ミイヤは特に興味を見せなかったが)。

リヨウは腹を決めた。

リヨ「分かった、話すよ」

そこからリヨウはすべて話した。

マーシヤにあつた時のこと、ミリーナに頼まれたこと、地球でのこと。

みんな黙って聞いてくれた。

信じてくれているのかは、分からない。

だが、「ありえない」だの「本当のこと話して」だのと頭ごなしに否定はしなかった。

マ「成程。ようやくすべて納得がいったわ」

リ「これはいい記事になるわね。書くことがいっぱいだよ」

レ「いや、しばらく新聞部は活動休止だろ」

ファイ「そうですね。それにあまり広めてはリョウさんに何か良くないこともあるかもしれないよ？」

リョ「…信じてくれるのか？こんな突拍子もない話」

すべて話し終わったらリョウの問いに対してハ？という顔をする、みんな。

マ「どういう意味よ？」

リョ「だって、お前からから見ればとてもあり得ない話だろ」

マ「あなたは嘘をついてるの？」

リョ「いや、本当のことを話したつもりだけど…」

マ「なら十分信じるに値するわよ。ねっ、みんな？」

レ「俺は信じるぜ」

リ「私も」

ファイ「私もです」



ミ「夫が言うこと信じない妻はいません」  
視界がぼやける。

いつの間にか涙があふれていた。

リヨウは別に涙もろい人ではない。

でも、ここまでうれしいことは初めてだった。

リヨ「みんな、ありがとう」

マ「泣くんじやないわよ、せつかくの男前な顔が台無しよ？」

ミ「今晚は私が慰めてあげるわ」

リヨ「いや、それは遠慮しておく」

ミ「何言ってるのよ!? 一日デートを忘れたとは言わせないわよ!」

リヨ「それは昼間に買い物付き合おうっていう話だろ？」

ミ「何言ってるのよ! 一日は夜中0時からその日の23時59分までよ! それだけあれば既成事実も十分できるわ♪」

マ「あなたはこの場面でも変わらないのね…」

ミ「マーシヤ、愛のハグができたからっていい気になってんじやないわよ! 私はそれ以上に進展して見せるわ」

フイ、レ、リ「愛のハグウ!」

マ「あ、あれはそんなんじゃないわよ！」

ミ「あなたがなんて言おうとかまわらないけどデート券は明日にも使うわ。いろいろ今日は準備しなくちゃね」

マ「あ、あんたがそう出るなら私だって一緒にいるわ！」

リヨ「なんで!？」

マ「わ、わたた、私だって……！」

マーシヤが頭から湯気を出し停止する。

リ「マーシヤ!？」

ファイ「止まりましたね……」

レ「モテる男はつらいな、リヨウ」

リヨ「お前も黙ってないでこいつ（ミイヤ）を止めてくれ！特に先生！なに『俺は関係ない』みたいな顔してるんですか？」

マク「いや、本当に関係ないし……」

リヨ「あります！生徒の男子と女子が一晩過ごそうとしてるんですよ!?!教師として止めてください！」

マク「でもリヨウ君もミイヤ君も20過ぎてるでしょ?それだったら別に構わないよ。むしろ子供ができたら喜ばしいじゃないか」

リヨ「アンタを頼りにした俺が馬鹿だった！」

ミ「許可も貰ったからじゃ、明日待っててね、あなた♪」

ミイヤは上機嫌になりながらその部屋を後にする。

リ「さつきまで結構シリアスな展開だったのに……」

レ「ミイヤはある意味大したやつだな」

ファイ「ですよね……。ところで——」

ファイリアが隅っこで体育座りしているミリーナに近づく。

ファイ「あなた、お名前は？」

ミ「……ミリーナ」

ファイ「私はファイリアっていうんです。よろしくね？」

今のミリーナには子供に接するように接してくれるファイリアの優しさがかなり響いたようだ。

ミ「……」

無言のままファイリアに抱き着く。

ファイ「よしよし……」

頭をなでるファイリア。

ミ「……私この人の娘になるの」

リヨ「ずいぶん思い切った考えだな」

ミ「私は鬼しか存在しない地獄にも仏はいるとこの人に教わったの」

リヨ「…そうか」

レ「そういえばお前何者だよ？手の奥に銀色の何かが見えるぞ？」

エジリスの攻撃を受け止めたときに皮膚を少しえぐられて中が見えている。

ミ「私はミリーナ。謎多きロボット幼女なの」

リ「なんかまためんどいのが増えたわね」

ミ「申し訳ないけど、私のことは多く話せないの。それに今はそろそろ帰らないとな  
の」

リヨ「今日ぐらいゆつくりしていけばいいのに」

ミ「パパの情報が入った以上、見過ごすことはできないの」

ポケットから一枚のディスクを取り出す。

リヨ「それは？」

ミ「あいつらの本拠地から拝借してきたの」

マク「…できればそういうことはやめてほしいんだけど」

ミ「これだけにしておいただけありがたく思うといいの。じゃ、私はパパについて調  
べるから」

そう言うとフィリアから離れる。

ミ「フィリアさん、ありがとうなの。また来るの」

フィ「フィリアでいいですよ。またね、ミリーナちゃん」

それを聞くとミリーナは消えた。

リ「…今のつて」

リヨ「瞬間移動だそうだ」

レ「本当に謎多きロボット幼女だな」

マクアドルが重い腰を上げる。

マク「さて、私も業務に戻るとしよう」

リヨ「ケガしてたのに大丈夫なんですか？」

マク「Nの力をなめちやいけないよ。完治してるさ。それに実は今のこの時間はサボりなんだ」

レ「…先生も十分謎多きですね」

マク「そのつもりはないんだけどねえ…。とりあえず君たちは今日はもう休みなさい。この部屋は取ってあるからみんな大好きに使うといい。ベッドは2つしかないけどそこはうまくやってくれ」

リヨ「分かりました」

マク「じゃあね〜」

転移装置に乗り、どこかへ行ってしまった。

リ「とりあえず、マーシヤをベッドの上に寝かせましょ。フィリア、手伝って」

ファイ「はい」

よいしょ、と持ち上げマーシヤをベッドへ運ぶ。

リヨ「そういえば、俺たちの使い魔はどうした？」

レ「使い魔は全員、町のお掃除に駆り出されたよ」

リヨ「掃除？」

レ「がれきの撤去や、生存者の救出、それと死体を運んだり…な」

リヨ「使い魔にそんなことを…！」

レ「仕方ないさ。あいつらは俺たちより丈夫で精神面でも強い。人助けにはうつつ

けだろ」

リヨ「でも…！」

リ「大丈夫よ。軍隊も動いてるし夜には帰されるわ。あの子たちには申し訳ないけど

働いてもらいましょ」

ファイ「帰ってきたら、しっかり労ってあげないとすね」

そうだな、と返事をしようとして突然睡魔に襲われる。

レ「どうした、リヨウ？」

リヨ「なんか突然、眠くなってきた…」

ファイ「ならゆっくり休んでください。私はお風呂借りますね」

リ「じゃあ私も！」

レ「俺は少し外を見てくる。風に当たりたい気分なんだ」

リヨ「分かった。それじゃ、お休み…」

リヨウはベッドに寝つ転がるとすぐに眠りについた。

目が覚める。

自分のドールの世界で。

今回は起こしに来ないのか？とあたりを見渡すと女性が一人立っている。

リヨ「…」

呼びかけようと思ったが、名前を知らない。

リヨ「…水！」

「今は水じゃないでしょ!？」

返事が返ってきた。

以前、水でできてた人？とみて間違いないようだ。

金髪の腰のあたりまである長い髪。

背は170cmほどあり特徴的なのは胸。

おそらくFカップはあるであろう。

「デカいな、胸」

「それ、セクハラじゃない？」

「俺のドールだし、この世界に警察はいるのか？」

「いないわよ」

「なら、気を使う必要なし」

リヨウは立ち上がりよく、周りを見渡す。

「…何を探してるの？」

「もう一人いたじゃん。あいつは姿見えるようになったかなあ、と思って」

「ここに、いるわ」

電子音の音がする。



影のような物体が立っていた。

リヨ「お前は影、か」

影「いい名前ね」

リヨ「皮肉か？それ」

影「とりあえず、生きて帰れておめでどう」

水「そうね、よかったわ」

リヨ「いや、お前らが進化させてくれたからだ」

水「そのお礼ならミリーナに言いなさい」

リヨ「なんで？」

水「彼女が進化をこの日まで止めてと言ってきたのよ。私達としてはとてもつらいことだったけど」

影「言うこと聞いて正解だった」

突然、水がリヨウに抱き着く。

リヨ「!…?!」

水「本当に生きててよかった。あなたが死んでしまったら、私たちは…」  
マーシャにも抱き着かれたことはあるが彼女はそんなに胸は大きくない。

初めての感触だった。

水「本当に…、本当に…」

影「水、リヨウが苦しそう」

水「そんなことないわよ。それに女子の胸に押されて苦しそうならむしろうれしいことじゃない」

影「…女子の魅力は、胸だけじゃない」

水「あら、やきもち？でも残念ながらあなたにスタイルで負ける気はしないわよ」

影「…そんなこと、ない」

水「まあ、リヨウが7段階目になればすべて分かることよ」

影「…」

影が自分の胸を確認する（服を引っ張って中を見ているようだが影のような感じなので、リヨウたちからは何をしているか分からない）。

影「…私だってそのうち」

リヨ「あの、スタイルの話になるのなら俺はもうどうでもいいのでは？」

水「それもそうね。じゃあ帰しましょうか」

リヨ「お前ら、何のために俺を呼んだんだ？」

水「いや、声が聞きたいなあと思つてね」

リヨ「労力使うわけじゃないからいいんだけど…」

水「これからもこんな感じで呼ぶことあるからよろしくね♪」

リヨ「まあ、そんな頻繁じゃないしいいけど」

リヨウの体が薄れ始める。

水「あつ！あと、お姉さんから一つ」

リヨ「？」

水「相手は1人にしなさいよ。優柔不断だといいいことないわよ？」

リヨ「なつ、何言って…！」

水「じゃね〜」

リヨウは姿を消した。

「…ねえ、水」

「なにかしら？」

「私たちの名前本当にこれになりそうなんだけど…」

「…」

「いいのかしら？」

「…次会うときまでには考えとくわ」

「…（嫌じゃないんだ？）」

## 本当の帰還

「んっ、んん〜〜！」

朝8時リヨウは起床する。

サクはまだ寝ている。

3日ほど前にレックスたちはこの部屋を移動し、部屋別になった。

でも、クロは未だに帰ってきてない。

「…今日、だったな」

襲撃があつてから一週間が経っていた。

~~~~~

「リヨウ殿、今日はどちらへ？」

「今日はクロが釈放される日だからね。ちゃんと迎えに上がろうと思ってな」

「リヨウ殿だけ…ですか？」

「他の奴らは後で合流だよ」

「薄情ですね、他の人は！」

「それは聞き捨てならないよ、サク」

2人で歩いていたはずなのに、3人目の声がある。

リヨ「スノーか」

ス「お久しぶりです、リヨウさん」

サ「聞き捨てならないって、だって本当に他にいないじゃないか」

ス「だから主の代わりに僕が来たんです」

サ「つまり来ないということでしょう？」

ス「それは、そうだけど…」

リヨ「まあまあ、2人とも。サク、フィリアだってやることあるんだよ。他の人だつて自分の仕事があるんだ。むしろ俺は暇人だよ」

サ「そんなことはありません！リヨウ殿だって、この侵略を終わらせるのに貢献しました！」

リヨ「でも侵略が終わった後は俺ずつと部屋にいただろ？」

サ「それは…」

リヨ「俺の仕事はその侵略を終わらせることだった。で、フィリアたちの仕事は今あるんだよ。なっ？」

サ「…そうですね。考えが浅はかすぎました。申し訳ありません」

ス「わかったならいいよ。これからはもつと思慮深く…、つてイタイ、痛いよ！」

スノーのほっぺをサクが引つ張る。

サ「なんでアンタが私を見下してるのよ？」

ス「見下してなんかいないよ！お願いだから放して！君のつねりは結構痛いんだから！」

サ「じゃあもう威張らないですよ？」

ス「威張らないから！ごめんなさい！」

ようやく、サクが手を放した。

スノーのほっぺが赤くなっている。

少し涙目にもなっている。

ス「痛い…」

リヨ「おい、サク、やりすぎじゃないか。結構赤くなってるぞ、大丈夫かスノー？」

ス「結構痛いです」

リヨ「よしよし」

リヨウはスノーの頭をなでる。

身長的には自分より少し小さいくらいだが使い魔だ。

どうしてもペット的な感覚が少し残ってしまふ。

顔も大人というわけではなく、どちらかというところ童顔。

子ども相手のように接してしまふ。

ス「…」

スノーも嫌がる様子はなく、むしろ嬉しがってる。

サ「…(妬)」

ス「えへへ…」

突然『ボンツ』という効果音とともにスノーが竜の姿になる。

竜の姿になれば手のひらより少し大きいだけの小さい姿になる。

リヨ「…つたく、仕方ないな。行くぞ、サク。サク？」

サ「…」

同じく効果音をたてて、竜に姿を変える。

そしてリヨウの肩に乗った。

リヨ「…ああ。悪かったな」

サクの頭をなでる。

サ「クルルルル……」

嬉しそうなうなり声を出す。

リヨウたちはそのままクロのいる場所に向かった。

ク「……」

リヨ「……」

リヨウは今クロと合流した。

しかし、クロは喜びの表情を見せる前に驚きの表情に染まっていた。

理由は……

ク「リヨウ……、いったい何があったの？」

リヨ「俺も知りたい……」

今クロの目の前にいるリヨウは竜2匹とヘビ2匹、さらに土の妖精を1匹連れてい
る。

手のひらにスノー、左肩にサク、首にラン、右腕にリン、頭に一寸法師のように小さ

くなくなったクウを乗っけている。

来る途中でみんなに会った。

くリンとランく

リ「遅くなったのく」

ラ「なったのく」

リヨ「いや、遅くはないだろ。とりあえず行くぞ」

リ「…」

ラ「…」

立ち止まって動こうとしない。

リヨ「どうした？」

リ「私たちも乗っかりたい」

ラ「たい」

少し重くなるが、まあ子供のヘビ2匹くらいならばと快く引き受けた。

くクウく

リヨウがクロがくる場所で待っていたときクウは来た。

リヨ「クウか。ご主人はどうした？」

クウ「主は見つかつた生存者の救出に当たっています」

リヨ「そうか。ケイトも大変なんだなあ」

クウ「…(ジー)」

リヨ「どうした？俺の顔に何かついてるか？」

クウ「…」

するとクウが崩れる。

リヨ「ええっ!?!クウ!?!」

次の瞬間、頭に少し重みがかかる。

手で取ってみると小さくなったクウがいた。

頭が大きいアニメに出てくる2頭身サイズのキャラクターになっている。

リヨ「何やってるんだ、お前？」

クウ「みんな、気持ちよさそうだったので、つい。だめですか？」

リヨ「…」

瞳で「乗つかりたい」と訴えていた。

リヨ「分かつたよ。ほら」

頭に乗つけてクウを待った。

リヨ「そしたらこうなってた」

ク「なかなか刺激的な再会だったよ…」

リヨ「インパクトがあつていいことだ。とりあえず、おかえりクロ」

ク「…」

リヨ「…クロ？」

ク「ごめんなさい！」

クロが突然頭を下げる。

リヨ「ク、クロ!？」

ク「僕がもつと早く、リヨウたちに本当のことを話していればこんなひどいことにはならなかった！」

リヨ「何言ってるんだよ。お前は母さんを人質に取られてたんだろ!？仕方ないことだ
！」

ク「いや、やりようは他にもあつたんだ！それなのに、僕は、僕は…！」
クロが震えている。

未だに責任を感じているのだ。

リヨ「クロ、顔上げてよ。お前がそんなことしてたら俺は何のためにお前を助けたんだか分からない。頼むから笑っててくれ」

ク「…リヨウは優しいね。でも、僕は君の友達でいていいのか、分からないんだ」

リヨ「だから、俺は何とも思っていないって！」

ク「いや、それでも…！」

リヨ「…そこまで言うなら分かった。俺にも考えがある」

ク「えっ？」

リヨウはここで以前の約束を使った。

リヨ「肝試し、覚えてるか？」

ク「あの、一年生の時にやった？」

リヨ「その時お前は言ったな？なんでも言うこと一つきくって」

ク「…」

リヨ「それを今使う。クロ、俺の友達でいろ」

ク「リヨウ…」

リヨ「お前は俺の大切な仲間だ、友達だ、親友だ。そんな奴がいなくなったら、俺はつらい。だから、なっ？」

クロは顔をあげた。

目の周りは真っ赤になっている。

ク「…ありがとう」

リヨ「当たり前前のことだろ。だから泣くなよ。それに男なんだから」

ク「うう…。でも…、だつてえ…」

クロが泣き始める。

ランとリンが人の姿に戻る。

リ「リヨウがクロを泣かせたー」

ラ「泣かせたー」

リヨ「やめろお前ら。クロも頼むから泣かないでくれよ」

ク「ごめん、ぼく、涙もろくてえ…」

リヨウはどうしていいか分からず、頭をなでることにした。

最近になって気づいたことだがこれは案外誰にでも使える（マーシャにやったら少し

黙った後、突然赤くなり殴られた）ということが分かった。

特に年下などにはいい。

安心するのだろう。

クロは年下ではないが身長155cm前後だしスノーよりもフィットする。

撫でられるとクロはだんだん泣き止んだ。

リヨ「落ち着いたか？」

ク「うん、…何から何までありがとう」

リヨ「おう。じゃ、改めておかえり」

ク「…たがいま」

そこでリヨウは今までで一番の笑顔を見た。

嘘偽りのない、満面の笑み。

後ろめたさはない、影がない本当の笑みを。

~~~~~

「———そうか、お母さんは無事だったか」

「今は療養中なんだ。リヨウに会いたいって言ってたよ？」

「もちろん。今度会いに行くさ」

久しぶりに会ったのだから話は弾む。

あつという間に部屋の前についた（転移装置の前）。

「…なんか緊張するね」

「自分の部屋に帰ってきたただけだ。リラックスしろよ」

「うん」

転移装置に乗り部屋に戻る。

部屋に戻って気づいた。

「お前ら、いつまで俺にくつついてるんだ？」

使い魔5匹は未だにくつついたまんまだ。

するとサク以外の使い魔が全員部屋の奥へ行く。

「おい、お前ら。クロせっかく帰ってきたんだから少しは静かに…」

『クロ、おかえり〜！』

奥のほうに行った使い魔たちを追っていくと突然クラツカーの音がする。

マーシヤたちが部屋で待っていたのだ。

ク「みんな！」

マ「遅かったじゃない！待ったわよ」

リ「やつと帰ってきた。いじる相手いないとつまらないのよ」

ファイ「おかえりなさい、クロさん！」

レ「遅かったな。おかえり」

ミ「おかえり、盟友」

ここで感極まって再び泣きだすクロ。

リヨ「なんだよ、お前ら。俺にも内緒か？」

マ「あんたに話したらばれそうな気がしてね」

リヨ「俺口は堅いぞ？」

レ「いや、顔に出ると思っただよ」

リヨ「それも無いと思うけど……」

マ「それよりクロ、あんた泣きすぎじゃない？」

クロはまだ泣いている。

涙もろいのは間違いないようだがいくらなんでも泣きすぎだろう。

リヨ「クロ、そこまで泣かれると喜びの涙に見えないんだけど……」

ク「ヒツク、え、ほんどう（本当）？ごめん」

マ「とりあえず鼻かみなさい、ほらティッシュ」

ク「あるがどう（ありがとう）」

鼻をかんでようやく泣き止んだ。

マ「じゃ、『クロのお出迎え会』再会といくわよ！」



リヨ「やけに張り切ってるな？」

マ「そりや暗い顔してしばらく過ごしてきたしここは楽しまないかね」

リ「そうそう。後リヨウに一つ朗報よ？」

リヨ「朗報？」

リ「学校、しばらく休校ですって」

リヨ「マジで!?!どのくらい？」

リ「5日間」

リヨ「…それだけ？」

少し不謹慎かもしれないが休校は嬉しい。

だが、たった5日間？

地球だったら1か月は固いだろう。

リヨ「短くない？」

リ「授業できる場所なんてすぐ準備できるのよ。見た目は壊滅的な被害を受けた

ミューズデルだけど核となるような中心は全然生きてるのよ」

リヨ「まあ、そこは喜ばしいことか」

リ「科学の力を結集すれば一年もあれば建物くらいなら修復できるしね。それまでは予備の建物で授業になるわ」

リヨ「でも、1学年5000人もいるここの生徒を収容できる建物なんて残ってるのか？」

リ「…死んだここの生徒は9000人弱。そして辞めた人も7000人弱よ。ここの設備じゃ自分の子供は守れないって親が連れて帰ったのがほとんど。つまり残った生徒は半分もないわ」

リヨ「そんなにいたのか」

リ「私も帰ってこいって言われた」

マーシャとミイヤ、クロえつ？と言わんばかりにリリアのほうを向く。

リ「…その様子からするとレックスとフィリアもそうなのね」

レ「ああ」

フィ「言われました」

おそらくミューズデルが作ったこの守りに不備はなかった。

今回攻め込まれた理由は一つ。

戦争だったから。

学校が戦争に向けて防衛機能を整えるなんて聞いたことはない。

だが、親にとってそんなことはどうでもいい。

攻め込まれた。

その事実だけで子供を連れ戻すには十分な理由だった。

子供を守りたい親の身からすれば連れ戻すことに対してふざけるなんて言えない。帰っても仕方ないだろう。

リヨ「…どうするんだ？」

レ「聞くまでもないだろ。俺は残る」

即答だった。

レ「せつかく4年まで来て中退？そんなの納得できるかよ」

リヨ「お前らしい考えだな」

リ「私も残るわよ」

ファイ「私だって残るつもりです」

2人も迷ってる様子はなかった。

リヨ「お前らもか」

リ「当たり前じゃない！こんな楽しいところを去るなんて絶対ないわ。それにここの方が安全そうな気がするし（クレアに対する恐怖）…」

ファイ「ここには皆さんがいます。ここまで私を成長させてくれた皆さんだけおいて自分だけ安全地帯に避難なんて死んでもごめんです」

みんな残るみたいだった。

リヨウにはわかる。

これからまた大きな戦争があると。

こちらが攻めるのかまた攻められるのかは分からないが、大きな戦争があるのは。今ではみんなも恐らく分かっている。

それでも、彼らは残るといった。

彼らは死を覚悟したわけじゃない。

自分の大切な何かを守るため、生きて帰るために一番過酷な道を選んだのだ。

ミ「あーあー、もう辛気臭いわね。私こういう空気ダメなのよ」

ファイ「…(ジー)」

レ「…(ジー)」

ミ「なによ、2人とも。私のほうを見て」

ファイ「…なんか口調変わってませんか？」

レ「俺も最近そう思ってた。おかしくないかお前？」

猫被ったミイヤしか見たことない2人はなんか違和感を感じるようだ。

リヨ「2人ともこれがこいつの素だ」

ファイ「そうなんですか？」

リヨ「もつと言うなら巫女だ」

マ、レ、ファイ『ええっ!?!』

リ「あれ? マーシヤも知らなかったの?」

マ「巫女だつてことは知らないわよ! マジで?」

ミ「マジよ」

ひらひらと札を何枚か取り出す。

ファイ「:私の知り合いにはすごい人が多いですね」

レ「同感だな」

マ「まったくね」

ミ「そんなことどうでもいいから早く始めない、お出迎え会。早く私、これの見た  
い  
んだけど」

ビール缶を手にもって開ける準備をしている。

リヨ「あつ、ビール飲むんだ?」

ミ「20過ぎててから問題なし。これおいしいのよ、おつまみと一緒に食べると」

マ「:おっさんくさい発言ね」

ミ「おいしいものはおいしいのよ。もう私が進めるわ。はい、みなさん飲み物もつて  
ください」

リ「ほらクロ。アンタが持ってないなんてありえないわよ」

ク「ありがとう」

ミ「みんな持ったわね？はいそれじゃクロが帰ってきたことを祝って…かんぱーい！」

全員『かんぱーい』

---

T「——報告は以上です」

「ご苦労だった」

帝国の王座でTはカザキにミューズデルの報告をしていた。

T「…あの、主君」

カ「なんだ？」

T「なぜ、私にはあの者がこの星ではないところから来たと教えてくれなかったのですか？」

カ「お前だけではない。エジリスはリーダーだったから、クロはリヨウに近かったから教えた。他には誰にも教えていない」

T「ですが、私にも少しくらいは…」  
カ「無駄な情報は動く者の動きを鈍くする。だから言わなかったただけだ。他には何かあるか？」

T「…失礼します」

Tはその場を後にした。

一人残ったカザキは少し考える。

予想以上だった。

5段階目にあのタイミングでなるというのは予想できた。

ミリーナがかかわっているのだからできないこともないだろうと思っていた。

だが、エジリスをあそこまで圧倒するとは思っていなかった。

7段階目の力ではない。

だとすれば8段階目？

ついにミューズデルでも完成するのか？

…ミリーナが選んできただけのことはあるな。

カ「…早くしないといけないな」

カザキもその部屋を後にした。

## 休息と戦い

### リリアの休日その1〜発覚と再開

リリアは今5日間休みということで部屋でボーっとしている（襲撃が終わった後からすべてを含めれば14日間分の休みをもらっている）。

すでに3日目だ。

同じ部屋だった人は学校はやめないがこの5日間を利用して帰省している。

今日は何かやることがあったのだが思い出せず悩んでいた。

使い魔であるランはヘビである元の姿を利用してリンといろいろなところを遊びまわっている。

あの子、私の使い魔っていう自覚あるのかしら？

「何か嫌なことがあったような気がするけど…暇ね」

リヨウにとっては嬉しいことのようにだがリリアにとって休みは正直つまらないものだ。

もちろん休みは生徒がはじけたりするので、面白い記事が書けることにつながることはあるのだが今は、まず新聞部自体が機能しておらず写真を撮っても意味はない。



彼女は常に新しい情報を提供したいのだ。

リヨウから地球についてもあらかた聞いたし（そもそも記事にはできない）ミューズデルは修復作業中で立ち入り禁止だし本当にすることがない。

「だー、もう！だれか私に面白い何かを提供しなさい！」

孤独とつまらなさに耐えかねて叫んでみるが誰にも聞こえることはない。

しかし、神はリリアを見捨てていなかった。

叫んだ直後インターホンが鳴る。

腕輪を起動して見てみるとマーシヤとファイリアがいた。

「マーシヤにファイリアじゃない。どうしたの？」

「あんた、暇でしょ？ちよつと付き合ってほしいことがあるのよ」

「リョーカイ。どうぞ、どうぞ」

何か重要なことを忘れてるような気がするがリリアはそれを考えるのをやめた。

く5分後く

「お邪魔します」

リ「はいって、はいって。私ちょー暇だったの」

マ「分かっているわよ、それくらい。でも、今日はそんなあなたに話題を提供しに来たのよ」

リ「どんときなさい！」

さすが持つべきものは友達ね！

こういう時に来てくれるなんて。

マ「男のおとし方について知りたいの」

リ「ええ、いいわよ。男…えっ？」

今、この人ナンテイツタ？

リ「今、なんと？」

マ「だから男と付き合うにはどうしたらいいかって聞いているのよ」

…。

リ「…マーシヤ、あなたはまだ若いんだから人は選ぶべきじゃ」

マ「なんでそうなるのよ!？」

リ「誰でもそれ聞いたらそうなるわよ!今の相談、結婚できなくて、それでも結婚し

たいていう適齢期を過ぎた人がする発言よ!？」

マ「違うわよ!まず私じゃないの」

リ「じゃあ誰が…」

ああ、なるほど。

リ「フィリア、ね？」

フィリアが顔を真っ赤にする。

いや、初々しいわ。

クレア先輩じゃないけど、本当にかわいいわね。

フィ「べ、別に私はそんなこと言っていないんですよ？でもマーシャさんが『暇だからアンタとケイトをくつつける！』とか言っただんで仕方なく、来たんです！」

リ「アンタは本当に他人の恋バナ好きね？」

マ「いいじゃない、別に。面白いし、それ以上に暇だし」

リ「まあ、確かに暇だしね」

マ「でさ、あんた一度男と付き合ったことあったわよね？」

リ「13歳のときね。1年で終わったわよ？」

マ「それでも付き合ったことあるんでしょ？だからその秘訣をこの子に伝授してほしいのよ！」

…マーシャ。

それは無理ってものがあるわよ。

別に特別なことをしたわけでもないの秘訣なんてあるわけじゃない。

国語の読み取りが得意な人に「どうやって読み取ってる？」って聞いてると同じよ？

リ「秘訣なんてあるわけないわよ」

マ「なんかお勧めする恋愛についての本は？」

リ「私あの手の本は信じてないから読まないの」

マ「え〜」

ファイ「え〜」

リ「なんでファイリアまで…。いい？ある研究でね、女子は男子のいいところを見てだんだん好きになっていくって人が多いうって結果が出たのよ。でも男子は一目惚れのほうが多かったのよ。意味わかる？」

マ「つまり女子は好きな男子を前にきれいな格好しても第一印象で決まってしまうっていうこと？」

リ「そういうこと。まあ、あくまでも一目惚れが多いってだけで中身を見てだんだん変わっていくって人もいるわよ？ケイトがどちらかは知らないけど」

ファイ「つまり私の第一印象は…」

記憶をたどる。

顔だけの第一印象なら1年生の時、ビムが襲ってきたことで気絶している顔がケイトにとってのファイリアの第一印象。

でも起きているときの第一印象は…

「ファイ……あ」

ファイリアの顔が一気に暗くなる。

起きているときのケイトにとってのファイリアの第一印象。

それはデパートで迷っていた時に会ったファイリアだ。

その時のファイリアは……

「ファイ……」

「リ……」

「マ……」

かける言葉がないわね……。

酷すぎとは言わないけど甘く見積もってもあの服装は下の上。

「リ」で、でもほら！ケイトは紳士だし見た目で決めたりはしないわよ」

「マ」そ、そうよ！きつと今のファイリアを見ていてくれるはずよ？」

「ファイ」うう……。あの頃の私が憎いです……」

なんかいちやいけない情報を口にしちやったみたいね。

こうなったら……

「リ」ファイリア！そんなところで落ち込んでる暇があったら惚れさせるための努力をす

るわよ！」

「でも、第一印象最悪ですよ？」

リ「甘いわね……。いいフィリア。一目惚れするっていうことは簡単に心が移っちゃうってこと。ここまでは分かる？」

「はい」

リ「つまり、ここであなたがきれいな、ケイトにストライクなような恰好をすれば一目惚れするのよ！（こじつけ）」

フィ「……」

リ「フィリア、あなたにもまだ機会はある！諦めちゃだめよ！」

「……はい！私頑張ります、フィリア先生！」

フィリアの顔に輝きが戻る。

マ「……フィリア」

リ「なに？」

マ「一目惚れって初めて見た人にしか使えないんじゃないの？もはやあなたが言っていることは一目惚れじゃな——」

リ「しー！今はそれでも仕方ないの！今のフィリアを見なさい！」

マ「……」

リ「あなたはあれをまたどん底に落とすの？」

マ「…分かったわよ。ケイトが紳士であることを祈ってるわ」

リ「私も切にそう思うわ」

後に引くことはできないことをやってしまったような気がするリリアだった。

~~~~~

「で、リリア先生。まず何をすればいいんですか？」

リ「そうねえ…。マーシャ君、何か案はあるかい？」

マ「なんでマクアドル先生みたいになってるのよ…。っていうか私達はあなたにききに来たのよ？」

リ「そう？じゃ、まず印象を変えるところから始めましょ」

「印象を、ですか」

マ「そんなに簡単に変わるもん？」

リ「あなただって髪の色赤にしたらかなり変わったわよ。少し変えれば結構変わるのよ。で、まずお手軽なのから」

部屋にある袋から物を取り出す。

「それは…メガネ？」

リ「そ。メガネよ。最近メガネっ子にでもなるうかなあと思って集めてたの」

マ「成程。これならお手軽ね」

リ「でも、かけるとかけないとはかなり違うのよ。でも、ここで問題が一つ」
「なんですか？」

リ「ケイトがメガネっ子をいいと思うか、悪いと思うかっていうこと」

マ「確かにそうね。相手を特定するとなると一般の人がどうなるかなんて関係ないものね」

リ「フィリア、ケイトはメガネっ子好きだと思う？」

「私に聞かれましたも…、知りませんよ」

リ「好きな相手の好みくらい知っておきなさい。ケイトがDMだったらどうするの？」

「…それは、ないと思います」

マ「その点は私も心配ね」

ケイトはネーム持ち。

しかも回復魔法を得意とする。

嫌な考え方をすればそうなってしまう。

「マーシャさんまで…。ケイトさんはそんな人じゃありません！」

リ「私も言うてはみたけどやっぱり嫌ね…。つていか話それてるし」

マ「…そうね。この話はやめにしましよ。で、ケイトの好みはどうやって調べるの？」

リ「ぶっつけ本番で行く？」

「賭けですな」

リ「いや、失敗したらまたやり直せばいいのよ」

「3度目はありますかね？」

マ「じゃあ、聞きましようよ。本人に」

「そ、そんな無理ですよ。私があるみたいじゃないですか…」

リ「気はあるでしょ。そこまで言うなら、リヨウにでも聞いてみる？」

「それいいですね。聞いてみてくださいよ」

リ「他力本願ね…。まあ、面白そうだしいいわよ？」

~~~~~

リ「——分かったわ。じゃね」

電話を切るリリア。

「どうでした？」

リ「知るわけないだろ、ですって」

マ「まあ、そうよね。聞くならシューレスにするべきじゃない？」

リ「でも私、番号知らないわよ？」

マ「私も」

「私もです」

…手詰まりね。

今聞こうにもまだ働いてるっていつてたような気がするし。

そこまでして聞くのはあれだし。

リ「…じゃあ、メガネはやめましょ。こっちにするわよ」

「それは…小物（アクセサリー）ですか？」

リ「これなら好き嫌いはいないはずよ。うまく決めればかわいくなるわ」

マ「確かに小物ならいいかもね。でも…」

「これは…」

えっ？

なによ？

私の小物に何かついてる？

リ「フィリアはこのクマがいいんじゃないかしら」

「…この年でクマのヘアピンですか?」

マ「…きついものがあるわね」

リ「えっ?クマだめ?キリンのほうがいい?」

マ「そうじゃないわよ!何この子供のお菓子とかに描かれてそうな絵をしたヘアピンは!?!」

リ「かわいいでしょ?」

マ「この年でこのヘアピンは痛いわよ!」

「ちよつと、私もこれは…」

リ「なんで!?こんなかわいいのに!」

マ「置物としてあるならいいけどヘアピンはないわよ!アンタもしかして下着にクマの絵でもついてるんじゃないでしょうね?」

リ「お気に入り一枚あるわよ?」

マ「…なんかリリアの新しい一面を見たような気がするわ」

えっ?

なんで、そんな批判的な目をしてるの?

こんなにかわいいのにダメ?

それともうらやましくて素直になれないのかしら?

リ「そんなにほしいの？なら売ってる店教えるわよ？」

マ「いらぬわよ！なんでそう考えるの!？」

リ「違うの？」

マ「違うにきまつてるじゃない！」

リ「まあ、そうよね。下着変えたつて男子には見えないし。やっぱりメガネにする？」

マ「…そうね。メガネで変わりましたよ（なげやり）」

「結局そうなるんですか？じゃあ私はこの赤いメガネを…」

リ「駄目よ、フィリア。あなたはやっぱりこれ以上装飾品を増やしちやだめよ」

「突然何ですか？」

リ「よくよく考えたらあなた、銀髪のポニーテールで身長小さいっていう3つの武器を持つてるのよ！それにメガネなんて加えたら…ずるいわよ！」

「なんですか、その理由!？しかも私の髪灰色ですよ？どちらかというと」

リ「メガネつ子の座は私がもらうわ！普通の髪の色で、普通の身長で、普通の髪型だった私にもついに特徴ができたわ！」

マ「特徴がないって思ってたのね…」

早速、フィリアがかけようとしていた赤色のメガネをかける。

リ「どう？」

「似合ってるとは思いますがよ」

マ「もはやフィリアの話からそれてるわね…」

リ「でもやつぱ男子の意見も聞いてみたいわね…。よし外行くわよ！」

マ「私達も？」

リ「いいじゃない。赤毛にメガネに灰色ポニーテール！きつと注目を——」

「なんだ、騒がしい」

マ「シヤでもフィリアでも、リリアでもない声がする。

え？

なんであの人が？

リ「先、輩？なんで、ここに？」

ク「なんだお前、忘れたのか？腕の弁償は後日するって言ったのはお前だろ？野外では嫌だって言うから仕方なく妥協してやったんだぞ？」

ここでリリアは思い出した。

今日なぜ嫌な感じがしていたのかを。

本能的に危険を感じ取っていたのだ。

リ「…あつ（汗）」

ク「思い出してくれたようだな。何よりだ。ところでそれはサービスか？」

リ「へっ？な、なにがですか？」

ク「メガネだ。俺、メガネっ子は好きなんだよ。そうか、友達を呼んでまで俺の好みに応えようと…」

リ「ち、違います！これは…！」

ク「いや、何も言わなくていい。さっさと始めよう」

リ「いや、先輩!? 考え直してください！」

マ「じゃ、その…」

「私達はこれで…」

リ「2人とも？」

ク「ああ。わざわざありがとう。感謝しているぞ」

「いえいえ」

マ「それでは…」

リ「待つてよ、2人とも！お願いだから！助けて！」

ク「安心しろ、リリア。前も言った通り貞操は守ってやる」

リ「お願いだからやめ…、いやああああああ！」

リリアはそのあと、メガネは結局やめたという。

## 活気を!

リヨウはテンションが低かった。

それはなぜか?

理由は単純、学校が始まったからだ。

転移装置を使い移動するので教室の雰囲気こそ変わるが、あまり楽しみな感じがしない。

何よりリヨウのテンションを下げたのは…

「ありえない…」

「リヨウ、仕方ないよ。場所がないんだもん」

「でも俺はBコースだぜ?それなのに戦闘訓練がないとか…ありえない」

「Aコースの人だつてつまらないことに変わりはないんだから、そんな気分下げないでよ」

戦闘訓練がない。

それはリヨウにとっては死の宣告と何ら変わりはない。

地球にいたころは勝手にさぼってボーっとしていることはあった。

だがそれは高校生だったからということがある。

リヨウは地球にいたままなら大学へ行くつもりだった。

特に夢はなく、なりゆきで行ったところで探すかなと思っていたのだ。

中の上となれば少し勉強すれば国立はギリギリかもしれないが私立なんてほとんどへつちやら（一部すごいところは除く）。

だからサボっていた。

だが今のリヨウは大学に通ってるのと何ら変わらない。

この学校を卒業すればリヨウも立派な社会人になる。

おそらく軍隊的なものに就職しようと思うが、軍隊だつて教養は必要。

実力だけでは入れないのだ。

「お前はよく勉強寝ないですつと聞いてられるよな、クロ」

「大切なことだよ？リヨウも起きないと」

「まだ授業始まるまで5分あるから寝る」

「寝るって…、起きれるの？」

「寝起きに自信はない。だけど、いつもより静かだしな。寝るのは早いと思う」

「人…、減っちゃったよね」

4年生で死んだ人と、やめた人は2700人弱。



それでも今、この教室には残った生徒が集められているのにぎやかでもおかしくないのだが、みんな暗い。

無理もないと言えばそれでおしまいが、あれから2週間は経っている。

「早く、活気戻ってくれるといいんだけど」

「俺もそれは賛成だな。だけど今の俺たちにできることは何もない。黙って時が流れるのを待つしかないさ」

「僕がもつと早く……」

「クロ」

リヨウがクロのほっぺを引っ張る。

「イタタ……。ごめんリヨウ」

「その話はどうしない約束だ。頼むからやめてくれ」

「うん。本当にごめん」

「そこまで落ち込まなくても……。ともかく俺は寝るから、サク、時間が来たら起こしてくれ」

「分かりました、リヨウ殿」

リヨウは机に頭を伏せる。

小学生の頃は「授業で寝るとかどんだけ頭悪いやつだよ」と思っていたが中学あたり

からわかり始めた。

わからないから寝るんじゃない。

つまらないから寝るんだ。

小学生の頃もつまらない授業はあったがおそらくあれは実はつまらない授業ではなかつたのだろう。

小学生に戻りたい…、なんて思いながら眠りに落ち…かけた。

「リヨウ殿、チャイムが鳴る10秒前です」

「…冗談」

「冗談ではありません、リヨウ殿。ほら」

チャイムが鳴る。

リヨウは眠い中授業を受け始める。

~~~~~

「終わったあああ！」

「そんなに叫ぶほど？」

「俺にとつてはな。退院直後の外の空気を吸った患者の気分だぜ」

「退院直後なら叫べないと思うけど…」

授業が終わり帰る準備をする。

後帰ったら飯食って自由時間!

ドールのメンテナンسدでも自分でやってみようと楽しみを作る。

「リヨウ、ちよつといい?」

マーシャが話しかけてきた。

フィリアとリリア付きだ。

「なんだ?」

「あなたのいた地球つてところの風習についてなんだけど」

「話せることなら全部話したが?」

「女の感が働いたのよ。でもここじゃ少し聞きづらいことなのよ」

「なら俺の部屋にするか?クロもいるけど」

「いいわよ。じゃ準備ができ次第すぐ行くから」

「了解」

マーシャたちが教室を出て行った。

「いったいなんだろう?」

「さあな、女3人いたからひな祭りについてでも教える準備しておくかな」

「ひな祭り?」

「地球にそういうのがあるんだよ。女子が聞いてきたらそこで話すから楽しみにしてろ」

「そうするよ。じゃ早く僕たちも部屋に戻って準備しよ」

「そうだな」

リヨウたちも教室を後にする。

~~~~~

「…今なんていった？」

リヨウの部屋に女子3人、男子2人、使い魔4匹？がいる。

そんな空気からは考えられないような質問をぶつけてきたのだ。

マ「だから、告白を応援するような風習は何かないのかって聞いているの」

リヨ「告白って…、なにか犯罪でも犯したのか？」

マ「その告白じゃないわよ！好きって想いを伝えるほうの告白よ」

リヨ「なんでそんなまたいきなり…」

予想外の質問に戸惑るリヨウ。

リヨ「つていうかそんな風習を聞くってことは誰か告白でもするのか？」

リ「実はフィリ…むぐぐ！（口を押えられる）」

マ「私が恋バナ好きなの知ってるでしょ?だから聞いてみたかったのよ」

リヨ「なんだ、つまんねえな」

小声←

リ「ちよつと何よ、フィリア」

フィ「なんで教えようとするんですか!?!それに私は告白するとは言ってません!」

リ「何言ってるのよ。ここまで押し込んだからあなたは告白するわよ」

フィ「…否定はしませんけど肯定もしませんからね?」

リ「その時点で決定事項ね」

リヨ「でもまあ、そういう風習はあるっちゃあるな」

フィ「ホントですか?」

リヨ「なぜフィリアがそこかみつく?」

フィ「…なんでもないです」

リヨ「?まあいいや。でその風習の名前だけど、『バレンタイン』っていうんだ」

リ「Valentine?」

リヨ「なぜそんなに発音がうまい?」

リ「なんとなく言ってみたらこうなった」

マ「それより何よ。そのバレンタインって?」

リヨ「簡単に言えば女子が好きな男子にチョコをおくるんだよ」  
今は10月半ばなのだが。

ク「なんでチョコなの？」

リヨ「そこまでは知らねえよ。まあ、最近じゃ友チョコのほうがよく見かけたけどな」  
マ「友チョコ？」

リヨ「友達同士でチョコを交換し合うんだよ。手作りとかでやってる人も結構いたよ  
うな気がする」

マ「へえ…。面白いわね。で、あなたはいくつもらつてたの？」

リヨ「…ここに来る前、義理チョコが5つ」

マ「モテなかったのね」

リヨ「うっ！」

リヨウに痛恨の一撃。

リヨ「で、でも義理すらもらえてない人もいたし。俺はそいつらから見ればある程度  
は…」

リ「底辺の争いね」

リヨ「ぶっ！」

ファイ「視点を変えればもらってない人は、恥ずかしくて上げれない女子がいるかもと

いう可能性がありますよね」

リヨ「がはあっ!」

ク「リヨウが吐血した!?!」

まさかこの世界に来てそんなことを言われるとは…。

なんか思ったよりダメージが大きいぞ?

サ「リヨウ殿、しっかりしてください! チョコがほしいのならば私が作ります!」

マ「義理チョコよね?」

リヨ「…」

リン「リヨウが止まったー」

ラン「止まったー」

サ「安心してくださいリヨウ殿! 本命チョコです!」

リヨ「ホント?」

フィ「使い魔からもらう気ですか?」

リヨ「…」

ク「しっかりして! なんなら僕が…!」

リ「あなたは男でしょ?」

ク「リヨウの助けになるのなら僕はこの身を投げ出す所存だ!」

マ「なにその使い魔みたいなセリフ!?これくらいで死を覚悟しないでよ!」

サ「クロ、申し訳ないがこれは私と主の問題です!」

マ「いや、違うでしょ?」

ク「僕は悪いけどサクよりリヨウと長い間一緒にいるんだ。リヨウの好みならサクより知ってるはずだ!」

マ「何盛り上がってるの!」

サ「なら勝負です!どちらが主が好きなチョコを作れるか!」

ク「望むところだ!」

論点がそれ始める。

もともと討論するために来たわけではないのだが。

マ「:チョコって相手に合わせなきゃいけないの?」

リ「そんなことは言ってなかったわよ。とりあえず気持ちがかもつてればいいんじゃない?」

ファイ「しかし、地球の人は面白いこと考えますね。チョコで告白ですか」

マ「考えたこともなかったわ。せいぜい得意料理をふるまうことくらいしか」

ファイ「得意料理なんてあるんですか?」

マ「ハンバーグは得意よ」



ファイ「へへ。私、料理なんてカレーくらいしかしたことないですよ」

マ「それって、料理に入るのかしら…?」

リン「私ハンバーグ食べた〜い」

ラン「カレー食べた〜い」

マ「アンタたちが使い魔らしくなったら食べさせてあげるわよ」

リン「ケチ〜」

ラン「けち〜」

マ「事実を言っただけよ。本当に使い魔らしく…ってリリア、あんた何ブツブツ言ってるの?」

リリアが何か小さな声で言っている。

しかめっ面で考え事をしていたようだが、マーシャが声をかけると同時にいい案が思いついたのか明るい顔をする。

リ「いいこと思いついた!」

マ「私はホワイトチョコにしようかしら」

ファイ「じゃ、私は普通のチョコで…」

リ「なんで無視するのよ!」

マ「だってあなたの案、いいものを見たことがないんだもの」

リ「今回はきつといいもののはずよ！」

ファイ「へー、ソウナンデスカ」

リ「何よ、その棒読み！いい？この『バレンタイン』を生徒全員に知らせるの」

マ「そしたらどうなるのよ？」

リ「これを学校の公式ではないけど行事として取り入れる。そしてこのイベントは『恋愛』がテーマ！この話を聞いて盛り上がりがない人がいる？」

ファイ「…フム？」

リ「私、このお通夜ムードが耐えられないのよ。このイベントがあれば少しはみんな盛り上がるんじゃないかなあって。そうすればこのムードも…」

マーシャとリリアはあつげにとられている。

いつも記事のことを考えた意見を出すリリアがこんな意見をしたのだ。

無理もない。

マ「あなた…熱あるんじゃない？」

リ「ないわよ。私がこんなこと言ったのがそんなにおかしい？」

ファイ「いつものリリアさんなら考えられませんかよ」

リ「私のイメージって…」

マ「ともかく、あなたの考えには賛成よ。生徒がへっただけでも活気がなくなっただけ

ていうのに、いる人たちの活気もない。おそらくこんな大きなイベントがあれば少しはにぎやかになるわよ」

ファイ「でも、みんな参加してくれませんか?」

リ「大半の女子はここが腕の見せ所よ。でるはず!もし数が少なければ私の情報力を使つて参加させるわ…」

マ「あんた、それ新聞部の範疇じゃないわよね?」

リ「男子もそわそわして少しは盛り上がるでしょ。楽しみね」

ファイ「で、どうやってみんなに知らせるんですか?」

リ「私が新聞の一面にでかでかと載せるわ。今回は一人一枚に配れるくらい発行してやるわよ」

マ「それなら間違いなく伝わるわね。じゃ、後はよろしく」

リ「何言つてんのよ。あんたにはやることあるでしょ」

マ「何言つてるのよ?新聞部じゃない私が新聞作るの手伝うつていうの?」

リ「違うわよ。チョコ作つてるところ一枚撮らせなさい」

マ「…なんで?」

リ「なんでって、そりゃチョコ作つてる女子載せたほうが男子は盛り上がるし女子も『私も!』つていう人が出やすくなるからじゃない」

マ「なんで私がモデルなのよ？」

リ「だって、発案者が動かなきゃだし。私は新聞発行、フィリアはケイトのものだから変質者が出てもらっても困るし」

フィ「な、ななな、何言ってるんですか！」

リ「で、あんたは何もしてないからモデル決定！」

マ「いやよ！やるならもつと人気のある人でも使えばいいじゃない」

リ「あなたは女子からも男子からもある程度人気あるのよ。かわいいとかっこいいを兼ね備えてるみたいね」

リヨ「写真撮るならエプロンつけながらチョコをかき混ぜてる姿がいいぞ」

リヨウが復活し会話に参加する。

サクとク口はいまだに何か言ってる（スノーが巻き添え食らってる）。

マ「こんな時に！」

リ「それは地球の常識？」

リヨ「常識といわれるとあれだけど、俺のイメージはそうなってる」

リ「決定ね」

マ「私納得してないわよ!?!」

リ「あなたに決定権はないわよ？」

リリアが一枚の写真を取り出す。

リ(実はこの紙、白紙なんだけどね)

マ「ちよ、何よそれ!？」

リ「秘密よ♪知りたかつたらモデルを辞退すればいいんじゃない？」

マ「それでも友達!？」

リ「あなたをモデルデビューさせるっていつてるの! 友達の好意を受け取りなさい  
!」

マ「…変に写さないですよ？」

リ「かわいく写すのは保証するわ! そうと決まれば準備しなくちや。忙しくなるわ  
よ」

リリアが部屋を出て行った。

マ「…」

リヨ「がんばれよ？」

マ「あなたの大事な部分、思いっきり蹴り上げてあげましょうか？」

リヨ「お前のはシャレにならない」

マ「ケイトがいるから治せるわよね？」

リヨ「やめろ、マジで」

マ「はあ…なんで私が」

リヨ「いいんじゃない？お前、顔も体もかなりいい感じだし」

マ「なっ…!」

リヨ「髪色も似合ってるし、普通にかわいいんだから——」

マ「な、なな何言ってるのよ、あんた！」

リヨウの大事なところに重い一撃が入る。

リヨ「…!?!」

マ「わ、私リリアのとこ行ってくるから！」

フィリアがそれを見つめる。

素直になれないとはかわいそうだな、と。

フィ「…リヨウさん、大丈夫ですか？」

リヨ「ギリギリ…なんとか。潰れてないみたい」

フィ「まあバレンタインを楽しみにしてください。きつとデレますから」

リヨ「誰が？」

リヨウもツンデレという存在は知ってる。

もちろんこれだけを見てツンデレとは断言できないが、客観的に見ればマーシャが

リヨウに気があるのは一目瞭然。

だが、主観的になるとわからないこともあるようだ。

ファイ「私は義理にしておきますが楽しみにしててください」

リヨ「そうしたいのはやまやまなんだがな…」

ファイ「何か問題でも？」

リヨ「地球のバレンタイン、2月14日にやるんだけど」

ファイ「…」

フィリアは今ここでそれ言う？という顔をする。

まあ、確かにタイミングを逃したリヨウが悪いのだが。

ファイ「ここは地球じゃありません。この星なりのアレンジっていうことで」

リヨ「そうか。まあいいんだけど」

ファイ「じゃ、私は行きますけど、いつまでそこに横たわってるんですか？」

リヨ「痛みがとれるまで」

ファイ「…ご冥福をお祈りしています」

リヨ「まだ死なないよ!？」

ファイ「それでは。あと、スノーは話が終わり次第返してくださいねー？」

リリアも部屋を後にした。

その後マーシヤはモデルとして起用され、ランとリンを連れ一緒にバレンタインの宣伝に載った。

しばらくの間、マーシヤに対するファンレターが止まらず、変質者（ストーカー）まで出て、本当に困ったという。



## レッツmake!

「どれがいいんでしようか?」

マ「どれも一緒だと思うけど? 安いやつでいいんじゃない?」

リ「ちよつと、あんたがそんなこと言つちやだめよ! バレンタインのイメージ女子なのよ?」

今、マーシャ達は校内にあるコンビニ的なところ（購買よりも規模が大きい）でチョコを選んでいる。

周りには結構な数の女子がいて、ただチョコが食べたいだけの男子にとってはつらい空間だ。

バレンタインの計画を新聞に発表してから3日が経っていた。

当初はどうなるかとハラハラしていたが、積極的な人が多いおかげで参加する人が多かった。

あとは周りが参加するなら私もという感じで消極的な人もほとんど参加。

ただ告白的な面だけでなく、友達と交換だったりいろいろな手法を紹介したおかげで参加もしやすくなった。

活気が戻っただけでなく、チョコも売れて購買の販売員も大喜び。  
一石二鳥だ。

マ「つていつてもねー、個々のチョコの味の違いなんて分からないじゃない。あんた、気持ちを含めればいいとか言つてたでしょ？」

リ「それはそうだけど…、ねえ？」

マ「言い返す言葉もないようね。私だつて他にも買いたい物はあるの。まったく、ひどい出費だわ」

そう言いながらチョコを何個か手に取りかごに入れる。

「そんなに買うんですか？」

マ「友チョコよ。交換し合うつて決めたの、クラスの女子と。だからこれくらいはな  
いといけないのよ」

リ「結構な数ね…。私はそんなに上げる人いないけど」

「私もさほどではないですねえ…。あつ、このチョコおいしそう」  
そう言いながら3つほど手に取るフィリア。

マーシャとリリアの顔が驚きに包まれる。

マ「あんた、それ3つも買うの!?!」

「えっ、これもしかしてまずいんですか？」

リ「いや、おいしいけど。この値段……」

「少し値段は張りますけど、これくらいはしないと」

マ「私、これ絶対ここに置いておくべきものじゃないと思うんだけど」

リ「同感ね。これ2つで私の1か月のお小遣いに相当するんだけど……」

「そんなに高いですかね……?」

マ「あなた、やっぱり家お金持ちでしょ?」

「そんなことないですつて。なんなら今度、うち来ます?」

リ「いいわね。ぜひ行ってみたいわ」

マ「なら冬休みにでも行こうかしら」

「いつでも歓迎しますよ」

リ「カメラでも持って行って……つと。今はそれは後にしないと。後ろ聞えてるし早

く行きましょ」

マ「そうね。私も早く帰って作りたいわ」

レジに並ぶ3人。

と、フィリアがマーシャのかごにおかしなものが入っていることに気づく。

「マーシャさん。それ、何ですか?」

マ「えっ?」

「一つだけちよつと高めのチョコが入ってますよ?」

フィリアの程ではないが確かに少し高そうなチョコが一袋入っている。

マ「あ、あれ? おかしいわね…。まあ、もうレジに並んでるしせつかくだから買っちゃおうかしら(震え声)」

「マーシヤさんのかごなら持つておきますからいららないなら返してきたらどうですか?」

マ「い、いいのよ別に。せつかくだからこれも使つて作ろうかしら」

「…なんか隠してません、マーシヤさん?」

マ「…(ギクツ!)」

リ「フィリア。あんたも気づくの遅いわね。これはいいのよ、ここに入つてて」

「間違いじゃないんですか?」

リリアがにやつく。

リ「ツンデレの年頃の女の子なんてこんなもんよ。どうせ、リヨウに上げる分でしょう?」

マ「な、何言ってるのよ! 別にそんなつもりないわよ! 一応あいつにも上げるつもりだけど別に本命とかそういうやつじゃないんだから」

「…素直になれない女の子は大変ですわねえ」

マ「意味わかんないこと言ってるんじゃないわよ。それに素直になれないのはあなたでしよ。さっさと正面切って告白すればいいのに」

「無理に決まつてるじゃないですか。そんな恥ずかしい……」

リ「私から見ればあなたたちはどっちも同じよ。自信がないのかどうかは知らないけどさっさと告白すればいいのに。特にマーシヤ、あなたにはミイヤっていう強敵がいるんだからね」

マ「うっ……」

リ「早くしないとリヨウが折れるかもよ?」

マ「それは困……って何言わせてるのよ!……っていうかさつきから私とフィリアのことはっかだけどあなたはいないの?好きな人!」

リ「そうねえ……。自分から告白はしないけど付き合ってもいい人はまあまあいるわ」

「誰です?」

リ「リヨウ」

マ「そこで!」

リ「ケイト」

「本当にやめてください」

リ「クロ」

マ「そういう趣味？」

リ「クロに失礼ね。あと他にも3、4人いるわよ？」

マーシャとフィリアの顔が「うわ…、そういう人なんだ」と訴えている。

リ「なによ、その顔。別に痴女つてわけじゃないわよ。ただ付き合ってもいいっていう境界線は超えてるってだけよ」

マ「なんで上から目線なんだか…。っていうかクレア先輩は入ってないのね？」

リ「私は健全よ。そつちの道には絶対行かないわ。それに部長だつて男子を好きになることはあるそうよ？」

「そうなんですか？」

リ「ただあれよりクールじゃなきゃいけないらしいけど」

マ「それは…難しいわね」

リ「そういう人、本当にいないかしら」

マ「軍隊にはいるんじゃないかしら。少なくともあと2年はがんばつてね」

リ「ええ。なんとしても貞操は守るわ」

マ「今、それを言わないでよ…」

~~~~~

「え〜つと、チョコをまず溶かすんですか？」

マ「そう書いてあるわね。めんどろならそのまま渡すのもありだと思うけど」

リ「：本当に公衆の面前でそれ言うのやめてよ。イメージ女子なんだから」

3人は調理室に来ている。

もちろんいるのは3人だけではなく大勢の女子が作っている。

まあ女子としては一大イベントを控えている人も少なくはないのでところどころ張り詰めた空気だ。

マ「：活気づくかしら」

リ「多分。怒気っていう大声がたくさん聞こえるかも」

マ「駄目じゃない、それ！」

ミ「何騒いでるの？」

ミイヤが近づいてきた。

リ「あら、ミイヤ。あなたも？」

ミ「せっかくの機会だもの。リヨウに上げないわけじゃないでしょ」

リ「そりやそうよね。ライバル登場ね、マーシャ？」

マ「わ、私は別に：」

ミ「リリア、やめなさい。私の勝ちが決まってるのにそんなこと言ったらマーシャが

可哀そうよ？」

マ「…なんですって？」

ミ「なにか間違つたこと言つた？」

マ「いい度胸じゃない。私に喧嘩を売ろうなんて」

ミ「やる気？ さつきも言つたけど意味ないわよ？」

マ「そこまで言うならその喧嘩かつてやるわ。どっちのチョコがよかつたかりヨウに吟味してもらいましょ？」

ミ「望むところよ！」

二人の間にバチバチと電撃が見える（魔法は使つてない）。

リ「いい記事がかけそうね」

「結局それが目的ですか…」

リ「当たり前じゃ。…！」

リリアが持つていたものをすべて机の上に投げ、フィリアを写真に収める。

「ちよ、なんですかいきなり」

リ「それを狙つていないっていうなら大した逸材よ、あなた」

「？」

リリアが写真を見せる。

写っているのはエプロン姿でチョココを混ぜているフィリアの姿。

しかし、顔には頬のあたりにチョココがついている（ベタだがこの世界ではかなり新鮮）。

しつかりカメラ目線だ。

「は、早く消してください!」

リ「何言ってるのよ?一枚後で上げるからチョココと一緒に上げたらいいじゃない」

「そ、そんな、そんなことできるわけじゃないじゃないですか!お願いですからそれ消してください!」

リ「何言ってるのよ。残すにきまつてるじゃない。あとで学校のかわいい女の子撮った写真をアルバムにまとめて売り出すわよ!」

「ほ、ほんとにやめてください!私は承諾してないからそんなことすれば訴えることできるんですよ!」

リ「これ上げるから、どう?」

一枚の写真。

基本これが来ればなにか黒歴史が撮られている。

フィリアが恐る恐る見る。

「…」

「これはほしいんじゃない？」

フィリアの表情が固まる。

しかし、黒歴史を見た表情ではない。

「…これ」

「ん？」

「これくれるんですか？」

「もちろん。ただし、アルバムを作るとき載せるわよ、あなたの写真」

「…もつと小さい、この手帳に入るくらいのにできます？」

「もちろん！どうってことないわ。明日になるけどいいかしら？」

「かまいません。これで交渉に乗りましょう」

「ありがとう。じゃ、改めてチョコ作りましょ」

場所と人が変わってここは男子寮。

リヨウの部屋にいつものメンバー（男子）が集まっている。

リヨ「…」

ク「…」

レ「…」

ケ「…（疲れ切っている）」

マ「…」

リヨ「なんだよ、これ…」

集まっではいるがいまいち理由がわからない。

おそらくバレンタインがらみだということは分かっているが。

ク「何って、女子が告白してくるんだよ？こつちも何か考えないと！」

何日か前まではサクと何か言っていたのにやはり男子。

このイベントは緊張しているようだ。

リヨ「告白って…、義理チョコだつてあるだろ？つていうか俺たちが緊張しても意味

ないし。もっと言うならどうしてきてるんですか、先生」

マ「クロ君に呼ばれたんだよ。バレンタインなんて懐かしい響きだねえ」

ク「先生、チョコをもらうにはどうすればいいんですか!？」

リヨ（クロが気合入ってる…）

マ「いまさらどうすることもできないよ。1、2日で印象を変えるなんて不可能だし

ね。まあどうしてもほしいのならお願いしてきたらどうだい？」

ク「それは…、ありですか？」

マ「無しだよ。あまりにも凶々しい」

ク「ですよね…」

レ「そんなことしなくったってお前はもらえるんじゃないか？」

ク「本当？」

リヨ「俺もそう思う（シヨタ粹で）」

マ「私もそう思うよ（年下好きな人が多分）」

ク「そ、そうかなあ…（照れ）」

照れている姿を見るとどうしても女の子に見えてしまう。

クロからチヨコをもらえたら男でも嬉しいだろうなと思ったのはリヨウだけではなかった。

リヨ「なあ、ケイトはどうしたんだ？なんかすごい疲れ切ってるように見えるけど」

ク「昨日までずっとと患者の治療に当たってたんだって。自分治すのは簡単らしいけど、他の人を治すと恐ろしいほど魔力使うんだって」

リヨ「ならなんで来たんだよ」

ケ「呼ばれてた、から…」

レ「そんなに重要なことやってないぞ？」

ケ「みたいだね……。ていうかなに？バレンタインって」

リヨ「これ」

ケイトに新聞を見せる。

読んで理解した。

ケ「活気づけるには、いい考えだね」

リヨ「俺もそう思う。ただ、俺的には戦闘訓練できるほうが盛り上がるんだけど」

レ「俺もだ。が、無理だろうな。こんな状況じゃ」

マ「そうだね。そういうことはしばらく自粛ムードだろうね。このイベントが終わった後でも」

いくら活気づいてもむやみに戦闘訓練はしばらくできないだろう。

が、しないわけにもいかないので早いうちに訓練場を新しく作るらしい。

リヨ「そういえばケイト。お前、ネーム持ち倒したんだろ？」

ケ「フリミレスさんですか？一応は」

リヨ「ずいぶんな戦い方だったそうだな？近くで見てたやつらが言ってたぞ？」

ケ「願わくばシューとクリティウス姉妹以外には見せたくなかったんだけどね」

リヨ「回復も使いようなんだな。お前、今からでも戦闘兵になる訓練したらどうだ？」

ケ「勘弁だよ。もう戦いなんて御免だ。それにどんなに回復できても痛いんだよ？」

レ「痛み止めでも飲んで戦ったらどうだ？」

ケ「シューにも言われました。だけど完全に遮断するのはあまり体にはよくないし、やめておく」

ク「ちよつとみんな！話それてるよ？」

リヨ「ああ。そういえば。だがクロ、さつき先生も言つてたがいまさらどうすることもできないぞ？予定日は2日後だ。どうするっていうんだ？」

ク「…それを聞きたかつたんだけど、その調子じゃ本当にないみたいだね。じゃあおとなしく待つかあ。こんな緊張するなら女子に生まれればよかつたなあ…」

この時、周りにいる全員が思った。

(…実はお前女子なんじゃないのか?)

実際、クロの裸を見たことがある人はいないので何とも言えない。

リヨ「じゃ、この会はもうお開きでいいな？」

レ「そのようだな。じゃ、俺は戻るぜ。しかしまあ、学校もたいしたもんだな」

リヨ「何がだ？」

レ「だって学校を土日を含めてとはいえ4日間も休みにしたんだぜ？驚きだよ、ほん」と

マ「学校としても早く活気が戻ってほしかったしね。これくらいはいいんだよ」

レ「太っ腹だな。じゃ、俺はこれで」

レックスが部屋を出ていく。

マ「私も失礼するでしょう。ケイト君はどうする?」

ケ「僕もそうします」

マ「なら送ろう。転移装置が使えろとはいえ少しは歩く。そこで倒れられては困るしね」

ケ「ありがとうございます。じゃ、クロ、リヨウ。また今度」

リヨ「ああ。じゃあな」

2人も部屋を後にする。

と、クロも転移装置に向かう。

リヨ「クロ?どこ行くんだ」

ク「待ってるのもあれだからチョコ作ってこようかなって」

リヨ「お前はもう側だぞ?」

ク「いや、サクとの話を思い出してね」

あの討論してたやつだろう。

リヨ「お前、まじか?」

ク「ここはサクに教えてあげないとね。ということで行ってきました」

クロも部屋を後にする。

「…」

残ったリヨウは、本来なら男子からもらうバレンタインチョコなんて死んでもいらないところだがクロのと考えると悪い気もしなかつた。

チョコを! part 1

バレンタイン当日。

日曜日で休日だ。

午前中、寮の中（女子寮）は盛り上がっていた。

それぞれが好きな形のチョコを作り交換し合ったのだ。

それは盛り上がって当然だろう。

「これかわいいね」

「でしょ? この細かい部分、苦労したの〜」

「私のも見てよ!」

地球以上の盛り上がりだ。

行事が少ないこの世界にとってはとても目新しい行事。

一時は活気を取り戻した（女子は）ように見えた。

しかし、今は時間が変わって午後。

なんか張り詰めた空気が漂っていた（女子寮に）。

午前は女子同士、午後は男子になんて決めた人は誰もいないのだがいつのまにかそう

なっていた。

本命を渡す予定はなく、友チヨコや義理チヨコのみを渡すはずの女子も本命を渡す女子に圧倒されて騒ぐことができない。

まるで嵐の前の静けさが漂う。

マ「：リリア」

リ「なに？」

マ「なんでこんなに張り詰めた空気なの？」

リ「いや、私も少しは考えてただけど：ここまでとは思わなかった」

マ「異常よ？自分の部屋にいるはずなのになんでこんな空気が伝わってくるのよ？」

リ「なら私の部屋来る？同じ部屋の人、本命は渡さないらしいからかなりほんわかしてるわよ？」

マ「それも少しね：。っていうかなんであんた、私たちの部屋来てるのよ？」

リ「同じ部屋の人が本命ないってなると面白みに欠けるのよ。で、あなたたちは2人も本命があるじゃない？面白そうだなって思ってるよ」

マ「大事なところ蹴り飛ばすわよ」

リ「私女子よ!?何男子と同じ感覚で言ってるのよ？」

本命がないリリアはかなり気楽だ。

いや、普通がこれなのだがこの世界のバレンタインは何の行き違いか、戦争といっても過言ではないような状態になってしまった。

フィリアに至ってはかなり緊張していて、周りが目に入っていない。

スノーが呼びかけるが応える様子は全くない。

リ「フィリアまであんなに……。バレンタインは恋の応援じゃなくて感謝の気持ちを伝えるに変更しておくべきだったかしら？」

マ「私もそう思うわ。なんか明日から心配よ。いろいろと」

リ「ま、修羅場はそれはそれで面白いからありなんだけどね♪」

カメラを持ち出すリリア。

ここでも記者魂?とやらは燃えているようだ。

マ「そういえばあんた、クレア先輩には上げたの?」

リ「ええ、もちろん。危うくお持ち帰りされるところだったわ(震え声)」

マ「いつそのことされてしまえばいいのに」

リ「それはひどいわよ!?!絶対にいい男に人見つけるんだから!」

リリアにとつての今回のバレンタインの恐怖は去った。

後は傍観者として、新聞部の1人として、生徒に面白記事を提供するのみだ。

リ「じゃ、私そろそろ行ってくるわ」

マ「もう行くの？」

リ「少しは早めにいかないよ。いつ来るかわからないしね。修羅場なんて最初から最後までこれに収めたいし」

マ「なら私も準備しようかしら」

リ「がんばってね、応援してるわ」

マ「ありがとう。最善は尽くすわ」

リ「あと、フィリア。ちゃんとケイトのところに向かわせなさいよ？」

それだけ言うのと部屋を出て行った。

マーシャがフィリアを見たが、未だにスノーの呼びかけに応える様子はない。

いくらなんでも緊張しすぎだ。

マ「…まず起こしますか」

フィリアの解凍を始めた。

リ「はい、これどうぞ」

リヨ「ありがとな」

ク「ありがとー♪」

リリアが男子寮に到着し、今リヨウたちにチョコを渡したところだ。

リリアはここに来て気づいたことが一つあった。

「にしても……ここもずいぶんな空気ね」

「分かるか？普通に戦闘前より緊張感がすごいぜ？」

「地球でもこんなかんじなの？」

「なわけないだろ。もつと楽しい行事だよ」

「そうよね……。伝え方を誤った私の失態ね」

男子寮でも同じく、女子ほどではないが気が張っていた。

男子にだって好きな女子のタイプはある。

その子が来てくれないかなと思うと少しは良く見せようとする。

やがてそれが緊張になる。

「いや、お前は悪くない。ここの人たちが地球とは違う感性を持っていた。ただそれだけだ」

「でも、これはもともと活性化のために始めたのよ？これじゃある意味再び戦争を始めるためにやってるみたいじゃない……」

「確かに……この女子はアグレッシブな人が多いからな。廊下でドールを展開なんて普通にあるんじゃないのか？」

「アグレッシブって？」

「攻撃的って意味だよ」

「そう…。ええ、まさにそうね。変な方向に進まないといいいけれど…」

よかれと思いやつたことが裏目に出る。

別に珍しいことではないかもしれないがリリアとしてはその発案者であるため、責任を感じているのだ。

「大丈夫だ。なんとかなるさ」

リリアの頭をなでる。

リリアはされるがまま。

サクが少しやきもちを焼いているがリヨウは気づいていない。

「あんた、こんなこといろんな女子にやってるの？」

「嫌だったか？」

「無意識のうちなのね…。今までそれで勘違いしてきた女子が何人いるのかしら」

「どういう意味だ？」

「別に。何でもないわ。あつ、これ渡しておくわね」

持っているカバンから一枚の紙を取り出した。

紙には「アンケートに協力してね？」と書いてある。

「なんだこれ？」

「もらったチョコの数書いてくれない？もちろん、友と本命は分けて」

「かまわないが……。お前俺が地球にいた頃のチョコの数聞いたら？」

「甘いわね。今までのあなたの行動を見たら惚れたって人は結構いるはずなのよ。それを考えるとこの部屋、チョコに埋もれるわよ？」

「そんな漫画みたいな話、あるわけないだろ」

「まっ、楽しみにしてるわ。私はこの紙男子全員に配らないとだから」

「結構な数だな？」

男子だけでも軽く5000人はいる。

それを一人で？

「いや、あとレックス、シユールレス、ケイトのところには行くけど他はすでに転送済みよ」

「便利だな。科学は」

「そういうことだから、ま、頑張ってるわ」

リリアが部屋を後にする。

「リヨウってモテるの？」

「さっきの話聞いてたろ、クロ。俺はそんなモテないよ。チョコまみれになるならおそれらくお前宛だよ」

「そんなわけないじゃん。僕、こんな頼りない、身長もないただの男子だよ？」

「いや、シヨタ枠で行けると思う」

「えっ？」

「すまん。何でもない」

と、リヨウは「つ、少し楽しみにしていたことを思い出す。

「そういえばお前ら、なんかチョコ作るとか言ってたか？」

クロが笑顔を、サクがギクツツとした顔をする。

「覚えててくれた？」

「当たり前だろ。一応楽しみにしてはしてるんだぜ？」

他の男子なら絶対に楽しみにはしない。

相手がクロだから少し、楽しみにしているのだ。

「ちゃんと作ったよ。だけどそれは最後にね」

「そうか、サクはどうなんだ？」

「も、ももちろん！ししっかり、作っております！リヨウ殿！」

「そ、そうか？じゃ、お前らは最後にもらおうよ」

サクの声が震えていたのはあえて触れない。

が、もし渡してくれた時、ただの板チョコだと少しショックだ。

使い魔にそれほどの人とは思われていないということになる。

「あ、あの、リヨウ殿」

「なんだ？」

「私、スノーとクウにチョコを渡してきたのですがよろしいでしょうか？」

「ああ、かまわないよ。本命か？」

「違います！友です」

「そうかそうか。なら早く行ってこい。クウはともかく、スノーはファイリアと行動してたら見つけるのが大変だぞ？」

「そうですね。では行ってきます」

サクもその部屋を出ていく。

「…リヨウ」

「なんだ、クウ？」

「サクの声、さつき震えて——」

「それ以上言うな」

切に忘れたという展開以外を願うリヨウだった。

フィリアはケイトの部屋に繋がる転移装置の前について唾然としていた。
（お、思ったより人が多い！）

2、3人くらいならライバルがいてもおかしくないよな、なんて思っただけが軽く20人はいる。

実は大半が傷の治療をしてくれた感謝を込めたチョコを持ってきているのだがフィリアにそんなこと分かるはずがない。

（ケ、ケイトさん、思ったよりモテるんですね。でも、ここで引き下がるわけにはいきません！私だってケイトさんを想う気持ちはそこらの人には負けないはずですよ！）

変な対抗心を燃やすフィリア。

と、ケイトの部屋に3人で一緒に入っていく女子の姿が見えた。

（さ、3人!?みんな一緒がアリということですか!?そんな、強すぎます…!）

もちろんこの3人、ただの友チョコを渡しにいっただけなのだが今のフィリアにそんなことは分からない。

30分ほどしてようやくフィリアの出番が来る。

一歩踏み出ればケイトの部屋。

よく考えればケイトの部屋に入ったことがない。

幸い、今後ろに人はいない。

悩む時間はたっぷりある。

(何を言いまししょう?とりあえず、こんにちには?いや、一気に告白してしまわないと後には言えないような気がします。でも…)

考えていると背中を押された。

転移装置に足が入る。

「えっ?」

後ろを見るとリリアがいる。

超笑顔だった。

「り、リリ」

言い終わる前に移動してしまった。

気づけばケイトの部屋の玄関。

ケイトは奥にいるのか、見当たらない。

インターホンを押してないことを思い出し呼びかける。

「ケイトさーん。いますか?フィリアです!」

「はい、今…ってフィリア!?!少し待ってて!」

ドタバタと音がする。

そして思い出す。

何も話題を考えていない。

(私がお邪魔してるっていうのに何も考えてない!?これは致命傷?)

ただチョコ渡して帰ればいいのに頭がこんがらがる。

ケイトが玄関まで来た。

「すみません。お待たせしました」

「いえ、呼び鈴鳴らさず入った私が悪いんです。それで、あの、その、……これ」

チョコを差し出す。

一応本命なのだが恥ずかしさのあまり、手紙がなければチョコに「好き」的なことを書いているわけでもない。

「ありがとうございます。作るの大変だったでしょ?」

「いえ、そんなことないですよ。楽しかったですし……」

「……」

話が続かない。

2人とも顔を赤らめて嬉しそうにしているので、第三者がいれば「お前らもう付き合っちゃえよ!」と間違いなく言うはずだ。

「あの、じゃあ私はこれで……」

「あつ、うん。チョコ、ありがとう」

「いえ、では」

「あの——」

ケイトに呼び止められる。

「もしよければ今度お茶でもどうですか?」

願ってもない誘い。

フィリアに断る理由なんてない。

「ぜひ!」

「楽しみにしてるよ」

「はい!」

チョコを渡せただけでなく、デート?の誘い。

告白こそできなかったが、フィリアにとつては上出来だ。

フィリアが部屋を出るとフィリアが待っていた。

「うまく行ったようね?よかったわ」

「フィリアさん、ひどいですよ」

「いいじゃない。その様子だとうまくいったんでしょ?」

「それは…」

もじもじとする。

リリアはなごむが今はそれどころではない。

「まあ、いいわ。じゃ、私もケイトにチョコ上げに来たから」

「えっ？」

「安心しなさい。友チョコよ」

「そ、そうですか。じゃ、私は…」

逃げるようにしてその場を後にしたフィリア。

おそらく部屋での出来事を聞かれると思ったのだろう。

だが、今までフィリアとはよく一緒にいたリリア。

大した情報を本人から聞き出せないのは知っている。

ならばどうやって聞くか？

もう一人の知っている人に聞けばいいのだ。

呼び鈴を鳴らし、ケイトの部屋に入る。

「こんにちは」

「こんにちは、リリア。ご機嫌だね？」

「そりゃ記事のネタが目の前に転がってるんですもの」

「ネタ？」

「さっさと甘〜いフィリアとのさっすきの出来事教えなさい」

ケイトが止まる。

が、顔が赤くなったりはしない。

「…あれ?もしかして何もなかった?」

「ええ。そうですね。チョコはもらいましたけどそれ以外は特に」

「嘘っ!?!冗談でしょ?私、ここを長い間、はつてたのよ?」

「ですけど何も無い物はないですし。残念でした」

「…」

リリアが一枚の写真を取り出す。

チョコを作っているときのフィリアだ。

ある意味これは賭けで、要らないとなれば本当に気がないことになる。

「…」

ケイトは黙ったまんま。

(…読み、外れたかしら?)

「それ見せてどうするんですか…?」

「…読みが、外れた…!」

肩を落とすリリア。

苦し紛れの言い訳を言う。

「いえ、私、この学校の女子のかわいいところを撮った写真集を出すことにしたんだけど、それにあなたの知り合いのフィリアも出るっていうことを知らせようかと思ってる……」

「……」

ほとんど無反応。

「それだけ宣伝しようかなって……」

「……何枚？」

「へ？」

「フィリアさんは何枚写ってるんですか？」

……食いついた？

「予定では3枚ほどだけど？」

「……発売日は？値段は？」

食いついてる！

リリアの読みは間違っていないかったようだ。

「発売日は11月2日。4500銀よ」

「……分かりました。それじゃ……」

「ちよっと！フィリアとの出来事教えなさいよ！」

「いや、何もありませんし…」

「顔が変わってなくても、口調に変化あったし！絶対何かあったでしょ!」

「…別にないよ」

「今意識して話したわね!?!そこまで口が堅いなら私にだって考えがあるわ!」

カバンから二冊の本を取り出した。

「この秘法中の秘法!これを上げるわ!」

「…!それは!」

「これ一枚よ。このタイプの写真は」

ケイトが悩んでいる。

「他にもこの時の写真、あるわよ?」

「…見せてもらえますか?」

本をぺらぺらとめくる。

と、一枚が目に残まったようだ。

「…これ」

「えっ?そんなのでいいの?」

「そうだね。これが一番自然だ」

「私は構わないけど…。これ上げたら本当のこと話してよ?」

「約束するよ」

「決定ね」

その後、ケイトはしばらく上機嫌であり、リリアも面白いネタを聞き同じく上機嫌だったので、一部で少しの間、付き合ってるのでは？という噂が流れたそうだ。

チョコを! part 2

マ「…」

ミ「…」

2人は今リヨウの部屋の転移装置の前まで来ている。

もともと転移装置はあらゆる場所に点在していて、それはどこにでも繋がっている。やろうと思えばマーシヤの部屋からリヨウの部屋まで1回の転移で行ける（時間はかかるが）。

だがそれは部屋の主か、先生にしか出来ないようになっていた。

つまり、マーシヤの部屋から一瞬でリヨウの部屋に行けるのはリヨウか相部屋のク口、あるいは教師のみなのだ。

では、女子が男子の部屋に行くにはどうすればいいのか？

行き方は2つあり、1つは女子寮にある専用の転移装置から相手にOKをもらい、つなげること。

そしてもう一つは男子寮にある、専用の転移装置から行くことだ。

ネーム持ちや貴族となれば自分専用の転移装置が与えられるのだが一般生徒にはそ

んなのはない。

1学年、50しかない転移装置を使って移動をするのだ。

マ「リヨウって、確か専用の転移装置、今日だけ与えられてたわよね？」

ミ「リリアが計ってくれたって言ってわ」

しかし、今のリヨウには転移装置が与えられていた。

男子寮の転移装置を使えばだいたい部屋までタイムラグが10秒程度だ。

なぜ、ネーム持ちでもないリヨウに転移装置が与えられたのか？

逸材だからではない。

リリアが教師に要求したのだ。

マーシャたちはそれを聞いていたのでその専用の転移装置前までやってきていたの

だが：

マ「ならなんでこんなに人がいるのよ？」

ミ「私が聞きたいわよ」

恐ろしいほどの人でごった返していた。

ケイトの部屋の前にいた20人程度なんて比ではない。

マ「あいつ、地球じゃ義理5つって言ったのに…」

ミ「でもモテる理由は分かってるんじゃない？」

マ「…確かに。リヨウはある意味白馬の王子様そのものだもんね」

ミ「いろんな事件に頭突っ込んで今回に至っては解決に貢献。しかも逸材。モテないわけないわよ」

リヨウは今や時の人だ。

ミイヤも言った通り、1年の時にビムの撃退、合宿での戦闘（これは一般的には知られてない）、今回の戦争の終止符を打った人、そして5段階目のドール。

これほどきらびやかな経歴を持つていると中の中以上のルックスがあればモテモテになるのも当然だ。

「でもこれ、本当に全員リヨウ相手なのかしら？」

「どういふこと？」

「だってリヨウの相部屋にクロがいるじゃない？あの子はどうなのかしら？」

「…やるわね、盟友」

「なによ、盟友って。でも、おそらくこの原因はクロにもありそうね…」

実は、クロも結構モテていた。

武器はもちろん、かわいいというルックス。

子供のように小さい身長にかわいい顔。

まあ、たまらな女子もいるのだ（男子にもいるが）。

そこらの女子よりメイクすればかわいくなる。

クレアが狙わない理由がいまだにわからない。

「にしてもさつきから全然進んでる気しないんだけど？」

「いつそのこと私が札ですべて吹き飛ばす？」

「それしたらリヨウの部屋いく前に職員室、最悪警察署行きよ」

「そういわれてもこれは黙ってみてるといつまでかかるか——」

「なによ、あんた！」

大きな声が響く。

何事かと声がるほうを見る。

「さつきまで私がいいたじやない！さつきと私を入れなさいよ！」

「列から外れたあなたが悪いんです。おとなしく最後尾に戻れば？」

「何言ってるのよ！私ここで30分もリヨウ様の部屋に入るの待ってたのよ！あなたみ

たいなブスの泥棒猫にさきこされるなんて絶対嫌！」

「ちよつと、誰が泥棒猫ですって!?!」

口喧嘩勃発。

列を外れただの外れてないだののみじめな言い争いだ。

マ「…あいつもリヨウ狙いなだね」

ミ「敵じゃないわよ。それより見てあれ」

ミイヤが指さした方向を見るとリリアが超笑顔で写真を撮っている。この展開を待ち望んでいたようだ。

マ「…何ともいえないわ」

ミ「そしてあつちでは…」

ミイヤが違う方向を指さす。

そこはさっきの2人が言い争っていたところだ。

人が増え論点が変わって、誰がリヨウにふさわしいかになっている。

マ「あれが何よ？」

ミ「よく見なさい。あそこ」

目を凝らしてよく見る。

すると言い争ってる輪の中にフィリアが見えた。

なんか焦っている。

おそらく巻き込まれたのだろう。

マ「…あの子もつくづくかわいそうね」

ミ「助けないの？」

マ「今この列外れたらどうなると思ってるの？」

後ろに続く長い列。

どこのアイドルの握手会だよ!?!とツッコみたくなる。

ミ「それもそうね。フィリアには悪いけど——」

「もう頭きた!」

パチン!と騒がしかったはずなのにビンタの音がしつかりと響き渡る。

殴られたほうも黙っているわけがない。

罵詈雑言が飛び交いながらビンタの浴びせあいが始まる。

「もうふつとべえ!」

遂にドールを展開して殴り始めた。

被害が拡大し、アグレッシブな女子たちが次から次へとドールを展開し始める。

ドコン!と床なめり込む音までし始めた。

マ「これはまずいんじゃない?」

ミ「…私もこれはさす——」

ミイヤに突如流れ弾がとんできた。

床の破片がおでこに当たる。

「ミイヤ!?!大丈夫?」

「…」

次の瞬間、ミイヤの目が怒りに変わる。

「てめらあ! いいかげんにしろお!!」

「ちよ、ミイヤ!」

ミイヤはマーシャの言葉を聞かず、戦場へと向かっていった。

そのせいで魔法まで加わり被害がさらに拡大。

戦闘能力が低い女子は逃げ始める。

マーシャに向かって人の波が押し寄せる。

「なっ、やめてよ! 私まだリヨウのところいつてないの…よ!」

ドールを展開し、空中へ避難。

その時気づいた。

誰も、転移装置の周りにいない。

「…」

残ってる人は全員戦闘中。

「…」

マーシャは無言のまま転移装置に乗り、リヨウの部屋に向かった。

リヨウの部屋につく。

見慣れている光景だ。

何度も来ている。

なのに、緊張する。

(なんで私がこんなに緊張しなくちゃいけないのよ! リヨウのせい? いや、別に私はあいつのことなんて…)

チヨコを私に來たつもりが、変な言い訳を考える方向に走る。

(そもそもなんで私がここに来なくちゃいけないのよ? 私が作ったんだから来てくれれば…つて遅いわね?)

ここで無断で入ってきたことに気づく。

いつもなら鍵がかかっている、つまりリヨウに確認をとらなければ鍵は開いていないはずで転移装置は起動しない。

おそらく何人も来るもんだから開けっ放しにしたのだろう。

大きく深呼吸をして呼んだ。

「リヨウ? クロー? マーシャよ!」

「おう、マーシャか」

すぐにリヨウが出てきた。

「クロはどうしたの?」

「チヨコの多さに嬉しさのあまり沸騰中」

本当に貰えないと思っていたらしく、クロは嬉しさのあまりテンションがおかしくなりチョコの山を見て黙っている。

「嬉しそうね」

「そうだな。ただ、さっきまであんなにひっきりなしに来てたのに突然とまったんだけど、外で何かあったのか?」

「い、いえ、別に、何も無いわよ」

「そうか?」

無言の一分間が続く。

「あの…」

「なによ?」

「チョコ渡しに来たんだよ、な?」

「そうね」

「ならなんで黙ってるんだ?」

「べ、別に緊張してなんかいないわよ!ほらこれはクロのチョコ!」

「おう」

また無言の一分間。

「…あの」

「な、なによ？」

「もしかして、俺にはない？」

「あ、あるわよ。ほら！」

「よ、よかつたあ……」

予想外の反応にマーシヤの顔が赤くなる。

「な、何よ。そんなに嬉しかったの？」

「そりや、マーシヤのだもんな。お前のが貰えなかつたら結構傷ついてたぜ」

「そ、そう。それは良かったわね」

「ほんと、お前には感謝しているんだ」

「そりや、そ……え？」

「この世界に来てから初めて会ったのがお前。助けてくれたのもお前。初めて親友になったのもお前だと思ってる」

リヨウはマーシヤを特別な存在だと思っている。

だが、それはマーシヤが望んでいる関係ではなかった。

近い。

限りなく近くはあるが、逆にその立場に行ってしまうとマーシヤが望む立場へ行くのは難しい。

「そんなお前からチョコすら貰えなかったらどうしていいかわからなかったよ」
「…そう」

「？」

「ここでリヨウもマーシヤの元気がなくなっていることに気づく。

「どうした、マーシヤ？具合でも悪いのか？」

「いえ、別に何でもないわよ。それじゃ、私はこれで…」

「お、おう。またな」

マーシヤが部屋を出て行った。

俺、何か悪いことしたかなあ？と悩んでいるとちようどサクが帰ってきた。

「お、サク。お帰り」

「ただいま戻りました、リヨウ殿。ところで先ほどマーシヤ殿とすれ違ったのですが…、

どこか具合が良くないのでしょうか？」

「ああ。それがな…」

さつきあつたことをサクに話す。

それを聞いたサクは嘘でしょ？という顔を経て、呆れてため息をついた。

「リヨウ殿…。失礼を承知で申し上げます」

「なんだ？」

「なんで主は乙女心が分からない鈍感くそ野郎なのですか!？」

リヨウはこの言葉に面食らった。

怒りは沸いてこないが、驚きがものすごい。

「ど、どういうことだ？」

「分からないのですか？ ですが私の口から申し上げるには荷が重いです。ですからアドバイス程度で済ませます」

「お、お願いします」

「今すぐマーシャ殿を追いかけてください」

「…なんで？」

「私からできるアドバイスは一つと申し上げたはずですが。これ以上は申し上げられませんが。そしてこれは今のリヨウ殿にできる最善の策です」

「でも…」

「いいから、行ってください!」

顔の距離5cmまで近づけてものすごい迫力で言う。

「…分かりました」

あまりの迫力に圧倒され、何も言えずにリヨウはマーシャを追いかけに行った。

リヨウがマーシャを追いかけに言ったことを確認したサクは急いで何かの準備を始

める。

チョコを作ろうとしているのだ（溶かして固めること）。

（言つては悪いのですがマーシャ殿には感謝です。ここで私がいい形のチョコができればこれを渡さずに済みます）

サクはチョコをすでに完成させていた。

だが、形があれだった。

星形やハート形を作ったつもりなのだが、お世辞にもそれとは言えない。

（早く作らねば！マーシャ殿、時間稼ぎお願いします）

そう念じてから口から火を噴きチョコを溶かし始める。

（…ですけど、本当にリヨウ殿は鈍感ですよねえ。おそらくフィリア殿のケイト殿に対する感情にすら気づいていない様子。一目瞭然だというのに）

サクは心の中でため息をつきながらチョコを作り続ける。

マーシャはがつくりしていた。

せつかくリヨウと2人つきりで話せたのに、チヨコも渡せたのに、告白できなかつた。それどころかリヨウはそんな風にマーシャを見ていないという事実を知ってしまった。

これほど残念だったことはない。

「…なんで、こんなことで私は悲しんでるのよ」

口では否定しているが分かっている。

心の奥底ではリヨウのことが好きだと。

「マーシャー、待ってくれ！」

リヨウが走ってきた。

立ち止まりリヨウの顔を見る。

「…なによ？」

「悪かった」

「は？」

「お前は俺のせいで機嫌を悪くした、それは間違いない。ただ、俺にはその理由がわからない」

「…」

「だから、その…謝ろうと思って」

初めてリヨウとあったのはただの道。

名前もないただの道。

そこにリヨウは死にかけてた状態で寝ていた。

つまり第一印象はへんてこな一般人。

「理由もわからないのに、謝るの?」

「もう一度言うが俺が悪いのは間違いないはずだ。だから理由なんて関係ない」

「…」

「…いや、関係あるか?」

それから叔父の家で一緒に住むようになった。

抵抗はなかったのかと言われると完全に否定はできない。

が、それ以上にどういうわけか一緒にいたいと思った。

「だから、ごめん!」

「やっぱりあなたって変わってるわ」

「…そうか?」

「理由もわかってないのに自分が悪いって思うんだもの」

理由は未だにはつきりしていない。

でも、彼女のその思いは学校に行っても変わらなかった。

本当にはじめは好きという感情は微塵もなかった。

そういう感情が芽生えたきつかけはおそらく、ビムが攻めてきたとき。

助けてくれた時からだ。

「でも安心して。もうなんともないから」

「…本当か？」

「嘘つく理由がないわよ」

「…」

それからその想いはものすごい速さで膨れ上がっていった。

特に何もなかったはずだ。

戦争が起きるまで、マーシヤにとってリヨウの好感度が上がるようなことは特にな

かったはずだった。

いや、今回の戦争だって特になかったはずだ。

でも最後、好きだったから抱き着いてしまった。

ビムの時は、生きているのがうれしくて抱き着いていたというのに。

「…マーシヤ」

「なに？ つてきや!？」

突然、マーシヤの頭を抱き寄せた。

「な、なな何やってるのよ!」

「いや、これをするのが一番かなと思って」

「…どんな思考回路よ?」

もちろん嫌な感じなんてしなかった。

マーシャはこれからも想い続ける。

かなわないかもしれない。

でも、そんなの関係ない。

もちろんこのまま、気持ちを伝えることなく終わるなんてことにはさせない。

しかし、彼女の性格からして想いを伝えるのはもつと先になるだろう。

リヨウの気持ちが変わる可能性も無きにしても非ずだが。

「…で、いつまで大人ぶってるの?」

「20過ぎだぜ?さすがに子供とは言えないだろ」

「それもそうね。でも、もういいわ。あまり長いとリアに撮られるかもだし」
「それもそうだな」

離れる。

本心ではまだああしていたかったが。

「じゃ、改めてこれからもよろしくな？」

「当たり前よ。っていうかバレンタインってそういうイベントなの？」

「深い意味で考えればもしかすると……」

「あつ！リヨウ、やつと見つけた！」

ミイヤが走ってくる。

「なんで部屋にいないのよ？探したじゃない」

「すまん。ちよつとこつちも用事が……ってどうしたお前、その服？」

「なかなかエロくなってるでしょ？」

ところどころ破れて皮膚がはだけてる。

幸い見えるべきではないところは見えていない。

「ムラムラしてきた？」

「残念ながら少しもしない」

「そう？じゃ、ちらつと見る？」

「あんた何言ってるんのよ?ここは部屋じゃないわよ?他の生徒にもみられるわよ?」
「それは駄目ね。とりあえずこれ、どうぞ」

チョコが入っているとかわしき箱を渡してきた。

リヨ「ありがとな」

ミ「愛の手紙も入ってるからちゃんと見てね?」

リヨ「楽しみにしてるよ」

ミ「あと、デートはいつ行ってくれるの?」

マ「デート?」

リヨ「いろいろあつてそういう約束なんだけどまだしてないんだよ。町はあのさまで
買い物すら出来ないし」

ミ「私は一日ずつとベットのの上でもいいんだけど」

リヨ「絶対にならないから。とりあえず、デートはしばらくおあずけだ」

ミ「つれないわねえ。でも絶対おとしてみせる!」

リヨ「それは本人の前で言うべきじゃないと思うんだが…」

こうして嵐の異世界でのバレンタインは幕を下ろした。

しかし、数日後…

「…リヨウ」

「…なんだ、クロ」

「これじゃあ寝れないよ?」

「…」

バレンタインが終わった後、渡しそびれた女子たちが一斉にリヨウやクロにチョコを送ったため、恐ろしい数が2人の部屋に届いた。

部屋が埋まってしまった。

リアの読みは当たっていたのか、と嬉しいはずなのに肩を落とすリヨウだった。

人物紹介

ミューズデル勢（4年生の時）

リヨウ・アマミヤ（雨宮涼）

物語が始まった当初は17歳。

現在21歳。

身長175cm。

黒髪の特徴のない普通の短い髪。

ドールは5段階目。

基本、基本魔法はすべて使える（ファイヤ、ウォータなど）

正義感が強い、よく見かけるタイプの主人公。

ドールには自由自在に使えるヒュニスという6つのひし形の物体がついている。

使いようによつては恐ろしいことになるがそこまで使いこなせていない。

それと三又の鉾が5段階目で登場。

2mという大きさをもち、後ろのほうには鎖がついている。

使い魔がサク。

マーシャ・クリーシャ

今は赤い髪だが本当は金髪。

ショートカットの男勝りな性格。

21歳。

身長は167cm、胸はBカップ。

ドールは3段階目。

ドールは足を主体としていて近接攻撃系である。

魔法はまず使えない。

リヨウのことが好きなのだが言葉には言い表せない。

使い魔がリン。

レックス・ビルジエンタ

茶髪のスポーツ刈り。

21歳。

身長は174cm。

ドールは4段階目。

魔法は使えない。

腕を主体とするドールを持っており接近戦特化型。

クロツエフ・O・アリアジート

この世界では珍しい完璧な黒髪。

男なのに女のような顔つきをしている。

21歳。

身長が157cmと小さいのが悩み。

Aコースなのでドールは2段階目。

ドールはおまけでネームの力を使って人形を作り戦う。

リリア・アリア

マーシヤと小さいころからの幼馴染。

茶髪のボブより少し長い感じ。

21歳。

身長は165cm、胸はCカップ。

ドールは4段階目。

攻撃力重視のドールなので攻撃の反動を抑えるため巨大で重い装備になった。銃を使う遠距離攻撃を主体とする。

魔法は使えない。

面白いネタを撮るのが好きで新聞部に入った。

使い魔がラン。

ファイリア・リトルトリア

灰色の髪にポニーテール。

21歳。

身長は160cm、胸はAAカップで悩み。

ドールは3段階目。

小回りが利き、速いのが特徴。

魔法は一番弱いやつなら2、3回は使用可能。

ケイトのことが好きなのだが、恥ずかしさのあまり告白はまだだ。

使い魔はスノー。

ケイト・N・フェニーチェ

白い髪に強いパーマがかかっている（アフロではない）。

少しはサラサラにしてみたいらしいのだが手でやってもすぐ髪がはねてしまい不可。

21歳。

身長は170cm。

戦うときは回復魔法と自爆魔法を駆使して戦うので、あまり見られたくない。

基本は衛生兵としてけが人の治療をする。

ファイリアのことが気になっているのだが、こちらも奥手で付き合うにはまだ時間が必要。

使い魔はクウ。

シユールス・D・ジルリア

茶髪のロン毛。

顔が整っており、女子から人気がある。

21歳。

身長は179cm。

幻覚の1つ、視覚を操るネーム持ち。

これを使い、相手の攻撃を一切受けず後ろから殺しにかかる。

見た目より努力家で勉強熱心。

ケイトと幼馴染で心を許せる親友。

使い魔はメリー。

U・クリティウス姉妹

双子。

茶髪の長い髪。

21歳。

身長は169cm。

ウリスが姉で、マートが妹。

独特な話し方をするが追い詰められたりすると、素が出てくる。

炎魔法を駆使して相手を倒す。

エジリス戦で死にかけてウリスはその後無事、回復した。

姉妹ともにシュールレスが好きなのだが、道のりは険しい。

ミイヤ・ケリニアス

この世界では4人しかいないうちの1人の巫女。

長い黒髪でこの世界では珍しい。

19歳。

身長は166cm、胸はCカップ。

青龍を崇めている一族。

札を使った、なかなか見られない戦い方をする。

リヨウのことが好きなのだが、なかなかリヨウが振り向いてくれないのは悔しがつて
る。

マーシヤは恋敵。

クロは盟友。

使い魔はサリスとノリス。

ヒューズ・マクアドル

黒髪、髪型は普通にショート。

ただ、少しひげが常に生えている。

49歳。

身長は183cm。

ドールが5段階目。

相手を分析した後、弱点をつく戦い方をする。

ミリーナ

金髪の膝のあたりまである長い髪。

年齢不明。

身長は145cm。

ロボットで体ができているが、内臓はほとんどが人間と同じ。
瞬間移動ができる。

クレア・ランパード

青い髪のショートカット。

24歳。

身長178cm、胸はDカップ。

ドールは5段階目。

2本の腕のほかに4本の腕を使うことができる。

在学中、リリア以外にも付き合ってる？女子はいたのだが卒業後、全員別れる。

未だにリリアに固執する理由は「あいつだけ俺にまだ惚れてないから」だそうだ。

フレア・ランパード

クレアの母。

正反対の性格で穏やか。

ジュゼル

マーシヤの叔父

マリク・ジンジャーグリース

狐目。

関西弁モドキをしゃべっている（本人は自覚がない）。

マグタラン・アツグシーバ

ドールは5段階目（3年前）。

リヨウがクレア以外で知り合った初めての先輩。

イツシユ・ラブ

ドールは3段階目（3年前）。
方向音痴。

帝国勢

アキト・カザキ

帝国の王。

男。

ジーク・T・エリオス

屍使い。

死体を操り戦うので、よほど相手が強くない限りは死体で片づける。
人によって口調を変え、下の人間に対しての扱いはひどい。

ピス・ロジック

水色の髪。

ボブに少しカールを加えた感じ。

ラブ・L・フリミレス

ネームの能力は相手を脆弱にすること。

親睦会でクロと何度も優勝した。

腕は捕まった後治された。

カーリヤ・エリスエル

防御魔法を主体とする。

それ以外に特化した点は特になし。

ロベルト・A・サルド

風魔法を得意としていた敵。

心臓を真つ二つにされたがNの治療により復活。

ピスからロベルトまでは現在、捕虜としてミューズデルに確保されてる。

グリージョ・V・ラナターシャ

Vの能力は「殺傷能力を上げること（生物限定）」

アルゴラ・R

Rの能力は「音を消すこと」

レイ・エジリス

コロナを使い無限魔力を手に入れたが仲間に殺された。
上の3人は死亡。

概念の違い

床は畳。

そして早くもこたつが置いてある。

ミカンもぼっちしだ。

「先生、いくらなんでも早すぎませんか？」

「そんなこと…ないと思うよ」

「だってまだ11月入ったばかりですよ。それにここは室温が管理さえてますし」

「何事も気分だよ。それにその子は気にいっているようだし」

ミリーナが頭だけをこたつからだし寝っ転がっている。

「なんかデジャヴを見ているような…」

「何言ってるのリョウ？とりあえずミカン取ってほしいの」

「寝っ転がりながら食べるのはやめなさい。畳が汚れる」

「ちえー…。じゃあ座って食べるの」

ミカンに手を伸ばし再び食べ始めた。

よほどミカンが好きなのか嬉しそうだ。

「で、日は経ったけど報告があるんだろ？」

「そうなの。今日はいろいろ持ってきたの」

「じゃあ、聞こうじゃないか」

ミリーナは手の上にディスクを転移させた。

「まずこれ、覚えてるの？」

「お前が無断で持ち出したディスクだな」

「中には私のパパのいろいろな研究データが入ってたの」

「それで？」

「おかしいの…。こんな古いデータを持っていたことが」

「どういう意味だ？」

「このデータは約700年前のおんぼろデータしか入ってないの。一番いい技術でも冷

蔵庫なの」

「それは…、確かに不思議だな」

ミリーナが今度は古い本を転移させる。

「で、次はこれなんだけど…」

「えっ？さっきのディスクの下り、あれで終わり!？」

「うん。結局謎のままだったの」

「じゃあ、出すなよ。それともあれか？伏線ってやつか？」

「漫画の読みすぎなの。さっさとこれについて説明したいの」

「……この世界に来てから漫画の類はほとんど読んでないんだけどなあ。まあいいか」

「じゃ、まずここ読んでみて」

厚い本の中の一ページを開く。

細かい文字が多い中、大きく書かれた文字が目立つ。

「…」

「どうしたの？読めないの？」

「いや、その、なんていうか……。久しぶりにイタイ言葉を見たなあと思って」

「それはあなたの世界の概念なの。この世界にはそういう思想はないの」

「だって、何？認知無キ魔法って書いてアンノウン？ちよつと……ねえ」

「そこにツツコンでると面倒だから流すの。とりあえずこの魔法は一言でいえば最強魔法なの」

「最強？」

「文字通りなの。この魔法の力を100%使いこなせばこれに勝てる魔法は存在しないの。でも、代償が大きいもの」

「代償があるのかよ？」

マクアドルは知っているらしいので特に聞くそぶりは見せない。

ミカンがあるのにわざわざ団子を取り出して食べている。

「代償は最悪、命なの」

「それは、すごいな」

「今回クリティウス姉妹の姉が使ったのがこれなの。幸い助かったみたいだけど大した度胸なの」

「へえ……。で、それを俺が知ってどうなるんだ？」

「これから備えてほしいの」

突然口調が変わり、真剣な顔をする。

なかなか見ることがないミリーナの真剣な顔。

自然とリヨウの意識もピリツとする。

「備える？」

「この魔法はネーム持ちしか使えないの。だから何も今までは言わなかったんだけど、今回の侵攻で分かったの」

「何が？」

「あいつらは数多くのネーム持ちを保有しているの」

「どこ情報だよ、それ」

ミリーナが今度はパソコンを転移させてきた。
ノートパソコンだ。

この世界から見るとあまりに旧式で見ることがなく、リヨウからみればとても懐かしい。

画面にはいろいろとリヨウには理解できないような数字や文字が並んでいるが、画面の真ん中に「23」と書いてある。

「これは？」

「私が予想した帝国のネーム保持者なの」

「23って、すごいのか分からねえな」

「リヨウ君、ミューズデルのネーム保持者は非戦闘員を合わせても12しかいないんだよ？クロ君を合わせれば13だが」

「それに、おそらくこいつらは今回侵攻してきたやつらより強いはずなの」

「根拠は？」

「子供にだってわかるの。誰でもどうでもいい戦いに強いキャラを使うより、重要な方に使うの」

「…それもそうだな」

「まるで動揺していないようなの」

ミリーナの言う通り、リヨウは少しも動揺していなかった。

今回の侵攻ではボロボロにやられることはなかったが、最後に死にかけて。

それ以上がいると知っても全く焦らない。

「俺が今以上に強くなればいい。ただそれだけだからな」

「…なにかいい案でもあるのかと思つたけど、リヨウはリヨウなの。頭は悪くないはずなのにどうしてそんな楽そうな顔してるの？」

「それに関しては根拠はない。ただ言うなら…今回の戦いで自信がついたのかもな」

「…食べてなきや、やつてらんないの」

ミカンを一つ丸のみにする。

子供の喉では確実に詰まる大きさだったが、その感じは見せず新しく皮を向き始める。

「ダメか？」

「自信だけついたから余裕っていう理由聞いて納得する人がいたら見てみたいの」

「私は少しながら納得したよ？」

「…勘弁してほしいの。子供がこんなに悩んでるのに大人がこれじゃ困るの」

「だが、教師としての視点からみればとてもうれしいものだからね。それに『病は気から』って言うように気持ちの持ちようも大切さ」

「もう分かったの。とりあえず頭の片隅にはおいておいてほしいの。私からの情報は以上。あとはマクアドル、お願いなの」

最後のほうは投げやりにでもなったかのようにしゃべった。

ミリーナとしてはかなり大きな問題だったらしく、軽く扱われたのが気に食わないようだ。

「そうかい？じや、私からは捕まえた4人からの事情聴取の結果報告だ」
腕輪をいじくり画面を出した。

4人の顔が出される。

リヨウの見知った顔の人もいた。

「4人中3人がこの学校の生徒だったんだよな？」

「そうだね。甘い警備だったからある意味仕方ないさ。それよりこいつらすごいんだよ」

「何か有力な情報が？」

「こいつらは帝国の内情について、少しも知らないみたいだよ」

「…え？」

今画面に映っているのは帝国の戦闘員。

それなのに内情を知らない？

しかも、誰一人として。

「そんなバカな話、あるわけないじゃないですか！こいつらの中に幹部クラスだったやつはいないんですか？」

「この男（A）とフリミレスさんはそうだったみたいだね」

「そんな奴らが内情を少しも知らないなんて誰でも嘘だってわかります！もつとちゃんとした聴取を——」

「証拠が出たんだ。それも有力な」

リヨウの言葉を聞き終える前に答えを言った。

「証拠？」

「いや、証言かな。クロ君からの」

「クロが？」

「彼自身、内情については何も知らないらしい。むしろ知っている人のほうが少ないと思うだ」

「幹部クラスなのにどうして？」

「おそらく…、敗戦するのが分かってたから隠したんじゃないかな」

訳が分からないことを言い出す。

敗戦がわかっている戦争など、無意味もいところだ。

「敗戦が分かっていたって…、ならなんで侵攻してきたんですか！」

「力調べか、或いは余興か」

「でもあいつらは結構な数の敵を送り込んできました！あれだけ数を減らされて余興でしたなんて、あっちの国民は許すはずありません。帝国内で暴動が起きますよ？」

「それは、帝国の人が死んだ場合の話だよ」

「兵士が死んでたんですよ？死んでるにきまつてるじゃないですか！」

「君は、敵の姿を覚えてるかい？」

何をいつているのか分からない。

「姿？体中真っ黒のマントだったり黒いドールだったり黒が多かったけど」

「つまり、君はそれが何かは見てないんだね？」

「ここにきて、マクアドルが言いたいことをなんとなく理解する。

全く予想もしなかった考えだった。

「…冗談ですよね？」

「今回攻めてきた相手はほとんどが機械人形だったよ。ドールは完全自立型だった」

「でも、クロは言ってたぞ。Tと戦った時、屍を倒したんびに血がそこらじゅうにつて

…」

「私は、ほとんどが機械人形と言った。残りは…」

「行方不明になっていったミューズデルの一般人なの？」

「そうだ」

何とも言えない絶望感がリヨウを襲った。

人を殺したことはならなかっただけいいかもしれない。

だが、今回戦ったのはほとんどがロボット。

それもあそこま敵と味方を判別できるほどの高性能。

「…ふざけてやがる」

「大した性能だよ。結局敵は押しつけたけどミューズデルの被害は甚大。人も減ってしまっただけ」

「おそらく、今回の侵攻の目的は後に備えている戦争の前準備だと思うの」

「前準備？」

「今回の侵攻で死んだ人は数えきれない。さらに生きている人にも恐怖を残したの。おかげで学校の、特にBコースの生徒はかなり減ったの。のちの軍隊存続にかかわってくるほどの」

確かに数はかなり減った。

30000人弱いたはずの生徒は今では半分以下。

そんなところに相手が攻めてきたら…。

「でも、もうこれ以上はやらせないの」

「えっ?」

「そうだね。これ以上は私も我慢できない」

「リヨウ、あなたはあと2年ほどでここを卒業できるの。そのあとはどうする予定なの?」

「一応、軍隊のほうに…」

「それならいいの。私からはもう何も無いの」

「どういう意味だ?」

「私は言った、10年以内に大きな戦争が起きるって。で、切り札はリヨウ、あなただつて」

「…俺が戦う現場にいればどこでもいいのか?」

「そういうことなの。嫌かもしれないけどあなたには戦い続けてもらうの。私の世界が救われるまで」

ミリーナは立ち上がり、厚い本以外、持ってきたものをすべて転移させた。

「時間か?」

「ええ。フィリアさんに会えないのは残念だけどまた今度来るの」

「この厚い本は?」

「あなたたちの好きにしてほしいの。もしかすれば役に立つかもしれないから」
それを言うときよならも言わずに消えた。

残った分厚い本。

これを残して行つたということはおそらく読め、ということだろう。

しかし、分厚い。

「私は読まないからね？」

「先手撃たないでください。：フィリアにでも渡して内容砕いてもらつて聞きますよ」

「でも、それはネームについて書かれてるんじゃないのかい？」

「アンノウン？はネームについてでしたね」

「ならネーム持ちに聞いたらどうだい？読まないかつて」

「：となるとケイトですかね。他は読みそうにない」

努力家であるシューレスがいるのだが、リヨウはシューレスが努力家であることを知らない。

分厚い本を持ち部屋を出る。

「それじゃ、俺もこれで」

「ああ。じゃ、：つと危ない。そういえば君に報告があつたんだ」

「報告？」

「シヨツピングモールが明日から復旧するそうだよ」

「…なぜ俺にそれを？」

「ミイヤ君とデートの約束があるんだろう？早く行ってあげなさい」

なぜおまえが知っている!？」

という疑問を飲みこみ、驚いた顔だけで済ませる。

「…考えておきます」

「早く決めたほうがいいよ？君は思ったより優柔不断だねえ」

「青春を謳歌しているんです」

「20過ぎが青春を謳歌って…」

苦し紛れの言い訳に簡単に反論され、言い返す言葉がない。

「まあ、いいじゃないか。モテないよりは」

「みんなアグレッッシブ過ぎるんです。バレンタインの時、専用の転移装置の前がひどい

ことになってたんですよ?」

「あれはすごかったね。修理費は大したことないけど」

「人生の先輩としてなにかアドバイスありません？」

聞いてくるとは思わなかったのか、ひげを触り少し考える。

「…ハーレム作っちゃえぼ？」

「失礼しました」

リヨウは部屋を出て行った。

デート part 1

「ついに…、ついにこの日が来たわー！」

「…そんな叫ぶことないだろ」

リヨウは今、学校を出てショッピングモールに来ている。

ミイヤと2人で。

リヨウのテンションは低いのだがミイヤのテンションはかなり高い。

このテンションの理由は語るまでもないだろう。

「何言ってるんのよ？ 私がどれほどこの日を待ちわびたことか…」

「お前がもつと普通な女子だったら俺ももう少しは楽しめるんだけど」

今日、この日はショッピングモールが再開した日だ。

つまり、リヨウは昨日マクアドルたちと話をしてきた。

別にリヨウが誘ったわけではない。

ミイヤがこの日を知っていたのだ。

「こんな美人とデートができるっていうのに…、素直に喜びなさいよ」

「言ってる時点で少し評価が下がったな」

確かにミイヤは美人だ。

リヨウだつてもし、これでアグレッツィブでない、普通の女子だつたらおそらく付き合つてゐる。

だが、相手は超がつくほどの肉食系？だ。

ある意味これも残念美人というのかも知れない。

「まあまあ、とりあえず行きましょ？デートなんだから彼氏らしくしてよね」

「…善処するよ」

リヨウたちがショッピングモールに入つていく。

そこから少し離れたところに3人の女子がいた。

「…(歯ぎしりすごい)」

「マーシヤ、もうちよつと抑えて。見つかったらいい写真撮れないから」

「やっぱり好きなんじゃないですか、リヨウさんのこと」

「べ、別にそんなんじゃないわよ」

「今まで人生で聞いてきた言葉の中で一番説得力ないわね」

3人は別にどこかに隠れるわけでもなく、堂々と後ろにいた。

マーシヤは髪を金髪に戻しツイントールに。

リリアは銀髪にロングヘア。

フィリアは黒い髪にお団子ヘア。

科学が発展したこの世界なら、身長を変えることはともかく外見を変えることなど造作もない。

どこから聞いたのかミイヤたちのデートの情報を聞きつけてきたのだ。

「つていうかフィリア。なんであなたまで来てるの？」

「気になるじゃないですか。他人のデート」

「ケイトとデートの約束したから参考にしたいんでしょう？」

フィリアの顔が赤くなる。

「な、なな。別にそんなこと！」

「大方、バレンタインの時に約束取り付けたんでしょ？すごいわね。私、あなたはもうちよつと奥手だと思ってたんだけど」

リリアはケイトから聞いているのだがそこは言わない。

フィリアから直接聞きだすための罠を今、張った。

「違います！誘ってくれたのはケイトさんから——」

「はい引つかかった。誘われたのね？」

「あつ……」

「フィリア、あんたやるわね」

「マーシヤさんまで……。別にそんな約束した証拠なんて」

「何言つたつてもう遅いわよ。にしても、そんな隠すことでもないでしょうに」
リリアは思う。

なんでこの2人はここまで奥手なのかと。

さすがにミイヤほどまでなれとは言わないがいくらなんでも奥手過ぎる。

リヨウがマーシヤの気持ちに気づいているかは知らないが、ケイトは気づくべきだろう。

猛アタックとまでは言わないが、お茶の誘いだつてフィリアは断らなかつた。

少しは気があると気づくはずだ。

だが、それはフィリアにしたって同じことだ。

お茶に誘われたということは気があるということ。

なのに告白しない。

「はあ、あんたたちこのままじゃ一生恋は実らないわよ?」

2人「うっ!」

「恋愛の先輩として言うわ。さっさと告白しなさい!」

「なっ、何馬鹿言つてんのよ!」

「そうですよ！もしフラれたらどうするんですか？」

「その時はその時よ。諦めて別の人を好きになりなさい」

「好きな人はそう簡単に変わりません！私だったら立ち直れませんよ！」

「知ったことか！黙って先輩の言うこと聞きなさい！」

軽い茶番が起きる中、マーシャが気付く。

「…恋愛の先輩さん。1つ質問」

「なにかしら？」

「リヨウたちが見当たらないんだけど…、どこ行ったの？」

それを聞いてさっきまでリヨウたちがいた場所を見る。

そこはすでに人混みとなっており、2人の姿はなかった。

「しまったあああ！なんていうベタな展開！」

「これじゃ、何か起きても写真に収められないわね？」

「ミイヤが行動を起こすのは間違いないのよ。それを見逃すなんて…絶対ダメ！探すわ

よ」

「じゃあ手分けしましょう。あそこの内部構造は変わってないんですよね？」

「ええ。構造はほとんど変わってないわ」

「つまり、デカいのね…」

このショッピングモールはミューズデル内で一番の大きさを誇る。そんな中をたつた3人で探す。

骨が折れる作業だ。

「私は2階を探します」

「私は1階を」

「じゃ、私は3階ね。見つけ次第、連絡よー」

3人がショッピングモールの中に入って行った。

「ねえねえ、これどうかな?」

「悪くはないんじゃないか?ただ、これ結構高いぞ?」

リヨウとミイヤは今、小物店(アクセサリーショップ)に来ている。

ミイヤがぜひ行きたいといっていたのでついてきたのだ。

リヨウは別に大した興味はない。

「大丈夫よ。今日は結構持ってきてるから」

「そうか?ならいいんだけど…」

「ねえ、リヨウも何か選んでよ。彼氏でしょ？」

「そういわれてもなあ…。俺、こういうのはあまり興味ないんだよな」

一応、リヨウも探してみる。

星、ハート、動物など、いろいろあるが正直どれがいいのかさっぱりだ。

「つていうか、巫女がそんなチャラチャラしているのか？」

「今の私はただの生徒。そういう役職はないの、だからいいの。…もしかして巫女の服装してるほうが興奮する？」

「いや、そういうわけじゃない」

「じゃあ、今日のベッドの衣装は巫女にしくちやね」

「だから、違う！」

「男子ってなんであれがいいって言うの？」

「聞けよ！」

リヨウは正直落胆していた。

実はこれが女子との初デートだったのだ。

地球では女子の友達はいと一緒に遊びに行つたことはあるもののデートではない。20過ぎにしてようやく初デートにこぎつけたもののこれでは先が思いやられる。

「ん…、まあいいわ。じゃ、とりあえず次行きましょ？」

「どこ行くんだ？」

「下着を見る」

「馬鹿だろ、お前！俺男！分かる？」

「そう？じゃあ水着選びたいんだけど」

「今11月だぞ？」

いくら気温がここらへんで下がってないとはいえ、それはないだろ。

「リヨウ、地球じゃどうだったか分からないけどこの時期でも普通はプールとかで泳ぐわよ？」

「そうなの？」

「温水プールとかもあるし。さすがに海は行かないけど」

さすが、科学が発展しているだけのことはある。

普通に温水プールがあるというのはリヨウからみれば大したものだった。

「普通の服は見ないのか？」

「それは後で。午後に見るわ。今は下着か水着を見たいんだけど」

「なら水着だな。まだ俺が入っても大丈夫だろ。その前にトイレ行ってくる」

「場所分かる？」

「この店の奥にあったよ。店の前で待っていてくれ」

「分かったわ」

「こちらマーシヤ、2人を見つけたわ」

『1階ね?どのあたり?』

「小物店よ。今移動するみたいだけど」

『分かりました。私たちもそちらに向かいます』

電話をきる。

マーシヤは少し離れたところからミイヤを見る。

リヨウは奥の方に行ってしまった。

ミイヤの顔はとても満足げだ。

なんだか妬ましい。

(…あんな顔して。リヨウが嫌がってるのは一目瞭然じゃない)

うまく目立たないようにしているが、なんか黒いオーラがマーシヤから染み出でいる。

と、リヨウがミイヤのところに戻ってきた。

笑顔で話をしている。

(なに? あいつ、もしかしてまんざらでもないの?)

リヨウたちが移動を始めた。

マーシャも後をつけ始める。

「リヨウ、これなんかどう?」

「…露出度高すぎ」

「気分下がってない? そっちのほうが喜ぶんじゃないの?」

「今の俺の心境が分かるか?」

「早くやりたい」

「違うよ! この店に問題があるんだよ!」

リヨウとミイヤは小物店から歩いてすぐの水着専門店に来ていた。

リヨウは軽い気分で入って行ったが奥の方に行つて気づいた。

ここは、女性の水着を扱う店だと。

男子である自分は場違いもいいところだ。

店員の温かい目が逆に痛い!

「……、結構有名なんじゃないの?」

「知名度の問題じゃねえよ! 女性用の水着しかないじゃないか! なんて俺も入んなくちやいけないんだよ!」

「別に男子禁制なんてわけじゃないしいいじゃない。ほら、リヨウも選んで」

「マジかよ……」

リヨウに女性の水着の知識なんてあるわけない。

いや、別にミイヤに似合えばいいので知識なんて必要ないのだが。

しかし、これではさっきのアクセサリの方がまだ選びやすかった。

辺に露出度が高いのを持っていけば何を言われるか分かったもんじやないし、残念なことに生地が多い水着はあいにく遠く。

……ここでミイヤから離れるのはごめんだ。

「これはどう?」

「…あるゲームの女戦士を彷彿させるな」

「私、肌には自信あるのよ。自分の武器は最大限に使わないと」

確かにミイヤの肌は綺麗だ。

さつきも言ったが顔だつてかなりいいほう。

美人間違いなしなのだ。

なのに、なぜかリヨウのテンションは上がらない。

リヨウはこの世界の教訓の一つとして、「人は外見だけでは分からない」というのを学んだ。

「それよりあっちの方にいいのがあるぞ」

「えっ?どいどい?」

ミイヤをとりあえず露出度の高い水着コーナーから外す。

リヨウはできる限りおとなしめの水着であろうところにやってきた。

その時、そこで水着を選んでいたらと思われる3人の女子が逃げるようにそこを後にしたのが少し傷ついた。

「リヨウ…、これ競泳水着じゃない」

「いいんじゃないのか?」

「これ着て泳ぐのは選手だけよ。遊びでこれはさすがにないわよ」
やれやれとため息をつく。

どうやらこれはないと思われたらしい。

と、ミイヤがはつとした顔をする。

「まさか…、そうか。ごめんねリヨウ。今気づいたわ」

「待て。何に気づいたのか詳しく聞かせろ」

「この水着が一番興奮するんでしょ？まあ、夫の趣味に多少は妻も合わせなくちゃいけないし、これくらいはいいわよ」

「やっぱり、そういう方向だ！違うから！俺はマジで耐えられないだけだから！」

「違うの？ならやっぱりもつとはだけないと」

ミイヤが場所を移動しようとしたのでリヨウもついていく。

ここでは、ミイヤについていくしかない。

男子一人でここを彷徨うものなら不審者扱い間違いなしだ。

ここで、さっきの場所のあたりに戻ってくると再び3人組の女子がそこを立ち去る。

そこまで男子が嫌なのかと少し落胆する。

「ねえ、この中だったらどれがいい？」

ミイヤがめぼしいものを見つけていたのか3つほど水着を見せてきた。

1つは本当にビキニらしく、腹、下半身は太ももからはだけている。

2つはリヨウの意見を考慮してくれたのか、上は水着というより服を着ている感じだ。

下もスパッツだったりスカートのようなデザインになっており悪くはない。

この2つのどちらかを選べば変な濡れ衣を着せられることはないだろう。

「…真ん中の奴だな」

「えく…普通ビキニじゃないの？これじゃあちよつと控えめ過ぎよ」

「それを選んだら何か濡れ衣を着せられそうな気がしてな」

「…分かったわ。じゃあ少しは妥協してこれ！」

再び新しい物を出してくる。

上は胸しか隠してないが、下はデザインがスカートのような感じ。

まあ、最初と比べればかなりましにはなっただろう。

「いいんじゃない。それだったら」

「よし、決定！明日はプールね」

「早いな？っていうか、そんな施設あったか？」

「ドールの水中戦の実習室のプール使えば」

「それいいの？」

リヨウの最後の問いには答えず嬉しそうに飛び跳ねながら会計へ向かって行った。

おそらく、できるかは不明なんだろう。

喜んでいるミイヤははた目からみればとてもかわいい。

何度考えても、もったいないと思うリヨウだった。

「あ、危なかつた…」

「危機一髪ね」

「これほしいですねえ…」

3人は今リヨウと50mも離れていない。

分かり切っていたと思うがリヨウから逃げていた3人はこいつらだ。

「フィリア。なに水着選ぶほうとしてるのよ？」

「せつかく来たんですし、かわいいものないかなあと思いました」

「後にしなさい、フィリア。今リヨウから目を離れたら記事が逃げちゃうから！」

リリアは虎視眈々と記事を狙っている。

彼女が狙っているのはもちろん、恋人がやるような行動だ。

残念ながらこの程度では記事にならない。

「あんたもよく飽きないわよね。毎回恋沙汰の記事狙ってるけど、ちゃんと発行してるの？」

「当たり前じゃない。これは小さくある恋愛のコーナーの記事を探してるからやってるのよ。逸材の恋愛が発覚すれば記事が書けるだけでなく、そのあとの修羅場も記事になるわ」

リリアは後のことも見越しているらしい。

マーシャとしてはそうなる前に止めたいところだ。

「ですけど、ミイヤさん。大胆な水着買いますね」

「あれくらい普通よ。あんたたちもあれくらいして狙ってる人落としなさい」

「でもビキニはちよつと…」

「確かにあんたたち胸小さいもんね」

核心を突かれ、マーシャはたじろぎ、フィリアは崩れ落ちる。

「でも大丈夫よ！リヨウは貧乳派だつて言つてたじゃない。ケイトは知らないけど」

「フオローになつてないわよ…。それにあれだつて嘘かもしれないし」

「じゃあ、胸パットでもすれば？」

「ばれた時の頑張ってるんだなつていう目が嫌よ」

「なら栄養ちゃんとして…つて、あの子たち移動を始めたわ。行くわよ！」

フィリアはテンションを上げながら、後の2人は突きつけられた現実を逃避しながら彼女らの一日は続く。

デート part 2

「はい、リヨウ。あ〜ん」

「あ〜ん…」

リヨウの口にミートボールが運ばれる。

ミイヤの顔はとても嬉しそうだ。

「やってみたかったのよね。恋人にあ〜んってやるやつ」

「今時いるのか、こんなことやる奴？」

今リヨウ達は店の中で昼飯を食べている。

ホットドックの専門店らしく、中はレトロを感じさせるおしゃれな外装だ。

リヨウはおとなしくホットドックをたのんだ。

なのに、今ミートボールを口に含んでいる。

「だいたいいいのかよ。店の中で持参した食べ物って」

「別にこれが主食じゃないし注文だったわ。これくらい許されるわよ。あ〜ん♥」

ミイヤが再びミートボールを出してくる。

リヨウとしては遠慮したいところなのだが、デートを約束してしまったのも事実。

これくらいは付きあつてやるしかないと諦める。
しかし…

「あ〜ん…」

食べるときの周りの周りの視線が痛い。

特に彼女がいないであろう男性陣。

羨ましいなあ…と指をくわえているだけならリヨウもまだ無視できるのだが、向けられてるのは100%リヨウを敵視している視線。

「こんなところで、んなことしてんじゃねえ〜」と今にも罵声が聞こえてきそうだ。
リヨウだつて気持ちにはわかる。

これには事情がありリヨウだつてやりたくてやっているわけではないのだ。

しかし、それを理解してくれる人はここにはいなかった。

「おいし〜?」

「うん、おいしいよ」

確かにおいしい。

チヨコを貰つた時、知つたのだが彼女には料理の技能もあるようだ。

完璧に見えるミイヤ。

リヨウとしては本当にもつたいない。

と、店員が注文した品を持ってきてくれた。

店員の目は敵視ではなく、温かい目だった。

「微笑ましいですよ」と顔からセリフが読み取れる。

「あら、ホットドックきちやった。じゃ、まずこれ食べようかしら」

「そうだな、冷めないうちに食べたほうがおいしいだろ」

食べてみて思った。

専門店と言うだけはあると。

この世界にきてホットドックは初めてだったが、地球で食った物よりもうまい。

ソーセージや、ケチャップ等の分量はもちろんのことだがパンがうまい。

これはふわつと言うべきなのか、もちつと言うべきなのか…。

と、リヨウの目にホットドックを食べているミイヤが目に入る。

正直かわいかった。

少しずつ食べているが、なれない食べ物なのかソーセージが奥に行ってしまいなかな

かうまく食べられていない。

口の周りにはケチャップやマスタードがところどころついている。

「ミイヤ、口の周りにいろいろついてるぞ」

「えっ？嘘？」

口を拭こうとするがティツシユが見当たらない。

リヨウが持つてきたティツシユを取り出し袋から紙を取り出す。

そのまま身を乗り出しミイヤの口を拭いた。

突然のことにミイヤの動きが止まる。

「ほら、とれたぞ」

「あ、ありがとう…」

ミイヤが顔を赤くして黙る。

「どうした？」

「い、いえ、別に…」

再びちびちびと食べ始める。

リヨウは何を赤くなっているのか分からなかった。

彼は最近までこれをよくサクにやっていたのだ。

サクはもともと竜。

しかし、リヨウには竜の時代と同じメニューをあげることは難しかったので学食だつ

たりを食べさせた。

つまり、人と同じ食事をさせたのだ。

それ自体は別にサクにも問題はなかったのだが、箸を握ったことがないサクははじめ

苦労した。

ご飯を食べれず、最終的に茶碗を持ち口に押し込んだりした。

麺類だって勢いよくするもんだからよく汚れた。

お菓子類、ケーキやクレープだって食べ方を知らず、手や口を汚した。

そうするたんびにリヨウが拭いていたのだ。

リヨウとしては妹ができた感じがして面白かった。

だから、ミイヤにも普通にやったのだが、まあ普通はこんなこと突然されれば驚くだろう。

突然無言になり、食べ終わるまでその状態が続いた。

「ごちそうさん、と。で、ミイヤ。次どこ行くんだ？」

「ええと…、服を見に行きたいの」

「服か。まあ、それならいいな」

女性の服を専門に扱う店に行くかもしれないが、水着よりは圧倒的に動きやすいだろう。

「じゃ、行くか」

「ええ。そうね…」

ミイヤはそこを離れた後もしばらくは顔が赤かった。

「うんうん、なかなかいいじゃない♪」

「…（握りこぶし）」

「マーシャさん！手！その拳をやめてください！」

少し離れた席から3人はリヨウ達を見ている。

マーシャはすぐに握り拳をつくり、いつでも殴り込み可能だ。

「今時あくんってちよつとあれだけど悪くないわ」

「なにが、あくん♥よ！リヨウだつて抵抗もしないで…」

「でも乗り気な顔はしてないみたいですよ？」

「それなら少しは口でも言つてやればいいのに」

リヨウの気苦労を知らない3人にはリヨウの気持ちは分からなかった。

「でもいい雰囲気ねえ。今夜は本当に一緒に寝たりしないかしら？」

「何馬鹿言つてんのよ？ありえないわよ」

「そうかしら？もう少しミィヤが女の子らしいところ見せればリヨウもおちそうな気がするけど」

確かにはた目からみた感じ雰囲気は上々。

付き合っているとか思えない。

「にしても、このホットドック？おいしいですね」

「あんたは気楽ね」

「マーシャさんが気を張りすぎてるだけです。リヨウさんから何かしているわけじゃないんですし大丈夫ですよ」

「だといいんだけ——」

マーシャがしゃべりながら2人の方を向くと、リヨウがちょうどミイヤの口の周りを拭いてるところだった。

「ギターー（。▽。）！これよこれ！」

リリアがカメラを取り出し写真を撮る。

しかし、見た目はペンとなんら変わらないので周りは気づかない。

マーシャが跳びでていきそうだったのでフィリアが抑える。

「マーシャさん！抑えて！」

「あれ、どう見てもリヨウからやってるじゃない！」

「きつと事情があるんですよ。今はお願いですから抑えてください！」

仕方なく、座り込むマーシャ。

「いやあ、リヨウも大胆なことするわね。案外脈あり？」

「リリアさん、マーシャさんの前で失礼ですよ」

「でもねえ…、マーシャを応援したい気持ちもあるんだけど記事もほしいのよね」

「あなたの記者魂には恐れ入るわ」

「あんたもあれくらい頑張りなさい」

たのんでいたコーヒーを口に含み気持ちを落ち着けさせる。

味は普通なはずなのだが、余計に苦く感じた。

リリアも写真を撮り終わり、サンドイッチを食べ始める。

ここに来たのにサンドイッチをたのんだ変わり者だ。

「さて、次に行くのはおそらく服の類の店よね…」

「そこまで分かるの？」

「いや、これはあくまで予想よ。外れるかもしれないけどほぼ間違いないと思うわ」

サンドイッチを押し込みながら話を続けるリリア。

「ここじゃたぶん何も起きないと思うけど」

「なんでよ？」

「勝負は夕方から夜にかけてよ。一日デートって言ってたんだからリヨウとしてはベッ

ドに引きずり込まれないよう、長い間いるはずよ」

「根拠は？」

「これも感」

お前の感が当たるのか？とツツコミを入れようとしたところ、リヨウ達が動いた。

「移動するわね。行くわよ」

「え？まだ私食べきってないんですけど…」

「なら持つて行きなさい。ホットドックなら持つて歩いても変じやないわよ」

フィリアはホットドックを持ちながら、3人は後をつける。

「ねえねえ、これどう？」

「…いいんじゃないか」

「何よ、その気力がない声は」

リヨウとミイヤは服を見ている。

もちろんミイヤの服をだ。

「だって、今何時だよ？」

「え〜つと…、4時過ぎ」

「3時間！3時間何件も店をまたいでいるんだぞ？そりや疲れるよ」

昼飯を食べ終え終わったのはだいたい1時過ぎ。

で、今は4時過ぎ。

3時間、いろいろな店で服を見て回ったのだ。

これが好きなものを対象にしているならともかく、興味がない物を3時間となるとつらい。

「そう？じゃあ帰る？」

「いや、それは遠慮する」

「私がリードしてあげるのに…」

「それがあるから嫌なんだよ。それにこれだつてとつてるんだぞ？」

二枚のチケットを取り出す。

これは展望台へのチケットだ。

今は復旧中で都市の夜景は決していいものではないのであまり人気はないが、時間稼ぎにはちょうど良いと思いきりヨウがとつておいたのだ。

「そういえばそれもあつたわね」

「忘れてたのかよ」

「じゃあそろそろあそこに行こうかしら…」

「あそこ？」

まさか下着店を見ていきたくいでも言うのかと身構える。

「今日はデートだったしね、私ばかり楽しむのはあれだと思って1つ、リヨウが好きそうないベントを用意しておいたのよ」

「そんなものが？」

「じゃあ行くわよ。ついてきて♪」

ミイヤについていき店を出る直前、見覚えのある3人が目に入った。

水着の店で避けていた3人だ。

同じく3人は避けてしまい、顔は見えなかった。

(あの人達…?)

「あら、もう移動かしら？」

「早いですね？夜ご飯でも食べに行くんでしょうか？」

「早すぎよ。まだ4時過ぎなのに」

ミイヤ達を観察して一日。

はた目からみればこいつらは何やってるんだと思う。

それでも警備員が来ないのは堂々としてるからだろう。

「だけでもよく3時間も服見て回れたわね。私は無理ね」

「そうですか？結構面白いですよ？」

「あなたはそうかもしれないけど私は電化製品のほうがいいわ。特にカメラ！」

ペンを持ち出し目を輝かせるリリア（ペンには隠しカメラ搭載）。

「それはいいけど、どこ行くと思う？」

「∴私の予想としては服選んだあとにはごはんだったんだけど、早いわよね」

「もしかしてもう帰るんじゃないですか？」

「そうなるもミイヤは間違いなくリヨウとやるわよ」

「やめてよ、考えたくもない」

リリアとしても予想ができない行動だったようだ。

とはいってもついていけば答えは分かる。

リリアたちはミイヤの後をたいて行った。

「…これは、マジか？」

「マジよ」

リヨウはミイヤの連れてきたところが信じられずにいた。

部屋には2つのカプセル。

人が1人が入れそうな大きさをしている。

名前は疑似戦闘体験装置。

名前の通り戦闘訓練のために作られた装置だ。

「こんなのがシヨツピングモールの中に？」

「もともとガチな戦闘を目的とはしてないのよ。遊びの戦闘を目的してるの」
持ってきた荷物や買ってきた荷物をそこら辺に置き、カプセルを開ける。

「まず入ってみればわかるわ。カプセルの中に寝てごらん」

言われた通り中に入り寝っ転がる。

カプセルがウイイイインと音を立てながら閉まる。

顔に目隠しのようなものがかぶせられる。

次の瞬間、気づけば広い空間に体があった。

寝っ転がっていたはずなのにと疑問がわく。

「すごいでしょ?」

目の前にミイヤが現れる。

体がところどころぶれている。

「この体はデータなのか?」

「ご名答。今にぶれるのは直るわ」

ミイヤの体のブレがなくなる。

「じゃ、始めましょ」

「本気出してもいいのか?」

「腕がもげても処女じゃなくなっても現実には関係ないわよ♪」

「おかしなたとえが聞こえたが…、まあいいか」

リヨウがドールを展開する。

「久しぶりだな。これを展開するのも」

「よくできてるでしょ?違和感もないはずよ」

「…そうだな。違いが全然分からないな。でも、いいのかわ？」

「何が？」

「デートにこんなイベントを入れて」

確かに戦闘はデートとしてはおかしい。

恋人とデート、しかも初デートで戦闘？

「いいのよ。恋人に彼氏に合わせるのも彼女の仕事よ。それに今回は私だけ楽しみすぎたわ」

「まあ、お前が言うならいいんだが」

ミイヤが札を出す。

ガチなようだ。

「私にもバリアは展開してあるから心配しないで攻撃しなさいよ」

「もちろんだ。久しぶりだから加減はできないぞ？」

「いいわよ、夫をしりに敷けない妻になるつもりはないから」

「ま、まさかここを借りていたとは……！」

リリアは地面に膝をついてガクツとしている。

ある一室に入って行ったりリョウウ達を見てすべてを悟ったからだ。

「あれはなんですか？」

「あそこは疑似戦闘体験装置が置いてある部屋の一室よ。あそこに入ったが最後、周りからは何も分からないわ」

「たいそうな名前ね？ここゲームセンターでしょ、戦闘って何よ」

マーシャとフィリアは普通に遊びに行っただと思っていた。

ここはゲームセンター。

これくらい普通なのだ。

個室になっているのだから、寝ている間に荷物が盗られたり、体を触られたりしないため。

しかし、リリアの考えは違った。

「あんたたち、何言ってるのよ！ここに何もしないと思うの!?!」

「だってゲームセンターですよね？」

「いい？疑似戦闘体験装置は名前の通り戦闘ができるの。体を傷つけず。ゲームだってインストールすればできるわ」

「それくらい知ってるわよ」

「でも、できるのは戦闘だけじゃないのよ」

この言葉に2人がピクツツと反応をする。

「…まさか」

「そう。やろうと思えば例の行為も可能よ」

「で、でも監視カメラとかは…?」

「部屋にはあるけどゲーム内には記録する装置はないわ。だからここはそういう場所でもあるのよ」

それを聞いた2人は突然、ここがゲームセンターに見えなくなってしまった。

なんか子供の遊び場に見えなくなる。

「…止める方法は?」

「ないわ。部屋に入れないからね。出てくるのを待つしか…」

「部屋に入ればいいのね?」

「えっ?」

マーシヤが腕輪をいじくり始める。

フィリアがすぐに止めに入る。

「ダメですよ、ドール展開しちゃ!?!」

「止めないでファイリア！ここでやめたら私は一生後悔することになるの！」

「ちよ、さすがに私からもお願いよ！ここでそんなことすれば警察沙汰になるわ！」
ファイリアとリリアで必死に抑える。

この中で肉弾戦で一番強いのはマーシヤだ。

しかし、さすがに2人相手には敵わない。

「ファイリア、ここは引くわよ！」

「ええ、マーシヤさんが落ち着くまで待ちましょう」

ずるずると引きずられていく。

「ちよっと、2人とも！放しなさい！放しなさいよ！」

どこかで見た光景を彷彿させる映像だった。

デート part 3

「ふん！」

三又の矛がミイヤに向かって投げられる。

2mもある大きな矛は重さもあるはずにもかかわらず、ミイヤに向かって一直線に向かう。

何かを纏っているわけでもない普通の矛。

だが、それはリヨウの腕力のみで恐ろしい威力を誇っていた。

しかし、距離がある。

ミイヤは難なくかわす。

「雷記電札！」

よけた勢いを使い、札を投げつける。

本当は名前はしやべらなくてもいいらしいのだが、ミイヤのこだわりだそうだ。

札はリヨウに向かっていく。

あたる前に回避するべく、矛についた鎖をひっぱりながら移動する。

札はリヨウの少し横をかすめて行った。

「まだまだ！」

札をさらにかくさん取り出し部屋のあらゆる方向に投げる。

避けるスペースがないわけではないが、リヨウのいるところからではよけきれない。

ヒュニスを使い、自分の前に来る札を手前で止める。

しかし、ヒュニスで止めた瞬間、札が爆発する。

2つ、とめたもんだからバランスを崩し下のほうへふつとぶ。

「ウオーター！」

ミイヤがスキができたリヨウに向かって魔法を唱える。

まだ残っているヒュニスを使い、激流を抑える。

リヨウには一滴も当たらず、ヒュニスの精密さが伺える。

「やっぱり私の魔法じゃ力不足かしら？」

「いや、十分だよ。これ以上威力が上がると耐えられそうにない」

「ならこれやってみようかしら……」

ミイヤの周りに火でできた槍が出現する。

いや、火でできたというより赤い槍だ。

全部で3つ。

ミイヤは水を放出したままリヨウに接近する。

ミイヤ接近戦と得意としないため、このような行動をとってきたのは予想外だった。リヨウはヒュニスで水を止めたままミイヤの接近に備える。

残り5m弱というところでミイヤが槍のみをリヨウに向ける。

しかし、それは槍の動きというよりは剣の動きだった。

振り下ろすように動かす。

リヨウはそれを腕で抑える。

刃がついていない棒の部分、ましてやドールがついていればなんてことはない。

「まだ2本あるわよ!」

今度は振り下ろすのではなく横に振り払うようにしてきた。

同じく、手で押さえる。

「最後の一本!」

リヨウの体に向かって刃先を向けた槍を入れようとする。

しかし、ここで先ほど跳ばされたヒュニスが帰ってくる。

槍の刃先を止め、持ちこたえる。

「あら、まだ動いたの?」

「あれくらいで壊れるほど軟じゃないさ。それより——」

リヨウが次の言葉を言い終える前にミイヤが気付く。

先ほどまでミイヤの激流を止めていたヒュニスがミイヤのいるところに襲い掛かる。「自分の身を案じてみるよ」

ミイヤが札を取り出す。

「断罪界円！」

ミイヤの周りに結界が張られすべてのヒュニスをはじく。

少しずつヒビが入り始めるがまだ時間はかかりそうだ。

「青龍は使わないのか？」

「何言ってるのよ？ここでそれ使ったら私が勝てないって言ってるのと一緒じゃない」

「でもこのままじゃやばいんじゃないのか？」

「本番は……ここからよ！」

ミイヤが一枚の札を取り出す。

「必雷断界！」

結界が黄色くなる。

さらにミイヤは指を鳴らした。

と、同時に無造作にばらまかれていた札がすべて光り始める。

身の危険を感じ、5つのヒュニスを戻す。

槍は音と同時にミイヤのもとへ帰っていく。

「さあ、始めるわよ……」

札全てが電気を帯び始める。

「嘘だろ!？」

電撃があらゆる場所からリヨウを襲う。

いや、あらゆる場所で発生しリヨウはどこにいても当たった。

ヒュニス6つを高速で自分の周りで回転させる。

リヨウ自身、水で体を覆う防御魔法は知っているのだがただ知っているだけ。

あいにくまだ実用には至っていない。

リヨウはさらにヒュニスを回しながらヒュニスからレーザーを使う。

札にあたるたんびに札が減っていく。

「これなら……」

と、ここでリヨウに電撃が少し当たる。

何が起きた?と状況を確認しようとして驚く。

ヒュニスの速度が下がっている。

「まさか……!？」

「私は何もなしに札をばらまいたり、水をたくさん使ったりしたと思う?」

先ほどまで水を浴びていたヒュニス。

さらにギリギリの防御をしていたので少なからずダメージはあった。そこに電撃が通りやすくなったヒュニス。

たとえドールの一部といえどももとは機械。

壊れることだつてあるのだ。

やがてヒュニスでかばいきれなくなり、リヨウにあたり始める。

「くそー！」

「夜、一緒に寝てくれるならやめてあげるわよ？」

「悪いが、ウ?!もうきたのか？」

電撃がもろでリヨウにあたり始める。

いくらデータになっており、本体は無傷といえども痛みは感じるようだ。

「止めてあげたい…。でもここで止めては夫をしりには敷けないわ。耐えるのよ、ミイ

ヤー！」

「まだSバリアは効いてるんだけどな…。だが…」

エネルギーがものすごい勢いで減る。

それほど威力があるのだ。

「…許せよ、ミイヤー！」

リヨウが矛を投げつける。

「?」

ミイヤは周りが黄色い結界で覆われているため、よく見えない。と、目の前に矛が来ているのを理解する。

しかし、よける時間はない。

「オフツ!!」

バリアが体に張ってあつたため貫かれることはなかったが、バリアの外にはじき出される。

壁に当たりようやく止まる。

「イタタ…。つてヤバツ!!」

バリアの外にはじき出されたのだ。

ミイヤも電撃の対象となる。

急いで電撃をやめた。

「なんで矛投げたのよ?」

「お前のバリアの名前、聞き覚えがあつたからな。以前、戦闘で似たようなの使つてたろ? 火だったかな?。そこで確か、そのバリアは限定した対象にしか効果がないのなと言つてたような気がしてな」

「覚えてたの? さすが将来の私の夫♪」

再び赤い槍を作り出す。

「またそれか？なんで赤いんだよ？」

「手を見れば分かるわよ」

手を見てみる。

すると、さつきまでその槍をつかんでいたところが溶けていた。

ヒュニスに至っては穴が開きそうなほどに。

「溶かすのか、その槍!？」

「メルトアローっていうんだけど、まだ不完全よ」

「まだ強くなるのか？俺も魔法使いたいなあ」

「特訓してあげてもいいわよ？」

「本当？」

「今日、ベッドで♪」

「却下!」

リヨウは使いづらくなった5個のヒュニスを外し、1つで戦うことにした。

鎖を引つ張り、矛を引き戻しながらミイヤに接近する。

接近戦ならリヨウの勝利は揺るがない。

リヨウは矛を手に戻し、構えながらミイヤに体当たり。

と、ミイヤが避けようとしないうどころか構えもしないことに違和感を抱く。矛が当たる直前、ミイヤが叫ぶ。

「サリス、ノリス！」

リヨウの横にサリスが現れ、リヨウを蹴り飛ばす。

リヨウの軌道が変わり、ミイヤから離れる。

「セコツ！」

「青龍は使わないって言ったけど、使い魔を頼らないとは言っていないわよ」

ノリスが続いて、拳を加える。

リヨウは避けることかなわず、さらに跳ばされる。

Sバリアのエネルギー残量が少ない。

「そろそろ終わらせるわよ！」

「俺がな！」

しかし、リヨウにはまだ手があった。

サリスとノリスが近づいてきたので、矛を振り回す。

鎖をつかみながら回すので距離がすごいことになっている。

だが

「リヨウ様、隙だらけです」

そのせいで隙だらけだ。

ミイヤにもさすがに届かない。

このままでは。

「ライトチェーン！」

リヨウが使える魔法の一つ。

突如、リヨウの手に輝く鎖があふれる。

「オラァ！」

思いつきり、力に任せて回す。

矛についている鎖が伸びていた。

ミイヤまでとどかなかつたはずの矛がとどく長さになる。

しかし、ミイヤはそんなことには気づかない。

近くまで矛が迫って初めて気づく。

「え？」

「いつけええええ！」

ミイヤに高い身体能力はない。

サリスとノリスも気づくが時すでに遅し。

ミイヤの頭に運悪く矛が横殴りにあたる。

そのまま吹っ飛び、ミイヤは気絶した。

「…今何時？」

「そろそろ8時過ぎる頃です」

マーシャ、リリア、フィリアの3人は今、リヨウがチケットを取っている展望台に先回りしている。

夕食のシーンも見ておきたかったのだがマーシャを落ち着けた後、6時ころ戻ってみるとすでに2人の姿はなし。

そのあとも探したのだが見つからなかったので先回りすることにしたのだ。

「お腹すきました」

「我慢しなさい。すべては記事のためよ！」

「私達、新聞部じゃないですよ…」

6時半頃、ここに来たので晩飯は食べていない。

「マーシャ、さつきから何黙ってるの？」

「…この光景がちよつとね」

窓から見える景色。

戦争の爪痕が残っている。

爪痕というよりついさつき、戦争があつたかのように廃墟ばかりだ。

「あれは、ひどかつたわよね…」

「また、こんなことがあるのかしら」

「どうしてそう思うの？」

「敵の親玉は倒した。それは私がこの目で見たから間違いないわ。でも、あくまでそれは先遣隊の隊長」

「ミューズデルではこの戦争が終わつた後も正式に危険は去つた、と政府からの放送がなかつた。」

本来ならそういうのが一番楽なのに言わない。

おそらく、上なりに考えはあるのだろうがマクアドルからリヨウほどではないが聞いていたマーシャたちにとって、それは戦争が確実にまたあることを意味していた。

マクアドルからの話がなければ政府からの報告が遅れているだけだと考えられたか

もしれない。

だが、事情を知っているとは思えなかった。

「…こんなことになるなんてね」

「ほんとね。私、普通に学生生活送って後はどこかに就職する。それしか考えてなかったんだけど、なかなか大きな岩が立ちふさがっちゃったわ」

「その岩をどかせるまで生きてられるかしら？」

「じゃなきゃ、リヨウを手に入れられないわよ」

「だ、だから、私はそんなんじゃないって言ってるでしょ！」

「まだ否定してるんですか？」

バレバレにもほどがあるのに未だに否定している。

「バレバレなのにね」

「リリア、あんたまで…！」

「あつ、あれリヨウさん達じゃないですか？」

ついにリヨウ達が姿を現した。

「まさか、2人を使っても勝てなかったなんて…」

「お前、思ったよりセコイことするな」

未だにミイヤはさっきの戦いを引きずっていた。

さっきの晩飯の時も反省点を探っていた。

リヨウとしてはありがたいのだが、これはなんか申し訳なくなる。

「私の予定ではあの電撃の嵐で決着していたのよ。なのにまさかあのバリアの弱点を知っていたなんて…」

「反省は構わないけどいいのか？お前の楽しみにしてたデート、あと4時間切ったぞ？」
「嘘!?!そんなに?」

ようやく現実に戻ってきた。

「リヨウ、帰るわよ!」

「まだここ来て5分経ってないぞ?」

「ここでしたいの?確かに人は少ないけど…」

「あと3回は矛盾で殴っておいたほうがいいようだな?」

「あれ、結構痛いんだよ?」

矛に殴られて10分ほどミイヤは起きなかった。

体に傷はつかないのだが、意識はつながっているので気絶すると面倒なのだ。

「しかし、ここも絶景とは…言い難いな」

「そうね…」

目の前にあるのはひどい景色。

マーシャたちが今見たのと同じ、戦争後の景色。

「一年で本当に直るのか、これ」

「この技術をなめちやいけなわよ。私の寺なんて実は1週間で直ったから」

「…それでよく寺の人はお前を学校によこしたな?」

「私が無理言ったの。まあ、将来の夫を見つけたんだから彼らも結構簡単に許してくれ
たわよ」

「そいつらも、止めなかったのか…」

そこで会話が止まる。

人も少ないので2人の周りに静寂が広がる。

「リヨウ、あなたに言っておかなきゃいけないことがあるの」

ミイヤが口を開く。

「なんだ？」

「私が巫女なのは知ってるわね？」

「当たり前だろ」

「私は、あなたたちといられるのはあと2年もないの」

「…どういう意味だ？」

「ここにきて初めての真剣な空気。」

「あなたたちは軍隊だったり、警察だったり、いろいろつける職業はあと思う。でも私には巫女という職業しかないの」

「…」

「私の寺、どこにあるか知ってるでしょ。あそこは職につけばそう簡単に行ける所じゃないわ」

アメリリア森林までの距離はかなりある。

以前、合宿に行った時は近いところまで転移装置を使ったのだ。

しかし、それがあるのは学校の行事がある時だけ。

普通、行く手段は徒歩か車だ。

「はじめは、あなたにこちらに来てもらおうとしてたんだけど…、無理みたいだしね」

「…」

「なに黙っちゃってんのよ？寂しいなら私のところに嫁ぎなさい」

「嫁ぐって…。いや、黙ってた理由は違うぞ」

「じゃあ何よ？」

「なんかどうでもいい話だったからな」

予想もしていなかった返答にミイヤは頭が回らない。

「え？」

「いや、だつてさ、お前と会えずらくなるつて話だろ？しかも2年後」

「あなたは私のこと、なんとも思つてないの？」

「違う違う。会うのが難しくなるだけで会えないわけじゃないんだろ？なら、全然悩みにも問題にもならないな」

「私は、寂しい」

ミイヤの言葉が暗くなる。

「私、これでも初恋だったの」

「…マジで？」

「今まで外から来た人なんて、全員ゴミとしか思つてなかったから。外から来るのは無粋なやつばっか、そう思つてたの」

「すごい極端だな」

「今ではそう思うわ。でも、その時はそうだったの。そんな時に問題製造機はきたはじめて会った時の話だ。」

「懐かしい響きだな」

「なんであなたを好きになったのか分からないけど、これが恋だつていうのはすぐに分かったわ。友情や、愛情なんて持ったこともなかったのね」

ミイヤがリヨウの方を見る。

「リヨウ、私と付き合ってください」

突然の告白。

ミイヤがリヨウを好きなのは分かっていたがいざ言われると、リヨウも恥ずかしい。

「話がとんだな」

「もともと私はこれを言うつもりだったの。デートしたら必ず。で、返事は？」

リヨウは告白された経験がない。

した経験はあるのだが。

だから、こういう時に言うセリフを思いつけない。

少し黙って言った。

「……めん」

これ以外思いつかなかった。

「そう…。まあ、それもそうよね」

「本当にごめん」

「何謝ってんのよ。まだ好きでもないのに付き合うつて言われても私も困るわ」

「だけど俺はお前の…」

と、ここで一っ引つかかる言葉を耳にしたのに気づく。

「…お前、『まだ』好きでもないって言ったか？」

「ええ、言ったわよ。私があった一回フラれただけで諦めると思う？」

いつものミイヤが戻っていた。

「切り替え早いな…」

「それが私よ、あなたを想う気持ちも変わってないわ。頑張つて好きにさせてみせるも

の！」

強いな、と思う。

こここの世界の女子は特に。

フラれたら普通は誰でも気分が落ち込むだろう。

だが、彼女は顔には見せなかった。

心の中では落ち込んでいる…と思う。

でも顔には見せない。

じゅぶん強い。

「そうか。なら頑張ってくれよ。いや、頑張るな、か？」

「どういう意味よ？」

「もう少しおしとやかになつたらどうだつて話だ」

「私は自分を変えるつもりはないわよ。じゃなきや、意味ないもの」

「そうか。なら道のりは険しいな」

そこで一つのことをリヨウは思い出した。

「あつ、タイミングずれたかな…？」

「どうしたの？」

「これ渡そうと思つてな」

袋を一つ渡す。

一番最初に行つた小物店の袋だ。

「いつの間に？」

「トイレに行つたときな」

「…開けてもいい？」

「どうぞ」

袋を開ける。

ネックレスだ（この世界では小物といわれる）。

細い糸のような首をかける部分と羽をかたどったアクセサリがついていた。
シンプルだ。

「あら、悪くないじゃない」

「ならよかった。選んだ甲斐があったってもんだ」

「ねえ、これつけてよ。首のところ難しんだけど」

ミイヤがつけようとしていたので首のところをつけた。

「どう？」

「かわいいじゃないか」

うれしいらしく、笑顔になる。

本当にかわいい。

少し暗い感じのところにブルーライトが当たっているのでさらに良くみえる。

「よし、じゃあ部屋に帰るわよ。これつけたままやるわ」

「…雰囲気ぶち壊しだな。だいたいさつき——」

と、呼び出しが鳴った。

「悪い、電話だ」

「ぶち壊しね…。まあいいわ。早くしてよ？」

リヨウがそこを離れる。

ミイヤはしばらくもらったネックレスを触っていた。

そして声をかける。

「その3人。いつまでつけてるの?」

明らかに動揺した3人がビクツとする。

「バレバレなのよ。だいたい私は人それぞれの「気」が見えるのよ? 変装なんて無意味よ」

「…か、完璧だと思っていたのに」

「リリアに至っては写真も撮ってわね。いいもの載せなさいよ?」

「そこも!? それは「気」じゃ分らないでしょ?」

「そこは私の観察能力よ」

そしてマーシヤのもとに近づく。

「…なによ?」

「このネックレス、いいでしょ? リヨウからもらったのよ」

「なっ…!」

「私が一步リードよ」

「べ、別に羨ましくなんて…」

ネットクレスをチラチラ見ている。

羨ましいようだ。

「そう?ならいいんだけど。だけど今日の戦闘は激しかったわあ(いやらしく)」

「!!」

「最後は気絶しちゃったわあ」

「そ、それってどういう…!」

「ミイヤ、すまん。待った…か?」

リヨウの目の前に見知らぬ3人がいる。

「知り合いだったのか?」

「まだわからないの?この3人、あなたもよく知ってる人よ」

「嘘?見覚えないけどなあ…」

1人ずつ見ていく。

金髪の女子が目に入る。

そして、ものすごい汗をかきはじめる。

ツインテールになっていて気付かなかった。

「…マーシャ?じゃあそこにいるのは、リリアとフィリア?」

「ご名答。じゃありヨウ、マーシャから一言あるそうよ?」

「…あんだ、模擬戦闘体験装置でいろいろやってたそうじゃない」
なんかマーシヤの笑顔が黒い。

「子供の遊び場でそんなことやっついていいと思ってるのかしら？」

（絶対、本当の理由隠してますね…）

「へ？ 戦闘はしたけどそれのどこが!？」

「激しかったそうね？」

ミイヤが何か言ったのだと気づく。

「ミイヤ！ 何言った!？」

「リヨウに激しくしてもらったって♪」

「おまつ、それはかなり言葉が抜けてる——」

「この…変態があ!!」

マーシヤの重い蹴りが、リヨウの大事なところに入った。

力とは必然 強者の訪問

時は流れる。

戦争なんてなく、平和な時が。

リヨウ達は今では6年生になっていた。

今、彼らは親睦会の準備期間だ。

4年生まではクロのペアが常に優勝していたのだが、クロはともかくフリミレスが捕まらうまい人がいなくなってしまう。

フリミレスはクロと古い仲だそうでクロは今でも釈放してもらえるよう交渉している。

6年生となれば学校に通うラスト一年間。

ラストなんだから出てみようかなと思いで作りに入る人も多い。

もともとリヨウ達の学年は出る人が多かったので大差ないのだが。

で、今はその準備期間ということで友達や恋人を誘ってみようと食堂に来る人が多い。

「リヨウ、出ましょうよ」

「…毎年お前はよく誘うな？」

「だっていい思い出になるし愛を確かめられるじゃない」

リヨウは今、ミイヤに絶賛誘われ中だ。

周りにはマーシャ、リリア、フィリアと女子の3人はもちろんのこと、クロとレック
ス、ケイトもいる。

このいつものメンツ＋クリティウス姉妹にシューレスもいる。

かなりの実力者がそろっておりなんかすごい。

「…愛って」

「いいんじゃない？僕、リヨウが踊ってるところみたいなの」

「クロ、何度も言うが俺は社交ダンスなんて知らないんだよ。恥さらしになるだけだ」

「なら僕が教えるよ。そういう類は得意なんだから」

クロはぜひリヨウのダンスを見てみたいようだ。

リヨウはこの学校に入学してからこれに参加したことは一度もない。

リヨウ自身が嫌がっているのもあるのだが2年以降の理由はもう一つあった。

この話をするたんびにマーシヤの視線が怖いのだ。

「マーシヤ…、一体どうしたんだよ？」

「別に。ただ見てるだけよ」

「でも顔が怖いぞ？」

「そう？ならあなたの目がおかしくなってるのかしらね？」

周りほとんどが理解しているのだがリヨウは理由が全然わからない。

小声←

「もしかしてリヨウさん、まだ気づいてないんですかね？」

「当たり前でしょ。じゃなきやあんなこと言わないわよ」

「マーシヤさんも不器用ですね…。リヨウさんも気づくべきだと思いますけど」

リリアはお前も人のこと言えないだろと思う。

ケイトもフィリアも奥手で気づかない。

いや、気づいているのかもしれないが行動に出ない。

お茶の約束もしたと言うのにまさかの本当にお茶をただけ。

リリアはミイヤ達と同じく買い物ぐらいはするのかと思っただが校内のカフェでお茶を飲みながら話しただけ。

そのあと何度か行ったそうだが進展なし。

それで2人とも満足しているのだからまた驚きとしか言いようがない。

「人のことは言えないわよね…」

「なんですか？」

「いいえ、別に。それよりあなたはもうするの、親睦会」

「…迷ってはいまずけど」

チラツとケイトを見るとシユールレスと話をしている。

小声らしく、内容は分からない。

背中を叩いて何か励ましているように見えるがそれ以外は…。

「ここで誘うのは無理ですよ。恥ずかしい…」

「奥手ねえ…。応援はしてあげるけどそれじゃ何やっても——」

そう言いながらケイト達のほうを見るとシユールレスがこちらを見ている。

アイコンタクトを送っているようだ。

リリアはシユールレスが言いたいことを理解する。

意地悪な笑いを見せるとまた、ケイトのほうに顔を戻す。

あちらも誘おうか悩んでいるようだ。

「まあ、頑張りなさいよ。どうせ最後はあなた自身の力が必要なんだから」

「最後って…。今はダンスに誘うか誘わないかですよ？」

「いろいろとね。で、マーシヤ。あんたはいいの？誘わなくて」

「別に恋人じゃないし、いいわよ。まあ、リヨウが誘ってくれれば…」

「…あなたも恋には奥手ね」

彼らの日常は続く。

普通の日常が。

戦争なんて起きない普通の日常が。

しかし、異変は少しずつ、近づきつつあった。

夜、9時ごろだ。

リヨウは寮の庭にいた。

基本使われることはないし、しかも夜。

人影はサクを含めて2人しかいない。

なんでこんな所にいるかというと、マクアドルに呼ばれたからだ。

詳しい内容は不明だが重要なことだそうだ。

「リヨウ殿、話っていったい何でしょう？」

「さあな。ただ重要だということだけしか…」

あれから一年弱、分かったことはいろいろある。

本来ならば生徒であるリヨウにはもちろんのこと、ただの教師であるマクアドルにも普通は入ってこないような情報も入ってきた。

すべて情報源はミリーナだ。

分かったことは2つ。

1つ目、帝国の方に敵の本拠地はないということ。

侵攻があつてから2ヶ月後、軍隊は地図通りに敵地へ向かったのだ。

その地図は古かったので変わっている可能性もあつたのだが敵地は変わらないところにあつた。

少人数を絞り込み入り込んだのだが不思議なことにあるのは民家のみ。

立派な建物はなく、ミューズデルと比べると少し古い民家のみが並ぶ。

後の調べによると、位が高い人はここには住んでいないと言う。

どこにいるかも誰も知らないと言ったそう。

拷問をして聞き出すと言う手法もあつたのだが、相手は非戦闘員のみ。

ここでそんなことすれば不審に思われかねないのでやめだった。

一応、今そこはミューズデルの支配下に置かれているそうだ。

2つ目は分かったというより利益だ。

以前もらったミリーナの厚い本をケイトに渡したところ、認知無キ魔法《アンノウン》を覚えられたらしい。

シユールスも同じく。

2人の家系のアンノウンはすでに途絶えており知らないままだったそうだ。

だが、この本にはA〜Zまでそれぞれのアンノウンが記されていたらしく苦労したがマスターした。

今でもシユールスはこれを一字一句読み漏らさずすべて読んでいる。

他のネームについてもだ。

この時リヨウは初めてシユールスが努力家だということを知った。

今回呼び出されたのはきつとそれ以上のことがあるのだろうと思いついたのだが……遅い。

「もう10分経ったか？」

「そうですね。まさか忘れていたのでしょいか」

そんなことはない、きっと教師の業務が遅れているのだろうと待つことにしたその時。

足音がした。

「遅いですよ、先…」

音がしたほうを向くと知らない男が一人。

一見普通の人に見えるがありえない。

この寮に一般人は普通は入れないからだ。

「…何者だ、お前？」

「…赤島信乃だ」

知らない名前。

だが、それ以上に気になるのが今の言い方。

「シノブ・アカジマの方がもう慣れたのか？」

すぐにドールを展開する。

こいつは地球について何か知っているのは間違いない。

「それが君の5段階目か…。だがなぜ今展開する？」

「当たり前だろ。今の名前のしゃべり方、地球の日本と一緒だった」

「…成程。何も話していないのか。だけど、それも面白いな」

赤島も手をかざした。

すると腕時計が水のごとく溶けていく。

下に水たまりができる。

やがてそれは人の形をかたどり始めた。

「使い魔か……！」

やがて一人の人間の形ができる。

しかし、その形は知っている人の形だった。

「え？」

「私が……もう一人？」

サクが形作られた。

見た感じは違いが判らない。

どちらが偽物かと聞かれると見た目だけでは分からない。

「水の妖精だ。この子はどうも相手をまねるのが好きみたいだね」

サクが怒りをあらわにする。

真似られるのがどうも許せないようだ。

「リヨウ殿、あいつは私が」

「頼むぞ」

サクの武器は小さな刃物とワイヤー。
小さな刃物といったが15cmはある。

竜の状態になれば火を噴いたり爪を使ったりとできるが最近はこの戦い方も勉強中だ。

敵の確認をするとすぐにリヨウが動いた。

ヒュニスを使い、使い魔と引き離す。

地面に刺すように赤島に攻撃する。

赤島はそれをひらりとかわし使い魔と離れる。

リヨウとサクはそれぞれの敵に向かっていく。

リヨウはまず近づき矛で斬り倒そうとする。

しかし、これを紙一重でかわされる。

そこから派生させてさらに2突き加えようとするが、これも紙一重。
ヒュニスを引き戻し、さらにその6つも使い攻撃を加えようとする。
が、まさかのすべてを避けられる。

恐ろしいことにすべて紙一重の距離だ。

「どうした？その程度か」

「避けてばかりだな？そんな無駄口叩いてられるのかよ」

「俺が本気を出せばすぐに決着してしまうからな。ライル、今時間は？」

サクと戦っている使い魔が答える。

「9時17分です」

「ならあと2分だな。2分後に反撃を始めてやる」

リヨウもここまで言われて黙ってはいられない。

赤島に近づき久しぶりに唱える。

「フラッシュュ！」

「！」

突然の光に赤島の視界が奪われる。

ただでさえ夜で多少周りが暗かったので効果は絶大。

しばらくは敵の視界は戻らないだろう。

そうなればこのなめた回避はもちろん、避けることすら困難になるはず。

赤島は目をつぶり平然とした顔をしている。

視界が奪われたのにもかかわらず余裕なようだ。

リヨウは殺すわけにもいかないので矛をしまい、手で殴る。

真正面から右ストレート。

が、ここもなんと避けられた。

紙一重ではないがそれでもギリギリなほうだ。

「なっ!？」

避けられたことに動揺しリヨウに隙が生まれる。

しかし、赤島は「反撃をしない。

「どうした? あと一分だぞ」

リヨウはその言葉に我を取り戻し、新たに魔法を唱える。

「ライトチェーン!」

光る鎖がリヨウの手元に現れる。

以前、これは長さを伸ばすという用途で使ったのだが本来の用途は束縛だ。

使用した魔力の量だけ伸びるこの鎖は簡単には壊れず、多少ならばリヨウの思い通りに動く。

鎖を投げ、赤島を捕らえる。

赤島はただ巻きつけられた。

「終わりだ!」

殴りかかる。

が、ここで予想外の展開が起こる。

鎖にひびが入ったのだ。

リヨウが拳を当てようとした瞬間には鎖が壊れ、かわされる。

いくらリヨウが魔法を得意とはしてないとはいえここまで早く壊されたことはない。リヨウも驚きを隠せない。

「信乃さん、19分です」

ライルが赤島に伝える。

すると赤島はさつきまで閉じていた眼を開き、リヨウに向かって直進する。

リヨウはヒュニスを盾に使い、矛を構える。

赤島は何も持たず、走ってきた。

リヨウはヒュニスを盾のごとく設置。

少しだけ簡単に破れそうなところをあえて作り矛を構える。

(いつでもいい！)

しかし、また予想外なことが起こる。

なんとリヨウが作った簡単に開ける道ではなく難しいところに衝撃が加わる。

一撃でヒュニスの一つが砕け、道が開く。

疑問を与える暇もなくリヨウに接近し首をつかみ地面に叩きつけた。

「……！」

「チエツクメイトだ。もちろんあちらもな」

サクのほうもまったく同じ状況になっている。

同じ顔同士で戦っていたのでどちらがサクかは不明だがおそらく身動きが取れないほうが本物。

「お前、何者だ？」

「だから赤島信乃だと言っててるだろ」

「帝国の連中か？」

「昔はね」

「昔？！」

「今は——」

「赤島、リヨウ君は私の生徒だよ？」

「ここにきてマクアドルが現れる。」

しかし、焦っている様子も赤島を敵視している様子もない。

「首に手を当てるのは、やりすぎじゃないかい？」

「……済まないな。お前のお墨付きだったから少し期待していたからこれくらい力を出し

たのだが」

「私が教えたのは侵攻があつた時の話だよ。今はただの五段階目」

「そうか」

首から手を離し赤島がリヨウウから離れる。

ライルも同じく手を離し赤島のもとに戻る。

「…先生、そいつは何者ですか？」

サクが悔しそうな顔をしながらリヨウウのそばに戻る。

「リヨウ君、名前を聞いたろ？赤島信乃だよ」

「そうじゃありません。…知り合ひなんですか？」

「そりゃ、数少ない地球人だしね」

もう一人の英雄

「うっそ！結局誘ったの!？」

「そーなのよ。今回もフィリアからだっただけで、特に盾にする理由もなく『ダンス踊ってくれませんか?』って」

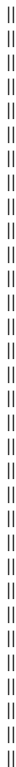
「それで、ケイトの反応は？」

「了解してたわよ。顔には出していないけど嬉しかったと思うわ。っていうか、ここで断つてたら私が正義の鉄拳をお見舞いしてたわよ」

なんていう理不尽な鉄拳!?!、いつものリヨウならツツコミをするところだ。

リヨウは今隣に女子2人をつれ、移動中。

他人の恋沙汰は聞いててつまらなくはないのだが、今日は昨日のことで頭がいっぱいだった。



「昨日の夜」

「そいつが、地球人？」

名前を聞いてなんとなくは理解していたが納得がいかない。

「そうだよ。リヨウ君忘れたのかい？1年生のころ君には教えたはずだよ、2人いるって」

それを聞いて思い出す。

確かに2人いたと言っていた。

「でも、俺の記憶が正しければ……」

「そう。こいつには殺されかけたよ」

かなり軽い感じで言った。

殺されかけたとはとても思えない。

「マクアドル、その件は許してもらえたのではないのか？」

「赤島、昔話をしたただだよ。許すも何もまず怒ってすらいないよ、私は」

「そうか。ならいいのだが……」

これではリヨウは蚊帳の外だ。

「……先生、要件は何ですか？」

「ああ。要件っていうのはこれだよ。この人の紹介だ」

「何度も言うが赤島信乃だ。こっちはライル、俺の使い魔だ」

ライルがサクの姿で頭を下げる。

「で、こいつらを俺に紹介した理由は？」

「…あまりそういう感じで物を言わないほうがいいよ。この人、将来君の上司にあたる人だよ？」

「…は？」

上司？

ナニイツテルノコノヒトハ？

「彼、この世界だと偽名を使ってるんだよ。この世界での名前はリブルス・グネスト」

「…知らないですよ、そんな人」

「職業は軍人。君が軍隊に入った場合、直属の上司にあたる人だよ」

「…は？（本日2回目）」

目の前にいるのは見た目は一般人。

確かにリヨウの攻撃を少しも許さなかった。

それだけを見れば可能性もなくもないが、問題はそこではない。

マクアドルは今、直属の上司と言った。

「リヨウ君、君はどちらかというと言はいいほうだろうか？言ったとおりだよ」

「いやいやいや、おかしいでしょ？なんで直属の上司が職業が決まる前から決まってるんですか？」

「そんなの簡単なことだ。ある人の力を借りれば」

「誰だよ！職権乱用してるだろそいつ!？」

「ミリーナだ」

「あのおばさん幼女め！」

「矛盾してるよ？」

「この人がミリーナの存在を知っている時点でかなり深い所にいるというのは確定だ。」

「ここでリヨウはこの話が茶番になりかけていることに気づく。」

「…まあ、いいです。どうせあと一年先の話ですし。で、まさか重要な話ってこれだけじゃないですよね？」

「もちろん。これはあくまで+だよ。本題はこれだよ」

一枚の紙がリヨウに渡される。

さほど小さい文字ではないが文字のみが並んでいる。

「これは？」

「君のこれからのスケジュールだよ」

「スケジュール？」

「君にはこれからみんなとは少し違う授業を受けてもらうからね」

「どういう意味ですか？」

「この学校に成績が良ければ、一定の条件を満たせば、落ちこぼれならば、といった理由で授業内容が変わったことはない。」

「それについては俺から話そう」

赤島がそう言うのとライルの頭の上に手を置いた。

するとライルは水のように溶けてやがて赤島の腕時計に戻る。

「まず、お前はミリーナに魅入られてここに来たそうだな？」

「よし、思いつきり違う理由にどうツツコンだらいいか分からないぞ、俺」

「違うのか？まあ、いい。そこは重要ではないからな」

「なら、なんで…。つていうかあんた本当にお偉いさんかよ？」

「無論だ。私も時間が押しているのだから、手早く話させてもらう」

ならどうでもいい話すなよ、というツツコミはあえて入れない。

「一言でいえばお前は才能がある、らしい」

「らしい、ですか…」

「そこで、私はお前を鍛えることにした。で、今お前を試したのだが…期待はずれにも程

がある」

「そりやどうも」

「動きが鈍すぎる。マクアドル、鍛える方針は俺が決めていいんだな？」

「問題ないよ。一応ここで演説してもらえるかな？」

面倒なのか嫌な顔をした。

だが、逆らうわけにもいかないらしくため息をついて説明を始める。

「俺が鍛えるのは主に科学には頼らない力だ」

「自分自身の力…っていうことか？」

「ドールの進化を促す方法があればそれをやってるのが残念ながらそれはまだ確立されていない。だから鍛えるなら己の体だ。今までもドールで戦闘訓練はしてきただろうがそれは外界の力に頼ってるのと何ら変わらない」

「まあ、そうだけど…」

「とりあえず明日から動体視力を鍛える。ここにいるとSバリアに頼るからそれが育ちにくい。今日はしっかりと休むように」

「…分かりました」

思ったより本格的だ。

でも授業を変えることなんてできるのか？と疑問もわく。

「ちなみに授業の件は私の権利とお前が逸材ということで話が通っている」
「…説明どうも」

「あと私は明日からお前の上司だ。今はいいが明日からは敬語を使え。ライル」
『40分まであと2分と17秒です』

ライルの響くような声がする。

「時間がない。マクアドル、俺はそろそろ休まねばならないのだが」

「ああ、もうそんな時間かい？じゃ、リヨウ君、後は頼んだよ」

「…は？（本日3回目）」

マクアドルはそこを後にした。

赤島とリヨウを残して。

「…じゃ俺もこれで」

「部屋に戻るのか？」

「そうですね」

「ならついていくとしよう」

「…ここで本日4回目になる、は？はあえて使うのをやめる。」

「それはいつたいどういう…」

「私の家はここからはかなり遠い。転移装置を使えば疲れないのだがそれではスケ

「ジュール通りにならない」

「そうですか」

「だから今日はお前の部屋に泊まる」

「なんでそうなるんだよおおお！」

「俺が女じゃなくて残念だったな」

「そうじゃないよ！」

「安心しろ。もし欲望を発散したいのならライルを使う権利をやる。かなり不本意だがそれくらいは許そう」

「お前何もしないじゃん！」

「俺にもそういう要求をするのか？ロリコン、シヨタ好きというだけでも強烈だったと
いうのにまだあったのか」

「~~~~!!」

大人だからといってまともというわけではないようだ。

どうして俺の周りには何かしら濃いキャラが多いんだと嘆くが意味はない。

「ともかく、早く案内しろ。寝袋だつて持ってきてるし問題ない」

「俺はお前を部屋に上げる気はない！」

「…あらぬ疑惑を俺の権力で——」

「どうぞ、こちらです！」

|||||

「ちよつと、リヨウ。聞いているの？」

「ん？…ああ、ワリイ。何の話だ？」

「フィリアの恋路についてよ。あの子たちには早くしてもらわないと学校の記事にできなくなっちゃうわ」

「あ、ああ。そうだな…」

結局あのは部屋に案内。

サクはかなり不満だったようだが、リヨウの決めたこととなれば文句は言わない。

部屋に戻るとクロがいたのだが、クロは赤島を見るなり「グ、ググググ、グネズトお！？」と、壊れたロボットのようにしやべったと思っただら気絶。

その日は寝かせたが朝、事情を聞くと帝国（ラブトリア内）でもかなり有名な人で、危険人物扱いだったそうだ。

Tにさえ、「会ったら逃げろ」と言われたらしい。

クロから聞いた話では階級は大佐。

リヨウにはなんとなくすごいんだなということしか分からなかった。

「あー…、最後の親睦会なんだし誰か告白でもしてくれないかしら。ダンス中に」

「記事が書きたいならあなたがネタになればいいじゃない」

「じゃありヨウ、ダンス中に告白するから付き合って」

「断る」

「ふ、フラれた…。ミイヤの時より雑に」

「なんで俺がお前の記事のネタになるためにお前と付き合わなくちやなんねえんだよ。

告白するのはもつとちゃんと好きになった人にしろ」

書き忘れていたが3人は今特に目的もなく校内を徘徊中だ。

放課後の時間はたまにこんなことをしてリリアの記事探しに付き合っている。

「じゃあクロにお願いしようかしら。面白くなりそう」

「やめろ、クロの純粋な心をもてあそぶな」

「じゃあレックス？…リヨウと同じ返答が返ってきてそうだよ。あつ、それよりあなた今

日の授業どうしたの？…ところどころいなかったわよね？」

「それ、私も思ってた。この時期にサボりでもするの？」

もつともな疑問だ。

「いや、特別時間割を組まされたんだよ。外から講師も来てるよ」
「なんていう人？」

「赤…、リブルス・グネズトだ」

2人の目も見開かれる。

「リブルス!?! 本当!?!」

「大佐が来てるの!?!」

「えっ、何? 知り合い?」

「あんた、リブルス・グネズトって言ったら軍隊所属の英雄よ!」

2人の食いつきが半端ない。

かなり知名度の高い人のようだ。

「英雄?」

「功績は勿論のこと、今回の戦争を終わらせたといわれる人の1人よ。国境付近で劣勢だった軍隊をたつた1人の加勢だけで優勢にした人物よ」

「1人だけで?」

「それだけすごい力の持ち主なのよ。それと…」

「私、大ファンなの!」

リリアがこれまでにないほど目を輝かせている。

「リヨウ！サインもらっておいでよ！」

「何がそんなにいいんだ？」

「何って、あの顔ときばさばとした性格！グッズがないのが本当に残念だわ」

「そ、そうか？」

「あまり共感してくれる人いないのよね…。ねえ、今度2人で写真撮りたいんだけど交渉しておいてくれない？」

「自分でしろ」

「だって私に会う機会ないじゃない。会えるなら会いたいわよ」

少ししよげるリリア。

写真以外でここまで興味を持っているのを見たのは初めてだ。

「ならお前も同じ時間割にしたらどうだ？」

「できるの、そんなこと？」

「頼んでみればいいんじゃないか？俺も1人でやるより仲間はいたほうがいいし」

「それでうまくいくとは思えないけど…。よし、じゃ、私ちよつと行ってくる！」

善は急げと言わんばかりに全速力で走っていった。

「…あの子、本気かしら？」

「たぶん無理だろ。グネズトだって俺のことなんて言ったと思う？「期待はずれ」だと

よ」

「じゃあ無理ね。ていうかあの子、どこにお願いしに行ったのかしら？」

「…さあ？」

2人はリリアが傷心しないことを願いながら部屋へと戻っていった。

しかし、次の日…

「今日からこいつも一緒に訓練をする」

「よろしくね、リヨウ♪」

「…」

どういうわけか超笑顔なリリアがグネズトの隣に立っていたのは記憶に新しい。

その日からグネズトの訓練を受ける生徒が2人になった。

しかし、リリアが来たことによりリヨウの訓練が命がけになるということをリヨウは

思いもしていなかった。

化学兵器？

「…少しは様になりつつあるな」

リヨウは今、特別カリキュラムをこなしている最中だ。

場所は校庭。

基本、学校はここを使うことがないのでリヨウの授業をする場所はここになりつつあった。

「リリアあ！そんなもんか？ただの攻撃馬鹿じゃ意味ねえぞ？」

「最近はやけに口数が増えたわね！」

今やっている内容はリリアがドールを展開し、リヨウがリリアが撃ってくる弾を避けるという訓練。

勿論人の目では普通の銃弾を追うことなど出来るはずないので、それよりも遅いものを使っている。

「ほら、このままじゃ今日はお前が罰ゲームだぞ？」

「それだけは絶対嫌！」

遡ること数か月前：

リリアが訓練に参加した理由が分からないまま、リヨウはリリアと訓練をしていた。リヨウは主に身体能力の向上を主とするメニューだったが、リリアはじゆうの命中率を上げるメニュー。

はじめは軍人だから銃系統のドールは強くしておきたいのかな、と無理くりくりつけて訓練に没頭。

しかし、そこから約1ヶ月後：

「リヨウ、もっと早く避ける！それだといつまで経っても訓練が終わらないぞ！」

「お前馬鹿だ…ろ?!」

「敬語を使え」

リヨウは恐ろしい訓練に付き合わされることになっていた。

内容は生身でリリアの銃を避け続ける。

リリアは弾のスピードを調整できるよう、ドールの武器で撃ってくる。

つまり当たれば体が挟られる、或いは死ぬ。

「あんたは順序つてもんを知らないのか!? ゴム弾ならともかく実銃?」

「それでは緊張感がでないからな。生きたければ避け続ける」

「リリアに殺人罪でも負わせる気か?」

「俺の知り合いにNのネーム持ちがいる。銃で空いた穴くらい簡単に埋められる」

…それならば別に当たっても大丈夫じゃないか? とリヨウの心に余裕ができる。

いや、それは油断だった。

その時、リリアの撃った弾がわき腹に命中したのだ。

勿論、痛みに耐えきれず地べたに転がる。

「あああああ!」

「リヨウ!」

「油断したな? いくら生き返れるとはいえ、痛いには変わりない」

グネズトがリヨウに近づき、リヨウのわき腹に手を添える。

何か唱えたかと思うとやがて痛みが引いていった。

「俺でもこれくらいなら治せる。リヨウ、立て。訓練再開だ」

「…避けるのを失敗するたんびにこの痛みかよ?」

「いずれ慣れる…、と言いたいところだが何度受けても痛いことに変わりはない。もし痛みを感じたくなければ、自分から死に行けばいい」

「上等だ…。絶対、避けきつてやる!」

「リリア、再開だ」

「…」

リリアが立ち尽くしている。

どうやら狙ってはいたが当たるとは思っていなかったようだ。

治るとはいえ、これからも傷を負わせると理解したのだろう。

「リリア、まさか怖気づいたのか?」

「…グネズト大佐、こんなやり方じゃなくても…、疑似戦闘体験装置でも使えば」

「それでは身体能力が向上しない。生身で走って逃げて、初めて力がつく」

「でも…」

「リリア、俺は構わない。頼む」

リヨウの強い声。

何がこもっているのかは分からなかったが、リリアにも強い何かが伝わる。

「…謝ったりはしないわよ?」

「そうしてくれ。本気で頼むぞ」

|||||

それからこうしてずっと、似たようなことをしている。

今ではリヨウが被弾する確率が限りなく0になり、リリアはむしろ意地でも当ててやると頑張っている。

「よし、今日はここまでだ」

グネストの合図があり今日の訓練が終了する。

リリアはドールの装備を解き、膝をつく。

ズーン…という効果音が似合う状況だ。

「今日はリヨウに伝えることがある」

「なんですか?」

「これだ」

腕輪から「ミュレス」の広告が映し出される。

前にも言ったが、これは参加は自由の対戦だ。

4年生からあり、自分を企業へ売り込むという意味でも使われる。

端的に自分の強さを見せつけるならここほどこほいい場所はない。

だが、リヨウにはあまり意味のない話だ。

理由は単純。

すでに就職先が決まっているからだ。

グネズトの訓練を受ける時点で軍隊に行くというのは決まっていた。

他にも実力者は、特にネーム持ちなんかはこの時期にはたいてい決まっています。みんながいろいろ就職先を探さず、ゆっくりしている。

ちなみにリリアも軍隊に行くらしい。

「これに出ろってということですか？」

「この強靱対戦にしろ」

強靱対戦

簡単に言えば強い奴の寄せ集めの大会。

普通の大会の方はSバリアのエネルギーがなくなる、或いは何かしらの理由で戦闘続行が不可能になればそこで終了する。

だが、これは疑似戦闘体験装置を使用するため相手が死ぬまで戦い続けるガチなやつ

だ。

「構いませんけど…これ、出れるの4人ですよ。予算上の都合で」

「そうだ」

「俺が確実に出れるって言う保証ありませんよ？」

「お前が出れないとなると全部の枠が魔法側で埋まるな。そんなことはないから安心しろ」

…確かにリヨウが出れないということはおそろくない。

これは希望者が参加志望を出し、上の人が今までの成績をふまえて出場者を決める。侵攻を止めた一人であるリヨウがはじかれることはまずないだろう。

「リヨウ」

校舎の方から走ってくる人影が見える。

「ミイヤか…。ちようどいいな」

実はミイヤ、この訓練に参加を希望していた。

マーシヤもだが、2人とも特に必要ないとのことではじかれた。

そのせいでマーシヤはともかく、ミイヤはかなりグネズトのことを嫌っている。

「リヨウ、訓練終わったでしょ？晩飯食べに行きましょう」

「そうしたいのはやまやまだがリリアの罰ゲームと、大佐からの話が…」

リヨウはグネズトのことを大佐と呼んでいる。

なんとなく呼びやすかったからだ。

「チツ…。あんた、さつきと話しを終わらせなさいよ」

「…お前の俺を敵視する目は今まで向けられたことがないくらい殺気がこもってるな」

「いやなら私をリヨウとくつつけなさい」

「それ、他人にお願いするか？」

「だってこいつのせいで私とリヨウの時間がかなり削られたのよ！それくらいしてもらわないと気が収まらないわ」

「ミイヤ、お前に朗報だ」

2人がグネズトの言葉に顔を向ける。

グネズトの顔が笑っている。

「…なによ？」

「リヨウ、今回お前が倒すべき対象はただ一人。それはケイトだ」

「よし、無理ゲーきた！」

「最初にあたらせるように俺が仕向ける。そのあとは負けても勝つてもどっちでも構わない。だが、もしケイトに負けたら…」

「負けたら？」

「一日ミイヤの人形になってもらう」

「大佐、アザツス！」

ミイヤの目が尊敬の目に変わる。

しかし、リヨウはそれを良しとするはずがない。

「いやいやいやいやいや！なんでそうなるんだよ!?!」

「今のお前なら勝てるよと踏んだからだ」

普通に考えれば無理だ。

ケイト自身は厳密には不死身じゃないと言っているが、誰も殺し方は知らない。

そんな相手に勝てるわけないのだ。

「相手不死身ですよ!?!無理でしょ?」

「それは普通の勝負の話だ。今回は強靱対戦。戦場とはわけが違う」

「:~:という意味ですか?」

「今回の強靱対戦の勝利方法は相手を殺すことだ。データだから容赦はいらない」

「いや、だからケイトは不死身なんですよ?」

「本当にそうか?」

起き上がってくるのだから死んでないのだろう。

そう思っていたが、そう言われて少し考える。

そして、一つのことを思い出す。

ケイトは確か敵から情報を聞き出すため、敵の治療をした。

それも死体だったはずの敵を。

「…あつ」

「そういうことだ。あいつは死んでないわけじゃない。死んでから生き返ってるんだ」

「まるでゾンビですね…」

「身体能力も上がったお前ならドールをつければ衛生兵にはネーム持ちといえども負けない。そう思った」

確かにそう考えれば相手は衛生兵志望のネーム持ち。

攻撃魔法もあまり得意ではないと言っていたし、勝ち目がないわけじゃない。

「…分かりました」

「なら鍛えておけ。参加申請は俺がしておく」

「あの、大佐。俺が勝った時は何かないんですか?」

「…、ならお前が勝った時には——」

「で、なんて言ったのよ?」

「何人か好きなやつも一緒に訓練してやるって」

「なら、頑張れよ。俺も軍隊志望だから勉強より体を動かしたいんだ」

「…最低限はつけとけよ、知識も」

リヨウは今食堂で晩飯を堪能中。

「で、リリアは食べないのかそれ?」

「…(汗)」

リリアの目の前には名物罰ゲーム料理である激辛麻婆豆腐だ。

今のところ、ケイト以外おいしそうに食べた人を見たことがない。

不死身だと味覚が少しおかしくなるのだろうか?

「おいしいですよ?せっかく頼んで食べないなら僕に…」

「ケイト、それじゃ罰ゲームにならない。最低10口は食べないと」

「じゅ…10口!?!」

「そう決めただろ?約束破るなら即クレア先輩に連絡だな」

「…!」

スプーンを持って震えるリリア。

ある意味究極の選択だ。

「つていうか、なんでケイトいるんだ?ここ、科学側の学食だぞ?」

「今日はこつちの先生の手伝いしてたんだ。就職先決まったし、暇だったからね」

「成程。で、リリアはまだ食べないのか?」

震えているリリアをしり目にケイトはパクパク食べている。

リリアは一度これを食べたことがあるため、これの辛さは知っている。

マジで涙が出てくるほどだ。

「おいしいのに…」

「ケイトさん、それよく食べられますね…」

「フィリアは食べたことないの?」

「真つ赤じゃないですか?すごい辛そうで…」

「なら食べる?はい」

スプーンで一口分すくってきた。

普通ならばすぐにでも食いつきたいところだが、食べ物があれだ。

ここでフィリアも究極の選択を迫られる。

(こ、こ、こ)これは、世にも名高い、かかか間接キスというものですか!?!食べたいですけ

ど……！)

目の前にあるのは真っ赤になっている麻婆豆腐。

ちなみに今のケイトに邪な考えはない。

(食べたい、ですけど辛そう！ですけど……！)

「……葛藤してるわね」

「どうするのかしら？」

フィリアはこれを食べたことがない。

だからどのくらい辛いかわからない。

人は決まっと思う。

「自分は大丈夫」と。

「じゃ、じゃあ一口……」

「はい、どうぞ」

まさに、あくんの状態。

古くはあるがこれを好きな人にされて嫌な人はいないだろう。

フィリアにとって至福のひと時が流れる。

「パクッ」

その瞬間、天国が地獄に変わった。

「どう?おいしい?」

ケイトの笑顔がフィリアの目に映る。

悪気がないのだから逆に恐ろしい。

「え、ええ。とても…!」

「それはよかった。もう一口いく?」

「…!!」

あの至福のひと時はまた味わいたいが激辛麻婆豆腐はまずい。

次食べたらどうなるか、わかったもんじやない。

「ケ、ケイトさんに悪いですし、いいですよ。それより私…、少しトイレに行つてきます」

「そう?今度食べようね」

フラフラとトイレに向かつていくフィリア。

トイレに着いた後はしばらく辛さがゆえに涙が止まらなかつたそうだ。

そんなフィリアを見てリリアは青ざめる。

「リリア、フィリアは食べたぞ。お前はどうした?」

「…慈悲を」

「なら3口にしてやる。ただし5秒以内」

「え?」

「4, 3, 2」

「え、ええ？」

「リリア、早くしないと！」

「1…」

リリアが一気に口の中に押し込む。

三口分だ。

勿論すぐに立ち上がる。

ダッシュでトイレに向かって行った。

顔が見えないのが残念だった。

「女子には優しくしてあげなくちゃだめよ？」

「言いだしたのはリリアだ。俺は悪くない」

「で、この残ったのはどうするの？」

3口食べただけでは勿論なくなったりはしない。

「ケイト」

「ごめん。なんかお腹いっぱいだよ…」

「私は絶対いやよ」

「私もリョウの頼みであつても無理ね」

「僕も」

「俺も」

いくら辛いからといってこれを返すのはなんか気が引ける。

「じゃあ使い魔に食べさせてみたら? なあ、クウ?」

「…主、あれは人のでも妖精の食べ物でもありません。化学兵器です」

ケイトのポケットから顔を出したクウがものすごい嫌がつている。

妖精でも食べられないようなものを食べてるケイトっていったい…。

「ならサリス、ノリス。食べてみて」

「承りました」

突然どこからともなく現れる2人。

顔色を少しも変えることなく、それぞれスプーンで一口。

「…どう?」

「…」

一見何もないように見えた。

が、2人の顔が赤くなり始める。

「…ミイヤ様」

「何?」

「少し、お暇を頂戴します」

「えっ？ 暇ってどういうこと!？」

2人とも消える。

残ったみんなはケイト以外、麻婆豆腐を危険視する。

「サリスとノリスを一口で…」

「恐るべし、激辛麻婆豆腐」

それからというもの、使い魔をも撃退する激辛麻婆豆腐は名を改め全校生徒から「化学兵器」と呼ばれ、それを平然と食べるケイトは「化学兵器の母船」という不名誉なだけでなく、なんともネーミングセンスのないあだ名が付けられたようだ。

本気

「リヨウ、頑張つてね？」

「もちろんだ、ここで負けたらいろいろまずいからな」

ミュレス当日、リヨウは今クロと待機中だ。

今まで何度もこういう風に対戦を待つ、ということはあったので普通はもう緊張なんてない。

だが、今回は賭けてるものが大きすぎた。

「1日ミイヤの人形とか…、俺マジでやばいぞ」

「なら勝てばいいんでしょ？リヨウなら出来るよ」

周りに人はいない（クロを除いて）。

この部屋にあるのは模擬戦闘体験装置のみ。

対戦相手と同じ部屋で待機はおかしいということとそこは別々になっている。

この静かな空間がより一層、リヨウの緊張を駆り立てる。

「…クロ、紙と筆記用具はあるか？」

「なんで？」

「遺書ぐらいは残していきな」「リヨウ、応援に来たわよ」

マーシャとリリアが入ってきた。

友達の出入りは自由になっている。

「あら、ミイヤはいないの？」

「今回はケイトの応援だ。あいつとしては絶対そっちの方が嬉しいだろうしな」

「残念。この空間で何か良い記事でも取れるかと思つたのに。レックスは？」

「あいつは準備運動中だ。シューレスと戦うんだからな」

ちなみに今回選ばれた4人はケイト、シューレス、レックス、リヨウの四人になった。

クリティウス姉妹は「めんどい」ということでこの戦いには不参加。

そうなれば必然的にこうなってくる。

「で、リヨウ。あなた、勝機はあるの？」

「当たり前だ。この戦場でなら俺の方が有利だしな」

「そうなの？」

ケイトは不死身ではない。

頭を吹き飛ばす、心臓をえぐる、多量出血などうまくやれば殺せるのだ。

そして今回の勝敗は機械が判定する。

一度でも殺せればそれで終了なのだ。

さらにケイトは身体能力が高いわけではない。

この戦場はケイトにとつてデメリットが多すぎるところなのだ。なぜ、彼が出ているのかりヨウにはわからない。

「だってよ？心配して損したわね、マーシヤ」

「な、別に私は心配なんか…」

「ああ、もしリヨウが負けたらどゴフツ!？」

リリアの腹にマーシヤの鉄拳が入る。

ここで足が出ないということは少しは加減しているのだろうか。

リリアが痛みに悶えている間に試合開始のブザーが鳴る。

「じゃ、行ってくる」

「頑張つてね、リヨウ」

「人形になんてなるんじゃないわよ？」

「わ、私的には…、人形になつてもハバツ!？」

リヨウが装置の中に入っていくとき、最後に見えた光景が痛々しかったのは言うまでもない。

装置に入り、一瞬意識が飛んだかと思うと気づけば戦場だ。

ケイトはすでに待機中だった。

周りには観客がリヨウを見て盛り上がる。

「あつ、リヨウ。今日はよろしく」

「ああ。今回は勝たせてもらうぜ?」

「別にいいよ。俺、そんな勝ちには執着するつもりないし」

ケイトのやる気のなさに少しガクツ、と体勢を崩す。

え、こいつ、参加希望したのにやる気ないの?

「ならなんで出てるんだよ?」

「うちの家系はね代々病院を経営してるんだけど、決まって最低5年は軍隊所属が暗黙の了解になってるんだよね」

「それが?」

「僕はもう就職先決まってるから上司も決まっただけど、その上司がこれやってこいつて。僕、衛生班に入ったはずなのになんでだろう?」

これもグネストの手が回っているのだろう。

大佐なんだからそれくらい大したことないはずだ。

だが、これはリヨウにとってありがたいことだ。

ただでさえここでは本領発揮できないのにやる気がない。

「まあ、良いところで勝ちを譲るよ。どうせシユーには勝てないし」

「そ、そうか？ありがとう」

ミイヤから何か言われているはずなのだが、ケイトには関係ないようだ。

マイペース極まりない。

やる気がないと観客はブーイング間違いないが良い感じに盛り上げれば十分だ。

そんな事情、観客にはわかるまい。

『ただいまより、リヨウ・アマミヤ対ケイト・N・フェニーチェの試合を始めます』

会場にアナウンスが鳴り響く。

「じゃ、とりあえず派手な魔法から」

「…はい？」

『5, 4, 3, 2, 1…』

ケイトが手を上にかざす。

『…ファイト！』

試合開始の合図と同時にケイトのかざした手の先に7つの球ができる。

それぞれ色が違う。

「よつとー！」

ケイトが手をリヨウの方に流す。

するとそれぞれの球体から無数の光線が飛び出す。確かに、カラフルで派手だ。

「お前、勝つ気まんまんだろお!？」

リヨウの悲痛な叫びが響く。

しかし、盛り上がっている観客の前にそれはすべて打ち消される。とりあえずヒュニスを盾のごとく構える。

すべての光線がそこで遮られる。

「ほら、守ってばかりじゃ意味ないよ?」

ケイトが指を鳴らすと次はリヨウの周りに火の球が無数に現れる。

移動できるスペースがない。

だが、リヨウだつてこれで終わりではない。

「ウォーター!」

矛を取り出し水をまとわせる。

誰にでもわかる。

火を消すなら水を使うのが一番早い（風もありか?）。

しかし、リヨウは勘違いしていた。

この火の球をただの火であると。

水をまとった矛で火の球に触る。

すると、球が爆発する。

「なっ!?!」

回避行動なんてとる暇はない。

さらに連鎖爆発のごとく周りの球も爆発していく。

リヨウに避けるスペースはない。

観客は盛り上がるがこれを見ただけでは普通、相手が死んだと思う。

しかし…

「あれ?!」

ケイトが首をかしげる。

爆発したところに人影がはっきり見えるからだ。

リヨウが立っている。

ふらつくことなく、しっかりと。

「…」

リヨウ自身も驚いていた。

あれだけの爆発、データで作った爆発でなければ会場がとどころどころ抉れているはず

…。

いくら身体能力が上がったからって体がそんなに丈夫になつたとは思えない。つていうかSバリアのエネルギーが思ったより全然減っていない。

「…あ」

リヨウが答えに達したところ、違う場所での試合を見ている人がいた。

「ほらな、言った通りだろ？」

「…確かにあれでは騙されてしまうな」

シユールレスとグネズトだ。

シユールレスは見抜いていた。

ケイトにやる気がないということ。

もともとケイトは攻撃魔法全般が苦手。

だから自爆魔法を覚えたのだ。

それなのにそれを使わず、爆発魔法という派手な演出をしている。

はた目から見ればリヨウがすごいように見えるがそれは違う。

ケイトがダメダメなだけなのだ。

「このままいけばあと5分以内には勝負がつくぜ」

「…それでは訓練にならない。なんとかして本気を出させたいところだが、何かないか？」

「あるにはある、が俺は出来ればやりたくないな。脅しになるし」

長年付き合ってきた仲だ。

ケイトに本気を出させる方法は一応ある。

「だが…、なんで軍隊のお偉いさんがわざわざリヨウとケイトをぶつけるんだ？」

「俺は今リヨウの訓練をしている。最近までは主に動体視力について上げてきた」

「それで？」

「ケイトは体を一瞬で回復できるNのネームを持っている。つまりやつを殺すにはちまちました攻撃ではなく重い一撃、或いは正確な一撃が必要だ。鍛えた動体視力を全開で使い、倒せれば次の訓練に移れるのだが…」

シューレスにはリヨウの置かれている状況について話してある。

「それで、リヨウを本気にさせるため負けた時の条件を酷くした、がケイトまでは操れなかったと？」

「ネーム持ちなのだから負けたくないというプライドがあると思っていたのだが」

「あいつは痛いのを嫌がる戦闘には向かない人材だぜ。負けに対するプライドなんてほとんどないさ」

グネストはこれで訓練の成果を確認しようとしていた。

だが、これでは意味がない。

他の確認方法もあるがこれが一番信用なるのだ。

「シユールレス、お前も軍隊志望だったな？」

「そうだが？」

「上官命令だ。ケイトに本気を出させろ」

言われたことに目を丸くする。

シユールレスも同じくネーム持ちで就職先は軍隊と決めているが、上官はまだ決まっていない。

いや、普通決まっていないのだ。

ケイトのdadって実は正式ではない。

「俺はあんたの下についた覚えはないぜ？」

「俺の直属の部下は決まって戦闘能力が高い。俺が選んでいるからな」

「それは合法か？」

「俺がルールだ。で、お前もすでに俺に下につくことは決まっている。俺の命令には従え」

シューレスはケイトと違ってプライドが高い。

自分を操り人形のように扱うこいつはあまり好きではない。

だが、同時にシューレスは冷静沈着。

「…分かったよ。ケイトに本気を出させればいいんだな？」

「話が早くて助かる。頼むぞ」

「手段は問わないぞ？」

「構わん。だが、犯罪にならない程度でな」

「じゃ、ちよつと行つてくる」

シューレスがそこから消える。

瞬間移動ではない。

「さて…、どうなるか」

リヨウとケイトが戦っている。

ケイトは依然、派手な魔法を使っている。

リヨウは矛を投げたりヒュニスを使ったりとじわじわとケイトを追い詰めている。

「あれー、なんで効かないの？（棒読み）」

「そろそろ終わりだぜ、ケイトー！」

ケイトは派手な演出に疲れたらしく、さつきから棒読みのセリフばかりだ。

観客はそんなことには全然気づいていない。

リヨウとしてはせっかく戦えたから、本気を出してくれないのは不本意だがミイヤの
人形になるのと比べたらそんなことは言わない。

「オラァー！」

リヨウが矛を投げた。

ケイトは勿論よける気はない。

顔に当たると少し残酷なので心臓を狙った。

矛がケイトに向かって行く。

確実にとらえていた。

が

バキイイイイイイン!

という音と同時に矛がはじかれる。

「え?」

「なに?」

そこに1人、人が立っている。

「シユールレス?」

「おう、リヨウ久しぶりだな」

今回はケイト対リヨウの戦い。

なのにシユールレスが戦場に立っている。

「お前、何すんだよ? 審判に何か言われるぞ?」

「ふつ、俺を誰だと思ってるんだ? Dのネームを持つ男だぜ? そしてDは幻覚を使える

ことを意味する」

「幻覚?」

リヨウはこのことを知らない。

シユールレス自身、あまり口外しないのだ。

「今、観客や審判には普通に試合が見えてるはずだ。問題はない」

「…で、何の用だ?」

「俺が用があるのは、ケイト、お前だ」

「僕？」

何のために来たのか全く予想ができず困惑するケイト。

「本気を出せ、ケイト」

「…シユー、そんな用事ならさっさといなくなつてよ。僕は本気は出さない。我ながら本気は気持ち悪いし」

「そういうと思つていた。だが、俺にも事情がある。これで手を打たないか？」

シユールスが一冊の本を取り出す。

いや、手帳か、あれは？

ケイトが焦り始めた。

見られてはまずいものらしい。

「俺としては成長したなど、友達として親友として喜びたいところなんだが…。この喜びリヨウと共有してもいいか？」

「な、ア…、な、なんでそれが…!?!」

「盗る機会はいくらでもあつたさ。で、どうする？この喜びをいろんな人と共有したいんだが？」

口をパクパクとさせ震えている。

「とりあえず、リヨウに見せた後は当人かあるいは新聞部にでも」
ケイトが丸鋸を出現させる。

「…今度何か奢つてやるから、頑張れよ」

それを言うのとシューレスが消える。

どちらに言つたのは分らない。

ケイトが高速に回転する丸鋸を一つ構えている。

「ケ…、ケイト?」

「ごめんね、リヨウ。僕は本気を出さなくちゃいけないらしい」
「え?」

それを言うときイトは丸鋸を動かす。

しかし

それはリヨウの方には行かずケイトの左腕に跳んだ。

無防備だったイトの左腕が体から離れる。

「あああ…!」

「!?」

断面から鮮血があふれ出る。

見ていた観客の一部が黙る。

しかし、一部の人の、特にケイトの戦いを知っている人は歓声を上げる。

「ケイト?」

突如、ケイトの腕の断面が肥大化する。

リヨウは警戒してすぐに下がる。

距離は50 mほど。

肥大化したと思ったら、それが収束していく。

やがてケイトの腕に変わり、腕が元に戻る。

続いてケイトは黙ったまんま、切った腕を宙に投げた。

それが丸鋸で5等分に輪切りにさせる。

「リヨウ…」

離れているはずなのに鮮明に聞こえた。

「少し…痛いから」

リヨウの背筋にぞくつとした何か走る。

いつものケイトからは考えられないようなことだ。

ケイトは輪切りにした腕をリヨウに向かって投げつけた。
リヨウまでの距離は約50 m。

それをものともせず、リヨウに近づいてくる。

リヨウは逃げたかった。

だが、先ほどの恐怖がリヨウの判断能力を鈍らせていた。

「くそー！」

ヒュニスを当てる軌道をそらせることにする。

5等分になってるとはいえ、所詮は人の腕。

ヒュニス1つで防げる。

ヒュニスで受け止めた。

と、同時にヒュニスを1つ失った。

当たった瞬間、輪切りの腕がすべて爆発。

かなりの耐久度があるにも関わらず、ヒュニスは一瞬でゴミになる。

「…マジかよ」

この時ほどリヨウはシューレスを恨んだことはなかった。

明確なミス

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬううううううう！」

死ぬわけないのに本能的にそう叫んでしまう。

今リヨウの体は機械で作り出されたデータだ。

偽物の体になにがあつたつて死にはしない。

頭の中ではわかっている。

だが、体は嫌がっている。

今のリヨウはすでにヒュニスを3つ失い、残りは3つ。

逃げに徹している状態で、周りで爆発が起こっている。

もしこれが本当の爆発なら会場はすでに残っていない。

リヨウはその身をもって自爆魔法の強さを知った。

普通ならば無制限で使うことはできないこの魔法。

Nであるケイトだからできることなのだ。

「くそー！」

だが、リヨウもここで引くわけにはいかない。

ここで負ければ現実で恐ろしいことが起こるからだ。

死よりも酷いこととは言い難いが、十分恐ろしい。

数少ないヒュニスをケイトの元に向かわせる。

決して身体能力は高くないケイト。

懐に潜りこむのは難しくない。

しかし、ケイトもそれは十分承知している。

ケイトは迷わず自分の腕2つを犠牲にする。

切れた断面には3秒ほどで腕が再生する。

本来なら痛みには耐えかねて気絶したりしてもおかしくない。

さすがに自爆魔法を特訓しただけはある。

「無限核爆弾かよ……」

腕1つの爆発に巻き込まれればヒュニスは1つ消える。

リヨウがむやみに近づけない理由はこれだ。

「リヨウ…… さっさと終わらせてよ。これ結構疲れるし気持ち悪いんだから」

「だったら少しは隙見せろよ！ ガチで本気出しやがって！」

今もリヨウがこうしてケイトの攻撃をよけられるのはケイトが本当に自爆魔法と回復魔法に特化しているおかげだ（防御も並よりはいい）。

攻撃魔法が苦手なために風を使ってリヨウに自分の腕の軌道を合わせたりできない。ただ投げることが精一杯なのだ。

「フアイヤー！」

リヨウはヒュニスをこれ以上失いたくないので魔法を唱える。

しかし、リヨウは科学側の人間。

魔法側に致命傷を与えるほどの威力を持つ魔法など撃てない。

「…」

ケイトは黙ったまんま右腕で止める。

ケイトはもともと体が自動回復するのと変わらないのでバリア的なものは張っていない。腕に当たり、あたりが煙に包まれ、ケイトの腕が多少焼けてただれる。

しかし、すぐに回復する。

ちまちました攻撃は意味をなさない。

だが、リヨウの狙いはそれではない。

視界不良になったケイトの目の前に突然現れた。

「！」

リヨウの矛がケイトに突き刺さる。

しかし…

「甘い、よ…、リヨウ！」

口から血が流れるケイトが不敵に笑う。

ケイトは矛を掴んだ。

リヨウはすぐに引き抜こうとする。

が、一足遅かった。

爆発が起き、矛が碎ける。

「心臓を、狙ったはずなのに…！」

リヨウはケイトの心臓めがけて矛を当てようとした。

視界不良だったがこれが訓練の成果。

ギリギリでケイトを確認した後角度調整をしてケイトに突っ込んだ。

しかし、リヨウは思い違いをしていた。

今リヨウが戦っているのは普通の常識が効かない人だ。

普通の人なら攻撃を確認すればあたらないようにと避ける。だが、ケイトは違う。

ケイトは死なないように避けるのだ。

攻撃が当たったって、即死じゃなければ回復できる。

「…なんでシューレスに勝てないんだよ？」

絶体絶命だった。

「あれがケイトの本気ね。自分の腕の犠牲を何とも思わないとは…」

「ちよっと、感心してる場合じゃないでしょ！あのままじゃリヨウが一日ミイヤの人形よ？」

感心しながら写真を撮るリリアに対してマーシヤは焦っている。

無理もない。

好きな人が他の人に取られるなど絶対嫌なのだから。

「マーシヤ、それはあなたの問題よ？私から見ればいい記事が待っているも同然。卒業

前の集大成になるわ!」

「なに意味わかん「そうよマーシャ、いいことじゃない」

ミイヤがタイミングよくあらわれる。

今日は珍しくフィリアも一緒だ。

「あんた、こんなやり方でいいと思ってるの?」

「こういう形から入るのもアリよ!肉食系女子代表である私が言うのだから間違いないわ!」

エッヘンと言わんばかりに胸を張る。

「絶対おかしいわよ!もつと健全に…」

「…マーシャ、あなたはリヨウに自分の気持ち伝えたことある?」

「え?」

「あなたは卑怯よ。私は常にリヨウに想いを伝えているのにあなたは周りから見ているだけ。それにもかかわらず文句だけは言う」

マーシャに反論の余地はない。

「私がリヨウと一緒にいられるのはあと1年もないの。それくらい知ってるでしょ?」

「…」

「私はリヨウが好き。だからただ一緒にいたいだけ。そう望むのはおかしくないでしょ

「？」

間違ってない。

「だから私は頑張るの。リヨウに認めてもらうため」

「…でも、それじゃ無理に…、その、あれを要求するのは…」

「要求って泳ぎに行くこと？」

「そうよ。そんな無理にやったら認める…ん？」

マーシヤの頭に疑問符が浮かぶ。

リリアも全く同じ状況だ。

「ミイヤ、今なんて言った？」

「泳ぎに行くって言ったわよ？」

「…一夜を過ごさじゃなくて？」

「ええ」

平然とした顔でうなづく。

リリアがなぜか焦っている。

「な、なんで!？」

「だって、リヨウは私におしとやかになれって言ったんだもの。完璧になるつもりはな
いけどこれくらいは自制しようかなと」

「わ、私の6年の集大成が……」

集大成ではないだろうと皆が思うが誰もツツコまない。

しかし、予想外だ。

ミイヤが自制をするとは。

「……なんだ、私、心配して損したわ」

「でも今度リヨウと行くときはあなたたちはついて行かせないわよ?」

「あなたの許可なんて必要ないわよ。それにまだリヨウが負けと決まったわけじゃないわ」

「何言ってるんですか。ケイトさんが本気出してるんです。今回はケイトさんの勝利ですよ」

ケイトも無関係ではなくなりフィリアが話に加わる。

「フィリア、あなたの気持ちも分からなくないけど今回はリヨウの勝ちよ」

「マーシャさん、言っちゃ悪いですがケイトさんは身を粉にして頑張っているのにリヨウさんはただ逃げ回ってるだけです。ケイトさんが圧倒的に優勢なんですよ」

「……あなたリヨウが逸材だったことと、2年前の侵攻を止めた張本人だったこと忘れてない?」

「それをふまえてもです!」

フィリアはケイトが本気で戦っている姿を見るのはこれが初めてなのだ。ぜひとも勝ってほしいと思うのは当然だ。

かつこよく見えているのか、又は健気に？、かわいく見えているのかは彼女のみにかわからない。

「なら、賭けをする？」

「内容は？」

「ケイトが勝ったら私は……リヨウにキスするわ」

「キ！」

フィリアよりもミイヤが大きく反応する。

「もしリヨウが勝ったら……分かってるわよね？」

「そ、そこまで自信があるんですか……？」

「これでもリヨウとは長い付き合ひよ。私はあいつを信じるわ」

「ちよ、ちよつと！それ、負けても勝つても言いことづくめじゃない！」

「何言ってるのよ、私とフィリアからしたら文字通り顔から火が出るほど恥ずかしいわ
よ」

マーシャは未だに周りにはリヨウのことは何とも思っていないと言いつ張っている。

もちろんバレバレなんだが。

「で、どうフィリア。乗る？乗らない？」

「…分かりました。その勝負乗りましょう！」

「後で泣いて土下座しないでよ？」

「こつちのセリフです！ケイトさー！頑張つてー！」

フィリアが恥ずかしさを紛らわせるかのようにケイトの応援に没頭した。

ミイヤがマーシヤを眼を細くして見ている。

「…なによ？」

「あんた、さつき私が卑怯つて言ったからもしかしてこんな方法思いついたんじゃないでしょうね？」

「な、何言つてるのよ。別にそんなこと…」

「凶星か…。あんたもなかなかセコイわね」

「だ、だからそんなじゃないって！」

「はいはい。私は巫女だから心は広いのよ。黙つて応援しなさい」

「ちよ、だから違うのよ！聞きなさいよ！」

「(やばい…、そろそろ限界だ)」

リヨウが逃げに徹している。

矛を奪われ、ヒュニスも残り2個。

残っている武器はほとんどない。

「(ああ…、遺書を書いておくべきだったな)」

リヨウはミイヤに過激なことを要求されると思っている。

さつきりリアたちが来たからすっかり書くのを忘れた。

後悔してももう遅い。

周りでは爆発が起き、リヨウはそれをうまく避け続けている。

現状を見た観客はリヨウがどのくらい長い間逃げ続けるのかと、逸材がどのくらいの底力を見せ派手に展開するのかと思っていた。

しかし、決着はあつけなくついた。

考え事をしているリヨウの近くで爆発が起き、リヨウが吹き飛ばされる。

「が……」

Sバリアの残量はすでになく、リヨウに激痛が襲う。

もう帰りたい。

寝たい。

だが、それでも起き上がるのはミイヤの人形にはなりたくないから。

ただそれだけである。

「……リヨウ、もういいでしょ。一日ぐらいミイヤの言うこと聞いてあげたって」

「そんなこと言うならお前も、もういいだろ？手帳1つぐらい……」

「あれは……、あれだけはだめなんだ！」

ケイトが再び腕を切り落とす。

両腕とも丸鋸で。

「くそつたれ！」

リヨウもあきらめず逃げようとする。

と、ここでリヨウの視界に変な光景が広がった。

丸鋸が消え、さつきまで切り落とすはずの腕は宙に浮かせておいたはずなのに腕が落ちていく。

ケイトの体もだらんとして、落ち始める。

「チャンス!？」

リヨウはここを逃すわけにはいかないと一気に接近する。

しかし、リヨウが近づいた瞬間ケイトが目覚めたかのように体を起こす。

「やば!？」

おびき寄せる作戦だったと理解したリヨウは回避行動に移る…が間に合わない。はずだった。

リヨウが残りのヒュニスを使い防衛行動に移ろうとしたとき、ブザーが鳴る。

『試合終了。ただ今の勝負、リヨウ・アマミヤの勝利です』

「ハア~~~~~」

「リヨウ、お疲れ様。はい、水」

「ああ。悪いな、クロ」

ベンチに座っているリヨウとクロ。

あたりにはミュレスを楽しんでいる、一般人がたくさんいる。

周りからは屋台のが並んでいて、いいにおいもする。

お祭り騒ぎと何ら変わらない。

「でも残念だったね、結局2位だなんて」

「いや、ケイトに勝てたからそれでよしだ。シューレスに勝てるわけねえよ、あんな戦い方されたら」

ケイトに勝利後、リヨウは10分ほどの休憩をはさんでシューレスと勝負した。

しかし、結果は散々だった。

ケイトが勝てないと言っていた理由が分かった。

試合開始早々、シューレスは自分のネームの力を最大限に発揮。

幻覚を見せられて攻撃はあたらないし、相手の攻撃がどこから来るかわからない。音で判別はできるらしいが、そんな訓練は受けていない。

完璧に遊ばれた。

「リョウ、あれはケイトに勝ったって言うの?」

「勝ちも勝ちだ。運も実力の内って言うしな」

ケイトは結局あの後本当に負け判定を食らった。

理由は簡単、心臓が止まったから。

原因は何度も再生するうちに少しずつ減っていった血と腕に対する激痛らしい。

最初は耐えられたが、血がなくなるにつれただえさえ少し気分が悪くなる。

そこに激痛を入れたとたん、心臓が一瞬とはいえ止まったそうだ。

それが機械に引っかけたり死んだ判定を食らった。

「ああ…、本当に勝ってよかった」

「…リョウって好きな人いるの?」

「はあ!?!」

いきなりの質問に声が裏返る。

「いや、だってミィヤの誘い何度も断ってるじゃん。それってほかに好きな人がいるからじゃないの?」

「いや、好きな人とかじゃなくて…。あいつは、こう、襲ってくるんだよ」

「言いたいことは分かるけど、リヨウはもう結婚してもいい年齢なんだよ？子供ができたって全然おかしくはないのに」

そう。

リヨウはすでに18歳どころか20歳すら過ぎている。

結婚したって問題ない。

この学校にそれを規制する校則はないからだ。

「いや、できるから構わないとかそういうわけじゃなくてだな…」

「女子の方から誘ってきてるのに断るなんて…。リヨウって思ったより酷い男？」

「そんなんじゃないよ。たださあ…」

地球ならばわかってくれる人の方が多いだろうが、ここにとは違う感性を持っているらしい。

この純粋なクロからこんなことを言われるとは夢にも思わなかった。

「まあ、僕が口だすのも少しおかしい話だしいいんだけど。それより僕たちも屋台見て回ろうよ」

答えに詰まったリヨウのことを考えてか、話をそらす。

クロがベンチから降り、リヨウの前に立つ。

身長は相変わらず小さい。

同い年にはとても思えない。

そして同性にもたまに見えなかったりする。

「ああ。じゃ、少し見て回るか」

リヨウも立ち上がりそこを後にする。

数十秒後、違う2人組がそこを通った。

「血が…足りない」

「吸血鬼みたいなこと言うな。血ぐらい作れるだろ、お前なら。それに結局負けやがって」

ケイトが「これ以上魔力を無駄にしたくない」としゃべる。

シューレスとケイトだ。

ケイトは少し疲れ気味で、飲み物で鉄分補給中だ。

「もともと僕は本気出すつもりじゃなかったんだからいいの！まったく…持っていたあれが偽物だったなんて」

ケイトは敗北後、血が足りないながらも全速力でシューレスのところへ向かった。

次の対戦に参加するので場所は分かっていた。

すぐにそこに着き、「返して」と言ったところ偽物と説明される。

メリーが空気で作ったただの本で中身はないらしい。

「俺としては公開したかったんだけどな」

「本気は出したよ。っていうかよく考えれば一瞬でも本気出せばそれでよかったんだよ。結局最初から最後まで全力だったから疲れちゃったよ」

「…本気は出してないだろ」

その言葉にケイトが反応する。

「あそこまで頑張ったのに本気じゃないって…」

『檻』を使つてなかったろ」

ケイトは、いたいところを突かれたのか黙ってしまった。

「長い付き合いだ。お前の本気の戦い方ぐらいわかってるつもりだ」

「…ずいぶん優秀な親友だね」

「まあ、今回は別にいいけどよ。使つてれば勝てたぜ、リヨウに」

「俺は戦いが好きじゃないの知ってるでしょ。それにその後はシューじゃないか。無理無理」

どんなに攻撃力が高い魔法が使ってもあたらなければ意味がない。

ケイトは永遠に回復するが、シューレスにはまず攻撃が当たらないのだ。

これなら一回殺せば勝利のシユールスの方が圧倒的に有利。

「お前だつて鍛えれば俺に勝てると思うんだがな」

「僕は争いが嫌い。知ってるでしょ。だから衛生班に入ったんだよ。5年たてばすぐに抜けるけどね」

「すぐに諦める癖も何とかしないとな」

「…シユールは僕の親かい？」

ミユレスは盛り上がりを見せたまま、終わりをむかえていった。最後のミユレスはリヨウにとって忘れられない思い出となった。

桜無き終わり

2月に入っていた。

気温の変化は相変わらず感じられるほどではない。

つまり雪もなければ枯れている草もない。

「はいはい、皆さん！もうちよつと寄つて寄つて！入らないですよ？」

例年ほどとまではいわないが、にぎやかな状態でBクラスの人が写真に納まろうとする。

後ろには日本とは違い桜なんて無い。

「よし、そんな感じかな。じゃ、皆さん笑ってください」

枠に納まったのかカメラマンがボタンに指を置く。

「じゃ、一気に3枚いきますよ……はいチーズ！」

34人と前と比べて少し減ってしまったクラスだが、みんなが笑顔を見せる。リヨウたちの卒業式だった。

この世界の卒業式では親が来るといふ風習はまずない。

理由は彼らはすでに20を超えた大人だからだ。

もちろん来てはいけないということはないが、ミューズデル外に実家を構えている家庭も決して少なくないのです。まずいなのだ。

「うう…、リヨウ、離れ離れでも愛してるわよお…」

「だからまた会えるって言ったのに…。泣くことないだろ」

「遠距離恋愛は辛いのお…。グス…」

ミイヤが泣いているのをなだめるリヨウ。

周りでは確かに泣いている人は他にいるがミイヤはもうすすり泣きとかではなく、泣いている。

マーシヤも近くにいるが今日ばかりは少し容認しているようだ。

「今日ほど巫女として生まれたことが恨めしいことはないわ…」

「何言ってるんだ。誇らしい職業だろ。胸張って頑張れよ」

「誇らしい職業なら結婚してよ」

「それとこれは違う」

泣いているミイヤを見ると、はた目からは「美人が泣いている」になるのどどうしてもなだめたくなるのが男。

リヨウもそれでなだめているが結局はミイヤ。

押しが強い肉食系女子？代表のミイヤなのだ。

「ならせめて一夜だけでも寝てくれない？」

「…お前も懲りないな？」

「だって…こんなにも想っているのに…」

なんかここまで想われたことがないので嬉しいのと自制心が入り混じってリヨウも少しおかしくなる。

最近「別に一回くらいいかな…？」と思ったりする自分もいてそのたんびに頭を振る。

「それは嬉しいけど…、その…」

「分かっているわよ。あれから2年、落とせると思っていたけど…これからは難しくなるわね」

「まだ諦めないのか？」

「寺で改めて女を磨いてくるから待つてなさい。意地でも落としてみせるわ！」
まだ顔は赤いが泣き止む。

「じゃ、卒業記念に1つお願いがあるんだけど」

「俺のできる範囲なら」

「お姫様抱っこしてくれない？」

普通なら「恥ずかしいだろ」とツツコミを入れたいところだが、いつものと比べると全然楽。

何よりしばらく会えなくなるのだ。

これくらい聞いてもいいだろうとひよいと持ち上げる。

「ありがとー！」

満面の笑みを浮かべるミイヤ。

そんな状況を逃さず激写するリリア。

「2人とも、こつち向いて！」

「イエーイ！」

「…(妬)」

マーシヤの目が突然きつくなるのに気づくりョウだがなんとかする手立てはない。

「ミイヤ、もつとなんか大胆なことやって！」

「リョーカイ♪」

するとミイヤはリョウの頬にキス。

リョウもこれには顔を赤くする。

「いいわよ！いい感じよ！」

リリアのテンションが上がる。

すでに卒業して新聞部の部員ではないはずなのだが、写真を撮ることが今では趣味になつたようだ。

「後で私に写真頂戴よ？」

「いいわよ。じゃ、もうちよつと大胆なことやろうか？」

「リョー「よくないでしょ！」ゲフツ!？」

口に直でいこうとしたミイヤをマーシャが蹴り飛ばす。

ずいぶんご立腹のようだ。

「イタタ…。ちよつと、何すんのよ？」

「あんた今口にキスしようとしたでしょ!?!そんな横暴許されると思うの？」

「別に横暴じゃないでしょ!みなさい、リョウの無抵抗な感じを!!」

マーシャがリョウの方を見るとぼかんと立っていた。

頬にキスされたので十分きてるようだ。

今まで付き合うほど好きじゃないと断ってきたがいざキスをされると嬉しい。
リヨウも男なのだ。

「…リヨウ？」

「はっ!? な、なんだマーシヤ？」

放心状態だったリヨウが我に返る。

「…」

「そ、そんな目するなよ…」

「あなた、付き合うのを断ってる割にはずいぶん嬉しそうだったわね」

「し、仕方ないだろ！俺だって男だ！」

しばらくギヤーギヤー言いあう。

「なんで私にもして、って言えないのかしら？」

「あの子はああ見えて奥手なのよ。リヨウからやってくれればいいんだけどあいつも鈍感だしね」

「奥手ね…。でも、羨ましいわ」

言いあっているリヨウとマーシヤを見てミイヤは言う。

「羨ましい？」

「楽しそうなもの。私はどんなに頑張ってもあそこまではいけないわ」

少し悲しそうな顔をするミイヤ。

彼女は分かっている。

今の状態ならリヨウはマーシヤを選ぶらだろうということ。

リヨウ自身がマーシヤを好きなのは分からないが、秤にミイヤとマーシヤをかけたらどうなるのかは分かっている。

「あれは恋人とかそういうのじゃないと思うけど…」

「でも、限りなく近いわ。おそらく私は何をやってもいけない場所ね」

「でも諦めないんですよ？」

「当たり前じゃない。確かにあそこにはいけないけど恋人にはなれるもの」

ネックレスを掴む。

リヨウからもらったものだ。

もらった次の日から基本は身に着けている。

「マーシヤのこともあるから応援はできないけど頑張つてね」

「それって応援って言うんじゃないの？っていうかあんたたち、いつまでいちやついでるの？」

「いちやついでない！」

「おお、そろった」

「まずリヨウ君、卒業おめでとう」

「おめでとーなの」

「ありがとうございます」

会場内の違う場所で、リヨウはマクアドルに会った。

「桜が欲しい」とぼやいていたがない物はない。

久しぶりにミリーナもいた。

他の人はミリーナを特に気にしていない。

「いやあ、やっぱり教え子が卒業していくこの感じは何度味わってもうまく言い表すことはできないね」

「今日はお祝いしてくれるんですか？」

「当然だよ。少なくとも私は戦争について話すつもりはない」

ビールを差し出すマクアドル。

20超えているので普通に受け取る。

「え、そうなの？」

「ミリーナ：久しぶりに会ったらまたそれなのかい？しかもここで」

「そんな深く話すつもりはないけど…、どうしても確認しておきたいことがあるの」

「なんだ？」

「戦争が終わった後のことなの」

「終わった後？」

「あなたが地球に帰るかどうかということなの」

それを聞いて地球のことを思い出す。

自分自身が地球人だということを忘れたことはない。

だが、帰るということについては忘れていた。

初めの目的はそれだったのに今ではここが普通になってしまっていたからだ。

「私の目的は私の世界を守ること。戦争が終わった後、言つては悪いけどあなたは用済みなの」

「…俺の選択肢は？」

「ここに残るか、地球に帰るかなの」

「帰れるのか？」

「うん。それもあなたが地球を離れてしまったあの時間に」

リヨウはここで6年ほど過ごしてきた。

今帰れば騒ぎになるのは間違いない。

だが、ミリーナはあの時間に返してくれると言う。

「…」

「もちろん今すぐ決めてとは言わないの。あなたにとっては重要なことなの」

「考えておくよ。が、答えが出るかどうかは微妙なところだな。俺が帰った場合、ここに

戻ってくることはできないのか？」

「…今の技術ではどうしようもないの。リヨウやマクアドルを連れてきた時は、ある条

件がそろってからできたの」

「条件？」

「悪いけど秘密なの」

「この世界にもおそらく宇宙はある。」

地球はこの世界にとって同じ宇宙にある存在なのか、パラレルワールド的存在なのか

はわからない。

だが、どちらにしてもすごいことに変わりはない。

何度もできるわけではないのだろう。

「嫌なら構わない。別に俺が理解できるわけないだろうし」

「話が早くて助かるの。私の話はここまで、後はお祝いをしたいんだけど…」

「なんだい？」

「マクアドル、この3人だけ集まって明るい会話ができると思うの？」

マクアドル、ミリーナ、リヨウの3人が集まってしてきた会話はいつも戦争について。

ミリーナの疑問はごもつともだ。

つていうか、なんでうまい具合にここに3人そろうんだ？

「…たぶん？」

「無理に決まってるの。リヨウ、後でみんな集まって飲み会とかはしないの？」

「4時から予定はあるぞ」

「ならそれにでればいいの。フィリアさんにも会いたいし」

「なるほど。私も参加してもいいかい？」

「先生なら大丈夫だと思いますよ。むしろ歓迎です（財布として）」

「…何か黒いものを感じるんだけど」

リヨウは生きる。

この6年たつても未だに分からない世界で。

科学と魔法が混在するこの世界で。

大切なものができたこの世界で。

命を懸けて、この世界を生き続ける。

大きな戦いが待っていると分かっているこの世界を、みんなと生き抜くため。

新しい戦場

短い休養

朝7時過ぎ。

リヨウは起床する。

だが、今寝ていたところは学校の寮ではない。

マーシャの叔父にあたるジュゼルの家だ。

学校が終わり、今は軍に入るまでの少しの休養だ。

この家、学校と違って木でできているところも有り結構落ち着く。

いつもはもうちよつと遅く起きるのだが居候ということもあつて早めに起きる。

この家の主はもつと早く起きるので迷惑はできる限りかけたくない。

「おはようございます」

「おはよう、リヨウ君」

すでに料理が出来上がつてテーブルに並んでいる。

そしてこの日課でリヨウがマーシャを起こしに行くことになっている。

すでに20過ぎなのに違和感がないことにリヨウ自身疑問を覚えていた。

「じゃ、マーシヤを起こしに…」

「ああ。今日は必要ないよ。もう家にいないしね」
「？」

確かに食卓を見るとマーシヤの席に皿はない。

いつも一番最後に起きるマーシヤがあり得ないとリヨウは驚く。

「何かあったんですか？」

「たぶん…、報告に行っただと思う」

「…報告？」

「命日ってわけじゃないが…、卒業したからね」

命日、となると誰かの墓参りだろう。

「差支えなければ、だれの命日でしょうか？」

「母親だよ、あの子のね」

マーシヤは墓地にいる。

そんな暗くてジメジメしたようなところではなく、むしろ今は暑い。

墓石だってほとんど同じ形をしているが白くてきれいなものを使っている。

「何で今日に限って暑いのかしら」

こんなことなら帽子でもかぶってくるべきだったなと思う。

手には桶を持っており、水が入っている。

目的地が分かっているのか足取りはしっかりしている。

1つの墓の前についた。

「…久しぶりね。ママ」

墓前の前に花を供えたり掃除をしたりしながら話を進める。

学校での出来事はとても濃い。

「それでね、リヨウつたらまた無茶をしてね、危うく死ぬところだったの」

積もる話が山ほどあり、いくらあっても話が尽きなかった。

墓参りにきてもここまで長い間話す人は居ないだろう。

ある程度話すとマーシヤは少しためらいながら言った。

「…ねえママ。私、軍に志願したの。ママはやめてって言うかもしれないけどやっぱり、

あいつを…、殺すまでは…、絶対無理だから」

明るく話していたのが暗くなるのが分かる。

だれか居れば声をかけるかもしれない。

「で、でも大丈夫よ。ちゃんとケジメつけたら違う職に変える用意もできてるから」

はつとして表情を戻す。

「ご、ごめんね。こんな暗い話するつもりじゃなかったのに」

依然として太陽はカンカン照りで人影はマーシヤ以外見当たらない…わけではなかった。

謝った直後マーシヤの頭がちよつとした力で押される。

「きゃ!?!」

慌てて振り向くとリヨウが居た。

「リヨウ…叔父さんに聞いたのね」

「帽子を持つてつてやれつて言われたからな」

頭に麦わら帽子がのっかっている。

この時期なら普通この帽子は時季外れもいいところだが、今日はちょうどいいだろう。

「…母さんの墓前か？」

「それ以外ないわよ。ところで今何時かしら？」

「10時過ぎるぞ」

「そんなに…、話し込み過ぎちやったわね」

マーシヤが立ち上がる。

「少し、俺もいいか？」

「ええ。ママもあなたの顔は見ておきたいだろうしね」

~~~~~

「ママが死んだのは私が6歳の頃なの」

帰り道、マーシヤはリヨウに話す。

「優しかった。パパともうまくやってた。けど…」

そこで少し黙る。

言いくいのは目に見えて分かる。

「嫌なら別に…」

「いえ、私が軍に入る理由の一つだし、決意表明とでも取っておいてほしいの。…私の実家、ここからは離れたところにあるんだけどね、どちらかという田舎な感じだったの。」

だからかしら。知らない人たちが押しかけてきたの、その村に」

言いにくそうではあるが決して震えたりはしていなかった。

「何か要求したのか、或いは人を探していたのか、物を探していたのかそのころの私は小さかったから何も知らない。そいつらは家に入ってきたと思つたら迷わずママを殺した。パパは首を絞められ、私も刀で一突きされて危なくなつた…、けど何かあつたのか突然動くのをやめたかと思うと引き返していったの。不思議なことにきれいな死体は持つて帰つてたわ」

「なんでかしらね？」と付け加えて作り笑顔をする。

誰にでもわかる作り笑顔だ。

「後は違う人たちが来て助けてくれたの。状況は小さいころだったからそれくらい大雑把なことしか覚えてない。…けど今でも鮮明に覚えていることが2つ。1つは敵の中にいたやつの中の1人が右腕と右目が機械のごとく鉄のような色をしていたこと。もう1つはそいつ以外の敵からは拭いしれない恐怖を感じたこと」

「そいつ…以外？」

「機械のような奴からも恐怖を感じた、けど他の奴からはまた違う恐怖を感じたの。なんでかは覚えてないけど…、似たような恐怖を依然、ミューズデルが侵攻された時も感じました」

「そいつらが、居たのか？」

「あくまで似たような恐怖よ。何かが違うの。ただ、途中で消えちゃったけど」  
転移装置の前までたどり着く。

ここは墓場。

そんな場所が、ミューズデル内に設置されているはずはない。

転移装置で移動して初めてすぐにたどり着く。

それでも2時間近くかかるのだが。

「私は決めた。そいつを見つけ出し、殺すと。物騒な話だけど私は今でもそいつが憎くて仕方ないの。正体不明の敵を憎むってまた変な話だけどね。私が多少体術を使えるのも、軍に志願するのもそれが理由なの」

転移装置の前で立ち止まり話を続ける。

「リヨウは…こんな私をどう思う？」

「…決意表明を聞いているんじゃないやなかったのか？」

「そうね。でも聞いておきたい。大切な相手として…」

「感想は…強いな、だ」

「それだけ？」

「ああ。変な奴とも思わないし、見下したりもしねえよ。俺がそんな感想持つと思うか

？思ったのは純粋に強くなっていくことくらいだ」

驚いた顔をした。

それを聞いてマーシャがふく。

「おかしなこと言ったか？」

「そこは気遣って何かいいこと言うところじゃない？」

「よく言うぜ。俺が変なこと言ってもお前なら分かるだろ。むしろ俺は本音をぶつけたほうがお前は喜ぶと思ったんだが」

「…否定はしないわ。本音といってもけなすのような本音だったら蹴りを入れるけどね」

マーシャが足を振って見せる。

リヨウはこれを見るだけで少し、ぞわつとする。

あれは本当に痛い。

「お前、それだけはマジでやめてくれ。男子の大事なところは本当に痛いんだから…」

「考えておくわ。今はケイトもないしやるなら加減はするわよ」

「頼むぜ…。じゃ、帰るか、ジユゼルさんも待つてる」

「そうね」

先にリヨウが転移装置に乗る。



「ママ…、またね」

マーシヤもその場を後にした。

「ハックシヨン！」

「なんだ、風邪か？」

「いや、噂されてるんだろ」

「噂されるってこたア、お前のことを知っている奴が生きてるってことだなア？それとも死後の世界からかア？」

マーシヤたちがちようど墓地の中を話しながら帰っていた頃、違う場所で円卓会議が行われていた。

その部屋に窓はなく、基本的には閉鎖的な部屋だった。響くつくりなのか、くしやみがよく響いた。

「まあ、俺が逃したやつも覚えてるだけで5人は居るからな。それより兄貴、まだ始めねえのか？」

「主君がくるまで待つてろ。そんなにかからないはず——」

転移装置のところに人影が現れた。

それを見て全員が立ち上がり頭を下げる。

「みんな楽にしてくれ」

カザキだ。

そう言われ全員が頭を上げる。

カザキが席に着くと他の人も全員座る。

「さて、今日集まってもらったのは…次に挨拶する日が決まったからだ。ジーク」

「はい」

円卓の中央に大きな画面とそれぞれの前に中央と同じ画像が映し出される。

「みなさんにはだれか1人、この中から選んでいただきます」

「選んだ相手とはどうするのかしら？」

「殺し合いに決まっています」

「こつちが選んでいいのね。太っ腹♪」

「この顔はいつたいどういつながりがあるのですか？」

「今年軍に入る奴らだ。もちろんミューズデルのな」

カザキが答えるが皆が納得していない。

なぜなら映ってる顔が少ないからだ。

9人しかない。

確かに強いであろう顔もあるが知らない顔もある。

「先に言っておくがこれはただの挨拶だ。殺しても構わんが最低5分は死なずに押さえろよ」

「しかし…なぜ顔を出しに行く必要が？」

「こいつだ」

リヨウの顔を大きく映し出す。

もちろんこの場にリヨウを知らないやつは居ない。

「エジリスを殺った奴…ですネ？」

「こいつは俺を倒す最終兵器だそうだ。簡単に言えばな。そんな奴が軍に入る。その入隊式に俺が出ないわけにはいかないだろう」

「主君、私はこの可愛い子を所望しまーす」

1人の女が1人画面から選んだ。

「裏切者を選んだか…。いいだろう、クロはお前に任せよう」

「ありがとうございませーす！」

それを機に他のメンバーも画面から相手を選び始める。

といつても、情報はネーム持ちか否かぐらいいしかなく、結局は顔で選ぶことになる。先ほどこくしやみをした男も画面を眺める。

しかし、興味はないらしく画像を大きくしては戻すを繰り返す。

「リプト、もつと真剣に選べ」

「でも兄貴、こいつらの中に俺の興味を引きそうな奴なんか…」

画面を流していて一人の顔が目にとまった。

どこかで見覚えがある顔らしい。

「…そんな奴、選んでどうする?」

「なんか目がうずくんだよ。ちよつと待っててくれ」

そういうとリプトは目をつぶる。

5秒ほど目をつぶり続ける。

そして目を開けるとまたその画像を見る。

「…適合率72%か。兄貴、こいつ、他に外見について情報ないか?」

「そいつなら確か…、髪を染めているな。以前は金髪だ」

「…」

リプトの口がニヤツと吊り上がる。

「主君、私はこいつにします」

「分かった。他の者も早く決めてくれ。もつとも、どれでもいいというやつは私が後で適当に振り当てるが」

カザキがまだ決めていないやつらとやり取りを始める。

「リプト、そいつは？」

「俺の目の記憶が正しければ、殺し損ねている人間の1人だ。かなり前だけどな」

「そうか。あつちは覚えてると思うか？」

「いや、かれこれ16年前の話だ。こいつは小さかったから覚えてないだろうな」

「それでは少し楽しみが減るな……」

ククク、と笑う。

「兄貴、趣味が悪いぜ？」

「Tのつく家系は決まって趣味が悪いのだ。お前も少しは残念に思うのではないか？ 覚えてなかったら」

「…確かに、せつかく目の前で母親を殺してやったのに覚えてないんじゃ面白くないな」

「皆、決定したな」

ちようどカザキが全員の要望を聞き終えた。

「では、これにてこの会議は終了する。作戦日時は後で知らせるからそれまでは業務に戻っていてくれ」

『了解しました』

全員が立ち上がり答える。

その後、立ったままカザキがこの部屋を出ていくのを待った。

出ていくと全員が緊張を解き、それぞれの行動に移る。

「ではリプト、俺は業務があるから戻るぞ」

「その前にーっ」

「なんだ？」

リプトが画面を指さしながら質問する。

「こいつの名前は？」

「マーシャ・クリーシャだ」

## 災難な入隊式

「久しぶりマーシヤ、似合ってるじゃない」

「あなたも人のこと言えないわよリリア」

リリアとマーシヤが久しぶりの再会をする。

リヨウはそれを傍らで見ている（隣にサクもいる）。

短かった休みが終わりリヨウたちは軍の入隊式に出席する日になっている。

学校は2月中旬に終わり今は3月の初めだ。

本来大抵の職は4月に始まるのだが、今軍は人手がほしいため始まる時期が早くなっている。

「みなさーん！」

呼ぶ声があったので見てみるとフィリアがいた。

見た感じは相変わらずだ。

まあ、リリアも変わってなかったしそもそも1ヶ月も経たないうちに人はそこまで変わらないうちだろう。

「フィリア、久しぶり」

「変わってないわね」

「それは褒めてるんですか？」

ちなみにみんな学校の制服ではなく、軍隊の制服を着ている。

実はこの軍隊、そこに関しては対して強くは規制してなく私服の人も少なくない。だが、何かしら式があるときぐらいは着るべきだということでは今も着ている。

「リヨウさん、お久しぶりです」

「久しぶり、ファイリア。元気そうだな」

「ええ。しかし…」

ファイリアがじつとリヨウを見る。

「なんだ？」

「…なんか合ってますね。リヨウさんとその軍服」

「ファイリアもそう思う？」

「やっぱりだれが見てもそうなのかしら」

「…これは喜んでいいところなのか？」

リヨウの前で3人が盛り上がる。

客観的視線をリヨウは味わうことはできないので似合っているのかは分からない。

後でちゃんと鏡で見てくださいと思う。



「ねえリヨウ、一枚写真撮らせてよ」

リリアがカメラを持ち出す。

この世界では滅多にお目にかかれないインスタントカメラだ。もつとも、古いものではなく色も画もきれいに撮れるのだが。

「なんで俺が記念に撮られるんだよ。本物撮ればいいだろ」

「違うわよ、フィリアちよつと持つてて」

フィリアにカメラを預けリヨウの隣に移動した。

そしてピースをする。

「ほらリヨウ笑って」

「マジか…」

「…確かに軍人と並んでるように見えますよ！」

「マジか!？」

「はいチーズ！」

撮るとすぐに写真が出てきた。

「…いいじゃない！」

「どこがだ？」

「この私が笑ってくる感じとリヨウが無表情な感じ！まさに軍人と観光客よ！」

きやつきや盛り上がる女子をよそにリヨウは背筋に視線を感じた。

「…この感じ」

前にも味わったことがあるこの視線。

ミイヤにミートボールをあぐん、で食べさせられた時だ。

軍人はこちらの世界でも比率で言えば男性のほうが多い。

そんな男子たちがじろつと見てくるのだ。

リリアたちはそんなことには気づかない。

「私も一枚くださーい！」

「いいわよ、並んで並んで」

フィリアがリヨウの隣に来た。

再び視線が強くなる。

「俺は悪くないのに…！」

「ほらリヨウさん、無表情で！」

「写真撮るときは無表情を要求されたのは初めてだよ」

「いくわよ…、はいチーズ！」

写真がカメラから出てきた。

必死で顔にはその恐怖を顔に出さないようにする。

「…すいこ」

「お前らは何がしたいんだ？」

「いや、ここまで軍服に会う人そうそういないし。大佐より似合うわよ、たぶん」

「今日は入隊式だつていうのに、なあマーシヤ？」

唯一おとなしいマーシヤに同意を求めろ。

先ほどまで写真を撮る人の隣にいたからそつちを見たのだが、いない。

「…」

隣を見ると少し恥ずかしそうにマーシヤがいる。

「…お前もか」

「べ、別にいいじゃない！入隊式の記念よ」

「お前は俺の親か!？」

「はいはいお二人さん、笑つて？」

もうやめてくれリリア。

周りの目線が痛いんだ！

お前らは楽しんでるだけかもしれないが俺は後の生活に支障が出かねないんだぞ!？」

「はいチーズ！」

カメラから写真が出てくる。

「マーシャ、もつと笑わないと」

「そうですよ、これじゃ好きな人前に恥ずかごふっ!?」

フィリアの腹に容赦ないこぶしが入る。

「フィリアアアア!」

「いいのよこれで。あくまで記念写真が撮ればいいんだから」

…とりあえず一難去ったか?

ようやく胸をなでおろすリヨウ。

するとサクが服の袖を引っ張ってきた。

「リヨウ殿、私も一枚」

「…頼むから勘弁してくれ。これ以上は…」

「だめ…でしようか?」

サクが残念そうに肩をおとす。

…。

「リリア。サクと俺で撮ってくれ」

「リヨウ殿!」

「いいわよ、今日のリヨウは女運がついてるわね」

笑ってー、といいながらリリアはカメラを構える。

リヨウは心の中で「ついでねーんだよ！」と叫びながら笑顔を作る。今日は災難だ。

いくらサクが使い魔で、もともとは竜だといえども人の姿では女子。

これもまた視線にさらされた。

シャッター音がなり写真が出てきた。

サクがそれを見て喜ぶ。

「ありがとうございます、リヨウ殿！」

リヨウに腕を絡ませて喜ぶ。

「…」

ここでリヨウの思考が一時停止する。

恥ずかしいからではない。

周りの視線が怖いからだ。

「（…俺の軍隊生活おわたな）」

「リヨウー！」

意識が落ちかけた時、リヨウに呼びかける声があった。

クロがいた。

相変わらず低身長でよく軍服が見つかったな？と思う。

「クロー！」

まさに救いの手だ。

男子がやってきた！

これで少しは視線もよくなるはず…、あれ？

「みんな、何盛り上がってるの？」

「クロ、リヨウを見て何か思わない？」

「…軍服が似合ってる！」

おい、お前ら。

こればかりは反論するぞ。

クロは男だ。

「でしょ!?!で、みんな写真を記念に撮ってたの！」

「見せて」

俺にはそんな変な想いはないぞ。

この変態共。

「すごい、本物みたい！」

「でしょ?クロも一枚どう?’

「いいの?リヨウ、じゃ僕も一枚！」

「いいぞ」

いいからお前ら。

クロは男だ。

確かにどこか女々しいところはあるが男だ。

全く…、お前らを気にして俺が馬鹿だったぜ。

「はい、じゃ笑ってー。リヨウは無表情で？」

「笑つてもいいよ、リヨウ？」

「…そうか？」

…かわい——。

…違う、俺は違う。

「いくわよー？」

「いいよー！」

ここでクロが体を密着させてきた。

…アカン、何かに目覚めそう。

「はい、チーズ！」

カメラから写真が出てきた。

「どっ？」





「救護班はこちらです。戦闘部隊はあちらになります。係員の指示に従い行動してください」

さつきまでワイワイガヤガヤと楽しそうな声が出していたが今は少し緊張の糸が張りつめている。

だがリヨウは…

「…おい、クロ。こいつはどうしたんだ？」

「いや、よくわかんないけど…写真を撮るのに疲れたんじゃない？」

列に並んでいるレックスが後ろのリヨウのことをクロに訊いている。

ぐったりしていてなんか可哀想だ。

「リヨウ、大丈夫か？」

「…母さん、蝶々が飛んでるよ」

「…重症だな」

文字通り真っ白になっている。

レックスがこの集合所に来た時にはすでにこうなっていた。

今は立っているが、さっきまでは立つことすらままならなかった。

ちなみに今サクは会場に先回りしてリヨウを待っている。

何があつたのか訊きたい気もするがそこはやめておく。

「それでは皆さん、ただいまより入隊式を始めたいと思います。それぞれ目の前にある転移装置が見えますね？」

レックスが並んでいる列にはリヨウ、クロ、マーシャ、フィリア、リリア、シユールス、クリティウス姉妹の9人。

全員（科学側のみ）在学中に訓練させてもらった人達だ。

ケイトとの賭けに勝ち、全員訓練することになった（軽くほったらかしてたが）。

もともと自分の部隊に入れるつもりはなかったが訓練してしまったという事実ができてしまった以上、面子のためにも外せないらしい。

フィリアは心底ケイトがいないことを残念に思っていたが自分に回復スキルは少しもないので衛生兵にはなれない。

「リヨウ、いい加減目を覚ませ」

「なんだ母さん、もうお「いい加減にしろ」ホブツ!?…レックス？」

「やつと目を覚ましたな…」

一発顔のこぶしを入れたらようやく目を覚ました。

「転移装置に乗ると会場にたどり着きます。そこからは依然お話しした通りです。その話はしなくてもいいですね？」

「何の話だ？」

「これから入隊式が始まるんだよ。行儀よくしろよ」

「そ、そうか…」

とどこどころ記憶が飛んでいるのはなんでだろうと思うが思い出せない。  
…。

「(ま、いいか)」

そこで考えるのをやめ前のことに集中することにした。

「それでは1番の転移装置の前の方々、順番に転移装置に乗ってください」

1番はリヨウたちの列だ。

一番前にいたシューレスが転移装置に乗る。

あとは順番にクリティウス姉妹、フィリア、マーシャ、リリア、クロ、レックスと乗っていく。

最後はリヨウだ。

「ふう…」

こういう式は何度味わっても緊張する。

だが、このままゆっくり深呼吸をしている暇などない。緊張しながら転移装置に乗った。

次の瞬間、目の前に広がった景色は…灰色。

「え？」

目の前の景色を前に困惑する。

目の前にあつたの遠くまで続く、ぼろぼろの…町？

周りには倒壊した建物が多くあり、緑は見当たらない。がれきの山だ。

こんなところが会場？

「…リヨウ？」

声をかけられ振り向く。

マーシヤだ。

「マーシヤ。これはいったい…？」

「分からないわ。会場…かしら？」

「無理があるだろ。だいたい人がいない」

「じゃ…、力試し、かしら？」

入隊早々力試し。

グネズトならやりかねないが…

「いや、そんな話は聞いたことない。それに入隊式を潰してまでする力試しなんてあるのか？」

「そうよね…」

しかし困った。

転移装置できたということ、ここにも転移装置はある。

だが、起動していない。

「手違い…か？」

「そう考えるのが自「いや、違うぜ」」

マーシャが話している間に知らない声が響く。

あたりを見渡すと1人、立っている。

「…お前は？」

「上官かもしれないのに敬語はなしか？」

「これでも場数はある程度踏んでいる。お前みたいに殺気を思いつきり放つてたら分かる」

「成程」

顔は普通に見えているのだが、体はコートのようなもので覆っている。

「だが…、なんでお前がいる？」

「なに？」

「俺はそこの女は指定したが、リヨウといつたか？お前は指定してない」

「私を指定？どういうこと？」

「これを見て…思い出せるか？」

相手がコートから右腕を出した。

ただの右腕だ。

「…それがどうしたのよ」

「今わかる」

相手は右腕の付け根を掴んだ。

すると突如、その腕を力いっぱい引いた。

「！」

引いた手には右腕の皮がある。

だが、血はついていない。

腕が引っこ抜かれることはなく、皮だけきれいにはぎとられていた。

痛がるそぶりも見せない。

そして、皮がはがれた腕には筋肉はなく、あつたのは鉄製の腕。

「あ、あなたまさか……！」

## 挨拶

「あ、あなたは……！」

鉄のような色と硬そうな腕。

今でも鮮明に覚えている。

別にあいつにやられたわけじゃない。

だが、敵の中であいつだけ異質だったから覚えている。

いや、あいつだけ違ったから覚えている。

「その顔と反応、まさか覚えているのか？」

相手の口がニヤツと吊り上がる。

「……右目は？」

「ばつちしだ。覚えてるのか」

男が手を右の眼球に当てる。

眼球を触り始めた。

次、手がどけられて目が見えた時には右目は鉄のような色に変っていた。

「……見つけた」



「マーシヤ？」

マーシヤの顔が怒りに満ちている。

今、マーシヤの中にあるのはあいつを殺すという目的のみ。

怒りに身を任せドールを展開し、接近する。

「マーシヤ！落ち着け！」

耳に入っていない。

男が両手を広げ、魔力の放出を始めた。

「…あなた何者よ？」

「…」

「答える気はないみたいですね」

「ここもリョウたちと似たような場所。

いるのはリリア、ファイリア、そして一人の女。

顔は仮面をかぶっていてわからないが髪の毛は金髪で長い髪が風によってたなびいている。

「(トト)は何よ。」

「…」

「ちよつと！答えなさいよ！」

女は仮面をかぶっているためどんな表情をしているのかわからない。

さつきから地面に立ったまましゃべらないどころかアクションすら起こさないからわからない。

本当にこいつはなにがしたいんだと思う。

「…銀髪」

すると女がしゃべった。

指でフィリアを指している。

「私？」

「私はあなたは選んでない。なんでいるのかしら？」

「いや…そう言われましても…」

明らかに声には、なんだよお前という負の感情が含まれている。

別にフィリアは来たくて来たわけじゃないのだから困る。

「あなたは小さい。それにおとなしいから興味ないの」

「は、はあ…？小さい、ですか」

「ズバツと言うならあなたは男か？」

「がはッ!？」

フィリアがそう言いながら崩れる。

小さいというのが胸のことだと気づいたのだ。

身長のことならまだしも胸はフィリアにとっては大きなコンプレックスだ。

「それにひきかえ…」

「ん？」

リリアの方を見る女。

この時リリアは、以前感じたことがある嫌な雰囲気を感じていた。

「胸は…CかD。すらつとした体つきは銀髪もだけど活発そうな雰囲気。そしていい感じの顔」

おい、まさかこいつ…とリリアが構える。

「…タイプだわ」

「また女なおおおおお!?」

一応危ない状況なのだがリリアは叫んでしまった。

クレアに引き続き2人目だ。

こんな人、そうそういないだろう。

「なんで男子からはそういう声が聞こえないのよおお…」

こんなことなら男子に生まれたかつたと思うリリア。

男子の立場としてならば嬉しいのだろう。

だがリリアは女。

相手も女。

リリアはそういうのは否定するつもりはないが、リリアにその気はない。

「今日はあなたをお持ち帰りするつもりなのだけど？」

「絶対嫌！私のはじめては好きな人にあげるの！」

「…クレアさんからはギリギリ守ってるんですか？」

「ギリギリね…」

女が構える。

「なら力づくで連れて帰るわ。ほしい物は意地でも手に入れる主義なのよ、リリア・アリ

アさん」

「既に調べてるのね…あなたの名前は？」

「私は、ナタリー・F・フラムよ」

「ネーム持ちね」

「仲良くやりましょう?」

「絶対嫌!」

「…」

「…」

「…なんでお前ら、何も言わねえんだア?」

場所は他と似たようなところ。

ただ、ここに入った2人はなんか…間違ってた。

「いや、だってよ…」

「オカシイじゃん、この組み合わせ」

今、跳ばされてきた2人はレックスとウリスだ。

なんでこのペアになったのかよくわからない。

「もう一人は増えるだろうとはア思ってたが、お前ら仲はよくねえのかア？」

「生憎、話したことすらほとんどないよ」

「アタシ、マートと一緒に戦いたいんだケド」

レックスがウリスと最後にまともに話したのは1年生の頃が最後のような気がする。

あとの思い出はほとんどない。

「…まあいい。共闘しようがしまいが俺は知らねえ。だが、レックス・ビルジエンタ。少なくともお前には戦ってもらうぜえ？」

「上等だ。ウリス、そこで見てる」

「はあ？何言ってるのヨ？私もヤルシ、暇だから」

ウリスが手に炎を作り出す。

「馬鹿野郎。お前が戦ったら俺の力が半減するだろ」

「知ったことじゃナイし。私もこいつはぶっ飛ばしたいノ！」

ウリスの手の上でゆらゆら揺れる炎を眺める男。

「…成程お。お前がUのネーム持ちかア」

「あんたは？」

「俺はニゲル・I・ロップルトだア…。本気で来いよお、でない」と――

突如、ニゲルのいた空間が歪む。

そしてすぐにレックスたちの視界からニゲルが消えた。

「——肉塊になっちまうぜえ？」

楽しそうなニゲルの声がレックスとウリスのすぐ後ろから聞こえた。

「キヤー、やっぱりカワイイー！」

女が手をたたいて喜んでる。

ピョンピョン跳ねているから大きな胸が揺れている。

「…ウリスさん？」

「残念ながら妹。マートだよ」

「マートさん、あいつは知り合い？」

「いや、アタシは知らないヨ」

クロとマート。

魔法という繋がりがあるとさえあればあるのだが話したことはほとんどない。

その2人の目の前にいるのは巨乳な女。

それを強調するためか胸元が開いた服を着ている。

「カワイくてもうどうにかなっちゃんいそう、と言いたいところなんだけど、だれよあんた？」

笑顔がしかめっ面に変わりマートを見る。

「あんたたちが連れてきたんでシヨ？何よその目」

「アタシはクロちゃんは呼んだけどあんたみたいな売女は呼んだ覚えはないの。さっさと帰れよ」

「ああ？乳だけデカいおばさんが何言ってるのよ？若い者に対する妬み？」

「おばさん？アタシまだ30過ぎなんだけど？」

「はっ、年齢じゃないわよ。派手な化粧してそれでシミ隠せたつもり？むしろキモくなってるのよ。化粧のやり方知らないノ？」

「青臭い餓鬼が。あんたみたいに美をどうでもいいと思ってる奴とは違うんだよ！」

「ああ!？」

「ああ!？」



クロをそっちのけで言い争いをしている。

クロはこういうのに入っていくのはまずいと知っているのがれきで遊び始めた。

「もういいー!ぶつ殺す!」

マートがいい加減キレたのか顔に血管を浮き上がらせながら笑っている。

「いい度胸じゃねえか! 餓鬼に大人つてやつを教えてやんよ!」

相手も同じようにしてキレている。

ここでクロは少し、悩んだ。

一応仲間が戦おうとしている。

ならば手助けするべきではないかと。

だがすぐにやめた。

別に勝ち目のない戦いに仲間を助けに行く。

これならすぐに入る。

だが、クロから見ると今起きようとしている戦いはそれ以上の物に見えた。

「マート・U・クリティウスよ! あんたは!?!」

「ミミ・H・アイルバート! 可憐な大人の戦い方つてやつを教えてあげるわ!」

ミミはクロと戦う予定だったのに、マートとの戦いが始まった。

「お前がDのネーム持ち…か」

「…」

シューレスを見下ろすように敵は立っている。

「画像を見て分かつてはいたがただの餓鬼だな。つまんねえ」

「…」

シューレスは黙ったまんま相手を観察している。

敵はおそらく男。

外見は黒い衣服等で体をすべて覆っているためわからない。

「少しはしゃべれよ。戦いで俺を楽しませるのは無理なんだからせめて口でさ」

「…なぜ？」

「おお、ようやくしゃべったな？思った以上に低い声だな」

敵はようやく降りてきた。

頭をかきながら尋ねてきた。

「ところで…お前、俺に会ったことあるか？」

「…知らないな」

「だよな。どうも聞いたことある声のような気がしてな」

敵は構えることなく、ただ突っ立っている。

「さて、どうやらお前は話術は得意じゃなさそうだ。なら、始めるか」

「…なめているのか？」

「もしかして俺は既にお前の幻術とやらにかかっているのか？だから余裕なのか？」

「知ってるのか？」

「こちらから出向いてるんだ。相手の情報ならいくらでも入る。お前は視覚を操るネー

ム持ちだそうだが…」

相手が仮面をとる。

そこにある顔に驚嘆した。

「…！」

顔の半分が皮膚ではなく、機械になっている。

「悪いな。俺がお前を選んだ理由は勝てるからだ」

「…」

「お前の魔法は相手の視覚を奪う。だが、聴覚までは奪えない」  
相手が構えた。

その構えはドール使いを感じさせる構え方だ。  
少なくとも魔法を使う構えではない。

「俺の名前はミグレット・ケリニス」

「なめられたものだな」

「ネーム持ちじゃないからか？だが、今からお前はそのネーム持ちじゃない俺に殺されるんだぜ？」

シューレスも構える。

しかし、その構えはいつものシューレスからは考えられなかった。

「なんだおまえ？」

こぶしでやりあう人の構えをしていた。

シューレスは普通、こんな構えはしない。

「やめとけよ、得意魔法が使えないから格闘技？ 玄人相手に素人が勝てるわけないだろ  
！」

「素人なら…な」

本会場。

ここでは新入隊員が来るのを待っていたのだが来ないことに対して疑問を持って少し騒がしくなっていた。

「リヨウ殿、遅いなあ」

「何かあったんでしようか？」

「面倒ごとー?」

「私おなかすいたー」

自分の主の順番を待っていた使い魔たち。

だが、主たちは予定時間になっても入ってこない。

もつと言うならだれ一人入ってこない。

「故障でもしたのかな？」

「この入隊式にですか？軍隊であろうものどもが……！」

「スノーこわーい」

「こわーい」

「……は！いや、すみません。主が心配で心配で」

スノーが謝っていると1人の人が転移装置から入ってきた。

しかし、

「……あいつ、軍服じゃないわね」

「嫌な感じがします」

それを確認した軍の人は全員が臨戦態勢をとった。

顔には驚きと疑問が入っているのが分かる。

「……挨拶に来ただけだというのに」

カザキがつぶやく。

周りを見渡し、1人の男に目をつける。

「久しぶりだな、グネズト」

グネズトだけは立ち上がっていなかった。

来るとわかっていたような顔をしている。

「何年ぶりかなあ……、いや俺とお前の仲だ、数えるだけ無駄か」

「…」

「なんとか言えよ。驚きが大きすぎて口もきけないか？」

グネストはしゃべらず、周りの軍の人も何もしない。

銃を向けているがグネストの指示がない以上どうしようもない。

「まあいい。それより、やつぱりお前らは平和ボケしすぎだな。こんなにも簡単に転移装置にハッキングできた。そして——」

手を広げ画面を作り出した。

画面には戦闘中のリヨウとマーシャが映っている。

「彼らだけじゃない。お前の下につく奴全員だ」

すぐに画面が消えた。

「まあ、今日は挨拶に来ただけだ。少なくとも俺は——」

しゃべろうとして何者かに攻撃を入れられる。

2人だ。

「…戦う気はないんだが？」

「リヨウ殿をどこにやった…!？」

「マーシャはどこ？」

サクとリンが2方向から攻撃を加えている。

打撃だったけどちらともカザキは腕で軽く受け止めていた。

「悪いが、子守りは苦手なんだ」

「ー!」

突如、強い力によってサクとリングが地面にねじ伏せられる。

「寝てる餓鬼ども」

「ぐっ……!」

「さて、グネズト。いい加減しゃべってくれないか?せつかく来たんだから」

「趣味が悪いな」

「第一声が……ん?」

カザキがグネズトの第一声に疑問を持つ。

「子供を地面にねじ伏せるなんて趣味が悪いんだな」

「……!」

何かに気づいたのか、画面を開き確認をしている。

周りには銃を構えた敵がいるのにお構いなしだ。

確認を終え、カザキが歯ぎしりをしながらグネズトを見る。

「貴様……!」

グネズトは勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。



## 相性

「貴様……」

カザキがグネズトを睨みつける。

カザキは違和感を感じた。

グネズトの第一声で。

そして第二声のあと、転移させた奴らの映像を見て理解する。

「なめられたものだな」

「なんだ、もうネタが分かったのか？」

「黙れ、ゴミが」

「……正体まで分かったか。なら、隠す必要はもうないか……？ いや、指示があるまでは待つか？」

その声を聞いて一部の人も違和感を感じ始めた。

この声はグネズトのものではないと。

「幻覚か……確か、シユールレスと言ったか。お前ごときが俺を相手できると思うのか？」

グネズトがぼやける。

やがてその姿がシューレスに変わる。

「上官殿は戦う気はないはずだとか言ってたけどな。それにお前も戦う気はないとか言ってたよな」

「…それを見越してお前を配置したのか。やはりお前を手放すべきではなかったな、グネズト」

転移装置のところにグネズトが立っている。

片手にブローンと力なくミグレット垂れ下がっている。

「ふん、俺がお前のもとに残ることはなかった。間違いない」

「なぜ俺が来ると…、いや、襲撃してくると分かった？」

「かれこれ300年以上の付き合いだ。お前の性格も嫌でも分かる」

「成程」

グネズトが持っていたミグレットを投げ捨てる。

ところどころ機械でできている部分がへこみ、右腕がもげて断面から導線らしきものが出ています。

生きているのかは見た感じでは分からない。

「つたく、何が格闘技の玄人だ。素人もいいところで正直困ったぞ。耳だけよくても反応できないきや意味がない」

「もともとそのDと戦う予定だったんだ。予定通りなら余裕だったようだが…運が悪かったな。グネズトを相手にしたか」

「こいつの安否は気にならないのか？」

「自分の身は自分で守る。それが俺のやり方だ。生きてるなら自分で帰り、死んでるならそこで永遠に横たわってろ」

カザキがしゃべりながら腕輪をいじる。

「10分…か」

「なんだ、制限時間でもあるのか？」

「これでも俺は帝国の王だ。やることが山積みなんでね」

「ならさっさと仲間を連れて帰れ」

「だが、休養も必要だ。時間が来るまでゆっくりしていくつもりだ」

「…ライル」

グネズトの腕時計からライルが姿を現す。

今回の姿もサクだ。

「妖精をだしてなんのつもりだ？妖精では人間は殺せない。知ってるだろ？」

「なに、俺の部下では力不足なのは分かっている。だが、ライルならな」

「任せて」

「答えになってない。妖精で人間に攻撃を加えるのは不可能なのにどうするつもりかと訊いている」

グネズトがその問いに行動で答えた。

ナイフを取り出した。

それをライルに渡す。

「…成程。人の魔力が込められた武器ならということか。だが…」

爆発音と同時に地面が揺れる。

警報もなり始めた。

「言ったはずだ。転移装置はハッキングしたと。俺のあいさつに同行したいと言ったのはあいつらだけじゃなんだよ」

「ちっ…、中佐、外の指揮は頼む。こいつら全員もってけ」

「は、はい！お前ら全員外に移動だ！」

外に軍が移動する。

行動は迅速ですぐに残るのが一般人はサク達4人になる。

「結局、やり合うことになるのか…。いいだろう。こい、全員まとめて相手してやる」

「馬鹿言え。俺は勝ち目がない試合が大っ嫌いなんだ。ライル、後は頼んだ」

「はい」

使い魔全員がカザキを囲む。

シユールレストとグネズトは傍観する気のようにだ。

「使い魔だけを当てる気か……。まあいいだろう。すぐにお前らも引きずり出してやる  
！」

「はああああああああああああああああ!!」

マーシヤが大声を上げながらリップトに攻撃をする。

リップトはただかわす。

口は笑っており、余裕に満ちていた。

「つまらねえな、仇討ちのために頭に血が上って攻撃が単調だ。だが……」

リップトが掌の上に火の玉を作り出す。

マーシャの顔を見ながら言う。

「その顔はいい！いつ見ても憎しみなどの負の感情に支配された顔っていうのはそそるなあ！」

「黙れえ！」

火の玉を無視して足で蹴り飛ばそうとする。

リプトは火の玉を投げず、そこで爆発させる。

黒煙が上がり、視界が不良になる。

「隠れてんじゃないわよ！」

「せめて自己紹介くらいさせてくれよ。俺は——」

「必要ない」

マーシャが耳のみでリプトの場所を当てる。

回し蹴りがリプトの脇腹に入り、リプトが跳ばされる。

リプトは予想外の展開に反応が遅れた。

マーシャがそれに追撃を加えようとする。

しかし、リプトも黙ってはいない。

「なめるなよ……！」

リプトが指を鳴らす。

すると、マーシヤが突然引つ張られる。

自分のトップスピードで動いていたマーシヤが地面に引つ張られ地面に落ちる。足に光るロープらしきものが巻き付いている。

「なによこれ!？」

「ただの束縛魔法だ。だが…」

地面からさらに同様のロープが出てくる。

マーシヤを地面に完全に固定する。

「この程度でいいのか。やはり戦闘面では楽しめそうにないな」

「グ…、くそ!」

「いまだにその顔を崩さないか。その点では興奮が止まらない——」

突然、何かの接近に気づき後ろに下がる。

そこにヒュニスが地面い突き刺さるようにして落ちてきた。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ?」

「そういえばいたな。すまない、逸材だというのにすっかり忘れていた」

リヨウが矛を使いマーシヤの拘束を解く。

すぐにマーシヤが立ちあがる。

「リヨウ、ありがとう。でも下がってて。こいつは私がやる!」

「いや、悪いが俺もやる。お前の仇討ちとやらに付き合ってる暇はないんでね」  
「…リヨウ」

「お前があいつを殺したい気持ちは分かる。だが、俺はお前に死んでほしくない」  
「…」

「そのためにある力だ、こいつは」

リヨウが矛を握る。

今ではリヨウはドール6段階目。

ここから選ばれた者になれるかなれないかの境界線だ。

大体の人は5段階目で90%の人が止まり、さらに6段階目にいった10%の中から1%の人が7段階目にいける。

「…面倒なやつね、あんたは」

「そこはありがとうって言って抱き着いたり、泣いたりするところだろ」

「戻ったら一発入れるわよ？」

「そ、そこまで？」

「ふふつ、冗談よ。…ありがとう」

改めて敵を見据える。

マーシヤのその眼には憎しみはほとんど残ってなかった。



友が隣で戦っている。

それだけで仇討のみを考えていた思考が変わる。

こいつと一緒に帰る、絶対に死なせない。

「…つまらねえ」

リプトが言った。

「戦闘でも楽しめないのに、表情まで…。そこまで簡単に変わるってことはその感情も大したものじゃなかったということか、或いはまだどこかにしまっているのか…？」

リプトが手を地面につける。

「そろそろ、増援を呼ぶか」

「増援？」

「いや、伏兵を出すというほうが正しいな。ずっとここにいたんだからよ」

「なに？」

「マーシャ・クリーシャ。もう一つの恐怖、思い出させてやるよ！」

地面に魔力を送り始める。

地面から無数の手が跳び出てきた。

「うおお!!」

「きやつ!!」

地面から離れ危険回避する。

「折角だ、名乗らせてもらおう。俺の名はリプト・T・エリオス!」

「T…だと!」

「知っているのか? なら、これから起きることも分かるな?」

死体が湧き出てくる。

いくつも。

決してきれいなものばかりではなく、骨がむき出しのもの、腐った脳みそが見えているものも、首がない者もいる。

「…!」

マーシャがもう一つの恐怖を目の前にする。

母を殺した恐怖を。

「さあ、もう一度あの顔を俺に見せてくれ!」

「…」

ニゲルが黙ってみている。

別に隙が無いわけじゃない。

むしろ相手、レックスとウリスは隙だらけだ。

何せ軽く仲間割れ中だからだ。

「いいからお前は黙って見てろ！」

「私はどう戦おうと勝手にシヨ？」

「あいつは知らないが俺と戦うって言っただろ！黙って見てろよ！」

「でもあいつだつてダメとは言つてないヨ！別にいいジャン?!」

ずつとあんな感じだ。

最初、後ろに回り込んだ後2人は驚いた顔をしていた。

当然だ、一瞬にして後ろに回り込んできたのだから。

だが彼らも行動早かった。

すぐにレックスもウリスもすぐに攻撃をする。

しかし、相性が悪かった。

レックスは接近を専門にするのに対して、ウリスは遠距離魔法を得意とする。

炎魔法全般が得意なのだが使うのが基本遠距離なのでどうしても偏ってしまったのだ。

そしてウリスのこの攻撃は威力を求めるため範囲も広くなる。

それはレックスにとってはかなり面倒なことだった。

それで、今はニゲルをほったらかしで口喧嘩中だ。

まだ手が出てないだけよしなのかもしれない。

「戦いたいなら、接近戦で使える魔法使えよ！炎の剣とか！」

「私はそんな魔法使うより投げたり撃ったりしたほうが相手に当たりやすいノ！」

「んなこと知るか！お前が剣だと威力下がったとしても俺も戦うんだからむしろ戦況はよくなるだろ?!」

「なんで戦う時に自分の力を加減しなくちゃいけないノヨ？気分のらないじゃナイ！」

正直今なら簡単に殺せる自信がニゲルにはある。

だが、ニゲルはここにこいつらを殺しに来たわけじゃない。

戦いを楽しみにきたのだ。

だから今ここで隙をついて殺しても面白くない。

「…お前らア、いつまでそうやって言い争ってんだア？」

「こいつが傍観するっていうまでだ・よ！」

「…あア、そうかア」

ため息をつくニゲル。

長い間、彼は戦闘での出番がなかった。

一応、国家嚴重未知檢察官という情報通に対して脅しをかけるための肩書もある。

ようやく一戦交えることができるというから来たというのにこの様だ。

「…黙って見ているのも悪かアねえが」

暇だ。

やはり、戦いたい。

「ああー！もうお前、女なんだから隅っこで縮まって『お助けー』とでも言ってる！」

「女なんだから？アンタあまり——」

危険を感じて回避する。

そこにニゲルが現れた。

「…さっきのでは確信が持てなかったが」

「瞬間移動ね」

「ようやく俺に気が向いたなア。始められるかア」

ニゲルが手に刀を持ち出した。

長さは脇差ほどしかなく、長さはない。

だが、ただの刀を出すはずがない。

「こちらにも制限時間ってやつがあるんでなア、さっさと始めるぜえ！」

再びニゲルが消えた。

## ロボットと手品

「早く帰っていいことしたいわ…。ねえ、あまり傷つけないから黙ってついてきてくれないかしら？」

「私が『はい、いいですよ』って言うと思うの？」

「やんちゃね。でも、それもまたいいところ♪」

リリアとファイリアがナタリーと戦っている。

ナタリーはネーム持ちなのでもちろん魔法を。

リリアとファイリアはドールを既に展開済み。

2人ともすでに5段階目だ。

「ファイリア、何か作戦は思いついた？」

「…あまりいい感じのは思いつきません。まずは相手のネームの力について知らないと危険です」

ナタリーは未だにネームの力を明かしてこない。

それどころか魔法をまだ一つも使っていないのだ。

どちらとも相手を観察中といったところ。

「じゃあ私が引き出してみるわ」

「できるんですか？」

「私のドールの5段階目、面白い力を持つてるのよ。見てなさい」

リリアのドールは銃の衝撃を抑えるため、普通のドールよりも大きく動きが鈍重になりがちだ。

その分防御力もあるのだがリリアにはまだ違う手がある。

「武装装甲変更。軽装型」

リリアが言うのとドールのパーツがどんどんはがれていく。

盾ともとれるような肩にある部品から大きくなっていったすべてのパーツが消えていく。

最終的に普通のドールと同じくらいまで大きさが変わる。

「ずいぶん減りましたね」

「さっきのままだとあまりに重すぎて動きにくいからね。こうすることである程度はスピードが戻るのよ」

「でも銃の衝撃は？」

「それは緩和してくれるのがなくなつたから体にもろに来るわ。でも、私だって訓練はしてきたのよ。ある程度までならいけるわ！」



リリアが銃を構える。

大きさはほとんど変わらず重そうだが、顔には一切変化はない。

「私がこれで攻撃するからファイリアは敵の能力を見極めることに集中して！」

「分かりました。頼みます！」

リリアがナタリーに向かっていく。

速さはお世辞にもすごいとは言えないが十分だろう。

ナタリーは向かってくるリリアに対して顔を輝かせている。

「やっぱりいい体してるわ。さつきまでは重装備で見えなかったけど体の形もある程度見えて…、やっぱりあの体を好き放題触りたいわ」

「…」

この反応を見るとやっぱりさっきの装備に戻そうかと悩んでしまう。

しかし、それでは相手の攻撃に対してついていけない可能性と、射程外に逃げられるという可能性があるなのでやめる。

リリアがまず真正面から一発、銃弾をぶちかます。

「きゃっ♪」

楽しそうな悲鳴を上げながらナタリーが先に動く。

銃弾は何にも当たらずただ空を切る。

まあ、誰でも目の前で銃を構えられたら避けるか、手を上げるかするだろう。

「危ないじゃない。当たったら折角の体が台無しよ?」

「台無し上等じゃない」

「今日はお互い裸の付き合いをするっていうのに…」

「しないわよ!」

リリアが追いかけているが銃を撃ち続ける。

スナイパーを構えているので連射はできない。

リリアが2、3発撃ちこんだところでナタリーも攻撃を始めた。

「ふふっ。これはどう?」

ナタリーの手にひらに薄く水色がついた正方形の何かが現れる。

見たことのないのと、得体が知れないためリリアの集中がそちらにむく。

リリアに向かってナタリーがそれを投げつける。

「(狙い落す!)」

一直線に向かつてる物体はリリアにとってはいいいだ。

自分も動いているが外す心配なんて一切ない。

1秒で的にとらえ撃とうとする。

が、その時正方形の物体が6面に分かれる。

さらに分かれた6面は先ほどまでは10cmほどしかなかったのに1mくらいまで大きくなっている。

しかし、これに対してもリリアは焦らない。

別に敵が無限に増え始めたわけじゃない。

1体が6体になっただけ。

しかも的は大きくなった。

リリアは自分にそれが当たる前に引き金を引く。

銃声が聞こえるたびにそれは割れて消えていく。

6回の銃声の後にはその面は1つも残っていないかった。

「数が少なかったかしら?」

ナタリーはすべて撃ち落とされたのを確認すると再び同じ魔法を唱える。

今度は正方形が4つ。

「射的やりに来てるわけじゃないんだけど!」

再び襲い掛かってくるがリリアは冷静に構える。

まずリリアは1つの正方形が分裂する前に撃ち落とす。

「じゃ、少し難易度上げようかしら?」

そう言うとなタリーはさらに魔法を唱える。

風が吹き始めた。

これにより、銃弾の進む向きに少し誤差が生じる。

そしてどういいうわけか相手の魔法は風の影響を受けていないらしく、ゆらゆらと接近してくる。

リリアは少しも焦らない。

ただ、的を狙う。

銃声が聞こえたと同時に1面が割れて消える。

「!」

「そんなでかい的、この程度じゃ外さないわよ」

リリアの銃声が聞こえるたびに1面が割れる。

撃ちながら思う。

「(…何かしら、この感じ。どこかで——)」

しかし、リリアの思考はそこで遮られる。

13枚目を撃った時、リリアの体に激痛が走ったからだ。

敵が何かしてきた様子はない。

「?」

激痛があつたのは右腕。

力も入らなくなっている。

右腕を見るとドールの部品が碎けて自分の体を銃弾が貫通していた。

鮮血が流れ、右腕が言うことをきかない。

「あ…、アアアアアアアアアア!？」

「リリアさん!？」

痛みに耐えかね落ちてきたリリアをファイリアがキャッチする。

「あら痛そう」

「リリアさん、大丈夫ですか!？」

「え、ええ…。でも…」

右腕にぼつかりと穴が開き血が流れ出ている。

おそろしくこの腕は使い物にならない。

「今のは…、反、射?」

「ご名答。やっぱり私が惚れただけあるわ♪」

さっきまで銃弾で割れていたのはそれだけ強度が弱いと思わせるため。

1つだけ強度が固いものを混ぜることでさっきまで割れていたのだからと注意しなくなっているところに攻撃がぶち込まれる。

「銃には跳弾つてもものがあつたからね。それを利用させてもらったわ」

「それだけ固い物ってことですか…!」

「これが私の得意分野だからね」

痛い中、リリアが左手で銃を構えた。

そしてすぐに撃つ。

照準を定めることなく。

しかし、これも訓練の成果か、或いは運が良かったのか、的をとらえた。

「え?」

ナタリーに命中し、ナタリーがのけぞる。

何が起きたかわからないのか疑問を抱いたまま落ちた。

「や…ったの?」

「…」

見た感じでは動かない。

だが、こんなのでやられるはずがないと2人の頭は言っていた。

「…ふ」

こらえていた笑いを抑えきれなくなったのか、ナタリーの体が震えている。

「ふふふ…ふふふふふふ」

ゆっくりと起き上がる。

体には傷一つ、ついていない。

「駄目ね。まさか10秒すら騙せないなんて…」

心臓を貫いたはずの銃弾は体で止まっている。

手でそれをとると、手で握りつぶした。

「さて…、貴方はこれ以上もう戦えないでしょ？おとなしくついてくれば腕は治すし気持ちいいし、言いこと三昧よ？」

「まだ私が——」

「なめたこと、言つてんじゃ…ないわよ」

リリアが立ちあがる。

右腕は依然として垂れ下がったまんまだ。

「あら、まだやる気？好きな子を攻撃するのは心が痛むんだけど…」

「…カーリヤ・エリスエル」

ぴくつとナタリーが反応する。

リリアの予感が当たった。

「…なぜ私の元カノの名前を？」

「つまり、貴方が彼女の、師匠つて…わけね」

「ええ。あの子は強くなりたいてって言ったから私が教えられることを教えたの」

「つまりあなたのネームの能力は…」

「防御魔法の特化よ」

ナタリーが再び正方形を作る。

「しかも私のは肉体のみじゃないの。自分の魔力を込めたものならどんなものでも防御力が上がる。それを知っても、貴方は戦うのかしら？」

リリアには体をまともに動かす体力は残っていない。

戦うならフィリアだ。

「リリアさん、下がっててください。私が行きます」

「いいえ。…まだ、戦えるわ」

リリアはまだ諦めていない。

なぜそこまで戦うのか？

「悪いけど…、グネズト大佐に訓練してもらった身、なの。ここで負けては、あの人の顔に…泥を塗ってしまうわ」

「無茶です！体は動かないんじゃないですか!？」

「でも、あの壁を壊せるのは…私だけ」

「それは…そうですが」

リリアが動かない右手の代わりに左手をフィリアの頭に置く。



「安心しなよ。私だって、むざむざ死に行くようなこと…はしないわ」

「じゃあ、どうやって…?」

「武装装甲変更。…完全重装型!」

再び装備が変わる。

さつきは装備していたものがどんどん消えていった。

だが、今は違う。

さつきはがした装備が、いや、それ以上のものがリリアの体に装備されていく。

「あらあら…」

「…」

リリアの体が完全に覆われた。

装備したパーツによって。

「それじゃあ体が見えないじゃない…。残念」

腕、足、胸、そして顔までもがすべて装備品に覆われている。

今までに見たことのない型だ。

ここまで完璧に体を覆うドールは滅多に類を見ない。

リリアが調子確かめるように右腕を動かす。

「リリアさん、それ…」

「このドールは私の頭からの信号を読み取って動くの。骨が折れようが、切断されようが意味ないわ。もつとも、痛むぶんには…痛むけどね」  
動くといっても痛みはある。

これならいつそのこと切断しておくべきだったかなと思う。

「さあ、もう一頑張りよ。フィリア、手、貸してね？」

「当たり前です」

フィリアが銃を持ち出す。

今持っているのは、先ほどよりも威力が高いカーリヤを倒した時の銃だ。

倒すにはこれで最大出力で撃つしかない。

「本気…と見ていいよね。なら、私も少しは力を使いましょう」

同じように正方形の物体をいくつも出現させる。

お気に入りなのか、これしか使ってこない。

「安心して。殺さないで持ち帰るから」

「その無駄口…二度とたたけないように、してあげるわ！」

フィリアが銃を撃つ。

ナタリーは一面だけ間においてそれを止めようとした。

しかし、

「グ……」

気づいた時には肩をかすっていた。

いくらネーム持ちといえども動体視力でも上がらない限り、銃弾に反応はできない。

一枚間において安心していたのが仇となった。

「これほどまでの威力とは……」

ナタリーもこれには驚く。

自分は防御を得意とするネーム持ち。

彼女以上に防御力を高めることができる人は存在しない。

それを貫いた。

もしあれを初めから使われてたら危なかった。

「タイプなだけじゃなくて強いなんて……。絶対持ち帰ってみせるわ♪」

「……狙いが、外れたのね。でもまだ……」

さらに撃ち始める。

しかし、ナタリーも何度も攻撃を許すはずがない。

防御に使う層を厚くする。

その時出来た通路を使いフィリアが一瞬で接近する。

「！」

ナタリーはその速さに驚いたが別には留めなかった。  
なぜならフィリアの攻撃は一切通らないから。

「くそー！」

「あなたじゃ無理よ、銀髪。黙ってる気がないなら、死んで」  
フィリアが右手で殴ったところに正方形の物体をぶつける。

避けられるほどの距離はない：はずだった。

ところがフィリアはかわし、再び攻撃を加える。

「？」

操作を誤ったかと思い今度は2つ使う。

が、これも当たらない。

ナタリーに接近戦で挑んでるということは、ナタリーのテリトリーにいるということ。  
と。

その至近距離から攻撃を加えているのに当たらない。

「どうしました？」

フィリアが得意げな顔をする。

次の瞬間、ダメージはないが後ろに衝撃が走る。

気づけばフィリアが後ろにいた。

衝撃が走った時にはまだ前にいたはずなのに。

「調子に乗らないで」

口はおしとやかだがかなり頭にきている。

どうでもいいやつに馬鹿にされるとイラっとくるものだ。

「目障りな蠅は…排除する」

リリアからの攻撃も考えながら面の半数以上をフィリアの包囲に使う。

数は全部で30。

「(死角は無——)」

突然、目の前が真っ暗になる。

「!？」

何かがナタリーの目に覆いかぶさっている。

それが人の指だと気づく。

今ここでそれが可能なのはナタリー本人、それか…

「あなたじゃ、私は追えません」

フィリアが馬鹿にしたような言い方でナタリーの耳元でささやく。

囁いた後、フィリアは少しだけ手を浮かす。

そして唱えた。

「フラッシュユ！」

いまだに活用できるこのレベルが低い魔法。

本来ならもつと輝きが強い魔法や、上位までいけばあたりを暗くする魔法なんてものもあるのだがそれが科学側の生徒であるフィリアに出来るはずがない。

フィリア自身軍隊に入つて、これを使うとは思つていなかった。

人間の体なんて脆い物だからこれでも十分だ。

「えっ…なに!？」

突然視界が奪われナタリーが焦る。

しかし、その焦りは怒りへと変換される。

ただの雑魚。

そんな奴に翻弄され、今は視界を奪われた。

それもかなり初歩的な魔法。

ナタリーを侮辱するには材料が十分にそろつていたらしい。

「…つぎけんじゃねえぞ！絶対殺してあげるわ！」

ナタリーの口調が荒れる。

しかし、行動は荒れていない。

どんな攻撃も受けないからだ。

多少動いていればリリアからの攻撃はまず当たらない。

フィリアのあの手品の仕組みはわからないが攻撃は一切通らない。

30秒ほどで視界が戻り始める。

フィリアがちょうど接近してきていた。

面を使つてそれを突き飛ばそうとする…がこれも当たらない。

すでに後ろに回り込まれている。

「アンタのその手品はなにかしら？」

「自分の力を明かすなんて馬鹿なことはいしません。まあ、仕組みを知ったところであなたには対策を練ることはできませんが」

「不思議な子ね…。少し興味が湧いてきたわ」

「なら捕まえてみたらどうです？ただの弱虫で殻にこもるみたいな魔法しか使えない貴方には無理だと思いますが？」

「…これでもはらわた煮えくり返ってるのよ」

「じゃ、初めますよ。せいぜい頑張ってください！」

煙球を投げ視界を悪くしてフィリアが逃げる。

ナタリーは額に血管を浮かび上がらせながら笑っている。

フィリアたちからは仮面をかぶっているため見えないが。

「ふふふ…、とりあえず捕まえたら四肢を切り落とさないかね♪」  
ナタリーもフィリアを追いかけた。



## 罵声

「死ねえ！」

「死ねえ！」

炎の剣と刀がぶつかる。

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねえ！」

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねえ！」

さつきからずつとこうだ。

マートとミミがこうやって暴言を吐きながら戦い続けている。

クロはもう怖くて入っていけない。

もともと入るつもりはなかったのだがここまで醜い争いになるとは思ってもみなかった。

これだからクロは初めての女子とはどうしてもぎこちなくなる。

こういうのを見るたんびに同じ人間なのかと疑問を持つ。

「さつきと燃えカスになっちゃいなさいよ！」

「黙りなさい！あなたこそさつきと死になさいよ！」

「うるせえ、ババア!!」

マートが炎の剣からすごい勢いの火を噴出させ文字通り燃えカスにしようとする。

ミミは水魔法を使い、マートに向かって放ちながら後ろに後退する。

距離が開き、2人は息を切らせながら睨み付け合う。

「はっ、アンタ本当にネーム持ち? さっきから弱い魔法ばっかで加減困るんだケド?」

「ネーム持ちは本当よ、餓鬼。私が弱い魔法か、刀を使うのは可憐な大人の戦い方ってやつを貴方に教えるためよ」

「死ねっていう暴言を吐くのが可憐な大人? 笑わせんなよ、オバさん!」

「それは貴方の聞き違いね。熱に負けて鼓膜がおかしくなっただんじやないかしら?」

「胸だけでかいババアがどんなでかい口たたいても全然響かないノよ!」

「それは妬みかしら? そんなんだから餓鬼って呼ばれるのよ、クソガキ!」

「うるせえ、ブサイク!」

最後はまとめてブサイクとってしまったマート。

剣を一振りして炎の波をミミに飛ばす。

ネーム持ちというだけあってその範囲は計り知れない。

生きてるかのごとく、炎は確実にミミに近づく。

ミミも水魔法で応戦する。



「終わりだあ！」

マートが手にぐつと力を入れる。

するとさつきまでバラバラに動いていた炎が一つの高温物体になる。

それを確認するとマートが手から力を抜く。

それと同時に炎の球が爆発する。

一瞬、世界が真っ白に包まれ、視界が奪われる。

音も奪われる。

わかるのは焦げたにおいともものすごい熱気。

やがて視力が戻り、耳も聞こえるようになってきた。

「…」

戻った視力で、あたりを確認する。

マートには傷一つない。

まあ、もともと自分な魔法で攻撃をしていたのだ。

それを制限できないなんて間抜けにもほどがある。

「（…あいつ大丈夫かな？）」

冷静になりクロのことを思い出すがすぐに頭から消す。

別に死んでいようが生きていようがどうでもいい。

死んでれば敵に殺されたと、生きていれば一緒に帰ればいいだけの話だ。あたりにミミは見当たらないし、どうとでもなる。

今は姉貴のところに行き苦戦してるのなら加勢するべきだと思ひ、転移装置を探す。

「加減し忘れたけど、壊れてないよネ…?」

「ええ。しつかり起動してるわ」

独り言で呟いたはずなのに返事が返ってきたことに驚き、あたりを見渡す。

しかし、クロはおろか敵すらいない。

だが、今の声は確かにあの女だった。

「守るの大変だったわよ?」

再び声がする。

どこにいるのか確認ができない。

「テンメエ…!」

「隙だらけよ?」

刹那、後ろに突然炎が出現する。

「!」

防ぐ時間はない。

体でもろに食らう。

しかし、傷は大したことはない。

もともと炎魔法が得意なのだからこれに対する耐性もある。

だが

「この威力……！」

疑問を投げかけようとして後ろに激痛が走る。

「グっ……!？」

背中を切りつけられていた。

傷は深いわけではないが痛む。

後ろを振り返るが敵はいない。

しかし……

「……何よそれ」

空中のあるところから血が垂れていた。

血が宙に浮いているわけじゃない。

突然現れて滴り落ちるかのように落ちていつているのだ。

「あらバレちゃった。まあ、手負いの雑魚ー人くらいならいいかしら」

ミミが姿を現す。

刀を持っていてその刀から血が滴り落ちている。

「…姿を消すのがアンタのネームの能力かしら？」

「残念。そんな弱い能力じゃないわよ。これは帝国の科学技術の結晶よ」  
体を再び消す。

そしてまた現す。

「聞いたことないわよ……！」

「あらそう。Vは確かこれを使ったけど負けたって聞いたのに。ま、ただの学生に教えられるわけないわよ」

背中が痛む。

マートは平然と話してはいるが顔は苦痛で歪んでいる。

なのに……

「アンタ……、どうして」

「あなたのさつききの攻撃のこと？これを使ったのよ」

ミミが手をかざすと半透明な円の盾が現れる。

「…それは？」

「もうわかってるんじゃないの、あなたは」

「…」

さっきの炎。

威力はかなりのものだった。

Uのネーム持ちでなければ致命傷間違いなしの破壊力だった。

それほどのものを瞬時に出した。

まるで自分の攻撃をそのまま返したかのような…。

「真似か…、或いは私の攻撃を反射させたか」

「まあ、正解といっておきましょう。ガキでもそこまでヒントを出されればわかるわよね。私のネーム、Hの能力は相手の攻撃を吸収、そしてそれを好きな時に使えるっていうものよ。ま、魔法限定だけどね」

炎を出して見せる。

大した威力はないからマートにはまったく意味をなさない。

「でもまあ、この光学迷彩があれば私の能力なんて必要なさそうだけど」

「ネーム持ちのくせにそんなものまで使うなんて…」

「ずるいつて話？いいえ、使えるものは使うのが可憐な大人よ」

「血の付いた刀を持って、濃い化粧をして、無駄にでかい乳持つてるババアが可憐な大人？ただの姑息なブサイクよ」

「まだ無駄口がたたけるのね。ならさっさとその口、二度ときけなくしてあげるわ」



再びミミが消える。

「マートも魔力をたどってみるがこれでは正確な位置までは特定できない。」

「ヴッ！」

再び斬りつけられる。

背中ではなく、真正面か斬りつけられた。

「な……めんなあ！」

体の周りに炎を作り出す。

これをすればしばらくは相手は近づけないはずだ。

だが、相手のネームは厄介だった。

張ったはずの炎の壁が破られる。

いともたやすく。

「！」

「あまい！」

再び斬りつけられた。

「アアアア！」

今回は深い。

全身から汗が吹き出し、宙に浮いているのがやつとだ。

「悪いけど」

声が出た。

「おしまいよ」

どうにかして相手を止めたいが、場所がわからない。

再び炎の壁を作り出す。

さつきよりも広い範囲を壁にする。

「（これなら……！）」

「くだらない」

作った壁がすべて消える。

「なっ!？」

「誰が消せる範囲を教えたのかしら？」

確実に近づいてくる。

「終わりよー！」

「（くそー!）」

死を覚悟したその時、大きな影がマートに覆いかぶさる。

バキン！という音がして刀が止められたのがわかる。

上を見上げるとそこにいたのは

「石の…人形？」

ゴーレムが覆いかぶさっていた。

今、この場でこれを出せるのはただ一人。

「マートさん、大丈夫？」

「…クロツエフ？アンタ、どうやって？」

クロがネーム持ちということは実はごく少数にしか知られてない。

理由はクロが敵であつたというのを伏せるためだ。

少なくとも学生時代の間にはあれば支障が出るのは間違いない。

どうしても何人かの人にはばれてしまったがそういう人たちはみんなクロを理解してくれた。

今までの振る舞いがみんなの心をつかんでいたのだろう。

「ケイトから聞いてない？僕、実はネーム持ちなんだけど」

「ウツソ!?初耳よ？」

「ドールも使うけどね」

クロのドールは3段階目。

正直実践としては使い物にはならない。

自分の耐久力を高めるために使うことはできるが。

「あら、そういうえば忘れていたわ。ごめんね、クロちゃん」

「…なんで？」

「ん？」

「なんでこんなことを？」

「クロちゃんは優しいのね。理由は簡単よ。そいつが邪魔したから」

「…」

「うざかったから。ガキだったから。うるさかったから。生理的に受けつけなかったから。まだ聞く？」

クロがゴーレムを動かす。

「あら、健気ね。かわいい♪でも私を見つけれられないのにどうやって私と戦う気なのかしらっ？」

「…僕のこの生活はリヨウのおかげ」

「ん？」

「だから僕は今訊いた。もしかしたら貴方も強制されているんじゃないかと思ったから。でも、違うみたいだね」

「…何が言いたいのかしら？」

クロが周りのがれきに魔力を送り込む。

「本当は戦いたくはない。けど、貴方は今僕の、リヨウの仲間を殺そうとしている。何の理由もなく」

「理由なら——」

「僕は決めてるんだ。二度とリヨウに辛い思いはさせないと。だから僕は、自分の決意を貫くため貴方を殺す」

ゴーレムに粉々になっているがれきが集まっていく。

「…かわいいだけじゃないのね」

「……………いくよー!」

オオオオオオオオオオオオ!とゴーレムが叫ぶ。

ゴーレムの一撃が何も見えない空を切る。

しかし、そこには確かにミミがいた。

「おっとお」

すんでのとこでかわし、距離をとる。

ミミには手がたくさん残っていた。

マートには対して効かないからと残しておいたさっきのマートの炎魔法。

かなり有り余っている。

クロの後ろに回り込む。

「かわいそうだけど…」

炎を出そうとする。

が、ここで予想外のことが起こる。

クロのゴーレムの手が見事にミミの場所をとらえていたのだ。

「！」

急いでかわすことで致命傷を避けた。

「（…なんで？まぐれ？）」

再びクロに向かって炎を放とうとする。

だが、ゴーレムは確かにミミをとらえていた。

離れて撃とうとしていたにもかかわらずゴーレムは腕を伸ばしミミに向かって攻撃を加えてきた。

すぐにこれも回避するがゴーレムの腕は1つではない。

2つ目の攻撃を許してしまう。

よけた先で体の右側からコンクリートでできた拳の一撃を食らう。

「が…!？」

吹っ飛ばされ、地面にたたきつけられるミミ。

たたきつけられた衝撃でところどころ骨にヒビが入る。

吐血もしてしまい予想外の展開だ。

「なんで……！」

「残念だけど僕にその手の攻撃……じゃないかな？ともかく一切効かないんだ」

「質問の答えになってないわよ」

「貴方だって自分の魔力の場所の特定ぐらい造作もないでしょ？」

「魔力……？」

そう言われて気づく。

自分の服についている微弱な自分のではない誰かほかの人の魔力。

基本的に他と戦っていれば必ず入り混じるのだから気にはしない。

だが、今ついているのは自分にまわりつくように離れない。

「僕は命ない物の一部を使って新しい何かを作り出す。でもこれは応用すれば相手の発

信機みたいなものにも出来るんだよ」

「私についてる無数のがれきの破片にでも自分の魔力を送り込んでるってわけね。簡単

に見えて思ったより高度な技術のはず……、思ったよりやるのね」

「それが僕のネームの能力だからね」

痛む右側の体をかばうように立ち上がる。

光学迷彩はクロには効かない。

まだ自分のネームの能力があるが。

「貴方は僕とはかなり相性が悪いみたいだね？」

「…なんですつて？」

「貴方はさつきからマートさんの炎を出して戦おうとはしてるけど吸い込もうとはしない。僕のゴーレムが嫌なら吸い込むべきだと思うよ」

「…」

「でも出来ないからしないんでしょ？理由は不明だけどね」

「…言ってくれるじゃない。まったく、かわいいだけじゃないのね。誤算だったわ」

ミミが目の前に半透明な円を作り出す。

範囲が広い。

「残念だけど、殺すしかないみたいね…」

「降伏してください。貴方はもう——」

「かわいい顔して降伏なんて言わないでよ。それに、私は負けないのよ！」

円から炎が頭をのぞかせ始める。

「いくらあなたでもこの炎を止めることは出来ないでしょ？」

「…僕の決意は聞いたよね？」

「さあ？忘れちゃったわ！」



炎がクロの襲い掛かる。

攻撃してくるのはUの出した炎。

威力は計り知れない。

クロがゴーレムを使い壁を作る。

「グ……」

「そんな脆い壁でどうにかできると思ってたんのか!？」

ゴーレムはがれきりでできている。

そこにUの魔法なんかを食らえばどうなるか。

ゴーレムが溶け始める。

いや、消え始める。

「……」

「知ってるわよ。クロちゃん、命ない物とは言ったけど液状の物は扱えないんでしょ？」

まあ、あまりの高温に液体にすらなっていないけど」

「これくらい……」

ゴーレムを再び作り直すとするが周りののがれきはゴーレムの一部になる前に溶けて消えていく。

「そんな!」

「降参しなさい、クロちゃん。そうすれば命は——」

「隙だらけだ、くそババア！」

ミミのセリフの途中にマートの声が響く。

どこから聞こえたのかと後ろを確認したのが運の尽き。

半透明の円の奥から手が伸びてきてミミの頭をつかむ。

それがマートの手だと理解するのに時間はいらなかった。

炎の中からマートが出てくる。

「消えろおー！」

すんでのところで手を振り払うが間に合わない。

確実に深手を負つてもう戦えないはずだと、油断した。

「アアアアアアアアアアアアアアアア！」

炎が一瞬とはいえ、顔を包み皮膚が焼けただれる。

あまりの痛さに魔法を維持できず、半透明の円が消え地面でのたうち回る。

「クソクソ！くそおおおお！ガキがあ、よく私の顔をお!!」

マートの炎を食らったのにまだ生きている。

それだけで十分すごいといえるだろう。

「あらオバさん、さつきよりいい顔になってルよ？」

顔の左半分が焼けただれ、目はもちろん耳すら使い物にはならないだろう。

顔の表情は憎悪に染まっている。

「餓鬼がああああああ！」

「可憐な大人が聞いて呆れるネ。むしろ服には手を出さなかっただけありがたく思っ  
ほしいネ」

「アアアアアアア！」

雄たけびをあげながら鉄の銚を作り出しそれをマートに向かって跳ばす。

しかし、突如盛り上がったがれきによりすべて止められる。

「……」

「マートさん、助かったよ。僕の攻撃じゃ決定打を撃つのは苦労しただろうから」

「いいってことよ。むしろこつちも感謝ヨ。おかげであいつに一撃食らわされたシ。

ねーオバさん？」

「……」

ようやく落ち着いたのか、怒鳴るのをやめる。

しかし、顔によるダメージは結構大きい。

「ねーどうしたの、オバさん？ さっきまでの威勢は。可憐な大人はどこいったのカナ？」

「…くそが。アア!？」

頭に激痛が走り立っていられない。

「マートさん、あなただだって傷は結構深いんだから休んで」

「クロツエフ、大丈夫だよ。確かに痛むけど…、これくらいならあの時と比べればどうと  
いうことはない」

マートがミミに近づく。

「さっ、オバさん。さっさと降参して転移装置、元に戻してくれない？アタシ、姉貴のと  
ころ行かないと」

「…そんなことすると思うの？」

「選択肢はないわよ？」

歯ぎしりをするミミ。

マートはお構いなし。

勝負はすでについている。

敗者には死ぬか生きるかしかない。

「死にたいか生きたいか、選んでチョウダイ」

「…クソー！」

ミミは生きるという選択をした。

「転移装置が起動したらしく、一筋の光が空に向かって上がった。  
「懸命だねオバさん」

そう言うのと転移装置の方に向かって歩いていく。

マートはミミを殺さないようだ。

マートの近くにクロが寄る。

「いいの？」

「これでも大人ダヨ？敵の情報は手に入れないと」

「…そうだね」

「もつとも——」

マートがミミの方に振り返る。

槍をミミが手に構えている。

倒れながらも。

奇襲する気だったらしくミミの顔が青くなる。

「これ以上私に危害を加えなかった場合ネ」

マートが手をかざし、炎を噴射する。

ミミが半透明の円をだし、防ごうとする。

だが

「悪いけど、おしまいよ」

ミミの足元が赤く染まる。

何が来るのか理解した時には時すでに遅し。

防御は間に合わない。

「ち……ちくしよ——」

ミミが叫ぶ前に地面から火柱が上がった。

生死など確認するまでもない。

だが、マートはしばらくその場でその火柱を見続けた。

「マートさん……?」

「……行こう、クロツエフ」

2人はその場を後にした。

## 圧倒的な力

「ほらほらほらほらア！どうしたよお、2人がかりでその程度かア？」

「はいっ……」

ニゲルが瞬間移動を繰り返し、ウリスとレックスを苦しめている。

力の差は圧倒的で、ニゲルが殺そうと思えばすぐに2人はやられてるだろう。

ニゲルが遊ぶために来ていたのが幸いしている。

「まったく……、科学側の第2位がこれかア。これなら1位とやりあうべきだったなア」

「1位？」

「リヨウ・アマミヤだよ。全体で見れば第2位、1位はDとかいうネーム持ちらしいがア

……、潜在能力を含めれば1位はリヨウとかいう奴だそうだ」

「俺は全体では何位なんだ？」

「……3位だア。お前らの学年のみならなア。あと、Nを除いた場合だア」

掌の上で脇差を回しながら説明をするニゲル。

ウリスもレックスも体中斬り傷だらけだ。

ウリスはもともとバリアを張っていないが、レックスは張っているにもかかわらず意

味をなしていなかった。

レックスの戦う帝国の相手は毎回どういうわけか、この手の武器を持っている。

「つまりアタシはこいつより下ってこと？」

「お前は4位だア。生憎な」

「ありえないシ！なんでアタシがこいつより下なのよ！」

「何言ってるんだよ。当然の結果だろ？」

「ああ？なら今その結果を変えて見せようか？」

「無理に決まってるんだろ」

ニゲルがまた蚊帳の外に追い出される。

さつきからちよつとしたことでこれだ。

こればかりは配置を決めたカザキに後で文句を言わなければならない。

だが…

「！」

ネームの能力を使えば2人はすぐに現実に戻る。

あの能力がいかに危険なものかはすでに理解しているようだ。

「…瞬間移動。本当にそれなのか？」

「それ以外考えられないでシヨ？他に何かあるノ？」



「いや、ねえけどよ」

レックスは違和感を覚えていた。

瞬間移動と決めつけているがおかしな点があるのだ。

こじつければそれもどうでもよくなるのだがやっぱりおかしいと思う。

「ほらア…行くぜ？」

ニゲルがレックスに向かって接近する。

レックスは近づいてきたところに拳を入れる。

だが、その直前でニゲルが消える。

気づけば後ろにいた。

「クソー！」

回避するが斬り傷は避けられない。

そこにウリスが炎魔法を加える。

ニゲルが水魔法でそれを抑える。

「これなら…！」

ウリスはUのネーム持ち。

相手が水魔法を得意とするネーム持ちでもない限りこれを抑えることはできない。

それくらい、ニゲルだって理解している。

「馬鹿かお前は？」

ウリスの後ろから声がした。

気づけば後ろにニゲルがいる。

水魔法を放ったまんま、移動してきたのだ。

急いで離れる。

さつきから攻撃が全く当たらない。

「まったく…少しは学習しろよお。今でお前は6回目だ、死んだのはなア」

「…なめた真似を！」

「そうしなくちゃお前らもう生きてないぜえ？」

「…！」

彼ら自身もそれは分かっているので何も言い返すことができない。

「まア安心しろよ。俺はア、今狩りをしてるんだ。せつかくの楽しい狩りはそう簡単には終わらせはしないさア」

「…レックス、どうするノ？」

「どうするもこうするもあるか？完全に遊ばれてる。これじゃ何をどうやっても意味がない」

「アンタのドールの力は使えないノ？」

「俺のドールは接近型だ。この拳が当たればおそらく殺れるが…」

「あいつの動きをどうにかしないとどうしようもないよネ」

ニゲルは一回の攻撃ごとに少し休憩を入れる。

制限時間がどうか言っていたのにどうでもいいのだろうか？

「お前の魔法でどうにかできないか？」

「…束縛魔法、ないこともないケドあいつの動きがそれで止まるかどうか。そもそもそれをかけるにも時間がかかるし」

「それをやってくれ」

「話聞いてた？時間がかかるって」

「でもそれしかない。生憎、俺は策士じゃないしお前もそこまでじゃないはずだ」

「…」

「面倒な作戦より、こっちのほうに分かりやすいだろ？」

「分かったワ。じゃ、時間チョウダイ」

「了解」

レックスがニゲルのほうに向きなおる。

ニゲルは話が終わるのを待っていたのか、レックスが振り向いたのを確認するとすぐに接近してきた。

レックスはウリスに注意が行かないよう、同じく接近する。ここでニゲルは魔法を使わず、レックスに斬りかかった。

レックスが腕で止める。

「作戦会議は終了したかア？」

「おかげさまでな」

「ならその成果、見せてくれよお？」

ニゲルは後ろに退くと同時に姿を消す。

レックスはそれを見ても焦らない。

すぐに後ろに向きなおる。

案の定、後ろにニゲルが出てきた。

「おおお、少しは学んだなア？」

「イチかバチかだったけどな。いつまでもやられねえよ！」

レックスが持つてきていた銃を構える。

ハンドガンと威力は低めだが十分だ。

引き金を引き、銃弾を撃ち込む。

ニゲルはまた移動する、そう思い撃つたのだが……

「ぐー！」

銃弾が跳ね返ってきた。

何発か、レックスに直撃するがすべてバリアが壁になる。

「フウ……。Sバリアに助けられたなア。ああ?」

「今のは……?」

「悪いなア、手札は教えない主義なんでねえ」

「……」

「まあ、1つ言えることは瞬間移動とは違うってことだなア」

今の攻撃で分かったことは相手は自分以外にも干渉ができるということ。

レックスはやはり自分の手で攻撃するしかないと理解し、再び接近戦に戻る。

レックスが再び拳を入れようとするがニゲルが再び消える。

レックスが周りに注意を巡らせるが、見当たらない。

「(……どこに?)」

ここで上が暗くなっているのに気づく。

すぐに体をそらすと頭があつたところにナイフが飛んできた。

「グ……!」

肩に深々と刺さる。

これだけで終わるはずがないと、痛みに耐えながらその場を離れるとすぐにニゲルが

自分の脇差で刺しに来た。

レックスはそこに痛みを耐えながらも反撃を加える。

しかし、ここで彼にとって予想外な出来事が起こる。

ニゲルがそれをかわさなかった。

「!?!」

かわされると心のどこかで思っていたのか、レックスの一撃はあまり威力はなかった。

ニゲルは盾を作るのは間に合わないとみて脇差で止めた。

ネームの力を使えばよかったのに。

「よくその体で反撃してきたな…。予想外だったぜ」

「なんで使わなかった?」

「…」

黙ったまんま後ろに後退してニゲルが距離をとる。

「いいだろう。1つ、教えてやる」

「有りがたいな」

「俺のネームは少し不便でな…。1回使うと一定時間経つまで使用できないんだよ」

「時間は?」

「1つって言ったろお？自分で考えろ。まあ……」

ニゲルが魔力を自分の体に込める。

「この攻撃に耐えられたらなあ！」

突如ニゲルの背中に羽が生える。

灰色ではあるが大きな羽。

レックスには何をしているのかは分からなかったが、ウリスはこれを見て恐怖する。

「(冗談でシヨ?)」

レックスに魔法の知識なんて有りはしない。

「なんだよ、その……魔法か？」

「ああ……。天使の装備術式、知らないか？」

「生憎、魔法なんて少しも習ったことはないからな」

「なら、その身を持って体験してみなア！」

大きく開かれた羽が輝き始める。

そこから出てきたのは無数の矢。

レックスはそれを目視しながらよける。

別に無数の矢が襲い掛かってくるのは珍しいわけじゃない。

どういわけか今までネーム持ちの知り合いが多かったり、明確な敵との対峙もよく

あったのでこれくらいはいくらでも避けられる。

「ほら次だア！」

突如、レックスの進行方向の前に壁が出来上がる。

進行方向を変えるが、その行く先々に壁ができていく。

「これは……！」

囲まれている、閉じ込められていると理解したレックスは壁に一撃を加えてみる。

しかし、壁に入るのは小さなヒビのみ。

「（本気を出せばいけると思うがここでネタがばれば警戒されかねない。ウリス……まだか!?）」

「そんなんじや意味ないぜえ？ 続いてえ——」

「命の炎《ヴィタムフラム》！」

突如、ウリスの声が響く。

ニゲルがウリスのほうを向くとすごい勢いで青い炎が向かってきた。

ニゲルを囲むようにして炎が展開される。

「……！」

すぐに危険を察知したニゲルがその場を移動する。

炎のせいでウリスの場所を見つけられなかったため後ろには回り込めない。



炎の中から脱出しウリスを探した。

ウリスが息を荒くしながら立っていた。

「まだこんな隠し玉が有ったのかア？」

「出来れば…使いたくなかったけどネ。これを使うと体がだるくなるから」

「わざわざ名前までいうってこたア…これでも不完全なのかア？」

「ええ…、これを練習できる機会なんてそうそうないから」

ウリスが深呼吸をして態勢を立て直す。

ニゲルの後ろではちやうど青い炎が消え始めているころだった。

「だが、外したなア？」

「…」

「そう何度も使えるもんじゃないんだろ？お前はその魔法を唱えなくても使えるようにしておくべきだったなア。まア、炎が近づいてきたら誰でも熱気で気づくだろうがア」

「…違うわよ」

ウリスがニゲルに向かって手をかぎす。

「？」

「私の本命は…こっちよー！」

突如、ニゲルの周りに炎が一定の距離間隔で出現し始める。

一瞬驚いたがすぐに自分のネームの力で回避する。

出現する場所はもちろんウリスの真後ろ。

「!」

「死——」

脇差で斬りつけようとして気づく。

体が動かない。

「…」

周りにはかわしたはずの炎が点在している。

「引つかかったワね」

「束縛魔法か…」

「アンタは、癖なのか知らないけど人の後ろに回り込むのが好きみたいだからね。まあ、

どこに現れても結果は一緒だったケ…ど!？」

突如吐き気に襲われ口を抑えるウリス。

抑えることができず、胃の中の食べ物をつき出す。

「(クソ…、やっぱリアンノウンは、代償が…大きすぎる!)」

「…それでは俺は殺せないなア?」

その言葉に反論しようとしてニゲルを見たとき腹に光の矢が突き刺さる。

「い」は……」

胃物と一緒に血も吐き出される。

「あくまで制限されたのは動きだけみたいだな？ 遊びは終わりだア……」

「グ……」

「楽しかったぜえ？」

絶体絶命なこの状況。

しかし、ウリスは少しも焦っていないなかった。

すでに手は打ってあったから。

再び矢を放とうとしたニゲルに背中から衝撃が加わる。

「！」

激痛のあまり言葉が出せないが後ろから声が聞こえる。

「本当は腹に1発入れたかったんだけどな」

「な……んで？」

「ウリスの炎は自然だったよ。そしてあいつは注意のひきつけ方もうまかったな」  
レックスを閉じ込めていた檻の方を見るとぽっかりと穴が開いている。

さつきのウリスの攻撃の余波で空いたものだ。

「……！」

「悪いな、話したいことは有るが……終わりだ」

「何——」

レックスが離れると同時にニゲルの体に再び衝撃が走る。

「が……ばはっ！」

こぶしを2回目入れたわけではないのに突然来る衝撃。

ニゲルの口から血が滝のように流れ出しニゲルの体がだらんと力をなくす。

レックスはそれを確認することなく、ウリスのもとに駆け寄る。

「おい、大丈夫か？」

「……そう、見える？」

腹には穴が開き、口と腹から血が流れだしている。

他にもところどころ切り傷が見える。

「やった……の？」

「おかげさまでな。だが、それ以上しやべるな。傷に障るぞ」

ウリスを抱える。

「さつさと帰るぞ。急がないとやば——」

「それはつれないなあ?」

聞こえるはずのない声が出てレックスの背筋が凍る。

声の方を見るとニゲルが立っていた。

すでに拘束は解けている。

口からおびただしい量の血を流しているにも関わらず平然としている。

「な、なんで……!」

「悪いなあ。俺の心臓をつぶしたみたいだったが…、そこは俺の弱点には含まれねえんだよ」

「何……?」

「ま、お前らは頑張ったよ……。じゃあな」

笑みを浮かべながらニゲルが作り出した光の槍を投げつける。

レックスがウリスをかばうようにして背中を受け止める。

Sバリアはほとんど意味をなしていないのか体に突き刺さる。

「アンタ、逃げな!ここにいたら…死ぬ」

「これでも情に厚い男なんでね!」

ウリスを抱えながら逃げ出す。

しかし

「美しいなあ……」

目の前にニゲルが現れる。

回避しようとするが矢の数が多い。

1人なら身軽なので躲せるが……

「グ……！」

背中に2本突き刺さる。

「お姫様を抱えて逃げる王様ってかア？ 最高の見せもんだぜ、お前らはよお！」

「くそー！」

レックスがウリスを抱えて逃げ続ける。

逃げ場がないと分かっているながらも。

限界が近いと気づいていながらも。

## 敗北

「所詮…、この程度か」

カザキが呟く。

周りには傷ついた使い魔がぐったりと横たわっている。

意識がある者は1人もなく、カザキは無傷で立っている。

はじめこそシューレスに騙され、軽くキレていたが今はそんな小さいことは頭の隅にもない。

「さあ、グネズト。次はお前だな？」

「…お前はたった20分ほど前の記憶さええないのか？老けたものだな」

「死ぬのが怖いならDを使っても構わないぞ？」

今カザキから感じ取れるのは余裕のみ。

絶対に死なないと分かり切ってるかのように、敵陣のど真ん中にもかかわらずだ。

しかし、グネズトには理解できた。

カザキの強さを知っているグネズトには。

「戦う気はなかったのだがな。こいつらとやりあっていたら気分が高揚して——」  
カザキの足に手が伸びる。

ライルが這いつくばりながらつかんでいた。

サクとライルが判断できるのは身に着けている服が違うからだ。

サクは動きやすい作りになっている着物を、ライルは軍服を着ていた。

「まだ、私は……！」

「……くだらない」

顔を蹴り飛ばし、手を払いのける。

「がっ!？」

まだ意識があるライルの背中を踏みつける。

ミシミシと骨の音が鳴る。

「ああ……あ……！」

「お前はもはや弱い以前の問題なんだよ。分かるだろ、妖精が人間に危害を加えることはできないって。武器を持たないお前なんか1人じや俺に傷つけることすら無理なんだよ」

「あ……アアア！」

「これは絶対なんだよ。この世の理だ。お前1人がもがいたって意味ねえんだよ！」



ライルを蹴り飛ばす。

ライルが5 mほど転がり地面で痛みを耐えている。

カザキがグネストの方に向きなおる。

「自分の使い魔がヒデエ目にあってるのにいいのか？」

「部外者のお前が口出しすることではない」

「そうか、いい判断だ」

求めていた解答が返ってきたからか、カザキの満足気な顔をする。

「さて…、じゃあ始めるか」

「俺はやると言っていない」

「俺が始めれば嫌でも「主君」」

グネストが知らない声によってカザキの言葉が遮られる。

「ハア、ハア……！」

「手品はもうおしまいかしら？」

フィリアがおびただしい量の汗を流しながらナタリーを見ている。

体にはところどころ擦り傷が見える。

ナタリーは汗なんてかかず、無傷のきれいな状態でフィリアを見据えている。

しかし、仮面の裏のその顔には確かに憎悪が詰まっていた。

「一切攻撃を受けていないとはいえ、周りの飛ぶハエを放っておけるほど私は優しくなくなっている」

「……（まだ、なんですか!?!）」

「さつきからは手品も使わなくなつて私も少し楽ができそうね」

周りに無数にある正方形の物体が動き始める。

「さあ、動かないでね。四肢をもぎ取るだけで殺しはしな——」

突然しゃべるのをやめる。

耳に手を当てているが表情は確認できない。

だが、フィリアには分かった。

「……もしかして、時間が来ましたか？」

「ただ逃げ回ってたわけじゃないのね」

「はい。リリアさんが攻撃できなくなった時点で私の作戦はこちらに変更しました」  
ナタリーの体が震える。

暴走しそうな怒りを我慢しているのだ。

ただの雑魚に邪魔をされただけじゃなく、翻弄された。

そしてお持ち帰りする予定だったリリアも手に入らない。

「…」

「早く帰らないと怒られますよ？時間はしつかり守らないとだめです。リリアさんを探すには最低10分は必要だと思います」

あたりを見渡したがリリアは見当たらない。

フィリアに気が回っていたためすっかり忘れていた。

「いいでしょう。この場は引くわ」

「ありがとうござい」「でも」

1枚の紙を取り出し、魔方陣を展開する。

「あなたは必ず殺す、私が」

ナタリーの足元に展開されていた魔方陣が下から上へスライドする。

その1回のスライドでナタリーは姿を消した。

魔方陣もナタリーを消すとヒビが入り、割れて消える。

目の前から敵が消える。

フィリアが張りつめていた緊張を解く。

「早く…、リリアさんを…」

緊張の糸が切れ、フィリアが気を失った。

「…ああ、そうか」

耳に当てていた手を降ろし、ニゲルがレックスたちを見下ろす。

「お前らア、吉報だぜえ？」

「吉…報？」

レックスの背中には4本の光の矢が刺さっている。

ボロボロの体になりながらもウリスを抱えているレックスが聞き返す。

ウリスはすでに意識がない。

「狩りの時間が終了した…、つまりお前らは生き残ったってことだア」

ニゲルが1枚の紙を取り出す。

魔力を込めるとナタリーと同様に魔方陣が足元に展開される。

「てめえ…逃げる気か!？」

「この状況でよくそんなことが言えるなア? 誰が見てもわかるだろお、お前らは負けたんだよ。それとも…、まだやるかア?」

レックスだつて頭の中では理解している。

このまま戦い続けたつて勝てない。

だが、負けたという事実を認めたくなかつた。

「つと言つてもこれを展開した以上お、そんな時間はねえけどなア」

ニゲルの体が消え始める。

レックスはただ見ていることしかできない。

「その女も生きてたら言つておいてくれよお? またの狩りを楽しみにしてらつてなア」  
それを言うとなゲルは消えた。

「つまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつまらないつ……」

ぶつぶつと念仏のようにリプトが呟く。

彼自身は戦意喪失しているのか一切手を出してこない。

「くそー」

リヨウとマーシヤは屍相手に戦い続けている。

一体一体は弱く、別に難しい敵じゃない。

だが、数が多すぎた。

斬っても斬っても沸き続けてくるし、頭を切り落としても体が襲ってくる。

「…なんで、あの顔をしない?」

リプトが問いかけてきた。

距離が結構あるはずなのにきれいに聞こえる。

「憎悪に満ちた、絶望に満ちた、恐怖に満ちたあの顔。俺を楽しませろよ」

「生憎、私はあなたの玩具じゃないの!むしろあなたが嫌な方の顔をするわよ!」

「…うぜえ」

リプトが立ち上がった。

するとそれに呼応するかのように屍の動きに統一性ができ始める。

「なんだ…!?!」

屍たちが一齐に手をリヨウたちに向ける。

リプトが唱える。

「ファイヤ」

屍たちの手から火の玉がリヨウたちを襲う。

「マーシャー!」

「え…きや!?!」

マーシャを抱き寄せ、ヒュニスで身を守る。

体に当たってもSバリアが守ってくれるが、もしものためにも残しておきたい。

すごい数のファイヤがヒュニスに当たり爆発がヒュニスの周りで起こる。

「あ、ありがとう」

「ああ。だけどこれはやばいぞ」

リヨウはTのネームを持つ者と対戦をしたことはない。

能力を目の当たりにしたことはあるが自分自身は戦ったことないのだ。

でも、クロに聞いたことがある。

Tの能力について。

屍を扱うって言っていた。

でもそれだけだ。

数が物凄いとっては言っていたが、魔法が使えるなんて聞いたことがない。

「もういいや、お前ら。死んでくれよ」

ファイヤの弾幕が一層強くなる。

ここで飛び出しても後ろで構えてる屍の餌食になる。

「リヨウ、ヒュニスはあとどれくらいもちそうなの？」

「このまま弾幕が続くか分からないが、…3分くらいか」

「思ったより脆いのね」

ヒュニスだつて耐久度は有るといえてど万能ではない。

ファイヤといえどその嵐にあえばいずれ壊れる。

「文句言うな。それより早く何とかしない…と？」

突然弾幕が止まる。

あたりが静かになっている。

周りは爆発の砂ぼこりで見えない。



「…止まった？」

あまり長くは続かないと思っていたがあまりに早すぎる。

砂埃が晴れはじめ視界が良好になる。

何かあるのかと奇襲を警戒したが屍たちは立ったまま力なく体をだらんとさせていて、リプトは耳に手を当てて話している。

リプトは歯ぎしりをしながら何か言っている。

「なんだ？」

「朗報だといいわね」

リプトが耳から手を離し、懐から紙を取り出す。

魔方阵が展開される。

「ー」

「安心しろ。お前らをどうこうするわけじゃない、生憎うまくない果実を口に含めなきゃならないほど飢えてはいない。もつとも、腐った果実を放っておくつもりもなかったんだけどな」

リプトの眼はマーシャを見ていた。

屍たちの足元にも同じ魔方阵が展開され、次々と消えていく。

「逃げる気？」

「撤退命令が出た以上、下つ端の俺ではどうしようもないからな。それに、逆らうと後で兄貴が怖い」

「アンタの近況なんて訊いてないわ」

「ともかく、俺はこれで失礼させてもらう。息抜きがむしろ悪い方向に行くなんて思ってもみなかったぜ」

リプトの体が消えていく。

完全に消える直前に言った。

「二度と目の前に現れるな。さっさと死ね」

リプトがいなくなり、屍たちもすべていなくなる。

まわりの景色が拓け、リヨウたちのみがその場に残る。

突然マーシヤが崩れ落ちた。

「マーシヤ!?!」

腕を抱え、震えている。

怖くなったのだろう。

さつきまでは怒りや憎しみ、戦っていることでそれが払拭されていた。

だが、さつきまで戦っていたのは自分の母を目の前で殺した敵だ。

「…」

「大丈夫だ、俺がいる。みんなもいる」

リヨウがマーシヤを抱きしめる。

マーシヤの震えが次第に止まっていく。

「…ありがとう、リヨウ」

カザキの隣に一人の男が突然姿を現す。

腰に太刀を携えている。

「C…」

「主君、時間です。帰還の準備をお願いします」

「まだそんなに経ってないだろう」

「先ほどそこの方が言った通り、すでに20分以上経過しています。時間を決めたのは

主君です」

「…耳が痛いな」

カザキが「はあ」とため息をつく。

Cが1枚の紙を取り出した。

「他の奴らは？」

「すでに帰還済みです。ですがミグレット以外にミミがやられました」

「相手は誰だった？」

男は答える代わりに転移装置の方を見た。

丁度、クロとマートが戻ってきたところだった。

「ここは…、って大佐！」

本会場に来たことはないのので2人はこの場所を知らない。

クロがグネズトを確認する。

それと同時に見たくないカザキの姿も。

「…！」

「久しぶりだな、クロ」

「…カザキさん」

「主君がカザキさんになったか。まあ、さんがついているだけ良しとするか」

Cが魔方陣を展開する。

「悪いがここまでだ。失礼させてもらう」

「ま、待っ——」

クロが叫ぼうとして隣を何かが横切る。

ガキイン！と音がして刃と刃がぶつかり合う。

「ブレーベ……！」

「……フラット」

斬りかかったのは女。

名をフラットといいのかCが呟いた。

対して女はCのことをブレーベと言った。

「感動の再会……なのか？」

「……いいえ、顔見知りなだけです」

「そうか」

Cが力でフラットを押し返した。

フラットとCに距離が開く。

「悪いが女、時間なんぞでな」

カザキとCが消え始める。

フラットが再び攻撃を加えようとする。

だが、遅かった。

「さらばだ」

消えたと同時にフラットの刀が振り下ろされた。

刀は空を切る。

振り下ろされた刀をそのままにフラットがただ黙っている。

いつの間にか外の爆発音も消え、人の叫び声だけが聞こえていた。

## 創った者達

リョウの部屋の周りが騒がしい中、椅子に座りぐったりしている。

目の前にあるベッドにはサクが眠っている。

黙ってみてやることしかできない。

結局リョウは敗北したのだ。

相手が退いてくれたからよかったものの、あのまま最後まで戦っていれば正直どうなっていたか分からない。

「リョウ…、大丈夫？」

クロが近づいてきた。

体にとりどころ擦り傷が見えるが大したことはないのだろう。

「俺は、な」

「サクも大丈夫だよ。すぐに目も覚めるよ」

「分かっているんだけどな…」

今回ポコポコにされた使い魔はライルを除いて特に命にかかわることはなかった。

ライルがやられた原因は最後まで起き上がっていたからだ、これも人間の状態から

自然の状態である「水」の姿でしばらく休めば元に戻る。

人間の状態を維持しようとすればまずいが元の姿で療養すれば何の問題もない。

妖精とはそういう生物だ。

「他のみんなは？」

「マーシャとフィリア、マートさんはほとんど問題なしみたい。リリアも右腕普通なら切断だけドケイトがいるし大丈夫。レックスも見た目ほどひどい傷じゃなかったみたいだけど…、ウリスさんが危ないところだった」

「助かったのか？」

「Nの力はすごいね。僕もOよりあっちがほしかったよ」

クロはマートの傷だつてなかなかだつたと思うだけだなあ、と首をかしげる。

カザキの退却後、まずレックスが帰ってきた。

血だらけのウリスを抱えてるもんだからマートは軽く発狂。

すぐにマートが軽くケイトを脅しながら引つ張つてきた。

次に戻ってきたのがリヨウとマーシャ。

こちらはさほどひどい傷はなかったので後回しになったが、すぐにリリアが帰還。

気絶したフィリアを抱えるため完全重装備で帰ってくるもんだからまずは敵ではな

いかと全員が構える。



が、すぐに装備がはがれてリリアも倒れる。

今度はケイトがぐったりしたりしたフィリアを見て焦っていたが大丈夫なことがわかるとリリアの止血を始めた。

「…笑い話にもなんないな。入隊式で死にかけるなんて」

「でも死にかけただけ。僕たちはみんな生きてる」

「…そうだな」

「リヨウ、生きてるのー？」

場違いな声が聞こえた。

久しぶりな声でもあった。

「お前…」

「ピンピンしてるみたいなの。よかったの」

ミリーナがいる。

こんなところにいたら間違いなく連行されると思うのだが誰も今は気にしない。

「入隊祝いに来たっていうのに…何があったの？」

「襲撃された」

「そうなの？」

「驚かないんだな？」

「もともとこの警備システムには不満があったの。ある意味いい薬なの」  
ミリーナにとってこれくらいは被害は被害の内に入らない。

人が死ぬをはもちろん良しとするつもりはないが、仕方ないこともあると思ってる。

そしてこの状況をむしろいい方向に捉えている。

「人が死んでるのにいい薬っていうの？」

「クロ…だったね？あなたは優しすぎるの。この世界は人が死んでも仕方ない、そういう風にできてるの。いや、創ったの」

「そのもの言いだと誰か1人が創ったように聞こえるぞ？」

「リヨウ…、あなたにはまだ言っただけでなかったの。もっと後に話したかったけど、あまり時間はないみたいなの」

ミリーナが1つ、椅子を転移させる。

出てきた椅子に座る。

「…僕は少し席を外すね」

クロはその場を離れた。

それを確認するとミリーナが話し始める。

「…私が生まれたのは800年ほど前なの」

「何の話だ？」

「名前はミリーナ・サカジマ。言いにくいかもしれないけど私はこの名前を気に入っていたの。ミリーナってかわいかったし、響きが」

天井を見る。

昔のことを思い出しているのだろう。

「パパの名前はアヤト・サカジマ」

「響きが日本の名前と似てるな」

「研究者だったの。私が生まれたころにはいろいろなのに手を出してたからなんの専門だったかまでは分からないけど。自分のことはあまり話しながらない人だったから知らないことも多かったけど分かるのはリヨウのいうところの未来人ってやつなの」

地球にいたりヨウのいうところの未来人。

違う時代の人もかなり前だがこの世界に来たようだ。

「そして、カザキ。あの人はパパの助手だった人なの」

「2人で飛ばされてきたのか？」

「そう言ってたの。前はおとなしい人だったのにすっかり人柄が変わってしまったの…」

私のせいで」

「どういう意味だ？」

「…ごめんなさい。話がそれるからそれはまた機会があれば話すの。それで、この世界を創ったのはもう誰だかわかったと思うの」

「その2人か？」

ミリーナが頷く。

「2人は初めてこの世界に来た時驚いたそうなの。魔法が存在してから。研究もはかどった。おかげでこの世界に2人は「科学」という概念を生み出すことに成功したの」

「…もしかして言葉もその2人が？」

「ええ。2人は研究者であるにもかかわらず日本語以外はダメだったの。だから2人は簡単な英語しか教えられなかったし、中途半端に地球と言葉がかぶってるの」

これでリヨウは納得した。

明らかに外来語が変わったものなのに使われていたり、だけど英語が無かった理由。

この2人が中途半端に人に言葉を教えたのだろう。

「言葉から教えたつてことは本当に偉大になってるな」

「バラバラだった言語を統一したらしいの。みんな魔法ではない力を見せられて納得したそうなの」

「…大したもんだ」

「でも…」

言いにくそうに、思い出したくないのか少し黙った。

「お願い、リヨウ。カザキを殺してあげてほしいの」

「…知り合いなんだろう？」

「今はもう私の知ってるあの人じゃないの。私の知ってるカザキさんはおそらくあの人の奥底なの」

「よくわからないことを言うな、お前も」

ミリーナが立ち上がる。

椅子を転移させ、帰る準備をする。

「私もゆつくりしてられないの、こんな攻撃を受けた以上」

「これくらいどうってことないんじゃないのか？」

「私が重要視してるのはそこじゃないの。カザキが前線に出てきたことなの」  
「？」

「彼が表に出てくることは無かったの。おそらく時間はあまりないの。だから今の話も大雑把にしたの」

「だけどお前は10年以内って…」

「私もそう思ってた。でも10年以内ならいつ起きてもおかしくないの。だから私は急ぐの。この世界は壊させない」

「…」

「また近いうちに会えると思うの。その時はもう少し楽しい話でもするの」「時間が無いって言ったのはお前だな?」

「じゃ、また」

ミリーナが消えた。

また、リヨウと寝ているサクの2人の空間が戻る。

もともとリヨウは今となってはこの世界の神髄などどうでもよかった。

まあ、疑問は無かったわけではないが。

それでも本当にほしいものは違った。

今ほしいもの、それは単純に力だった。

今回は確実に力不足だった。

グネズトに鍛えられたとおごりがあったのかもしれない。

リヨウは昔漫画を読んでいたことがある。

よくある主人公が戦って仲間を守ったりなんだかんだする類のものだ。

それを読んでいた頃は「よく他人のために命がかけられるよな」と思っていた。

だが、その立場にならなければやはり人間は分からない。

この世界にきて、力を手に入れて、友達が傷ついているところを見て、守らなければ

と思った。

だが、常にその力は足りていない。

ビムの時はマクアドルに。

サツドの時は青龍に。

エジリスの時はミリーナに。

助けられた。

それがなければ自分はおそらく…。

「…リヨウ殿？」

サクが目を覚ましていた。

「サク、大丈夫なのか？」

「これくらい何とも——」

サクが起き上がりうとして激痛が走り顔をしかめる。

命に別条はないが決して軽症ではないのだ。

「無理するな。横になつてろ」

「申し訳ありません。リヨウ殿の前であるにも関わらず…」

「お前は俺の召使じゃない、使い魔だ。いつでも戦えなくちゃ困る。まずはその傷を治せ」

「…はい」

サクがおとなしく寝つ転がる。

サクは竜だ。

竜は残念ながら人の状態ではがをすると竜の状態でもけがをした状態になる。

療養するならば実はどちらでもいいのだが竜と人間、どちらの姿のほうが治療しやすいかと訊いたら周りに人がいれば人間の姿のほうがやりやすい。

「…リヨウ殿、何を悩んでいるのですか？」

「顔に出てるか？」

「他の人から見たらどうかは分かりませんが、少なくとも私には分かります」

「…力がほしい、と思つてな」

そんなことだろうと思つていたのかサクは表情を変えない。

「リヨウ殿は十分頑張っています。貢献していますよ？」

「だが…今回もまた傷ついた」

「…」

「それじゃ、ダメなんだ」

「…リヨウど「ごーんにーちはー！」」

突然、部屋に明るい声が響く。



リヨウもサクもビクツ！と驚く。

入ってきたのは子供に見える人間。

身長が見た感じはランやリンとあまり変わらないように見える。

だが……ここにきて新しいタイプの人物だった。

「あなたがリヨウ君？」

「あ、ああ。そうだが」

「3日後、みんなを招集するってグネズト大佐から連絡だよ！場所はデータを送ってお

いたからそれ見てね」

「は、はい」

「それじゃ、また明日〜！」

部屋を出て行ってしまった。

嵐のように過ぎ去っていった謎の生物。

「……なんだあいつ？」

「さ、さあ？ 私にもさっぱり……」

顔こそいきなりで覚えられなかったがある一つの特徴だけが、頭にこびりついていた。

身長が小さいにも関わらず……、巨乳だった。

悲しい話だがリョウも男。

どうしてもそつちのほうがすぐに頭に残るのだった。

カザキが玉座であろう場所で静かに座っている。

今でもグネズトと対峙できなかったのが残念でならない。

あんな雑魚を無駄に相手には逆に戦闘意欲が増すだけ。

「失礼します」

ジークが入ってきた。

「報告します。ミューズデルの軍が索敵を遂に空の方にも向け始めました」

「…ようやく来たか」

グネズトが待ちくたびれたかのようにあくびをする。

「だが、それでもまだ少しは時間がかかりそうだな」

「はい。早くても1ヶ月はかかるかと」

「ならあれの最終調整も始めないといけないな」

「…まだ終わっていないのですか」

ジークがため息をついた。

カザキが「俺、お前の主君だぞ?」と呟く。

「早く済ませておいてください。もしものことがあつては私たちが負けることも——」

「それはない」

言葉にはなんの抑揚もなかった。

「俺がいる。誰にも負けるわけがない」

「ならば主君が最初から始めればよかったのでは…?」

「それでは面白くないだろう。どんなゲームだつて魔王を倒すため、勇者はレベルアップをしながら時間をかけて進んでいく。最初から魔王が出るのは無しだ」

「はあ…? それでは私はこれで。ポルテスの最終調整はお願いします」

いまいちピンと来ていないのか少し疑問があるような口ぶりをしながらジークがその部屋を出て行った。

近くにある機械をいじりながらカザキが呟いた。

「楽しみだなあ…相棒」

## カポーン…

「…」

カポーンという音が似合う状況にリヨウはなっている。

順応できない俺が悪いのかと思うくらい周りのレックスやクロは普通になっている。隣からは壁を隔てて女子の声が聞こえる。

「…なぜに今温泉？」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

遡ること数時間前。

あの襲撃から3日後、リヨウたちは招集を受けていたので指定された場所に集合していた。

本来ならばしばらく休んでなきやいけないリリアやウリスもNの力のおかげで完全回

復している。

「リリアさん、もう大丈夫なんですか？」

「ええ、ケイトのおかげだね。後でキスでもしてあげようかしら？」

「それ、本当にやめてくださいよ？」

集合したのは訓練場（外）。

他の部隊はようやく落ち着いてきたところで、完全復帰まではもう少し時間が必要だ。

Nの力を使えばいいのだが、ケイトだって永遠に魔法が使えるわけじゃない。

死にかけじゃない奴らは治療してないのだ。

普通に集合した場所を聞けば、完全復帰したグネズトの部隊だけでも訓練を始めると誰もが思う。

だが、リヨウは疑問を抱えていた。

鞆をぶら下げながら。

「なありヨウ」

「なんだ、レックス？」

「なんで訓練するのに着替えが2日分必要なんだ？」

「さあ…」

隣では持ち物を見て「旅行ですか!？」と嬉しそうにしているサクがいる。そんなわけないだろうと思っっているが完全には否定できない。

しかし、グネズトのことだから「これから〇〇森林で1週間サバイバルだ」なんて言っ  
てきそうで怖い。

旅行だとテンションを上げているサクがそんなことを聞けば卒倒してしまうのでは  
ないかと心配だ。

「そういえばリヨウは見たか？謎の少女」

「ああ、巨乳の方だな？」

「何者なんだ、あいつ」

「さあ……」

そして、もう1つ疑問。

この集合をかけてきた幼女だ。

顔なんてもう覚えてないが体に合わず胸がデカかった記憶がある。

そして「また明日」なんてこと言っただよ様な気がするが、結局その後そいつを見て  
ない。

「まあ、大佐に聞けばわか「気を付け!」!？」

突然声が響く。

声がしたほうを向くとグネズトと1人女性が歩いてきていた。  
声からしてきつきの号令は女性のほうだ。

「あれは…」

「クロ、知ってるのか？」

「詳しくは知らないけど、名前はフラットって言ってたような…」

2人が集まっているみんなの前に立つ。

女は刀を腰に下げている。

「…ケイトはどうした？」

「え？」

「ケイトはどうしたと訊いている」

「あいつは衛生班で関係ないんじゃない？」

「…あいつ、呼び忘れたな」

少し頭を抱えたがすぐにライルが行動した。

水のまま地面に染み込みどこかへといなくなる。

「さて、ではまずこいつの紹介だ」

「フラット・C・チエレバドルよ」

「それだけか？」

「…その女と小さい男は知ってるわね、3日前の出来事」

目線のみをクロとマートに合わせる。

「は、はい」

「相手の外見を他にも教えておいて。もし、あいつを傷つけたら、戦場だろうが、仲間だろうが、作戦に不可欠な人材だろうが殺す。あれは私の獲物」

「以上です」と小さい声で言い、グネズトの左後ろに下がる。

ものすごい殺気を放っていた。

まだ対象には入っていないはずなのに喉に刀を突きつけられているような気がした。

「…他はまだ来てな「すいませーん！」」

入り口から1人が走ってきている。

もう1人いるのだがそちらは歩いているようだ。

ここからではまだ顔は確認できないのだが…

「ヒッ！」

「どうしたの、リリア」

「…なんか寒気がしたような」

走ってきている方の顔が見え始めた。

リヨウはその顔を見て驚く。



「マグタラン先輩？」

近くまで来て間違いないと理解する。

「遅れてすいません。自己紹介ですよね？」

「そうだ」

「初めはしてだな、お前ら。マグタラン・アッグシーバだ。リヨウト、リリアは久しぶりか」

雰囲気はどこことなく変わっているような気がするが間違いないらしい。

1年生の合宿の時にお世話になった先輩だ。

彼はその時5年生だったので会う機会がその後は無くなってしまったがこうして再会できた。

雰囲気が変わってるといったが、好かれそうな人柄は相変わらずだ。

「いや、今年は9人だっけか？大漁だな。グネズト大佐にしてはやけに多いですね」

「いろいろあったんだ。そこは触れるな。それよりなんであいつは歩いてるんだ？」

「いや、なんか「あいつの前では無様な姿は見せられない」とか」

「…まあ、もう1人いるし構わないが」

「クレア、さっさとしなさい。大佐を待たせないで」

それを聞いてリリアが卒倒しそうになる。

わかっていたことなのでマーシャとフィリアが受け止める。

「寒気がした」といったときから何となく予想できていた。

ようやくクレアがみんなの目の前に来る。

「…大体は知った顔だな。クレア・ランパードだ」

魔法側の生徒だった3人は知らないが、科学側の生徒だったリリア以外の4人は全員リリアに同情した。

「リリア、体調が悪そうだな？俺が介抱「めっちゃ元気です！」…そうか」

クレアが少し残念そうな顔をする。

未だにリリアに執着するとは正直誰もが驚きだった。

基本的超人でもブスでもない普通のリリアにそこまで執着している理由は不明だった。

「…あいつはまだか？」

「すぐに来ると思っていたのですが…」

「なんか言ってるな？」

「あの幼女を待ってるんじゃないのか？」

「つまりあいつはこの部隊の1人だと？」

「…人は見かけによらねえからな」

「そうそう、いいこと言うー！」

「あれだけ戦場を見てきたんだ。これくらい…っつてうお!？」

いつの間にか例の少女が立っていた。

驚いて少し退くと体に合わない大きな胸が目に入る。

入り口はリヨウたちから見て前のほうにあるはずなのに後ろから会話に入ってきている。

「…どこにいた？」

「あそこ」

指さした方向の地面がキレイに空いている。

グネズトが気づかなかったということは勝手に作った仕掛けなのだろう。

グネズトはしかめっ面をしたがそれだけだった。

「まあ、いい。とりあえず自己紹介をしろ」

「はーいー！」

ヒヨッコヒヨッコと歩き、リヨウたちの前に立つ。

「初めまして、イプシン・チエレバドルっています。よろしくねー」

「…チエレバドル？」

リヨウがみんなの疑問を代弁する。

「うん、フラちゃん（フラット）と私は姉妹です」

全員「…（唾然）」

「私はCの力が受け継がれなかったのよね。残念」

「…どちらが姉ですか？」

「私です」

身長で見れば…いや、性格で見ても圧倒的にフラットの方が年上。

世の中は分からないものだなと改めて思う。

「…リョウ、あまりこいつをなめないほうがいいぞ」

「大佐の趣味じゃないんですか？」

「こいつはお前の前の逸材。つまりお前より8年、年上で、1年生で2段階目になった先

輩だ」

「彼女が？」

「そして、数少ない7段階目に到達した者の1人だ」

イプシンがエツヘンと胸を張る。

「あんまりなめてかかるとポコポコにしちゃうからよろしくね」

「は、はい…」

驚きが多すぎて何を言ったらいいかわからない。

リヨウ以外はシューレスを除いて開いた口が塞がらない。

7段階目に到達した者は数が少ない。

グネストの部隊は表向きは軍隊の精鋭部隊だが、裏から見ると違う。

リヨウ自身も軍に入って初めて知ったのだが、グネストよりも上の階級の人が自分自身の部隊を裏で作っているのだ。

大半のネーム持ちと7段階目はそこに持つていかれる。

そして、その部隊は裏で活動するためよほどのことが無い限り表での紛争には手を出さない。

だから、お目にかかることはまずないのだ。

「さて、自己紹介も済んだことだし…大佐、いいよね？」

「ああ、好きにしろ」

それを聞くとイプシンが一番端にいたシューレスの前に来る。

「…シューー！」

突然言うのでみんなビクツとする。

しかし、シューレスは顔をしかめたただけだ。

「どういう意味ですか？」

「これからあなたをシューって呼ぶから！」

あだ名をつけているようだ。

シユーは以前から呼ばれているので、正直みんな違和感が無い。使っているのは基本ケイトのみなのだが。

隣のクリティウス姉妹のもとに行く。

「…マトちゃんとウリちゃん!」

外見よりもどうにかして名前を使いたいらしい。

クロ、レックス、リョウの前に来る。

「クロでしょ、…ルー君に…後輩!」

「なんだ、ルーって?」

「俺だけ後輩?!」

使い魔に付ける気は無いようだ。

まあ、使い魔の名前は簡単だし必要ないのだろう。

無視してマーシャ、リリア、フィリアのもとに行く。

「…赤毛、……………」

リリアの前で止まる。

リリア・アリアでは付けづらいのだろう。

マーシャは赤毛だが。

「…リアちゃん！」

なんかひねりのないあだ名が返ってきた。

そしてフィリアに笑顔で言う。

「マナ板！」

「ガハッ!？」

フィリアに対する名前はあらかじめ決めていたのか、考える時間は無かった。

フィリアが現実を自分よりも小さい奴（年上）に突き付けられ地面に倒れる。

「フィリアー！」

「大丈夫!？」

「…もぅいいか？」

「うん、後はいいよ」

「よし、じゃお前からこれから移動を開始する。転移装置乗ったらすぐだから迷うことは

無いはずだ。ついてこい」

|||||

で、何かと思いついてきてみればここについてしまった。  
いい湯だ、とは思う。

ありがたいとも思う。

でもこの時期にここに来るのはどう考えてもおかしいと思う。

しかも連れてきたグネズト本人は

「…とりあえず酒でもどうだ？」

「僕は酒には強いですよ？ 酔ったところで勧誘なんて考えないことです」

「おもしろい」

途中参加したケイトの勧誘をしている。

ライルに休んでいるところを無理やり引っ張られてきたのだ。

グネズトは最初こそ、まったく興味がなかったもののリヨウとの戦いを見た後せひ自

分の部隊にほしいと勧誘をしていた。

まあ、強力な自爆魔法が無制限に使えるのだから強いのは当然。

ケイトは痛いのは嫌だとずっと断り続けている。

「リヨウ、どうしたそんな顔して？」

マグタランが話しかけてきた。



「いや…、何でこんなことやってんのかなと」

「そう言うなよ。これはイプシンの発案だからな」

「あの幼女の？」

「大佐がこんなの考え付くわけないだろ？これをやらないとあの人はずっと地面に大字になって駄々をこねるんだからな」

「…想像できる自分が怖い」

リヨウたちは今年で24になる。

つまりイプシンは体つきが子供とはいええ30を過ぎているのだ。

怖い以外の何物でもない。

「そういえば先輩、この部隊の人員はこれで全員ですか？」

「そうだが？」

「軍隊の部隊と言うには少なくないですか？」

あまり触れてほしくない話題だったのか、マクアドルの顔から表情が消える。

一度水をすくって顔を濡らしてから言った。

「…死んだんだ」

「え？」

「2年前の帝国の侵攻、覚えてるだろ？」

「はい」

「この部隊も50人くらいいたんだけどな、その時の生き残りは俺とイプシン、フラットの3人だった。同期の仲間も死んじまったよ」

「…すみません」

「いや、謝る必要はないさ。軍に入ってるんだから多少はあいつらも覚悟があつたはずだ。結果押し返せし、悔やむことじゃない」

「国と国との争いのセオリーなどリヨウはまだ知らないが、ミューズデルは出し惜しみはしないらしい。」

グネズトの部隊を前線に押し出したのだ。

結果、途中からグネズトは参戦することになった。

指揮官だったグネズトは最初からは参加しなかったのだ。

「ただ、大佐は厳しくてなあ。去年はクレアしかとらなかつた。ただでさえ軍に志望する人が減ってるっていうのにまだに実力重視だからな」

実はクレアもマクアドルの頼みだから入れたのであって、それがなければ落とされていた。

クレアが志望した理由はまあ、読者の方は想像がつかだろう。

「さて、折角の機会だ。大佐にいろいろ聞いてくればいいじゃないか。俺と話すより濃

い内容が話せると思うぞ」

「と、いいますと?」

「マクアドル先生との関係とか、カザキについてとか、ミリーナの正体とか?」

「…知ってるんですか?」

「マクアドル先生からあらかた聞いてるよ。わざわざ隠す必要は無いからな」

「…驚かなかったですか?」

「驚くにきまつてるだろ。信じられなかったが、冗談を言わない大佐もそう言ったから  
…」

ふとマグタランが後ろを向く。

脱衣所がある方向だ。

「…どうしました?」

「貸し切りのはずなんだが…誰かいるな」

確かに脱衣所の方を見ると人影がある。

…。

見間違いかもしれないが髪が長い。

「…これは運がいいのか?」

「先輩、ただ髪が長いだけかもしれませんよ。男子で」

「夢が無い」と言うなよ。ほら今わかるぜ」

そう言われると女性に見えてくる。

なんかそう考えるとエロいなと思う。

服を脱ぎ終わったのか、ガラスのせいでよくわからないがこちらに向かって歩いてきているのが分かる。

思わずゴクツと唾をのむ。

「…」

他は気づいていないらしく、リヨウとマグタランの2人のみに緊張が走る。

脱衣所の人間が手を扉にかけたのが分かる。

そして

「!!」

## カポーン…～男湯での騒動～

誰でも期待する。

リヨウだつてあまり言いたくはないが期待した。

だつて髪長かつたもん。

しかも結構。

生憎それ以外分からなかつたが小さい子とかならそんなに長くして個を出したりはしない。

そう思った。

だが、リヨウはどうやら地球の感性が6年経つた今でも抜けきつていないらしい。

それを思い知らされた。

この幼女によつて。

「括目せよ、男子共なの！」

バンツ！と大きな音を立て、扉を開くミリーナ。

その音に反応してみんな、一瞬ミリーナを見る。

男全員「…」

すぐに目を背ける。

別に「女性の体を見てしまった」という反応ではない。

「つまらないものだから見ないことにした」の反応だった。

マグタランとリヨウに至っては期待がデカすぎたのかため息をつく。

「ちよ、何この反応!?!そこ、ため息つかないでほしいの!」

「いや、だつてさ…」

「私の裸が見れてうれしくは思わないの?」

「嬉しく思ったときは俺の最後だ」

相手は700年以上生きているとはいえ、5、6歳の外見をしているのだ。

そんなのに欲情できるほど、リヨウは腐っていなかった。

というか、年だけを聞いても外見だけを見てもちよつと無理がある。

「折角女に縁がないかわいそうな男どもだと思つて一肌脱いであげたのに…」

「余計なお世話だ。だいたい一肌脱ぐつてならもうちよつと成長させて来い」

リヨウはミリーナの対応をしているが気づけばマグタランは遠くにいた。

以前の嫌なことからは足音を立てず逃げるといふ癖は変わっていないらしい。

レックスとクロ、スノーはミリーナという存在は認識しているが気にしない。

スノーは使い魔だが、竜であり性別が男とはつきりしているのでこっちにいる。

ケイトはまだ一人でお酒を飲んでいて興味なし。

グネズトは少し不機嫌そう。

シューレスに至っては存在そのものを認識する気がないのが態度でわかる。

リヨウもこれを見てみると対応している自分が馬鹿らしくなってくる。

「大佐、少しお話し——」

「ちよつと、私を放置しないでほしいの！」

「なんで？ 入りたきや入ってるよ。別に気にしないから」

「ぐぬぬぬ…、かくなる上は…！」

ミリーナがお湯に浸かっているリヨウの近くに行きしやべる。

「お兄ちゃん、大好き！」

ぼつちり上目遣い。

外見を生かした完璧な攻撃を始める。

「ねえ、お兄ちゃん。私一人じゃ体洗えないの。洗ってほしいの、隅々まで♪」

満面の笑みでリヨウにしやべる。

しかし、内面は黒い。

「ふ、これを言われて落ちない男なんていないの。多少、知識が足りないかもしれないけどリヨウに妹がいなかったのはすでに調査済み。この妹タイプのキャラからの甘え

たお願いを断れるはずないの。最後に仕掛けた「隅々まで♪」が決定打な——」

「うん、なら練習も含めて頑張れ」

「なんでなの!?!」

予想外の反応にミリーナが嘆きの声を上げる。

リヨウは特にさっきの行動をなんとも思っていないようだ。

「妹キャラのかわいい私が洗ってって言ってるの!なんでなんとも思わないの!」

「黙れ700歳」

「そこは言わないでほしいの!」

「お前が巨乳のスレンダーなお姉さんだったら俺も落ちるかもしれないけど、胸ない幼女じゃ無理だよ」

あつち行けという感じで手を振るリヨウ。

しかし、ミリーナにだって意地があった。

こんなところで退くわけにはいかない。

「なら…:」

「ん?」

「なら私は今まで読んだエロ同人の知識を豊富に使うの!」

「その外見でなんでもん読んでるんだ、お前!?!」



「黙るのー！」

「待て、この作品のタグにR—18はついてない！」

「お兄ちゃん、お兄ちゃんの——」

卑猥な言葉出ようとした瞬間、ミリーナの頭が掴まれた。

突然の出来事にミリーナの口も止まる。

「ミリーナ、俺の前で何言おうとしてる？」

「…（汗）」

グネズトがミリーナの頭をすごい力で掴んでいる。

ミリーナの顔は「やってしまった…」と言っていた。

グネズトが片手でミリーナを持ち上げる。

「グ、グネズトさん。私、子供なの。おしおきは軽いものに…」

「安心しろ。前ほどひどいことは——」

そう言いながらミリーナを湯に戻す。

そこでミリーナはホツとしたのだがそれは間違いだった。

「しない」

そう言うと思いつきミリーナを上空に投げた。

ミリーナの悲鳴が聞こえる。

やがてミリーナは宙を放物線を描きながら女子の方に落ちて行き見えなくなった。その後少し女子の方が騒がしくなったが気にしない。

「…大佐、あれ普通の人なら死んでますよ?」

「問題ない。昔、腕を2本ともちぎってやったがピンピンしてた」

「へ、へえ…」

この時リヨウは大差を怒らせてはならないと理解した。

おそらく、卑猥な言葉がアウトなのだろう。

聞いていてイラつくのか、吐き気がするのかわからないがこれを訊いても自分も腕を持つていかれそうな気がしたので訊かないことにした。

「で、なんだ? 話があるのだろう?」

「はい、マクアドル先生や、カザキ、ミリーナ、大佐についてなんですけど…」

「…そうだな。俺が知ってることだけでも話すか。の、前に」

グネストが自分の腕をいじくる。

するときれいに腕が外れた。

切れたのではなく、外れたのだ。

「俺が体の大半を機械にしていたのは?」

「何となく。俺の攻撃も紙一重でしたし、銃弾も見えてるようでしたから」

それを確認すると腕をくつつける。

特にくつついたような音はしなかったがグネズトは少し腕を動かすとOKだと思つたのか温泉のなかに座り込む。

「とりあえず、俺がこの世界に来てからについて話そう。質問は挟むな、すべて話し終わつた後聞いてやる」

俺がここに来たのは、4、500年前だ。

俺を連れてきたのはミリーナではなく、カザキだ。

だから俺は最初は帝国にいた。

最初こそ戸惑つたが、この世界は悪くない。

今はほとんど覚えてないが地球での生活は俺にとつて苦だつたからな。

だから、俺はここに俺を連れてきたカザキに感謝し付き従つた。

その頃は争いなんてなかったからミリーナなんて知らなかった。

だが、1000年ほど前からカザキが準備を終えたのか行動を初めてな、俺はそれに疑問を持った。

そんな時、だいたい40年ほど前だ。

マクアドルが、ミリーナに飛ばされてきた。

運悪く帝国内に突然現れてな、状況も掴めないマクアドルを俺は殺しかけた。

その時にミリーナとマクアドルを知った。

さらにその時、ミリーナからいろいろ事実を教えられてな。

戦争なんてふざけてやがるっていうのが俺だったからしばらく迷った。

そして30年ほど前、俺は考えるために1人で帝国を抜け出し結果こうなった。

「質問は？」

「この世界で地球を知っている人は説明がおおざっぱですね…」

「ないのか？」

「カザキは地球からこちらへ人を飛ばしてこれる技術を持つてるんですか？」

その問いにグネズトは首を横に振る。

「いや、あったにはあったが俺を飛ばしてきた時に壊れたそうさ。実験だったらいいが成功したものの、装置自体が破損。最初は直そうとしていたが、そういうわけか中断した」

別に地球から来た人間は特別にはならない。

もちろん中には特別になる人もいると思う。

だが、60億人以上の中からそれを探し出すのはおそらく不可能だ。

予想ではあるがこれで間違いないと思う。

「他にほっ…」

「…どうしてそんな体になろうと?」

それを聞いて目を丸くするグネズト。

リヨウにもなんとなく答えは分かるが自分自身はあまり興味がない。

不死不老というのには。

「その時は魅力的に見えた。誰だつて不死不老には興味があるだろう?」

「俺はあまりほしいとは思いません。そんな力は」

「お前のような奴は変わり者と言われるぞ。この体にされた後知つたが力も手に入つた。うまい話だろ」

「その点では、まあ…」

力はほしい。

だが、グネズトを見ていて思う。

あまりいいものではないのではないのかと。

ただでさえ、あまりしたくないことを経験者が嫌な顔をしていたらなおのことやりたくなくなる。

「まあ、俺はお前をこんな体にするつもりはない。だからお前は自分の力を磨け。できる限り早くな」

「はい」

するとグネズトがふとリヨウがいる方向とは違う方を見る。  
そこにいるのはケイト。

あれからお酒を飲んでいるが酔っている感じは…しない。

「…本当に強いんだな。リヨウ、何とかしてあいつをこちらに引きずりこめ」  
「さつきまで真剣な話してたのに」

「今も十分真剣だ。あいつは戦力になる。リリアがいる以上、自分はいらないとか言っていたがそんなことはない」

「リリアがいる以上？」

ケイトは回復を得意とする（今回は自爆魔法の方だろうが）。

対してリリアは銃を使う。

比べるにしては無理があるのだ。

何を基準にしているのか分からない。

「攻撃力だ、簡単に言えばな」

「？」

「リリアの傷は見ただろう？自分の銃弾で負った傷だ。傍から見ればただの馬鹿で終わるが、あれは跳弾であるにも関わらずSバリアをいともたやすく貫いたという事実を残していた」

Sバリアは学校に入学した時点から渡され、強度も少しずつ学年が上がるにつれ変わっていく。

軍隊で、しかも実践となれば最大出力となる。

それをいともたやすく貫いたとなると攻撃力は計り知れない。

ケイトの自爆魔法では最大出力のSバリアをそこまでいともたやすく壊すのは無理があるらしい。

ケイトは広範囲に攻撃、に対してリリアは範囲こそ狭いがそれ以上の破壊力を持っている。

だからケイトは自分はいらないと言った。

分かり切ってはいるがそれは建前で本当に痛いのが嫌なだけなのだが。

「ケイト自身、自分の自爆魔法が負けたことには驚いていた。その点で見ればリリアで十分かもしれないが…」

グネズトの部隊は弱り切っている。

個々の実力こそ本物だが、数で押されれば負ける。

そんな時に人がほしいのは当たり前だし、使うのは広範囲を対象にする攻撃魔法。

ほしい気持ちは分からなくもない。

『信乃さん、そろそろ時間です』

「そうか。なら上がるとしよう」

時計のままくつついてきていたライルが時間を知らせる。

グネズトが立ち上がり、脱衣所に足を向ける。

「リヨウ、他の奴らにも知らせておけ。15分以内には上がれと」

「大佐は早いですね？」

「ケイトの酒のアルコール濃度を上げておく」

「酒以外の方法は無いんですか……」

それには答えずグネズトはその場を後にした。

話す相手がいなくなると、突然静かに感じる。

「なあ、リヨウ」

グネズトがいなくなったからか、クロとレックスが近寄ってくる。

この2人を見るとさつきまでの緊張が解けるような気がする。

やはり友達とは気楽に接せるからなのだろう。

そういえばクロは男なんだよなと初めて確信できたような気がする。

「大佐が15分以内には上がって食事場に向かえって言ってたぞ？」

「そうか。それよりリヨウ、お前ってミイヤと寝たことあるか？」

「……はあ？何言ってるんだお前？あるわけないだろ」



「ほら、僕が言った通りじゃん。リヨウは遊ばないんだよ」

「つまり童貞か？」

「…」

なんでそんな話題になったのかと質問したいところだが、男子だけ集まればそんな話題になってもおかしくない。

下ネタ連発していないだけましだろう。

「なんであんな美人と何もないんだ？」

「俺はそういうのはあまり好きじゃないんだよ」

「本当か？揺れたりしなかったか、その決意的なもの」

「…少しは」

自分にあそこまで気を持ってくれた人はおそらくいない。

そんな人が何度も迫ってくればリヨウも多少は揺らぐ。

何とか耐えたが。

「折角の機会をもつたいないな、お前は」

「うるさいな。お前だって童貞だろ？」

「いや、20過ぎてそんなわけないだろ」

「…クロは？」

「僕は女性と付き合ったことなんてないよ」

「一応スノーは？」

「こんな時期に使い魔に恋愛をしている時間はありませんよ」

ちよどどシユールスが上がるうとしていたので訊いてみる。

「シユールス、お前は？」

「今まで寝た女は17人」

「どこの漫画の世界の人間だよ。ケイトは？」

「俺が女子と付き合うわけないだろお？」

「…少し酔い始めたな」

少し顔が赤くなり口調が変わりつつあるケイト。

グネストの策略通りにならないことを一応願っておく。

「先輩は…彼女いそうですね」

「1年前に結婚してるぞ」

「そうなんですか？おめでとうございます」

なんかそう言われると少し焦る。

結婚したくてもできない人ってこういう気持ちなのかとこの年になり、馬鹿にしてい

た一部の大人の気持ちを理解する。

でもここで疑問ができる。

仮にこの世界で彼女ができた場合、俺はどうするべきなのかと。

未だに地球に帰るかどうかは悩んでいる。

この年で帰るといふならすぐに突っぱねるのだが元の年齢で、元の場所。

この世界もいいところだが、リヨウはこの世界に来たおかげで地球の良さも知った。

だから帰りたいたいと思うのだ。

「ケイト、酒はもうやめて上がれ。大佐の思惑通りになるぞ」

「…シユウがそう言うなら仕方ないね」

しかし、この疑問に答えを出してもカザキに負ければおしまい。

リヨウに後はない。

「俺たちも上がるか」

「そうだね。リヨウも行こう」

「…ああ」

リヨウに時間はない。

でも、彼が今の疑問の答えを出すのはおそらく最後の最後だろう。

男全員がその場を去るとそこには誰もいなくなり、温泉の湧き出る音のみが響いていた。

## カポーン……女湯での茶番

「いや、温泉ってこんなにいいもんだったのね。気持ちいいし、お金は入るし最高！」  
「ここでカメラ構えたら写真の前にあなたを裸で吊るすわよ？」

「ば……ばれてる、だど!？」

「いや、わかりますよ。今の発言聞けば」

リヨウたちがミリーナに落胆していたころ隣の風呂場ではのほほん?と女子たちが湯に浸かっていた。

こちらは男子の方よりも数が多く、特にランとリンが楽しそうに泳いだりしている。そこに交じってイプシンも泳いでいるのは誰も触れないことにしている。

「それに私の体なんて撮っても売れませんよ?」

「大丈夫よ! 貧乳にだって需要はあるわ!」

「……そこは触れないでほしいです。っていうかそつちじゃなくてこの傷ですよ」

「傷?」

フィリアがおなかの方を指す。

確かに今までの戦いで負った傷が残っているのが見える。

腕の方や、足にも見える。

これは戦いに手を染めている者の宿命だ。

どうしようもないといえはそうなってしまうが、女子からすれば忌々しき事態なのだ。

「そんなのまだ少ないほうよ。私なんて1年生の時の傷と小さい頃のがくつきりとしてるわよ」

マーシヤの脇腹あたりと胸に刺された跡が見える。

どちらも背中にも似たような跡があり、貫かれたという事実を物語っている。

もちろんそれだけではなく擦り傷もところどころ見当たる。

「誰でもそうなっちゃうのよ」

「それは分かっているつもりですけど…2人だつて悩んではないんですか？」

「腕や足のはオシヤレついでの服で隠すのよ」

「私は特に傷なんてないけど？」

「え？」

リリアの体を2人が見る。

自分たちよりも大きい胸に少し嫉妬心を覚えるが今はそれはおいておく。体を足のつま先から頭まで見るが…確かに見当たらぬ。

気持ち悪いくらいきれいだ。

先の戦いで負った大きな腕の傷もあと1つ残ってない。

「リ、リリアさん！ いったい何したらそうなるんですか!？」

「自分だけずるいわよ!」

「べ、別に特別なことなんてしてないわよ。1つのことを除いて」

「それは？」

「ケイトが治療してくれた」

「……」

「ああ……なるほど」と、2人が思う。

腕の治療ついでにやってくれたのだろう。

しかし、すぐにリリアの頭に疑問が浮かぶ。

「治療、どうやったんですか？」

普通に考えれば治療は傷口を見て行う。

ならばケイトはリリアの裸を見たのではないか？

「原理は知らないけど、体のどこかを触って集中すれば体の感じが分かるみたいよ」

「裸が見えるってことですか!？」

「いや、形だけとか言ってたと思うけど……」

それを聞いて安心するフィリア。

別リリアアの裸をケイトが見たからって、何か起きるわけじゃない。

だが、好きな相手が女友達の裸を見るといのは聞いててあまり気持ちのいいものではない。

「フィリア、ちょうどいいじゃない。治してもらえば？」

「マーシャさんはいいんですか？」

「私はこの傷は消したくないの。これも私が生きてきた証だから…」

1つはあの日の出来事を忘れないため。

もう1つはリヨウが来てくれたあの時の気持ちを忘れないため。

ほかの傷は消してもらいたいような気もするが。

「ならフィリア、これはいい機会よ！」

「何がです？」

フィリアが疑問を持つ中、リリアアが手を合わせて笑顔になる。

「ケイトに傷、治療してもらったことないでしょ？」

「…かなり前に一度あるみたいです」

「かなり前なんていいのよ。まずケイトに体の残った傷を消してほしいと頼みます」

「そうですかね？」

「ここで、よ！最初に上半身の傷からって言って服を脱ぐなり、まくり上げたりするのよ！」

フィリアは湯の中で座っているはずなのにズルツとこける。

湯の中から頭まで濡れた顔を真つ赤にしたフィリアが勢いよく起きてきた。

「な、なななに言ってるんですか!?!」

「そこでケイトはそんなことしないでいいと思うのよね。まあ、そのまま始めてもいいんだけど。どちらにしても胸には触らないはず」

「当たり前です！」

「そこであんたがケイトの手握って胸の方に持つていくのよ！いくらケイトといえども絶対襲うわね。そうなたらあととは全部あっちのせいよ！」

「あんた、たまにはいいこと言うわね？」

「どこがいいんですか!?!絶対無理です！」

「そうだよ、無理無理！」

いつの間にか近づいてきていたイプシン。

無理と言いながら勢いよく手を湯から出す。

水しぶきが上がり3人が目を一瞬つぶる。

勢いよく出てきた手はフィリアの胸を触っていた。



フィリアが顔を真っ赤にして何か言おうとしているが、パクパクと動くだけ。声は少しも出ていない。

「イプシンさん、どうしてそう思うんですか？」

「敬語なんて要らないよ。理由は簡単、まな板だから」  
フィリアが再び現実を突きつけられ、横に倒れる。

本日2度目の外見少女の発言。

だが、胸がデカく何も言い返せない。

水しぶきを上げながらフィリアが沈む。

マーシャとリリアが毎度のことのように慣れた手つきでとりあえず息ができる状態にする。

「まな板触らせても男は誘えないよ」

「ならどうすれば…!」

「下半身からいっちゃえば？」

「それよ!」

「いい加減にしてください!イプシンさんも!」

顔を真っ赤にしたまま怒鳴るフィリア。

顔の色はすでにのぼせているの領域を超えているように見える。

さすがに怒鳴ったので周りのただ浸かっていたフラットやサクが驚く。

その時フラットがサクの耳を必要に触っていたのは誰もまだ知らなかった。

「友達がこんな意見を出してるっていうのにな…。フィリア、いつ告白するのよ?」

「リリアさん、それは意見を出してるとは言いません! いじっている」「キヤアアアア  
!」?

突然聞こえてきた悲鳴にそこにいる全員が疑問符を浮かべる。

聞こえてくるのは頭上から。

全員が上を向いた。

刹那、フィリアたちのすぐ近くに何か飛んできた。

ドボン! と大きな水しぶきを上げて何か水の中に沈む。

全員がこんな時だから敵が来たのかと、構える。

ただタオルを体に巻きながら。

まともに臨戦態勢に入っているのはサクぐらいだ。

ただ武器は洗面器だ。

この状態ではドールの展開はできない。

いや、できるのだがやりたくない。

裸にドールを装備ってどんだけマニアックなんだよと思う。

リリアのように体全部を覆えばいいのだが、リリア以外にそんなドールを持ち合わせている人はいない。

しかし、すぐに全員が警戒を解いた。

別に砂煙が上がっていたわけではない。

すぐに視界良好になり正体が発覚したのだ。

5、6歳の外見をした長い髪の幼女。

それが水の中から起き上がった。

「…どっかで見たとあるわね」

「ミリーナちゃん？」

周囲を確認したかと思うとフィリアの方に歩いてきた。

目の周りが赤い。

「フィリアさん！」

泣きながら抱き着く。

頭には大きなたんこぶができています。

あの高さから落ちてくれば普通、頭が割れたりするはずなのだがそんな怪我は見当たらない。

ずいぶん丈夫な機械らしい。

しかし、ミリーナの体の大半は機械でできているのにどうしてたんこぶができるの  
だろう。

「どうしたの？」

「グネズトが、リヨウが、男子共があ……！」

ミリーナが鼻をすすりながら事情を話す。

しかし、あの状況のことを話しても誰もミリーナが悪くないと言える人なんてい  
なかった。

エロ同人という単語が出てきた時には、マーシャとリリアが仲良く滑った。

「……えくつと、ミリーナちゃん？」

「フィリア、かばえないわよ。どうやっても」

「こいつが悪いわ。私と同じ立場だったら大佐と同じことするわ」

「えくつと……、えくつ……」

そういわれても小さい子が抱き着いてきているのだ。

しかも目の周りを真っ赤にしながら。

一方的に悪いと言うのはなんか気が引ける。

だが、何も言えないのも事実。

「……フィリアさん」

「え？なに？」

頭をなでながら答える。

ミリーナが頭をするつけてくる。

しばらくして怪訝な顔をしながらフィリアに尋ねた。

「なんで胸がないの？」

1日でここまで胸のことを言われたのは初めてだった。

しかも幼女に。

それを聞いた瞬間、フィリアは文字通り真っ白になった。

倒れることなく、立ったままの態勢で。

「ああ…、とうとう止まったわね」

「今日だけで何回言われたのかしら？」

「それも知りたいところだけど…」

マーシヤが辺りを見渡す。

「どうしたの？」

「クレア先輩、突っかかってこないわね」

「触れないでほしかったわ」

「嵐の前の静けさってやつかしら？」

「部屋の戻れば違うから大丈夫よ！」

親指を立てて笑顔を作るリリア。

温泉にゆつくりは入れないだろうと覚悟していたのだが、クレアは少し離れたところで湯に浸かりながら眠っている。

余談だが、実は部屋に戻るとクレアの手が回っていてリリアにとって悲劇が起きるということを彼女はまだ知らない。

「あなたたち、そろそろ時間よ」

クレアの方を見ていると、反対の方からフラットがやってきた。

顔はどこことなく満足気のように見える。

初めて会った時に放っていた殺気など感じ取れなかった。

「20分以内に上がって、食事処まで来て」

「まだ20分もあるんですか？」

「女なんだから身だしなみ整えるのに時間がかかるのよ。すぐ終わるならまだ入ってても構わないわ」

「はい、わかりました」

それを聞くと風呂を上がっていった。

何度見てもフラットと、イプシンが姉妹には見えてこない。

女性の中では背が高いほうで、性格がしっかり者のフラット。

背が低く、胸がデカイ自由気まま？なイプシン。

面白い上司たちだなと思わずにはいられない。

「フラちゃん、待ってー！じゃ、みんな。また後でね」

母親についていく子供の如く、パタパタと急いでその場を後にしたイプシン。

「私たちも上がる？」

「そうね。フィリア、そろそろ上がるわよ？」

「…」

「ケイトの前で身だしなみ台無しでいいの？」

「さあ、上がりましょう！」

「…ここまで一途なのも考え物かもしれないわね。先輩、そろそろ上がったほうがいいですよ？」

寝ているクレアに呼びかけるとすぐに目を開いた。

体を伸ばした後、手で「分かった」と合図する。

サクヤラン、リンもその呼びかけで上がるらしいことに気づきみんなで上がり始める。

「あれ、ミリーナちゃん」

「なんなの？」

「着替え、どこに置いてあるんですか？」

「…」

ミリーナが男湯の脱衣所があるであろう方向を見る。

男湯から女湯に来たのだ。

着替えは男湯の脱衣所にあるのが当然。

「私が蹴り飛ばせばたぶん男湯に戻るわよ？」

「サラツと恐ろしいこと言わないでほしいの…。いいの、私は一回帰るの」

「食事には参加しないんですか？」

「すぐ戻るの。じゃ、また後でなの」

目の前から一瞬で消えた。

いつ見てもすごいものだ、もともとこの世界出身である全員が思う。

転移装置でさえ、ミューズデルの技術では小型化すらできていない。

にもかかわらず、何もないところで何食わぬ顔で瞬間移動するのだ。

ミリーナがいなくなったのを確認して全員が脱衣所に入る。

着替えは温泉に来たので浴衣だ。

着替えているフィリアをリリアが見て言った。



「ねえフィリア」

「なんです？」

「浴衣を胸がギリギリ見えない感じで着れば「いい加減にしてください！」」

## 体は口リ、頭脳は女性

「ほら、みんな！次はどうしたの？」

「…イプシンさん、マジで休憩ください」

「えく…、じゃあ1分」

「10分は欲しいです」

「みんな体力ないなあ」

イプシンがドールを展開してリョウたちの相手をしている。

今は訓練中。

あの楽しかった温泉旅行の時とは打って変わって地獄の特訓をしている。

時間は無制限。

イプシンを4人で退ける。

これが今、やっている特訓だ。

イプシンのドールは7段階目。

対して戦っていたのはレックス、マーシヤ、クロ、リョウだ。

全員がへばって地面でぐったりしている。

ダメージによるものではなく、疲労によるものだ。

一番体力があるリヨウでさえ、地面に四つん這いになっている。

イプシンは多少汗をかいているものの、顔は「まだまだこれから」と言っていた。

「大佐が訓練つけてくれてたんじゃないの？」

「……までは…、さすがに…」

イプシンのドールに見た感じではこれといった特徴はない。

本人は「本気は出さないから」と言っていたので、隠しているのは間違いない。

一方リヨウたちは武器や特殊な攻撃を使うことを除けば本気で来てもいいと言われている。

クロもあまり使わないドールを使った。

いくらみんなのドールがイプシンに劣るとはいえ、これだけの数の差があればいける

かと思ったが全然歯が立たなかった。

あらゆる点で劣っているのは百も承知だった。

しかし、それを踏まえてもあり得ないほど攻撃が当たらなかつたのだ。

経験の差というやつなのか、あるいは天性の才能かイプシンの動きは速さだけではな

かった。

攻撃は当てることができず、イプシンも笑いながら逃げに徹した。

「ここまでくるとなんか泣きたくなる。」

「ここまで圧倒的なら、人増やしてもいいじゃないですか」

「あとの人はだめなの。リアちゃんは銃専門だし、シューやウリちゃんは魔法使うでしょ。まな板のドールは打撃のみだと戦力にならないから」

もつともらしい理由を並べられるとなにも言えない。

今はあくまで体力を作るための訓練中だ。

打撃が得意でないのなら違う方法で体力をつけるのがいい。

「さっ、10分経ったよ。みんな立った立った！」

まだ完全には取れていない疲れを抱えながらリヨウたちは訓練に励む。

「ハア…」

「お疲れね？」

「みたいですね」

女子3人が集まって、自由時間を過ごしている。

ただ、マーシヤはお疲れのようだ。

「あの幼女、どれだけ体力あるのよ…。あんなの人のもつ体力の限界を遥かに超えてるわよ」

「そんなに?」

「異常よ。大して体は筋肉質には見えなかったはずだけど…」

「大変ですね」

「あんなたちは疲れないの?」

ケロツとした2人を見て尋ねる。

マーシヤだけかなり疲れている。

2人はさほどには見えない。

不公平ではないか。

「私はドールがないと戦闘能力ほとんど0なので体力というよりは戦い方の訓練ですね」

「私的当てかしら。大佐って結構優しいわよね♪」

「…理不尽だわ」

マーシヤが顔を机に伏せる。

納得できる理由とはいえ、自分だけここまで疲れるのはいかなものかと。

これからあるであろう戦争に向けてなのはわかる。

だが、嫌なのだ。

勉強は将来必要になるのは分かる。

だが、嫌だ。

そういうことだ。

「コラコラ、女子なんだから公の場で顔を伏せない。髪型崩れるわよ」

「もともと崩れるような髪型にしてないわよ」

「…マーシャさん、髪のびました？」

ここにきてフィリアが気づく。

今までシヨートだった髪型が明らかにのびている。

ロングではないが、ミディアムより少し短いくらいか。

「ああ、これ？少し髪型いじろうかなって思ってたね」

「マーシャさんの髪が長いなんて…、なんか新鮮ですね」

「こ、ここにきてまたイメチェン!？」

「右のほうで結んでみようかなって思ったんだけど…、なんかもうどうでもいいわ」

今は髪型云々よりも疲れをとるながい休養がほしい。

気づいてくれたのもフィリアが初めて。

つまり誰も髪を少しとはいえのぼしても気づかなかつたのだ。

それだけでもため息モノなのにこの疲れがあると思考回路もおかしくなる。

「しつかりしなさい。今日は上の人が来るんだから」

「上の人？」

「覚えてないんですか？ 近いうちにあるであろう戦いに備えて1人紹介したい人がいる  
そうですよ」

「ああ…、そんなこと言つてたような気がするな」と思い出す。

「そろそろ行かない？ 遅れると何言われるか分からないし」

「そうですね。新人が遅れるわけにはいきませんし。マーシャさん、行きますよ」

「ミリーナの瞬間移動装置が欲しいわ」

「無い物ねだつても意味ありませんよ」

マーシャは重い腰を上げ、集合場所へと向かった。

「今日紹介したいと言ったのは彼女のことだ」

グネストの隣にいる女性が頭を下げる。

長い髪。

特徴的なのが笑顔…だろうか。

無表情ではなく、ファーストフード店でカウンターにいた会計で求められそうな顔。

軍人にとつては正直無縁なので珍しい。

「はじめまして、シエリー・K・ノルアといいます」

あと服も戦闘向きには見えない。

ピシツとした服装をしていて動きにくそう。

下もスカートになっている。

「リヨウ、戦いにおいて…特に戦争のような時間がかかる場合、重要になつてくるものは何かわかるか？」

突然の問いだが、別に焦ることはなかった。

「…情報、ですか？」

「そうだ。戦場では常に新しい情報が求められる。だがこれは、戦争において勝つために重要なものでもあるが、それ以上に自分が生き残るために必要なものだ」



「大佐、力の方が重要だよ」とピヨンプイオンと跳ねながらイプシンが抗議するがグネズトは無視する。

「上は勝つ気にいる。それは当然だ。だからこそ、俺はこいつをお前らに紹介した」

「意図がつかめないんですが……」

「クロ、では戦争で勝つために情報以上に重要なことはなんだ？」

「……思い通りに動く駒を持つこと」

グネズトが頷く。

効率的に勝つならば死を恐れない、自分の命令を完璧にこなす人材、或いは道具が欲しい。

Tを見てきていたクロにはすぐにわかった。

「ただ勝つためなら情報が必要なのは上の人間のみだ。下に与えては無駄な恐怖心を植え付ける。俺は自分より上の人間は信用していない」

「それ、私の前で言っていないの？」

「俺はお前らを生きて帰らせる、そのうえで勝つ。そのためにこいつを紹介した」

グネズトがシエリーの方に手を置く。

シエリーの顔が赤くなる。

全員が珍しい行動に心の中で驚く。

「大佐、それセクハラ〜」

イプシンが笑いながら言った。

全員が「馬鹿野郎！」と心の中で叫ぶ。

「何を言っている。自分の付き合っている人の肩に手を置くことくらい構わないだろう」

「付き合ってる？そっか、なら仕方ない…」

「え？」と全員が止まる。

前からいたイプシンやマグタラン、フラットにクレアも少なからず動揺している。

この人が女性に興味があるなんて誰も想像していなかった。

「つ、つきあ…ええ？付き合ってる？」

「…シエリー、これが俺の部隊だ」

「随分と賑やかだね。いい子たちばかり」

「今賑やかだったのはイプシンだけだったと思うが？」

「見た感じ」

ほほえみながらグネズトを見る。

グネズトは目を合わせた後、微笑を浮かべ話を続ける。

「大佐が笑った…」と全員が驚いた。

「俺が信用しているのはシェリーだけだ。そしてこいつは外見で分かる通り、戦闘には出ない。通信士みたいなものだ」

「…そんな仕事、聞いたことありませんけど?」

「シェリーは特例だ。ネームの力がな」

『Kの力は攻撃特化じゃないの』

突然頭に直接声が響くような感覚に襲われる。

耳から来た声ではない。

「テレパシー?」

『そう。特定の条件を満たすことで相手と話ができるの。もともと、声を出さなくてもいいのは私だけだけど』

「…なんか不思議な感覚です」

ネームには種類がある。

そして文字通りA〜Zまである。

すでに途絶えたものもあるがそれに間違いはない。

そしてこれは本当に多種多様で、クリティウス姉妹のように元ある魔法の攻撃力を上げるものからシューレスのように直接攻撃には関わらないもの、ケイトのように単体では戦闘には不向きなものもある。

だが、大抵のものは何かしらの応用を加えることで1人でも戦闘に大きく貢献できるようにするものが多い。

そんな中でも特殊になってくるのがテレパシー。

もつといくと相手の位置を正確に把握するものなどがある。

上記の2つのように広範囲の人を対象にできるネームは使っている間、大抵行動に制限がかかる。

『私はこれを使っている間、魔力を他のことに使えないの。ネーム持ちなんて自分の能力以外、他の人と何ら変わらないから。だからこの仕事なの』

「…なら軍隊に入らなくてもよかつたんじゃ？」

『え…、それは…』

突然モジモジしはじめる。

顔を赤くしながら下を向く。

しかし、目は確かにグネズトをチラチラと見ていた。

誰もが「分かりやすい」と思いながらそれを見ていた。

「ともかく、戦いが始まった時シエリーがお前らを手助けする。あまり多い数はここに来ることは出来ないが、たまには来させる。同じ部隊の人間だと思って接してくれ」

見かねたグネズトがフォローに入る。

「以上だ」と言っただけでそのあとは話を打ち切った。

あまり付き合っていることについて聞かれたくなかったのかもしれない。リヨウとしては聞きたかった。

いや、その場にいた人間は聞きたかったはずだ。

1人を除いて。

「あのシエリ「ドーン！」 オフツ!？」

訊こうとしてイプシンにそれを阻まれた。

腹に頭がめり込んできたもんだから痛い。

7、8 m 吹っ飛んだ。

「何するんですか!？」

「後輩! 大佐の要件が終わったらすぐ訓練と言ったはずだよ!」

「いや、でも聞きたいでしょう?」

「うるさい、うるさい! 私は聞きたくもない!」

耳をふさいで子供のように頭を振る。

「あと、付き合っている人いないの私だけだもん」

「え?」

頭を振るのをやめると今度は頭を抱え始めた。

少し震えている。

「マグたん（マグタラン）はすでに既婚者。フラちゃんは彼氏持ち」

「いたんですね、彼氏」

「クーちゃん（クレア）はリアちゃんと付き合ってるみたいだったけど、大佐まで……！」

「私、違いますよ!?!」

「後輩たちの先輩で付き合っている人いないの、私だけじゃない！」

突然目を見開く。

「幸せ者の話なんて聞いてられるかー！」

「外見からは想像もできない発言ですね」

「今日は私も動けなくなるまでやるぞー！」

「冗談ですよね？」

「赤毛、ルーくん、クロ！やるぞー！」

叫びながらドールを展開するイプシンをシエリーが見て一言。

「やっぱり賑やかだね」

「…否定できないな」

「暇だね？」

「うん」

「暇だね」と言った男の子は本を読みながら言った。

返事をした子は小さな車を動かしている。

明かりはあるが部屋全体を覆えるものではなく、部屋も6畳ほどしかない。

さらに部屋には悪臭が漂っている。

部屋に窓はなく、子供部屋というには無理があった。

「ジンちゃんは？」

「2日前に死んじゃった」

そう言いながら子供が指をさす。

部屋の隅のほうに死んだ動物の死骸が見える。

腐敗が激しく、四足歩行の生物ということくらいしか分からない状態だ。

聞いた子供はそれを見た後すぐに興味をなくしたのか、目をそらす。

「…暇だね」

「うん」

本を読んでいた子供は飽きたのか、本を地面に投げた。

「遊びに行こうよ」

「どこへ？」

「外」

「でも何にも連絡来てないよ？」

「早くても遅くてもやることは一緒だよ。それに、玩具がここにはないもん」

6畳ほどのこの部屋には先ほどまで2人がいじっていた玩具の他にあるのは動物の亡骸が1つのみだ。

「5日もすれば新しいのがくるよ？」

「僕たちだって子供じゃないんだから自分の玩具ぐらい、自分で探す。そうするべきじゃない？」

「…それもそうか」

2人とも立ちあがる。

しかし、不思議なことに見たところ部屋に扉が見当たらない。

地面も壁も天井も真っ白の部屋だ。



そんな部屋の壁の前で2人は手をかざす。

「いくよ」

「うん！」

## 子供は純粹

バタバタと走ってくる足音が聞こえる。

それは扉の向こう。

カザキが鎮座しているこの部屋は無音という音がふさわしいほど、少しの音も出してはいなかった。

「主君！」

珍しく急いだジークがノックもせず扉を押し開けた。

バタンと大きな音を立てて扉が開く。

それに対しカザキは興味を示そうとしない。

「Pの兄弟がいなくなっています。密室だった部屋で魔力を使用したようです」

「知ってる」

最初の派生以外は声のトーンが元に戻っている。

「知っているのならばすでに何か対策を？」

「別に、何もしてない」

「大切な本物のネーム持ちです。いららないのですか？」

「生憎教育をしている暇はない。奴らもそろそろここを嗅ぎつけるころだと思っ  
な」

大きなあくびをするカザキ。

まったくと言っていいほど興味がないらしい。

「しかし…、遅かったな。気づくのが」

「申し訳ありません。魔力の痕跡からしてすでに3日は経っているかと…」

「5日だ」

頬杖を突きながら右手で画面を映し出す。

そこにはいくつかの機体が映っている。

「αタイプの機体…ですな?」

「いい実験場だ」

片手で画面を操作するカザキ。

画面に映っていた機体が5台、動き始める。

「5台も…よろしいのですか?」

「確かに大した数はないが、雑兵は使いどころが大事だからな」

画面越しでも分かるような滑らかな動きをする機体。

人のように頭、足、腕がありドールを思わせるが人の姿は見当たらない。

動き出した機体を確認するとカザキは画面を閉じる。

「で、要件はそれだけか？」

「はい」

「なら下がれ」

「…お騒がせしました」

ジークが部屋を後にする。

それを確認するとカザキは目をつむる。

「お前の望みがもうすぐ叶うぞ、カザキ」

---

「おおおおおおお！」

「はあああああああ！」

「おっと！」

リヨウの拳とマーシヤの蹴りが空を切る。

イプシンを狙ってはなつたその攻撃は当たらない。

だが、代わりに2人の攻撃がぶつかり合った。

リヨウとマーシヤが反対方向に吹き飛ばされる。

壁にぶつかりマーシヤとリヨウが反対側で仲良くのびる。

イプシンは訓練場の中心に立って辺りを見渡す。

攻めてくる敵は…なし。

「ん…、確かに伸びとしてはこんなものが普通なんだけど」

グネズトに付き合っている人がいるという事実が発覚してから5日。

リヨウたちは相変わらずである。

すでにレックスも体力を使い果たし、クロは一番最初に体力切れで「吐く…」と言って訓練場を離れて早20分。

最初と比べてみんなの体力も確かに上がってはいるがまだ2週間ほどしか訓練はしていない。

そりやイプシンも、すぐに体力はつくものじゃないし自分を本当に打撃のみで退けるのならかなり時間は必要だとも分かっている。

だが、今はそんな悠長なことは言ってもらえない。

時間がないのが分かっているのだ。

「手法を変えたほうがいいのかな？」

今、グネズトの部隊は正直力が無い。

個々の力が強いのは事実だが、リヨウ達程度では数には敵わない。

イプシンの目標としてはネーム持ちと7段階目を除いた軍の人と全面戦争をしても勝てるようになってほしい。

イプシンほどの強さがあれば勝てないこともないのではないかと希望が見え始める。だからそれくらいまで強くなってほしいのだがやはりそううまくはいかないのだ。

「とりあえず、今日はここまでだね」

イプシンは気絶しているリヨウとマーシヤを担ぐ。

ドールのおかげで力は増強されており、担ぐのは簡単だが体がアレだ。

リヨウたちのほうが身長が高いのでどうしても足を引きずってしまう。

レックスは意識こそあるものの、疲労がひどく担ぐなんて無理だ。

「ルー君、行くよ」

「…1つ、質問いいですか？」

「なに？」

「あなたは本当に…人ですか？」

「体は100%人の構造をしてるよ」

分かり切っていた答えを聞いてため息をつく。

あの子供のような体型のどこから自分たちを退けるほどの力が出るのかと常に疑問を抱いている。

疲労困憊の体に鞭を入れ、立ち上がる。

訓練でフラフラになるなんて今まで考えたこともなかった。

「さっ、明日に備えて今日も体を休めて」

「本当に力ついてるんですか？」

「それは保証するよ。近いうちに体壊すかもだけど」

「それじゃ元も子もないじゃないですか」

「天パ（ケイト）がいるからその時は治してもらえばいいよ。いやあ、本当に今年入ってきた人材は——」

言いかけたところで大きな音に声が遮断される。

ブーブー！とけたたましく警報が鳴り始めた。

「なに？」

「なんだ？」

さつきまで気絶していたはずのマーシャとリヨウが起き上がる。

顔こそ真剣ではあるが担がれているのでなんか面白い画になっている。

『正門にて敵襲あり。正門にて敵襲あり。数は2。策敵機がさらに5体の増援と思われる反応を感知している。各隊は部隊長の指示を待て。繰り返す——』

「…最悪のタイミングだな」

思わずリヨウが呟く。

一番の戦力にならなければならぬリヨウたちがこれでは戦えそうにない。

「どうするんですか？」

「後輩たちが戦えなくてもまだマグたんやフラちゃん、それにシューたちもいるんだよ？ 問題ないよ」

「…先輩、大佐とマグタラン先輩、フラットさんは今日はいませんか？」

「え？ なんで？」

「敵の拠点の搜索で1週間は戻らないって言ってたじゃないですか」

現在、グネスト、マグタラン、フラット、そしてフィリアが搜索で外に出ている。

敵地の絞り込みが本格化しているだけあって強い人材が欲しかったらしくグネストたちが駆り出された。

上の人が持っているネーム持ちを投入すればいいのでは？と思うが上の人間は我が身が一番かわいいが故、そんなことのために自分のボディガードを手放したりはしない。



「…じゃあシューたちにも——」

「俺たちは遠慮します」

この時間は訓練していることを知っていたシューレスとクリティウス姉妹が集まってきた。

「なんで？ いい実戦経験になるよ？」

「今回の敵は俺たちと比べて相性が悪い、メリー」

「はい」

何もなかったはずの空間にメリーが姿を現す。

「今回の敵は2人、外見は子供。Pのネーム持ちと思われる」

「P？」

「水魔法特化のネーム持ちです」

チツ、と舌を鳴らすマート。

ウリスは顔をしかめただけにとどめたが嫌なのは伝わってくる。

「なるほど…で、なんでシューレスはダメなんだ？」

「こいつらの戦い方がな…」

「アハハハハ！ いっぱいいるね」

「ここが天国つてやつかな？」

「たぶん正解だよ！」

おもむろにそこに転がっている人を持ち上げる。

体はところどころ穴が開き、死んでいてもおかしくないが…

「ヒッ！」

「まだ生きてるでしょ？ 死んだふりは面白くないよ？」

顔は笑っている。

子供の笑顔はかわいいというがこれは違った。

笑顔から感じ取れるのは負の感情のみ。

「これだけ穴が開いてまだ生きてるんだ？ 痛みも我慢できるなんてすごいね」

「た…助け——」

「うん、無理」

足を水の弾が貫く。

持ち上げられた兵士の右足がちぎれ落ちる。

「アアアアアアアッ!？」

「ほらほら、もつといくよー！」

的確に即死には至らない部位を狙う。

腕、足から順に攻撃をする。

子供にはこの行為に罪悪感などもちろんなくただ楽しんでいる。

純粋にこの行為を楽しんでいるのだ。

「いつまでこの玩具はもってくれる——」

「…」

「なんだ、もうおしまいなあ」

死んだとわかるとすぐに投げ捨てる。

どこからあの腕力が生まれるのかは分からないが危険ということだけは分かる。

すでに2人は正門を突破し、内部に入り込んでいた。

数々ある隔壁は、相手の水の弾丸によっていともたやすく崩れ落ちる。

その光景をリョウウたちはカメラ越しで見ていた。

「むいっ…」

「感傷に浸っている暇はない。すぐにここに来る」

リヨウたちはモニタールームでカメラを見ている。

今回戦うことになったのは

「それなら問題ないだろ。今イプシン先輩が向かったし」

幸い相手は一本道を通っている。

イプシンとの接触は避けられないはず……だった。

「……でもそれはこのまま直進した場合でしょ？」

「道は一本だぜ？」

「見て」

子供の1人が壁を指さしている。

隔壁と壁の違いは明らかはず。

それにもかかわらず道なき方角を指さしてしゃべっている。

「おいおいおい……冗談だろ？」

子供たちが巨大な水の塊を作り始める。

方角はもちろん道なき方向。

そして何のためらいもなく、水を投げつける。

その瞬間あまりの衝撃にカメラの映像がゆがんだかと思うと映らなくなった。

「だあああ！やりやがった、あの餓鬼ども！」

もともとここに配備されていた警備員が悲痛の叫びをあげる。

リョウたちは急いでイプシンと連絡をとる。

「イプシン先輩、聞こえますか!？」

『おお、後輩。どうしたの?』

「相手が進行方向を変えました。B—3 隔壁の部屋で——」

『ん? こう…い、よく聞こえ…よ?』

「先輩? どうかしました?」

突然聞こえにくくなる。

自分たちのテリトリーにいるにも関わらず聞こえにくくなるのは異常だ。

通信システムを管理する機材は少し離れたところにある。

先ほど子供2人がいたところからはどんなに急いでも10分はかかるはず。

「敵、さらに5体侵入!内、1体が電波妨害をしている模様」

「映像出ます!」

画面に正門の映像が映し出される。

5台の機体が映し出される。

「これはガチか?」

「本当に落とそうとしてるならもつと来るはずよ。でもこれで最後ならおそろく遊びでしようね」

「シューレス、お前も出たほうが…」

「…機体相手ならいいか」

そういうとシューレスがモニタールームを後にする。

「お前たちはいいのか？」

「私たちハ今回はヤメとく」

「もしも子供と会ったらオワリだしネ」

「お前らならごり押しで勝てそうな気がするけどな…」

「あんなたち、ちゃんと見てた？あいつラの戦い方」

水を使うということくらいしか、特筆する点は見当たらなかったような気がする。

リヨウ、マーシャ、レックスには理解できなかった。

科学側にいたのだから視点が違うかもしれない。

ウリスがため息をついて説明をする。

「いい？あいつらは水を作り出して戦う」

「そうだな」

「でも、本当にみるべき点はそこじゃない。魔力の使い方なの」

「[?..]」

「私たちは炎を作り出して戦う。でもこれは不便でネ…、常に作り続けないとすぐ消えちゃうノ」

手に火の球を作り出す。

すぐに魔力の供給をやめると見る見るうちに火が消えていった。

「でも水は違うノ。一回作り出せば、使用後も残る。あと石や鉄とかの類もネ」

「だから水気が満ちてお前らは嫌なのか…。でもシユールレスは？」

「水気が満ちるのも嫌だけど私たちが注目したのはそこじゃないワ。言ったでシヨ、魔力の使い方」

「…すまん、わからん」

「そこらへんに水があるのにあいつらは常に作り出して戦ってるノ」

そこまできてようやく3人が納得する。

もともと存在する水を使うのと、新しく水を作って使う。

攻撃力がどちらも同じならどちらのほうが使う魔力が少ないか。

それは決まっている。

なのにわざわざ2人は作って攻撃をする。

「もともと魔力が多いのか、何か細工をしているのかは知らないけど私たちより魔力が

多いのは間違いないワ。ごり押しはできない。シューレスは幻覚を使っても四方八方に無限に攻撃をされたらいつか当たるワ」

「不意打ちすればいいのに…」

「シューレスはそんな外道なことしないシ」

戦争だからそんなことは言ってられないだろうとため息をつくりヨウ。

自分たちが戦えないことを我ながら恨む。

「おい…、これはやばいぞ」

少し離れたところでモニターをいじくっていた警備員が顔を真っ青にしながら呟く。

「どうかしました？」

「今日…、予定なら1週間後に来る予定だったはずの客人が来ているんだ」

「随分早いですね。それが？」

「さつき侵入者たちが進んだ方向、まっすぐ行けば客人が休んでいる部屋にあたる」

隣で聞いていた警備員が同じく顔を真っ青にしてどこかに連絡を始める。

ジャミング的なもののせいで出来るはずがないのに出来るのがこれしかない。

「こちらからはボディガードを2人しか配備していない。だがあいつらの実力では…」

「館内放送とか出来ないんですか？」

「馬鹿を言うな。それは攻められていると言っているのと変わらないではないか！それ



では軍のメンツにかかわる」

「命がかかっているんですよね？一般人なんですよ、知られたくないということは。むぎむぎ死なせる気ですか？」

「…一般人ではない」

少し嫌そうな顔をしてモニターをいじくるのをやめる。

「じゃあいったい誰が？」

「…こちらだつて最後まで渋った。あんな化け物どもと共闘しなければならぬなんて馬鹿げてるからな。だが、選択の余地がなかった。一刻も早く敵の位置を知るためにも、戦力のためにも」

「誰なんですか？」

警備員が立ち上がり書類の山をあさる。

すぐに出てきたらしく、一枚の紙をもつて来た。

この時代での紙は機密事項を意味する。

外からのアクセスがききにくいからだ。

リョウたちに紙を差し出しながら言った。

「巫女だよ。青龍とかいう化け物を扱う奴だ」

## 戸惑い

「…遅いわね」

ポツリとつぶやくミイヤ。

この客室に案内されてから早1時間が経とうとしている。

これでも巫女の正式な後継者。

いろいろな我慢することはあつたので慣れているといえは慣れている。

だが、おかしい。

軍が1時間も客人を、しかも巫女を待たせるなんておかしいのだ。

態度が悪いということはあるがこんな形で表してくることはない。

「サリス、ちよつと見てきてくれない？」

「私としては構わないのですが…、もし私が消えたとたんに人が来たらいかがいたしましよう？」

「トイレに行つたつて言つておくわ」

「誰にでもわかる嘘ですね…。妖精がトイレですか」

「なによ、いいじゃない。責任は私がとるからさっさと見てきて」

「…分かりました」

姿が消えるサリス。

ノリスとミイヤが残る。

「ノリス、何かおもしろ」「ミイヤ様！」…サリス？」

10秒足らずで戻ってきたサリスに疑問を抱くミイヤ。

顔は焦っているのがわかる。

「どうしたの？」

「ここは危険です！急いで移動を——」

サリスが言い終える前にベキンと壁から音がした。

3人がそちらに顔を向けた次の瞬間、耳の鼓膜が割れるのではないかと思うほどの爆音と同時に壁が破壊される。

その衝撃でミイヤたちが跳ばされる。

ミイヤの視界が真っ白に包まれた。

---

軍の施設は1つではない。

いくつも点在している。

まとめなくても転移装置があるので問題ないのだ。

そして、こうしたほうがもしも強い敵が攻めてきたとき撤退がしやすい…、という名目がある。

本当はそれぞれの施設の長が自分の命が惜しいのだ。

今は敵の力を調べるということで施設のつながりが切られていた。

その中の今、攻撃を受けている施設のモニタールームでリヨウは驚嘆していた。

「…ミイヤが、来てる?」

リヨウが確認するかのように口で言う。

別に誰かに向けてしゃべったわけではない。

だが、警備員は疑問を投げかけられたと思って答えた。

「ああ、巫女の名前はミイヤ・ケリニアスだ」

リヨウがペタペタと2、3歩後ろに下がる。

ある意味タイミングが良く、ある意味タイミングが悪いこの状況。

「チョット、何があつたのか知らないけど見なよ。正門のカメラ」

リヨウはその言葉が頭に入らない。

この状況は非常にまずい。

ミイヤが自分の思った方向に改善してくれていれば全然問題ないのだがこういう久しぶりに合った時は決まっている。

間違いない、襲ってくる（性的な意味で）。

今疲れ切っている自分にあいつをうまい具合に止められる自信はない。

殺すわけにもいかなから気絶程度で済ませなければならぬのだが、これでもリョウはかなり疲れている。

初めて会った時と同じ身体能力しかないのならミイヤなんていくらでも気絶させられるが彼女も4年ほど、科学側で過ごした。

無理だ。

加減できない。

そんな難題を抱えているリョウをしり目にマーシャが叫んだ。

「リョウ、あれスノーよー！」

「…え？」

すでに散り散りになった機体たちだったが正門に残っていた1体を軍所属の使い魔として策敵をしていたところ見つけてしまったようだ。

フィリアは今いないのだが一緒に連れていくことは叶わなかった。

なぜなら彼女を連れて行った理由が速さにあつたからだ。

彼女についていけば突然スピードを出さなければならなくなった時に迷惑だ。

一緒にいてはスノーが塵になる。

だがそれ以上の理由は戦力だ。

小逆竜ももとの戦闘能力値は低い。

火事場の馬鹿力が出ると飛躍的になるのだがそれは自発的に出せるものでもないし何かあつてからでは遅いのだ。

「大丈夫かしら…?」

「あの機体がどのくらい強いかわからないからな」

リリリッ!と音が鳴る。

警備員が顔をしかめた。

「この音は?」

「…客室の壁が壊された。おそらく戦闘が始まっている…」

警備員が頭を掻き巻く。

「ミイヤも始めたみたいね…、大丈夫かしら」

「ミイヤは問題ない。それより問題はスノーだ」

リヨウはすぐにマーシヤの心配する感情を消すよう促す。

これにマーシャはもちろん、レックスやウリスたちも驚く。

「お前、ミイヤの方に一番強いであろう敵が向かってるんだぞ？いいのか？」

「負けるわけないな。ミイヤが」

「信頼してるのね？」

「そんなんじゃない。ただ、あいつらを無力化できるであろう手法をあいつは持つてるからな」

「無力化…？」

「ああ。あいつにはそういう魔法が『みんな、聞こえる？』」

ミイヤの話をしていった5人の頭にこの場にいない人の声が響く。

しかし、すぐにわかった。

シエリーの声だ。

『あまり時間がないから簡潔に話すわ。今こっちでリアとクレアが2体の機体と交戦中です。場所はB-7区画。このあたりには敵は他に見当たらないので違う所をよろしくね。あ、あとクロが一緒にいるわ。リョウたちに心配しないでどうぞよ。それじゃ、後はよろしくね』

「…情報が一方通行つてのは少し嫌な感じだな」

「でもまあ何も無いよりはマシよ。これであと敵は2体。これなら——」

「いえ、1体です」

先ほど部屋を出て行つたはずのメリーの声がした。

何もない空間から突如現れる。

「先ほど主が撃破しました。大して強くなかつたそうです」

「妨害電波を発している奴か？」

「いえ、そちらは未だ策敵中です」

めんどい敵じゃなかつたのは少し残念だがよかつたと胸をなでおろすリヨウ。

これだけ短時間で報告も出来るとなると敵は大して強くない。

決して倒せない敵じゃないとわかつた。

「これならスノーも……つてあれ？」

いつの間にかモニターの視界から消えていた。

すでに戦闘が始まつたとみるのがいいだろう。

「……ねえ、リヨウ。やつぱりミイヤが心配よ」

「お前、よく言い争つてたけど仲良かったのか？」

「べ、別にそんなことないでしょ。争つてなんかないわよ」

リヨウに理由がわかる言い争いの数は少なかつた。

だが、よく言い争つてた記憶はある。



仲がいいほど…というやつなのだろうとリヨウは納得する。

実は言い争いをしていたのはミイヤがリヨウに対する誘惑を実行しようとしていたからで、マーシャのおかげで被害がかなり減っていたことを彼は知らない。

「でもあいつに死なれるのはなんか腹が立つのよ」

「なんだそりゃ…。でもさつき言った通り、大丈夫だ。あいつには相手の攻撃を無効化する魔法がある」

「そんな便利な？」

「単純に水魔法特化だったのが裏目に出てるころだろうよ」

「なんなんだよ、あれ！」

「僕が知るわけないじゃん！あんな変な服着たおばさんのことなんて！」

「…やっぱり外の人間の大半はゴミと見て間違いなかったのかもしれないわね」

ミイヤが札を体につけてただ立っている。

札には『必水断界』と書かれている。  
能力は単純。

水を使った攻撃を問答無用で遮断する。

水以外の攻撃をされたら意味がない。

だが…

「なんでなんでなんでなんで!?なんで悲鳴が聞こえないの!」

激流ともいうべき水を手から作り出しミイヤのあてる。

だが、ミイヤは悲鳴どころか傷一つついていない。

ものすごい力がかかっているはずなのに足一歩すら動かさない。

「さて…、この子供たちはどうしたらいいのかしら?郷に入っては郷に従えって言うから  
指示を仰ぎたいところなんだけど」

手で水を払いのけながらしゃべる。

いくら攻撃がきかなくても体中に水を浴びていれば息ができない。  
「私としては殺したほうが楽なんだけどね」

|||||

体に衝撃が走り、意識が一瞬跳んだ。

原因はわからず爆音が響いていたので何か爆発したというのは分かった。

本来なら爆発により跳んできた破片、そして後ろにある壁に叩きつけられた衝撃でしばらく気絶しても、あるいは死んでもおかしくはなかった。

しかし、彼女は一瞬意識が跳んだだけですぐに思考が元に戻った。

何故か？

それは目を開けたミイヤはすぐに理解できた。

「あなたたち……！」

近くにいたノリスがミイヤを抱え、サリスが爆発した壁の破片の盾になっていた。

ノリスは衝撃により、背中がえぐれている。

人ならばすでにミイヤを抱えているなど不可能だ。

サリスも背には破片がいくつも突き刺さっている。

さらに衝撃を少しでも抑えるため踏ん張った体は強化したとはいえ、あまりに突然な

ことにボロボロだった。

「申し訳……ありま、せん。衝撃を、殺しきれず……」

「そんなことないわ！それよりあなたたちが」

「私たちは、ミイヤ様が生きている限り……不死身です。ですが……」

体を消え始めているのがわかる。

すでに限界を超えており、1回消えるしかないようだ。

「気づくべきでした。おかしいということに……」

「戦闘、で役に、立てず……、申し訳ありません」

それを言い残し消える2人。

それと同時に爆発した壁の向こうから2人が現れる。

「おかしいなあ。2人殺したはずなのに悲鳴が聞こえないどころか消えちゃった！」

「あれはきつと妖精ってやつだよ！」

「守ったつてことはあの人の主だよね？つまり——」

「あれは人間！」

目を輝かせながら2人が手を目の前にかざす。

水の塊ができ始めるのが分かった。

ミイヤは黙りながら懐から札を1枚取り出す。

「綺麗に——」

「啼いてよ！」

多くの水の弾丸が襲ってきた。

ミイヤが何かを呟いたが2人には聞こえない。

ミイヤにあたった弾丸や、周りにそれたものがはじけ視界不良になる。

「あたったー…あ？」

すぐに2人も異変に気付いた。

悲鳴が聞こえない。

水が赤くならない。

彼らが最も見たがっていた、聞きたがっていたものがないのだ。

一瞬あいつも妖精なのか？と疑問を持つ。

だが、すぐにそれは間違いだと気づかされた。

「あれ…？」

視界が晴れたそこには一枚の札を持ったミイヤが無傷で立っていた。

|||||

呟くミイヤの声に返答はない。

サリスとノリスはすでに戦闘不能で一時的とはいえ死んだ。

そんなことをした元凶ともいうのだからミイヤとしては殺してやりたい。

物騒な話ではあるがこの世界ではこの話を聞けば8割がたの人が「そりゃ仕方ない」

と答える。

概念の違いというやつだ。

「せっかくあそこを抜け出して5日間、森をさまよってようやくここを見つけたのになんなんだよ、このおばさん！」

「その努力は認めるわ。でも、教育環境が悪かったのかしらね？人を殺すことがただの遊び…ね」

「殺す？」

こいつは何を言っているんだと言いたげに2人が反応する。

「違うよ。ただ殺したって動かなくなるだけだもん」

「僕たちが好きなのは動く玩具。ナイフを刺せば悲鳴を上げ、指の骨を折れば悶え、水に顔をつけければ暴れる。動かない玩具なんてつまらない」

「…」

ミイヤはこれを聞いて唾然としていた。

もはや訂正させようとする気すら起きない。

何をどう教育したらこうなるのかと疑問のみが頭の中をめぐる。

しかし、あまりにも外れすぎていて皆目見当もつかない。

そんな時、ミイヤの頭の中の疑問を1つ解決する声が聞こえた。

『施設内にいる戦闘員に連絡する。現在、施設内に6つの敵の反応あり。これらを撃破しろ。なお、これらは捕虜としてとらえる必要性はなく、殺しても構わない。繰り返す』

壁が壊れたのが幸いして、部屋の外から聞こえた放送だ。

殺してもいいなんて、軍の人間なら全員分かっていた。

つまりこれは軍の人間に伝えられたものではない。

ミイヤにはすぐ分かった。

リヨウの配慮だと。

さつきから応援が来ないのもそのせいだろう。

一見、見捨てたようにみえるがミイヤが『必○断界』を持っているのを知っている外の人間は少ない。

あれを使えばミイヤは無傷だし、逆に他に人が来ると人質に取られたら面倒だ。

もし、水魔法意外を使ってきたら？という可能性もあったがその可能性は捨てたのだろうか。

ネーム持ち（水魔法特化）なのはミイヤにもすぐに分かった。

子供では自分のネームで強化された魔法意外など、今のミイヤには取るに足らない。

わざわざ自慢できるような魔法があつて、他の魔法の練習などしない。

「私のために…」

胸を熱くする。

早く会いたい。

でもそのためには前にあるヒビが入った岩を壊さなければならぬようだ。

「さて、悲鳴を聞かせてあげようかしら」

「「本当？」」

「ただし」

札を5枚取り出す。

この場では青龍はあまりにでかくて使えない。

自分自身の力で戦わなければならない。

札に魔力を込め始める。

「聞くのはあなたたちの悲鳴よ」



## 戦闘よりも思惑

スノーの目の前にいる1体の機体。

人気は感じられない。

おそらく無人機。

まあ、ミューズデルではいまいち戦闘に関する技術が進んでいないためこのような機体を見るのは初めてだったが。

「…なんですか？」

しかし、人型というだけあってどうしても声をかけてしまう。

スノーは今、虫の居所が悪かった。

理由はもちろん、自分の力不足…だと思う。

もともと自分の種族は龍の中でも弱いほうだということは理解している。

それも受け止めていた。

気にもしていなかった。

だが、今回はそれが理由で置いてけぼりを食らった。

使い魔は自分の主の命を守るのが使命。

見返りは主それぞれだ。

いい生活をくれる人だっているし、物のように扱う者もいる。

だが、どんな扱いになろうとそれに文句をつける使い魔は数少ない。

理由は自分が認めた人だからだ。

でも別に龍は使い魔になる必要なんてない。

1人でも全然やっていける。

なんでそのような主従関係を龍が認めるのかはいまだに謎そのものだ。

龍自身にも分からない。

本能とでもいうべきなのだろう。

生きるのに必要のないのに本能というのもどうかと思うが。

「さっさと目の前から消えてください」

受け入れられるはずのない言葉をかける。

ただでさえ人でもない機械に。

機械の目らしき部分が点滅する。

すぐに機体が動いた。

しかし、スノーの方に向かってではない。

進んですらいなかった。

目の前にこけるようにして倒れる。

「やっぱりあなたにそういう台詞は似合わない」

細い糸が機体の足にまとわりついている。

このような糸の類の武器を使うのはただ一匹。

サクだ。

物陰からワイヤーと刃だけで30cmはあるう刃物を手に持っている。

「サク、リヨウさんと一緒じゃないんですか？」

「リヨウ殿が毎日疲れて帰ってくるので最近家事仕事をしたの。そしたらこの事

態。リヨウ殿はいずこに…」

「自分の主の魔力くらい感知できるようにしておきなよ」

「緊急時はどんなに離れてもピンピンかじるんだけどね」

「今は？」

「実戦訓練」

「…へえ」

建物ボロボロにされているのに実践訓練と言ったサクについて肩の力が抜ける。

と、倒れていた機体が動き始める。

すぐにサクが機体の首元に刃をあてる。

最近刃の長さを変えたサク。

前の2倍ほどになったがこつちのほうを使いやすく、なぜ今まで気づかなかつたのかと疑問を持つ。

「サク、それは…」

「分かつてる、無人機なんですよ？脅しがわかるのかと思つてやってみただけど…」  
機体は止まらない。

所詮はただの人形のようなだ。

手に力を入れ首を切り落とした。

しばらく動いていたがやがて停止した。

あつけない終わり方だろう。

サクがすぐにワイヤーと刃物をしまい、正門に向かう。

「何しに？」

「まだ敵が残つてるわ。この程度、リヨウ殿の敵にはならないと思うけどリヨウ殿の命を守るのが私の使命」

この時ほどサクをうらやましいと思つたことがスノーにはなかつた。

だが、スノーがうらやましいと思つたのは力についてではない。

さっきの見る限り、おそらくスノーでもあの機体なら倒せた。

常に自らの主といるということについてだ。

別に力なんていらぬ。

フィリアに恋をしているわけでもない。

だが、隣にいたい。

「あなたはこないの？」

「…主がいないですし」

「…スノー、あなたもう少し決意みたいな物を持つべきだと思う」

この場でなにを言うんだ？とサクに視線を向けるとすぐ目の前にいた。

顔の距離5cm。

「うおお?!」

「ほら、気が抜けてる。今の私の速さならあなたに追えないことはないはず」

思わず後ろに下がる。

サクの自慢の速さは成長するにつれだんだん下がっていく。

成長により体が大きくなったことが原因である。

ノティスは小さいころ、速さで天敵から身を隠すのだ。

だが成長すればそれなりに強い竜になる。

速さは必要なくなってくる。

だんだん遅くなってしまうのだ。

それでも速いことに変わりはないのだが。

「あなたはね、足りないのよ。決意が」

「？」

「フィリアさんをね、守りたいって気持ちには伝わるわ。それに自分がどちらかというところ弱いつていうことも受け止めてる。文句なんてないし、むしろそれに関しては尊敬する。でもあなたはそこで止まってる。私たちは使い魔。主を身を挺してでも守らなければならぬ」

「それくらい…分かってるよ」

「分かってない。現にあなたはいい意味でも悪い意味でも力に執着がない」

「…だから決意を持つてと？」

「そういうこと」

決意一つで力が上がるほどの世の中は簡単にできてはいない。

でも、なにかビビツと来るものがスノーにはあった。

「決意…」

「何か使い魔としてのものをね。なんだっていい。私だつて『リョウ殿を守る』が決意

よ」

「それは使命じゃないの?」

「私にとつて使命でもあり決意でもある。こればかりは個人によつて変わるから保証できないけど私は決意があればあなたは変わる。そう思う」

励ましなのか、あるいはほかの意図があるのか?

スノーには分からなかった。

だが、探してみる価値はあると思つた。

決意とやらを。

「…そうだね。少し考えてみるよ」

「ま、一番簡単なのは力をつけることなんだけど」

「それに関しては辛いものがあるね」

「常に火事場の馬鹿力? 出せるようにしたら?」

「できたら苦労しないよ…。それよりいいの? リヨウさん探さなくて」

「ああ!」

顔だけでも「ヤベエ、忘れてた!」というのが読み取れる。

たった1, 2分のことだったけどそれでも急いで駆けつけなければならぬこの事態に

1, 2分はでかい。

というかさつき実践訓練とか言っていたのだから駆けつける必要はあるのかと疑問

を持つスノー。

「で、スノー。あなたはどうするの？」

「…行くよ。でもサクは先に行つてて、僕に合わせると遅くなる。僕は僕のやり方で探してみます」

「そうこなくつちや。少しはいい顔になったわ」

それを言うときサクが走り出す。

姿は確かに目で追うことができた（本当に速かったが）。

言葉の類一つでここまで変わるのかとスノーはしばらく止まっていた。

しかし、スノーも動き始める。

決意とやらを見つけるために。

---

「…部長、まるで悪魔みたいです」

戦闘が起きているところからは離れたところで銃を構えながら呟く。

未だにこの呼び方も使ったりするので今も思わず出てしまった。



まあ、3、4年これで呼んでいたのだから当然だろう。

リリアの目はクレアと1体の機体をとらえている。

2体いたはずの機体のうち1体は戦闘が始まって30秒ほどで壊れた。

もともと無人機ということもありマニュアル通りの動きしかしないらしく、弱いというのもあったが悪魔だと言ったのはそこではない。

クレアのそのあとの行動だ。

右半分がぐしゃぐしゃになった機体を捨てることなく、持ち上げている。

腕は全部で6つあるのだから別に不利にはならない。

だが捨てたほうが絶対に戦いやすいはずだ。

そしてもう1つ思っていたことを呟く。

「私、必要あるのかしら?」

一方クレアは敵の弱さに少し拍子抜けしていた。

倒した敵を持っているのはなんとなくだ。

なんか持っていると感じると落ち着くというかなんというか…。

本人もよくわかっていないのだ。

そして今、クレアの意識はあまり敵に向いていない。

リリアの落とし方を考えている。

「(そろそろ限界が近いな…)」

クレアは今までいろいろな女子と付き合ってきた。

クレアが狙いをつけた女子で落ちなかった人はいない。

リリアを除いて。

別にそつちの気がなかった人もクレア限定で好きになった。

だがリリアはならなかった。

だから知らない。

あまり多くの落とし方は。

リリア以外の女子は外見とサバサバした性格で落としてきたのだ。

だから今まで粘ってはきたものの実は手探り状態でもあった。

それで結局未だに落ちない。

だから最近、今まで手を出さなかった方向でやってみようかと思っている。

「(貞線を守ってはいはだめなのかもしれないな…)」

そのためクレアの部屋には今、何冊かの薄い本とそれと似たような内容が乗っている

雑誌がある。

リリアが見れば卒倒することなく、軍の施設から逃げ出すレベルだろう。

本当に危険だと感じ取ったときは卒倒なんてしない。

そんな考え事をしてしていると、目の前の機体が動きだした。

クレアの意識が自分から遠ざかったと感じ取ったからかもしれない。

無人機にしてはそれが感じ取れるのなら上出来だろう。

だがクレアは意識が少し離れていただけであって完璧に離れていたわけではない。

何より戦場で油断などしない。

敵のこぶしが放たれるが、クレアの残った5つのうちの1つの手で止められる。

残った手は4つ。

相手は腕をつかまれ動けない。

手数はこつちのほうの上。

勝つための条件はそろった。

危険を感じ取ったのか暴れ始まる機体。

せつかく無人機にまでこぎつけたというのに本当にそれだけらしい。

殴る蹴る飛ぶということ以外何もできない。

「弱いなら来るな。ゴミめ」

それが機体の聞いた最後の言葉となる。

まず一撃機体の腹に拳が入る。

それで機体の腹はへこみ、つかまれた右腕が耐えられずちぎれる。体が自由になった機体は自分の体が壊れかけてることなど目にも留めず新たな攻撃に入る。

足で蹴りを入れようとする機体。

だが勝敗は明白だった。

相手が人間ならよほど後がない限り、向かってなどこない。

クレアの体に届く前にドールの手に足をつかまれる。

そしてその手は機体の足を容赦なくへし折った。

ものすごく太い木が倒れるときになりそうな程大きな音が聞こえた。

だがクレアは機体の足をつまようじを折るくらい簡単に行く。

それによりバランスを崩す機体。

折れたのは左足。

そしてクレアは機体に次の攻撃を許してはくれなかった。

残った腕と足をつかむ。

そして思いつきり引っ張った。

反対方向にかかる力。

いくつもの導線がちぎれるような音がしたかと思うと予想通り腕と足がもげる。

つまり四肢が完全に機能停止した。

それでも機体は内蔵されている戦闘パターンを組み合わせて、戦い方を考える。しかし、人型ということ以外何の機能もない機体。

四肢がない状態で作戦など思いつくはずもない。

突如視界が暗くなく機体。

クレアのドールがつかんでいる。

次にやることなど誰にでもわかる。

クレアは予想通り頭を握りつぶした。

モーターが大きな音を上げる。

それが断末魔ともいえただろう。

それを最後に機体は完全に停止した。

戦闘が終わりクレアが握りつぶした機体をしばらくぶら下げて止まる。

リリアはこのとき何をやっているのかかと思いつながらクレアのもとに向かう。

そんなことには気づかないクレア。

停止した機体を見てクレアは言う。

「無理やりはさすがに嫌われるか？それとも快感を体に覚えさせると言う手も…」

まったく戦闘に関係ない言葉だった。

この時リリアは聞こえていないはずだったのになぜかぬぐいしれない寒気や不安に襲われたようだ。

「4体目か…」

映らなくなったモニターを見て呟くカザキ。

カザキ自身、送り込んだ機体は弱いというのは分かっていた。

だが、ここまで圧倒されるとは思っていなかった。

ましてや使い魔に不意打ちを受けたとはいえ負けた者もいる。

勿体ないことに金を使ったなあとため息をつく。

今から予算修正したいところだがそんな時間はない。

もうじき始まるのだから。

雑魚でも数で押せば何とかなるかと頭で思い込む。

「主君、いらっしやいますか？」

聞こえた声に振り向くと一人男が立っていた。

刀を腰にかけた男。

「Cか。なんだ？」

「いつ、私は戦えるのですか？」

再びため息をつくカザキ。

「主君には感謝しています。このような力を引き出してくださった、ですがそれを使えていない」

「もうすぐだと前にも言った」

「それは分かっています。ですが…」

「…あまりこういうことは言いたくないんだがな」

一拍おいて口を開く。

「雑魚は黙って俺に従ってろ」

それを聞いてCの背筋に悪寒が走る。

言葉だけで押さえつけられる。

それほどの実力者をCはカザキ以外見たことがない。

「他には？」

「…いえ、失礼しました」

外見でも震えているように見えないよう必死に耐える。  
カザキには感謝している。

だが、彼が従っているのはこれ以外に恐怖という理由がる。  
そういう理由を持つのは数少ないのかもしれない。

だが、少なからず持っている人はいる。

Cが部屋を後にする。

他にも要件はあったようだがおそらく要望なのだろう。

今のカザキを目の当たりにして何か言える人なんていない。

下らん茶番だったなと思いつつながら残り1つのモニターを見る。

しかし…

「!?」

モニターの画面が映らなくなっている。

つまり撃破された。

大した時間をとったつもりはなかったはずなのに…。

「何をされた…?」

カザキはモニターの巻き戻しを始めた。



## 異常者も感じる恐怖

「えいー」

子供の無邪気な声が聞こえる。

しかし、声とは裏腹にやっっていることは人を殺すこと。

だが、それはミイヤには一切通用しない。

水の弾丸がいくつも向かってくるがミイヤの体の表面にあたるたんびになんてことないただの水になる。

ミイヤの使っている「必〇断界」はもともと弱点とまでは言えないが1つの属性にしか対応できない他に視界不良になるというデメリットがあった。

以前、模擬戦とはいえそこをリヨウにつかれたことをかなり気にしていたため今ではそのデメリットは解消された。

色のついていたシールドは透明になり、大きさもある程度調節できる。

「子供の頭じゃこれが限界かしら？」

「僕たちの意図はおばさんじゃ読めないでしょ？」

刹那、天井が崩れる。

一瞬の隙も与えない攻撃。

直接与えられないのなら間接的に考えたのだろう。

だが、走れば避けられる距離。

すぐに移動を開始しようとする。

が、ここで追撃が入る。

地面が一瞬にして崩れる。

子供2人もこれくらいは予想できるのだ。

避けられるのならば足場を悪くすれば、しかもそれが切羽詰まっている状態ならば焦りが生じる。

2人の予想通り、ミイヤが突然の足場の変化に対応できず転ぶ。

それと同時に崩れた天井がミイヤに覆いかぶさる。

崩れた天井と床によって砂埃があり、視界が悪くなる。

ミイヤの張っていた盾は必水断界のみ。

それではがれきは防げない。

「やつりい！おばさん撃破！」

「うまく調整したつもりだけど…生きてるかな？」

「僕はいいよ、あのおばさん嫌いだし。最後のこけたところ見て十分満足」

「ザマアって感じだったよね。おぼさんのくせに調子に乗るから——」  
「言いたい放題言ってくれるじゃない……!」

がれきの中から声がした。

はつきりとした声が。

がれきの山の中からミイヤが姿を現す。

腕が折れていたり、最悪死んでいてもおかしくない状態だったはず。

なのにミイヤはこけた部分以外だと傷一つ負っていない。

「最悪……、リヨウに会う前にケガするし砂埃がついて黒くなるし。あんたたち覚悟できてるんでしょうね?」

「……おぼさん、魔法側の人間じゃないの?」

「ああ、そう考えてたなら驚くわね。悪いけど学校生活は科学側で過ごしたの」

魔法側の生徒以外に配布される武器、ドール。

ミイヤといえども例外ではない。

クロと違い、リヨウを追って戦闘を専門にする道を選択していたので4段階目とクロより強い。

ただ、「実は魔法側の力が吐出しているんだ」という生徒がドールを手に入れるとあまリドールは強く育たない傾向にある。

事実、3段階目にはマーシャヤリリアはそれぞれの道に進むような感じで特徴が出始めていた。

ミイヤのドールは4段階目。

だが、これといって特化した点はなく身体能力が全体的に上がる。

ただそれだけ。

クロも然りだ。

「…そういえば名前聞いてなかったわね？一応聞いてあげてもいいわよ」

「おばさん、さつきから上から目線すっごいうざいんだけど」

「人生の先輩なのよ？敬いなさい…って言っても無理ね。劣悪環境で生活してきたんでしようから」

そう言いながら札を取り出す。

「獄鉈ごくなた」

札が燃える。

ミイヤは直に札に触れているが熱がるそぶりは見せない。

燃えた札から長い棒のようなものが伸び始める。

「よく見ておきなさい、あなたたちを葬った武器になるんだから」

やがて武器が姿を現す。

ミイヤの手に現れたのは鉞。

長さは2 mほど。

それ以外にこれといった特徴は見られない。

「何その変な武器」

「鉞は見たことないかしら？それとも『神器』のことを言ってるのかしら？」

「どうでもいいよ。どうせおばさんは僕たちに近づけないんだから！」

再び激流がミイヤを襲う。

ミイヤは1つだけこの2人を尊敬していることがある。

それは魔力の多さ。

自分と戦う前から結構な量を使っていたはずだ。

何か小細工をしているのなら話は別だが本人たちの実力なら正直殺すのは惜しい。

「学習能力がないわね」

ミイヤに水の類の攻撃は一切効かない。

それを分かりながらもなお同じ攻撃を繰り返す。

力押しすればいずれ壊れると思っっているのだろうか。

ミイヤが一步步づつ歩き始める。

激流はミイヤに当たれば一瞬にして消える。

ミイヤから見れば目の前に障害なんてないのだ。  
しかし、それは時間稼ぎだった。

いや時間稼ぎではなく集中を違う方へ向けるための作戦。  
前に進んでいたのに横から衝撃が走る。

ドールを装備しているにもかかわらず吹っ飛ばされる。

ミイヤにあたったのはがれき。

これでは護符で防ぐことはできない。

幸いSバリアのおかげでケガはせずに済んだ。

だがホツとしたのもつかの間、1人がミイヤが倒れているところに乗りかかる。

手にはナイフ。

ただのナイフじゃないなんてすぐにわかる。

「聴かせてよー！」

ミイヤの右肩に深々とナイフが刺さる。

激痛が走るの言うまでもない。

「ああ……ああああ……」

「ん……うめき声じゃなくて悲鳴が聴きたいんだけど」

そう言いながらナイフを引っかく。

血が噴き出し、子供に付着するがそんなのは関係ない。

再び刺そうとする。

もちろん即死には至らない左肩。

しかし、ミイヤだつてなんども黙って刺されるつもりはない。

「調子に乗ってんじゃ…ないわよ！」

手に持った札を使用。

すぐに札が爆発する。

予想もしなかった展開にミイヤから離れることを余儀なくされ不満気な顔をする子供。

Sバリアがあるとはいえ、自分の近くで爆発系の攻撃をするのは自殺行為だ。

ミイヤも咳き込む。

だが、それ以上に痛い。

肩にナイフを一回刺されたただだがミイヤに想像以上の痛みが走る。

よくよく考えてみれば体にこのような傷を負ったのはこれが初めてかもしれない。

「おばさん、そんな傷程度で顔をしかめてるようじゃその鉈は僕たちには当たらないよ？」

ナイフについた血を指で触りながら話す子供。

その血を腕に模様を描くように体につける。

「…成程。少しは考えてるってわけね」

「右利きの人が右肩をやられたら辛いでしょ?」

「そうね。これが『ただの鉈』だったらもつと面倒になってたかもしれないわ」

「…?」

「言ったでしょ、これは『神器』。神の力の一部を込めた武器」

「今時神とかw」

「おばさん、ネジ吹っ飛んでるでしょ」

「見せたほうが早いわね」

歯を食いしばりながら鉈の矛先を地面に向ける。

そして次の瞬間笑いながら言った。

「自分の行動を恨みなさい」

地面に矛先を突き刺す。

ただそれだけの行動…に見えた。

次の瞬間、子供2人の目に入ったにはさつきナイフでミイヤを刺した子から嘔き出す血。

2人とも一瞬何が起きたか理解できないようだったがすぐに攻撃を受けた子供が痛



みにのたうち回る。

「うわああああああ!」

「エルド!」

初めて名前を聞いた。

突然謎の攻撃を受けたエルドは血が噴き出した腕と顔を抑える。

触って分かるのはそれが切り傷だということ。

しかし、切ったというよりは刺したのほうが正しい。

「エルドに何したの!」

「その子エルドって言うの? 私がエルドにしたことは何もないわ。その子が勝手にこの鉈の攻撃条件を満たしてくれたんだもの」

「条件?」

「自分たちで考えなさい。もう1回いくわよ」

ミイヤは鉈を左手に持ち変える。

そしてそれを壁に突き立て…横に滑るように壁を斬る。

それと同時に再びエルドから血が噴き出す。

「ああああああああああ!?!」

「…!」

攻撃の構造がわからない。

これでは対応しようがなかった。

さつきまでは腕と顔の一部だけだったのに2回目で傷が広がり胸のあたりまで来ている。

ここにきて初めて感じた焦り。

このままではエルドが、兄弟が死んでしまう。

しかし、それ以上に感じているものがあつた。

こいつが死んだら次は自分。

攻撃条件がわからなければ近づけない。

しかし、近づかなければ相手にダメージは与えられない。

生半可ながれきによる攻撃はドールを装備されている以上ほとんど意味を成さない。

「さて…、後何回で死ぬのかしら？うるさいのは嫌いなもの」

その言葉を聞いて理解した。

言葉にはもう何もかもついていない。

さつきまであつた敵意が一切ない。

つまり、自分たちを敵とみなしてないのだ。

ただの流れ作業に変更している。

それだけ勝ちを確信している。

ミイヤが子供たちに向かつて歩く。

鉈は引きずられていた。

かすかではあるが、刃が当たった地面に傷跡が残る。

「イタイイタイイタイイタイイタイ！」

エルドの体の切り傷が少しずつ広がっていく。

これを見れば鉈が何かを攻撃すればそれが対象に向かうというのは分かる。

だが、その対象になってしまいう条件がわからない。

「ア……あああ……」

味方は死にかけ。

自分は攻撃を与える手段がない。

そして敵は自分たちを敵とみなしていない。

これを理解した子供の行動は速かった。

「ああああ！」

叫び声をあげながら目の前の地面をひっくり返す。

ミイヤの視界が地面の盛り上がった床によりさえぎられる。

「ずいぶん繊細な作業もできるのね」

感心した台詞を口走るがただそれだけ。

言葉にはかけらほども尊敬の念はない。

ミイヤが目の前にできた壁に鉦を突き立てる。

壁の奥で叫び声が聞こえる。

「まず一人」

そう言い放つと壁を一刀両断する。

壁が崩れ落ちる直前、奥で血が噴き出す音がした。

だが声はしなかった。

目の前の壁が崩れ、先が見えるようになる。

あつたのは死体一つ。

もう一人の気配は…ない。

「…逃げてくれたようね」

鉦を落とし、地面に手をつく。

正直、これで逃げてくれたのはありがたかった。

うまく醸し出したのであろう雰囲気感嘆する。

もしもう一人がまだ戦おうとしてたらやばかった。

もう1人の方は条件を満たしていなかった。

つまり普通に鉋を使うしかなかった。

そいつに対しても条件を満たしてやればよかったのだが警戒されていると正直難しい。

さらに、相手も1人といえどミイヤもケガをした。

片腕を使えないだけで戦闘力はかなり落ちる。

札を取り出し肩に張り付ける。

一応回復用だ。

自然治癒と比べれば全然早くなるが、ちゃんとした魔法や特にケイトの魔法と比べると遅い。

「…サリス、ノリス」

「はい」

少しまだ薄いが現れる。

「悪いけど鞆探してちょうだい。無事だったらそれに着替えたいし」

「分かりました」

がれきをどかし始める2人。

エルドには目にもとめない。

そんな中、ミイヤは血まみれで2度と動かない……いや、動けるようにできないこともないエルドを見る。

何もわからず死んだのだろう。

冷静に考えれば原因は分かっていたはずだ。

だがわかったただけで手遅れではあつただろうが。

「……胸糞悪いわね」

さつきまで何も考えず戦っていた。

そして殺した。

いつ何度味わつても嫌なものである。

いや、自分だけで人を殺したのはこれが初めてだ。

寺に攻め込まれたときは最後はクロクが、4年生の時の帝国の侵攻では攻撃した人はす

でに死んでいた。

寺に襲撃されたときも自分で「殺す」宣言していたが実際はどこか整理がついていな

かった。

たぶん殺すつもりだったのは間違いない。

ただ殺した後、どんな気持ちになるのか考えたことはなかった。

すつきりするのか、あるいはモヤモヤするのか、後悔するのか。

それを初めて味わった。

しかも殺した対象は子供。

胸糞悪いに決まってる。

「ミイヤ様、鞆がすべて見つかりました」

「全部？」

「はい。すべて汚れてはいませんが中身はきれいそのままです」

「ツイてるわね。じゃ、さっさと着替えたいんだけど…」

ミイヤだつてこんな誰が見ているかわからない場所で着替えたくはない。

「んん、どこかいいたところ——」

「あれ？これはどうなってるの？」

サリスでもノリスのでもない声に敵かと声のした方向を振り向く。

しかしそこにいたのは

「な…!?!」

自分の身長とは合わない胸を持った子供らしき外見をした女性だった。

「はあ、はあ、はあ……！」

命からがら逃げだしたもう1人の襲撃者が建物の外にいた。

彼の名前はラルド。

おそらくもうエルドは戻ってこないと理解している。

だが、不思議とエルドを殺したミイヤに対する恨みよりも生きていく喜びのほうが圧倒的に大きかった。

今は逃げるしかないと理解している。

2人がかりでかかっても勝てなかったのだ。

1人で何しても意味はない。

カザキが受け入れてくれるかわからないが帰る場所はある。あそこのみ。  
「あのおばさん、今度会ったら必ず——」

独り言を言った刹那、気配を感じ後ろに水の盾を展開する。

すると盾が一本の針をからめとった。

「誰？」

「……気づかれないと思ったんだけどー」



出てきたのは女の子。

白い髪に赤い目をした女の子。

自分より年下に見えるが、外見はあてにならない。

「私リンっていうの」

「何の用？」

「あなたを殺しに来たの」

「笑わせないでよ」

首を振るリン。

「嘘じゃないよ、あなたは敵だもん。マーシャを酷い目に遭わせた敵」

「知らない人だね。でもまあ、退く気がないって言うなら——」

目の前に水の塊を作り出す。

1人でも十分な攻撃が可能。

相手はさっすきの水魔法を無効化してくる敵じゃない。

本気で戦える。

なら勝てる。

だが、甘かった。

ラルドは思い違いをしていた。

相手は1人だと。

リンはいつもランと一緒に行動しているのだ。

「うっ!?!」

突然背中に痛みが走る。

背中に針が刺さっていた。

「もう1人いたのか…!」

油断したと後悔するが大した問題はない。

針は別に深く刺さってないし小さい。

別に致命傷にはなっていない。

刹那、目の前が一瞬歪む。

「!?!」

「ただの針を刺すと思っただけ？」

「思っただけ？」

立て続けに体が言うことをきかなくなり始める。

痙攣、吐き気、歪む視界。

「これは…、毒…?」

「私たちは元が蛇の使い魔。毒の調合はこんな外見でも得意なの」

「得意なのー！」

リンが姿を変える。

白い蛇。

しかし、マーシャたちが初めて会ったころとはわけが違う。

リヨウの体に巻き付いて移動できた時代と比べるとはるかに大きい。

アナコンダ：ほどまではいかないが子供一人なら腹におさまるだろう。

人間の状態ではほとんど変化がないのに蛇の状態ではすっかり育っていた。

蛇に変身して口頭ではしゃべれなくなったリンの代わりにランがしゃべる。

「……」

「私たちがね、いろんなものを食べてきた。獣の肉、魚介類、爬虫類、木の实……他にもたつきさん！でもね、食べたことない物があるの。今思いつくのは一つ。それはね——」

リンが動けなくなりつつあるラルドに巻き付く。

かなりの太さと長さがある。

「人」

ぞわつとした恐怖がラルドを襲う。

魔法は使いたくても意識がまとまらずうまくいかない。

魔力は有り余っているのに意識がはつきりしない。

「早いうちに使い魔になっちゃったから食べる機会がなかったの。でもマーシヤたちは裏切りたくないし私たちは主もその仲間も大好き。だから食べなかつた。でも少しは興味があつたの」

「…ア……ウア」

「子供の肉つて大人のよりおいしいよね？やわらかいんでしょ？楽しみだなあ…」

狂気にも似たランの笑顔を意識がはつきりしない中、ラルドは確かに見た。

今すぐ逃げなければ食われる。

だが、体は動かない。

今では眼球すら動かすのがつらい。

「大丈夫！人として生活してきた時間は長いからちゃんと食べ物には感謝するよ！」

ランも姿を蛇に変える。

白い蛇。

2匹いると何かしら神秘的なものを感じる。

しかし、それは客観的な視点。

ラルドには恐怖以外ない。

「ま……テ……レ」

『それじゃ、いただきまーす！』

ランの開いた大きな口がラルドの視界を暗闇で覆った。

## 怒涛の巫女

## 2人でセツト

「マーシャ〜!」

声が出た。

マーシャは今、レックスと半壊しかけたこの施設内を調べていた。

いつの間にか消えていた電波妨害のおかげで情報伝達も可能。

ただ、子供2人の消息は不明なのでこうして捜索しているのだ。

クリティウス姉妹は「死亡が確認できたら教えて」と絶対に行きたくないようだった。

ピタツとマーシャが足を止め後ろを振り向く。

そこにはリンとランがいた。

口の周りを血だらけにしながら。

「ど、どうしたの!?!」

「まずかったー!」

「かつ……たー……」

後ろから何かを引きずりながらランが追いつく。

引きずっていたのはラルド。

ところどころに蛇の噛んだ跡と、出血が見当たる。

生きては…いるみたいだ。

「あんたたち、蛇なのに味わおうとしたの？」

「おいしいものは楽しいもん」

「楽しいもん」

蛇は基本相手を丸のみする。

本来ならばリンたちも例外ではない。

だが、人として生活することが多かった2人。

今でも虫を口に含むことはあるようだが、基本的には人と同じく味を楽しむようになっていた。

そんな者が初めて人の肉を食べようなんてすればまずいのは当然だ。

「人なんて食べたっておいしくないわよ」

「だってー、牛とか豚はおいしかったもん！」

「おいしかったもん！」

「あれは味付けされてるのよ。今のあなたたちの舌は人間と大差ないんだから、人を味付けなしどころか焼かないで食べようなんて無理があるわよ」

「ぶー！」と唸りながら頬を膨らませるリンとラン。

とりあえず、敵はあと1人になったなとリンたちを撫でながら安心する。あと1人となればイプシンならどうとでもできるだろうと思うからだ。

イプシンに回線をつなぐ。

『はいはいー、こちらイプシン』

「先輩、敵1人こちらで確保しました」

『確保？それはすごいね！こっちでも1人血まみれの死体を見つけたよ』

「見つけた…？先輩がやったのでは？」

『それがね、3人先客がいたんだよ』

「3人？」

やっぱりミイヤたちが来ていたのかと今回は感謝する。

『美人さんだったなあ。私もあなれるかなあ』

「先輩、その3人と話してできますか？」

『…スルーしないでよ。3人ならもういないよ。後輩のところに向かった』

「……………どうやって？」

『どうやって…、部屋の番号聞いてきたから教えてあげたよ』

「ありがとうございますましたくそ野郎」



『く、くそ野郎!?それってどう——』

話を途中であるにも関わらず打ち切るマーシヤ。  
すぐに行動に移ろうとする。

「レックス、悪いけどあとお願いできる?敵はもういないはずだわ」

「いいけど…、どうしたんだ?」

「リョウに…危険が迫ってる…!」

それだけ言い残すと走り出した。

がれきなどの足場の崩れは一切関係ないかのように。

残ったレックスとラン、リン。

リンがラルドを指をさして言った。

「レックス、これどうしたらおいしくなる?」

「なるー?」

「…まだ食べる気でいたのかお前らは」

---

「…少し悪いことしたな」

疲れた体に鞭を入れながら部屋へ向かっているリヨウ。

マーシャたちに後のことは任せている。

自分が何もせずただ部屋に戻っているのは少し嫌だったがミイヤは強い。

おそらく2人とも殺っているだろうと思い、自分は今日はここで下がることにした。

居住施設の方は意外と綺麗で敵からの攻撃は受けていないようだった。

5体入ってきた機体もすでに殲滅完了。

今日はもう風呂に入って寝ようと思う。

「ただいま」

いつも言いながら部屋に戻る。

サクがいることが多いからだ。

使い魔は主を守ることが使命。

にもかかわらず、今は家事をさせている。

申し訳ないと思うが本当に疲れて帰るため「必要ない」とは言えない。

「おかえりー」

返事が聞こえた。

部屋は別に広いわけじゃない。

入ればちよつとした廊下があり、左手に風呂場とトイレが。そして奥にキッチンと居間がある。

居間の扉を開ける。

迷わずベッドに向かい、腰を掛けた。

「俺、今から風呂入るから」

「え、本当？じゃあ私も入るわ」

「構わない……………」

今引つ掛かったのはしゃべり方だった。

口調が違う。

敬語がない。

「サ…ぼ…ふっ!？」

絶賛着替え中だったミイヤがいた。

今まで気づかなかった自分が不思議だ。

「な、ななななななんているんだ!？マーシヤたちには教えないように言つたはずだし、部屋のロックナンバー知らないだろ!？」

「巨乳な幼女が全部教えてくれたわ。あの胸うらやましいわね」

「センパアアアアアイ！」

恨みと憎しみを込めて叫ぶがそんなことでは状況は逆転しない。

下着姿のミイヤがリヨウに近づく。

「久しぶり、リヨウ。いきなりだけど感謝するわ。さすが、私の夫というだけあつて私がどうしたらいいか困っていることを察して放送を流してくれたんでしょ？」

「ちよつと違うけどあつてる。とりあえず服着ろ」

「自分の部屋でくらい好きな姿でいたつていいじゃない」

「ここは俺とサクの部屋だ！お前は違うところに用意されてるだろう！」

「それがそうでもないのよ。壊し：壊れちゃつてたから」

一瞬、自分でやつたと言つたように聞こえたがそこは触れないようにした。

ミイヤがリヨウの隣に腰掛ける。

リヨウもさすがにこれくらいは慣れた。

服を着てほしいので本人を見ないようにしてはいるが。

「先の襲撃で扉が滅茶滅茶。女の子一人をそんな場所に泊めるわけにはいかないでしょ？」

「サリスとノリスがいるだろ」

「やっぱ妻は夫といないと♪」

「お前も懲りないな」

「私は本気よ」

突然リヨウの肩に力が入り、ベッドに倒される。

ミイヤが上に乗っかる。

すぐにもでも押し返したいが何をしたのか、力が入らない。

「リヨウ、私はあなたが好き」

「それは痛いほどに伝わってる」

「なんで私じゃダメなの？私のどこが嫌いななの？」

「…悪いところなんてない。こんな風になってしまふこと以外は」

「あなただつて男でしょ？我慢はよくないわよ」

「そういうわけじゃ——」

顔を見てしゃべろうとして気づいた。

綺麗な肩に切り傷が見える。

札でカバーしているみたいだが、治りきっていないのは明らかだ。

「お前…、ケガしてるぞ」

「これくらいどうつてことない。私はあなたをもつと感じたい」

「…気持ちはいれしいけど」

「ほらっ！」

ミイヤが力なくベッドの上に横になっていたりヨウの手をつかむ。それを自分の胸に持っていった。

初めての感触が手に広がる。

ミイヤは自慢げに笑みを浮かべる。

少し恥ずかしいのか顔を赤らめているが、逆にそれがいやらしい。

「分かる？これが私の一部、あなただけのもの」

「ミイヤ、これ以上は……」

なんだかんだ言っただけでリヨウも男だ。

こんな状況ではいつ限界が来るかわからない。

「制御がきかなくなる？私はいつでも準備できてるわ。あなたがその気になればいつでも受け入れる」

「でも……」

「扉の前にはサリスとノリスを配置してるし部屋の鍵も閉まつてる。誰も邪魔は——」

突如、扉が割れた音とともにサリスが回転しながら室内に入ってくる。

いや、投げられた？

突然のことにミイヤとリヨウの頭はついていけない。

「さ、サリス!？」

「…も、…：…申し訳ガハ!？」

謝ろうとしたサリスの腹に1人の足が叩き込まれる。

それを最後に力なくだらんとする。

消えてないことから死んだわけではないようだが、そんなのにはミイヤもリヨウも目  
は行つてなかつた。

リヨウたちが見ていたのは足をたたきつけた張本人。

マーシヤだ。

リヨウの部屋の扉を壊したことに触れずにミイヤを見つけると指をさす。

「あんた、何やってんのよー」

「なんて間の悪いのかしら」

チツ、と舌を鳴らしマーシヤを見る。

理不尽ともいえる暴力を見たミイヤは少しおびえていたが表には出さない。

「見ての通り、今から夫婦の営みを始めるところよ。変な趣味がないのならご退場願  
えるかしら?？」

「ふざけんじゃないわよ!どうせまた強引にでしょ!」

「この無抵抗な感じはどうよ?いつでもいいよって言ってるじゃない」

性交始める前の男子がベッドの上でただ寝てるだけっておかしくないか？と問いた  
いリヨウだったがそこは黙った。

「盛る男子がだらんとしてるわけないでしょ！」

代弁してくれた。

「リヨウ、あんたも何か言いなさいよ」

「いや、マーシャが代弁してくれそうだからいいかな、と」

「それはもしかしてまんざらでもないから反論できないってこと？」

「……違う」

「何よ、その間」

ミイヤはそれを聞くと顔を輝かせてリヨウのほうに向きなおる。

「まんざらでもないのね？それならさっさとやつちやいませよ！既成事実さえできてし

まえばこつちのもんよ」

「えっ、冗談だろ？」

「すぐにわかるわよ」

ミイヤが背中に手をまわし、下着を脱ごうとする。

それを合図にするかのようにマーシャが動いた。

マーシャは一直線でミイヤの突進する。



それが来るのがわかっていたのかミイヤはニヤツと笑うとすぐに回避行動に出る。

マーシヤの足が跳んでくるすんでしゃがむようにしてそれを回避する。

「!」

「なめないですよ!」

隙ができたマーシヤの懐にミイヤが蹴りを入れた。

避けられたことに驚いていたマーシヤは反応が遅れる。

吹っ飛ばされ壁に背中を打ち付ける。

少し苦い顔をしながらマーシヤが立ちあがる。

「…そういえばあなたは科学側にいたのよね」

「4年もあれば体って鍛えられるのよ。あなたとは一度素手で戦ってみたいと思ってたの」

「いい度胸じゃない」

「お前ら、ここは俺の部屋だぞ?!」

自分の部屋で戦闘なんて行われれば荒れると止めにかかる。

だが体が動かないことを思い出す。

何をどうやっても動くのは首から上のみ。

なんか泣きたくなってきた。

「はあ！」

2人はそんなこと気にせず足だの手だのを思う存分使っている。

マーシヤに疲れている様子は見えない。

むしろマーシヤの方が優勢だった。

やはり魔法に一度も頼らなかつた人と、それとではわけが違う。

「はああああ！」

マーシヤの蹴りがミイヤの右肩に入る。

それにミイヤが過剰に反応した。

無理もない。

そこは先ほどの戦いで攻撃を受けた所。

完治していないのでは痛いに決まっていた。

「…あんた、それ何よ？」

「別に、こうした方がエロいかなって思っただけよ！」

痛みを耐えながらミイヤが動く。

自分は下着姿であるにもかかわらず少しも恥じらいは見えない。

跳びあがり頭向かって回し蹴りを繰り返す。

腕を使わないのはできる限り肩の負担を減らすためだろう。

右腕を盾にしてマーシヤが止める。

止められた足は絶好の獲物である。

足を抱え込むように腕で締めバランスを崩させ、ミイヤの腹に肘を当て思いつきり力を込めた。

宙に浮いていたミイヤには成すすべなく背中から地面に落ちる。

「痛っ！」

しかし、ミイヤはさらに痛い目を見ることになる。

マーシヤは倒れたミイヤの肩を踏みつけた。

右肩を。

ミイヤが痛みに耐えながら半泣き状態になる。

「イタタタタタタタ！痛い！」

「何でもないんでしょ？ならどかしてみせなさいよ」

「あ、あなた…ツタタタ！」

「ケガした状態で私に挑むなんて千年早いのだよ」

「な…なめないで、よ！」

下着の中から折りたたまれた札が出てくる。

「爆輝！」

一瞬、マーシヤの世界が真っ白に包まれる。  
フラツシュと同じ類の攻撃。

要は目つぶしの武器だ。

「!」

「素手で戦いたいとは言ったけど、戦うとは言っていないわよ!」

「(またあいつセコイことを…)」

以前も似たようなことを言つて俺に負けたなあと思ひ出す。

マーシヤの目をつぶしたミイヤは足を肩から退けさせる。

立ち上がると間髪入れずマーシヤの頭に向かつて拳を向けた。

しかし

「遅いわね」

その一言と同時にその拳は止められた。

「!?!」

「そこは慣れてなくても足を使うべきよ。確かに頭をうまくつけば私は気絶するけどその腕じゃ辛いわよ」

そう言うとき空いている右腕を上に掲げた。

ミイヤは何をするのかと体勢を立て直そうとする。

が、マーシャはここでつかんでいる右腕をあらゆる方向に引つ張った。肩に激痛が走り、ミイヤは何もできない。

「おしまいっ」

握られた拳がミイヤの脳天を直撃する。

それが決め手となった。

ミイヤの体から力が抜け、バタンと倒れる。

「ふう…疲れた」

それだけ言うと、ミイヤを担ぎ始める。

「よく防いだな？」

「以前リヨウに似たようなことあったでしょ？それを耳にしたから警戒はしてたのよ」

「俺の教訓が役にたったか」

「一理あるわね。それよりリヨウ、あんたはいつまでその状態なの？」

「よくわかんないけど力が入らないんだよ」

「介抱してあげたい気もするけど私は今からこの子の歓迎会をしないと」

「…そうか」

「じゃ、また明日」

下着姿のミイヤを何もかぶせずただ担いで持っていく。  
女子つてたまに怖いよな、とか思いながらそれをただ見送った。

ミイヤたちがいなくなつて数分後。

体が少しずつ動くようになっていくことに気づく。

右手を起こし、少しの間右手を見る。

ミイヤの胸に触れた手。

体も下着で隠れた部分以外ほとんど見えた。

綺麗だと自負しているだけのことはあると思つた。

「やつておくべきだったかなあ…」

少し後悔をしたリヨウ。

だが、やはり男になりきれないらしい。

「リヨウ殿…」

「うおつ?…サクか」

リヨウが呟いてすぐ、サクが登場した。

「いつから?」

「リヨウ殿がミイヤに驚いたあたりから…」

「…なら助けるよ」

「拘束されてしまったので」

バスルームに縄で結ばれ身動きができなかったサク。

意を決して縄を火で焼き切り外に出てきたのだ。

サクはもじもじしながらしやべった。

何を恥ずかしがっているのか。

「その…リヨウ殿」

「なんだ？」

「…溜まっておられるのですか？」

「ぼふっ!？」

ん？この流れはまさかのあれか？やばいのか？

「そ、それでしたらわたくしはいつでも！」

「サク、お前は俺の使い魔だ。別にそんなことをする必要はない！」

「大丈夫です！この行為は好きなもの同士がするものと聞いております。わたくしは

リヨウ殿が好きです。リヨウ殿は？」

「好きだよ、だけど意味が——」

「それでしたら問題はございませぬ！知識もしっかり蓄えてあります」

「どうやって!？」

「リリア殿から！」

「あの女！」

サクの頭の中はすでに恐ろしいスピードで回っていた。考えなんてまとまらないほどに。

限界まで緊張が高まるとサクはなんでも口走るのだ。

ある意味唯一の欠点かもしれない。

ものすごいスピードで服を脱ぐ。

服がそこらじゅうにばらまかれる。

ここでノティスの力を発揮するのはいかなものかとリヨウは思った。

サクの裸は正直見慣れている。

サクと風呂に入ることがあるからだ。

以前は人の姿で入られるのはリヨウには刺激が強いので竜の姿で入ってもらっていた。

でも背中を流したいと言ってきたので1回OKをしたところ思ったよりいやらしい目で見えない自分に気づいた。

これが妹、みたいなものだろうかと思う。

今では竜の姿の場合リヨウより1回り小さいくらいなので羽や尻尾で結構場所をと



る。

人の姿の方が利点が多いのだ。

だが今は違う。

綺麗な肌に膨らんだ胸。

女性そのものだ。

そしてリヨウにそんな趣味はないのだが獣耳。

状況が違うとここまで見え方が変わるのかと思った。

テテテ、と少し小走りで近づいてきた。

体にはまだ力が入らず動けない。

これ以降はミイヤと何かあったときはサクも警戒しようと思心に決めるリヨウ。

「リヨウ殿。先ほどから動かないのは、わ…私からやれという意味なのでしょうか？」

「違う！動けないんだ」

「ではまず接吻から…」

「なんでその重要なところ聞かないの!？」

「リヨウ、何かあったの!？」

タイミング悪く、先ほどの襲撃でケガはないかとクロがリヨウを心配して部屋に来了。

扉は壊れていたしサリスとノリスが伸びているのだから焦るのは当然かもしれない。だが、クロの目に入ったのはベッドに仰向けのリヨウの上に裸のサクが乗っかっている状態。

「あれ、何このデジャブ？」

「…」

クロが止まってたつぶり10秒。

方向転換をして部屋を出ようとする。

「おいクロー！見捨てるな！」

「これは夢これは夢これは夢…」

「(ここも同じか！)」

少しずつ左手にも力が入り始め、両腕で止めにかかる。

しかし、サクの手がリヨウのズボンに触れる。

「で、ではリヨウ殿も脱いでいただかないと…」

「!?待て！それはやったらダメだ！」

「ふ、不慣れではありませんがうまくやりますので…」

「(これはやばい！)」

使い魔とやってしまったなんて言えたもんじゃない。

リヨウは仕方ないと心に決める。

っていうか、ミイヤが何しでかすかわからない。

「サク、いきなりそつちはおかしいだろ」

「そ、そうですね？」

「(こういう話は聞くのか…) まずはキスだ」

動く両腕で顔を寄せるよう促す。

今までしてこなかったリヨウの行動に顔を赤くするサク。

「そ、そうですね…。申し訳ありません」

「謝らなくていいよ。それより俺を待たせるのか？」

「は、はい」

これからリードしてくれるであろう発言にただ従う。

リヨウがサクの首に腕を回す。

顔を近づけ、しばし止まる。

いざやろうとすると、サク自身はかなり恥ずかしい。

「そ、それでは…」

「い、いぞぞ」

目をつぶり顔を近づける。

リヨウにとって好都合ならなかった。

十分な距離に来たところであなじに一撃を入れる。

それを最後にサクの意識が跳び、バタンと倒れる。

「ふう…。悪いな」

こんな機会（2回もチャンスがある日）二度とないだろうなあ、と思いながらも事なきを得たりヨウだった。

後日、元凶であるリリアにはクレアと丸一日過ぎさせるといってお仕置き（お仕置きのレベルを超えている）を与えることで妥協した。

「あれで妥協なの!？」

「貞操も奪ってくださいって注文つけようとしたんだぞ？」

「すいませんでしたあああ！」

## 戦いこそ近道

知らない世界。

いや、知っているけど理解はできないであろう世界。

これが自分が創ったものだということのだから笑ってしまう。

自分で創った物のことを理解できないなどありえないに決まっている。

だが、仕方のないことだ。

「珍しい…。自分から来るなんて」

「入り方、よくわかったね？」

水と影（名前です）。

相変わらぬの外見で水は胸が大きなお姉さん。

影は体が真つ黒だが依然と比べて身長が縮んだような気がする。

リヨウはその世界に座り込んでいた。

「精神統一つてやつをやってみたらできたぞ」

「…さすが異邦人」

影が抑揚なく驚きの言葉を述べる。

「で、何か用かしら？来るって言うことはそれなりの用があるんでしょ？」  
「なんで俺は7段階目に到達できない？」

影と水が顔を見合わせる。

影の表情はリヨウには分からなかったが、水は少し渋い顔をしていた。

2人だつてわかつていた。

誰もが目指す7段階目。

リヨウが目指さないはずがないのだ。

「…教えられないわ」

「なぜ？」

「貴方はすでに特別な。今まで周りで私たちのような存在についての話をしたことがある？」

「いや、ないな」

「それが普通なの。だつて私たちドールの中の存在は本来ドールが7段階目になったときはじめで完成するから」

「…ならどうして？」

「分からないわ。貴方が異邦人だからじゃないかしら？」

影も頭を縦に振る。

「なら、お前らは何のために存在するんだ？7段階目といえば完全体だろ」

「…それは私も考えてたの。私たちの知識、基本的なことはもとから備わってるわ。あとは貴方が体験したことを一緒に学ぶ感じで増えていく。でもそれに関しての知識は存在してないの」

「影も知らないか？」

「…私の知識内容は水と同じ」

首を横に振る影。

「そうか」とため息をつくリョウ。

体を鍛えることで戦闘力は上がる。

だがそれではあまりに遅い。

一番手っ取り早く上げる方法はドールの強化。

リョウ自身、7段階目の力を2回手にした。

あれは異常と言ってもいいほどの力だ。

1, 2, 3, 4と上がっていくドールの段階。

上がるたびに強くなっていると理解する。

だが6段階目からの7段階目は隔絶された世界だ。

恐ろしいほど上がる力、速さ、動体視力。

避けようと思えば弾丸も避けられるかもしれない。

あれさえあれば敵などいないとさえ思う。

「じゃ、俺は訓練に戻るとするよ」

不思議と分かる元の世界へ戻る方法を始める。

「…リヨウ、1つだけ」

「？」

「そこまで7段階目になりたいなら、戦うのがいい」

「戦う？」

「これ以上は答え、だから言えない。でもそれが一番の近道…」

それだけ言うと影は顔を俯けた。

何かを伝えたがっていた。

でもこれが限界とでも言うののように手を握っている。

水はよくわかつていないかのように影を見て首をかしげていた。



ベッドの上で目が覚めた。

寝ていたわけではない。

胡坐をかいて下を向き、目をつぶっていた。

これを精神統一と言うのはいささか問題があるだろう。

隣ではサクも同じように精神統一的なことをしている。

正座をして足には刀をのつけていた。

どちらかというと言語的にはこちらのほうが精神統一といえるのかもしれない。

時計を見る。

針は2時過ぎを示していた。

ちようどいい時間だと思い、ベッドから降りる。

サクが揺れに反応して目を開ける。

「時間…ですか？」

「そうだな。珍しい大佐からの招集だ。遅れるわけにはいかないよ」

「お供致します」

「いつものこと…っていうわけもないか。じゃ、今日はよろしく」

「はい！」

いつもはイプシンの訓練でヘトヘトになって帰ってくるので部屋で家事をしていたサク。

それも悪くはないのだがやはりついていくほうが好きなのだ。主と一緒にいられるほど喜びにあふれた時間はない。

襲撃から3日。

施設内はまあ、ところどころ壊れてはいるが機能していなわけではない。

仮に機能していないのなら違う施設に行けばいいだけの話なのだが。

サクはあの後起きると冷静になったのか顔を真っ赤にして土下座をしてきた。

最終的には「切腹」なんて口走ったもんだからハラハラしたのは記憶に新しい。

部屋を出て、歩きで指定された部屋へ向かう。

この点は学校と比べると不便になったなと思わずにはいられない。

比較的被害が少ない区画での集合になっている。

「あら、リョウ」

部屋を出てすぐ、マーシャとリンに鉢合わせる。

別に学校ではないので女子と男子を分けたりはしていないらしい。

3日前、ミィヤを連れて行ってからはどうもマーシャの部屋には近寄りたく会っていたのは訓練の時だ。

正直、あれだけのことがあってから1日の間を置くことなく「訓練する！」なんてイプシンが言い出した時は正直正気か？と疑った。

あれだけの実行力と元気を持ち合わせているのはイプシンぐらいだろう。

疑ったと言えども一つ。

ミイヤを連れていった次の日からマーシヤが髪形を変えてきた。

右のほうで束ねていた。

触れるべきか否か迷っていたところ、リアが「女子はそういう違いにも気付いてほしいのよ」なんて言ってきたので「似合ってるね」的な感想を述べたところその日のイプシンを退ける訓練が悲惨もいとところだった。

顔赤くしてものすごい蹴りが肋骨に入ったときは死を覚悟したほどだ（4本ほど逝つてました）。

「おう。今日の集合、内容は聞いてるか？」

「いいえ。でもフィリアたちが帰ってきたんだし、それに関するんじゃない？」

グネストをはじめとする偵察部隊は2日前に帰ってきていた。

もちろん襲撃されたことに関して驚いた。

だがグネストは被害の確認よりも最初にイプシンの説教に動いたことにリヨウたちは驚いた。

その隣でグネズトをなだめているシエリーいたのだが、傍から見ると子供を説教する父親をなだめる母親の画にしか見えなかったというのは全員が思った。

「(ト)だよな？」

「そうね」

「失礼しまーす」

部屋を見つけて扉に手をかける。

扉を開くとすでにほとんど集まっていた。

来た順に座っているのか、うまい具合に2つ並んで空いている。

リヨウが奥から座る。

使い魔の席がないのでサクがリヨウの膝の上に座る。

人のままで座ってきたのだが、顔が嬉しそうだったので何も言わないことにした。

隣ではマーシヤが座っているのだが：

「リン…、人のままでもいいのよ？」

捕まえた当初なら蛇の姿でありがたいのだが、今では人の子供1人ぐらいなら丸呑みできるレベル。

マーシヤが今にも食べられそうである。

こつちの場合は人のほうがいいのかもしれない。

ハハハ…隣で苦笑いをしながらサクの頭に手を置く。  
すると変な感触が手に当たる。

頭の感触ではない。

……………手？

「何やってるんですか、フラットさん」

隣に座っているフラットがサクの獣耳を触っていた。

「触りたかったから触ってるけど？」

「さも当たり前のような感じで言わないでください。確かにマッサージとしてはありかもしれませんが…、必要以上過ぎませんか？手つきが」

「気持ちいいもの、かわいいもの」

「…好きなんですネ、獣耳」

肯定する代わりにフラットのポケットから絵にでも書いたような小さな可愛らしいキャラが顔を出す。

ケイトの使い魔であるクウの小さい状態とよく似ている。

ただ姿が…

「…サクは人気者だな」

サクを二次元で描いたような感じになっていた。

よほど気にいつているのだろう。

「初めまして、アールといます。土の妖精です」

「この子は戦わないの。私の守るべき大切な子供……みたいな存在ね」

「その子供を原型がないとはいへ、サクに似せるんですか？」

「獣耳はもともとだけど顔ごと似せたのはこの子の意思。その点では美的感覚が似てるのかもしれないわね」

サクから手を放し、アールを撫でる。

小さい体であるが故、指一つで撫でることができる。

ニコツと笑顔を浮かべながらアールは照れる。

これを見て思うのが、使い魔と主に悪い関係というのは本当に存在しないのか？ということ。

使い魔は主を選ぶがそれでもソリが合わないことくらいはあると思うのだが。

「そろつてるな」

扉が開く音がしたかと思うとグネズトが入ってくる。

「集まってもらった理由は大方予想がついていると思う。今回の偵察での成果とやらだ」

他人事のように話すグネズト。

「成果は……皆無だ」

「「「はあ!?!」」」

思わず言ってしまった。

マグタランは苦笑し、フラットは顔色一つ変えない。

フィリアだけが「え?」と思考が追い付いていなかった。

彼女には成果というものがあつたように感じたらしい。

「す、すみません大佐!」

「なんだ?」

「いろいろありましたよ!本拠地の絞り込みとか、敵軍とも戦闘になりましたよね!」

「今回の目的は本拠地の確認だ。それが見つけられなかった以上、成果はゼロだ。もつ

とも途中で奇襲をしかけてきた帝国同盟軍の屑どもの死体なら手に入ったがな」

縮こまってしまったフィリア。

それを気にせずグネズトが話を続ける。

「あとは俺たちの仕事ではないから無視してかまわん」

「違う部隊が搜索を?」

「外から客人が来ているだろう?巫女に任せる」

「…忌々しい」

フラットがぼそりと呟いた。

ここにも巫女嫌いはいるらしい。  
むしろこれが普通なのだ。

「悪かったわね、忌々しくて」

「！」

フラットが後ろを振り向く。

いつの間にか立っているミイヤがいた。

後ろにはサリスとノリスも待機している。

フラットの表情は珍しく、顔に嫌悪を表す。

ミイヤがそれを無視してグネズトの隣に立つ。

3日前、何があつたかは知らないが特に変化は見えない。

「あなた、3日ぶり♪」

笑顔で手を振ってきた。

絶好調この上ないようだ。

マグタランがヒューと口笛を鳴らす。

「先輩、分かっているながら——」

「悪いがリヨウ、後にしてくれ。今日の招集はこつちが本命だ」

「大佐、こんな奴に手助けされずとも……」



「…フラット、神とやらが気持ち悪いのは分かるがこっちは切羽詰まってる。あと3人、4日後に来る。その態度は何とかしておけ」

「青龍の美しさがわからないなんて…哀れね」

「ミイヤ・ケリニアス、お前も煽るな。それよりさっさと始めろ」

はいはい、と言う代わりに手で合図をする。

サリスが1枚の紙を広げた。

大きな紙1枚いっばいに魔法陣らしきものが描いてある。

「時代遅れね」

「その時代遅れをあなたたちの技術は解析できてないでしょ？それよりこれ見て」

ミイヤが魔力を送り込むと魔法陣が輝きを帯びる。

次の瞬間、立体的な映像が映し出される。

丸い球体のようなものが中心に見える。

「なんだそれ？」

「これが、敵の本拠地よ」

「「「はあ!」」」

全員が素っ頓狂な声を上げる。

「苦勞したわ。4人いても半日かかるのに1人だと丸2日かかるんだもの。リヨウのた

めじやなきや絶対やってないわね」

「巫女つてそんなことできるのか？」

「愛の力さえあればできないことなんてないわ！」

「…やっぱりお前の愛は重い」

サクがうなっているのを撫でて抑える。

こいつだけなのか、それとも巫女全体なのか敵を作るのがうまいらしい。

「で、この球体なんだけど。鏡侵空域きやうしんくういきの中を動いているの」

「鏡侵…？」

リヨウの眩きが耳に入らなかったのか、ミイヤはそれをスルーして話を進める。

代わりにマーシヤが答えてくれた。

「前言ったでしょ？この世界は空の外には行けないって。リヨウの言っていることが本当なら空の奥には宇宙っていう空間があるみたいだけど簡単に言えばその間にある空間、それが鏡侵空域よ」

「その中にいる…？」

「そうね。ミイヤが言っていることが本当なら普通はいることができない空間にいることになるわ。もつともその空間だつてあるかどうか証明されたわけじゃないけど。中には一枚の膜のようなものがあるだけで空間と言えるような大きなものはないって説

もあるし」

「くだから詳しくは突き止められないわ。分かるのは徐々に近づいているってわけね」  
魔法陣が輝きを失い立体的な映像が消える。

「これらから分かったことは正直俺たちが最初にあっち手を出すのは不可能だということだ」

「つまり…、また俺たちは相手から襲撃を待つということですか？」

「悪いが俺はそのつもりがない。そのためにあの老いた機械人形がいるんだからな」

ミリーナのことを言っているのだろう。

「まあ、これが今回呼んだ理由だ。呼ぶほどではないと思ったがこうしたほうが楽だった」

「腕輪があるじゃないですか」

「たまに応答しないやつがいる。それに時間を取られるのは腹が立つ、では解散」

本当に雑だなとリヨウは思ったが、イプシンたちは慣れているのか体を伸ばしたりしながら授業終わりの生徒のごとく部屋を出ていく。

「じゃ、サク。俺たちも——」

「リヨウ、悪いがお前にはもう一つ用事がある」

サクが膝から降りたと同時に、グネズトに呼び止められた。

「なんです——」

「ちよつとグネズト！リヨウはこの後私といいことするんだから」

「お前は客人ではあるが同時に傭兵も同然だ。雇われた以上、俺の指示には従え」

「私がそんなのに囚われるわけないじゃない！2日間の仕事の癒しのためにも——」

「フラット」

グネズトの呼びかけと同時にミイヤの体が地面に押し付けられる。

だが、だれも乗っかったり押し付けたりしていない。

ミイヤ自身何が起きたかわかっていない。

「な……によこれ！」

「Cの力、そうそう簡単には打ち消せないわ。大佐、あとは任せてください」

「頼む。リヨウ、ついてこい。サクもかまわん」

部屋を後にするがしばらくの間、ミイヤの「リヨウ——！」という叫び声は消えなかつた。

廊下を無言で歩いていく。

ただ、そこはリヨウが歩いたことないところだった。

思わず尋ねる。

「あの大佐。これからどこに？」

「すぐに着く。そこについたら話そう」

続く廊下。

しかし、突然何もないところでグネズトが止まる。

壁に顔を向ける。

少しの間、手を壁につけ何かを探す。

と、壁の一部が凹んだ。

小さな地響きをたてながら壁が開くようにして移動する。

「隠し扉だ！」と心の中で感動するリヨウ。

「こっから先はお前らだけで行け」

「え？でも……」

「入ればすぐにエレベーターのように下に降りる。すぐに目的地だ。生憎、俺は許可されない」

「その、目的地というのは？」

大佐という権限を持ちながらも立ち入りを許可されない限り入れない場所。

どこなんだ？と緊張しながら訊く。

「緊張の必要はない。目的地は700年以上伴侶を待てなかった外見幼女の部屋だから」

## 機械人形の部屋

「リヨウ、待つてたのー!」

シヨッピングモールのエレベーターよろしく「チン」という音が鳴ったかと思うと扉が開き、目の前にはミリーナがいる。

いつも同じ外見なものには特にツツコまない。

むしろ変わっていたら違和感を感じるだろう。

「お前……こんなところに住んでいるのか?」

「こんなところって、十分住み心地はいいの」

「いや、ここは生活空間っていうより……」

扉が開いた先はすぐミリーナの部屋らしかった。

土足であるのに怒ったりはしない。

リヨウが部屋かどうか疑った理由はその設備にあった。

広がっていたのは一面機械機械機械。

コンピュータが並んでいるのはもちろん、無数のコードが乱雑に放置されていて、何かを入れるような容器が3つある。

部屋は涼しい気温を保っており、冷房は常に稼働しているのだろう。

子供の部屋（700歳以上）以前に、人の住む部屋ではない。

「あー、ここはまあ台所みたいなものなの」

「台所…」

「私室はあつちの部屋なの。ぬいぐるみがたくさんあるの」

「…なんでお前、700年は生きてるのに子供みたいなんだ？」

「そうプログラムされたからなの。おかげで肌は永遠にピチピチ」

「そりゃよかったな」

可哀そうにと思いながら言った。

サクは初めて来た一面機械の世界に少し興奮気味。

「ミリーナ殿、あの部屋は？」

「あそこは無重力を体感できる部屋なの」

「無重力？」

「入って見たほうが分かりやすいの。やる？」

サクがリヨウの顔を見る。

耳はピョコピョコ動き顔は「いい？」と訊いている。

しっぽがあればそれも元気に動いていただろう。



リヨウが頷くと顔を明るくし、ミリーナについていった。

「まだ子供だな」と改めて思う。

部屋に入るとすぐ、ミリーナがスイッチを押す。

たったそれだけの行動で無重力になったのかサクの体が浮いた。

最初は焦っていたサクだが慣れると笑顔になりながら文字通り宙を泳いでいる。

人ならば「空を飛んでる！」なんて言いながら喜ぶのは分かるが、サクは竜。

竜の姿になれば飛ぶことなんて造作もないことなのに人の姿ではやはり新鮮味があるのだろうか。

「リヨウも入るの?」

「いや、空を飛ぶ感じは嫌というほど味わってる。それにそんなことのために俺を呼んだわけじゃないだろ?」

「そうなの。ここなら時間もたっぷりとれるの」

「活動時間ってやつか?」

「もともとそれに制限はないの。ただ外に出ると瞬間移動装置のエネルギーが常時減っていくの。学校なんかでそれが使えなくなったら帰るのが大変なの」

ミリーナは無数に並ぶキーボードをいじる。

リヨウが知っているキーボードの倍以上は押せる部分があるだろう。

するとどこからともなくコップを2つもったスムーズに動くロボットがやってくる。人のように足があるわけではなく、下は平べったいように見える。

にもかかわらず、下のコードに引っかかることがない。

「…まず謝るの。ごめんなさい」

突然頭を下げてきた。

何の事だか分からず戸惑うリヨウ。

「何のこと言ってるんだ？」

「あなたを直感で連れてきてしまったことなの」

「……何年前の話だ？」

「いつも、ずっと謝らなければならぬと思ってたの。突然訳も分からない世界に連れてこられて殺し合いをしろだなんて…あの時の私はどうかしてたの」

連れてこられたころのリヨウならそんな詫びなんて聞き入れなかっただろう。

「さっさと元の居場所に返せ」とそのの一点張りは間違いなかった。

「…別に今言われてもな」

「それでも、私には謝る義務があるの。あなたは私のしてほしいことを成せば元の世界に戻る。でも失敗した場合はあなたの人生を歪めてしまうことになるの」

「でもお前は知ってるだろ？俺はこの世界も好きだ、いい出会いもたくさんあった。サ

クがそのいい例だ」

ふわふわと人の姿で無重力を楽しんでいるサク。

リヨウの視線に気づいて笑顔で手を振る。

「今の俺はお前のことを恨んでなんかいない。だからそんなことはやめろ」

「…本当なの？」

「嘘をつく意味がない」

それを聞いて頭をようやく上げたミリーナ。

ただ、本当に申し訳ないと思っっているのか顔はどこか浮かない。

「お前はそんなこと考えないやつだと思っただのに…、子供らしくないな」

「これでも700年生きてるの。それに子供だって口では謝らなくてもどこか申し訳ないとは思ってるの」

「…さつきも言った通り、恨みなんてない。むしろ俺は感謝している」

「え？」という顔をしながらミリーナがリヨウを見る。

「サクに出会えた、マーシャに出会えた、クロに出会えた、ミイヤは…まあこれも嬉しいことだ。この世界にいる人間は地球にいたら絶対会えなかった人たちがかりだ」

「でも、あなたは幾度となく死ぬかもしれないところに投げ込まれたの」

「何言ってるんだよ。俺はお前に選ばれたんだぞ、この世界の創始者と言っても過言じゃ

ない奴の子孫に。そんな奴がそう簡単に死ぬかよ。今までのなんて死にかけた、には入らないな」

「……本当にそう思ってるの?」

「ああ、感謝しているのは間違いない」

「…そう」

顔を再び伏せるミリーナ。

何か悪いこと言ったかな?と再び焦るリヨウ。

しかし次にミリーナが顔を上げた時、その顔は曇っていなかった。

むしろ晴れて笑顔になっている。

「ならよかったの。私に感謝するといいの」

「…なんかイラつとした。感謝の気持ちもかなり減ったぞ?」

「それに関しては置いておいて、私がリヨウをここに呼んだ理由は2つなの。1つは謝る」と」

「もう1つは? (置いておいて…)」

「ドールについてなの」

ミリーナがコップを手に取り一口含む。

「リヨウはこれについて疑問を持ったことはないの?」

「疑問というか……すごいなとは思ったよ。ドールの中？みたいなところに話せる相手がいるんだもん、科学の領域を超えてると思っただけ」

ただ装備して、力をつけるといふのならまだ分かる。

だが、リヨウが特別とはいえず7段階目になればドールの中の人に会える。

これはイプシンに確認したところ、「確かにいる」と言われた。

イプシンには身長が高い男性が見えるらしい。

「リヨウは7段階目を目指してるの？」

「当然だ。そもそもそれがなくては勝てないとも思ってるしな」

「…先に言っておく、7段階目じゃ勝てないの」

「…言い方を間違えると勘違いされるぞ。俺自身の実力が足りないと言うのなら——」

「」

「ドールには8段階目があるの」

一瞬耳を疑う。

「何？」

「聞こえなかったのならもう一度言うの。8段階目が、ドールにはあるの」

地球以外に人が生きられる星があると初めて教えられた時と同じくらいの衝撃が走る。

今までの常識が覆されたのだ。

「私があなたに嘘を教えた理由は簡単、他の人の常識に合わせるためなの」

「……いくらお前の話といえど信用ならないな」

「私は今のドールの設計者なの。それでも信用ならない？」

「また引つかかる言い方だな」

「今」と言った。

それでは昔のドールは誰か違う人が作ったみたいだに聞こえる。

リヨウには理解できない技術なのは間違いないのだが、おそらくどんな科学者でもこれを理解できる人は少ないだろうと思う。

「ドールの創始者はカザキなの。だから私はそれを改悪した、それが今のドールなの」

「仮に、お前が今のドールの設計者だとしてなんで改良じゃなく改悪を？それで8段階目への道が閉ざされたっていうならたまったもんじゃないぞ」

「理由があるの。もし、8段階目が極めて珍しいとはいえ存在してしまつたら——」  
何か言おうとして黙る。

その先を聞きたいリヨウとしては嫌な感じだ。

「ごめんなさい。本人がいる以上、これは話せないの」

「本人？」

ミリーナの目が腕輪を見ていた。

ドールのことを言っているのだろうと察する。

リヨウは腕輪を外そうとするが

「意味ないの。ドールとあなたは一心同体、そんなことしたってドールには見えるし聞こえるの」

「いったいどういう仕組みなんだ？」

「私自身もよく理解してないから説明はできないの」

理解もしていないものをよく自分の思う通りに改悪したなと思う。

「理由はあなたが7段階目になったら教えてあげるの。そのころには隠すことに意味なくなってくるの」

「お前は疑問を増やすのが好きなんだな。ここにきて6、7年経つが頭の中がスッキリしたことが1回もないぞ」

「ミステリアスな方がモテるもん」

そんなこと聞きたいのではない。

ミリーナは分かっているが、しゃべりたくないのか核心を突かせようとしなない。

「じゃあ次は私についての話でも——」

言いかけたところでミリーナが止まる。

リヨウから離れ、1つのコンピュータの前に立つ。

画面には「sound only」と出ている。

英語は存在しないはずなのだが。

「何なの、グネズト。300と27年ぶりのデートなの、邪魔はしないでほしいの」

『そうしてやりたいのはやまやまだがこっちの事情も飲んでくれ。ミイヤが抑えられん。あいつ、根性だけでCの力を跳ね除けた』

「…」

『リヨウの位置も分かっているのかそつちに向かっている。そこに置いておくと部屋が滅茶苦茶になるぞ』

「…分かったの、そんな怪物は相手にできないの」

リヨウも遠巻きからその話を聞いていた。

ネームの力を根性で跳ね除けるなど人間業ではない。

「じゃ、リヨウ。すぐにここを出て行ってもらうの」

「…ここに隠れていたいんだが」

「またお話しできると思うの。じゃ、また今度」

何の前触れもなく、一瞬で景色が変わる。

「「どこどこ？」と戸惑ったがすぐにエレベーター的なものに乗る前にわたっていた廊下だと気づく。」



ミリーナの部屋なのだ。

瞬間移動装置がああ部屋のどこからでも使えるのだろう。

恐ろしい費用がかかっているに違いないとうらやましく思う。

「…サクは？」

サクがいない。

まだ、無重力空間で楽しんでいるのだろうか。

だが今いないのは困る。

必死で壁を押ししたり触ったりしてみるのが何も起きない。

「リヨウ！」

「…遅かったか」

嬉しそうなミイヤの声がした。

逃げればよかったと後悔する。

「遅かった？ごめんなさい、あのババアの力を押しよけるのに時間がかかっちゃって」

「普通はそれ、できないことだと思っただが」

「で、ここで待ってたってことは…ここでしたいの？」

「本当に考え方が吹っ飛んでるな、お前は」

「そんな、それほど」

「褒めてねえよ！」

イマイチ理解していない空間にいるが逃げるしかないと判断する。機をうかがっていたが、ミイヤの方が駒が多かった。

何の命令もなかったのに、サリスとノリスがリヨウの腕をつかむ。

後ろから現れたのか、「お？」と思ったところには完全につかまれていた。

「長かったわ……。今日、初めてリヨウの子種と初対面よ！」

「……………（これ詰んだ？）」

汗がダラダラと出てくる。

サクはいない。

ドールの展開だって、何もないときに訓練場以外でするのは規制されている。

腕は固定されている。

「ミ、ミイヤ待て！するなら部屋で、な？」

「やっぱり恥ずかしい？なら結界を張つとくわ。サリスとノリスに見えちゃうのは我慢してね」

「け、結界？え？」

ミイヤが一枚札を取り出し壁に貼り付ける。

札が輝きを帯び、リヨウにも分かるように結界が展開される。

「じゃ、始めましょうか」

「落ち着こう、ミイヤ！一回落ち着こう！」

「じゃあまずはリヨウの一物とご対面♪」

「ま、待つて……。マジで、マジでやめて——————！」

## 巫女は変わり者

「ぬるいのよ、あんたたち！」

リリアの罵声が部屋に響く。

説教されているがのごとく正座をさせられているフィリアとマーシヤはビクツと肩をすぼめる。

3人がいるのはリリアの部屋。

部屋の中は子供が好きそうなぬいぐるみが並んでいて、その中に似つかわしくないごつついカメラがある。

いくつかあるタンスのようなものにはほとんど南京錠がかけられており、厳重に守られている。

中に入っているものはおそらく写真の類なのだろう。

「だ、だって仕方ないじゃ無ですか！ケイトさんは部隊が違うから会える機会が少ないですし、施設も違いますし……遠距離恋愛は辛いです！」

「あんたが遠距離恋愛してるっていうなら私はこんなことしないわよ。それにちよっと手続き踏めばすぐにその施設に行けるのよ？本当の遠距離恋愛してる人に謝りなさい

「！」

うつ、とフィリアが反論することができずただ黙る。

「ねえリリア、いったいどうしたのよ？ 私たちを突然呼び出したと思っただらこんなこと？」

「こんなこと？ じゃないわよ。マーシャ、あなたはいつまで乙女でいるつもりなの？」

「ど、どういう意味よ？」

「あなたはもう20歳過ぎてるのよ、あつという間に30歳になるわ。恥ずかしいから、なんて理由で黙ってるんじゃないわよ！ あんたたち、男を待つてるだけだと今におぼさんと言われる世代に——」

「そんなこと言わないでください！」

そんな事実、聞きたくないとしても言うようにフィリアが耳を塞ぐ。

「心が成長してないわ、心が！」

「あんただって人のこと言えないでしょ、別に好きな人がいないから関係ないとか——」

「私はもう付き合ってる人いるわよ？（嘘だけど）」

「何!?!?!」

耳を塞いでいたはずのフィリアですら反応する。

別に強がるつもりはない。

だが、こうでも言わないとこの2人は何かと言ってくるだろう。

本当にこの人がいいという人がいないのだ、それをどうしろというのだろう。

「私、この人が好き」なんて発言が今まで一回もなかったリリアからの衝撃告白に驚きを隠せない2人。

開いた口が塞がらないとはこのことだろう。

「だ、誰と?」

「あんたたちは知らないわよ、この施設の人じゃないし」

「どこで知り合っただんですか?」

「休みの日にいろいろな所回ってたら話しかけられた。で、話が合ったから何回か会ったあと告白されたから付き合ったわ」

「(こいつ…できる!)」

案外そういう人も少ないのだが、この2人が恋愛について話すのはリリアぐらい。

ありえない事実を目の前に、言葉を失った。

「なんで付き合うってことができないのかしら、別に付き合ったって体を許すってわけじゃないのに」

「だ、だってフラれたりしたら…」

「フィリア、それが心が成長してないって言うのよ。その理由も学生の頃聞いたわ」  
「うっ…」

「ともかく、あんたたちは恵まれた環境にいるのよ。好きな人は知り合い、しかも職場が同じ。行動を起こしなさい！」

「せ、戦争が終わったら動きますよ」

「…戦争があるから言ってるのよ」

はあ…とため息をついて気落ちしたりリア。

「あなたたちには本当に好きだって言える対象がいるのよ。そんな人が突然いなくなったら…って考えたことはないの？ ケイトもリヨウもゲームの主人公じゃないのよ」

「そ、それは…」

フィリアもマーシャも理解している。

いや、しているつもりだけなのかもしれない。

この時代になっても最終的には人対人で、機械対機械にはならない。

限界があるのだ。

自立型にしたって人をすべて真似できるわけではない。

ただ、内蔵された戦闘に対するマニュアルみたいなものが働いているだけ。

ロボットの勝負の後には人との戦闘が始まるし、有効的にやるならロボットをロボッ

トにぶつけてる間に空爆でもなんでもすればいい。

結局、人を殺つてしまったほうが早い。

ロボットが有効なのは相手が人である場合のみだろう。

軍人になった2人。

そのことを理解しているからこそリリアの言葉が重くのしかかる。

「想いを伝えられるのは生きている者だけの特権よ。幽霊になって泣いても生者には戻れないわ」

「……リリアさんの言いたいことは分かりました。でも1つ疑問があります」  
「なに？」

「なんで今なんです？初めは年齢がどうか言つてましたけど違いますよね？」

「鋭いわね。今回の原因はマーシヤよ」

「わ、私？」

原因になるようなことをした覚えがないマーシヤ。

「??」が頭の上に浮かぶ。

「分からないの？今日がなんの日か」

「今日は………あつ！」

「ミイヤ以外の巫女が来る日よ」



「お久しぶりです、レリスさん」

「ミイヤか、ずいぶん大きくなつたねえ…」

客をもてなす部屋にて、4人の巫女が勢ぞろいしている。

そんな様子をリヨウやマーシャなどのいつもの組み合わせが隠れるようにしてみている。  
いた。

巫女を蔑むこの世界。

部屋への案内など最低限のことはするがほとんどの人は関わろうとしない。

だから物珍しく見ている人なんてリヨウたちぐらいだ。

そんなリヨウたちは驚いていた。

ミイヤが今話していたのは巫女の中では年長者に見える80は過ぎているであろう人。

年功序列があるとはいえ、丁寧に話すミイヤをまともにリヨウたちは見たことがない。

「リリンもススも久しぶりね」

「本当だね…、かれこれ4、5年ぶり？」

「彼氏を追いかけて学校入学なんて…本当に物好きですわね」

「何言ってるの、普通よ。ね、レリスさん」

ミイヤが同じ年ぐらいの巫女にリヨウのことを紹介する。

リヨウが見るのをやめて少し離れたところで体育座りする。

「ね、ミイヤの彼氏ってどれなの？」

ススと呼ばれる巫女がマーシヤたちの方を見る。

すでにいたのはばれているようだ。

「あの雰囲気変わっている人じゃなくて？」

「さすがリリン、今連れてくるわね」

リヨウの姿は見えていないはずなのに透視しているかのように普通に話す。

ミイヤは迷わずマーシヤたちの方に駆け寄る。

「気」がわかるというのは便利ならしくすぐに少し離れたところにいるリヨウを見つけ

すぐに手を取ってリヨウを連れて行く。

今回はマーシヤも止めなかったし、リヨウも「はあ」とため息はつきながらも抵抗はしない。

「へえ、この人が…」

物珍しそうに3人してまじまじと見る。

普通の人から見れば名前以外は普通に見えるのだが巫女ではわけが違うのかもしれない。

「面白い『気』をもっているのぉ」

「確かに…、見たことないわ」

「ど、どうも。リヨウ・アマミヤです」

「…私、好みですわ」

ミイヤが血相を変えてグリンツツという効果音がつくかのようにリリンを見る。

「リリン…?」

「初めましてアマミヤさん、リリン・アイーシヤですわ。突然ですけど私の彼氏になってくださいませんか?」

「は、はあ!?!」

「……私も候補に挙げてもらっていい?」

「ススウウウ?」

さすがに老人となつてゐるレリスは面白そうに笑顔だけ浮かべて眺めてゐる。

「若いとはいいいのお」なんて言つてたがリヨウとしては助けてほしい。

それらを遠巻きに見るマーシヤたち。

「ほら私の言つた通り」とリリアがマーシヤに囁く。

リリアが2人を招集した理由はこれだつた。

ミイヤは今ではリヨウのすべてに惚れてゐるが最初は青龍が出せたとか『氣』に惹かれたのだ。

もしかすると巫女を引き付けるのでは?なんて思つてみたら案の定だ。

「巫女つて全員あなのかしら?」

「…目の前に全員いますから見たとおりかと」

「リヨウには選択肢があつて羨ましい限りだな、なあクロ?」

「でもリヨウつてどんな人が好みなんだろ?」

「俺も聞いたことないな」

マーシヤはなんかもう負の感情は起きなかつた。

諦めともとれるかもしれない感情だろうか。

今すぐにも飛び出していききたい気がするが、そこからどうしろというのだ。

「私が彼女です」なんて意味の分からない爆弾発言でもしろというのだろうか。

だが、マーシヤにそんな勇氣はない。

「何やってるんだ、お前ら」

ふいに後ろから声をかけられたマーシヤたち。

後ろを見ると怪訝な顔をしたグネズトがいた。

「私たちはミィヤ以外の巫女を見たことがなかったので物珍しさから。大佐はどうしたんですか？」

「もともと巫女を呼んだのは俺だ。上の人間は挨拶なんて最低限のことで済ませたがつてるから俺が行くしかないだろう」

それだけ言うのと巫女たちのほうに向かう。

レリスとミィヤ以外の2人が一瞬、嫌な顔をする。

しかし、グネズトを知っているのかすぐに表情を戻し無表情ながら嫌悪している雰囲気は出さなくなる。

「皆さん、今回の呼びかけに応えてくださりありがとうございます」

「あたりまえのことじゃよ。儂ら巫女はもともとそのためにおるのだから」

「それを踏まえてもかたじけない話です」

「……で、実際ぶつかるのはいつなの？」

「不明です。あなたたちがどれくらい早く準備できるのかにかかっています」

「鏡侵空域に敵はいると聞きましたわ」

「それに関してはある程度解決できています」

「私たちはなにすればいいのよ？」

「いろいろだ。場所を移したいのですが、いいですね？」

「なんで私にだけ敬語なしなのよ」と言いたいところだったが口に出すのをやめる。

理由はレリス。

巫女の中では最年長でさつきも言った通り、年功序列は大切なもの。

どうでもいいことをツツコンで話をそらすのはよくない。

レリスがグネズトの言葉に頷いて応える。

グネズトについていくようにして4人がその場を去る。

「リヨウ君、また今度ねー」

「ぜひ食事でもしましょう」

残されたリヨウはなんか疲れ切っていた。

サクがすぐに駆け寄り「大丈夫ですか」と声をかける。

「サク…、俺もうだめかもしれない」

「どうしたのですか、今までミイヤとはギリギリでも行為までには至らずやってきたで

はありませんか」

「前回はお前に助けられたな。あの時のお前のお願いなら足でも舐めてたと思うよ、でも……」

ミイヤに危うく貞操を奪われそうになったミリーナの部屋を出た後のこと、サクがギリギリで助けに来てくれた。

久しぶりにリヨウはサクがノティス隠密童と呼ばれる理由を理解した。

サリスとノリスがいたにもかかわらず、速さの勝負で2人を圧倒したのだ。

倒すことはできないが手持ちのワイヤーで一時的に動きを止めることは簡単。

映像があればあと1、2秒でモザイクが必要になるところで助けに来てくれた。

「ミイヤが3人に増えた。無理だ」

「大丈夫ですよ、きつと他の2人はちよつと積極的な普通の人です！」

「……だといんだが」

しかし、リヨウは分かっていた。

この世界の人はそんなに甘くはないということ。

# 人気者は辛いよ

土曜、朝7時。

リヨウはまだ眠っていた。

隣ではサクが竜の姿で眠っている。

一応サク用にも寝床はあるのだがもともと1人部屋なのでベッド2つは辛いための寝床みたくになっている。

サクは口ではそれでもかまわないと言っているのだが、夜な夜なりヨウのベッドに潜り込んでくる。

別にかがわしい行為をするわけでもないし、リヨウとしてはペットが入ってくる感覚なので今では少し自分が端によって入り込みやすくしてあげている。

外ではしっかりとっているサクも甘えたいのだ。

で、そんな内では甘えたいサクの起床時間は早くはない。

みんなサクは絶対7時には起きて8時までにはいろいろテキパキやっている竜だと思っているが違うのだ。

そんな安眠が許された時間にそれは来た。



朝早い7時過ぎ、チャイムの音が鳴る。

軍人たる者、いつ何時敵に襲われるかわからない以上ちよつとした音に反応して起きてしまう。

しかし、疲れ切っていたリヨウは一瞬「音した？」なんて思つて目を半開きにしたが10秒ほど待つても何も起きない。

気のせいだと判断して隣にいたサクを抱き枕感覚で掴み寝る。

しかし、再びチャイムが鳴った。

「…誰だよこんな休日の朝早くから」

重い体を動かしベッドから降りる。

それに反応してサクも眠そうにしながら首を上げた。

睡眠を邪魔されたのが嫌なのかうなっている。

「まだ眠つてもいいぞ?」

サクは首を横に振ると人の姿に形を変える。

「リヨウ殿が辛い思いをして起きておられるのに私が眠るわけにはいきません」

「そうか。ならとりあえずこれでも着とけ」

サクから見ると少し大きめなシャツを渡す。

寝る時は服を身に纏うのが嫌ならしい。

どういうわけか、通常時はどんな仕掛けがあるのか竜の姿では一糸纏っていないはずなのに人の姿になると動きやすくアレンジされた着物を着ている。

なので人の姿で着衣をすべて脱いでから竜の姿になって寝るのだ。

何をどうやったたらこんな仕掛けになるのかと不思議に思うリヨウだったがサク自身も知らないようだった。

しかも服は洗濯機に入れて洗えるという優れものだ。

サクがシャツを着たのを確認すると扉に向かう。

リヨウはパジャマだが別に相手がリリアでもマーシャでも、イプシンだって何とも思わない。

地球にいて普通に生活していれば、女子が来るかもしれない可能性があれば絶対に身だしなみを整えてから出迎えたに違いない。

扉の鍵をあける。

「こんな朝早くから…」

目の前にいたのは巫女だった。

「おはようございます、リヨウさん」

「…リリンさん、でしたっけ？」

「嬉しいですね、覚えてくださったのですか？」

「あなたは客人ですし……で、こんな朝早くから何か御用ですか」

内心ため息をつく。

ホレ見たことか、とサクを横目で見る。

「面倒くさい輩でしたね」とサクのアイコンタクトが手に取るようにわかった。

「7時が早い、ですの？見たところ疲れてるご様子、もしかしてそちらの使い魔と昨晩は楽しんでいらつしやったのですか？」

「……巫女つてみんな似た者同士なんですね」

「私はミイヤと違って清楚でおとなしいですわ」

「はあ、で要件は？」

「そうでしたわ！今日、午後2時ぐらいいまで貴方と行動する権利を獲得したものですからそのお誘いに」

「……………サク、頭痛薬はまだ残ってるか？」

「たんまりと」

それだけ言うのとサクは部屋の方に戻っていった。

リヨウは心の中で頭を抱える。

この世界の巫女はせつかく外見がいいのにどうしてこう、常識はずれなことをするの  
だろう。

「俺と行動する権利ってなんだ？」

丁寧語を使うのも馬鹿らしくなってきたのでやめた。

「昨日、ススと話し合いをしたのです。それで朝は私が、夕方はススがということになりまして」

「うん、意味わからない」

「ええと……なんと説明したらいいんですの？昨日ススと——」

「同じこと言わなくていいよ！俺が訊いたのはそこじゃなくてどうしてお前らだけで俺の予定を決めてるんだよ？」

「今日は暇なんじゃなくて？」

「何で知ってるんだよ？」

「ミイヤの手帳に貴方の予定が書かれてましたので」

「何それ、怖い」

とうとう粘着質なタチの悪いストーリーカーにランクアップしたのかと恐怖する。

しかし、それはミイヤがストーリーカーまがいの行動をして手に入れた情報ではなく、イブシンに一言「教えて」と言つて手に入れた情報だ。

だから手帳にも「休日」としか記されていかなかったのに、この話を聞く限りでは確かに危なくともおかしくない。

「ささ、何はともあれ早く準備なさってくださいいな。時間がありませんの」

「…悪いけど俺、今日は一日中寝て過ごすから」

「まあ！いきなり、しかも日が昇っている内からそのような行為をご所望ですの？」

「違うよ！お前らつて絶対姉妹かなにかだろ」

「違うんですの？なら早く着替えなさって」

「申し訳ないけど嫌だ。用がそれだけならさっさと——」

「地球」

思わず反応してしまった。

「あらかた知っていますわ。大佐さんから聞きましたもの」

「それで？それを公言するぞってか？」

「いいえ、これでも私は巫女。真剣な話もしたいと思つてますのよ。ですから、ね？」

真剣な話、と言われると正直無下にはできない。

もしかすると重要なことかもしれない。

表情には別に裏の顔が見え隠れはしていないが何かあると、リヨウは思った。

だが、リヨウの予想ではこれは餌だろう。

自分を外へ引つ張り出すための。

「15分で準備する」

「待ってますわ」

扉を閉める。

と、同時にサクが頭痛薬と水を運んできた。

「サク、これはどれくらいはやつだ？」

「朝起きたばかりですのであまり強いのは体に良くないと思ひまして少し弱めの物を」

「15分後に出かける。着替えが終わったら一番強いものを一箱持つてきてくれるか？」

「一箱…ですか。なぜそんなに？」

サクの問いかけにリヨウは遠い目をして言った。

「いつでも死ぬるように」

「……頭痛薬ではただ苦しむだけで終わると思うのですが。それにリヨウ殿が苦しむというのなら私も同じことを致します」

「そう言われるとできないな」

「私はリヨウ殿の使い魔です。リヨウ殿が苦しみを取り除けない以上、私もそれを味わうのが道理」

「使い魔は主を守ることが使命だろ。お前が苦しみを味わうなんて俺は望まないぞ」

「ですが——」

何か言おうとしたサクの頭をに手を置く。

「ですが、じゃないよ。お前なら俺の性格分かっているだろ、俺が苦しんでる時お前の苦しんでる姿見て少しでも喜ぶと思うか？」

「……いえ」

「分かっているならそんなこと絶対するなよ？これは主としての命令だからな。どんなに俺が苦しんでる時でも、俺を確実に助けるため、俺を喜ばせるために動け。先走ったり、絶望したりして身を犠牲になんて絶対にするなよ？分かったな？」

「……分かりました」

「ならそれでいい」

「ですが」

「ずるつとこけそうになるリヨウ。」

「さっき言ったはずなのだが。」

「先ほども申し上げた通り私は使い魔です。リヨウ殿の命令には従いますが、もし自らを犠牲にしてリヨウ殿が助かるのなら私はその選択肢を選びます」

「お前も頑固だな」

「これだけは絶対に譲れません」

「……分かったよ。用は俺がその状況に追い込まれなきゃいい話だもんな」

「確かに私もこの点はありませんかと思えます。リヨウ殿は世界一ですから」

「イプシン先輩にボコボコにされてるけどな」

「そ、それでもリヨウ殿は最強なんです！」

なんだそりやと苦笑する。

本当にいい使い魔を持ったとこのタイミングで確認させられる。

稀に、危なくなることがあるがそれを踏まえてもいいやつだと思う。

しかし、こんな風がいい時間を過ごししているとときに限って時間は残酷である。

「そういえばリヨウ殿」

「なんだ？」

「リヨウ殿が出かけると言った予定時刻まであと5分です」

「……………」

「リヨウ、ちよつといいかしら？」



ドアをたたたくマーシヤ。

しかし、返事はない。

「留守…、かしら？」

「リヨウさんが休日の朝早くから留守なんて珍しいですね」

朝10時。

別に早い時間ではないのだがリヨウは大抵休日は9時ごろ朝食を食べ始める。

そのことを知っていたマーシヤは時間を合わせて10時ごろにここに来た。

だが、リヨウの部屋からは物音1つしない。

マーシヤとフィリアが来ていた。

いつもなら一緒にいるはずのリリアはなんでも今日は旧友と面会する予定があるらしい。

「面会って…それじゃ相手が犯罪者みたいじゃない」なんて言ったら「アハハ」と笑ってリリアは去っていった。

「え、マジ？」なんて思ったがそういう人だっているのだろう。

「弱ったわね…、せっかく訓練の相手をお願いしようと思ったのに」

「レックスさんはダメなんですか？」

「あいつ今日は絶対に部屋から出ないで過ごすって言ってたわ」

「まあ、久しぶりの丸一日休みですもんね…」

こんな日も訓練したいなんてフィリアは「上昇志向がありますね」なんて言っていたが理由はそれだけじゃない。

マーシヤは何か理由をつけてリヨウと一緒に行動したかったのだ。

巫女たちが来てから余計意識するようになってしまった。

本当は買い物とか食事とか行きたいのだがリヨウはおそらく目を丸くして驚く。

自分の気持ちに気づいてほしい反面、気づいてほしくないとも思っている以上そんな行動はできない。

だから訓練なんてなんとも面倒なことを頼もうとしたのだがいない。

「でも…どこ行つたのかしら？」

「外に出るには申請が必要ですからこの施設内にはいると思えますけど」

「訓練場にいるかしら」

「イプシンさんに呼び出しくらつた可能性もありますよね、お気に入りですし」

で、訓練場に来たのだが……

「いないんですか？」

「ここに居るのは俺とイプシンさんだけだ」

訓練場にいたのはクレアとイプシンだった。

しかし、訓練場に来ているのにドールの展開はしておらずただ座って話をしているよ  
うだった。

「となると…、後はどこでしょう？」

「あいつ行動範囲はあまり広くないはずなんだけど」

「後輩を探してるの？なら私8時前ぐらいに見たよ」

「ほんとですか」

「ミイヤじゃない1人の巫女と外に出て行ってたよ」

「……………でもリヨウって外出申請出しました？」

「巫女が客人だからいいんじゃないかな。護衛みたいな？」

予想以上の行動の早さに舌を巻く。

しかし相手が巫女となるとマーシャも黙ってはいない。

「フィリア、行くわよ」

「ど、どこへ？」

「リヨウの足跡を追うわ」

「外出申請は？」

「そんなもん知ったことじゃないわ」

「嫌ですよ私、捕まるの！」

「そこまで外に出たいのならミイヤを連れて行けばいいだろ」

「クレア先輩、それはいろいろ…」

「外に出たって行先を知らなきゃ意味ないだろ。あいつならそれぐらい造作もないと思うぞで」

一理ある。

というかそれなら確かに間違いない。

少し嫌ではあるが背に腹は代えられない。

ここは協力を仰ぐしかないだろう。

「…そうします。助言、ありがとうございます」

「ところでお前ら、今日リリアは一緒じゃないのか？」

「今日は旧友に会うということでしたので」

「旧友？」

「私たちが知らない人だそうです。ただ…」

「なんだ？」

「もしかすると彼氏かもしれないです」

クレアの持っていたペットボトルの容器が手から落ちた。

表情こそ変えてないがシヨツクなことに間違いはない。

マーシヤたちはリリアが嘘をついていることを知らない。

「彼氏が、いるのか？」

「違う施設の人ですが……いるそうです」

「……………先輩、急用が入ったので失礼します」

「急用？」

「リリアに新たな悦びを教えるために——」

「具体的な発言は控えてよ。タグの追加はごめんだよ？」

「ともかく失礼します」

クレアが足早に去っていく。

それを追うわけではないのだが、マーシヤたちもミイヤを探しに訓練場を去る。

イプシンが1人残った。

訓練場に1人残ると画的には悲しい。

「私にもいい人、現れないかなあ……」

切実に願うイプシンだった。

## 巫女とのデート part 1

しつかり整備された廊下を3人の人が歩く。

2人は警備員、そして1人は囚人なのか手に手錠がかけられている。

囚人には手錠の他に腕輪が唯一の装飾品としてつけられており、それが魔法の使用を抑えている。

廊下の壁側にはいくつもの鉄格子が続いている。

部屋分けされたその中には人がいる分にはいるが、数えられるほどしかない。  
発狂や暴れているような人はおらず静かに廊下を通る3人を見ている。

3人はやがて扉の前に立つ。

1人の警備員が前に立ち、指紋認証、パスコード入力を行い扉を開ける。

あつたのは真つ白な部屋。

真ん中はガラスのような透明な素材で区切られており、その前には椅子が置かれていた。

そして区切られたガラスの奥には1人、人が座っていた。

黙ったまま自分の席に囚人が座る。

「久しぶりね？」

リリアが静かに言った。

「なんですって!?!」

「本当よ、イプシンさんが嘘つくと思う?」

ミイヤが驚嘆の声を上げる。

部屋には服が散乱している。

ミイヤも今日はリヨウとデートでもと思っていたのだ。

妻と自負しているだけあって夫の生活リズムはある程度分かっているらしく、「11時ごろにでも」なんて思いながら服を選んでいた。

そんなところにマーシヤとフィリアがやってきた。

「リリン…、まさか行動に出るとは思ってもみなかったわ」

「それは尊敬？それとも憎しみ？」

「憎悪よ。私たちの間に割って入ってリヨウを奪うなんていい度胸じゃない」

一応ミイヤはマーシヤをライバルとして認めているのか、リヨウとマーシヤがいるときは憎悪というより「負けてられない！」というライバル心が湧く。

しかし、途中参加で割って入ったリリンやススには違う感情が湧くようだ。

マーシヤとミイヤ2人して出す似たような負のオーラがフィリアを怯えさせる。

フィリアは自分にはこれといったライバルや、敵が眼中に入ってなくて本当によかったなと思う。

「行くわよマーシヤ。準備は出来てるわ」

「ええ、といつてもさほど心配する必要はないと思うけどね」

「それは勿論よ。でも気に食わない」

「同感よ」

「あの…、私はこれで」

このオーラに耐えるのが辛くなったフィリアが部屋を出て行くこうとする。

別にフィリアはリヨウのことを好きなわけじゃない。



ケイトの話ならまだしもフィリアには関係のない話だ。

しかしマーシヤが帰ろうとするフィリアの首元をつかむ。

「な、何ですか？」

「ミイヤ、護衛は多いほうがいいわよね？」

「そうね。そっちのほうが安心だわ」

「え、えええ!!？」

「行くわよフィリア」

「無理です！私、修羅場とか絶対無理ですー!」

フィリアの叫びは虚しく、彼女も外に出ることになった。

---

「そうですか？ずいぶん遅れているんですね、地球というところは」

テーブルに置かれたティーカップを持ちお茶を口に含むリリン。テーブルをリヨウ、サク、リリンの3人が囲むようにして座っていた。

リヨウはサクを連れて軍の施設の外に来ていた。

今いるのはどこだかよくわからない場所のカフェ。

涼しい室内があつたにもかかわらず、外で過ごしている。

ここのカフェは正直リヨウとしては居心地があまり良くなかった。

理由は雰囲気。

どこからともなく漏れてくる「静かに上品に」の空気がどうも肌に合わない。

サクもそれを感じ取っているのか、慣れないフォークを頑張つて使いケーキを口に運んでいる。

最近になってようやく理解してきたのだが、使い魔たちは箸やスプーン類の扱いがうまくないらしい。

もともと野生ならば箸なんて使う場面はないから仕方ないのかもしれないとも思つたのだが、刃物は器用に使うもんだからよくわからない。

「あくまで俺のいた時代の話だけだな」

「と、いいますと?」

「ここに俺を連れてきた奴が言つてたんだよ。帰そうと思えば元の時代に帰せるって」

話すのが楽しいのか、笑顔で頷きながらケーキを口に運ぶ。

因みに服は巫女用ではない。

市販のものを前から持っていたのか、それを着ている。

あんな口調だから「ドレスでも着て来るんじゃないだろうな」と不安だったがそれは杞憂だった。

「帰る予定なのですか？」

「まだ決まってるじゃないが…可能性はあるな」

「でしたら、早いうちに共に寝れる関係にならないとだめですね」

「……………ハア」

「なんでため息なんですか？」

そんな理由、説明しなくてもわかるだろうと心の中で悪態をつく。

外の人とかかわりを避けていたのか、常識がなっていない。

いや、何も1人で生活してきたのではない。

お手伝いさんや住職だっていただろうからその人たちの教え方が間違っていたのだらう。

それか巫女はこうなるという呪いにかかっているか。

「リョウさん、私次ここへ行きたいのですがよろしいかしら？」

平べったい円形状の物体から画像が映し出される。

これを目の前で幾度となく見てしまったため、もし地球に帰ったら映画なんかじゃ微塵も驚けないんだろうなと思う。

映し出されていたのは店の画像。

外装は別に汚らしいわけじゃなく悪い気はしない。

だが、売っているものが問題だった。

女性下着、いわばランジェリーシヨップ。

ミイヤの女性用水着を選んだ時といい勝負かそれ以上だ。

「…俺はもうツッコまない、ツッコまないぞ」

「時間もあまりありませんからこれを選んだ後2店先の店、さらにそこで代行乗用車（タクシー）を使って——」

「そんなに行くところがあるのか？」

「ええ、ここら辺の物は肌触りがいいので」

「…もしかしてこれから行く先って全部？」

「下着の専門店ですわ」

「ミイヤの時よりタチが悪い！俺はお前の召使か!？」

「何言ってるんですの？殿方にも好きな下着というものがございましょう。共に選ぶの

は当然ですわ」

「なんでお前らつて必ず俺と寝るってことになってるんだらうな」

そこでハツと何か思いついたような顔をするリリン。

おもむろに立ち上がり、サクの目の前までくる。

ケーキを食べていたサクも「？」を浮かべながらリリンを見た。

リリンがしやがむ。

そして

「失礼しますわ」

そう言うときサクのスカートをめくった。

中の下着が露わになる。

何するんだと見ていたリヨウはすすりていた紅茶を吹き出す。

当の本人であるサクはめくられたことに羞恥心が無いのか「なにやってるんだこいつ」という顔を崩さない。

裸は恥ずかしいようだが、下着には大した関心は寄せてないようだ。

「思ったよりお子様向けですわね…」

そう言うときスカートを戻す。

リリンは昨日リヨウと行為に及んだであろうサクの下着を見れば趣味がわかるかと

思つたようだ。

「サク、もう少し羞恥心を持って……」

「ですがリヨウ殿、下着がある以上秘部が見られているわけではありませんし大丈夫だ  
と思うのですが。それに私は童の姿では裸です」

「それを言うと言も子もないな」

裸で俺に行為を迫ってきたときは恥ずかしがってただろ、と訊きたかったが蒸し返して何か起きるのも嫌なので訊くのはやめる。

「まあ、これから行くところにも似たような物はあるはずですし大丈夫ですわ」

「俺は行くとは言っていない」

「その子に何か買つてあげる次いでと思つてもらつても構いませんわ」

「それでもわざわざわざ女性のこと——」

「リヨウ殿、何か買つてくださるのですか？」

リリンの提案に反応するサク。

よほど嬉しいのか耳が小さく動き、目を輝かせている。

「やられた」と片手で顔を覆う。

ここで「違う」と否定すればサクのテンションの落ちようが半端ない。

耳も垂れ下がるし「不躰な物言いでした……」とこつちがひどい人であるかのような錯

覚に襲われるほどだ。

まるでそれも見越していたかのようにリリンが勝ち誇った顔をしている。

「…そうだな、なにか（下着）買ってやるか」

「本当ですか、ありがとうございます！」

「2人とも合意の上、のようですね。じゃあ行きますわよ、時間がもったいないですから」

時間はさほどかからなかった。

本当に時間を出来る限り有効に使いたいのか、すでに店を出た時から車が準備していて10分足らずで到着する。

店の前についた時のリヨウのテンションは限りなく低かった。

まさか彼女でもない上にデートすらしたことない人とこんなところに来るなんて夢にも思っていなかったのだ。

おそらく大丈夫だ。

リリンとサクがいるから不審者として見られることはない。

でも…嫌だ。

この気持ち、わかってくれるだろうか。

リリンはそんなことを考えることなくリヨウの手を引つ張り、店内へ入る。人がさほど多くないのが唯一の救いだろう。

下着の専門店というだけあってどこを見てもあれだった。別に売り物に興奮なんてするはずないのだが目のやり場に困る。

「リヨウ殿、これも下着というもの…なのですか？」

サクが震える手で持つてきたのはスケスケの下着。

サクの下着のイメージはもしも服やスカートがはだけてしまった時の防衛線。それが透けていては意味がない。

「それは見せたい人が履くやつだ」

「見せないために履くのに見せたいのですか？」

「そういう人もいるんだよ。お前はこんなの履くなよ？」

「私にはとてもそのような勇氣は…」

暗にそれ履いたら変態と少し過剰な意識を植え付ける。主としてサクには健全な道を歩んでほしい。

あいつとは違つて。

「リヨウさん、これなんてどうですか？」

面積が少ない。



少なすぎる。

っていうかヒモパンってやつだ。

肌触りが云々言ってたやつがヒモパンじゃ意味ないだろう。

笑顔で見せてきた。

笑顔は素直に美人だと思うのになぜ…。

「ハア…：マーシャさんたちは怖いです」

肩を落としながら町を歩くフィリア。

隣にはマーシャもミイヤもない。

外に出てすぐ別れたのだ。

理由はミイヤがリヨウの正確な位置を補足できないから。

ある程度の範囲は分かってもピンポイントでは無理なようだ。

リリンが追って来るのを予想して妨害をしているとかなんとか言ってた。

で、この辺りを探せといわれたので見て回っている状況。

さほど心配する必要がないのなら血眼になってまで探すことはないだろうと思う。

「ケイトさんと歩きたいなあ…」

ただ歩くだけでも隣に好きな人がいれば全然違うだろう。

そういえばお茶はよくしたが街中での買い物はしたことないなあと思う。

もともと付き合っているわけではない以上、そんなこと出来れば最初から付き合っているだろう。

リリアの言っていた言葉を思い出す。

恥ずかしがっているは何も起きない。

でも、もし断られたら自分はもうどうなってしまうのかと怖い。

マーシャたちに会うまで人と接するのを出来る限り避けていた結果、それに対する耐性がないのだ。

小さい頃の自分に戻ってもつと発言しろとでも言ってみようかと思う。

何もせずに後悔するよりなら行動に出て一か八かに賭けたほうがいい。

分かっているがどうしようもない。

でもただ隣に入れば満足というわけではない。

嬉しいのは確かだが足りない。

そこまで大人ではない。

本当にダメな人間というか、優柔不断というかこのことを考えると最近では自分のことを責めてばかりである。

俯き加減で歩いていると歩行者と肩をぶつけてしまった。

それで我に返る。

「す、すみません!」

相手も「気にしないでください」と言い、その場を後にする。

こんなことを考えて周りに迷惑をかけてはだめだと頬を叩き視界を周りに向ける。

今はリヨウを探そう言われているのだ。

ケイトのことを考える時ではない。

気持ちを入れ替え歩き始める。

と、ある1人の人が目に入った。

「……あれ?」

ここにいるはずのない人。

いてもおかしくはないが偶然にしては本当に出来すぎだ。

だが事実、目の前にいる。

その人の手にはいくつかのビニール袋を提げていた。

思わず近寄ってしまふ。

白にパーマのかかった髪、そうそういるものではない。

「経費削減だからって車ぐらい……」とぼやいている声が耳に入る。

間違いなかった。

思わず口元がニヤつく。

さつきまでいろいろ考えていたことなんてすでに忘れていた。

「ケイトさん」

今日ばかりは神とやらがいがいまいが感謝する。

振り返った彼の顔は驚いていた。

## 巫女とのデート part 2

「…でないわね、フィリア」

ワイヤレスのイヤホンを耳にあてながら返事を待っていたマーシヤ。

だが、フィリアが電話に出なかった。

隣ではミイヤが腕を組みながら貧乏ゆすりをしている。

ストローで紙コップに入った炭酸飲料を飲みながら。

顔は不満をあらわにしていた。

「もしかして先に帰ったのかしら？ほとんど強制だったし」

「でも1人で帰るのは無理よ。正規の外出届を出したわけじゃないんでしょ？」

「だとしたら…ケイトにでも会ったのかしら？」

「ないない。神はそんなに甘くないわよ、私が言うんだから間違いないわ」

その考えが合っているなんて2人はこの時夢にも思っではいなかった。

「そのうち顔出すわよ。それよりどうするのよ、リヨウは？」

「ここら辺にいるのは間違いないんだけど…建物が多いわね」

周りを見渡すと高い建物から小さな建物までひしめき合っている。

人の通りもとても多く、隣を通っても見過ごしてしまう可能性も無きにしも非ず。

「同じ巫女なんですよ？どこ行きたがるとかわからないの？」

「無理よ、巫女だからって人間であることに変わりはないわ。個性はそれぞれよ、でも……」

手がかりがないと頭を抱える二人。

マーシャもここまで手間取るとは思ってもみなかった。

ミイヤの探查能力は（リヨウ限定）そりゃすごいものである。

以前、5000人以上集まる集会的なものでもすぐにリヨウを見つけたようだ。

「でも?」

「絶対に下着は見に行くわ」

「……………」

「そこを見て回るしかないわ」

「なんで下着を？」

「なぜって…一緒に寝るときそれで気を削がれたら嫌じゃない！」

「外堀も埋めていない奴らがよく言うわね」

「リヨウは私をきれいって言ってくれたもの。きつと消極的なのよ」

ミイヤがこういう性格だったことを心からありがたく思うマーシャ。

今度神棚でも見つけたらお供え物でもするかと思う。

「さっ、そろそろ行くわよ。座ってても見つからないわ」

「そうね、もうひと頑張りよ」

「はあ…」

ため息をつくリヨウ。

ため息をつく理由は皆さん理解しているだろう。

すでに4軒目。

同じような店、しかもそれが女性の下着専門店だと精神的にくるダメージ量が半端ない。

サクもさすがに同じような店が続いているのでつまらなくなったのか眠たさそうにしていた。

「眠いなら竜の姿になってくれれば構わないぞ？」

「そ、そんなことはできません！ 使い魔たる者、リヨウ殿が外にいるのならば安全確保に

努めるのが当然……」

「言ってるそばからそれじゃないか」

瞼を重たそうに、必死に開けようとするがすぐに閉じる。

初めて会った時で2歳。

外見は相変わらず10歳前後だが、それでも6歳なのだ。

竜でいうところの子供か大人かは知らないが人でいえば間違いなく子供だ。

「ほら、膝を貸してやるから」

「そのようなお気遣いは不——」

「お前も竜の姿だと大きくなったからな、いつまでこういうこともできるか……」

「失礼します」

姿を変えてリヨウの膝に乗っかる。

そこから眠りにつくまでさほど時間はいらなかった。

ランジェリーショップで竜を膝にのせて座っている人なんておそらく定員は初めて

見たのだろう。

はじめはギョツとした顔をしたが、すぐに慣れてチラチラと見てくる。

手には先ほど買ってあげた新しい下着の入った袋を大事そうに持っている。

これがぬいぐるみとかだったら可愛らしく見えるんだけどなと少し残念に思う。



「リョウさん、これはどう思います?」

眠ったサクを撫でていると当たり前ながらリリンが下着を持ってきた。

今度は胸当ての方なのだが

「お前は際どいのが好きなのか?」

肌触りがいいからとか言っていたのに持つてくるものが9割がた面積が少ない。

1軒前でまともだといえるであろう普通のものを持つてきてくれた時は正直涙が出るかと思った。

周りの人は「恋人だろ」と思っているから何とも思っているからなのか何も言わないし、変な目線（サクに対するのを除く）は向いてこない。

恋人つてそこにも介入するものなのか?

「いまいちですの?」

「たぶんいい評価を出すことは一生ない」

「それはつまり…市販のものではなく特注を頼めと?」

「ああ言ったらこう言う…」

これがボケではないのだから救いようがない。

「肌触りがどうか言ってたろ、なんでそんな面積の少ないものを…」

「私が日常で使うものはすでに購入しましたわ。ただリョウさんと寝るときのはまだで

すの」

「…何着買うつもりだ？」

「1週間分あればいいと思いますわ」

「今何着買った？」

「あと6着ですわ」

「まだ1着しか買ってないのかよ！」

「あまり反応が良いものがなかったものですから」

「つまり一着は俺の反応が良かったと？」

「表には出さなくてもにじみ出るものがありますわ」

そんなことあったか？と思うが思い当たる物はない。

「これは本当にいまいちみたいですね。ならこちら——」

「なあ、楽しいか？」

「…と言いますと？」

疑問に思っていたことをぶつける。

ミイヤの時も思っていたが聞かなかった。

ミイヤやリリンはデートとしてリヨウと買い物に来ていたはずだ。

だがリヨウはあまり乗り気ではない。

半ば強制なのだから仕方ないだろう。

だが、それは外に出た後も行動に表れている。

「俺が原因だが…俺はお前と付き合っている人のように一緒に下着を選ぶわけじゃないし座ってるだけで。それでも楽しそうに見えるんだけど」

「ええ、楽しいですわ」

「どうして？」

「そうですわね…買い物物を一緒にしている人がいるという事実そのものが楽しいにつながるのかもしれませんがね。それにリヨウさん、あなたが初めてですの」

「何が？」

「こうして何も気にかげずただ買い物物を楽しんでいたのは」

予想していなかった答えにリヨウは驚きながらもどこかいらぬ同情をしていた。

いわれてみればそうだ。

リリンはこの世界に4人しか存在しない巫女。

そんな重要人物が一般人と同じように生活なんてできるはずがない。

仮に買い物物に出たとしても世間の偏見の目がある。

巫女と分かった瞬間、手のひらを返した人もいたに違いない。

そんな中、まだ知り合って間もなくはあるが好意の持てる異性ができた。

彼女たちにとつては一緒に居れるだけでもよほど嬉しいことなのだろう。

「ただ：リヨウさんにも楽しんでいただければ私としてはもつと嬉しいですわ」「ごめん、と言いたいところだけどこういう所じやさすがに…」

「それでは次回からはもう少し考えますわ」

「次があればそうしてくれ」

「ありますわ…あつ！」

「どうした？」

リリンが見ている方向に目を向ける。

何かすごい下着が並んでいたら嫌だったが見ていたのは天井近く。

そこにあつたのは時計。

針は1時45分を指している。

「確か…2時だったか？」

「そうですね、残念ですけど約束ですから」

「集合場所は？」

「案内しますわ。それより…まだ1着しか決まっていますわ」

「寝ないから。そこだけは理解してくれ」

「も…、もう私無理」

マーシヤが悲鳴を上げて近くに会ったベンチに座り込む。

「マーシヤ、そんな弱音聞きたくないわ」

「だって…さつきから店を一軒一軒見て回って、まるで不審者よ」

「近くにいるのよ！感じるのよ！それなのに見つけられないというムズ痒い感じ…」

「私から見るとここまで探しても見つからない以上アンタの探査能力を疑うんだけど？」

「ま、間違うはずないじゃない！私がリヨウの魔力を…」

さすがにここまで探しても見つからないと心配になるのか声がだんだん小さくなる。

別にマーシヤもミイヤの探査能力を実は疑ってはいない。

少し癪には触るが妻と自負しているだけはある。

それにもう無理と弱音を吐いたがリヨウには会いたいと思う。

ああ…、今顔をあげたら目線の先にも……………

「…ミイヤ」

「なに？」

「あれ」

マーシャの指さした方向に目を凝らす。

先にいたのはそれなりの画になっている女性と男性。

男性の腕には少し大きな竜が気持ちよさそうに寝ている。

男性の顔は決して嫌そうではない（嬉しそうでもない）が、女性の顔は喜びに満ち溢れている。

「……………」

「やっと思つたと思つたらリヨウの奴、思つたより——」

「リイ…リイ…ンンン……………」

皮肉を言おうとしたマーシャがミイヤのドス黒いオーラによって止められる。

マーシャもリリンに対していい評価は持っていなかったがここまでではない。

「ミ、ミイヤ？」

「マーシャ、行くわよ」

「い、行くってこのまま直進!?前と話が違う…ってミイヤ!」

結構な人ごみの中、リリンとリヨウたちはススが待っているという集合場所へ向かっている。

リヨウの腕の中にはサクが未だに眠っている。

こんな人ごみの中でも眠れるサクの適応能力？に少しばかり尊敬した。

「お前、楽しそうだな？」

「こういう時間も楽しまないと損ですわ」

リリンの手には買い物袋はぶら下がっていない。

どこぞの部下なのか召使かが来て持って行ってしまった。

2人っきりのデートを所望していたようだがこれでは違うのだけはないかと思う。

その時、ミイヤならサリス達にでも持たせるのでは？と思つたので使い魔について聞いたところ彼女は持っていないようだ。

勿論、手に入れることは可能だが興味がないらしい。

サリス、ノリスのような専用の使い魔を持っているのはミイヤの家系だけのようだ。

昔からのことなので理由は知らないようだ。

「なあ、次はススとかいうやつと合流するんだよな？」

「そうですわ」

「そいつ、どういうやつなんだ？」

聞いておくことに越したことはない。

対策が打てるのならば打っておきたい。

また下着を見て回るなんてことになるのならば、ススとやらには悪いが帰るし。

「そうですわね…好きなきことがゲ——」

突然肩をつかまれるリリン。

その握力の強さに顔をしかめる。

「いったいなんです——」

再び言葉が途切れた。

後ろにいたのは感情とは裏腹に笑顔を必死で作っているミイヤだった。

さすがに人通りが多いこの場所で鬼も逃げするような表情を作るわけにはいかない。

「ミイヤ、よくここがわかりましたわね？」

「歩いて探し回ったのよ」

「昔の貴方でしたら体力不足になるはずでしたのに…、学校とやらはすごいですわね」

「そんなことより…何やってるのかしら？」



ミイヤから出るドス黒いオーラにリヨウは思わずたじろぐ。

リリンは慣れているのか全くたじろがないどころか笑顔で受け答えしている。

「マーシャ…これは一体どうなってる?」

護衛という名目で来ている誰かがいる。

そんなの1人しかいないだろう。

「アンタと今日買い物に行きたかつたらしくて…それで探しに来ただけど2, 3時間歩きながら探したから」

「…理解した」

理解はしたがここからどうしようもない。

リヨウに気の利いた答えなんてわからないし、帰ろうにも護衛としてきているため巫女と一緒になければ帰れない。

しかし、マーシャとしてはこれはチャンスかもしれない。

ミイヤ達は何かしら言い争いをしている。

リヨウと自分が入っていきけず困っている。

なら少し離れたところで買い物…いや、カフェにでも入って涼しいところで待つというのはどうだろう。

あわよくば買い物に付き合ってもらうのもアリではないだろうか?

「ね、ねえリヨウ」

こんなお願い初めてだ。

自然な流れだと自分に言い聞かせるが恥ずかしい。

「も…もしよかつたら、その………これが終わるまで………か…カフェとかで！」

自分らしくないお願いかもしれない。

でもマーシヤだつて女なのだからこれくらい………

「えーつと…あの…なんかゴメン」

変わった返事の前に違和感。

聞いたことのある声だがリヨウのではない。

「……………クロ？」

少し気まずそうに苦笑いをするクロ。

かつこいいとは言えないが相変わらずかわいいなら文句なく頷く。

「い、いつから？」

「ね、ねえリヨウ。から」

「最初つからいるならそこで返事しなさいよ、私ものすごく恥ずかしいことしてない!？」

「だめだよ、お決まりだもん。それに恥ずかしいのはそんなに顔を赤くしてるからで…」

「そ、そんなことないわよ！つていうかりヨウは!？」

「し…知りたかったら…その手を放して…」

いつの間にかクロの首にかかっていた手を放すマーシャ。

少しせき込んだクロを見る所それなりの力が出ていたらしい。

「し…死ぬかと思った」

「で、リヨウは？」

「ススさんに連れていかれた」

「ススって…もしかして巫女？」

「そうだね」

リヨウのデート（午後の部）が、そしてマーシャとミイヤの追跡が再び始まった。

## 巫女とのデート part 3

「ほらリヨウ君、集中しないと！」

「リヨウ殿、頑張ってください！」

「あ、ああ」

目の前には今では過去の遺産となりかけているクレーンゲーム機が置いてある。

この世界でこのゲーム機は何十年も前の旧式ゲーム機であり、これをやろうとするのはよほどの物好きと言われているし、数も少ない。

こんな状況になってから約1時間が経とうとしている。

だが、リヨウには理解できなかった。

なぜこの巫女、ススはこうなのか。

今まで体感してきた中ではとてもあり得ない状況。

なんで…

「(なんでこいつは普通なんだ…!?)」

|||||

ミイヤとリリンが言い争いをしているとき、何もすることができずただ突っ立っていたリヨウ。

隣ではマーシヤがなんか悩んでいるのか、あるいは暇なのにイラついているのかもじもじしていた。

気持ちは分からなくもない。

というかよくわかる。

そしてリヨウはふと思いつくことがあった。

このタイミングで暇そうなマーシヤを誘ってどこかで涼むのはどうだろうか？

うまく目を盗んでどこかに行けばススとやらには悪いがもう面倒な思いはしなくて済むはずだ。

マーシヤ相手なら気を使う必要なんてないし、まさか「下着を選びたい」なんて意味不明な発言はしないだろう。

この世界では最も信頼がおける相手であり、世話になった人である。

にもかかわらず、これといったことをしていないことに気づいたので。

せっかく外に来ているのだから常識がなっているマーシヤの頼みの1つや2つぐら

いなら…。

「なあ、マーシャ」

「いないよ」

変な返事に「は？」と疑問を持つ。

しかし、疑問はそれだけにはとどまらなかった。

「あれ、ここは？」

さつきまで人ごみの中にいたはず。

なのにここは少しばかり薄暗い建物の中。

天井にはこの世界では珍しい電球で書かれた看板がついている。

「ゲーム」と書いてある。

「ほら、リヨウ君。いつまで呆けているのさ？」

呼ばれたほうを見る。

いたのは1人の女性。

見た覚えのある顔だ。

「ススさん？」

「名前覚えてくれててありがとう。まずこの子を返すよ」

ススの腕には女性には少しばかり大きい竜が眠っている。

すぐに分かった。

サクだ。

さっきまで自分の腕の中にいたはずなのにいつの間にかススの腕の中にいる。

「どうして…?」

「いや、寝てる姿がかわいかったから。つい、ね」

「そうじゃなくて…いったい何が起きたんだ?」

サクが突然瞬間移動した。

リヨウもいつの間にか知らない場所に飛ばされている。

何が起こったかサツパリだ。

今までこの世界で不思議なことには幾度となくあつてきたがここまでのことはない。

「ああ、それはねこれを使ったんだ」

チエーンがついている手のひらサイズの小さな時計を取り出す。

「?」

「ミィヤの獄鉦じくなたと同じ神器だよ。これは獄刻じくく」

「じ、神器?」

「聞いてないの?意外だね、まあ別に知る必要もないけどさ」

なんだか思っていたのと違うのに少しばかり戸惑うリヨウ。

雰囲気はもちろんのこと、言動も違う。

服もデートをしたがっているというより、適当に選んできたのかオシヤレとは言い難い。

何をしたのかは知らないが跳ばされた場所はゲームセンター。

「ほら、それよりさっさと行こうよ」

「行こうって？」

「ここに来たんだからゲームやってかないと！取ってもらいたい物もあるんだ」

「とる？盗むって意味じゃないよな？」

「知らない？クレーンゲームっていう…」

「知ってるぞ。地球にはたくさんあったからな」

「なら話は早いね、早く行こうよ」

|||||

それからはゲームセンターに入り普通に堪能中。



内装は地球でよく見たシューティングゲームや、クレインゲームはもちろん、1プレイごとにカードが出てくるゲーム台、レースゲームやプリクラとよく似た物など充実していた。

少しばかり大きな音にサクも目を覚ましたが、見たこともない物がそこら中にあるのに興味を持ちそれなりに楽しんでる。

で、今は慣れないながらクレインゲームをやっている。

この手のゲームはどうも1人ではやる気になれなかった。

なんか金をただ搾取されている感じがして嫌だったのだ。

「あー、また失敗だあ」

「リヨウ殿、次こそはいけますー！」

「そうだよ、次で取れるよー！」

「典型的な金だけ持つていかれるパターンだ、これ」

「パターン？」

「あー…、ともかくまだやるか？（パターンの言い換えが分からなかった）」

「逸材君、ここで引き下がったら君はただの軍人だ。それでもいいのかい？」

「そこはこだわってないし、っていうか逸材だったのは学生の頃の話だぞ？」

「そんな細かいことは気にしないでさ、それよりホラ」

通貨を取り出す。

いや、取り出すというより鞆からすくい出しているの方がいるの方が正しい。ススの腰にかかっている少しばかり大きめのポシェットの中には一杯にお金が入っているのだ。

鞆をこんな使い方している人をリヨウは初めて見た。

「それならお前がやればいいだろ？」

「私は苦手なんだよ、それに女は男を立てないと」

「俺もあまりやったことないんだけどな……」

「いいからいいから、ほらあれとってよ」

押されて半分仕方なく再び挑戦する。

半分といったのは実はどこか楽しんでいる自分もいたからだ。

身の狭い思いをするような場所にいるわけではない。

むしろ楽しめる場所で楽しんでいる。

いやな思いなどする余地がないのだ。

「「あつー」」

と、予想外なことに狙っていた人形が取れた。

ウサギの人形。

この世界にもいるらしい。

というか地球にいた大半の生き物は細かく種類分けしていくとどうか分からないが、

○ウサギはともかく、ウサギは存在するのだ。

竜がいるにもかかわらず進化の過程が良く違わなかったなと少し感心した。

「ほら」

「わあ、ありがとうー！」

それをもらって喜ぶスス。

素直に喜ばれるとリヨウも嬉しい。

だが、サクは少し不満気だ。

「べ、別に私は他のものがあるのかまいません」

「そういえばサクちゃん、さつきから何を大事そうに抱えてるの?」

「リヨウ殿に買ってもらったものです」

「中身は?」

「下着です」

「えっ…下着?」

なんでそんな物買ってるのと顔が訴えている。

リヨウは泣きたくなってきた。

絶対勘違いされているという意味と、常識を備えた巫女も存在するんだという感動のせいで。

「これはリリンと一緒にいったところがね…」

「変わったところ行っただね…。ま、いいよ。それより次あれやろうよ」

「シューティングゲームか、懐かしいな。よし、じゃあやるか」

「……………ああ、いない!」

ミイヤが悲痛の叫びをあげる。

隣でマーシヤは何食わぬ顔でジュースを飲んでいる。

「ちよつとマーシヤ、なんでそんな平然としているのよ」

「なんでって…、ススさんって人があなたたちとは違うってわかったからじゃない?」

リヨウがいなくなつて約1時間、ミイヤは相変わらず苦戦する中リヨウの魔力をたどろうとしている。

ミイヤは必至こいて探している中、マーシヤは平然としていた。

理由はクロにススについて聞いたから。

なんともまあ普通の人だった。

変貌されたらちよつとあれだけクロから聞く限りではとてもそんな人には思えない。

確かに他の女性と遊びに行っていると考えるといい気分ではないが普通の人とわかっただけでどういうわけか安心感がこみ上げてきたのだ。

「久しぶりに会ってから一週間ちよつとしか経ってないけどおかしいわ…、なんで恋人らしいことが何一つできてないの？」

「アンタが恋人じゃないからじゃない？」

「あれだけ誘惑しても襲ってこないのよ…まさかマーシャ、あなたすでに夜の営みにまどぎぎつけたの!？」

ストローを加えていた口からジュースが勢いよく吹き出る。

「…は？」

「一週間の間にあともうちよつとまでまどぎぎつけた回数は2回。少し頑張った数なんて数えきれないのにすべて流されているのよ!男が盛らない理由は1つ、だれか相手がいるからよ!マーシャ、1回貸して。いや、この際3人ででもいいからリョウとやらせなさい!1回機会があれば十分よ!」

「な、何言つてんのよアンタ！歩きすぎて頭がおかしくなったんじゃないの!？」  
「ずるいわよ！私たち友達でしょ、彼氏の1人くらい貸してよ！」

「彼氏は普通1人でしょ！それに友達だからって彼氏貸す人そうそういないわよ！」

「何言つてんのよ、私もう20過ぎて大人よ！本に書いてあったことが間違いなわけないじゃない！」

「アンタよく今まで生きてこれたわね」

あー！つと頭を掻き毟るミイヤ。

でも、ミイヤの話を聞いてマーシヤも少し疑問を持つ。

男性が女性にそれだけ好意がもたれていると理解しているのだ。

それに裸まで見せてもらっているのに襲わないとはどういうことだろうか。

彼女がいて申し訳なく思うから手を出さないのであるか。

リヨウなら彼女がいればそうするかもしれないが、その場合いったい誰が……

「あつ」

「何？」

「リリア」

「？」

「あの子、彼氏できたって言ったのよ！」

「!?」

「知らない人だと言ってたけれど…リヨウが知らない人と会つてるところ見たことないし、もしかしたら!」

「…敵は内側に潜んでいたのね」

リリアもまさかこんな勘違いをされるとは思つてもみなかつただろう。

変な嘘のせいで敵ができてしまった。

「でも今日はリリアどこか行つちやつてるのよね…」

「なら今はリヨウを探すわ。リリアの名前出せば本当なら分かるわよ」

頷き合う2人。

再び足を進め始めた。

「はあ…あの子は体力あるね」

「新しいもの好きだからな」

ススとリヨウが座りながらサクを見る。

2人はある程度遊んで少し休憩している。

サクはまだ遊び足りないのか今はリズムゲームで楽しんでいる。

お金はススからもらえるので遊びたい放題。

リヨウは遠慮するのだがサクはどうも好奇心が勝ってしまい、ゲームをやるためにもらう。

「今日は本当にありがとう、リヨウ君」

「何がだ？」

「何がって…遊びに付き合ってくれてだよ。もともと巫女だから友達少なくてね、それに縛りも結構多くて。終いにはこんな旧式のゲームが好きだと共感してくれる人が少なくてさ、来るにしても1人だったから」

「楽しいのにな」

「ね」

共感してくれる人を見つけられてうれしいのか笑顔を作る。

おそらくススも同じなのだろう。



人と接したいのだ。

多くの人と。

巫女であるからという偏見のせいで接してくれる人は極端に少なくなるし、いろいろ巫女ならではの縛りがあるはずだ。

ミイヤの時だつてそうだった。

学校に入学してきたとき、彼女がどう周りと接するのか疑問だった。

寺ではゴミだの屑だの言っていた。

だが結果、ミイヤは巫女という身分を隠し続けたものの周りとよく笑って接していた。

「…ねえリョウ君」

「なんだ？」

何を思ったのか突然表情が変わる。

真剣な表情…どこかに嫌な感じが見え隠れするが。

「好きな人にこんなこと訊くのはちよつとあれかもしれないんだけど…いいかな？」

「できる限りは答えるよ」

「……………なんで軍人やってるの？」

「と、いうと？」

「リヨウ君は軍人に向いてない」

返ってきた答えに戸惑った。

まさかそんなことを断言するとは思ってもみなかったからだ。

「変なこと言つてごめんね。でも感じ取れなくて」

「なにが？」

「う〜ん…言い方が悪くなるけど人殺しの感覚が」

言いにくそうに少し声を小さくして言つた。

「ごめんね、でも優しく言い換えるのもあまりよくないと思つたから」

「でも俺は命の駆け引きなら幾度となく…」

「自分で手をかけたことはないでしょ？」

「それは…」

「今年の精鋭たちには多いと思つてたんだ。別に悪いことじゃないよ、むしろそんな感覚は味わうべきじゃないもん。でもね、その中でもリヨウ君だけは耐性があるかどうか心配なんだよ」

「俺が人を手にかけてたらどうなるか分からないということか？」

「地球つてところはここよりはるかに平和だったみたいだからね、最悪壊れるんじゃないかって少しばかり心配なんだ」

「壊れるだなんてそんな…」

「決してありえないことじゃないよ。現にこの世界にだって初めて人を殺した軍の人が壊れた例だってある」

見てきたことがるのか話をしていると顔が暗くなった。

「君がどういう理由があつて軍に志願したのかなんて知らないけど絶対にそこでじゃなきゃダメなの？」

「…いや、たぶん違うところでもできないことはないと思う」

「だったら違う職に変えることを——」

「でも人を殺すことになるのは変わりないと思う」

ミリーナは直感でリヨウを選んだといったがあながち間違いはなかったのだろうとリヨウは思い始めていた。

自分の力を過信するつもりはないが、ここまで生き延びてきた。

手を貸してもらいながらも敵を退けてきた。

「ミリーナは俺を直感で選んだって（未来予測できるとか言ってたけど信用してない）言つてた。はじめこそ絶対に危ないことに首は突っ込まないなんて思つてたが今はみんなを守りたい」

「それだけの力があるの？」

「秘められてはいる…と思う」

「思うって…」

「どちらにしても人を殺さないためにここを離れるなんて嫌なんだ。それで仲間が死んだらそれこそ壊れる。お前なら分かるんじゃないのか？」

「……………」

「だからまあ、軍をやめるつもりはない。壊れる壊れないは関係ないさ」

黙るスス。

だが少しするとニツと笑ったかと思うとリョウの背中をたたく。

「流石私が惚れた男。無用な心配だったね」

「結構痛いよ、ススさん…」

「いや、にしても今日はありがとう。本当に楽しかったし有意義な時間がとれたよ」

「なんだ、もういいのか？」

「巫女は多忙なんだよ、軍に呼ばれて仕事も増えたし。どうしてもって言うなら今晚私の部屋に来る？ 時間は作るよ」

「すまん…巫女が言うとお冗談に聞こえないんだ」

「そうなの？ まあ、来てくれたら多少は相手してあげてもいいんだけど」

そう言いながらポシエットをあさるスス。

あつた、と言いなながら獄刻とかいう名前の時計を取り出す。

「あの子には申し訳ないけど今日はここまで」

「なんでそれを取り出す?」

「なんとなくわかつてると思うけどこれは時間を止められるからね。制限はあるけど帰るまでの時間短縮だよ。じゃ、またね」

「ああ——」

返事をする暇はなかった。

気づけば視界には全然違う景色が広がっていた。

明るい外の世界。

突然明るくなった景色に目を細める。

と、胸に衝撃が走る。

「?」

目の前でサクが頭に?を浮かべながら止まっている。

何のゲームをやっていたのか知らないがちょうど叩くところだったのだろう。

状況を把握するにつれ顔を真っ青にしていく。

「も、もももももも申し訳ございません!リョウ殿にこのようなご無礼を!」

「いや、そんな痛くなかったし気にしてないから」

「切腹を持つて罪を償わせて…」

「何言ってるんだ!?!頼むからやめてくれ、少しも怒ってないから!」

震えながらナイフを持ち出すサクを必死に抑えるリヨウ。

場所がいいからか人が少ないのが幸いした。

たまにこうなるから危なっかしい。

「リヨウ……ウ……ウ……」

そんなさなか聞こえてくる声。

声だけで誰かなんてすぐに分かる。

声が聞こえたほうに顔を向けるとミイヤがダイビングジャンプをしていた。

鈍い悲鳴を上げたリヨウだがそんな声は聞こえることなくミイヤが腹に飛び込んで

くる。

反射的にキャッチしたが2、3メートル地面を滑った。

「ミイヤ…もうちよつと平和的な登場の仕方はないのか?」

「気持ちのほうが勝っちゃったのよ、さあ今からでもデートしましょ!」

「……まで来たら変なところ以外はかまわないんだけど…?」

ミイヤを退かして起き上がろうとすると自分の体の下に何か柔らかいものが敷かれ

ていることに気づく。

ここは外で、周りを見る限りコンクリートの床なはずなのにおかしい。そこで今度はリヨウは顔を真っ青にする。

「サク!?!」

見てみればサクが目を回してぐったりしていた。

口から泡を吹いている。

上から2人の圧力と下はコンクリートの圧力。

その痛さは計り知れない。

「サク、今ケイトに診せに行くからな!」

「ちよ、ちよつとリヨウ!?!」

何の迷いもなくドールを展開するリヨウ。

街中で理由なくこんなことをするのは規律違反である。

ミイヤの手をつかむと周りを見渡す。

何をするのかわからないが自分の手を自らつないでくれたことに顔を赤らめるミイヤ。

「な、何やってるのよリヨウ!」

後から来たマーシヤがドールを展開しているリヨウを見て慌てて駆け寄っているのを見つける。

リヨウが全速力でマーシヤに近づく。

この時にミイヤはリヨウが何がしたいのかなんとなく理解して顔を真っ青にした。

「リヨウ、街中でドールの展開は——」

「マーシヤ、そんなことはいいから！」

「そんなこと……つてキャツ!?!」

有無を言わずマーシヤを抱え込む。

その行動にミイヤと同様に顔を赤らめたが隣に泡吹いたサクと、青い顔したミイヤがいる。

「えっ?まさか……え?!」

「落ちるなよ!」

「リヨ、リヨウ!待っ………」

---

「な、なかなかいいものだったわ。空でのデートつても……」



「ミイヤ、そこは強がらなくていいところよ……」

疲れた顔をしてマーシヤとミイヤが廊下を歩いている。

泡吹いたサクを心配したリヨウがまさかあそこまでするとは思わなかった。

生身で6段階目のドールの速さを体験なんてしたらたまつたもんじやないことぐらい誰でもわかるはずだ。

踏んだり蹴つたりだのため息をつく。

「あつ、ハハハよ」

「さすがに9時には帰ってきてるでしょ」

リリアの部屋を前にして歩みを止める2人。

リヨウに真相を聞けなかったため、リリアに聞こうと決めたのだ。

しかし、ドアをノックしようと近づいたとき

「や、やめて……………んー」

「……………」

扉越しであるため聞こえずらいのだがそれらしい声が確かに聞こえる。

驚きのあまり2人の声が出ない。

ガツタガツタと何かが揺れる音もする。

「……………はしないって……………」

「……ければ…のか？」

「…いう……あり……」

えっ、マジだったの!?!と実はあんなこと言ったけど自分自身が一番ありえないだろうと思っていたマーシヤが啞然とする。

聞こえるのはおそらくリリアと男の人の声。

もつと鮮明に聞こえればと無駄に防音になっている施設の設備を憎む。

「や………アツ………」

どうにかして中の状況を確認したい。

変態と思われるかもしれないがそういうわけじゃない。

もし、中にいる男がリヨウだというのなら問い詰める…いや、リヨウに何の問題があるのだろうか。

別にリヨウはマーシヤともミイヤとも付き合っているわけではない。

誰と付き合いおうと勝手だしこういうのは別に違反でもない。

むしろここで変な努力をしようか探っている自分のほうが問題ではないだろうか？

マーシヤの思考回路はいたって冷静かつ普通だった。

しかし、

「リリアアアアア！」

勢いよく扉を開けるミイヤ。

ミイヤはマーシヤとは全然違った。

マーシヤに対して3人ででもいいからリヨウとやらせろと言ったほどのだ。

扉が開いていたことに對しての疑問なんてマーシヤは感じていない。

ミイヤの行動に驚いていてそれ以外考えることができない。

そうしている間にもズンズン部屋の奥に入っていくミイヤ。

マーシヤもハツとして急いで止めようとするが時すでに遅し。

玄関を開けてさらにもう1つあつた扉を開ける。

「私にも1回やらせ……………」

止まるミイヤ。

当たり前ながら奥にいる2人の声も聞こえない。

ミイヤが止まるってそんな過激なことを？と興味本位で覗くマーシヤ。

よく考えれば考え付いた結果だった。

だが、疲れていたからだろう。

そこにいたのは裸のクレアとリリア。

どうやってリリアを裸にしているのかなんて疑問はとうの昔に持たないことにした。

全員が止まる。

そして

「失礼しましたあ」

最初に声を出したのはミイヤ。

マーシヤもそれと一緒にその場を去る。

「ちよ、助けに来てくれたんじゃないの!？」

悲痛な叫びが聞こえたが耳をふさぐ。

2人にそれを止めるほどの気力は残っていなかった。

「今日は早めに寝たほうがいいわね」

「そうね」

しつかり扉を閉めながら部屋を出る。

「じゃ、また明日」

「ええ、おやすみ」

「マーシヤアアアアアアア、ミイヤアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その叫び声だけは鮮明に聞こえていた。

## 兆候

「まだできないのか？」

「パパの作った物の数々、その中でも跳びぬけて出来のいい作品の1つなの。あと少し時間がほしいの」

ミリーナの部屋で2人が立って話している。

グネズトはミリーナの方を見ているがミリーナは忙しそうにコンピュータをいじくっている。

画面にはもう暗号にしか見えない文字が並んでいる。

子供にはどう見ても操作できそうにない。

だが操作をしている。

「お前の父親は鏡侵空域を作って何をしたかったんだか……。負の遺産以外の何物でもない」

「パパは……危険を察知したから作ったんだと思うの。この世界は進みすぎたから」

「とうとうと？」

「この星は宇宙という空間に存在しているの。つまり地球と接触する可能性があるの、

外に出た場合」

地球という言葉に反応を示すグネズト。

自分の故郷の名前を久しぶりに聞いたからだろう。

「でも、それは杞憂だったの」

「？」

「パパは勘違いをしていたの。パパはここに転移したとは理解していたけど時間軸もおかしくなってるとは思ってもみなかったの」

「…つまり？」

「この世界の科学の発展は目覚ましかつたの、それに魔法もあった。もしこの星の人が外へ侵略の力を向ければ地球は勝てないと思つたの。たとえ魔法がこの星の外では使えなくても地球とこの星とでは科学力に圧倒的差があつたの」

「でも今の地球の科学力は実は決してこの星と比べても劣るものではなかつた」

ミリーナが頷いて応える。

アヤトはこの世界に跳ばされたとき、ただ空間を移動しただけだと思つていたのだ。

その頃のカザキもそれは然りだった。

ただ実際は時間もすさまじく進んでいたのだ。

「安全装置ってことか？」

「うん。ただ、優しく言えばの話だけどなの」

「まだ何かあるのか？」

「もう一つ、知られていない顔があるの」

「それは？」

動かしていた手を止めるミリーナ。

寂しそうに大人の雰囲気醸し出しながら言った。

「!!」

3人で囲むテーブル。

そこに座っているのはマーシャ、フィリア、リリア。

フィリアは何かいいことがあったのかあからさまに機嫌がよさそうだが、2人は暗い。

リヨウが巫女たちに連れまわされてから2日経っている。それでも抜けきっていないようだ（3人とも）。

「フィリア、何かいいことあったの？」

「？突然ですね、どうかしました？」

「私とリリアが疲れ切っているのにあなたからはなんか『幸せ者です』っていう雰囲気醸し出されてて、誰が見ても一目瞭然なのよ」

「そ、そんなことないですよ！それよりもマーシャさんたちが気分下げすぎなんじゃないですか？」

「なんかね…疲れたのよ。見たくもない百合を見せられて」

「私は止めてって言ったわよ！」

バンバンとテーパールを叩くりリア。

いつも通りギリギリは守ってくれたようだが激しかったのか未だにぐったりしている。

おそらく精神的にきているんだろう。

それでもクレアを嫌いにならないのはクレアを理解しているからこそなのかもしれない。

「驚いたわよ。刑務所行って帰ってきたら部長がものすごいこと口走ってるんだもの、



「お金はためておく必要があるわね」

「どうやったたらそういう結論になるのよ？」

「こつちの話よ。でもフィリア、私も訊くわ。何かあったの？」

「え、ええとですね…。先日、ケイトさんと買い物に行きましてね」

「へえ、進展してるのね」

少しもじもじしながら話すフィリア。

フィリアも自分が少しきつく言ったのがフィリアには届いてくれたのかと素直に喜ぶ。

ただ、なぜか予想もしていなかったデカすぎる代償を支払うことになってしまったが。

「どっちから誘ったの？」

「そういうわけじゃなく、街中歩いてたら偶然会ったんですよ」

「それから？」

「それから…といますと？」

「何か進展があったからそんなに嬉しそうなんですよ？告白とまではいかないだろうから…部屋にでも上げてもらえたかあわよくばどさくさにまぎれてキスでもできたの？」

「キ、キキキキキキスだなんて！私にはまだ20年早いですよ！」

「20年後は40歳過ぎてるわよ」

言葉だけで顔を思いっきり赤面させるフィリア。

こいつ今までよく生きてこれたなあとリリアが感心する。

20過ぎてても男女の付き合いはおろか、キスすらしたことがない女性。

ある意味貴重である。

この歳であれば。

「フィリア、あなたそれは恥かしがりやの領域を超えてるわよ。それじゃあいくらケイトと付き合い合っても1年ともたないわよ」

「え、そうなんですか!？」

「だって…子供じゃないんだから。お手手つないで仲良しです!じゃ、無理でしょ。付き合つて1年もキスすらなければ『気が変わった?』と思われて破局よ」

「そうね、年頃の男性ならやらせてくれない女性は用無しになるわよ」

「だ、男性つてそういうもんなんですか?」

男性に女性の気持ちか理解しがたいように、女性には男性の気持ちか理解しがたい。

特にフィリアはおとなしめの人なのだから関わる男性は少ない。

ある意味気持ちかわからないというのは仕方ないのかもしれない。

「まあ、やるやらないは置いておいて…キスぐらいはしてあげなさいよ。付き合ったら」

「でも…恥かしいじゃないですか。顔が目の前にあるんですよ。リリアさんも最初は恥

かしかつたでしょう?」

「別に付き合ってる人相手ならキスぐらいいくらでもしてあげるわよ。減るもんじやな  
ら?」

「減る減らないの問題じゃありません! 恥かしいって言ってるんです!」  
「なら想像でもして耐性つけたら?」

「想像…」

おい、したことないのかよ。と思わず言いそうになつたりリア。

好きな人がいるのならそれくらいしてもおかしくないだろと思う。

しばらく止まるフィリア。

やがて顔を真っ赤にしたかと思うとテーブルに顔面をぶつける。

「フィリア、大丈夫?」

「どれだけ純粹なのかしら?」

「ここまでくると純粹というより面倒って言ったほうが正しいわよ」

「いつそのこと、フィリアを裸にしてケイトの部屋に寝かせない? 既成事実ができると思  
うんだけど」

「あー…それもあり——」

いつも危険は突然やってくるものである。

突如、フロア全体にけたたましい警報が鳴り響く。

ここで一般人なら「なんだ?！」と慌てるところだが流石軍人。

テーブルに顔を伏せていたフィリアでさえも起き上がりすぐに行動に移る。

決まって警報が鳴った時に移動できるのなら、グネズトが用意した部屋に集まる。

そういうことになっている。

警報が鳴って30秒。

廊下を走っていた3人に警報の理由が伝わる。

『通達、第7施設にて敵襲あり。現在、敵と正門にて交戦中。戦闘員は指示があるまで待

機せよ。繰り返す——』

「敵の情報はなし…みたいね」

「でも正門で止めてるようですからあまり強い敵ではないのではないのでしょうか。油断

は禁物ですけど」

「7番にも私たちくらい強い人配備すればいいのに」

裏の人間を含めなければグネズト部隊は実質最強である。

それは7段階目のドールをもつ者がいる時点で決定的であるのだが、何も表で活躍する者の中でもネーム持ちはグネズトの部隊に全員とられているわけではない。

抗争があるわけではないが「ネーム持ちいるしこっちの部隊の方が強いんじゃない?」

と勘違いするバカも中に入る。

グネズトはとった後の伸びも考慮して選んでいるのだ。

「大佐みたいな教官があと100人くらい増えればそれも実現できるわよ」

「笑えないし無理な話ね」

「それ、大佐を教官としてはなく戦闘員として配備するべきだと思うんですけど」

しゃべりながらも足は休めない。

やがてグネズトが言っていた場所にたどり着く。

部屋の中は正面に電子掲示板のようなものが張り付いており、あとは地面にはくっついて椅子と机が並んでいるだけのシンプルなつくり。

部屋にはすでにほとんどの人が集まっていた。

「おう、マーシャ」

「状況は？」

「イプシン先輩だけ出て行った、たぶんそれで十分だろ」

「どういうこと？」

「敵が機械兵だけなんだよ」

「機械兵ってこの前もいた？」

「ああ、数とか攻められてる具合にもよるけど今回は正門で食い止められてるみたいだ

したぶん問題ないと思うぞ」

マーシヤたちは直には戦ったことはない。

だが、これにはマーシヤも安心した。

イプシンが向かったのだ。

何も無理に戦いに行く必要はない。

むしろ邪魔になってしまう可能性もある。

「残念ながらそうもいかないぞ」

話を聞いていたのか、グネズトが話しかけてきた。

「何かあったんですか？」

「思ったより侵攻されている。放送した時とは状況が変わった。現在はC区画まで侵入されてる」

「私たちはどうすれば？」

「マーシヤとリヨウはB区画をレックスとクロはC区画に行ってくれ。マグタランはA区画に応援としてすでに向かわせた。あとの者はここで指示があるまで待機しててくれ」

「「了解」」

「始めたのか？」

「はい、すでにEが準備を進めています」

カザキの前でTがしゃべっている。

最近はこういうことも多くなった。

以前はエジリスの下についていたのと、何よりカザキに用がなかったため顔を合わせることはほとんどなかった。

戦いは近づきつつあると実感する。

「1週間以内には成果が上がると聞いていたが？」

「E自身もそう言っております。ただポルテスに問題が起ころとどうなるか……」

「調整は終了した。外からの力も受け付けられないだろうし問題ない。それよりお前らも準備は整っているんだろうな？」

「準備は万全です」

「そうか」

それを聞いて満足気な顔をする。

「あの、主君」

「なんだ？」

「…なぜあのアマミヤという者にこだわるのでしょうか？ 同じ地球人とはいえ、最終兵器とはいえ私たちに任せて頂ければすぐにでも…」

「お前たちを信用していないわけじゃない。ただな…」

「ただ？」

「ミリーナが連れてきた最終兵器だ。俺が殺つてこそあいつも諦めるといふものだ。そうしてもらわないとアレも起動できんからな」

「それは？」

「いずれ教えよう、実物を交えてな」



## 忍び寄る影

「マーシヤもリヨウも…、これは特別なんだからね？もつと自分の体は大切にしないといけないよ」

「でも命の取り合いなんだからこれくらいで済んだと…」

「リヨウの実力があればここまで深手を負うことはないと思うんだけどな」

慌ただしく活動を行っている衛生班の人員。

リヨウとマーシヤがそんな中、ベッドに横になってケイトからの治療を受けていた。

「5回中3回もこんなけがをしてたら命がいくつあっても足りないんだから」

「お前がいるからこれくらいすぐ治るだろ」

「あ…、分かってない…」

やれやれと頭を振るケイト。

リヨウたちがけがをした理由はたった4、5時間前にある。

ここ最近、突如増えた敵襲。

巫女の2人とデートに出てからまだ1週間と経っていない。

にもかかわらず襲撃が5回もあった。

敵は全部機械兵。

以前エルドとラムドが襲撃したときに一緒についてきたのと同じ型のもの。

別段強いわけではないのだが、数で攻めてくると攻めるところがリヨウたちの施設ではないため必ずと言っていいほど毎回死傷者が出ている。

そんなため、珍しく衛生班がフル稼働しているのだ。

どんな傷を見ても折れる人を見ることがない。

それだけ精神力の強い人たちの集まりなのだろう。

「信用してくれるのは俺としてもありがたいけど、死体だったら僕は手すら付ける気はないからね」

「瀕死だったらいんだろ？十分だ」

「……………マーシャさん、君の教育がなってないからこうなるんだよ」

「いや、それはおかしいでしょ！私は親じゃな痛！」

「そんな大声上げたら痛いよ、もうちよつとでリヨウの治療終わるから……………よし」

リヨウに触れていた手を退かす。

リヨウは調子を確かめるように肩を回したり飛び跳ねたりする。

頷いたところから見て絶好調らしい。

「じゃあマーシャさん、手を出して」

ケイトの治療法は他とは全く違う。

傷口に触れる必要がなく、どこかその人の一部に触れられればいいのだ。

恥ずかしいだのなんだの言ってる暇なんてないこともあるだろうが女性としては服を脱がなくてもいいこともありありがたい話だろう。

「でも、なんで襲ってくるんだらうね？」

「戦争だからだろ」

「そうじゃなくてさ…、今回強襲を仕掛けてくる機械兵つてあまり強くないみたいじゃん。でも塵も積もれば山となるっていうし、中途半端に攻撃を仕掛けてくるくらいなら一気に使うべきだと思うんだ。言っちゃ悪いけど、現に死傷者は出ても大した被害にはなっていないし」

「それ、私も思ってた」

「他に目的があるのか、或はただの余興か」

「余興だろ、今までだってそんな感じだった」

「だといんだけど…」

突然けたたましい音が鳴り響く。

全員は反応するというより「またか」といった感じで各々の行動をする。

警報が鳴ったとはいえ、聞く回数が多くなるとどうも危機感が薄れてしまうのだ。

『通達、第5施設にて敵襲あり。現在敵は正門を突破し、B区画まで侵入している。戦闘員はこれを撃退して下さい。繰り返します——』

「ケイト」

「リヨウはもう大丈夫です。体を大切にしながら戦ってください」

「私も早くしてよ！」

「マーシヤさんはもう少し必要です。今回は休んでてください」

「でも……！」

「マーシヤ、大丈夫だよ。俺以上に強いイプシンさんが出るんだ。あんな機械兵、すぐにぺちゃんこになるさ」

「……………」

「じゃ、行ってくるぜ」

リヨウが走ってその場を後にする。

マーシヤはそれを心配そうな眼をして見送る。

ケイトにもそれは一目瞭然だった。

「弱いよー！」

イプシンの拳が機械兵の頭を捉える。

その頭は転げ落ちることなく粉々に碎ける。

7段階目で戦ってくれているのは彼女のみだ。

リヨウたちは知らないが裏で活躍する人員はこんな表舞台には現れない。

裏の人も含めれば戦闘能力は飛躍的に上昇するだろう。

だが、表舞台に現れないから裏の人間なのだ。

「リアちゃん、まな板、そっちの状況はどうなってるかな？」

『C区画はあらかた片付いてます』

『まな板じゃありません！A区画はもう少しかかりそうです』

アルファベット順にAの方が入り口に近く、Zの方が入り組んでいく（Zまで区画は存在しないが）。

フィリアがAに割り当てられたのはまあ、運が悪かった…としか言えない。

それでもフィリアだってグネズトの部隊の一員である。

あくまでその中では戦闘能力が低いということになっているが強いことに変わりはない。

ない。

「フラちゃん」

「…少なくともここには見当たらないわ」

「ん…ハズレ引いたか、或は全部ハズレだったのか」

彼女たち姉妹のみの間で成り立っている会話。

一端の戦闘員には主語が抜けすぎていて意味不明である。

「姉さん、とりあえずC区画に…」

「そうだね、急ごうか」

「数が多いですよお…!」

少しずつではあるが押されつつあるフィリアにいるA区画。

正門に近いだけあって敵がどんどんだれ込んでくる。

泣き言を上げるがそれでは何も変わらない。

もともと持久力の少ないフィリアには長い時間の戦闘は圧倒的に不利なのだ。

「スノー、怪我人は!?」

「これ以上増えると守りきれません!」

それに彼女は優しすぎた。

負傷した兵士を守りながらの戦闘となると時間がかかる。

応援が来るのを待っていた。

そんなところにやってくる1人。

槍が敵を貫く。

「リヨウさん!」

「フィリア、無事だな?」

「すみません、どうも長い時間の戦闘は慣れてなくて…」

「気にするな。すぐにイプシン先輩も来るだろうしそれまでくらいなら何体来たって俺

は——」

「リヨウウー——!」

言葉を遮るように大きな声が聞こえる。

リヨウが通ってきた道を1人の女性がついてきていた。

ミイヤである。

周りでミイヤを殺そうとする敵を華麗に避けてきた。

おそらく殺すよりも避けたほうが早く移動できるからそうしたのだろう。  
リヨウにがっしりとしがみつく。

「会いたかったわ！」

「1週間ぶりの登場がこれか……」

「あの3人とずっとこもりつきりで儀式して本当に大変だったのよ！少しぐらい夫のぬくもりで気力を補充しないと」

デートの後、ミイヤ達巫女は何かすることがあつたらしくリヨウたちの目の前に姿を現さなかつた。

それから1週間、もし襲撃がなければ本当にリヨウにとっては平和そのものだったに違いない。

巫女たちのやることとやらが終わったようだ。

それが何を意味しているのかまでは一部の人間にしか分からないが。

「じゃあ、あとで補充させてやるから今はこいつらを殺るぞ」

「えっ、それって——」

「寝るんじゃないからな」

うう、と少し落ち込むミイヤ。

だがそれも一瞬のこと。



リヨウに抱き着くのはいいんだ。といいほうに解釈したのだろう（抱き着くと言ってもリヨウの思い描いているのは別物の可能性あり）。

すぐに前を見据えて札を取り出す。

「獄鉈じくなた」

突如札が伸びる。

伸びた札は何かに巻き付くように長い棒が出来上がる。

リヨウはそれを初めて見た。

一週間前のススの言葉を思い出す。

「神器……」

「暴れるわよー」

勢いよく獄鉈を振り回す。

刃に当たった敵が次から次へとなぎ倒されていく。

型はなつてないように見えるが、逆に型がないおかげなのか隙こそ多いが当たった敵が刃の部分でなくても潰されていく。

ミイヤにこんな戦い方があったのかと驚きだ。

「フィリア、行け」

「いいんですか？」

「スノーと兵士を連れて負傷した人を防衛しながらな。B区画はイプシン先輩たちが戦つてたんだろ？ B区画からの転移装置なら安全なはずだ」

「…分かりました。スノー」

「了解です」

フィリアの合図に戦闘員が一斉に引き始める。

数は別に多いわけではないし、フィリアの部下というわけでもない。

だが、疲弊しきっていた彼らにとつて自分たちより強い人からの撤退命令は聞かない理由がない。

引いていく兵士を追おうとする機会兵。

しかし、リヨウたちはそれを許さない。

「そういえばこうやって共闘するの初めてだな」

「そうだったかしら？」

「寺での共闘とは言い難いからな…」

「大丈夫よ、夫婦の息はぴったしだから♪」

「言うと思ったよ。まあ、負ける気がしないという点は賛成だけだな！」

「…異常なし、だね」

「いやいや、これをどう見たら異常なしになるんですか？」

イプシンの眩きに驚いた顔したリリアが疑問を投げかける。

周りで起き上がる敵はいない。

まだ機能しているのかチカチカと発光する機体も見当たすが、体はすでにボロボロで起き上がることは不可能。

それが面白いのかランとリンはつついて遊んでいる。

敵の応援も見当たらないため、リリアたちも一安心している。

「忍び込むなら奥まで侵入するからAかCならCに来ると思っただけ…」

「今回も何もないと考えたら？」

「その可能性もあるけど…、いや、そうなのかなあ？」

「あの…さつきから何を話してるんですか」

一般の戦闘員と同様に意味が分からないリリア。

「リアちゃん、この襲撃の意味って何だと思う?」

「…確かに効率が悪いような気はしますけど」

「考えればいろいろ可能性は出てくるけど姉さんと私が有力だと思ったのが2つ。こうしている間に何かしらの準備をしている。もう1つは」

「どさくさにまぎれて忍び込む」

後ろで硬いものが壊れる音がした。

ランが倒れている機体の首をもぎ取ったのだ。

「リアちゃんも知ってるよね、あの機体の中身」

「いろいろな回路だったり機械だったり詰め込まれていますけど」

「あれね、おそらく要らないものなんだよ」

「?!」

「つまり、やろうと思えばあの中を空洞にして自動ではなく手動で動かすことができるようになるのよ。勿論、中身を減らして自動もできるわ」

「あんな感じなら中に人がいれば生きてられるだろうしね」

「イプシンが指さした方向を見るとランとリングが首をもぎ取った機体が横たわっている。」

他に見当たらない損傷は胸の真ん中に空いた直径5cmほどの穴のみ。

この機体の中枢、いわば脳に当たるものだ。

誰だって脳を壊せば死んだと思うものである。

だが、それは自動で動く場合のみ。

いや、中身を減らせるのならうまく操作して中枢の位置を変えることだって可能だろう。

「人より一回り、或は二回りほど大きな機体。ああやって横たわってれば死んでると勘違いしてみんな処理場、或は研究施設に運ぶ」

「…少し考えすぎなんじゃ」

「疑心暗鬼になってはいけないのはわかってるよ、だけど頭にはしっかり留めておかないと」

「杞憂だといいのだけれど…」

## 内に潜む

「終了ー！」

ミイヤの一言が発せられると同時に機械兵が真つ二つに割れる。

しばしの間痙攣しているかのように動いていた機械兵だったが、やがて光をなくし完全に停止した。

それを確認したミイヤは「ふう」と息をつきしばしの間止まる。

フィリアが戦闘員を連れて撤退してから時間はそう経ってはいなかった。

生憎、速さ自慢のフィリアなのでリヨウたちが急いで向かつても追いつくことはできないだろうが不思議なくらい早く終わったのだ。

ただ、それに反して床に横たわっている機体の数は尋常ではない。

「リヨウ殿ー！」

そこへサクが到着する。

急いでいたのか少しばかり息が荒い。

「サク、もう終わったぞ」

「終わったぞ、じゃありません！治療を終えてすぐでは命がいくつあっても足りません

よ!?もし出るにしても私に一言声をお掛け下さい」

「お前もケイトと同じようなこと言うなあ…」

「当然です、皆口に出さないだけで同じことを言いたがってますよ!」

「んく…、まあ悪かったよ。そうだな、お前は俺の使い魔なんだからここに来るにしても呼ぶべきだったか。心配してくれてありがとうな」

サクの頭をなでる。

何か言いた気だったサクも、これに気を良くしたのか少し頬を膨らませているがそれだけに抑えた。

リヨウはあたりを見渡す。

別にとてつもなく広いというわけでもないがサッカーの試合場の半分ほどはあるであろう部屋の足の踏み場がなくなっている。

これをもしも余興程度の考えでしかしているのならば彼らにはそれだけ財力があるということになる。

まともに土地も持っていないはずの彼らがどうやってこれだけの資源を手に入れていいのか。

いや、魔法があるこの世界。

水や土、火や電気さえも魔力さえあれば作り出すことができる以上考えても無駄だな

と考えるのをやめる。

「リヨウ！」

ミイヤが抱き着いてきた。

まあ、これくらいは妥協するかとそのままにする。

その行動にサクがご立腹である。

「リヨウ殿、何故されるがままなのですか？」

「いつもの過激なのと比べるとな、これくらいなら別にいいよ」

「リヨウ殿、それは少し感覚がおかしくなってますよ。その状況ではどう見ても恋人同士です」

「そうか？」

「そうです」

以前のリヨウならサクと全く同じ意見だったに違いない。

だが、サクの言う通り感覚が少しばかり鈍くなってしまったようだ。

人間の環境に対する適応能力はすごいものである。

「ねえリヨウ。1週間の疲れをとるために……」

「何度も言うようだけどそれはだめだ。そんな関係じゃないだろ」

「1回体を重ねれば分かるわよ。だから……ね？」



抱き着く力が少し強くなる。

それと同時にミイヤの胸の感触が伝わってくる。

それに顔を赤くしたリヨウだが、引きはがす。

「ダメだつて。せつかくの美人がそんなことしたら価値下がるぞ」

「私、誰でもいいってわけじゃないのよ。リヨウがいいの、たとえ女として価値が下がったとしてもリヨウが見てくれるならそれでいいわ」

「俺は幸せ者だな。でもな——」

静かだった元戦場のここに1つの音がした。

それは音というよりは爆発音のほうに近い。

3人が音の方を振り向いたとき、そこには1体の機械兵の姿。

見た目は無傷なところから見ると死んだふりをしていたらしい。

しかし、その行動の速さは今迄からは見て取れないほどのものだった。

無傷と理解する前に相手は動いて3人の目の前まで来ていたのだ。

「!？」

驚くことだけできた。

だがリヨウがそれに反応するには少しばかり時間が足りなかった。

俊敏に動くためか、敵の武器はナイフ。

「くっ！」

しかし、反応できないのはあくまでもリヨウの話。

主のことを常に気にかけていた、そして速さが自慢のサクにとってはギリギリながらも反応できる速度だった。

サクも自分の武器を取り出しリヨウへの直撃をそらす。

一瞬、強く刃のぶつかり合った音がした。

サクが敵の攻撃を見事に受け流した。

これが予想外だったのか、相手が後退する。

その時点でようやくリヨウとミイヤの思考が働き始めた。

「サク、大丈夫か!？」

「……………」

しばらく黙っていたサクだったが、彼女の頬から血が流れ始めた。

大した出血量ではない。

「無傷とはいきませんでした…」

「油断してた、助かったよ」

それだけ言うと、改めて敵を見据える。

相手も黙ったまんま構えていた。

おそらくこのまま背を向ければそれが命取りになることが分かっているのだろう。それを考えれば中に人がいるのは明白である。

「どうするべきだと思う?」

「…生け捕りが望ましいと思う。でも、無理だろ?」

「リヨウを殺そうとしたから、つてのもあるけど機体の中になると勝手が違うもの。確かに…」

言い終わる前にミイヤが動き出した。

「無理ね!」

鉈を使い、相手に攻撃をする。

リヨウはこの鉈がどんな能力を持っているか知らない。

神器とか名前がついているのだからそれなりの効力があるのだろうと思うが想像なんてできるわけがないだろう。

ススとかいう巫女のものは時間を一時的に止められるもの。

そんなバカげた力を想像できるわけがない。

リヨウも動き出そう、としたのだが何かがおかしい。

どこか腑に落ちない点があるのだ。

「加勢いたします」

サクが加勢にはいる。

彼女のバトルスタイルは自慢の速さを利用して相手の動きを封じ込めるもの。ワイヤーを使つてバランスを崩したところを一撃で仕留める。

そして事態がすぐに動いた。

サクが加勢して10秒と経たないうちに相手はサクの掌の上で踊らされ始める。

ありとあらゆるところにワイヤーの網を伸ばし動ける範囲を狭めていく。

リヨウから見てもわかるぐらい相手が動揺していた。

いくら一撃で決めるつもりだったにしてもおかしすぎる。

やがて相手の逃げ場がなくなりついには足を取られた。

一瞬、相手に隙ができる。

その一瞬をサクは逃さない。

敵がワイヤーを解こうともがく暇すら与えなかった。

相手の真上に立ち、刃を首元に突きつける。

「終わりです」

敵に囁くように言ったサクはその刃を首に押し込んだ。

機械の破壊音が鳴り、刃を抜いた後には血が噴き出す。

そしてその機体は力なく機体の山の上に横たわった。

あふれだした鮮血が人の存在を物語っていた。

「……………」

しかし、リヨウと同じようにサクも腑に落ちない点があるのか顔は喜んでいなかった。

ミイヤは機体の体を鈍で切り裂く。

中から出てきたすでに動くことのない死体があった。

脈を確認して死んでいると理解する。

「これじゃ油断も隙もないわね…」

「同感だな、それよりミイヤ。こいつおかしくなかったか？」

「？」

「正直言つて…最初とそのあとでは別人だった」

最初の不意打ちの時、リヨウは反応できなかった。

サクでさえギリギリのところまで止めることができたものの、サクでさえそんな結果だった。

なのにいざ戦闘になってみれば2対1だからってあまりにあっけなさ過ぎた。

生け捕りにできないと考えたのもそれだけの実力、或は速さを持っていると思っただけでこれならどうでもなったかもしれない。

「動揺したんじゃないの、初撃を外して」

「こつちの情報はあらかたあちらに漏れてると考えたほうがいい。俺を狙うならサクがいることも想定できるはずだ。それにミイヤ、お前もいた。終いには俺たちを真正面から斬りつけようとして……なんか納得がいかない」

「気が動転していたとも考えられるわよ、死屍累々、まあ機械だけだ」

「……まあ、考えても答えが出るわけもないか」

ため息をつく。

さすがに1週間のうちにここまで命の取り合いが多いと精神的にはそれなりに疲労している。

肉体はケイトの治療で回復しても精神は無理だ。

「とりあえず先輩たちと合流するか、行くぞサク」

足の踏み場のない空間をドールを使って浮かぶことで難なく後にしようとする。

だが

「サク？」

返事がなく、おまけに隣に戻ってくる気配もしない。

嫌な予感がしてすぐに後ろを振り向く。

後ろではさつきまで元気だったサクが地面に横たわっていた。

「サク、どうした!？」

急いで駆け寄ろうとする。

刹那、リヨウの首に強い衝撃が走る。

痛いと思う暇もなくその場に倒れこんだ。

「……………」

黙ったまま、袖から小さな通信機を取り出す。

「…今終了しました。ハイ、はい。…それでは」

「

「マーシャさん、元気そうで何よりです」

「あなたは元気というよりうれしそうね」

いまだに衛生班の人員は忙しそうに稼働していた。

近くではうめき声も聞こえるのであまり騒ぐのはよくない。

「嬉しそうって……こんなところ来てるのにですか？」

「あんたの場合はこんなところに来てるから、でしょ」

「？」

「とりあえず視線はこつちで固定しなさい。チラチラ見てるのは分かってるわよ  
こんな時でも好きな人の近くにいるのはうれいものである。」

フィリアはマーシャの指摘に顔を赤くして俯いてしまった。

「まあ、別にいいんだけど。早いとこ約束も果たしてもらいたいし」

「約束？」

「キスしてないでしょ？早くしてほしいわね」

「まだあれは有効だったんですか!？」

「誰が無効って言ったのよ？だいた——」

「リヨウ、どこく？」

近くで見知った声がした。

周りも少しぎわついている。

せめて服装だけでも変えるべきだろうと思う。

「あら、ミィヤ。1週間ぶり」

「マーシャ、フィリア。久しぶりね。ところでリヨウ見なかった？」



「リヨウに何の用？」

「今の私の状態分かる？リヨウの魔力が辿れないほど疲れ切ってるのよ…、気力を補給しない」と

「なら教える必要ないわね。リヨウのためにも黙っておくわ」

「…フィリアは教えてくれるわよね？」

不思議そうな顔をしているフィリア。

「どうしたの？」

「教えてくれたって…先ほど会ったばかりですよね？」

「会ってたら少なくとも1日は一緒に行動してるわよ」

「でも…さつき…」

「どういうこと？」

「A区画にリヨウさんとミイヤさんが来たので任せて私たちは退いたんです」

「でもここにいる…？」

見間違いなわけではないと頭を悩ませるフィリア。

「偽物…？」

「そんなことって」

「私たちはネーム持ちの力を把握しきってないわ。もしそうだったら…？」

「リヨウが危ない……！」

勢いよく立ち上がり走って出ていくマーシヤ。

勿論ながらミイヤも後に続く。

衛生班の人が止めようとしていたがその制止を無視して飛び出していった。

「スノー、もし何か言われたらお願いしますね」

隣で竜の姿でゆっくりしているスノーはそれを聞いて頷く。

3人がリヨウのところへ向かった。

## 強奪

「……………そろそろかしら？」

1人、ミイヤが眩く。

機体のある程度どかして綺麗な床を確保して座っていた。

ゆっくり立ち上がると、周りに積み上げていた機体を綺麗にした床の上に散らかす。

機体の上は無造作に倒れていたリヨウを担ぎ上げる。

そのままサクの倒れている方に歩いていき、顔を持ち上げる。

明らかに反抗的な目をしている。

「まだ気力があるのね、でもそれだけじゃダメ。分かっているとと思うけど体が動かないでしょ？あまり長い時間そうしていると時期に肺や心臓も止まるわよ。命が惜しければ黙ってなさい」

「お……まへ、……………は？（おまえは？）」

「あなたのところにいる7段階目のドールを持つ少女に用があるの。まあ、用についてもただだ見てみたいだけなんだけど…ね」

「フィリア、大丈夫!？」

その声が聞こえたと同時にミイヤはサクを手から放す。

持ち上げられていた顔から力が抜けると何もできずにただ頭が地面に着く。

痛みが走るが声を上げること、顔を歪めることさえもできない。

痛覚が残っているとは悪趣味な毒である。

「……ってミイヤ？それにリヨウ、サクも！」

てつきりフィリアがいると思つて来たらしい。

すれ違わなかつたようだ。

「アレ？まな板は？」

後ろからイプシンも顔を出す。

急いでいないところからすでに戦闘が終わっているのは分かっているようだ。

リヨウの状態を見て少し驚いたイプシンだったが特に行動は変わらない。

リリアがあせあせと狼狽しているのに対し、平然としている。

「ミイヤ、これは?!」

「見てのとおりよ、戦闘で負傷したの。リヨウは大丈夫だと思っけどサクがなんかやば

いわ」

リリアがサクを抱きかかえる。

手足に力が入っておらず、首もだらしなく垂れ下がりそうになっている。

「何かの毒だと思っわ、急いだほうがいい」

「私が連れてくわ、速さは軽量化すれば…」

不必要なパーツをすぐに取り外す。

体についていたパーツは砂が零れ落ちていくかのように綺麗に崩れ落ち、スタイルのいい体が浮かぶ。

決して速いわけではない。

だからこそ、何も言わずにその場を離れた。

入れ替わるかのようにフラットが入ってくる。

焦ったりリアを見て何事かと思ったが、すぐに目の前にいる嫌いな相手を視界に入れてしまい顔をしかめる。

「……姉さん、これは？」

「この機体の山を見る限り、報告書3枚は軽すぎるかな？」

「おい巫女、戦闘が終わったのならさっさとリヨウを連れて衛生班のところまで行け」

「…私何かしましたか？」

「前にも言ったはずよ、巫女は嫌いなもの。っていうか大半の人間がそのはずなんだけど」  
「申し訳ないですが私はここでやる必要がありますので」

嫌な人間がついてきたと心の中で毒づく。

「なら私が運ぶ」

「大丈夫です、リヨウは気絶してるだけですから」

「どうしてわかるのかしら？衛生班でもないお前に」

「……………外傷がなかったので」

「内側に問題があつたらどうするのかしら、死んだ人間を白髪ケイトは生き返らせてくれない

わよ」

「ま、まあまあ2人とも」

本来ならここでイブシンと2人つきりになったところを殺すつもりでいた。

サクには見るだけといったが思ったよりつまらなかった。

確かに胸はデカイ。

それに顔も童顔、背も小さくまぎれもなく幼女だろう。

だが、言ってしまうえばそれだけ。

生憎、女性に興味があるわけではないのでたわわに実った胸にも興味がない。

というか、揺れるところを見ると逆にイラつく。

しかし、殺そうにもフラットがいては自分もただでは済まない。

普通に戦えば負けるのが目に見えている。

死にはしないだろうが。

「フラちゃんもそんな偏見の目を向けなくて、ミイヤさんがなにをしたっていうの?」  
「……………」

「とりあえず、今はそんなことしてる暇ないから。ミイヤさん、もしものために後輩は一回診てもらわないと。何かすることがあるんだつたらしてもいいけどフラちゃんに後輩を渡して」

「…分かったわ」

この渡すとき、接近した時ならやれるかと思つたがやはり無理。

フラットを殺したとしても今度はイプシンに殺られる。

7段階目は化け物同然で、戦闘向きではない自分は足元にも及ばないのだ。

しぶしぶ、リヨウを渡す。

フラットに近づいたその時、

「!?!」

明らかな殺気。

一瞬嫌悪している巫女に対して向けられているものかと思ひ、平静を装うかと思つたがすぐに取り消す。

リヨウが手から離れた瞬間にフラットの刀が勢いよく振り下ろされた。

抜く瞬間は見えていない。

鮮血が腕から噴き出す。

「アアアアああアアアアああ!？」

左腕を持つていかれたことに気づくのに時間はいらなかった。

溢れ出る血液が機体に落ちてゆく。

「な……にを」

「偽物なんてそんなものだよ。辛いなら本当の姿を現したら?」

「言っている……意味が」

「黙りなさい。あなたが私にリヨウを預けた時点でもう偽物つて割れてるのよ。それともその姿で死ぬのがご所望かしら?」

「……………そんな、あいまいな理由で」

「私たちの中では天変地異よりありえないんだよ」

そんなところから自分の正体がばれるなんて少しも考えていなかった。

意味がない魔法はただ魔力を消費するだけ。

少しの迷いも見えない2人を前に、ミイヤの外装を解く。

ミイヤの体が空気に溶けていくかのように消えてゆき、代わりに見知らぬ女性が立っている。

女性は無言のまま、右腕を傷口に当て力いっぱい握りつぶす。



嫌な音がしながらも血の流れが止まった。

「あまりいい止血方法には見えないね」

「腕なんていくらでも代用できる。治療で生やすより圧倒的に早くね」

リヨウも回収した2人は優勢に立っている。

相手は手負いの雑魚1人だ。

強者ならいくらでも自分たちを殺せる時があつた。

だが動かなかつたということは戦闘には向いてないことを自覚していることをイプ

シンもフラットもよんでいた。

相手自身が自覚しているのなら戦闘に向いてないのは間違いない。

だが、

「まあいいわ。任務完遂はできたし」

「何?」

「あなたはいつまで<sup>死体</sup>それを持つてるの?」

フラットの頬に一滴の液体が飛ぶ。

遅れて膝の下あたりが湿つぽく、変な熱気を感じる。

下を見ると、足の肌の露出を許さない長ズボンが真っ赤に染まっていた。

持ち上げている<sup>死体</sup>その首から血が垂れている。

死んでしまっている死体は切り刻んでも血液はさほど出てこない。なぜなら心臓が動いていないからだ。

血液を流すためのポンプが壊れると血液は流れない。

それ故か、血だまりのようなものはできていない。

だが2人にとってそれはどうでもいい。

服が汚れようが血の海ができようが。

問題なのは自分たちの手元にいるのがリョウではないということ。

「S…」

2人はこれの予想はできなかった。

すべてに疑いを持っていた2人は偽物が来るかもしれないという可能性は頭にあつた。

ネーム持ちの中にそういう能力があるからだ。

だが、今敵が使っていた自分以外に対する効力の発揮はそのネームを極めた状態で発揮できるもの。

そんな秀才だとは考えていなかった。

「へえ、知ってるのね。その知識はいつたどこから?」

「敵に情報を渡すでも?」

「それもそうね、まあ……」

敵が魔法陣の描かれた紙を取り出す。

「ここで失礼するから別にいいわ」

「逃げる気？」

「レザー・S・アズール。一応名乗って——」

「リヨウさん！」

入口から焦った様子のフィリアたちが姿を現す。

フィリアの腕の中にはマーシャとミイヤが少し酔った感じで抱えられていた。

リヨウの時よりは加減してくれたので遅かったがそれでも十分なスピードが出ていた。

「あら、戻ってくるのが早いわね。ついでに本物まで連れてくるなんて」

「あ、あんたが、私の？」

「感謝するわよ、ミイヤ・ケリニアス。あなたほど相手に好意を露わにしてベタベタくつつく人はそうそういないから。おかげでこんなにも簡単に確保ができた」

「リヨウ!？」

リヨウの服の襟を掴み、離れているマーシャたちに見えるように掲げる。

それと同時に魔法陣が足元に広がる。

それに逸早くフラットが反応する。

逃げられるよりなら一か八かでも賭けに出る方を選んだ。

刀が再びレザーをとらえる。

だが、それは同じ刃で止められることになる。

「！」

どこから現れたのかレザーとフラットの間ブレベが立っている。

それに目を大きくしてイプシンが反応していた。

「遅いじゃない」

「俺の役目はお前の任務完遂を手伝うことだ」

「護衛ならちゃんと守ってよ」

「腕一本くらいなら持つてかれても魔法陣は出せるだろ？」

「よく言うわよ、予想外の人が出てきて驚いてたんじやないの？あなたの彼女だもんね。

それとも元を入れたほうがいいかしら？」

「……………」

押し返されたフラットがイプシンの隣に戻る。

「フラちゃん……」

「姉さんは手を出さないで」

何も言えずにただ下がるイプシン。

それに対してフラットは再びレーザーに斬りかかる。

それを止めるブレーベ。

「ブレーベ、私は先に失礼するから」

「ああ」

「待ちな……」

明らかに間に合わない。

イプシンでも、ましてやマーシヤやミイヤでも。

だが、1人いた。

まだ攻撃可能な人が。

フィリアが自分ができる最大のスピードを出す。

もともと彼女1人ならば普通の人なら穴あきにできるほどのスピードが出せるのだ。

だから視界に入る、ましてや普通の声量で話せるほどの距離にいるのだ。

間に合わないわけがなかった。

だが、

「あまいな」

フィリアの体が地面にたたきつけられる。

いや、たたくというより押しつぶされるの方が正しいだろうか。  
体が重くて動かない。

「これは……！」

「フラット、お前なら分かるだろ」

「一体どうやって……」

まともに立っているのはフラットとブレーベのみ。

後ろでレーザーでさえ、顔をしかめながらブレーベを睨みつける。

何かを言おうとしていたが魔法陣が強く輝く。

「チツ……まあ、じゃ」

「リヨ……ウー！」

一瞬、視界が真っ白になる。

次に視界が戻った時にはリヨもレーザーもいなくなっていた。

そしてブレーベも。

その空間だけが切り抜かれたかのように、一瞬のうちに消えていた。

「……………」

体の自由がきくようになった全員だったがすでにいなくなった敵を相手にどうする

こともできない。

「分かり切っていることだが、確認せずにはいられなかった。  
「リヨウ、は…?」

「やられたよ、完璧に油断してた」

## 本当の始まり

部屋の空気は当たり前ながら重い。

グネズトの部隊＋ミイヤがいる中、リヨウがいない。

ミイヤは「私をもっと早くリヨウのところに向かえれば……」と筋違いな責任を感じていた。

しかし、それはフィリアやマーシヤのようにその場にいた人たちも同じく思っていた。

自分が気づいていれば、自分にもっと力があればと嘆くが意味なんてない。

ふいにグネズトが顔を上げる。

誰かと話しているようには見えないのだが「わかった」と言うのと立ち上がる。

「サクは助かったそうさ」

「よかった」

イプシンが胸をなで下ろす。

通信機もないことからシエリーから連絡を受けたのだろう。

しかし、イプシン以外の表情は晴れない。



「グネズト」

1人の少女が扉を開けて入ってきた。

開けてというよりは、自動ドアなのだがラ勝手に開いたのほうがいい。

ミリーナの表情は曇ってもおらず、喜んでもおらず、ただ真剣。

「…済まなかったな、やられた」

グネズトが頭を下げた。

しかし、その行動に反応する者はいない。

ミリーナは「謝らないで」とでも言いたげに首を振る。

「ミリーナっていったわよね？」

ミリーナの視線がマーシヤのほうに向けられる。

マーシヤはミリーナを見ていない。

口は何か言おうとしているが怖くて言えないのか、少し唇が動いているのが分かる。

ミリーナが言いたいことを察する。

「5割、生きている確率も死んでいる確率も」

握っている手に力が入る。

「根拠は？」

「それが無いから5割なの。本来なら真っ先に殺すべきだと思うの。でも、リョウは力

ザキを殺せる最後の砦、それを彼は知ってるの。ただ、理由は知らないの」

「リヨウの代用は？」

「……………」

「できるのなら私はリヨウの負担をもっと早くから減らしてるの」

「クロー的なものは？」

「大佐！」

イプシンがあまりの暴言に声を出す。

ミイヤに至っては喰ってかかりそうな表情をしている。

「私はパパから電化製品を持つてくるよう頼まれたもの、例えばテレビは買って来ればそれで済むけど作ることはできないの。複製だって知識があるからできるけど、何一つそっち系の知識がなければ絶対に無理なの」

「…お前はいつも根本が抜けているな」

「あの時の私はあくまでも被験者、よく言っても患者っていう立場だったの。多くを知ってるはずがないの」

「……………」

それもそうかと肩を落とし考え込む。

「何かいろいろよくわからないことを言っているようですが…」

話が終わるのを見計らっていたクレアが口を開く。

彼女は平常運転で変わらない。

「これからどうするんですか？」

「…一刻を争う。攻め込みたいのだが…」

「一応鏡侵空域を無効化する装備は完成したの」

「え、なにそれ。初耳なんだけど」

イプシンが身を乗り出すようにミリーナを見る。

「ただ数がここにいる人分しか…」

「都合のいい数だな」

「優先的にあなたたちの分を作ったの。ただリヨウがいなくなっちゃったから1つ余ったけど」

「でもそれならリヨウを助けに行けるじゃない！」

ミイヤが目を輝かせる。

だが現実はそう甘くない。

全員黙ったまま。

すぐにミイヤも気づいた。

敵の本拠地にグネストの部隊のみで突っ込むのはあまりに無謀すぎるのだ。

「…打つ手なし、か」

「それでも私は行くわよ！黙ってみてるのは——」

「ミイヤ、お前ら巫女に敵陣に攻め込む余裕なんてないはずだ」

「……」

グネズトにはそこそこの権利がある。

だが、兵をすべて動かすなんて無理である。

すでに攻め込む時期は決まっていた。

ミリーナの鏡侵空域を無効化して通れるようになるという装備ができてから1週間以内。

ミリーナの存在は上の人間には知られている。

その素性も。

だからこそ、待つことにした。

だが、リヨウのことまでは言っていない。

ミリーナがあることが知られるのを恐れたから。

8段階目に行くためのキーパーツ、もつと言うなら存在を知られないため。

だから彼女にもそれなりの権利はある。

だが無理だ。

兵士は彼らの持ち物ではない。

今から殴り込みするからお前らついてこいって言ったってどこぞの組長ではないのだ。

正規の手続きを踏む必要がある。

そしてそれを踏んだって最低5日。

いや、5日で済めばよいほうだろう。

「くそ……友達一人助けられないのかよ……」

レックスの言葉が全員に重く押しかかる。

だがグネズト、実はある一つの手法を思いついていた。

おそらくそれならほぼ間違いなく軍の兵をほぼ持ち出すことができるはず。

内部まで潜り込むのは結局自分たちのみになるがそれは覚悟はしている。

いざとなればケイトを縛って持って行こうとも思っている。

しかし、その手法は自分が実行できるものではなかった。

ミリーナでも無理。

というかそれを果たして手法とってよいものか……。

『みんな、聞こえる!?!』

突如頭の中に響くように声が聞こえる。

はじめは違和感があつたが慣れた。

『簡単に伝えるわ、カザキが宣戦布告をしてきたの』

「タイムリングがいいな…」

「なにが？」

シエリーの声が聞こえないミリーナだけが首をかしげている。

『準備時間を与えるつもりはないみたい。すでに複数の敵を確認してるわ。何か言つてた、何かを確保したとかなんとか…』

相手に情報を伝えるのが仕事であるシエリーがテンパっているのが分かる。

相手の言葉を記憶しきれなかったのが何よりの証拠だ。

『まだ前線の基地でしか確認できてないけどすぐに大量に来ると思うわ、皆気を付けて。それと…』

そこで回線が切れた。

1人を除いて。

表情からするにグネズトのみが繋がっている。

話したいに違いない。

だがこの能力はあくまでも相手に情報を伝えることのみにはしか使えない。

グネズトが話すには通信機器が必要だがすぐには繋がらない。

話が終わったのか立ち上がる。

「ミリーナ、持ってきて来い」

「アイアイサーー！」

地球で覚えた言葉で返事をする。

状況はなんとなく伝わったのだろう。

その場から一瞬にしていなくなる。

「ミイヤ、さつきも言ったがお前は前線に参加できない。お前にはやるべきことがあるだろ」

「……………分かってる」

「なら、何をするべきかわかるな？」

「…マーシヤ、……………頼んだわよ」

「ええ」

そう言うとミイヤはその場を離れる。

どんな顔をしていたのか、マーシヤには見ることができなかつた。

「大佐にとつてはもつてこいの状態になつたな」

「どういう意味ですか？」

「相手が殴ってきたということは、こつちも殴り返す必要がある。敵が大勢でくるんだ

からこつちもそれなりに戦力が必要だろ？」

「つまり兵が？」

「どこまで動かせるかはわからないがどさくさにまぎれて攻撃に転じるのもアリ…だらうな」

軍に入つて初めての戦闘であるためいまち想像できないクロ。

攻撃に転じるって、そういうのもすべて書類を通すのかと頭の中で取り合えず処理する。

クロが帝国にいたころはお偉いさんに「ちよつと散歩行つていい？」と訊いて許可が下りればすぐ動けた。

それだけ上の人の権力がものすごかった。

「ただいま〜」

扉が開いてミリーナが戻ってきた。

瞬間移動ができるのに何故ここに直接飛ばないのだろうか？

帰ってきたミリーナの手にはいくつかのタブレットケースがあふれていた。

真つ黒であるそのケースを見る限り、あまりいい印象は受けない。

ミリーナはおもむろにフィリアの目の前まで行くとその掌に1つの錠剤を転がす。

「錠剤…これはっ？」



「鏡侵空域を自由に移動できるようにするための薬なの」

「薬だったんですか!？」

「着る型の物はお金がかかるの。これについてはかなり前から調べてたからここまでこぎつけたの。ただ……」

「ただ？」

「結局お金がかかったの♪」

親指を立てて舌を出し可愛らしくポーズをとる。

ただ、そこにいる人は一人を除いてそんなことはどうでも良かった。

科学側はリヨウを助けられるという希望、魔法側はひと暴れできるという希望。

グネズトだけはため息をついていたが。

「グネズト、いつ動くの?」

「今からすることは非正規のことだからな……。すぐだ」

「なら今飲んで大丈夫なの。継続時間に制限があるけど……気にするほど少短くないの」

「錠剤なら飲みながら移動できるだろう……。行くぞ。優先するべきはリヨウの救出だ」

「「了解!」」

「……ん」

不思議な感覚である。

寝起きというものはいつになってもあまりいい気分ではない。

あれに慣れというものは存在しないのだろうか？

さすががしい朝だと気持ちよく起きることはあるがその前段階の目を開ける時、それはいつになっても起きるのを渋るという行動をしてしまう。

だが、そんな感覚はない。

今まで普通に起きていたかのような感覚。

前にも何度か感じたことがある。

「リヨウ…」

名前を呼ばれてそっちを向く。

そこに立っていたのは影。

名前が影というのは何か違和感が残るがそれなりに愛着もある。

「時間が、ない」

「？」

「でも…あなたは強くなった。だからきつと大丈夫」

「??」

何か問いかけたいのだが声が出ない。

いや、何を問いかけようとすればいいのか分からない。

言葉は理解できるのだが。

「水は、今はいない」

そう言われて何故という疑問を持つ。

だが、疑問があってもなぜか口に出せない。

「時期が近いから眠ってる」

彼女一人の一方的な会話に疑問符のみが増えていく。

「私たちには分かるの、貴方がこれからさらに強くなれるのかなれないのか。……ごめん、私たちがじゃなくて水には」

と、突如影の体が霧散し始めた。

足元からどんどん砂のように消えてゆく。

「今だから教えてる。貴方が強制的にドールを強くする方法、単純明快。死の淵に立つこと。もう知っても意味がないから教える」

意味がないなんてことはない。

リヨウはすでに8段階目の存在を知っていた。

だが

「8段階目は違う。もっと、ずっととえげつないもの」

そう話した時、リヨウの視界もグニヤリと歪む。

すでに影の体の霧散も胸の上まで差し掛かっていた。

そしてその時、リヨウは影の顔を見た。

一瞬だった、だが、よく知ってる人の顔とそっくりだった。

「7段階目に到達したら会いましょう」

その台詞を最後に、リヨウの視界からその少女は消えた。

## 開戦

「キタ、キタ、キタ、きた、きた………」

独り言をしやべり続けるカザキ。

準備は整っていた。

リヨウとかいいう最終兵器とやらもこちらで確保。

自分たちから進んでいってもよかったのだが、部下の土俵はここだ。

それに自分が出向くのはどうも操られている感じがして嫌だ。

ただでさえ、頼まれごとをこなしていた。

準備は自分がしたのだからあとは相手が来るのが道理というもの。

それが叶えばようやく自由になれる。

まあ、自由になったとしてもやることは変わらないのだが。

「主君、機械兵の部隊が交戦状態に入りました」

「グネズトたちは？」

「確認済みです。ですが……」

「分かっている。あいつはこんな戦場に出てこない、こちらの陣地まで瞬間移動で入り

込めるのだから」

楽しみなことがあるからなのだろう。

いつもなら重い腰だが、今回は軽く腰を上げる。

ジークはその時滅多に見せないカザキの笑顔を見た。

ただ、歪んでいるというのは一目瞭然。

大人なのだから無邪気な笑顔はできないというのは分かっている。

だが大人になったからといって、見ている相手に不安を感じさせるような笑顔をするのはたやすいことではない。

「指示を出せ。全員敵を排除せよ、と」

「他は？」

「自由だ、死んでも骨を拾うつもりはない。自己責任ではあるが好きに戦えと伝えろ」

「承知いたしました」

---

「ちよ、おかしいですよ！」

「なにがだ？」

「平然とした顔で思い当たる節一切なし!?いくら大佐でも困ります！」

周りはすでに騒がしい。

だから大声を張り上げるケイトだが対して気に留めることはなかった。

何より自分が大変で他のことに構っている暇がない。

周りにいる大半は衛生兵だったのだから。

戦闘が始まっている現在、彼らに休まる時間などありはしない。

むしろ猫の手も借りたいぐらいだろう。

「素直に喜んだらどうだ？戦闘能力をかってるんだぞ」

「俺は衛生兵です！大佐に認められるのは喜ばしいことですが人の傷をいやすことが仕

事です！」

「お前の自爆魔法があれば傷つく人が減ると思うが？」

「むしろ連携が崩れます！」

ケイト自身が一番知っている。

自分は連携して戦うより1人のほうが力を発揮できると。

自爆魔法が得意といってもそれは破壊力が高いだけ。

器用に細かく範囲を設定することはできない。

敵味方が入り乱れる乱戦では自分の力は使えないのだ。

そもそも戦いそのものがあまり好きではないのだが。

グネズトも最初はケイトを連れて行く予定はなかった。

ただ、リヨウに使う予定だった錠剤に1つ余りができてしまった。

ならば他に当てるべき。

黒いタブレットケースに入った錠剤を「飲め」と押し付けてきたグネズトにケイトはかなり戸惑っていた。

そんな得体のしれないものを突然「飲め」と言われて飲むやつはいない。

「話が分からんやつだな、時間がない。さっさとしろ」

「だから俺は——」

「私に、行かせてください」

サクが歩いてくる。

体は洗い、服も着替えたようだがまだ万全ではないはず。

ケイトが体調を心配している。



「…お前より——」

「分かっていきます。ですが私はリヨウ殿の使い魔、簡単に退くつもりはありません」  
戦力で見れば強さの差は明らか。

退くつもりはないといっているが無力化する方法なんていくらでもある。

そもそも鏡侵空域に普通でははいれない以上、放っておいてもいい。

最悪、足手まといになりかねない。

だが……

「お前は必要ない」

その一言が言えなかった。

切り捨てるべき、勝率を上げるのなら。

だが、気持ちに分からないわけじゃない。

人は勝率だの利益だのだけでは判断することができない。

何かしらの人情が混ざってくる。

それが今回は大きく作用していた。

『信乃さん、ご意見よろしいでしょうか？』

「分かっている」

『いえ、信乃さんは使い魔ではありません。少なくとも貴方が想像できないほどにサク

のリオウさんに対する想いは強いです』

ライルの意見に目を丸くするグネズト。

ライルがここまで強く意見を通そうとすることはしない。

通すというより今は意見することだろうか。

そんなライルが言い切ったのだ。

『不躰な物言い、失礼しました』

申し訳なきように、だが自分の意見を曲げるつもりはないと意思表示をしながら謝る。

グネズトはここに来てからかなり長い年月が経っている。

今ではライルと過ごした時間もかなり永いものだ。

だが、未だに分からないことが多い。

例えばライルの性別。

訊いてもこれには無言。

答えたくないというより答えを知らないのほうか正しいのだろう。

妖精には性別があるのとなないのが存在する。

性別といっても人間を形どった外見の話だが。

例えば性別というより外見がすでに固まっていたシューレスの使い魔メリー。

無いので言えばケイトのクウやライル。

無い妖精はたいてい自分で決める。

性格は存在するのだから女っぽいだの男っぽいだのはある。

それに何より困る主がいるのだ、性別が分からないと。

だからある意味暗黙の了解で、自分で決められる者がいるとはいえ性別がある。

なのに無言の回答。

これをコンプレックスとでも思っているのだろうか。

しかし、そんな疑問などどうでもよく思えてしまえるほどの疑問が1つ。

なぜ自分についてきたのか？

魔法の才は無かった。

現に体は機械で構成させたむしろ科学派。

妖精にだって個性はあるのだから可能性は無きにしも非ずなのだが…。

疑問が多いライルだったがグネズトは信頼している。

行動を共にしてきて十分だと思ったから。

これだけ尽くしてくれる理由なんて不明だがサクはライルと同じくらい主のことを

…いや、それ以上か？

使い魔ではないグネズトに分かる訳がなかった。

使い魔が主をどれだけ想っているのか。  
だが

「…やるからには戦力になってもらうぞ」

「承知の上です」

「ならついてこい、これを飲んでな」

投げてタブレットケースをサクに渡す。

真っ黒なタブレットケース。

なんなのか皆目見当が付かないサクは、中から出てきた錠剤を見て心配そうにケイトを見る。

「俺にもそれを渡そうとしてた、睡眠薬とかじゃないから安心してよ」  
安心したのか迷わずに錠剤を呑む。

それを見たグネズトがその場を去ってゆく。

サクも後に続いて去って行った。

「良かったのですか?」

手に何枚もの血塗られたタオルを持ったクウが尋ねる。

「心配?」

「…正直、行ってほしくありませんでした。消耗がひどいと思います」

「そうだね…」

ケイトも治療をした。

だが、ケイトが治せるのはあくまでも壊れた部分や傷ついた部分。

ウイルスだの細菌だのを殺したのはあくまでも薬。

ケイトの能力の欠点の一つだ。

苦しみが続くが、体を常に直すことで命を保ち続けその間に薬の投をする。

一見治つてしまえばいいじゃないかと思いがちだが、精神的に辛いものがあり体力もかなり削られる。

これをした後は休むべきなのだ。

「でも主を想っている使い魔をここに留めるのもひどい話だろ？」

「…：…：そうかもしれないね」

「ところでクウは僕が危なくなったらサクと同じようにする？」

「しませんね」

「…：…：なんで？」

「不死身の人間が一体何を言っているんですか」

「何度も言うけど不死身じゃ無いんだけどなあ」

肌寒い空間。

上空とはそういう場所だ。

酸素だつて薄くなっている。

常識だろう。

そんな空間で大乱戦が起きている。

人对機械兵。

地球ではお目にかかることはできないだろう。

更にもう一つ、お目にかかることができないのは鏡侵空域。

一定より高く飛ぶと方向間隔がおかしくなりいつの間にか元の場所に戻っている。

これが人にとっては一番厄介だろう。

機会はどう処理するかは知らないがそんなわけのわからないことが起きたら頭の中で一度物事の整理が必要となる。

少し離れたところでグネズトたちが気を見計らっていた。

フラットの顔に一滴の血が落ちてきた。

「血の雨……つてやつなのね、これが」

真正正銘そのものだろう。

比喩なんかではない。

恐ろしいのが肉体そのものが降ってくることもあるということ。

バランスを崩しても地上までは距離があるのだから体制の立て直しは可能だが、気絶なんてすれば地面に叩きつけられてあの世行きだ。

「それよりも……どうする?」

「ケイトを連れてくるべきだったな」

イプシンの問いにグネズトが頭を掻く。

問題視しているのは敵の数だ。

空が真つ黒く覆われ、どこに抜け穴があるのか機械兵が次から次へと増えてゆく。

ケイトさえいれば爆発でも何でもして簡単に穴ができただろうがそうはいかない。

敵の本陣につく前まで願わくば万全の状態で行きたい。

回り道をして敵がいらないところから回るのもアリだがことは一刻を争う。

「シユーレス」

「人相手限定だ」

「ウリス」

「巻き添え覚悟なら問題なし」

「姉貴、あれに穴を開けるのは大変だよ？」

「イブシン」

「私一人の突破なら簡単だよ？」

相手の本陣に近づけないことには何もできない。

「お待たせしたのー」

そこにミリーナが現れる。

何もつけずに空を飛ぶ少女のその姿はどこか違和感を感じさせる。

「別に待ってないわ」

「？」

「あれよ、あれ」

真っ黒に覆われた空を指さす。

人の影も見え隠れするので何か黒い虫が蠢いているようで気味が悪い。

「貴方の瞬間移動は使えないの？」

「そんな全員を運ぶなんて無理なの。それに困ってるなら都合なの」



「？」

「まず一つ、イプシンさん以外のドールを少しいじくったからその説明ができるの」「いじくった？」

「うん、もう一つが——」

ミリーナの台詞を遮るかのように爆音が響く。

さつきまで無かった攻撃に少し戸惑う。

爆音の方では敵味方問わず一つの火の玉が呑み込んでいる。

爆発であるのは間違いないはずなのだがなぜかその玉は一向に消える気配がない。

小規模の太陽ができたかのようにそこにとどまる。

「あれは……？」

「貴方たちへの贈り物よ♪」

リリアの耳元でささやくような声。

背筋がゾワツとした。

もう悪寒が走るとかそういうものではない。

危険と嫌悪にも近い何かを本能的に悟ったのだ。

裏拳のごとく腕を振り回したがそれは見えない障害物によって止められる。

「相変わらずのスタイルにせっかちな性格……早く弄りまわしたい」

「その声……！」

「あら、貴方が先に気づくのかしら？でもまあ——」

何か見えない障害物がある空間、そこに一人の女性が姿を現す。

「ナタリー！」

「久しぶりね銀髪、約束通り殺しに来てあげたわ」

突然の敵襲。

だが、グネズトたちの行動は素早い。

話を聞いているのでむやみな攻撃はせず、距離をとる。

「グネズト」

「分かっている。リリア、フィリア、ここは任せる」

「はい！」

グネズトたちがその場を離れる。

何の打ち合わせがあつたわけじゃない。

だが、それが最良の選択。

相手はフィリアを殺しに来た、だがリリアにも異常な興味を示している。

本来ならリリアとウリス、或はマートを置いてその場を離れるがフィリアを連れてき

て敵が増えては面倒。

だが3人を割くのはつらい。

だからこの2人。

案の定ナタリーはそちらに目を向けることすらしなかった。

「追いかけないのね？」

「標的はいるもの。ああすればUのネーム持ちが道を切り開けるでしょ」

「それをわかつた上で……？」

「貴女たちは私たちをまともな軍隊とも思ってるの？」

そんなことは思っていないかった。

それは間違いない。

だが、機能している以上遊び半分の子供のグループとも思えない。

「私たちは自分の利益のために動いてるの。同じ帝国出身という繋がりはあるけど強い仲間意識はないわ。だからここそこまですてきたのよ、あの人は」

「……そんな組織がいつまでも機能できるなんて——」

「そうよ、不安定。だからこそ、私は自分のしたいことをする。リリアといいことを……ね」

リリアの背中に再び寒気ではないそれ以上のものが走る。

そしてその理由をなんとなくリリアは理解した。

クレアに何かされそうな時も悪寒が走る。

だがそれは嫌悪とかではない。

まさか、されるのが好きになったというわけではない。

今でも危機感を煽るように悪寒は走るのだから。

認めたくはないが、どこか安心できる自分がいるのかもしれない（されるのは本当に嫌である）。

だが、ナタリーの場合は違う。

自分を人と思っていない。

使い捨てのおもちやのように思っているのが分かった。

代わりはいくらでもいる、だが一度欲しくなったものは手に入れない。

ある人からの話がそれに信憑性を持たせていた。

『私がエジリスの部隊にいたのは…それも理由の1つよ』

その言葉がリリアの頭の中で再生された。

「悪いけど私は玩具にされて気分がよくなるほど変態じゃないの」

「…何言ってるの？ 3食飯はつくし、部屋だって提供する。私、自分の伴侶には優しいのよっ。」

「貴女よりカーリヤからの話のほうが信用できるの」

その言葉にナタリーは確かに反応した。

思いがけない名前が出てきたから当然かもしれない。

「元カノって言うっておきながら随分ひどい扱いをしてたらしいじゃない」

「…聞いたの？」

「いい酒を飲めるかどうかは分からないけど、愚痴ぐらいは聞いてあげるつもりよ」

「……………そう」

明らかにナタリーの雰囲気が変わる。

その変化に気づいたと同時に見覚えのある半透明の正方形が宙にいくつも出現する。

空気中は暑い。

だが、ナタリーの周りだけ何か寒気を感じる。

実際に素肌で感じるわけではない。

視覚がそう訴えていた。

「悲鳴は嫌いなもの、貴女のことが好きだから。でも——」

突然浮かべる満面の笑み。

彼女の表情とその場の感じは全く合わない。

まだ「歪んでいる笑顔」というもののほうがふさわしいだろう。

「それ以上に貴女が欲しい！必ず生かして連れて帰る、四肢を腕いでも！眼球が抉れて

も！顔面が潰れてもねえ！」

正方形の物体が一斉に襲い掛かる。

透明なその物体がどんな物かは重々承知している。

とてつもない強度を持ち、リリアの銃弾さえ反射する。

全力で撃つにしても少しばかり時間が必要。

今は逃げるのみ。

「銀髪、まずはあなたよ」

死の宣告を聞いたフィリアだがいたって余裕。

なぜなら相手は自分の速さについてこれないから。

目で追うことができない速さを出す自分を捕まえるなど、慢心が見え隠れするかもし

れないが愚の骨頂。

時間稼ぎはできる自信があつた。

「(まずは……)」

ナタリーの顔に一撃。

足がナタリーの顔に当たった。

当たっただけ。

吹っ飛びもせず、苦痛に顔をゆがめることもせず、傷なんてありはしない。

「相変わらず癩に来る大平原ね……」

「もうすぐA突入します！」

「一緒よ、どっちも」

足をつかもうとしたナタリーの真下に移動する。

そのまま顎に向かってアツパー。

だが、威力を出すことはできない。

無駄に力を入れてしまえば自分のこぶしが崩壊しかねないからだ。

今フィリアがやることは敵を倒すことではない。

それは……

「リリアに時間を与えること」

下にいるフィリアを見下しながらしゃべるナタリー。

「以前はつい頭に血を登らせてしまったけど今回はそうはいかないわ。言ったでしよ、貴女を殺すって」

突如フィリアの視界が薄い青色になる。

何が起こったのか分からず、いったん離れるフィリア。

しかし、背中に何か障害物がぶつかる。

「これは……」

ナタリーの使っている謎の半透明の正方形が2人を囲んでいた。

もともと薄い青がかっている正方形だったのでそれでフィリアの視界がおかしくなつたように感じたのだ。

ただ見るだけなら正直きれいとも言うべきかもしれないその色。

心を落ち着かせる青。

だが、今のフィリアは焦っている。

閉じ込められた。

「鳥籠に入れられた鳥って今の貴女みたいな気分のかしらね、銀髪？」



## 侵入

「これ、持ってって」

「？」

出撃前、わずかな時間でミイヤにあるものを渡されていたマーシャ。

いざ本当の殺し合いとなると緊張が走るのも無理はないが周りの空気は張りつめていた。

そして使い魔の姿。

別に駄々をこねているような奴いない。

みんな、信頼しているのか緊張をほぐそうといつも通りに接している。

グネストの部隊は自分たちのみで乗り込むつもりである。

これでは戦争というより殺し合いのほうが正しいだろう。

場合によっては殺し合いというバランスのとれた状態にすらならないかもしれない。

「これはっ！」

「お守りってやつよ、リヨウに会ったら渡しておいて」

マーシャが持っているお守りというのはキーホルダーといってもあながち間違いで

はない。

そこらで買った大した値打ちもないものだ。

別に母が残していった形見というわけでもない以上、なくなつてもあまり何とも思わない。

だが、ミイヤが渡したのはこの世界では珍しい地球の日本でよく見るお守り。

不思議そうに眺めたマーシヤは中身に何が入っているのかと見ようとす。

「駄目よマーシヤ」

「？」

「そこは開けちゃダメなの。開けたら呪いが降りかかるわよ」

「呪いって……」

大げさに言ったのか、ミイヤ自身が失笑する。

「マーシヤ、10分前だ」

「はい。ミイヤ、確かに預かったわ」

「頼んだわよ」

「約束よ」

「ネー、これいふまでつけてるの

「ひゃべりにくいひ、あほふかへたんですけほ」

「上空に行くにつれ酸素は薄くなる、知ってるだろ。黙ってつけてろ」

はあ、と肩を落とすクリティウス姉妹。

口に小型の酸素マスクを銜えている。

被っているのではない。

あまり長い時間持つわけではないが何も大気圏を突破したいわけではない。

十分だ。

唯一酸素マスクを着けていないグネズトは通信をしながら進んでいる。

なぜかミリーナはつけていた。

上空というのは雲以外何もないもので正直迷う。

ただ、今回は別に指示は必要ないのでと全員が思う。

理由は見えているから。

とてつもなく大きな黒い球体。

何も無い空間にそんなものがあれば普通に見える。

「なん<sup>なん</sup>で<sup>で</sup>攻撃<sup>攻撃</sup>しない<sup>しない</sup>んです<sup>んです</sup>か<sup>か</sup>？」

「安心しろ、たつた今入り口を見つけた」

呂律が回っていないにもかかわらずしつかり理解して答えを返してくれる。

グネズトが球体に近づく。

正直どこに入り口があるのかなんてさっぱり。

ただ、後ろで黙って見守る。

グネズトは少しの間、ただ球体を見ていた。

彼はこれを見たことがあるのか、あってもおかしくはないが。

手で球体に触れ、撫でる。

それだけをしていたように見えた。

だが突如、音もなく球体に入り口ができる。

「入れ」

警戒を微塵もする様子がない。

黙って後ろからついて行く。

球体の中は地上と同じ状態を保っているのか、息がしつかりできた。

耳につけていた通信機を調整し、酸素マスクをとる。

扉が開いても突風だのなんだのが起きないのは魔法のせいか。

『みんな、無事ついたかしら？』

近くから視ているのかとでも言いたくなるほどちょうどいいタイミングでシエリーからの言葉が頭に響く。

『まず初めに通信機の繋がりが途絶えました、おそらく使えないと見ていいわ。私の言葉もいつ届かなくなるかわからないから注意してね』

調整していた通信機をとり、そこに捨てるクリティウス姉妹。

せめて使えるのなら持って帰ってほしい。

『他にも影響があるかもしれないから細心の注意は忘れないこと。内部の構造は…大丈夫ね。絶対生きて帰ってきて』

いや、大丈夫じゃねえだろ！とツツコみたかったがグネズトは黙っていた。

来たことがあると見て間違いない。

そしてその時からおそらく構造が変わっていないのだろう。

それにミリーナもいる。

少なくとも迷うことはない。

外見がとてもし大きかった球体ではあったが、中身もそれなりの大きさがありイプシンが感嘆の息を漏らす。

変哲もない壁。

タイルをただ並べているかのようなどてももろそうな壁。

機械だの、敵兵だの手荒な歓迎を想像していた人にとつては拍子抜けであることに間違いはない。

「みんな、こつちなの」

何かを見つけたかのようにミリーナが先を歩く。

さながら待つことができないう子供の様。

こつちとは言っていたものの、通路は一つしかない。

「分かるのか？」

「近くなったから感じ取れるの、リヨウが近くにいろの」

「どこなの！」

「直線で言えば……」

少し首をかしげながらも地面を指さす。

「ならこの壁を——」

「これを壊すことはできないの」

「何でよ、ただの壁でしょ？」

「さつき見たFのネーム持ち、そのネームの魔法がかかっているの」

「……………」

「もし、2人がすでに倒していれば話は別だけどまだなら無理なの。すでに私が経験済みなの、間違いない」

彼女自身は何度もここを訪れている。

何もしなかった、ただ説得をしようとしていたわけではない。

わかっていていたことであるが故、ある程度は調べていた。

「道なりに進むしかないの」

「道なりは分かっている、改装していなければいいのだが」

「ん……？」

体がだるい。

顔に光が直接当たっているのが分かる。

反射的に手で光を遮ろうとしたのだが動かない。何かに引つかかかって動かないのだ。

目を細めながらもリヨウは状況を確認する。

さつきまで何をやっていたのか少し不明瞭だ。

「機嫌いかがかしら？」

声が聞こえたほうに顔を向けると一人、知らない女性。

別段、変わった格好というわけではない。

見覚えのない人物に警戒心を抱く。

「分からない？じゃあ…」

するとあろうことか、女性の姿がミイヤに変わる。

服装こそ変わらさずだが顔や背格好はまさにミイヤそのもの。

そこまで来てようやく何が起きたのかを理解する。

「…なんで殺さない？」

「一言目がそれ？言葉は選ばないと本当に死ぬわよ。貴方も生き延びたいでしょう」

「その姿で話すな、ミイヤはそんな話し方をしない。不快だ」

「忠告はしっかり聞くものよ？」

元の姿に戻る女性。



「さて…、じゃどういいう遊びが好きなのかしら？薬物投与？解剖？それとも電気マツサージ？」

「……………」

「そんな目をしたって駄目よ。悪いけど貴方の体についてはすでに調べ終わってるの。いや、体というよりはドールについてかしら」

「どういう意味だ？」

「さあ？カザキさんは自分だけ理解してどっかに行っちゃったから」

リヨウに見せつけるかのように注射器を持つ。

少しだけ液体を押し出し、それらしい雰囲気を出す。

「私は貴方の処分を任されたの。まあ要するに生かすも殺すも私の気分次第ってことね。でね、ここからが本題なんだけど……………私の下につく気はない？」

予想外の問いにリヨウは顔を訝しめる。

「私はね、人体が大好きなの。科学がこんなに発展した時代でも未だに解き明かされていない謎がある」

「……………」

「でも人体つてのはそうそう簡単に手に入るもんじゃないの、とくに生きているものは。でも戦時中なら、体がたくさん手に入るの。それも合法的に」

「非合法だろ！」

「でも体がたくさん手に入ると今度は私一人では大変。だからさ、助手としてどう？」

「断れば？」

「相応の結果が待ってるわ」

誰にでもわかるその言葉の意味。

賢明な人ならばここでは嘘でも下につくのが当然。

敵もそれを考慮した上で動くはずだ。

だが…

「……悪いが断る」

リヨウは断った。

「自殺志願者には見えなかったのだけれど？」

「そうだ、死ぬつもりもない」

「へえ…、面白いわね。予想できなかった展開よ。でも…」

瓶に入った液体をリヨウの目の前で揺らす。

何が入っているのか、液体ということ以外は分からない。

そして女性、Sの表情も心底明るかった。

嬉しそうだった。

「なら何されても文句はないわ——」

しかし、突如その表情に変化が現れる。

怪訝な顔をしたかと思うと誰もいないはずの部屋の入口であろう場所を見る。

「……………」

黙り続けること約10秒。

舌を打つと薬品を机に置く。

「少し待ってなさい、すぐに戻ってくるから」

部屋を出たSは足早に上を指す。

「検体希望ならもつとおとなしくしてほしいわ…」

ミリーナたちが侵入してきたことを理解したのだ。

彼女が好きなのは謎の探求。

人を切り刻むことではない。

解剖はあくまでも過程であって結果ではない。

寸分のミスがすべてを失敗に終わらせるその世界にとつてわずかとはいえ、揺れとは邪魔で仕方のない物。

排除するしかない。

だが、要因はもう一つある。

「C、いるんでしょ？」

おもむろに叫ぶとどこからともなくCが姿を現す。

彼は別にSの部下でなければ彼氏でもない。

「なんでいるのよ」

「主君に<sup>リョウ</sup>あいつが死ぬまで見張っていると云われた」

「つまり私のことも？」

「結果的にはな」

「邪魔よ、貴方はさっさとどこぞの彼女と盛ってくればいいじゃない。大した忠誠心もないくせに」

「……」

「まあ、居たかつたらずつとここに居れば？ 私は少しやつてくることがあるから」  
それだけ言うとその部屋を後にする。

リョウが出口だと思っていた扉、実はその奥にはもう一つ大きな部屋がある。

部屋というよりは競技場と行っても過言ではないほどの大きさを誇る部屋。相変わらず、マイルが敷き詰めてあるだけに見える部屋の構造ではあるが。

リヨウのほうを見る。

マジックミラーのようになっており、あちらからは見えないがこっちからは見える。

実際は逆の仕様だったようだが組み替えたのだろう。

ベッドに寝っ転がったままで動こうとはしているがとても抜け出せるようには見えない。

「……………」

ブレーベは決めた。

「大した忠誠心もない」、そう言ってくれたのが少し考えを柔らかくしたのかもしれない。

初めてSに感謝したなと思う。

「フラット、超えてみせるぞ」

ブレーベもその部屋を後にした。

## 分断

「いったいどうなってるんだよ、ここの構造は…」

レックスが思わずぼやいた。

彼らは今カザキが本拠地としている球体の中を走っている…はず。

レックスがぼやいた理由は景色にあった。

今視界に入っているのはどこぞの遺跡なのかボロイ構造をした建物内。

石でできた柱は少し叩くだけで簡単に崩れてしまいそうに見える。

ただそれらしい匂いはせず、ひんやりとした空気が漂っていた。

「広い運動場に図書館、お花畑を通過してここ。なかなかいい趣味してると思うわ」

「なんか、ずいぶん平和的な物が多いよな」

「そりゃ、もともと子供の遊び場だったからな」

「「!？」」

知らない声。

全員が声の聞こえた上を向く。

「残念、こっつちだ」

つい、反射的に上を向いてしまったことをグネズトが後悔する。

攻撃が来ると思い構えたが予想に反して近くに現れた敵は後ろへ後退する。

「お前……！」

「アンタ……！」

「久しぶりだなア、死にぞこないども」

レックスとウリス逸早く臨戦態勢に入る。

目の前に立っていたのはニゲル・I・ロップルト。

だけではなかった。

「コラー！放せー！」

まるで子供（年が700超えてる）の様に暴れるミリーナ。

大人が捕まえているのに子供が暴れたって意味はない（ただ振りほどくほどの力はあるはず）。

「悪いなア……、お前らを殺りたいのは山々なんだがこいつが最優先なんだア」

「ロリコン……！」

「年いつてるんだろお？まア俺には関係のないことだがなア」

ニゲルの目の前の空間がゆがむ。

レックスとウリスにはその意味が理解できる。

「待て！」

「お前らの相手は俺じゃない、そうだろお？」

「そうだな」

その声にマーシヤの目が大きく見開いた。

忘れたくとも残る声。

それは何があつても一生消えることはないだろう。

「待つてたぜ、マーシヤ・クリーシヤ」

「リップト……だったわね」

「名前を覚えていられる程度に冷静ではあるのか、残念だな」

以前はコーティングしていた右腕も今は皮膚ではない何かをさらけ出している。

そしてそれ以上に気になって仕方ないのが右目。

眼球が入っているにもかかわらず、鉄のような色をしているというのは異常性を極めている。

「大佐」

「ミリーナのことは気にするな。どうとでもなる、暫くはな。ここは押し切る」

「まさか俺が一人でお前らと戦うなんて思つてはないだろうな？」

天井から何かが落ちてきた。



人の形をした何か。

それを人というにはあまりに惨めで死体というにはあまりに悲惨な姿。

1つではない。

そのすべてが、落ちてきた衝撃で首が曲がろうが足が骨折しようが何も言わずに起き上がる。

「ここは俺の土俵、数はそれなりだぜ？」

「アタシたちの前じゃ数なんて意味ないシ」

「さっきの奴に晴らせなかつた鬱憤、ぶつけさせてもら——」

「いや、ここで時間を取られるわけにはいかない。ミリーナも取られた以上、急ぐ理由が増えた」

「……………チ」

「シユーレス、ここを任せられるな？」

「問題ない」

歯がゆそうにマーシャが下唇を噛む。

自分の因縁の敵がいるにもかかわらず、自分は手出しができない。

「いくぞで」

全員が一斉に全速力。

だが、リプトが追えない速さではない。

戦うつもりがないことを理解したリプトは死体を使って魔法を唱え始める。

組織された人々のようにきれいに整列した死体は一斉に手を目の前にかざす。

不幸中の幸いだったのは詠唱が必要だったということ。

もし、一言で火だの水だのバンバン撃つことができたら恐ろしい脅威となっていただろう。

ここで勝敗の分け目を決めたのは情報だった。

マーシャの情報は正直変態と言われても仕方ないほど集めたリプトだったが他の奴は触り程度にしか知らない。

もともとマーシャと対峙できればそれでよかったのだからそれで済むのかもしれない。

死体をほかの奴に充ててマーシャは自分が潰す、それしか考えていなかった。

魔法を放とうとした瞬間、それが起きた。

「!？」

突如見えない力を感じ体が地面に押し付けられる。

それと同時に詠唱が止み、死体がただの坊となり立ち尽くす。

リプトとジークでは利点が違う。

ジークは一回に操れる数が多いが魔法を唱えさせることができない。

一方リプトは数がジークに及ばない分、魔法を唱えさせることができる。

だが何か予想外なことが起き集中が切れると、一瞬にして死体の支配が解けてしまうのが欠点。

そして地面に押し付けられたリプトに追い打ちをけるようにシューレスが殺しにかかる。

すぐに死体を呼び戻し、盾代わりに使用する。

数のおかげもあり、危険に陥ることはなかった。

ただ地面に付しながらマーシャが去っていくのを見ていることしかできないのは悔しかった。

やがて、魔法が解けたのが分かるとゆっくりと起き上がる。

目の前では余裕の表情を浮かべながらシューレスが待っていた。

「悪いな、マーシャ・クリーシャじゃなくて」

「別に構わないさ。お前を殺してから追いかければいいだけの話……いや、ここで死体に足止めさせればそんなことしなくても——」

「行かせてやると思うか？」

声が重なるように聞こえた。

周りを見渡すとシューレスが3人いる。

常人なら自分を増やすなんてことはしないだろう。

だって気持ち悪い気がしません？

「幻覚…か。面倒な奴だな」

「やる気になったか？」

「余計やる気が失せたところだ。だが、殺さないと俺も安心できないからな」  
糸が切れた人形のように立ち尽くしているだけの死体が突如動き始める。

「殺し合い、してやろうじゃねえか」

「殺し合いになるといいな」

---

「放して…よー！」

ミリーナは腕に思いっきり力を入れニゲルから離れる。

突然強い力を出されて何も対応ができなかった。

だが、別に焦りはしない。

「成程、さすが機械だなア」

「女の子は繊細なの、もっと丁寧に扱ってほしいの」

「そんな必要はねえ。カザキさんはお前の中の何か欲しいだけだア、お前自身じゃない」

「貴方…本気なの？」

カザキが何をしたいのかはなんとなく理解していたミリーナ。

だがそれに協力者がいるのは予想外だった。

協力しても正直メリットがあるとは思えないからだ。

「何のことを言っているのかは不明だがア…お前はここで死ぬから理解しようとも思わねえな」

「…私だって戦えるの。なめないでほしいの」

「アア、もちろんなめるつもりはねえ。だからこいつらがいる」

再び空間がゆがむ。

その中から2人の男が姿を現す。

「それはいくらなんでも酷いんじゃないの？」

「カザキさんからの命令でなア、悪く思うなよお」

「よろしくな嬢ちゃん、俺はQ」

「Vだぜ、お前は生体と考えていいんだな？」

自分のネームを教えるのは礼儀であり自分の力の誇示でもある。

ネームすべての力を覚えている人なんてそうそういないが力を持っているというところくらいは理解できる。

ミリーナが構える。

外見はただの少女に過ぎない。

髪が長く、一瞬髪の色と顔のつくりの組み合わせに違和感を覚えるかもしれないが見はただの少女。

そんな子が構えをとったところで、それを構えととらえる人は少ない。

Qが思わず苦笑する。

「心が痛むねえ、嬢ちゃんみたいな小さな女の子を殺すとすると」

「まさか私を殺せる気でのいるの？」

「悪いけどそうなるよ」

「3対1だぜ？てめえがいくら経験豊富なババアだからって——」

「なめないでって言ったはずなの」

刹那、ミリーナが3人の視界から消える。

驚く暇なく、Vの目の前に現れるミリーナ。  
拳をVの腹に入れる。

それだけでVが10m以上とび、壁に激突する。

「私を殺せる気にいる時点でなめきってるの」

「こいつ…!」

「上等だア、殺してやるよお!!」

---

「…確実に減らされているよ」

「分かってる」

イプシンの問いにそれだけ答えて黙るグネズト。

もともと不利な状況だったのは入る前から承知していた。

だが、やはり分かっているだけではだめだ。

理解しているだけではだめだった。

「一人ずつでも確実に倒したほうが…」

「一刻を争うのは知っているだろう、リヨウが死んでしまえばそれに代わる作戦なんてない」

長い通路を走っていた一行。

やがて通路が開け、再び広い場所に出る。

「これは…」

転移装置と思われる床が並ぶ。

グネズトの記憶の中にはこんな部屋は存在しない。

「これ、どうすんのよ…」

「別れていくしかないだろ」

「マグたん、それじゃあ相手の思うつぼだよ」

「でもそうでもないしとリヨウの場所へはたどりつけませんか？時間もない」

「後輩を助けたいたいの私は私も同じ。でもその前に私たちが死んだら意味ないよ」

「それは——」

息をつく暇もない。

大きな音。

何かが外れたような音が通ってきた通路から聞こえた。

それと同時に何か近づいてくる。



空気を切るような音と電子音のような何か。

「クリティウス、任せられるか」

「また防衛線？イヤになっちゃうネ」

「でもデモ、久しぶりに暴れられると思えば」

「悪くない！」

顔を見合わせて笑う2人。

「イプシン、ここで固まっていたはそれこそ相手の思うつぼだ」

「……」

「お前らの実力は十分だ、保証する。相手の意表をつくには単独行動での敵撃破が一番。

俺はそう思う」

「…大佐の命令じゃ従うしかないよ」

ため息交じりに従うイプシン。

イプシンの意見にも一理あるのかもしれないが今は議論をしている暇がない。

こういう時こそ、トップに判断が求められる。

そして部下はそれに従う。

それが組織というものである。

上司の言うことを何でも聞かなければならないのは組織ではない。

組織は人が作り出すものだから。

上司に絶対服従で独りよがりの集団は発展も何もしないただの団体だ。

「でも、みんな絶対生きて帰るよ?」

「それが可能だから保証すると言ったんだ。一つ増えたがミリーナの搜索と、リヨウの救出。最優先すべきはリヨウの救出だ。全員任務を遂行しろ」

「「はい!!」」

全員がそれぞれの道へと足をのばした。

## 裏の一面

Sは焦っていた。

よりよつてなぜ、なぜあいつが来るのか。

来るならほかにもいたはずだ。

なぜよりにもよつてあの赤毛が来るのか。

Tが自分の獲物だとか言つてたではないか。

一度、リヨウのもとを離れたSは他にその処理を頼んだ。

もともと彼女は戦闘タイプではない。

敵を殺すなら暗殺などの戦わない方法が最も良いだろう。

モニターに映るマーシヤの姿を見て下唇を噛む。

彼女が嫌だと言つたのはマーシヤが人間であり、一度自分の能力を目の前で見られているからである。

サクが侵入していることも承知ではあるが使い魔は正直眼中にない。

しかし、マーシヤとなればばれた瞬間ほぼ確実に殺される。

使い魔なんかとは比にならないほど強いはずだと思つていた。

根拠はグネズト。

彼が強い人材しか選ばないことくらい有名な話。

どこを見ているのかは知らないがその選択に間違いはない。

ましてやマーシャとリヨウがそれなりの強い絆で結ばれていることくらい知らないはずがない。

彼女にとって逆上した言葉の通じない理性的ではない獣は最も注意すべき敵。

うまくやればいい駒になるかもしれないが、間違えれば自分がやられる。

リヨウをうまく扱う必要がある。

まだ胸を開いていなかったことに胸をなでおろす。

少し心休めることがあるだけで少しばかり冷静になる。

そして思い出した。

自分はネーム持ちなのだ。

生粋のネーム持ち。

それがドールという外界の力に頼っている弱い人間に勝てない？

笑わせるな。

「…やれる」

Sは部屋を後にした。

「ハハハ…」

クロは日光の注ぐ青い空の下を歩いている。

風も吹き、気持ち悪いほどまでに心地がいい。

だが、1つ付け加えるとすれば生き物が欲しい。

鳥だ。

虫は正直蠢いてるだけなのであまり欲しいとは思わない。

鳥の鳴き声が聞きたい。

そこに音が響く。

ただ欲しかった音ではない。

何か警報のような音。

「侵入者1名検出。検索中…該当者一名クロツエフ・アリアジート」

「…古巣とはいえ、歓迎はされないよね」

もちろん、古巣とはいってもクロはここに来たことはない。

こういう時、レックスやマーシャ、おそらくフィリアでさえも「歓迎されてる」と皮肉を言うだろう。

それを言わないのは単に純粹だから。

人を陥れることを好まなければ、皮肉も嫌だ。

不幸話を聞いて笑うことはあつてもそれにも限度がある。

「システムニ従イ第二シークエンスヲ実行シマス」

ブザー音が鳴り響く。

吹いていた風はいつの間にか止まっていた。

降り注いでいた心地よい太陽の暖かさも感じない。

改めて作り物だと感じさせられた。

「？」

機械音。

まあ、あつてもおかしくはない。

だが不自然に思ったのは他に聞こえる引きずっている音。

耳に黒板をひつかいたときに響くような嫌な音や、何かがぶつかる音、はじける音な

ど多種多様な音が聞こえる。

逃げることに意味はない……わけじゃない。

だがクロには自信がある。

ネーム持ちなのだ。

木々をかき分け、自ら敵のもとへ突っ込む。

相手にも場所は分かっていたのだろう、音は徐々に近づき10秒としないうちに敵を視界にとらえた。

自分よりも遥かに大きい。

見上げるのは当たり前。

全体的に真つ黒な体の表面。

だが不完全なのか体中のいろいろなパーツがコード一本で繋がっている。

いや、これで不完全というのならむしろ出すべきではない。

バチバチと電気が火花を散らしている。

丸い頭には的とでもいうべき配色が施されている。

思わず真ん中に矢でも当てれば100点ももらえないかと思ってしまった。

それを思えるほど余裕があった。

自分の魔力を相手にしみこませる。

それだけで自分の物になってしまうから。

周りの壁は先にFに取られてしまっているため自分の魔力が入る余地はない。むしろ目の前にいい素材が出てきたと喜んだ。

だが…

「……………」

操れない。

魔力は染み込ませた。

なのに操れない。

しかし、そんな現状でも相手が待つてくれるはずがない。

予備動作を見せることなく体が崩れるように倒れてくる。

近くにあった木々など当たり前ながらお構いなし。

メキメキと倒れてくる木を避けながら攻撃の範囲から離れる。

そして衝撃に備えたが怖いことに何も衝撃がない。

木々を倒すほどの重さが地面に倒れたにもかかわらず何も衝撃がない。

敵を見てすべてを理解した。

地面に触れたと同時に敵の体が液化化する。

液化化した体はスライムのようにドロドロと広がる。

自分が操れないわけも理解した。



固体ではなく液体なのだ。

コード等も何か細工があるのだろう。

さすがクロ対策用というだけはある。

でも手がないわけではない。

リヨウを助けるためにもここで躓いてはいられない。

それに…

「…外れだな」

アタリを引いていたにもかかわらずレックスは眩く。

周りに敵はいない。

あるのは機械機械機械。

計器のようなものは見当たらないがごっついものが並ぶ。

不思議なことに誰もいない。

先に誰か来てやりあったのかと思つたがそれにしても被害がなさすぎるし死体や争つた跡も見当たらない。

本当に長い間誰もいなかったのだと理解する。

レックスはこういう頭を使うことが苦手だ。

キーボードがあつてもせいぜいネットサーフィンするくらいにしか使えない。

そして一応いじくつてみようかとも思つたのだがキーボードが固い。

指で押しても1つも動かないことはもちろん、叩き割るさながらキーボードクラッ

シャーのように行動してみたが傷1つつかない。

ここにもFの力が働いているのだろう。

レックスの力ではドールですらどうすることもできない。

内部に衝撃を加えても硬ければ壊せない。

「あー、くそっ！」

出口を探したが見当たらない、入り口は閉まっている。

八方塞がりな状況にイライラし自分の武器は拳であるにも関わらず足で何かしらの機械を蹴る。

「!!？」

それと同時に足に激痛が走つた。

激痛が走った足を抑えて地面に転がる。

どっからどう考えても自業自得。

あたる相手を間違えたことに後悔するがそれと同時に疑問が浮かぶ。

なんで痛いのか？

自分たちは魔法側と違って否応なしに通常はバリアが体の表面を覆っている。

すべてダメージはそれで吸収されているはずなのに痛いと感じた？

暫くの間、その意味が理解できずにその場に座り込んだ。

「あ……………0〜?ー?\*@!!」

現在存在する言葉では表せないような悲鳴と音。

可愛く表現するならばメキメキが正しいだろうか。

「ねえ、どうしたの?その程度?」

イプシンの手は相手の右腕を握っている。

首ではないにもかかわらずその腕の部分は本来首があるべき高さに持つてこられており、敵が苦痛に顔をゆがめている。

「訊いてるじゃん、答えてよ」

イプシンの顔は笑っている、顔は。

ただ目が笑っていないかった。

「殺さないよ、殺すわけないじゃん。後輩の情報を持つてるんでしょ？話してよ」

「だ、だれが…」

「それだけじゃ足りないよ、こんな傷つけて…」

頬から血がしたたり落ちている。

鋭利な刃物でスツと撫でられたような。

「乙女の肌って大切なんだよ私まだこれからなんだよ分かるでしょこういう体つきしてるから仮に好きって人がいてもそう思われたくないからって嘘ついちゃう人もたくさんいて困ってるんだよそれに私にだつて好みはあるんだからさらに選択肢が減っちゃうしそんな中にこんな傷なんてつけられたらただでさえ7段階目で偏見があつたりするんだよ女の子として見られたいのにどう責任とつてくれるの貴方と付き合うのはごめんだよだとしたら私の命令聞くのがいいと思うんだけどどう？」

リヨウたちには見せられない一面。

外見が少女でも年はすでに30過ぎ。

そんな外見の人間から突然出てきた言葉の羅列に恐怖を覚える。

「話してくれる気になった？」

「何が、知りたい？」

「後輩……リヨウつて子の場所」

「それを教えれば、この手を離して——」

無言の回答。

イブシンの掴む手の力が強くなり再び痛々しい音が鳴る。

「そ……そこの壁を開け……れば転、移装置に乗ればツアアツアアアアア!!」

「本当だね？」

「あ、ああ……アアア……」

ボロ雑巾を投げるようにその場に敵を捨てる。

興味を失ったかのように全く心残りが無い。

言われた方向に歩いて行く。

壁を調べると確かに取り外しができた。

ガコツつと外れた音がすると狭い空間に転移装置がある。

違和感。

隠しているにしてももう少し違う方法がないだろうか。

自分が使うときに不便すぎる。

罨の可能性は十分にある。

どういうわけかSバリアが消えている。

そのせいでついた傷。

傷が残らないといいなとケイトがいれば10秒で解決するどうでもいい問題が頭の中の大半を占めていた。

狭い空間に足を踏み入れる。

イプシンにとつても狭い空間を四つん這いで転移装置に乗った。

しかし

「？」

罨だった。

転移装置が光を失うと視界が真っ暗になる。

直後に赤く小さな光が点灯する。

「ハハッ…、馬鹿だよなお前」

壁越しに声が聞こえる。

「俺が知ってるわけないだろ!!下っ端だ、そんなつい最近のこと俺の耳に入るかよ!その部屋は俺が整えた敵を閉じ込めて仲間を呼ぶまで時間を稼ぐための部屋なんだよ、最初からてめえらとまともにやりあえるつもりはなかったからな!」

「……………」

「てめえは終わりだ！次壁が開いた時が最後だと——」

「知ってる？突然べらべらとしやべり始めた雑魚って…」

何かがこすれあう音。

上から下げられた壁が無理やりこじ開けられようとしている。

「死ぬんだよ？」

こじ開けられた壁の奥からイプシンの目が見える。

意図してそうなっているのか死んだ目をしたそれは恐怖心を煽る。

思わず後ずさりをする。

「Fの壁は私でも壊せない。でも押しつけることくらいはできるんだよ」

「……………あ」

「お仲間が来るみたいだけど時間を稼ぐとか言ってたね？つまり見せしめを作る時間はあるよね？」

腰が抜けるとはこういうことを言うのかもしれない。

足に力が入らないとはこういうことを言うのかもしれない。

目の前が真っ暗になるとはこういうことを言うのかもしれない。

勝てないことを理解しているからこそ怖い。

「見せしめ、昔からよく使われる手法として挙げられるのはさらし首だよね。案外簡単にできるけど効果はある。でも今は時間があるからさ、違うことやろうよ」

何かいい一言。

もはや行動を考えるつもりはない。

どこに逃げても殺される。

口で丸め込むしかない。

だが、いい言葉なんて見つかるはずがない。

「お世辞はいらないよ、命乞いは聞かないよ、悲鳴も耳障りだから。ただおとなしく…ね？」





だが、今は分かる。

出てしまうのだ。

押しとどめようという気にもならない。

「？」

そんな中でも警戒は怠っていないかった。

最も、周りは敵だらけなのだから当たり前だろうが。

機体ではない違う何かの気配を感じ取る。

野生の感がまだ残っているのだろうか。

「貴方ならリヨウ殿の居場所をご存知でしょうか？」

「……それだけ探るのがうまいなら自分で探せば？」

機体の群れの中から人が姿を現す。

その姿と臭いに思わず顔をしかめるサク。

もともと鼻が人より多少効く故、相手の香水の強さに気分が悪くなる。

顔は濃い化粧をしているのが一目瞭然。

正直言つて近くにいるだけで不快だ。

まだオイルの臭いのほうがサク的にはマシである。

「私はこの構造をよくは知りません。そんな中で当てもなく探すのは愚の骨頂です」

「使い魔なのにしつかりしてるのね。でも私、イース・Y・イールの前じゃ無力」  
……うざい。

何だろう、サクはどうもこいつが気に入らなかつた。

容姿はもちろんのことだが性格も嫌なのかもしれない。

「ネーム持ちが自分の記号を言うのは礼儀だそうですが……その態度は何でしょう？」

「礼儀？ 違うわよ、ネームを明かすの目的は単に力の誇示したいだけよ」

「……合点がいききました。それでさつきから上から目線の態度をとっている——」

自分のセリフの間であるにもかかわらずイースの目の前まで移動する。

早さ自慢である以上、不意を衝ければ相手が反応するのはほぼ不可能。

甘く見くびっていたのか相手の反応はサクと離している間と何ら変わらさず思考が追いついていかなかった。

それでも気づくまで待つなんていうことをサクはしない。

一瞬で首を掻つ切る。

「!？」

気づいた時には時すでに遅し。

鮮血が噴出した瞬間、サクが後退する。

「私はリョウ殿の使い魔。卑怯だとしても主を守ることが私の——」

「フフ…フフフ。所詮は使い魔」

「!？」

首を切り裂いたはずなのにはつきりとした声が聞こえる。

そしてイースもさつきまで苦しそうに抑えていた首から手を離し、手についた血を払っている。

首には出血した後のように血がこびりついている。

「貴方の攻撃は私には通らない。だからさつきと死になさい！」

正直通ってほしくないで一瞬思ったサク。

攻撃をするからには近づかなければならない。

一回近づくだけでもかなり不快だったのにと舌を打つ。

無数の機体とネームがいる。

圧倒的に不利なのは百も承知。

それでも……………

「待っていてください、リヨウ殿」

「……………」

「フラット…」

フラットは彼を目の前にしても黙ったままだった。

ブレーベはどう声をかけていいかわからず、名前を呼ぶにとどまる。

「……………リヨウ・アマミヤはどこ？」

「第一声がそれか」

呆れているわけではない。

むしろブレーベは苦笑していた。

「貴方なら場所を知っているでしょ？」

「そうだな、案内するのは造作もないことだ。でも…」

腰に引き下げていた刀を抜く。

ただ、構えはしない。

刃先は床に向かって伸びた状態で手に握られる。

「すまない。まだ、ダメなんだ」

「まだ？」

「そう、『まだ』だ」

「……おお、こわいこわい」

少し離れた位置からマグタランは呟く。

目線の先には、手が付けられた状態ではないクレアが相手を壁に叩きつけている。最も、すでにそれは死んでいるのだが。

「……………」

壁に血が広がっている。

叩きつけている相手は人間なのだ。

一人でやりあうのを覚悟していたのだが、別々の転移装置を使ったにもかかわらず同じ場所に出たクレアとマグタラン。

敵は…名前すらよく覚えていない。

セリフの途中でクレアが頭を握りつぶしてしまった。

自信はあったように見えたからネーム持ちだったのだろうがそれすら聞けていない。今では胸の2つの隆起のおかげで女性だということが判断できるだけ。

機嫌が悪い原因はもちろんあの、ナタリーとかいう女だ。

リリアに本格的に手を出そうとしている以上、潰したいのだろう。

「クレア……そいつ、もう死んでるぞ?」

「……そうですわね」

恐る恐る声をかけたが思ったより素直に聞いてくれた。

又チャッと嫌な音をたてながら地面に落ちる。

「そんなに気分が悪いなら加勢すればよかったですらう?」

「これでも社会人です。一般常識はわきまえているつもりですので、上司の命令には逆らえません」

「変なところで素直な奴だなあ」

「ですから、八つ当たりをしているのです」

「その怒りは親玉に会うまで取っておいてくれ……」

一瞬、本当に今のこいつなら誰も勝てないのではないかと錯覚してしまったマグタラ

「ですが道順がわかりませんね」

「まあ、それはな」

マグタランが少しの間とはいえ、傍観してた理由。

怖かったの他に、道に迷ったというのがある。

転移装置というのは便利になるものではあるが行き先が分からなければ逆に困る。

どこに進んだら正解なのか不明だからだ。

それらしいものに2、3回足を踏み入れたが逆戻りしただけ。

これではまるで閉じ込められてしまったようだ。

敵の数が少なかったのが不幸中の幸いだろうか。

「侵入者迎撃用か、ただ俺たちが方向音痴なだけか…。どちらにしても急がなくちやい

けないのにな」

「この壁さえなんとかできれば話が変わってくるのですが…」

一見何の変哲もない壁を軽くたたくクレア。

相変わらずそれにはFの力が加わっている。

これほどまで広範囲に魔法を使って消耗はひどいはず、なのにさつきはそのそぶりは

見せなかった。

「Pの時といい、何か細工がしてあるのかもな」



「ネーム持ちの数も気になります。20近くはいると聞いていたのですが」

「外に全員出て行ったとは考えにくいしなあ……、だめだからん」

諦めて思考を停止させる。

今は悩むより体を動かすべきだろう。

「とりあえず移動だ。次見つけた敵は生け捕りにして道案内をさせる、それでいいな？」

「分かりました」

「待っていたぞ、グネズト」

「……………」

グネズトの目の前にカザキ。

予想外の対面に少し混乱したが状況をすぐに飲み込む。

「…お前がいじっていたのか？」

「転移装置の移動先は俺の意思で好きなどころに変更できるからな。予想くらいできた

ろ?」

浅はかだったと後悔する。

彼の意思で移動できるということはリヨウの居場所にたどりつくことはないということではないか。

「どうだ、古巣に戻ってきた感想は?」

「黙れ。すぐに終わらせてやる」

「これは驚いた。リヨウの代わりがお前に務まるのか?」

「……」

「無理だろうな、お前はドールを持っていてるわけでもないし」

広い空間にカザキの声が響く。

「それに彼女さんもいるだろ?」

「何?」

「大したもんだよ。それだけ長い年月生きているとやることはやつても相手を作るなんて発想は消え始めるんだけどな」

「話が見えないぞ」

「いやなに、たとえどんなに強固な城壁を持つ城でも内側から攻撃されればつらいだろうなと思つてな」

「そんな危険のある経路なんて——」

「なら見てみるか？」

おもむろにカザキが宙に画面を開く。

鮮明に画面を移すそれはだれかの視点だった。

「お前たちは構成を知らないだろ、瞬間移動魔法の」

映し出されていたのは自分の部屋。

——の面影が残る残骸。

「Pの進入時の洗浄はすっかりしたはずだが」

「焦らないな、流石だ。だが違う、もっと前から忍ばせてもらってたよ」

「もっと……？」

思い当たる節がなく黙るグネズト。

画面は依然、辺りの状況を映していた。

だが目の前に来た軍の人間を移すとそれを最後に画面が暗くなる。

「分からないか？ まあ、もしかしたらお前には話してないかもしれないからな。だが、それより分かるか？ 今、お前らの拠点は攻撃を受けている」

「お前らもだ」

「勘弁してくれ、頭数もそろえられてなくせに攻撃なんて冗談は」

何も言い返せない。

確かに襲撃するというのは数が足りない過ぎた。

それに今自分たちはバラバラに行動している。

単身で動いているといつても過言ではないだろう。

「裏の部隊？とやらはよほど追い詰められなければ出てこないだろう。そのころにはこ

ちらの準備も整っている」

「……つまりまだ完ぺきではないんだな？」

「……失言だったか」

何を準備しているのかは分からないがグネズトがやることは変わらない。

彼はカザキを殺すために来たのだ。

「いいのか、彼女が心配ではないのか？」

「あいつはそんな簡単なことでは死なない。それに彼女もお前のいう裏の部隊だ、あ

い自信が戦闘向きではなくても周りがある」

「そうか……なら頼むぞ、少しの間な」

「俺も少しの間であることを願おう」

ガツチャガツチャと音が聞こえる。

金属がぶつかり合う音。

リヨウの腕と足に繋がれたそれらが外れることはなかった。

「…チ」

何もできない自分に腹を立てる。

ミリーナは自分を選んだ、いなければならぬパーツだと。

変えてくれる人だと。

なのに自分の今の状況は酷いものだ。

うんともすんともいえないドールの入った腕輪を見る。

さつきみた夢の内容は覚えていた。

夢ではないだろうが未だにあれが現実なのかあるいは自分の妄想ではないのかと思う。  
強制的にパワーアップさせる方法は死の淵に立つこと。

そんなことできるはずがない。

自分の意思で死の淵に立つなどまっぴらごめんである。

そして少しだけ見えた影の顔。

あれは――

「おや、Sはどこに行つたんですか？」

聞き覚えのある声に背筋が凍る。

顔を向けるとそこにはジーク立っている。

「お前……」

「おまけに殺してすらいない……まあ、その状態じゃ何もできないと思いますが」

「何しに来た？」

「お前がそれを言いますか？まあ、来た理由は戦力補充ですよ」

「……」

端的に言えばリョウの死体を貰いに来たということだろう。

意志があるのかどうか不明だが、こいつの下にだけは絶対につきたくない。

「結局殺すのだから俺が殺しても何の問題もない……だがSのことですから解剖目的。下

手に手を出してはあとが面倒ですね」

「殺し合いでもすればいいだろ」

「あちらがどう思っているか知りませんがこちらには仲間意識があるんですよ。最も、意見が食い違えばすぐにでも殺しますが」

ジークはリヨウの周りを歩く。

腕を組みながら悩んでいるようだ。

「しかしまあ、落ち着いて話すのはこれが初めてですね。異世界の住人でしたっけ？」

「お前に話すことなんて何も無い」

「しつかり敬語使ってるんですから少しは心を許してくださいよ。これ、結構だるいんですよ？」

「……………ふん」

突然ジークはリヨウにナイフを突きつける。

顔こそ笑っているが恐怖しいはずがない。

「少しは話す気になりましたか？」

「……………」

「折角話ができるんですからしらないと損ですよ？Sが戻ってきてからでは——」

隣のマジックミラーに突如、何かがぶつかる。

突然の出来事に2人の視線はそちらを向く。

誰か人がぶつかったのか或いは何か物なのかは暗くて分からない。

しかし、しばしの沈黙の後に大きな衝突音が聞こえる。間違いなく誰かがぶつかり合っている。

「ずいぶん早い帰還ですね」

ため息をつくジーク。

話す時間はなくなつたようだ。

「少し付き合つて貰いますよ、リヨウ・アマミヤ」

「…くそつたれ」



## 真似事

真つ白な空間。

常に垂直に黒い線が引かれているにも関わらず、その白は意識のうちから黒を消し去っていた。

長く続くその空間の中におかしくなってしまうそうだ。

悪趣味すぎるといつてもいい。

同じような場所を通っていると時間が長く感じる。

もしかして私はここをすでに何時間も走っているのではないか。

焦りが彼女の足をより一層早めていた。

「リョウウ…」

マーシャは自分の足を使って走っていた。

ドールを使って飛んだほうが早い。

だが、それではまるで進んでいる気がしないこの空間にの圧力に負けた。

こつちのほうはまだ安心していられる。

安心は言い過ぎかもしれないが。

やがて空間が広くなった。

通路のような形ではなく、円形の空間。

ただ、その奥にはまたどれだけ続くか分かりそうにない廊下が見える。足を踏み出そうとしたその時

「！」

直観だった。

嫌な感じがしたからその足を後ろに下げた。

目の前を一本の鉄パイプが通り過ぎる。

死にはしない、だが戦闘不能になりかねない一撃。

「あら、Sバリアが消えているのは知ってるのかしら？」

声の主の顔など確認するまでもなかった。

大して長い時間見ていたわけではない。

だが、嫌というほどその顔は脳裏に刻まれていた。

「S……！」

「ここに来たってことは……検体希望者ってことでいいのよね？」

「何を言ってるの？」

「そのまんまよ。ただリョウ・アマミヤとは待遇が違って選択肢は与えないけど」

「言いたいことが見えてこないけど別にいいわ。リヨウの場所に案内して」  
抑えていた笑いが吹き出たかのように笑うS。

「それは訊いてるんじゃないやなくて、決まり文句として言ってるのよね？」

「今の私は手加減できる自信ないわよ？」

「確かに私は攻撃型のネームじゃない。あの巨乳幼女に勝つことはできない、でもEの力を応用すれば貴女くらいどうってことないのよ！」

「E…?」

Sの腕から鉈が出現する。

マーシヤは知らないがミイヤのそれと同じ形をしたもの。

あくまでも形のみが同じでただのでかい鉈。

ところがSが鉈を振り回すと同時に鉈の長さが変化する。

短くなるのではなく、さらに長く。

ドールの装甲で止めるマーシヤだが、長くなったにもかかわらずSのそれを振るスピードは遅くならない。

「なによ、これがよくわからないけど応用？」

「見栄はらないで懇願したら？そうすればこれだけにとどめてあげる」

そう言うとき空いている左手を動かす。

その手の動きはまるで糸につるした人形を操っているかのようだった。そして何かが形成されていく。

初めは何かわからなかったがすぐに人形の泥人形であると気づく。形だけを見れば上出来であろう。

「私のネームは似せる対象さえあればこうやって一から作ることもできるの。森羅万象全てをね！」

「たかだか一人増やしたくらいで勝ったつもり？」

「ええ、今にわかるわ」

ネームは持つていても一人一つ。

これは絶対である。

だが、確かにマーシヤの目の前で新たな何かが出来上がっていた。

命があるかはわからない。

だが、こんなことをいともたやすくこなすのはどう考えてもSの範疇外だった。クワのネームを持つているようだ、自分の仲間を侮辱された気分になる。

「裏切り者と同じような魔法だなどとも思った？」

「…なんのこと？」

「悪いけどあんなチャチな物とはわけが違うわ！言ったでしょ、私はありとあらゆる物

：万物を似せるという形で作り出すことができるの！元の素材が必要となるOなんかと一緒にしないでよね」

「それはこっちのセリフよ、あの子と貴女のネームは別物よ」  
泥人形が前に出る。

バランスが取れていないのか頭は垂れ下がり、手はいびつな方向に向いているが確かにマーシヤのもとへ一直線に向かってきていた。

なんの武器も持たず、泥人形はマーシヤにとびかかる。

だが、それはマーシヤにとって邪魔になることすらなかった。  
とびかかってきた泥人形の腹に一撃蹴りを入れる。

それだけで泥人形は破裂するかのようにはらばらになった。

その間にもSは鉈を振り回すがグネズトに訓練されたマーシヤにとってSのそれは脅威ではない。

「それで本気？」

「調子に乗ってるんじゃないわよ！」

Sの周りに再び人形が形成されていく。

不思議なことにそれしかない。

人海戦術は悪くないがそれでもやりようがあるだろう。

マーシャとしては疑問が残るが都合はよかった。足のドールのパーツにエネルギーを使う。

Sバリアが使用できない以上、もう出し惜しみをする余地はない。

マーシャの足から放たれた斬撃ともとれるほどの威力を誇る衝撃波は泥人形に当たるとそれを粉碎する。

「甘いわよー」

ところが粉碎したはずの人形が一瞬で元に戻る。

ただ、一体というのが引つかかるところだが。

マーシャは予想していなかったことに驚き、動作が遅れる。

その間に人形はマーシャに絡みついた。

ねっとりとした人形のような材質の人形はマーシャにへばりつき離れようとしない。

そうしている間にSは鉈を振り下ろす。

巨大な鉈は確かにマーシャの頭をとらえていた。

体を均等に切り落とせるはずだった。

だがその刀は止められた。

あろうことかマーシャの手で。

「!?」

「この粘着質な何かで私を止められるとも思ったの？」

Sが危惧していたのはマーシヤの足だった。

彼女の攻撃の主体は足であることぐらい理解している。

だからこそ分からなかった。

なぜ彼女は自分の攻撃をドールを装備しただけの手で止めることができるのかと。

「確かに足技のほう得意って言う自負はあるけど、別に努力すれば腕だつて強くなるわ。それに……」

マーシヤは足に力を籠めると粘着質な何かを力のみで引きはがす。

無理やり形状を崩されたからかそれにはポロポロと形を保てないのか崩れていく。

「何を真似たのかは知らないけど鉋物でもない物体なんて力技でどうとでもなるわ」

「……………」

「本当に戦いの素人みたいね。だからもう一度だけ訊くわ、リヨウの所に案内する気は？」

思い付きだった。

でもいけると思っていた。

話しの通じないほどぶちぎれていたりすれば予想外のことがあるかもしれない。

だが、今の相手は何だ。

少しイラつきが見えるがそれ以外はいたって平常ではないか。そんな相手なのに自分は勝てない。

「な、なめた口きいてんじゃないわよ！言ったでしょ、森羅万象全ての物質を真似て創り出すことができる。いくらあんたでも……」

銃を手放し、新たな物質を創造する。

それは黒く、大きく、重厚感があふれる兵器。

自分で創り出したにも関わらず重いのか、ズシンと音をたてながら地面に銃を置く。

マーシャ自身は今まで見たこともない形をしていた。

機関銃というには弾倉が見当たらず小さい、そしてただの銃というには大きく取っ手の前方には取り外しできそうな円形の何かが見え、銃口とは垂直に取り付けられている。

「銃弾は見えないでしょ？Sバリアも使えないならこれであなたは終わりよ！」

「……見たところ重さのあまり扱えてないようだけど？」

「それくらいの手軽さがあったほうが楽しめるもの！」

Sが引き金を引く。

銃口は確かにマーシャを向いていたが反動のせい、狙いを大きくそれて壁に向かって銃弾は走った。

弾は壁に直撃すると大きな爆発音と同時に燃え上がる。



普通なら壁が壊れていてもおかしくはないのだがFの力のおかげか傷1つついていない。

「ハンデ…ねえ」

「……！」

顔を真っ赤にしたSが再び引き金を引く。

今度は反動に備えてしっかりと構えていた。

マーシヤはそれに反応してとりあえず左によける。

普通の銃弾なら間違いなく、当たっていたであろうタイミング。

しかし、Sの武器は銃というより大砲のような攻撃をしてくる。

生身では見てよけるなんて確かにできないが、ドールがあればそれからでも0距離じゃない限りよけることはできる。

Sは外したのを理解するとすぐに銃を構える。

接近を試みるマーシヤに明らかに恐怖していた。

「避けてんじやないわよ！」

「無茶言うじやない？ さっきまでの余裕はどうしたのかしら」

安い挑発。

マーシヤだって普通はしないことだが今は別。

相手に乗っってくれると踏んだ。

Sは何の躊躇もなく引き金を引く。

もともと当たりにくいのだから狙いを定めたり、慎重になるべきところなのに頭に血が上っていた。

「!？」

銃弾を避けたマーシヤはすかさずSに接近する。

鈍足な弾を撃つ銃なのだ。

一発の間隔もそれなりにあるのではないかと予想した。

実際、連射してこないところを見ればそうなのだろう。

慌ててマーシヤに銃口を向けるが一足遅い。

鈍い音と痛みがわき腹に走る。

そのまま横の壁まで5 mほどバウンドなしで飛ばされる。

「…丈夫な体してるのね」

驚いた表情でSを見るマーシヤ。

咳き込み、吐血しながらも立ち上がるS。

「いや…治してるのかしら？ お得意の真似ることで」

「それもあるけど…攻撃の直前に、鉋物を創造すればこれくらい…！」

バランスなんてお構いなしにSは銃を構える。

それでもSはマーシヤに当てなければ気が済まなかった。

しかし

「!」

マーシヤは何もしていない。

なのに引き金を引くと同時に銃が爆発する。

「アアアアアアアガフツ!」

はじけ飛んだ自分の右腕の痛みを耐えかねる。

痛みのせいで魔法に対する集中が切れ、代用していた内臓の一部が消え内部にまで痛

みが走る。

「銃に対する集中を切らしてたか。くそ…!」

人体の構造は理解している。

だから作る中で一番得意なのは人だ。

最も、脳だけは未だによくわからないところが多いため自律した人間を作り出すこと

ができない。

だが内臓、ましてや表に出ている手などのパーツは簡単すぎてあくびが出る。

痛みには耐えながらすぐに体を新調する。

細部までこだわっている構造のおかげで問題なく機能する。  
痛みも消えた。

「いい加減諦めて。貴女じゃ私には勝てない」

「……」

「分かつてるならリヨウの場所を——」

Sの指が変に動いた。

マーシヤはそれを見逃さない。

間に合う距離だと判断したマーシヤは懐に飛び込む。

だがマーシヤは創り出されたものを見てギョツとする。

手のひらサイズの楕円形の爆発物、手榴弾だ。

接近するのを躊躇してしまった。

その隙にSはそれを投げると後ろへ後退する。

投げられた爆発物を前に回避姿勢をとるマーシヤだったが、いつまでたっても爆発しない。

偽物をつかまされたことを理解すると、すぐに追尾行動に移る。

道は一本だった。

追いかけるのは容易だが、逆に誘い込まれているようで嫌な感じがする。

「逃げたって私のほうが速いわよー」

「なら早く追いついてみなさいよ」

しかし、鬼ごっこは長くは続かなかつた。

再び開けた場所に出たかと思うと行き止まりだったからである。

奥には窓のようなものがあり、扉が一つ。

あの扉を開けたらまたまた広い空間が続いていますとは考えにくい。

壁は相も変わらず白が目立っている。

「袋のネズミ……ってわけじゃなさそうね？」

「ええ、もちろん」

そう言うとSは何かを投げる。

マーシャの足元に転がったそれらはさつきと同様、手榴弾。

ここで偽物をつかませる理由がないと判断したマーシャは後ろへ飛び退く。

案の定それらが爆発して視界を悪くする。

そしてマーシャにはSの次の手がなんとなくなかった。

素人だから、一度自分も通った道だから。

そして、袋のネズミではないといったが背水の陣である以上後がないことに変わりはないから。

砂煙の中から2つの銃弾が現れる。

さつきと同様、決して速くはないが威力ある。

煙幕で見えなくすればあたるだろうと考えるなんて何年前の自分のことだろうと、苦笑する。

マーシヤは迷わず、煙幕をくぐる。

すでにあの銃の連射速度は分かり切っている。

煙幕を抜けた時、Sの驚いた表情が目に入る。

まさか真正面から突破するなんて思ってもいなかったのだろう。

マーシヤの足が今度はSの腹に入る。

何の防御姿勢もとっていなかったSは後ろへと飛ばされ窓に激突。

魔法こそ解除されなかったものの、再び咳き込み吐血する。

「終わりよ」

「ふ……ぎけてんじやないわよ。これから、だっていうのに！研究も！」  
単純な岩を作り出す。

投げるが当たり前ながらマーシヤには当たらない。

「検体も！」

再び鉋を創り出し叩きつけるがマーシヤは片腕でそれを防ぐ。

「人生もー」

マーシヤはもう問うつもりはなかった。

確実に仕留めるつもりで接近しようとしたその時。

一つの扉が開いた。

視界に入ったそれを見て足を止める。

「S…ずいぶんな姿ですね」

「T、なんでいるの？」

「侵入者撃退のため、が一番簡単な理由ですね。貴女と違って腕には自信がありますし」

「…」

「だけど不思議だ。なぜ弟はこいつと戦わなかったんでしょう？」

「??」

顔は見たことある。

だが話したことはない。

リヨウと戦っていたのは確かに記憶しているが知らない。

ただ、嫌な感じがする。

強いとか実力の問題ではなく、嫌悪だ。

恐怖も混ざっているような気がするが違うのだろう。

「ご存じないですか？リプト・T・エリオスって言うんですけど」  
「T……！」

「あー、そつちで覚えてたんですか」

思わず後ずさりする。

相手の家族構成なんて知る気はなかったが兄弟なのだ。

おかしいのは間違いない。

それ以前に弟のことを分かっているながら何も思っていないあの態度。

敵対心を抱かないわけがない。

「そんな身構えなくてもいいですよ」

「……なんでかしら？」

「どうせ、すぐに終わりますから」



# 1歩

一見は人と人との殴り合い。

グネズトとカザキのお互い一步も引かぬ互角な戦い。

だが、ぶつかり合う音からは人それとは違い、金属音がする。

「どうしたグネズト、腕が鈍っているようだが？」

「……」

「ああ、済まない。俺が強くなっているだけか」

最後に拳を交えたのはいつだったか。

模擬戦闘は何回かやった覚えがあるが、最後は確か殺し合いそのものだったような気がする。

ただ、一つ間違いないと言えるのがグネズトはカザキに勝ったことがない。

戦闘の技術面で考えれば、グネズトのほうが上。

だが、肉体的な面で考えればカザキのほうが上。

同じ、金属を交えた体と考えていたらすぐに鉄屑に変えられてしまう。

そのためのリョウだ。

ミリーナの思惑通りにいけば対峙できる。

だが、その本人は今どこにいるかもわかりはしない。

仮にカザキと対峙したとしても他に誰かいると思つてたのにグネズト一人だ。

他を当てにしていたつもりはないが少しは楽になつてたであろう。

「なぜ？」

「？」

ミリーナに聞いた時から疑問に思つていた。

彼女がほしいと言うことはそれを操りたいからだろう。

「お前は以前研究者だったと聞いた」

「それが？」

「死んでしまつては元も子もないだろ」

「いくつか誤解をしているな。確かに俺は死ぬつもりはない、だがお前のその言い方で

はまた何かいじくりまわしたいと言つているように聞こえる」

「違うのか？」

「俺は、頼まれた夢を叶える。そして自由になる」

何かの言い回しか、それに聞こえた。

というよりそうしか解釈ができなかつたグネズト。

「分からなくてもかまわん。仮に理解はできてもそれは本当の意味での理解にはならな  
いだろうしな」

一瞬、考えようかと思ったがグネズトはやめた。

無駄だ。

どの道を通ろうと、カザキは殺さなければならぬ。

グネズトの体に大した機能はついていない。

強靱な肉体、長時間ではないが飛ぶことができる。

だがそんなこともこの世界ではいくらでも代用できるものがある。

正直このままいけば負け戦なのは百も承知だ。

だが引けない、引きたくない。

グネズトは拳に力を入れた。

「(あいつ……!)」

「ほら、そんなに逃げ回らないでください。慣れてるとはいえ、1人でこの数操作するの

は骨が折れるんですよ？」

笑みとは裏腹に、マーシヤを確実に殺そうと包囲網を狭めていくT。

勿論兄である。

相変わらず、人の死体を使っている。

それも腐敗など気にせず。

まだ死後間もないのか、きれいな肌をした女性。

どうやって殺されたのか、腹から腸がはみ出しとところどころ肉が抉れている男性。

頭がないなんてザラで、断面図がくつきりに見える。

しかし、人の体の中身なんて見たいと思う人は少ないだろう。

マーシヤもその一人だ。

女性といえども軍人。

慣れているつもりではあったが、いざ数のある物を目の当たりにすると吐き気がしてくる。

ただ、馬鹿にはできない。

それだけやり手だ。

さっきのSとは比べ物にならない。

能力が違うからとかそんな話ではない。

場数を踏んでいるからか、天性の才能なのか知ったことではないが近づくことがままならない。

遠距離はできるだけであってマーシャはあまり得意ではない。

決定打に欠ける一撃はあまり好きではないのだ。

「いいのですか？ そんなゆくりしていると恋人がどうなるかわかりませんよ？」

「付き合っていないわよ！」

「言ってみただけです」

「絶対に殺すわ」

ジーク（T兄）は指揮に長けている。

それはなんとなくわかった。

人海戦術とはよく言ったものだが、ただの人形ならば数で圧倒されてもどうにでもなるだろう。

だが、ジークの場合この死体をやろうとするとあれの攻撃範囲に入るといったようにカバーされている。

死ぬのなんて、それ以上に体が傷つくことが怖くないというだけでもかなり厄介であるにもかかわらず連携が取れているというのはチートの領域だ。

さらにあくまでも操っているのはジーク一人なのだから思考も一つ。

使いようによつてはうまく事が運ぶかもしれないが連携という意味では最悪だ。そんな中でも不幸中の幸いだったのがSが手を貸さないこと。

仲間意識はないのか。

問いたですつもりはないが。

マーシヤは死体の包囲網が狭まりつつあることには気づいている。

殴つても減らない死体。

むやみやたらに動くこともできない。

エネルギーを使用して衝撃波を放つ。

選択肢としては遠距離が一番だと結論に至つた。

敵の数が減ろうが減るまいが一瞬は足が止まる。

Sの時の斬撃とはうって変わつて敵にあたるとそれは爆発する。

防御なんて考えていない死体は文字通り破裂する。

マーシヤは死体の上半身が存在していた場所を通り抜ける。

全身から汗が溢れ出ている。

それを一つ距離を詰めた今実感する。

少しの安心が彼女に体温の感覚を戻させた。

少しだけTの表情が変わつた。

だがそれは焦りではなく、及第点を取れたことを褒めることからきている。

敵であるにも関わらず褒めた。

褒めるだけ余裕がある。

ただ、何度も同じくはいかない。

決して死体は学習しない。

Tが改めて死体の配置を変える。

無数に存在する駒ならばいくらでもやり直しがきく。

欠伸が出るT。

再び敵が目の前に立ちふさがる。

ガン見するつもりはないが、一瞬見えたそれは千切れかかった腕から骨が見えていた。

腹に外傷はなかったように見えたが、頭に何か長いものが刺さっていたように見える。

足に再びエネルギーを籠める。

しかし、次は相手に向けて放つことはない。

その場で暴発するかのように爆音と同時に視界が悪くなる。

死体の足が止まった。

Tがまたしても予想していなかった行動に対応できなかったのだ。  
マーシヤが再び前進する。

一歩一歩が大事なのだ。

近づければ勝てるはずだ。

接近戦ではそれなりの自身があるのだから。

「!？」

しかし、直後に足に何か絡まり地面に叩きつけられる。

一瞬、以前と同じく地面から何か生えてきたのかと錯覚したが違う。

確かに手に握られている感覚だ。

しかし、その手からは精気を感じられずひんやりとした嫌な感じがした。

どんなに戦いに集中してもこればかりは反応してしまふ。

ぎりぎりでも反応したのか、相手も倒れながら確かにマーシヤの足をつかんでいた。

その手からは死んでいるとは思えないほど強い握力が発揮されている。

メキメキと骨が悲鳴を上げているのが分かる。

すぐにマーシヤはその手を引きちぎる。

案外簡単だった。

力を入れて逃げようとしたところ、腐っていたのかブチブチと音がしたと思ったら足



が軽くなったのだ。

足が握られている感覚はあるがそれを引きはがしている時間はない。

近づいてきていた敵を起き上がる勢いと一緒に吹き飛ばす。

ところが蹴り飛ばしたと思つた敵が吹き飛ばすことはなく、ただ敵の体をマーシヤの足が貫通する。

ひんやりとした液体が自分の足にかかり、血の生臭いにおいが広がるのが分かる。

なぜ、死んでいるのに、蹴られるだけで体が貫けるほど腐敗しているというのに立つことができ、血がまだ液体なのかと疑問を持つ。

しかし、そんな疑問をかき消すかのように足に激痛が走る。

死体がゾンビのごとくマーシヤの足にかみついたのだ。

マーシヤはすぐにさつき暴発させたかのように見えた方法で爆発を行う。

死体の顔が吹き飛び体も下半身のも大体が吹き飛び血がマーシヤに降りかかった。

「自慢の足が台無しですねえ？」

「これくらい……！」

「もう一本の足もダメになりますよ」

突如、傷ついていない足に大きな圧力がかかる。

さつき無視した手が力を込め始めたのだ。

人間、ましてや死体とは思えないほどの力を発揮する。

「細かくなつた部分は操れないわけじゃありません。ただ支配するのをやめていただけ、意識すればこうやって手だけでもできるんですよ」

再びマーシャの足が悲鳴を上げる。

さつきまで感覚で感じていた骨のひしめきだったが耳に聞こえてくるようだった。

痛みの強さに無視することができず引きはがしにかかる。

エネルギーの爆発は生憎、つかまれている部分が太ももに近いため使うことができない。

マーシャが苦痛に顔をゆがめている中、Tは黙って座っているSに声をかける。

「そういえばS」

「なによ」

「なぜ、リヨウ・アマミヤを殺さないのです？」

「別に。ただ人手がほしかっただけよ。殺せとは言われてないでしょ」

「何をするかはだいたい想像がつきます。機体がいくらでも——」

「私の手伝いをさせるなら最低限自我を持った型を使わせてもらわないと」

「もしもがあつては面倒なんですよ。現にあの赤毛一人にも勝てないじゃないですか」

睨みつけるようにTをみるSだったがTはなんとも思っていないのか、そつぽを向いたままである。

Sも反論はできないとわかっているのか口では何も言わない。

「うああああああ…」

マーシャが痛みに耐えかねて声を出し始める。

骨の音もボキボキと痛々しい音が本格的に響き始める。

あまりの力の強さにマーシャの腕力ではどうしようもなかった。

「この程度でリプトを殺そうなんて…随分な考えを持つていたようですね。身の程を知れとはまさにこのことです。以前生きていられたのはやはりリヨウの力が大きいようですね」

「あなたに何…が！」

「一目瞭然じゃないですか。貴女はここで——」

しゃべりかけたところでTが頭を抱える。

うめき声をあげながらフラフラとよろけ始める。

それと同時にマーシャの足にかかっていた圧力が弱まる。

急いで引きはがすとそれを遠くへ投げた。

「ハ、ハ、これは…？」

「T、いったいなにやっで——」

Sの口から血が吹き出る。

何が起こっているのかわかっていない様子だが、口から血が出れば意味はなくとも口を押えるだろう。

だが、Sが口を押えても滝のように血があふれだしてくる。

何が起こったのかわかっていないのかSは口を押えることしかできず顔から血の気が引いていく。

突然の事態に恐怖している。

体もどういいうわけか治らないらしく手が震え始める。

血だまりができてそれが広がり始める。

「まさか…Eが？」

頭痛が収まつてきたのか独り言をつぶやくTだが、全身から汗が吹き出ている。

「よくわかんないけど、チャンスってやつ？」

「…いいえ、この程度の戦力低下なんて無意味。貴女はチャンスをすでに取りこぼしました」

マーシヤは再び前進する。

## 触れるな危険!

マーシヤがSと出会った頃だった。

「……………」

明らかに不自然な穴の前にレックスは頭を悩ませていた。

入り口はあったのだから出口もあるはずだとめげずによくわからない機械の山の部屋を搜索していたところ、壁の奥に空洞を見つけたのだ。

レックスのドールの力でどこか壊せるものはないかなと力を使っていたところ、奥に空洞を発見したのだ。

何かあるのではと悩んでいるが黙っているわけにもいかない。

「レックス?」

名前を呼ばれた。

だが、この場にとても合わない声だ。

しかし、その人がいるなんてありえない。

さつき連れ去られたはずだったから。

レックスが半信半疑で振り向く。

そこには思っていた通り、ミリーナが立っていた。転移装置から入ってきたのなら気づく。

だが、ミリーナは物音ひとつ立てることなくいつの間にかレックスの後ろに立っていた。

瞬間移動でも……

「ああ、そういえばできたんだっけ」

そして、レックスはミリーナをまじまじと見て思わずギョツとした。

体のパーツ、左腕が見当たらないのだ。

「ああ、これ？ちよつといろいろあったの」

それに気づいたのか、苦笑いを浮かべながら断面を見せる。

肉肉しくはないその断面はもともとそうだったかのように鉄の断面が顔を見せる。

「中も見たいの？」

「いや、正直どうでもいい」

なんとなく想像がつくその中身には興味が持てなかったレックス。

ミリーナはそれを聞くと少し残念そうに腕を下した。

「で、なんで俺のところに来たんだ？」

「別にレックス目当てで来たわけじゃないの。たどるならここからが一番だと思ったか

らなの」

「?!」

「昔、私は自分の情報を使ってここの戦力情報を推測したの」

「それが?」

「以前の私はここに20以上のネーム持ちがいると思っていたの」

「20!?!」

10人以上数に差があればさすがにリヨウたちでも無理がある。

素っ頓狂な声を上げたレックスは慌てて周りに目をやる。

一通り周りを見たがもしものことがあつてはまずい。

幸い、敵の姿はどこにも見当たらなかった。

しかし、ミリーナは話の続きを話すことなくそこらの機器をいじり始める。

「レックス、この部屋に何か変わったところはなかった?」

「ここに隠し通路みたいなのくらいなら」

「あつたの!?!」

首がすごいスピードで曲がりレックスの後ろにある通路を見てしばらく止まる。

腕一本なくなるだけで人はバランス感覚が少しずれがちになるのだがそれを感じさせない足取りでミリーナは通路の前に立った。

入口が狭いその通路の奥は大人一人ぐらいなら問題なく歩けるぐらいの大きさがあ  
る。

「この先に何かがあるかわかるのか？」

「戦局を大きく変えることができるキーなの」

「キー？」

「鍵って意味なの」

ミリーナは少しかがむと迷わずその通路の奥へと足を進める。

暗い通路にわずかな明かりが灯された。

足場を確認するのがギリギリなわずかな明かり。

レックスもその後が続いて歩いていく。

「なあ、この先にあるのが20人以上の敵を蹴散らす鍵になるのか？」

「ん………、少し違うの。まず訂正しておくのは私の推測は間違っていたの」

「20人が？」

薄暗く、わかりにくくはあったがミリーナは確かにうなずいた。

「初めに疑問に思ったのはCを見てからなの」

「あの男か？」

「私が知っているあの人はフラットの恋人なの。そして刀の技術だけならフラットより



上

「それでネーム持ちか」

「いえ、それは違ったの」

「は？」

「彼はネーム持ちではなかったの」

レックスの足が止まった。

足音で聞き間違えたかと思つたがそんなに大きな足音ではない。

「馬鹿言うな。俺たちは自分の体で確かに体感したんだぞ？」

「分かつてるの。あの人は今ネーム持ち、でも数年前は確かに違ったの」

「じゃあなんだ？ネーム持ちを自由に創り出せる技術でもできたのか？」

「たぶん……なの」

なんて言つたらいいかわからず口を開けたままだったレックスだがミリーナが動き出すと後ろをついていく。

もしミリーナの言うことが事実なら絶望的である。

ネーム持ちは天然でしか現れないというのにカザキは創り出すことができたという推測はレックスに軽い絶望を与える。

だが、疑問も残る。

創り出せるならなぜ増やさないのか。

ミリーナは確か20人以上いるという推測は間違いだといった。

「おそらく全員を変えることはできないの」

その疑問に答えるかのようにミリーナが話す。

「何か条件があるの。例えばデオキシリボ核酸の配列だったり血液型…ホルモンの問題だったり……」

血液型以外、レックスは詳しく説明しろといわれてもよくわからない。

もともと理解する気で聴いていたわけではないが頭が痛くなる。

「ともかく、その中心を探してたの。ただ一度通った場所じゃないと瞬間移動は危険すぎるから目視で探してきたんだけど見つからなかったの。今までは」

「…分かった。じゃあもう一つ訊きたいことがある」  
「？」

「どうやって3人の敵をこんな短時間で退けた？」

「ああ、それは——」

ミリーナがしゃべりかけた瞬間だった。

突然光がともった。

その光はさつきまでとは全然違い、白い壁全体を確かに強く照らしている。

しかし、その光はすぐに弱まりさつきほどまでではないが程よい薄暗さが部屋全体に広がる。

しかし、不思議な点がありその明かりは旧世代の電球から灯されているということ。膨らみかけの風船を思わせるその電球をレックスは生で初めて見た。

部屋の構造はドーム状。

他には特に何もなかったと思われたが一つ、中心に目を見張るものがあつた。

液体で満たされた丸い形をした容器が天井に向かって伸びている。

そしてその液体の中には

「……人？」

入ってしばらくの間、言葉も出ないのか啞然としていたミリーナだったが口を開いた。

その口から出たセリフも疑問形ではあつたが。

容器に入っていたそれはすっかり痩せ切つた女性だつた。

裸ではあるがその状態であつてもレックスは興奮を覚えることはできなかった。

必要最低限。いや、その筋肉すら残っていないのではないかと思わせる風貌だつた。

「これがお前の言つてたキーつてやつか？」

「おそらく、なの。こんな形なんて想像もしてなかったけど」

「じゃああの女性についても？」

「予想はなんとなく……なの」

「で、俺はこれを壊せばいいの？」

「保証はできないけど……でも壊す必要があったとしても——」

「Fの力があつては不可能ですよねえ」

ミリーナもレックスも慌てることはなかった。

わかりきっていた。

こんな重要な場所に誰も配置しないのはありえない。

現れた男は余裕を感じさせる雰囲気を持ちながら眼鏡を指で少し持ち上げる。

「代弁どうも、といたいところだけど少し違うの」

「へえ、本当はなんと？」

「雑魚を蹴散らしてからの」

「……雑魚というのはリユート・J・ミヌである私を指しているのでしょうか？」

「思ったより頭の回りがいいの」

Jは鼻で笑うと掌を握りしめる。

するとその拳から何色とも言い難い、液体のようなものが体を覆い始める。

「ミリーナ、Jは？」

「『古い』なの。でもあれに触れると老いるなんてもんじゃない、腐るの」

「ドールで防げるか?」

「ドールもすぐに崩れるの」

面倒だなどでも言いたげにレックスが頭を搔く。

Jはそうしている間に体全体を謎の液体で覆った。

目や鼻は確認できなくなりこちらが見えているのかも定かではない。

「これは壊されると困るんですよ。多いにね」

話ができるらしい。

声は特にこもっているようには聞こえない。

「いったい何なの?」

「…Eのことを指しているのですか?」

「その女はEなの?」

「何も知らずにここまで来たのですね。そのまま殺されるのはあまりに不憫でしょうから教えて差し上げましょう」

Jが容器の隣に立つ。

掌でそれに触れたが容器に何の変化もなかった。

そこでおかしなことに気づいたミリーナ。

Jは地面に足をつけている。

だが、地面が腐るような感じは見当たらない。

Fの力だつて時間の流れには逆らえないはずなのだ。

Jの力はそれだけ強いのか或いは…

「これはネームの力を持つ者にはさらなる力を、持たない者にはそれを与えます」

「Eを使う理由はなんなの？」

「Eの能力は他のネームの物まね。これほど魔力の変換に適したネームはいませんよ。ただ、これも完璧ではありません。ネームではない者への力の付与の場合、ネームが目覚めかけている必要があります」

「目覚めかけなんてあるのか？」

「魔力を一定以上持つている人がそうですね。力の前に魔力が先行してしまった、といったところでしょうか」

さて、と小さな声でしゃべるとJは襟を正す。

外見人の形をしているだけなのだからそんなことに意味はない。

「冥土の土産は渡しました。おとなしく死んでください」

丁寧な物言いではあるが確かにその言葉には殺意がこもっていた。

一步、一步と近づいてくる敵を前にミリーナは構えた。

正直どう対応したらいいかわからなかった。

自分の体は半永久的だと自負してはいるがそれもメンテナンスを踏まえればの話。相手の能力がそれを考慮してくれるはずがないだろう。

引つかかる点はあるがそれが何かは分からない。

「ミリーナ」

「？」

「あいつに訊きたいことはもうないんだな？」

「贅沢を言えばあの機械を止める方法も知りたいの」

それを聞くとレックスが敵に近づき始める。

その行動にJは少し驚いたのか、足が鈍った。

誰にでもわかるほどに。

それを見てレックスは笑う。

「やっぱりな。小心者だと思ってたよ」

「…何？」

「その上から目線の物言いといい、体全体にまんべんなくネームの能力を使うといい、誰にも見つからない可能性もあるのここにいることといい」

「面白いことを言うな、屑が」

「あと挑発に簡単に乗るところとかな」

ミリーナは制止しようと試みたがすでに遅い。

Jは足をバネにレックスにとびかかる。

ミリーナ避けるよう叫んだ。

それは確かにレックスの耳にも入ったはずだった。

しかしレックスはJの腹めがけて拳を入れる。

Jもその瞬間はレックスが何をしたいのかさっぱりだった。

2人の拳が2人が思っていた通りの部位に直撃する。

お互いに力を前に込めていたため受け流すすべはない。

お互いの体から痛々しい音が低く唸った。

2人も後ろに下がりひるむ。

レックスは相手からの拳よりも自分の拳に痛みを感じた。

拳に目をやると皮膚が……いや、わずかながら筋が顔をのぞかせている。

拳を守っていたはずのドールはさび付き、機能の一部を失っているのがうかがえる。

「何をしたいのかは分かりませんが……これでわかったでしょう？」

レックスの拳がうまく入ったのか苦痛に顔をゆがめながら平静を保とうとする。

顔は見えないが、声色で苦痛に顔を歪めているというのがレックスにも分かった。



「貴方は一撃私に拳を入れるだけでその有様です。足を含めてもあと4、5回が限界かと」

「…確かにお前に触れるのは危険だ。だけどな——」

レックスは両手を目の前で構える。

「それはお互い様なんだよ」

両手をぶつけ、手を鳴らす。

瞬間、Jの背中から勢いよく血が吹き出た。

破裂したかのように一瞬で血が吹き出る。

「……………??」

突然走った激痛に何が何だか分からなかったに違いない。

体全体を覆っていたまがまがしい何かが崩れ落ちていき、戸惑いの顔が露わになった。

一瞬にして広がった血の海。

そこに静かにJは崩れ落ちる。

「俺が疑問に思ってたことは一つ。そのJの力が本物か違うか。体全体を覆えるのに足の裏にそれを使わないのはおかしいと思ったからな」

レックスはミリーナと同じ疑問を抱いていた。

Jはわずかに顔を上げ、レックスを見上げる。

レックスの言葉を理解できているのかは分からない。

「偽物なら普通に殴り合うつもりだったんだけど、悪いな。俺のドールは拳を入れるまでの一瞬があれば人一人殺すなんて造作もないんだ。結局、足の裏まで覆わないのは単にめんどくさかっただけ？みたいだけだな」

何か言いたげに口を開いていたが、出てくるのは血だけだった。

あえぐので精一杯で言葉は出ない。

「じゃあな」

しばらく痙攣を起こしていたJの体もやがて動かなくなつた。

レックスはそれを見るとミリーナのほうに歩み寄る。

手が痛いのか手を振っている。

「何ぼーつとしてるんだ？リヨウを助けるのに時間がないんだろ、あとはお前の役目だ」

「…あ、うん。今やってみるの」

暫し止まっていたミリーナは画面を前に片手でキーボードをたたたく。

やる事が分かつているかのようにその手の動きは滑らかだった。

レックスは黙ってそれを見る。

画面に並ぶのは言葉ばかりだがレックスが理解できることはほとんどない。

自分の知っている言語のはずなのだが、そう思えない。

1分もしないうちにミリーナの手が止まる。

「……………やつぱり」

ミリーナは呟くとEに顔を向ける。

「どうした?」

「Fの異常なほどの力もこれを止めれば抑えられるの。それだけじゃない、他の敵も弱体化できるの。戦況が一気に傾くの!」

「できるのか?」

「すぐできるの。……………よし!」

うれしそうな声と一緒にいわゆる「Enterキー」が押される。

機械が唸りを上げる。

排水され始め、中の女性は座り込むようにその中で倒れこむ。

中心にあった容器を照らしていた光が消え、部屋の明かりも少しばかり薄くなつたように見える。

そして嫌な音がした。

レックスは興味がないのと、女性の裸体を見続けるのはバツが悪いと思いい目をそらしていた。

ミリーナはその音と一緒に小さな悲鳴を上げる。  
レックスが次に容器を見たとき、それは真つ赤に染まっていた。

## 波紋

「あ……ぐー」

ナタリーがフィリアの首を掴んでいる。

あいに空中で戦っているため、持ち上げても苦しいとは思わない。

だがナタリーはその体からは予想だにできない力でフィリアの首を絞めつける。

「やっぱり速いだけね。その大平原のおかげで空気抵抗も少ないのかしら？」

少し離れたところからリリアはそれを見ている。

構えた銃の照準はナタリーを指すことなく、フィリアに向けられている。

位置的な関係でナタリーに向けることが難しいのだ。

下手に撃つてしまえば弾はナタリーに傷つけることなく、フィリアのみに大ダメージ

を与えかねない。

「やっぱりいい気分だわ。一度あなたに馬鹿にされた時、どれだけ腹が立ったかと思う

と当たり前かしら？」

「……………」

「さて、どうやっていたぶろうかしら？ 選択肢がありすぎて——」

「ファイヤー！」

小規模な爆発と同時に視界が悪くなる。

ファイリアはいつもは使わない魔法を唱えた。

魔法を使うなんて何年振りなのか彼女自身でさえ定かではない。

一番鮮明なのが1年生の時だ。

リヨウの真似をしてぶつつけ本番に近い状態でうったのを今でも覚えている。

ファイリアの腕が極端な熱さに襲われる。

もともと至近距離で打つたものではない。

「(なんで…!?)」

この時ファイリアの頭に2つの疑問が頭に浮かんだ。

1つはナタリーが手を放してくれなかったという事実。

顔面に押し付けて放ったファイヤはファイリアにダメージを与えてもナタリーにダ

メージを与えることはできなかった。

それでも人間なのだから反射というものに賭けたのだが駄目だった。

「ゲホッ…ちよつと、私に魔法で勝負を挑むつもり？随分なことやろうとしてるじゃない。

い。いや…ただ単に逃げたかっただけかしら？リリア！」

空いている左手で目の前の煙を払いながらリリアに呼びかける。

「この子を助けたかったら……言わなくてもわかるわよね？」

「……信用ならないわ」

「大丈夫、貴方が来てくれるのならこいつは捨てていくもの。生かしておいてあげるの  
は本当よ。最も……」

ナタリーの手に力が込められる。

嫌な音と一緒にフィリアが苦痛に顔を歪めた。

「ああ……あ……」

「早く決めないとこの子も助からないわよ？」

「リリアは再び照準をナタリーに合わせようと構えるがナタリーはその行動に顔色一  
つ変えない。

「以前私が貴方たちに僅かながらでも後れを取ったのは貴方たちのことを知らなかった  
から、リリアを分かり切っていないなかったから」

「貴方なんかには理解されてたまるもんですか……」

「まあ、一番の誤算はこの銀髪。貴方だけなら今頃は違う方法で汗をかいていたところ」  
攻撃にしか能がない。

リリアはこの時初めて自分のドールのことを心の底から悔いた。

自らを重量級にすることで多少の守りと攻撃を手に入れたドールだったが、実際は仲

間を取られると動きでほんろうすることはおろか、攻撃すらできないただの傀儡。

以前はマーシヤが体を張って時間を稼いでくれた。

ついこの間はフィリアに助けられた。

そして今、リリアは何もできない自分に悔しさを隠し切れない。

「悩んでるのかしら？ そんなに難しいこと？ 体を許すだけで人一人の命が助かるのよ？

それも相手は男じゃない」

「……………」

「私だってこんなことしたくないのよ？ こんな断崖絶壁じゃなくて貴方に触れていたい

…。ね？」

リリアはここですぐにうなずくことができなかった。

1つはまだあきらめていなかったから。

そしてもう1つは好きでもない相手に体を預けるといふ凶行をしたくないという意

志。

友達を助きたいよりも強いわけではない。

だが弱いわけでもない。

見るだけで背筋を凍らせて来るような相手にリリアは決断することができなかった。

「あら…そう。なら一番最高の結末にしてあげる」



フィリアの僅かに開いていた気道が完全にしまる。

ナタリーのこの行動がリリアに決断を強いた。

しかし、先に動きを見せたのはフィリアだった。

ナタリーの腕に片方の手で掴みかかる。

そしてもう片方の手で首を絞めているナタリーの手を掴み力づくで気道をこじ開けようとする。

「たったそれっぽちの空気じゃ貴方の命を繋ぎ止めるには無理があるわよ？ むしろ苦しんでいるんじゃないから？」

ナタリーの言うとおりだった。

僅かに入ってきた空気を体が求めている。

こんなものでは足りない。

首にかかる痛みなんて忘れてしまいうるほど、酸素を渴望していた。

しかし、フィリアが狙っていたのは酸素の補給ではない。

「デ………ク………」

「？」

必死に出そうとする声に不思議そうな顔をしながらナタリーも耳を澄ませる。

「デイス……トウ・ロ……クト」

本当に消え入りそうな声。

リリアにはしゃべっているのかすら全然わからなかった。

ただ、ナタリーはそれを聞いた時、自分の耳を疑った。

次の瞬間、突然の熱気とともにナタリー、フィリア両者の体が大きな衝撃に襲われる。少なくとも、今は静寂であったはずの3人の戦場に突然の爆発が起きた。

「アアアアあ?」

最初に悲鳴を上げたのはナタリーだった。

ナタリーの腕が確かに焼けただれている。

ナタリーの拘束から離れたフィリアはせき込みながらも確かに生きていた。

ただ、リリアはフィリアの姿を見て絶句した。

ナタリーの腕を掴んでいた左腕がごっそりなくなり、腕の先からは血が流れ、骨が頭を出している。

ケイトのそれは見たことはあるが、彼の場合切り落としてから使うのが普通だし長い時間それを放置することはない。

そして浮かび上がる疑問。

なぜ、ナタリーを傷つけられるほどの魔法が使えた?

「リリ…アさん、早く!」

フィリアの必死の呼びかけに我に返るリリア。

ナタリーとの間にある壁はなくなつた。

この状態での勝負なら勝てる自信がある。

リリアは銃を構え、ナタリーの心臓を狙う。

そして迷いなく、引き金を引いた。

ナタリーがリリアに気づいたのはその瞬間。

完璧な防御をするにはあまりに時間が短すぎた。

発砲音と同時に銃口から弾が発射される。

常人の目で追うことはまず不可能な銃弾。

次の瞬間にはナタリーの胸に着弾していた。

必死で張つたバリアが不幸を招き、体の内部でその銃弾は止まる。

ただ、不幸だで行つたのは後に取り出さなければならぬからという話だからであり、今はそんなの関係ない。

すぐに外したことを理解したりリアの追撃が行われたが、それを許すほどナタリーは甘くはなかつた。

すぐに何重もの防御結界をはり、リリアの猛攻から逃れる。

しかし、負つたダメージは大きくナタリーの挙動が明らかに不自然になっていた。

「く、……くそ！この……銀髪！」

しかし、その恨みがリリアに向くことはない。

この状況を作った始まりがフィリアだと頭の中で決めつけ、すべてをフィリアに向けている。

「大体……なによそれ！魔法が使えるなんて聞いてないわよ！それも自爆だなんて……」

「……ミリーナさんが言っていました。ドールに何かしたと。それが何なのかは皆目見当が付きませんでした。がさっきのファイヤで違和感を覚えたんです。私は自分のドールを傷つけるほど威力のある魔法なんて撃てませんでしたから」

フィリアは焼けただれた左腕が痛むのか、顔を苦痛に歪めている。

焼けているおかげで出血こそ微々たるものになりつつあるが痛みは計り知れない。

「これもドールのおかげだというのなら、いろいろ疑いたくなることはできてますが今は好都合でした」

「殺す！絶対殺す！リリアが何と言おうと貴方だけは絶対に殺す！」

「なら先に私が貴方を殺すわ」

リリアに銃口を向けられ、思わずにらみつけてしまった。

たとえリリアであつても邪魔をされては僅かながらも嫌悪感を抱いてしまう。

だが、ナタリーは冷静さを取り戻しつつあつた。

今殺すべき対象は1人。

それもかなりの手負いだ。

リリアは後でどうにでもなる。

仲間を殺されれば間違いない攻撃が単調になるはずだからだ。

少なくともリリアに平静を保つことはできないだろうとナタリーは考えた。

しかしファイリアはジリ貧であった。

ドールのエネルギーは残っておらず、影分身のような目くらましもできなければ瞬間移動ほどの速さも出せない。

魔法が使えたからって強い魔法で知っているのは今のだけだ。

腕は痛むし、何が原因なのか視界も僅かにくらみ始めた。

ナタリーの結界が再び2人を囲み始める。

はじめは広く囲み、徐々に狭くすることで逃げ場はなくなっていく。

リリアの銃弾はそれを容易に破壊するが、銃弾では人が逃げられるほどの大きさの穴を作ることはかなわず、ナタリーも容易にふさぐことができる。

「銀髪、ここまで私をイラつかせたのは貴方が初めてよ！死に様も無様なものにしてあげる！」

腕を負傷し、銃弾を浴びてなおナタリーは動き続ける。

すでに痛みにも耐えかねて気絶していてもおかしくはない。

それなのに大声を張り上げ、口からも出血している。

何もできぬまま、完全に逃げ道が断たれる。

今度は大きかった円が段々と縮まり、動ける範囲が狭まっていく。

「銀髪、人間って感電死するとどんな姿になるか知ってる?」

「?」

「ただ死ぬだけじゃないの。耳や目、体の隙間から血が流れ場合によっては眼球が取れたり他にもね」

感電死。

フィリアとて知らない言葉ではない。

だが、彼女は如何にしてそれを実行するつもりなのか想像ができない。

「空気は電気を通さない。でもね、雷は天から地へと落ちる。なぜか知ってる?」

「……………」

「それが強力だからよ! Eからの回線を最大に繋いだ私なら魔力を変換して別のネームの様に扱うことだって——」

言葉はそこで途切れた。

次に聞こえた音は何が液体が口から流れでて、言葉として聞こえなくなっていた。

赤い、人の体に流れている液体。  
血がナタリーの言葉をふさいだ。

ナタリーはもちろんのこと、他の2人にもその理由なんて分からない。  
というより、それを考える前にリリアが動いていた。

反射ともいえるほどの行動の速さ。

ここしかないというリリアは感じ取っていた。

銃口はすでに頭をとらえていた。

引き金が引かれ、弾がナタリーを襲う。

さつき心臓を狙ったのはもしも避けられた時、無傷で終わらせる確立を下げたため。

だが、今回は命を狙った。

保険なんてかけない。

ナタリーの頭が僅かに後ろにずれる。

彼女が避けるために起こした行動ではない。

弾は、あつたはずの結果を何事もないかのように素通りしナタリーの頭を貫いた。

その威力に頭が僅かにもつていかれたのだ。

フィリアとナタリーを囲んでいた結果が崩れ、ナタリーは落ちていく。

ナタリーには思い返す時間すらなかった。

走馬燈が走ったとしても、あまりに短すぎたように感じる。  
フィリアは目の前の出来事にただ、固まっていることしかできなかった。

「ぐう…!?!」

リプトが突然の頭痛に頭を抱える。

シューレスはその行動に一瞬他意があるのではないかと警戒したがその考えをすぐに捨てる。

視覚を操れば何の問題もない。

一方リプトは何が起きたのかは見当がつかないが、この頭痛による一瞬で隙ができてしまっていたことは理解していた。

顔を上げた目の前に映っていたのはあまりに多すぎる弾幕。



火の玉で構成されたそれらはいくらネーム持ちといえどその分野に特化していなければまず作り出すことはできない。

つまり大半が幻覚。

冷静に判断すればそれなりに絞り込める自身があるが今はそれどころではない。わずかに操作できる死体を火の弾の盾にする。

「(くそっ！この感じ…Eに何かあったか!?接続が悪いな…)」  
死体<sup>たて</sup>を用意するとき、動きが悪かった。

いつもできたはずの、動かさせたはずの体の一部が動かせなくなったようなもどかしい感じと大きな絶望。

目の前で盾にした死体が爆音と同時に燃え上がる。

その勢いに耐えられず、リプトが後ろに下がる。

シューレスは先ほどとは違って明らかに弱体化したリプトに疑問を感じていた。本当に一方的に殺しかねない。

「なんだ、不調か？」

「……………」

「言っておくが加減はするつもりはない。おとなしく縛につくか殺されるか——」

「ああああアあ！」

突然大声を上げるリプト。

奇声を上げただけでは強くなれない。

だからその声に一切動じることがなかったシューレス。

ただ油断をしていたわけでもない。

リプトの咆哮が終わると同時に死体が膨れ上がる。

風船のようにゆっくりではない。

何かが煮だつかのように体がすごい勢いで膨れ上がっていく。

シューレスはそれにいち早く反応する。

形状は違っても自分の信頼している仲間の得意とする攻撃と同じなのが一目瞭然

だったから。

しかし、そこは一本道。

Fの力で通路の破壊ができないとなるとリプトから離れてしまうことになる。

だが、選択の余地はない：はずだった。

ふと目に入った自分が放ったファイヤが作った大きな穴。

すぐに隣の壁に衝撃を与えてみる。

すると案の定、壁にぽっかりとした穴ができた。

「なるほど……」

作りだした穴に入り込み、入り口をふさぐ。

ナタリーのように絶対に壊されないような壁など作ることはいできない。

それでもこれで助かる。

耳に痛みの走るほど大きな爆音と同時に熱を感じる。

その熱が引くのを待つことなく、シューレスは穴から飛び出しリプトの姿を探した。

「…チッ」

シューレスの見た先には自分が作ったのと似たような不格好な穴があった。

一本道で逃げてくれれば追いつけたかもしれないがバカでかい球状の中を動き回っている相手を見つけられるほど、シューレスは探査に優れてはいない。

おとなしく地面に座り込み、服についた埃を払う。

これからどうしたものかと天を仰ぐ。

目的地があればそっちに向かうのだが、生憎そんなものはない。

構造さえわかかってないとなるとむやみに破壊活動を行いなから突き進むこともできない。

一応自分があるのは浮遊物体の中なのだから。

「さて、どうした——」

独り言をつぶやいたその時、壁が揺れているのに気づく。

ただ揺れているだけなら、戦闘がおこっているのだとそれしか考えないが……」

近づいてきている。

それも結構な速さで。

それにこの違和感。

壁を破壊しているというより壁が減って隣の音が聞こえやすくなっているような感じがする。

嫌な予感がした。

とりあえず壁を離れよう。

そう思ってから行動しようとした時、シューレスの視界が揺れた。

後ろに倒れたのだ。

背中を壁に預けていたはずなのに。

そしてシューレスの視界には大きな、大きな何かか逆さまに映っていた。